現代日本文學全集
XXXVIII

杉浦非水装幀

現代短歌集
現代俳句集

改造社版

明治天皇御製

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのが治むる
國はいかにと

櫻田のほりちかければ水鳥のさわぐ羽おとも
きかぬ夜ぞなき

たらちねのみおやの御代に仕へにし人もおほかた
なくなりにけり

思ふ事つらぬかむ世を待つほどの月日は長き
ものにぞありける

はからずも夜をふかしけり國のため命をすてし
いさをかぞへて

家富みてあかぬことなき身なりとも人のつとめに
おこたるなゆめ

いそのかみふるきためしを尋ねつゝあたらしき世の
事もさだめむ

ともしびをさしかふるまでいくさ人おこせしふみを
読み見つるかな

いくさびとみなひきあけて人こゝろのどかなる世の
またちりけり

みしかしとおもふこゝろに冬の日はなかしものゝ
はかどりにけり

朝ゆふにむつびなれたる久方のそらはなるけき
ものごしもなし

國のためいのちをすてしますらをのたまゝつるへき
ときしちかつきぬ

かちときをあけてかへれるいくさ人まちつくるか
うれしかりけるも

つかさ人まうてし後のゆふまくれこゝろもとなに
ふみを見るかな

山ふかくかくるゝひとをし遁れても世をし治むへき
みちをしらばや

いさをある人のわさをも尋ねけりあつたの里乃
たひにいてつゝ

さまさまの事にあひはしおい人のむかしかたりそ
身にはしみける

ひとりしてしづかにきけば聞くまにしげくなりゆく
蟲のこゑかな

もゝとせをへだたる人歌も見つるかなくるまごゝろ
ごころしり

國をおもふおほみのまことは言の葉の上にあふれて
きこえけるかな

子爵入江為守謹書

昭憲皇太后御歌

はつ國をしらしゝ御代のあらたまもたちかへりゆく
ことしのゆたけさ

みかゝすは玉のひかりはいてさらむひとのこゝろも
かくこそあるらし

ひさゝゑからましうは白玉のまたまは火にも
やうれさつもけり
鳥羽のうみのなみ風いつてさわくらむなきしならぬ
みゆきしておもふに
かちひさの道のねこうりさふむみれをいつ心なき
今日のあ発うな

まつり事いとまある日こみそなはす梅にをあめも
こゝろしてふれ
埋火のあたりのどけきまどゐにはちたしからざろ
ひさしなこのみけり
菊てのきにさく朝このほの花をこみてのこくさうけつる
時のおくれぬ

思ふ人のおもかけうつす油絵にむかへはわれも
うちゑまれつゝ
春山のひる醒せはしきつるものゝならふむ今や
みそなはすらむ
あまの川ほしのあふせをそらにこゝろもいふまて
世はひらけゝり

あたらしくみやつくりせし九重の御かきの松り
つもるゆきこの郷
月に日にひらけゆく世の人こゝろあむこのはむこのたち
まつさたえてよ
にひ歳そてせは有れたる書梅の実乃ひさつたま
つゝみこのねつゝ

むらきものこゝろにかゝる雲もなきこよひぞ月は
みるべかりける
たうげまでかすかにきこえし水の音はこの谷川の
ながれなりけり
みいくさのたよりゆかしさにまたれしもやいつこせの
むゝのちなりけり

見るごとになみだぐまれぬ海くがにいのちをすてゝ
得たるくさ〴〵

ともし火に近くよりつゝ見るふみも目かねぞたのむ
身となりにけり

大君のおものゝ為のほり井には清き水のみ
わきあがらなむ

子爵入江為守謹書

現代短歌集
現代俳句集

「現代短歌・俳句集」目次

明治天皇御製

昭憲皇太后御歌

入江爲守謹書

現代短歌集

序……三

井上文雄……一三

八田知紀……一四

福田行誡……一六

三條西季知……一七

三條實美……一八

佐佐木弘綱……一九

與謝野尚絅……二〇

鈴木重嶺……二一

税所敦子……二二

池袋清風……二三

天田愚庵……二四

大和田建樹……二五

小出粲……二六

中村秋香……三八

小杉榲邨……三九

高崎正風……四〇

本居豐穎……四二

海上胤平……四三

黒田清綱……四四

大口鯛二……四六

山縣有朋……四八

森鷗外……四九

入江爲守……五〇

井上通泰……五三

阪正臣……五四

武島羽衣……五六

落合直文……五八

與謝野寛……六一

與謝野晶子……六四

平野萬里……六七

高村光太郎……六九

茅野蕭々……七一

茅野雅子……七三

山川登美子……七四

吉川不抱……七五

北原白秋……七六

河野愼吾……七九

村野次郎……八〇

酒井廣治……八一

穗積忠……八二

吉井勇……八三

石川啄木……八六

生田蝶介……八九

富田碎花……九〇

相馬御風……九一

金子薫園……九二

吉植庄亮……九五

田波御白……九七

岡稻里……九八

武山英子……九九

佐瀬蘭[illegible]……一〇〇

山田[illegible]夕……一〇一

早川幾忠……一〇二

土岐哀果……一〇三

大熊信行……一〇六

久保猪之吉……一〇七

服部躬治……一〇八

尾上柴舟……一〇九

岩谷莫哀……一一二

石井直三郎……一一三

岡野直七郎……一一四

上田英夫……一一五

岡本かの子……一一六

水町京子……一一七

若山牧水……一一八

若山喜志子……一二一

高鹽背山……一二二

和田山蘭……一二三

加藤東籬……一二四

菊池知勇……一二五

中村柊花……一二六

大悟法利雄……一二七

内藤鋠策……一二八

前田夕暮……一二九

矢代東村……一三一

中島哀浪……一三三

熊谷武雄……一三四

楠田敏郎……一三五

米田雄郎……一三六

廣田楽……一三七

川端千枝……一三八

窪田空穗……一三九

松村英一……一四二

半田良平……一四四

宇都野研……一四六

對馬完治……一四七

川崎杜外……一四八

氏家信……一四九

太田水穗……一五〇

四賀光子……一五三

小田觀螢……一五四

峰村國一……一五五

野澤柿茸……一五六

大井廣……一五七

尾山篤二郎……一五八

岡山巖……一六〇

橋田東聲……一六一

臼井大翼……一六二

今中楓溪……一六三

四海多實三……一六四

森園天涙……一六五

西村陽吉……一六六
西出朝風……一六八
青山霞村……一六九
正岡子規……一七〇
伊藤左千夫……一七三
長塚節……一七六
岡麓……一七九
香取秀眞……一八二
蕨眞……一八四
島木赤彦……一八六
齋藤茂吉……一八九
中村憲吉……一九二
土屋文明……一九五
平福百穗……一九七
土田耕平……一九九
藤澤古實……二〇〇
結城哀草果……二〇一
竹尾忠吉……二〇二
高田浪吉……二〇三
今井邦子……二〇四
久保田不二子……二〇五
釋迢空……二〇六
横山重……二〇九
由利貞三……二一〇
杉浦翠子……二一一
古泉千樫……二一三
並木秋人……二一五
大熊長次郎……二一六
三ヶ島葭子……二一七
石原純……二一八
原阿佐緒……二二〇
三井甲之……二二一
花田比露思……二二三
安江不空……二二五
依田秋圃……二二六
宗不旱……二二七
佐佐木信綱……二二八
石榑千亦……二三一
川田順……二三三
木下利玄……二三五
印東昌綱……二三七
三浦守治……二三八
新井洸……二三九
齋藤瀏……二四〇
下村海南……二四一
大塚楠緒子……二四二
橘糸重子……二四三
九條武子……二四四
片山廣子……二四五
柳原燁子……二四六
松本初子……二四七
歌壇諸家略年譜……二四八

現代俳句集

序……二六二
月の本爲山……二六三
佳峰園等栽……二六四
小築庵春湖……二六五
老鼠堂永機……二六六
老鼠堂機一……二六七
其角堂永湖……二六八
不白軒梅年……二六九
雪中庵雀志……二七〇
雪中庵宇貫……二七一
雪中庵東枝……二七二
春秋庵幹雄……二七三
春秋庵準一……二七四
花の本芹舍……二七五
花の本聽秋……二七六
夜雪庵金羅（世四）……二七七
東杵庵萬[illegible]……二七八
阿心庵雪人……二七九
正岡子規……二八〇
內藤鳴雪……二八三
松浦爲王……二八六
峯青嵐……二八七
渡邊水巴……二八八
庄司瓦全……二八九
高濱虚子……二九〇
西山泊雲……二九三
野村泊月……二九四
岩木躑躅……二九五
杉山一轉……二九六
田中王城……二九七
奈倉梧月……二九八
石島雉子郎……二九九
久保田九品太……三〇〇
前田普羅……三〇一
原石鼎……三〇二
淸原枴童……三〇三
吉岡禪寺洞……三〇四
楠目橙黄子……三〇五
鈴木花蓑……三〇六
池內たけし……三〇七
田村木國……三〇八
宮部寸七翁……三〇九
山本梅史……三一〇
原月舟……三一一
島村元……三一二
本田あふひ……三一三
久保より江……三一四
杉田久女……三一五
藤田耕雪……三一六
中田みづほ……三一七
酒井默禪……三一八
鈴鹿野風呂……三一九
日野草城……三二〇
富安風生……三二一
水原秋櫻子……三二二
阿波野青畝……三二三
山口誓子……三二四
相島虚吼……三二五
永田青嵐……三二六
篠原溫亭……三二七
村上鬼城……三二八
飯田蛇笏……三三〇
籾山梓月……三三一
高田蝶衣……三三二

岡本松濱……三三三
島田青峰……三三四
小野蕪子……三三五
長谷川零餘子……三三六
長谷川かな女……三三七
原田濱人……三三八
松瀬青々……三三九
武定巨口……三四一
横山蜃樓……三四二
西村白雲郷……三四三
松尾竹後……三四四
石井露月……三四五
島田五空……三四七
青木月斗……三四八
湯室月村……三五〇
岡本圭岳……三五一
花木伏兎……三五二
阪本四方太……三五三
萩原羅月……三五四
新海非風……三五五
五百木飄亭……三五六
藤野古白……三五七
佐藤肋骨……三五八
柳原極堂……三五九
村上霽月……三六〇
寒川鼠骨……三六一
大谷繞石……三六二
吉野左衛門……三六三
中村樂天……三六四
水落露石……三六五
數藤五城……三六六

柴田淺茅……三六七
野田別天樓……三六八
中野三允……三六九
矢田挿雲……三七〇
室積徂春……三七二
夏目漱石……三七三
寺田寅日子……三七五
松根東洋城……三七六
中川四明……三七八
大谷句佛……三七九
大須賀乙字……三八一
名和三幹竹……三八三
吉田冬葉……三八四
臼田亞浪……三八五
井上日石……三八七
福島小蕾……三八八
飛鳥田孋無公……三八九
安藤甦浪……三九〇
河東碧梧桐……三九一
井出台水……三九四
中村烏堂……三九五
梅野米城……三九六
松宮寒骨……三九七
染川藍泉……三九八
木下笑風……三九九
國又蓑鐘……四〇〇
關口比呂志……四〇一
須藤水心樓……四〇二
吉永壺音……四〇三
風間直得……四〇四
泉天郎……四〇五

荻原井泉水……四〇六
尾崎放哉……四〇八
芹田鳳車……四〇九
秋山秋紅蓼……四一〇
青木此君樓……四一一
大橋裸木……四一二
野村朱鱗洞……四一三
栗林一石路……四一四
小澤武二……四一五
鹽谷鵜平……四一六
喜谷六花……四一七
小澤碧童……四一八
山口花笠……四一九
筏井竹の門……四二〇
菅原師竹……四二一
川西和露……四二二
贄江八重櫻……四二三
中塚一碧樓……四二四
安齋櫻磈子……四二五
瀧井孝作……四二六
角田竹冷……四二七
巖谷小波……四二八
川村黄雨……四二九
森無黄……四三〇
岡野知十……四三一
伊藤松宇……四三二
鵜澤四丁……四三三
武田鶯塘……四三四
服部畊石……四三五
星野麥人……四三六
大野洒竹……四三七

笹川臨風……四三八
佐々醒雪……四三九
沼波瓊音……四四〇
宮島五丈原……四四一
安藤和風……四四二
坪谷水哉……四四三
藤井紫影……四四四
志田素琴……四四五
勝峰晋風……四四六
小泉迂外……四四七
久保田万太郎……四四八
芥川龍之介……四四九
久米三汀……四五〇
室生犀星……四五一

俳壇諸家略年譜……四五二

明治大正短歌史概観　齋藤　茂吉……四六八

明治大正俳諧史概観　高濱　虚子……五三六

現代短歌集

序

短歌の淵源は遠い。その發生について紀貫之は「古今集」に、「あらかねの地にしては須佐之男のみことよりぞ起りける。」と序し、かの

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣つくるその八重垣を

の三十一文字をそれと指摘してゐるが、まことに、神代の古に於いてすら、我が民族間の言語表現の一形式として短歌が、如何に高き存在であつたかは、神ながらわが日本を言靈の幸ふ國と尊くも意思せられてこのかた、言靈の道即短歌道と見なさるゝに至つたのに徴しても明らかである。

されば、短歌は歌謠の諸形式のうち最も早く第一義の獨立をなすと共に、その鍛錬彌々著しきものがあつたため、既に王朝時代に於いてその輝かしき華を開き、類稀なる美き果を結んだ。「萬葉集」がそれである。

爾來、短歌は「古今集」以下八代の敕撰集に繚亂の美を示すところがあつたが、武辨一たび崛起して擧世兵亂の巷となるに及び漸く衰微を來し、時に燦然たる光芒を放ちつゝも、遂に武人のよきたしなみの範圍を出でることなく、八百年の星霜を經て、徳川の中葉を過ぎ、偶々國學復興の烽火あがるに際會してその再興の近きを思はしめるに至つた。宣長・眞淵・春海・千蔭らの盛なる萬葉研究は即ちそれで、景樹に至らんとするに先立ち、幾久しき荒蕪の野に草を焼き地を耕したものであり、次いで來つた元義・良寛らは、深山の奥に人知れず咲き人知れず散つた野の珍花の名殘とも見られよう。

かくして、維新の大業成り、明治に入つた。爾來僅かに六十餘年、國運に文運に、伸長の急速なること東西古今その比を見ぬものがあると共に、短歌また沃野に培はれた八千草のごとく濃艶稍淡とりどりの姿態を恣にするの盛觀を呈した。即ち、直文出でて新派興るや、鐵幹・晶子・白秋・勇・啄木等の浪漫派、柴舟・薫園・牧水・夕暮・哀果等の自然派、子規・左千夫・節・赤彦・茂吉・憲吉・千樫。迢空等の寫實派相次いでその主流をなしたほか、信綱・空穗・水穗等は何れも一派を樹てて傍流に居り、剩へ所謂舊派未だ衰へざるに、早くも口語短歌、新興短歌また勃興の勢を示し來るに至つた。

「現代短歌集」は實に、この古來稀なる盛觀をさながらに活寫すべき意圖の下に編まれたものである。この意味に於て、夙に和歌を好ませ給ひて宮中に御歌所を置かせられ斯道を御奬勵あそばされた明治天皇並びに和歌をよくし給うた昭憲皇太后兩陛下の御製御歌を恭しく卷頭に掲げ奉り、次ぐに、井上文雄以下明治大正昭和三代六十餘年の間に於いて最も輝かしい業蹟をあげた歌人百五十二家の名作を以てした。收容歌數は正に四千七百六十七首、かの「萬葉集」の、長歌・旋頭歌を合するも尚ほ、四千四百九十六首なるに比して、更に歌數の盛觀を偉ふべく、敢て少しとせぬであらう。しかもその内容の複雜なること彼に勝る幾倍である。

本集の編纂に當つて、人選及び配列等は諸大家の示教を仰ぎ我社これを定め、選歌は自選を主義とし、故人のそれは最も適當なりと信ずる諸家を煩はした。又年譜は故人以外自記を請うたが、編輯の都合上止むを得ず添削案配するところがあつた。記して諸家の寛恕を乞ふ次第である。

なほ、卷末載するところの「明治大正短歌史概觀」は、齋藤茂吉氏特に本集のために執筆せられたもの。茲に氏の多大の勞苦を感謝し、併せて考證の正確にして學的價値の甚大なるこの長論文を得たことを讀者と共に喜びたい。

井上文雄

（肖影無し）

松上霞

夕霞たなびきくれし山松はすみ繪のよりもおぼろなりけり

夜ふけてかへる道に神樂坂にてみぞれのいみじく降りかゝりければ

神樂坂谷の夜嵐さえかへりかたおろしにもふるみぞれかな

河邊雨

隅田川なか洲をこゆる汐先にかすみ流れてはるさめの降る

海上春望

うち霞む汐瀬の舟は動くとも行くともなしに遠ざかりぬる

故鄉桜

ふるさとはもゝの林に牛の子の遊ぶほかにはあふ人もなし

岡邊寺

片をかの道の小寺のつゝじ垣ほろ／＼ちりて人かげもなし

首夏田家

佛に水そゝぐ日と里の子が寺田のあぜにうつぎをるなり

岡卯花

岡越の切通したるつくり道うのはなさけりみぎにひだりに

暮天杜鵑

梅雨ははれなむとする夕虹のひむがし山になくほとゝぎす

稲花

こゝちよく秋雨はるゝ川ぞひの水田のおもに早稲が花ちる

阿波の國の鳴戸に月前旅泊

うづしほの鳴戸の沖めかり鳴きて淡路ねとほく月ふけにけり

秋雨

ほろ／＼と胡桃こぼるゝ秋雨のふるき垣ねに山がらのなく

月前遠島

播磨がた瀬戸のしほ瀬の霧はれて月にちひさしあはぢ島山

遠鹿

鹿のねは小雨そぼふる夕暮に遠くきくこそあはれなりけれ

遠紅葉

朝霧のたえ間に見れば遠山はおもひしよりも色づきにけり

行路氷

玉ぼこのよるゆく道のにはたづみふむに音あるうす氷かな

遠山初雪

遠山は初雪ふれりはやまなるこずゑの紅葉色もあせなくに

戀

これぞこの神の始めし世の中の物のあはれを知るといふ道

祈神戀

佛こそよろづ崇しと敎へけれ神さへわれにつれなかるらむ

鬼

おのづから心の鬼にかちてこそよに恐るべき事なかりけり

八田知紀

ものゝふゆきにかへりける道

大比叡の峰にゆふゐるしら雲の淋しき秋になりにけるかな

師走ばかり龍安寺の水鳥見に行きて（二首）

池水の廣きこゝろやたのむらむむれくる鳥の限りなきかな

しづかにもくれ渡るかな水鳥のをり〳〵はぶく音ばかりして

月のいたうかすめる夜大路をゆく〳〵

朧夜（イ月）はこひしき人に似たるかな心をそらにうかれしむれば

梅のさかりに伏見にありて

いめ人の伏見のさとを朝ゆけば梅が香ならぬ風なかりけり

八月十五夜かぐら岡にて

いつしかとまたれし月は山松のあらしの上になりにけるかな

一とせ大和國にゆきける時所々にてものしつる中（二首）

ものよりも床しきものはふるの山おいたる杉の心なりけり

あなし山あさゐるくもに遠近の谷間さやかに見え渡るかな

一とせ花見にものしける時

よしの山霞のおくは知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

日向大隅の旅にありけるほど折にふれてものしつるが中

なつかしき野邊のみどりを朝な〳〵ねたくもかくす春霞かな

霧野（高千穂の）たわけに歸りくるほど

高千穂のすゞのしの原うちさやぎなびくと見れば霙降るなり

鵜戸のいはやにまうでし時

白妙のはまの眞砂にあとつけてわれより先にゆく千鳥かな

かさゝのみさきの北にありて吹上の高いさご限りはて[illegible]なり

和田ノ海のいさごを浪に運ばせて風のなしたる山のあやしさ

はじめて都にのぼりける時の紀行の中

幾そたびあゆひぬらして薩摩山谷のいは川うちわたるらむ

野坂のうらすぐるころ（首二）

天草のうへにかゞやく夕づつのかくれぬほどに舟は漕ぎてよ

茜さす夕日のなごりさりがたみこがれてみゆる浪のうへかな

乾珠満珠の島

ながとの海潮ひ汐みつ玉の名の小島にてれる朝づくひかな

室のとまり

月きよみねざめてみれば播摩潟室のとまりに舟ははてにき

田家興

足引の山田のたり穂こく時になりにけらしもうたふ聲する

寄鶯花

別れかねやすらふ程に咲きにけり妹がまがきの朝がほの花

山家橋

倒れ木を橋とわたして踏みなれし我山住
も久しかりけり

雪中眺望

白雪の中にながるゝみ越路のにひがた川
はみるにさやけし

夏

まゆのごと雲ゐにみゆる山のはのみどり
につゞく草の原かな

雜

ひとり行く夕の道の悲しきは遠山の端の
見ゆるなりけり

曉落葉

鳥がねにおき出でてゆけば山科の岩田の
をのにはゝそちるなり

日

ひむがしの大海原にうかび出でてかゞや
く玉は天つ日の影

星

大空のきたの極みに位してうごかぬ星の
かげのさやけさ

春

たちかへる春の潮さきうちけぶり音せぬ
波のよせかへる見ゆ

夏

五月山ゆふ越え來ればともしさすさつを
がともに逢ひにけるかな

冬

あけぬとて雀さへづるむら竹の末葉さや
かに霜見えにけり

花下言志

空蟬の我世のかぎりみるべきはあらしの
山のさくらなりけり

夕雁

秋萩のした葉そめむとふる雨の寒きゆふ
べに雁なきわたる

岡紅葉

もずの聲寒き岡べのはじもみぢ時雨もま
たずいろづきにけり

島千鳥

わたつみのはなれ小島に聲するはたゞ一
むらの千鳥なりけり

鴨河雪

西やまもひむがし山も加茂川のつゝみと
なりて積る雪かな

浦鶴

すみ吉のあらゝ松原よろづ代のたづさへ
たてりあらゝ松原

黄

山城のこまの渡りにきてみれば瓜といふ
うりの花咲きにけり

首夏風

にほひなき青葉がうへを吹く風の身にし
む夏になりにけるかな

苔映水

萩の花うつろふみればやり水のほそき流
れの惜くもあるかな

月前薄

我門の一むらすゝきほにいでて月すむ秋
をたれとかたらむ

海邊蟲

蘆ぶきのこやの渡りの蟲の音は世に似ぬ
ふしも聞えけるかな

十五夜月

あたら世の光とともに照る月のみちたる
今宵うたはざらめや

秋のうた

名もしらぬ草木いろづく山里の秋こそ物
はかなしかりけれ

神武祭に行幸ありけるかしこみ奉りて

大御威よもにかゞやく時はきぬ身を盡し
ても仕へざらめや

福田行誠

[illegible]

法のため身を捨て小舟おなじくはこの荒磯にくちねとぞ思ふ

[illegible]定[illegible]密

高野山こけのとぼそは靜かにて音もきこえず春雨のふる

[illegible]上

ふる雪と及ばぬまでに花ぞ散るあなおもしろの春の山風

舟

のりの舟さすとはすれど角田川わたし守には及ばざりけり

野遊

鳩の杖つくづく見れば昔わが土筆つみつる野邊にぞありける

花

櫻花にほふ吉野の山ながら我みほとけにたてまつらばや

花のちるを見て

思ふにはまかせぬ春の山風に今年もはやくちる櫻かな

佛名

み佛のみ名となへつゝ思ふかな我身もいつの世にかよばれむ

冬の夜に

埋火のたえたるをつぐ炭はあれど起しがたしや廢れたる道

高野山に詣でむとしける日に

たび衣たつ日となれば人なみに杖よ笠よといひさわぎつゝ

蝸牛角上爭何事

何かせむかちえたりとて蝸牛角ふりたつる程もなき世に

常不輕品のこゝろを

我そでの玉とひろひてつゝまばやうちつけられし石も瓦も

法門無量誓願知の心を

法の海よしいかばかり深くとも汲みほすまでは汲まむとぞ思ふ

[illegible]といへる[illegible]を

音もなくすがたも見えず我が法はむなしき空に風わたるなり

[illegible]

朝風に峯の木葉の散るを見れば一葉々々に悟なりけり

無量光佛

迷ひゆく闇路のすゑのはてをなみはてなく照す光なるらむ

龍女成佛

立さわぐ波の底よりさし出でて靜かにてらす秋の夜の月

折にふれたる(二首)

いたづらに枕をてらす燈火も思へばひとのあぶらなりけり

ひれふるもいそがしげなりいろくづの浮藻の下も浮世なるらむ

人のみまかりけるに

おしなべてとまりはてざる世なれどもあまりに早くちる木の葉かな

三條西季知

新年望山

大御代の年のはじめの樂しきにうごかぬ富士の山を見るかな

孤島霞

浦とほきはなれ小島もかすむなり春のいたらぬかたやなからむ

霞中鶯

そことなく梅もかをりて春の野の霞がくれに鶯のなく

歸雁

いかに見ていかにわかるゝ雁ならむこのおぼろよの月と花とを

山家花

さけばこそ人もとひ來れ山里の春のあるじはさくらなりけり

雁行寫水

水の面にうつるを見れば雁がねは雲居をのみも渡らざりけり

山家月(二首)

花にだに人やはとひしおく山のしばのいほりの秋の夜の月

たち出でて誰にかたらむ秋の夜の月すむ山のこゝろづくしを

秋野

蟲の音も露もさかりの秋の野をはな野とばかり思ひけるかな

閑庭落葉

風にのみ今日もとはれてもみぢ葉のちるをあはれと獨り見るかな

石間氷

落葉にもせかれ〳〵し谷がはのいは間の水ぞこほりはてたる

雪の降りけるあした内に參るとて

ふる雪のしら髮おふろわれなれどつかふる道はたどらざりけり

閑中燈

まなぶらむ心の奧もゆかしきは林がくれのともし火のかげ

山家

うきをこそのがれもしつれ山里に世をそむく身と人なおもひそ

淵龜

萬代をおもへばふちの水よりもさわがぬかめの心なりけり

後醍院眞柱が吉備の國へ赴くを餞して

君行きてすまむ國なり今よりは大島おろしこゝろしてふけ

寄鶴祝

あら玉のとしの八十ぢの今年よりかぞへはじめよ鶴の千とせを

藤原鎌足

たむの山木の下つゆの落ち積りながれてふかき淵となりぬる

菅原道眞

むらぎもの心づくしのうき雲もよゝかけてこそはれわたりけれ

德川光圀

このふみの林を見ても知られけり筑波の山のしげきいさをは

三條實美

梨のかた枝より

上野の花見にまかりて

人みなの歸る頃よりゆくわれは靜けき花を見むとなりけり

みちのくへ行幸ありける年の夏

いでましの道のあつさを思ひやれば涼む心もやすからぬかな

山莊にて

たまくしげ二荒の山に旅ねして秋來にけりとけさぞ覺ゆる

聯隊旗をさづけ給ふ式に侍りて

御手づから賜ふみ旗をもののふは命と共にさゝぐべらなり

憲法發布式に侍りて

千代かけて今日の惠をあふぎつゝ御のりを守れ四方の國たみ

帝國議會の開院式に侍りて

つゝしみてつとめざらめや國たみの心を君にまをす人たち

折にふれて(四首)

身をつくし心を盡すかひのある御代にあへるは嬉しからずや

たふれにし人こそあはれかくばかりなれる功は誰が功ぞも

身にあまる國の重荷をかづきては氷をわたる心地こそすれ

ひなにさすらへしほどの歌の中に五月九日山口にて

いましめて忘るまじきはつくし潟しづみし時の心なりけり

大君はいかにいますとあふぎみれば高天の原ぞ霞こめたる

述懷のうたども(六首)

梓弓もと末たがふよの中を神代のみちにひきかへしてむ

片絲のみだれしすぢをときわけて一つ心により合せてむ

いづる日の方を仰ぎて打むせびなみだながらに世を祈るかな

うき雲のかゝらばかゝれ天つ風ふき起るべき時なからめや

かくばかり君が惠を受けながらつくさぬ臣の身をはづるかな

萬代の名こそをしけれうつ蟬の世の人言はさもあらばあれ

折にふれて

わがいさを國のみ柱わが命世のなが人とまもれこの神

かしこくも復位の勅命をかうぶりて都へのぼるとて

身にあまる惠にあひて思河うれしきせにもたちかへるかな

箱崎の浦を船出すとて

いまだ世に我を捨てずば海つ路もまさきくわたせしかの皇神

佐佐木弘綱

『竹柏園歌集』より

百鳥のさへづる春もうぐひすの聲に似たるはきこえざりけり

はかなくも風に心のさわぐかな散らぬ櫻のあらばこそあらめ

獨ゐてひとり見るこそたのしけれわが隱れがの山ざくら花

春風に花ちり亂るみよしのは山もくづる心地こそすれ

あらを田の大樋のもとに咲きにけり菫の花のさゝやかにして

すみすてしたが故郷ぞ碎けたる瓦のひまにすみれ匂へり

うたふ雲雀さをどるきぎす天地に春をたのしむ聲きこゆなり

心から籬に荻をうゑおきて風ふくごとにものをこそ思へ

うつりゆく外山のくもに風あれて日かげしぐるゝ信樂の里

川をちのふせ屋の烟すゑをれて夕日になびく岸のたかむら

あはれにも囀る鳥か籠の中を馴れてせばしと思はざるらむ

言の葉をかへす鳥こそあはれなれわがうたふ歌きゝ知らぬ世に（鸚鵡）

みたらしの岩間をめぐるま清水に神の心の見えもするかな

箱根山のぼるみ坂の石かどの一つ一つにくるしかりけり

濁れどもやがてすみゆく大川の流を人のこゝろともがな

わかの浦に老をやしなふ蘆たづは雲の上をもよそにみるかな

わかのうらに我だに一人のこらずば朽ちはてなまし玉拾ふ船

身こそあれ心は世にぞとゞまらむ詠みつる歌を魂にして（病篤しかりける時）

われのみか人の心もくるしむるこれ一つこそ悲しかりけれ

命あらば嬉しからましもしなくばそれもすべなし神にまかせむ

與謝野尚綱

『禮嚴法師集』抄

家ざくら散り過ぎぬればうぐひすも臥所荒れぬと思ふらんかも

子をもてば子のためにさへ後かけて我れ惡しき名は立てじとぞ思ふ

引く袖ににほふあやめの露のかぜ澤の入日に乾かずもがな

夢さめて清き深山の蟬きけばかはりたる世のここちこそすれ

戀せぬはすべなきものかあたら夜の月を[illegible]子にささせつるはや

うつばりに黄なる嘴五つ鳴く巢に瘦せて出で入る親燕あはれ

さ夜千鳥なくこゑ冴ゆる加茂川の白洲の霜は月にぞありける

冬ふけし稻城の竹も笛ふきて鳴るおと寒し夜あらしの風

聞き置きし親の諫めと花の香は老いて身にこそ沁みわたりけれ

世にからく汐路ただよふ海月にもわれよく似たり住家なければ

世のなかのかずには入らぬ言の葉も獨ごつこそ樂しかりけれ

草の露ひろま涼しくきこゆなり風ふく窓のしづ機のおと

夏草にかくれて住めばいにしへの木の丸殿も思ひこそやれ

わが庵は竹の柱もかぼそきに屋根もたわわにつもる白雪

牧の馬蹴上げ荒るれどますらをは手綱たぎつつ鞍無しに乘る

ほととぎす啼くとも知らで入りし山こゑぞ落ちくる樅櫃がうへに

桑やなぎ風に黄ばみて散るころは日かげも悲し野べの夕暮

たらちねの少女子するて守るばかり我が守る花を折り行くや誰

秋すずし天の香具山夜あくれば耳無かけてしろき霧立つ

ひとりゐて物をおもへば隙間洩るこゑなき風も泣くかとぞ思ふ

鈴木重嶺

禁苑春來早

まだき立つ大内山の春風に四方の民草なびきそむらむ

夜春雨

梅が香もをり〳〵ねやに薫りきてさも靜かなるよはの雨かな

岸春草

くまもおちず春の光や到りけむ岸のかげ草萌出でにけり

橋上花

たどり行くかけ橋よりも風わたる花の上こそ危ぶまれけれ

庭新樹

水枝さす葉廣くまがしほゝ柏せばき垣つも夏めきにけり

郭公數聲

さみだれのをやまぬ頃は子規聲の絶間もあらぬなりけり

水上夏月

かげもよし光も涼し飛鳥井のみもひに宿る夏の夜の月

蓮花

根を絶えし浮藻も花はさく物を世にたゞよへる我や何なり

蟲聲先秋

年月のひまゆく駒のくつわ蟲秋まちかねて聲たてつなり

初秋風

山の井の秋まだ淺き夕ぐれに水音すみて風渡るなり

露

さもこそは秋にしたしき袖ならめ露の結ばぬひまもなきかな

聞蟲

小松ひき鈴菜摘みにし野べに來て同じ名におふ蟲をきくかな

行路月

分けゆかば宿れる月や亂れなむふままくをしき野路の露原

紅葉淺

もみぢ葉はいづこも色の淺かるを秋は深くもなりにけるかな

山家初冬

昨日だに木の葉しぐれししがらきの外山の庵に冬はきにけり

冬紅葉

下染は露にまかせてもみぢ葉を濃染になすは時雨なりけり

山寒月

谷水の岩きりとほす音はして高根にこほる月の寒けさ

蟹

正しかる道をば行かで蘆間はふ蟹の跡ふむ人もありけり

絲

思ひよる我言の葉はふしもなしうらやましきは賤がくづ絲

君恩如雨露

雨露は草木ばかりを物みなにかゝるは君が恵なりけり

税所敦子

『み垣の下草』抄

晴天待雁
朝日かげのどかに霞む空を見て今日はと
雁も思ひたつらむ

水邊夏月
音ばかり聞くも涼しきやり水に影こそみ
ゆれ夏の夜の月

初秋風
富士のねにけさ初雪も見えそめて秋風た
ちぬみほの松原

月の歌とて
世の中を思ひはなれてながむれば更にく
まなき秋の夜の月

雪中燈
くれ竹は雪に靡きてともし火の影さやか
にも見ゆる窓かな

彫刻書
ひらけゆく御代の春べの櫻木にほりする
まゝの書を見るかな

國旗
天つ日の曇らぬ御代の旗風はよろづの國
のうへにたつらむ

硯
打むかふ硯の海のなかりせばわがおもひ
川いづちやらまし

衣
たらちねの母のいまさばたまものの綾の
みけしも着せましものを

時計
時はかるうつはの針も折々はおくれさき
だつ世にこそありけれ

寫眞
子を思ふこゝろもそへて殘さばや　わが
俤のわすれがたみに

オルゴール
松風も波のひゞきも玉くしげこの箱崎に
こめてけるかな

述懐
たゞにやは明しくらさむ玉くしげ再び來
べき月日ならぬを

仁政如水
なれて汲む筒井の清水深しとも知らぬや
御世の恵なるらむ

光武帝
打かくる波まのあしもはらはぬや大うな
ばらの心なるらむ

居易初到香山
しら雲のふかき山べにきて見れば都の秋
はいろなかりけり

徐世賓
雲の上にすまずなりても世を照す影はか
はらぬ片われの月

如安
神さへに宿るとみえし姫松の煙をいかで
のがれざりけむ

行誡上人らせ給へりときゝて
蓮葉にむすびかへたる白露をきえしも
のとも思ひけるかな

勞苦勝百事
霜を經て匂はざりせばもゝ草の上にはた
たじ白菊の花

池袋清風

(照影無し)

子日

春毎にひけどもつきぬ小松原千とせの種は神ぞまくらむ

旅宿梅

ふるさとのいもが垣ねはいかならむ旅寝の床に梅が香ぞする

野春駒

若草のもゆる春野のあら駒はかすみのほかにひく人もなし

夕落花

大井川千鳥が淵の夕ぐれに松風さむくちるさくらかな

野径雲雀

春の野の道のゆくての壺すみれつまむとすればたつ雲雀かな

海上子規

箱崎の松原ごしに月落ちて博多の海になくほとゝぎす

月前水鶏

夕月のかげも流るゝわが門のいさゝ小川にくひな鳴くなり

水邊晩涼

水底の月かげふみて打渡る野川の暮ぞすずしかりける

杜晩涼

夕づく日あたごの峰にかたぶきて蟬のねすゞしみたらしの杜

月

さま〴〵の雲のすがたをまづ見せていでくる月のおもしろきかな

月夜

すみわたるこよひの月に大空のつねより廣きこゝちこそすれ

秋山家

賤が家の園の山　色づきてところどころに見ゆる秋かな

山家落葉

もず鳴きて夕日きえゆく山里の垣ねさびしくちる紅葉かな

連山雪

愛宕より比叡につらなる北山の高嶺おしなみふれる白雪

離別

わかれ路を惜むこゝろのさみだれにぬれし袂はいつか乾かむ

旅情

ふるさとの親のよはひを思ふこそながき旅路の重荷なりけれ

夢

かぎりなくうきめを見するうつゝかな夢はなぐさむ方もある世に

海邊眺望

山松の暗き木の間にわだつみの沖の白くも見えわたるかな

天草灘にて

西の海の浪路はる〴〵くれそめて夕づつたかし天草の島

鶏聲茅店霜

庭鳥のこゑにあけゆく賤が家の軒端ましろにおける霜かな

高野山にて

大空は明け初めぬらし百鳥の囀をいづる聲のさやけさ

石山寺にて

ま幸くて在せ父母み佛の惠の末に會はざらめやも

陸實へ

見まくほり我がする君は鳥が鳴く東を立ちて明日か來まさむ

歸雲巖

白雲の夕居る山のその巖の苔むすしたに我は棲まむぞ

碧梧井

青桐の翠すずしき閼伽のみづ親の御ためと朝な朝な汲む

菜子道

我庵の苔の細道誰待つと棗は落ちし玉敷くがごと

天田愚庵

春の歌の中に

雉子なく小松が下の稚草は人な摘みそね雛の食むがに

鳴門觀濤歌

淡路島三原松原朝ゆけば衣は濡れぬ松のしづくに

沙羅雙樹花開

生れては死ぬ理を示すちふ沙羅の木の花美しきかも

夢

世になしと思へる親を寢る夜落ちず相見つるかも夢のたたちに

吉野山(二首)

吉野川川瀨を清み川のぼり蛙聞きつつ一夜寢にけり

三吉野はかしこき山ぞ那智熊野大峰つづき道の通へる

秋のはじめに

秋風の吹き初めしより草の庵に蟋蟀啼きて寢心のよき

桃山結廬の歌(三首)

打日さす京のうちを事繁み伏見の里に我は來にけり

いめひとの伏水の里を美しみ東山を住み棄てて來つ

遠山は葛城の山志貴の山生駒のやまの頂も見ゆ

數珠

數珠の緒の玉のあな玉左手の手首にまけば音のさらさら

癸卯述懷(二首)

ちちのみの父に似たりと人が云ひし我が眉の毛も白くなりにき

かぞふれば我も老いたりははそはの母の年より四年老いたり

辭世

大和田に島もあらなくに梶緒絶え漂ふ船の行方知らずも

大和田建樹

ほろほろと柳花ちる山川のいかだの上に蛙鳴くなり

わびしさを語りあふこそ樂しけれ今日わが越えし雪の山道

鳥もまだけさは跡つけぬ霜の上にこぼれて匂ふ山茶花のはな

蟲のねも遠く聞えて稻のうへを月おもしろく渡る宵かな

黄ばみゆく入日のあとの横雲に風の色さへ見ゆる秋かな

十年へて君にあひ見し嬉しさを歸りて告げむ母のおはさば

牛の子はまだ跡つけぬ片岡の草の色こそ春めきにけれ

誰もみな同じ木かげやたのむらむいかるが寺の夕立の雨

谷かげの雪の色こそ寂しけれ梅見て越ゆる夕ぐれの山

み空までつづく若葉の桑林まづ眺めにも富める里かな

入る月のなごり身にしむあかつきに笛の音高し寐ぬ人や誰

山水を筧にうけてこの夏は庭のはちすにひくぞうれしき

聞きてただ嬉しきものはとくとくと枕にひびく雨だりの音

大方は萩ものこらぬ山里に知らぬ小鳥の聲ぞきこゆる

一年の樂しき時になりぬらし稻刈る小田につどふ里びと

山の井は氷の下になりはてて水にことかく朝ぼらけかな

躍りゆく若葉がくれのいささ水魚よぶ人の影も見えけり

うなゐ子が盥の水にはなちかふ鮒にも夏はなりみてしがな

江の島に明日は遊ばむふけそめし星の色こそ日和なりけれ

紅葉ある山に山にとわけくれて思はぬ寺の鐘をきくかな

小出粲

江上霞

おほくらの入江とよみしみづとりのゆく
へも見えず立つかすみかな

都[illegible]雪

牛込のつゝみのうへにしらさぎのおりゐ
るばかりのこるゆきかな

行路梅

うめの花さきそめしよりやま畑のわたく
しみちもひとぞゆきかふ

野春雨

あそぶべく野はなりたれど草むしろし
くけふもはる雨のふる

旅宿春雨

たつ人はみな立ちはてゝたびやかたひる
間さびしき春のあめかな

田蛙

かはづなく聲はさやかにきこゆれど澤田
のつき夜くもりはてたる

野萩

水波みにのもりかがよふひとすぢのみち
も小萩にうづもれにけり

百花園に二寺島の秋草といふことを

秋の日のほとけまゐりもまじりけりてら
しま村のはなのそのふに

雨にふしたる頃

したぐさの小萩は散りてむら雨のしづく
もさむきまつのしたいほ

をりにふれて

霧まよふにはのこけぢのあさじめりまだ
木がくれに蟲の音ぞする

獨聞蟲

おもしろく鳴くと思ひし蟲の音もひとり
きく夜はさびしかりけり

雨後蟲

あまだりはまた落ちやまぬ窓の戸につき
影さしてこほろぎのなく

閑庭蟲

またひとつ昨日は知らぬむしの音のこよ
ひきこゆるよもぎふの庭

鹿聲遙

みね越えてまた谷そこにいりぬらむには
かにとほきさをしかの聲

遠山鹿

うづまさの里のきぬたもうちやみて嵯峨
山とほきしかの音ぞする

秋日山行

こゝちよき秋の日和のやまありきこのま
たびもせまほしきかな

あるあした

秋さむくなりにけるかなあさ日影ふむい
たじきもこゝちよきまで

深山月

やま伏のかひが音すごく小夜更けてすゝ
のしのやに月かたぶきぬ

月滿海上

やそ島もうかべるちりのこゝちしておほ
うなばらに月てりわたる

遠山紅葉

しら雲のたえまに見ゆるかつらぎの山の
たかねもいろづきにけり

暮秋庭
八千草は枯れたる庭のいはかげにつはぶき咲きてあきくれむとす

日露戰役の頃都秋霜を
ゆきにむかふみいくさ人やいかならむみやこも秋のしもをふむころ

秋霰
しはぶきの聲となりにもきこえけりひとり寢ざめの秋の夜さむに

秋旅
秋田もるしづがかりいほかりてねむ鹿鳴くやまに日はくれにけり

落葉深
あらがねのつちもいはほもうづもれて落葉の山のこゝちこそすれ

月前落葉
月かげにひと葉づつ散るもみぢ葉のおとせぬかげも見ゆる月かな

河上落葉
かはどこに沈む落葉をのこしおきていまちるもみぢ流れてぞゆく

谷落葉
こずゑみな冬がれはてゝたにかげの落葉のうへにゆふ日さすなり

山路落葉
もとよりの道はうづみし落葉にもきこりの踏みしあとはありけり

山路霜
はこね山あけがたさむき霜のうへにうまのすべりしあとぞ殘れる

行路霜
たき火せしあとのみくろく見ゆるかな朝霜ふかきやまのかげ路に

寒松帶嵐
やま松のこかげをたのむ朝どりのいきもつきあへぬこがらしの風

冬月
照る月のひかりもさむき山の端にかれ木うごきにこがらしの吹く

霜夜月
みづ鳥の羽かぜはさえておほくらの入江のつきよしもぐもりせり

都冬月
ひとを待つくるまさむげに見ゆるかなみやこ大路の冬の夜のつき

屋上霰
妹とわがふせやのうちのむつごとも聞えぬまでに降るあられかな

港千鳥
かぜあらみみなといりする大舟におきのちどりもつきて來にけり

雨後雪
あまだりはたるひをなしておともなく暮るゝ軒端ぞ雪になりぬる

雪中竹
おしなべてはやしをうづむ雪なれどまづたわめるやことし生の竹

雪中鳥
はしたかの手ふさはなれしぬくめ鳥ふぶきにむかふ聲のさむけさ

大雪ふりけるあした
となりにも起きたるおとはきこゆれど門しづかなる今朝のおほ雪

歳暮の歌のうちに
去年のくれよみしふる歌わすれては又よむまでにわれ老いにけり

寒夜燈
燈火のあぶらつぐまにひえにけりいま起きいでしねやのふすまも

寒夜獨臥
酒といふうつゝし妻もさめはてゝひとり寢さむく夜は更けにけり

中村秋香

春の歌の中に

小車は今やつゝみにかゝるらむほろの上する青柳のいと

たゞ一日みざりしやまの櫻ばな咲きにけるかなちりにけるかな

夏の歌の中に

卯の花のさかりにみればあれはてし賤が宿にも垣はありけり

萩

ゆひそへてみれば籬の萩の竹おもひしよりもみじかかりけり

看月有感

いざよひの月のかげこそ人の世のすがたをうつす鏡なりけれ

秋の歌の中に

誰が宿のいかなる露かやどすらむ夜見世の菊の千代のゆくすゑ

心からみだるゝ野邊のかるかやを風のためとも思ひけるかな

山里の落葉の庭ぞうらやすきはくもはらふも風にまかせて

冬の歌の中に

たゞひとつ殘るこずゑの月だにもちりぬばかりに吹くあらしかな

[illegible]といふたる詠みてたてまつりける

夕山の雲にむせびし斧のおとはふえとなりけり三日月のそら

[illegible]にかへて

たが爲のはなに栞にしのぼれむわがわけくらすけふのやまふみ

九[illegible]にて

いらかより出でて甍に入る月にとはばやありし武藏野の秋

今かくれが雑詠の中に

柳町など〳〵のむろの[illegible]けぶり霞むと見しは暮るゝなりけり

時にふれて

たらちねの膝によりつゝふりつゞみふりし昔ぞこひしかりける

樂しくとまではねがはず長からぬわが世をやすくおくりてしがな

雲の上になきかはしつゝ草にふす野べの雲雀の身こそ安けれ

三十七八年の役の時よめる歌の中に

おほ鷲をうつはぎにしてにし東世をつゝむべき時はきにけり

興津[illegible]の下庵にてよめる

何となくけさはこゝろぞのどかなるなほ世の中やわすれざるらむ（一月元旦）

何事もあるにまかする窓なれどひとつ足らぬは月日なりけり

露の身のよすがとなりぬかりそめに結びおきつの松の下庵（病を得て）

小杉榲邨

四方拜

をがみます今朝の火影をはじめにて御代の光や四方にかゞやく

海邊鶯

貝ひろふ磯邊つゞきの小松原かすむところに鶯のなく

夏月

まとゐして淸く涼しと見る月のあかではかなきよはにもあるかな

秋風

かりがねも鹿のなく音もひと方に秋をあつめて夕風ぞふく

雪朝眺望

ねぐら出づる烏のみこそくまと見れ世の中白き雪のあけぼの

互恨戀

吹きしけばまた吹きかへす秋風に眞葛が原ぞしづこゝろなき

冬戀

うき人の秋よりむすぶ袖の露しもおきそへてとけぬころかな

寄物語戀

斧の柄のくちぬるばかり逢ふ期なみ心よさをくらべてや經む

阿波國祖谷山の谷にて

かづら橋わたりて思へば深淵に命をかくるところなりけり

詠史

御さぶらひさすかた知らで笠置山おちしは松のしづくのみかは

和氣淸麿卿

たびごろも襟を正して言かへすあしたの庭はさむけかりけむ

六孫王經基

流れてしその源をくみ見れば淸きせが井のしづくなりけり

楠正成卿

さみだれも腐さざりけり橘のほつ枝にかけし臣の鏡は

繪畫共進會

なみならぬこの繪合はから國も明石も須磨もこゝもとにして

紀元節

わが國のもとゐたゝしゝ宮柱うごきなきよは天地のむた

雪中竹

ふる雪にうづもれながらこの君の千代のみさをはかくれざりけり

明治三十四年歌御會始式の奏行を仰下されてしば〳〵參內仕るをりに

まうのぼる年のはじめのわが道はこのもしきのしき島のみち

愛菊

まち〳〵てまた此秋もあかぬいろのあらたなりけり白菊のはな

池邊躑躅

吹きにほふゆかりのいそのむらさきに白きも見えてつゝじさくなり

橋下螢

舟くだす宇治川くらき橋げたにかけし火かげはほたるなりけり

高崎正風

『たづがね集』抄

明治二十二年千代田の新宮にうつりましける年の年朝拜に

浮橋のうへにたゝしゝ二神のみかげをろがむ心地こそすれ

明治三十九年歌御會始に新年川を

ことしより天の眞名井を汲入れてありなれ川も澄みかへるらむ

花間鶯

うぐひすの木傳ふ影は見えねども聲する方にちる櫻かな

月下柳

青柳のすゑうごくなり春風は吹くともみえぬおぼろ月夜に

櫻

日の本の外まで匂ふ春にあひてほこる色なき山櫻かな

花初開

たゞ一日あたゝかなりし春風にほころびわたる庭櫻かな

上野の花見に行きて

たらちねの母を伴ひ兒をつれておもふことなき花を見るかた

帝國議會開かれむとする年の春花下言志を

花に醉ふ人のねぶりをおどろかす嵐もがなと思ふ春かな

嵐山にてよめりし中に

春の夜を松にのこして嵐山ひとり明け行く花のいろかな

夏のはじめに

白樫のわか葉おとなき朝風に松の花ちるみたらしの水

郭公一聲

時鳥今ひと聲とねがふこそたることしらぬ心なりけれ

遠近早苗

足曳の山田ふもと田をちこちにうたひかはして早苗とるなり

見螢有感

空高くあがれば人のあふぐかな光はおなじほたるなれども

をりにふれて

月清み眞砂にうつる濱松の影ふみならしすゞむよはかな

對月懷舊

母の背にありて見しより數ふればわがよもひさし秋の夜の月

世の中おだやかならざりける頃月を見て

世の中の人のこゝろを望月のまどかならばとおもふ秋かな

馬上聞雁

騎る駒のたつがみたびき吹く風の寒き朝けに雁鳴き渡る

三條太政大臣の家の菊の宴に招かれける日菊久馥のこゝろをよめる

菊の花わけつゝのぼる高どのはやがても秋の山路なりけり

小松宮御二所鹽原の紅葉見にものし給ひけるにしたがひて

ふきあぐる谷の嵐に大空の綠を染めてちる紅葉かな

伏見三夜荘にて嵯峨遊山といふことを

きりのうみの浮島なして見ゆるかたいこまのたかね葛城の山

時雨

もみぢ葉の千入をめでて染めあけし時雨のいさをいふ人もなし

風後落葉

こがらしは吹きやみたれどもみぢ葉の散る心こそとまらざりけれ

雪朝眺望

白雪のふりつゞきたるけさ見れば都は富士の裾野なりけり

埋火

物思ひなほこそ消えね埋火の灰とならむも遠からぬ身に

をりにふれて

のこる日もさむきたかねの一時雨くれなば雪になりぬべきかな

山影映水

しづかなる山の心やうつるらむかげみる水も動かざりけり

故郷松

ふるさとは松さへいたくやつれけり枯枝はらふ人もなくして

蟻

甘きには集りやすき世の人のこゝろを蟻の見するなりけり

寄月述懐

ひとたびは世をうき雲にあひてこそ月の光もてりまさりけれ

子

うちゑみて膝にはひよるかなしさはわが子人の子かはらざりけり

猿まはし

ころも着て立ち舞ふ見れば教なき人にかへりてましらなりけり

北條時宗

もののふの心づくしのはてにこそうべ神風も吹き起りけれ

蒲生君平

うづもれし道ひらかむと御陵のうばらからたちまづはらひけむ

沖禎介

くだけてぞ玉となりける國のため心づくしの沖つ白波

碧落無雲稱鶴心

青雲のかぎりも見えぬ大空に翅をのべてたづなきわたる

但有泉聲洗我心

世の中のうきせ離れてすむ宿のこゝろにかよふ水の音かな

乃木大將の凱旋を賀ぎて

たなそこの白玉ふたつなげうちて國の光をそへし君かな

禁廷將に勿學せる一男に從五位宣下ありけるころよろこびいひ遣すとて

位山のぼるにつけてかへりみよまなびの道のすゝみいかにと

菅公射藝を試みるところ

たぐひなき文の林の花のうへに弓張月のかげもにほへり

縣居大人の像に

荒れはてし歌のあらす田すきかへし誠の種を蒔きし君かな

元彦が戰死せし頃申すもかしこけれどいにし明治二十三年十月三十日の詔勅をおもへて

大君のみをしへ草をしをりにてさきだちし子を何かなげかむ

畏くも皇后宮より御歌を下し給ひしかしこさのあまりに

子ゆゑには泣かぬ袖をもぬらしけり國のはゝそのもりのしづくに

東宮のみけしきを伺ひ奉るとて

靜浦の波のしづかにたひらかにいませわがみこ萬代までに

呂宋度天仁存卿の英詩おくられけるをよろこびて

ことの葉の異なる國に言の葉の友を得たるがうれしかりけり

本居豊穎

天のやちまた

立春

朝ごちのさきおふ聲ものどかにて天のやちまた春は來にけり

雨中柳

青柳にむすぼほれたるゆふ暮のけぶりややがて小雨なるらむ

春曉

あけぼのをいつまでよそにねぶるらむこてふは花に月は夜に

櫻

さくらさくやまと島根の春の雲むかふすきはみ朝日匂へり

雨中花

野に山にうかるゝ魂をわが宿の花にしづむる今日の雨かな

首夏

あらし山わか葉の末の薄がすみいづらききのふの春の行方は

名所時鳥

聞かずして山田の原のすぎまくは月さへなしきほとゝぎすかな

樹陰納涼

こぞながら風もかよふか氷室山古葉こぼるゝかしの下みち

浦秋風

ゆふかけて浦波こゆる蘆の葉のそゝや秋風ほに出でぬめり

月始昇

白雲をなどなげきけむ秋風に山もなびきて月立ちのぼる

朝木枯

朝鳥のなゝめに落つるかげ寒し坂吹きこゆる木がらしの風

天

天の戸のあくるみ空は塵もなし朝ぎよめして風やすぎけむ

畑

國原は今ぞとむらし朝けぶりきほひてたてり船に車に

瀑布

布引の瀧の水上とよむなり天の高機神やおるらむ

齋宮のあとにて

いつきけむ宮居やいづこ賤の女が稲穂刈りほす露の玉垣

小宮建山に[illegible]になしけるほど御園の山なる石にさし出たる[illegible]にて

岩がねを研ぎてあらひて君がため汲もこころをくだくべらなり

閑居

我庵はそとものたな井門の月すむにまかする世こそやすけれ

寄物陳思

さよあらしはらへば清き月影もくもるや秋のならひなるらむ

寄國祝

君が世の千世とゝのふる聲ならしよもに友よぶ浦のたづむら

四海清

とほじろき御世の光を大八しま四方にたたへてしほもみつらむ

海上胤平

春の歌（三首）

小鮎くむ木の川上の花ぐもり吉野やいづらさかりなるらむ

朝けはく衣手寒し雪きえぬ平群の山の白樫がもと

ほろ〳〵と椿こぼれて雨かすむ巨勢の春野に雉子なくなり

夏の歌（二首）

夕庭に清水そゝげば涼しくも若葉をてらす月のかげかな

あつしとていを寐ぬ人に山かげの清水にやどる月を見せばや

雫ちる五十槻がもとは夕立のなごり涼しき風もこそふけ

秋の歌（三首）

月清み海上がたの沖つ洲にあさるあきさの數も見えけり

こきはちりうすきは殘る紅葉の心しれとや風のふくらむ

足柄や月見がてらに雲ふみて秋の山路は夜ぞゆかまし

冬の歌（三首）

さゝぎなく野路の棚橋霜とけてけぶる日かげは冬としもなし

影しぶく汐風はやみあら磯の月にぬれてもなく千鳥かな

山かげのしゝ田のそひの水なること音さへかれて冬ぞさびしき

雑の歌（三首）

しら雪は雲よりふりて白雲は雪より出づるふじの神山

眞熊野のあら山ゆする大瀧に岩もくだけて霧とふるらむ

沖さけてうかぶ鯨のいぶきより海上がたは潮ぐもりせり

述懷（二首）

大君の楯ともならでいたづらに老いくちにけり醜のますら男

引すてしあたゝら眞弓弦はげて老のすさびに力ためさむ

武者修業紀行の歌の中に（三首）

燒太刀をまくらとなして高千穗の鬼の岩屋にこよひ寐にけり

彦山のそがひにたちて白雲のひれふるかたや東路の空

杉山の落葉をたきて雪つもる大樹がもとにこの夜あかさむ

月前梅

窓のうちに梅の立枝のかげさして月おもしろき春のよはかな

山家櫻

山里は梅のさかりも靜なりうぐひすのみを致客にして

幽栖梅

かくれがの梅のかげにもうたふべき友はありけり鶯のこゑ

竹林鶯

雪折のおと寒かりし山陰の竹の林にうぐひすの鳴く。

歸雁

何となく旅おもほゆる此頃の春日に雁もおもひ立つらむ

野雲雀

雛波津を朝立ちくれば住吉の遠里小野に雲雀なくなり

黒田清綱

櫻

花といふ花のきみとも見るべきはわが日の本の櫻なりけり

都花

をさまれる御世のさかりを九重の都の花のかげに知るかな

水邊山吹

あゆはしるうへになびきて咲きにけり吉野の河の山吹の花

郭公歸山

郭公今はと山に歸るなりおもふかぎりや鳴きつくしけむ

夜橘

軒ちかく花橘のかをる夜に昔かたらふ友も來にけり

守水雞

山里の夕がほ棚の下かげにゆく水ありて水雞なくなり

海邊夏月

松風の上にかゝりて夏の夜の月かげすゞし天の橋立

隣泉

夕皃の垣根めぐりて隣よりすゞしく通ふ水の音かな

海邊月

佃じまあまの呼ごゑ靜まりて濱殿わたり月ふけにけり

山家月

世の中をおもひはなれて山水に淸くもすめる月のかげかな

八田翁三十年祭に月似古といふ心を

月ばかり親しきはなしいつ見てもむかしの人にあふ心地して

暮秋風

木がらしにならむとすなるけはひかなくれゆく秋の峯の夕風

暮秋雨

紅葉ちるゆふべの雨にさそはれて今年の秋も暮れむとすらむ

秋幽栖

心ある誰かすむらむ奥山のもみぢのかげに草の庵見ゆ

鶴拂霜

打はぶく音こそさゆれあしたづの子を覆ひ羽に霜やおくらむ

獨釣寒江雪

空蟬の世につながれぬ絲たれて雪のふる江に釣するや誰

神舞のかた

久方の日影のかづらかけまくもあやにたふとき神あそびかな

爐邊似春

冬ながら霞をくみてうたふ夜はこゝろ春なりうづみ火のもと

寒夜憶遠征

もろこしの野邊の夜寒を身にしめて我子いかにと思ひこそやれ

深山雨

けふも亦むさゝび鳴きておく山の夕べの雲は雨もよひせり

山家水

流れても世のにごりには入らざらむ我すむ山の谷のした水

晴天鶴

朝日影ちりもくもらぬ大空をひとりしめてやたづの舞ふらむ

鶴聲近

千世よばふたづが音きかぬ朝もなし大宮近く家居しをれば

牧場駒

いかばかり心ひろくも遊ぶらむ世につながれぬ牧のあら駒

珠玉

えらばずばえられざらまし白玉は石の中にもまじれるものを

幸遇太平世

さま〴〵のうきせわたりて浦安のうら安き世にあひにけるかな

支那艦隊白旗をたて降伏しけることの聞えける時

天皇は神にしませば唐舟も白ゆふかけてまつろひにけり

海戰大勝を祝ひて

日の本のみ軍船のはた風にふれてくだけぬあだなみもなし

平重盛

千世を經て朽ちせぬものは親のためたてし小松の操なりけり

平忠度

のる駒を引かへさずばことの葉の花も千載に殘らざらまし

楠正成

武士のふむべき道のしをりにはこの君をこそさすべかりけれ

源光圀

みよし野の吉野の都よしと見し心の花のかぐはしきかな

香川景樹

麻もよし紀の川水の淺からぬそこの心は信ぞくみたる

高山正之贈位宣下ありける時

人しれず立てし功をすめろぎのしろしめす世になりにけるかな

僧月照

西の海のあら波にくだけても玉のひゞきは世にぞ殘れる

西郷隆盛が二十年祭に

年ふればいよ〳〵こひし今の世にまさばと思ふ事のみにして

劉玄德

菅むしろ昔おりしや天の下つひにまくべき心なりけむ

土佐日記をよみて

あしたづの千とせの聲の殘らずばうだの松原誰かしらまし

大口鯛二

雪中聞鶯

松の雪しづるゝたびになきさして又なきいづるうぐひすのこゑ

山村梅

村あればうめのはなさき梅あれば水ながれけり伊賀の山中

春雨

こゆるぎの磯のまつばらうちけぶり音せぬ波にはるさめぞふる

都花（ちゝの花・[illegible]）

しるべするわれ[illegible]へ旅の人あきぬはなより花の都めぐりに

櫻狩

いざといへばいなと答ふる人もなし花には誰もうかれたつらむ

[illegible]花

にほひのみさそふばかりに春風は花の上にもいとはざりけり

夜櫻

祇園のつきのよざくらみる人のかへりつくせば空ぞしらめる

落花

春雨のなごりのつゆやかわきけむはなびらかろくちる櫻かな

茶摘

このめつむ少女いつくし木幡山こはたが妻とならむとすらむ

藤

そのもりの[illegible]の餅はこぶ水桶のみづにちりうくふぢなみのはな

海上春霞

しほなはのとゞまるかぎりなごめなむやしまの海のはるの初風

新樹

家々のへだての垣もうづもれてあをばつゞきのむつまじげなる

四條畷にものして

かぐはしきいさをのあとを訪ふ袖に楠の若葉のつゆぞこぼるる

朝時鳥

ひやゝかにかしの水戸のつゆちりてしらめる月になく時鳥

合歡花

夕されば眠るねぶの木かげばかり涼しき月をしらずやあるらむ

行路夏草

薙ぎたつる利鎌の音もこゝちよしあさつゆ白き野路のなつくさ

夕顔

もやのうちに田面はくれてゆふがほの花のみしろし里の竹垣

蟬

いはしみづむすぶたもとになくせみのこゑふきおろす峰の松風

芭蕉

水のごとすゞしき月のかげをあびて夜風に揺ぐまどのばせを葉

夏鷺

雨はれし入江の水にたつさぎのみの毛すゞしく夕風ぞふく

河鹿

すゞみする月夜はふけて加茂川のさゞれゆくせに河鹿なくなり

月前水

小山田のあぜきりおとす水口にきらめく月のかげさやかなり

菊花爲第一（天長節詠進）

君が代をことほぐ今日のかざしにはなにはあれども白菊の花

秋水

あきたけてあしむらさわぐ山澤のみづかげ寒き朝月夜かな

月前落葉

すさまじく紅葉ふきあぐる谷風にしばしはくもる山のはの月

狩場嵐

かり犬におひたてらるゝ怒猪のいぶきもそひてふくあらしかな

冬川

やまかげのさゞれ石川水かれて木の葉のみこそ風にながるれ

冬鼠

枕上はしるねずみをやらはむとみじろぎしても寒きよはかな

戀

もろともになきて語りし一年のいそはかの磯かの松のかげ

春戀

はなとりの色にも音にもうきたゝぬこのわが心たれかしるらむ

海上雲

夕づく日しづみし沖のなみの上につまくれなゐの雲ぞたゞよふ

水

さまたぐる岩にあたればいかりけり水の心はしづかなれども

流水

石ひとつとればたちまちこなたにもながれよりけり谷川のみづ

旅

宿とらぬ旅もせらるゝ世なりけり汽車にねてゆきねてかへりつゝ

岸行

渡舟よするきしのみたえまにて川上とほくつゞくたかむら

籠鳥

もとよりのこがひの鳥は空かける翼ありともしらでおゆらむ

鐘

高野山峰よりおこるかねのおとに杉の梢のくもぞたゞよふ

井

車井のつるべのしづくはるかなる水にしたゝる音のしづけさ

垣

生垣の杉のすくせぞあはれなるのびむとすればかりこまれつゝ

影

たつとなき釜の湯の氣のかげをさへ壁にみせけり庵のともし火

酒

かしのみのひとりのみてはうまからず友こそ酒の肴なりけれ

孝

わが子にはとあれかゝれとのぞみつゝ親にはえこそ盡さざりけれ

交友

わたくしの心ひとつをはなるればむつまじからぬ友なかりけり

聲

誰ならむとみには思ひいでられずきゝ覺えあるこゑにはあれど

(元治元年七月)長藩京城に紛擾せし頃詠みける歌どものうち

君のため世のためうけし罪とがはみそぎも更にかひなかりけり

(慶應元年乙丑の)冬馬関小隊長がさし物に歌かきてといひければ

くろがねの筒の火花をちらしつゝさきあらそひてゆくは誰が子ぞ

(慶應二年丙寅の年、秋の末)に、この木おほくありける所にて戦ひけるとき

黒けぶりたてゝ戦ふつゝの音のひゞきにもまたちるもみぢかな

(慶應三年丁卯の六月)薩公手づから六連銃をたまはりければ

向ふ仇あらばうてよとたまはりしつゝのひゞきを世にやならさむ

(同じきとしの)十七日都を出でたち四條の橋のほとりより高瀬の舟にのる

高瀬川さをとるきしの舟人もみやこの手ぶりなつかしきかな

丁卯十一月薩長連合の議成りたる後、政府に出兵のことを建言せむとて吉田の庵を立出づるとき

人言はさもあらばあれ君をおもふ心にふたつあらばこそあらめ

山縣有朋

(明治元年戊辰)夏のころ越後の長岡見附にて戦ひけるとき(二首)

あたまもるとりでのかゞり影ふけて夏も身にしむ越の山風

うちいだす筒のけぶりのかきくもりたまはあられの心地のみして

津川をわたりて会津にうち入りけるとき

あひづ山にし吹く風のかぜさきにあたもこの葉もたまりかねつゝ

(明治十年西南の役参軍として)肥後の国大川に陣せるとき

ともすれば仇まもる身のおこたりをいさめがほにもなく郭公

二十八年大本営にありて

筒も手にこほりやすらむ北支那のあら野の霰玉とちる夜は

七月満洲軍の防禦線を巡視しけるとき

大づつの音はるかにも聞ゆなり手づなとる手のひだりなゝめに

三十九年凱旋の観兵式に供奉しけるとき

みそなはす大御心やいかならむかちてかへりしみいくさ人を

[illegible]くなりける日つく杖の折れければ

越えばまた里やあらむとたのみてしつゑさへ折れし老の坂道

(明治四十三年)東宮殿下椿山荘に行啓あらせられけるによみて奉りける

つばき山若葉のかげにうれしくも春の光のさしゝけふかな

(明治四十三年六月五日古稀祝に東宮行啓あらせられけるとかしこみてよみて奉りける)

大君のめぐみあまねき草の庵に又光そふけふにもあるかな

(大正元年)桃山御陵に参拝して

大君はいかにますらむ伏見山たゞ松風のおとばかりして

(大正四年大嘗祭に歌よみて奉れと仰言ありければ)

神と君と誠のかよふ時ならし更渡りゆく大嘗祭

(大正六年)鳩杖をたまはりけるとき

いたゞきし鳩杖のみかその鳥のつばさもかりてつかへまつらむ

(大正七年)平和談判会議に西園寺侯の赴かるゝ際に

あら浪はやゝ静まれど海原に雲ぞ残れる心してゆけ

森鷗外

我百首（錄九首）

我は唯だこの菴没羅菓に於いてのみ自在を得ると丸呑にする

うまいより呼び醒まされし人のごと圓き目をあき我を見つむる

鬪はぬ女夫こそなけれ舌もてし拳をもてし靈をもてする

處女はげにきよらなるものまだ售れぬ荒物店の箒のごとく

觸れざりし人の皮もて飲まざりし酒を盛るべき嚢を縫はむ

をりをりは四大假合の六尺を眞直に堅てて譴責を受く

勳章は時時の恐怖に代へたると日日の消化に代へたるとあり

何一つよくは見ざりき生を踏むわが足あまり健なれば

狂ほしき考浮ぶ夜の町にふと燃え出づる火事のごとくに

奈良五十首（錄五首）

勅封の笋の皮切りほどく剪刀の音の寒きあかつき（正倉院）

唐櫃の蓋とれば立つ絁の塵もなかなかなつかしきかな

戀を知る沒日の國の主の世に寫しつる經今も殘れり

三毒におぼるる民等法の手に國をゆだねし王を笑ふや

晴るる日はみ倉守るわれ傘さして巡りてぞ見る雨の寺寺

常磐會詠草（錄六首）

とりどりに一ふしあれとわが庭にうゑて樂しむ竹のひとむら（竹）

道つくりとどのへ過ぎてうなゐ等がもてあそぶべき石だに無き（石）

年久につかへなれては休む日に朝いせむともおもはざりけり（朝）

生死をわくべき石としばらくはえおかでありぬ夜は更くれども（碁）

里近みおちてつもれるもみぢばに烟草のからもまじりたるかな（落葉）

なかぞらにすずの音すなりあららぎのうへは涼しき風や吹くらむ（風鈴）

入江爲守

早春山

うぐひすの瀧もこほりて春淺きわかくさ山に雪はふりつつ

新鶯

めづらしく今朝うぐひすをききしより一日のどけきわが心かな

殘雪

春もなほ北のみ門は風さえて松の木かげに雪ぞのこれる

土筆

萌えいづるつくしの筆はのどかなる春の心をかかむとすらむ

春雨

窓の外の小米ざくらに露みえてふるともわかぬ春雨のふる

雲雀

世の中を空よりみむと朝ひばり霞わけつつあがるなるらむ

菜花

小山田の入日のかげもくもるなりさくやすず菜の花のにほひに

暮春

鐘のおとは霞の底にしづみつつ春もくれゆく宇治の山山

春興

あづまやを旅のやどりになぞらへておぼろ月夜の庭櫻みむ

春夜

たきものの烟のなごりひややかに春の夜ふくる窓の内かな

旅にありて

さくら花をりをり散りて熊本のうどのやぐらに春雨のふる

採桑

赤城山みどりにはれて桑の葉もつむべくなりぬわが妻の里

蚊遣火

椰子の葉にかやりのけぶりたなびきし高砂島のゆふべをぞ思ふ

百合

わきいづる湯の花澤のすすき原めさむばかりに山百合のさく

ねぶの花

ねぶの花ながるる水に影さして川邊のやどのひるしづかなり

薄

ゆく雲の影かと見しはすすき原をりをり風のわたるなりけり

蟲

心にもとほるばかりに我庭の蟲の音すみて夜はふけにけり

新穀

笥にもりて神にささぐるにひよねの光ぞ秋のひかりなりける

暮秋

池水に柿のもみぢの散りうきてむらさめ寒しあきのくれがた

冬月

さゆる夜の月のひかりは窓の戸をさせどもとほる心地こそすれ

寒夜

かへりきてなづる火桶も火ありとは思はれぬまで寒きよはかな

寒樹

若草をはらひし柳霜がれてみじかき枝に川かぜぞふく

旭光照波

島かげに日はのぼるらしわたの原からくれなゐの波ぞわきたつ

海邊松

沖つ波木の間このまに見えそめて夜をはなれゆく浦の松原

松上鶴

濱松につばさをならすあしたづはとほき潮路やこころざすらむ

讀史

大君につくす誠のわきいづるその源もいにしへのふみ

讀書

おなじ書ふたたびよみて知らざりしふかき心をさとるうれしさ

翁

世の中をさけし翁も童にはをりをりさとす大み國ぶり

農

世の中の奢をよそにつづれきて小田をたがへす人ぞたふとき

牧

人の親の心に似たり羊飼むちはとれどもむちうたずして

水

しづかなるみやまにすまで世の中になにいそぐらむ谷川の水

波

苫屋にもよせむいきほひ見えながら磯をかぎりにかへる波かな

机

よるからに心しづけき文机は我家のうちのわがやなりけり

絲

大三島つたはるよろひ古けれどをどしの絲の色はうるはし

晴天鶴

朝日影とよさかのぼる天の原つばさゆたかにたづのまふみゆ

寄國祝

こしかたのためし思へばいづくまですすみゆくらむ國のちからは

琴

月のさす壁にたてたる琴みえてすむ人ゆかし松かげの宿

蟹

夕月のにほふむしろに音たてて蟹はひ上る海づらの宿

折にふれて

高野川淵瀬かはりぬ幼くて石ひろひしはいづくなりけむ

みともの旅にて

埃及のくにはら見ればないる川そらにつづきて夕日うつろふ

東宮御成婚の日陪乘を承りて

天津日のひかりさしいるみ車に並ぶみ影をあふぐかしこさ

今上の踐祚の折よみ侍りける

大御手に涙はらひて天の下しりそめますぞかしこかりける

大禮奉祝に菊盛といふことを

この秋の人の心をこころにて菊もさやかに咲きにほふらむ

大嘗祭御屏風歌　冬

こゑ寒き雁のゆくへに初雪のひかりつらなる比良の遠山

井上通泰

海邊春月
わたつみの神の少女もあくがれてあらはれぬべきおぼろよの月

若草
もえいづる小草のひまにうめの花いささかちれる雨のあとかな

曉鶯
むら山の尾上にほひてもや深き富士のすそ野にうぐひすのなく

朝雲雀
むぎ畠のとほき果よりのぼる日のにほひのうちに雲雀なくなり

春河
雪しろき山よりいでてうなばらのかすみにそそぐふじかはの水

新竹
たにぎればしろき汁きえてみどりなる肌あらはれぬ庭のわか竹

夏草
すゑものの白きくだけのきらめきてなつぐさあつし市なかの原

螢
ともし火のあかき光にねまどひてたたみの上をはへのさまよふ

柴又にて
とほじろき川瀬わたりてたかどのにとなりの國の風ぞいりくる

夏野
すな川の砂もとけよとてらす日におほ野のちがや波とみだるる

初秋夜
宵ながらものしづかにてあき風のこゑもきこゆる窓のうちかな

波上月
ちかづかばしたたる露もみえなまし今しはなるる波のへのつき

月夜聞蟲
富士のねは月夜の空にあらはれて伊豆もするがもただむしの聲

案山子
雀よりさかしき人のあつくおもひ深くはかりてつくりし案山子

曉霜
あかつきのちまたの霜は世わたりの道にいでたつ人のみぞふむ

寒夜霰
人の見ぬやみのよはにも雪のごとひそかにふらぬ玉あられかな

初雪
月くらきよひの小みちのきり石にうひうひしくもつもる雪かな

待花
まちわたる人の心のうへにいでてさけかしさくらこよひ一夜に

夕顔
あるじをば友とや見らむよるさきて人に知られぬ宿のゆふがほ

月前萩
月たかきひろ野の原のくさむらをみな秋萩ときくがゆかしさ

松下菊

松が根のくはくの玉のつちかひてそむるかきくの色のめでたき

晴山雲

くに原はかけもからすもなくらめど雲しづかなりみねのかみ垣

山村

ひと谷にわたるやまざと三つとだに軒をつらぬる家はなくして

軒

わら葺の軒をつらぬくはりがねにいにしへ今のあざなひを見つ

妻

はやき世の人とおもひしその人のつまうせぬてふ今のうつつに

友

をりをりは我子の友も友としてあたらしき世のこころをぞ見る

幼兒

をさなごはゆふだちの雨さよしぐれ怒るも泣くも束の間にして

翁

おい人をあなづる世なり老びとにぬかづく世なりあやし此世は

農

田にたてば小田のますらを皇軍にめさるるときは國のますらを

喜

天の下のしらがことごと黒髪にかへるばかりのよろこびもがな

猿

えぼし著て小猿のまふをみし外はおもひでもなしわがをさな時

鷗

庫のかげ白くうつれるにごり江の荷船のひまをかもめとびかふ

蜘蛛

軒端よりはらひおとしてもちあぐる箒のすゑをさがるくもかな

社頭杉

神はしをわたるはふりがしろたへの袖こそみゆれすぎの木の間に

芝

しば原をへだつる小路ともすれば芝のはしりのこえなむとする

根

潜みてもあるべきものを土の上にいでて木の根の人にふまるる

豐臣秀吉

日のてらす國のかぎりを大君にささげむことやねがひなりけむ

門内車

人や來て我をまつらむすずめなくはひりの庭にみゆるくるまは

雨中舟

つつみよりかへりみすれば江の雨に我をわたしし舟ぞきえゆく

烟

あくた火も桂たく火もたち昇るけぶりを見ればかはらざりけり

跡

塵のうへにしばらく殘るもののあと人のいさをもけだし然らむ

大和に遊びて

いにしへの奈良のみやこの跡とへば麥は穗にいで豆ははなさく

をりにふれて

丈夫はををしからなむささがにのふるまひなどに目をとめずして

獨嘯

おほ神はなげきますらむつかさにも國にも人のなくなれる世を

阪正臣

あたみかたゆあみくらしつゝあらたまの年の初旅はつかばかりを

餘寒

あたゝけくおぼえしよべの春雨のそのにはたつみ今朝は氷れる

何のわか芽くれの二葉の萠出ぬと兒等ぞよろこぶ花ぞのにして

はるさめのふる草まじりにひくさのぬれておふるがなつかしきかな

きじの聲とほくきこえてあかつきの花のはやしに月ぞしらめる

すみぞめの夕山ざくらしらじらとなほこそ見ゆれ川のあなたに

いそ山のこのまに見ゆるわたつみのとよはた雲はさくらなりけり

新樹(二首)

うら葉つむ人かげ見えてわが岡のにひ桑ばやしあめはれにけり

夏木立みどりしたゝるかげ見れば岩間よりわくみづもありけり

ほとゝぎすあを葉のいろも紫にかはるゆふべの山になくなり

夏草

風のゆく道のみ見えてなつくさの分け入りがたくなれる野べかな

百合花

箱根山いづるくるまをくきの外にゑみて泄ふるしらゆりのはな

蟬

すゞしげに見ゆる木蔭もなほあかで枝をかへつゝせみのなくらむ

夏氷

玉まりにもれるけづり氷手にとればはやくあつさはきえはてにけり

夕立(二首)

ゆふだちの雲居となりて御前崎いそのともし火かげぞをぐらき

みなと風ふくと思ふまにとまり船くだむばかり夕立のふる

わきいづる音をたよりにぬばたまのよるも來てくむ岩しみづかな

賜暇旅行

夏やすみ歌枕見にゆく旅もつかへのみちのひとつなりけり

初秋夜

ふく風も西にかはりてくれ竹のよはながくこそなりそめにけれ

秋風(二首)

おともせでをすのまとほる風すらも身にしむまでになれる秋かな

あきかぜの寒くなりぬる頃しもぞ月のあ
はれも身にはしみける

むし（二首）

まど近くまらうどすゑてしばらくは共に
きゝけり庭のむしのね

むしのねにけおさるばかり雨のおとはか
すかになりて小夜ふけにけり

紅葉がりひさごの酒をあまし來て野守が
庵の月にゑふかな

月（二首）

ふくるまでまちつる山のかひなれやさし
いづる月のひかりことなる

あさぢ原わがのる駒のかげさして見かへ
る山に月いでにけり

秋海棠

あづさゆみはるさく花の面影も霧のまが
きにかつ見ゆるかな

萩

あき風にふかれふかれてふる池のみぎは
の穂萩うなだれにけり

百舌鳥

園の木にむしのはや贄かけすてゝ二たび
とはずなりしもずかな

秋車

不盡のねの雪のひかりにすそ野ゆくくる
まのうちもさゆる秋かな

すゝきと女郎花とのかた

こと草はねたしと思はむ女郎花なまめく
なかにまじるをばなを

時雨

はつしぐれ窓たゝくなり花がめにさした
る菊もさむくかをりて

氷

草の庵のかけひも今朝はこほりけり音を
きくだにさびしかりしを

海見むと朝戸あくれば濱どのの庭よりた
ちてちどりなくなり

水鳥（二首）

さよあらしみほりを吹けばひとしきりと
よみわたりぬさむき鴨がね

三宅坂かよふくるまも絶えし夜にとよむ
は堀のみづどりのこゑ

ゆき（二首）

舟はみなゆきの重荷をつみてけりいづれ
にのりてこぎはいづべき

からうすの音ばかりしてをやまだの里し
づかなる今日の雪かな

うづみ火

かけものも花もこゝろにかなひけり來む
友もがなうづみ火のもと

寒梅

おく霜にそこなはれむはしりながら咲出
づる梅のいさましきかな

冬風

かたそぎの霜ふきはらふ朝北にいがきの
蔦ものこらざりけり

冬里

小田のさと小春日よりに訪ひ來れば稲つ
き歌のこゑものどけし

漁舟

よにいでてなつらむよりも清き江にいと
をたれつゝ日をおくりてむ

海上舟

時つかぜしら帆にうけて舟人がこゝろの
ゆくも見ゆる海かな

武島羽衣

俳優の似顔ゑがける羽子板を抱くをとめの今樣の袖

わが觸るゝ凡てのものを柔かに吹く春風の心持たなむ

賤の男は霞に消えて打ちおろす鍬のみひかる春の山畠

夕月のくまともならで涼しくもなゝめになびく軒のかやり火

七草の模樣ゑがける蚊帳越しに涼しき夏の朝の海見る

むし暑き夏のひるねの肱まくらくせ附きやすき世にこそありけれ

心もちのぼせ氣味なる湯がへりの肩こゝちよくさみだれのふる

御しるしの菊の花こそ咲きにけれ野山に千代のかをりたゝへて

薄羅紗の背廣の服もこゝちよやつく杖かろき秋の山ぶみ

木枯しに秋のとりでの破られて逃ぐるが如くちる木の葉かな

霜解の下駄の齒形のさながらにこほりて寒ききさらぎの空

天にますイエス祭ると里の子がよろこぶ夜半の星のかゞやき

一日の生の旅路を堅實にけふもあゆみぬ小き喜び

きのふてふ形見もかなしあすといふ賴みもはかなけふに生きなむ

ゆきたけのあはぬ浴衣もおもしろしかけかまひなき山の湯の宿

ふたら山谷さくなだり流れおつる瀧尻の水の音のさやけさ

美しき道をあゆめとまなび屋の子らを集めてけふも詩を說く

赤松のくねる根がたに腰かけて一筋あをき空と海見る

送る人送らるゝ人夕やけにしばし見かはす港出の船

あまりにも今日のひと日の短かかり爲さむと思ふ事に比べて

軒先の岐阜提燈に火ともりて庭のうち水ひかりなまめく

花道のよきところにてともし火に映えし保名の狂亂の顔

木の頭たかく響きて二番目の幕明きぎはの賑やかさかな

鞘當や名古屋山三が寛濶の袂にひかる銀色の雨

空にうかぶ山の濃緑らす緑信濃はすゞし初夏の旅

夕立の雨は晴れたりしばらくは薄墨色に空をぼかして

薄き濃き紅葉のひまに瀧おちて秋おもしろし鹽原の里

袷よりセルに着かへて夏衣ひとへに輕し膚も心も

光君舞ひ出づべくも見ゆるかな紅葉のかげに樂の音の沸く

高ひかる日の御子日和菊日和御園らゝに秋の陽の照る

はかどらぬ午後の仕事にいつしかも短くなりし冬の日を知る

血の氣なき梢つめたくふりそゝぐ冬のゆふべの雨のさびしさ

目の前の眞玉見知らではる〴〵と瓦さがし野山ゆく人

餘りにも尊みすぎて有りどころ探し得ぬまで置き忘れけり

手巾ふりて別れし人のおもかげの七日目に立つ船の上かな

また一つあらはれにけり青雲の中に吸はれし沖の帆の影

新内のふしゆるやかにながれけり人賑はへる湯の宿の宵

はかな言かたりかはして野山ゆく旅は二人ぞたのしかりける

唐茄子の廣葉のかげに床据ゑて鄙の月見る夜半の涼しさ

朝なぎの濱邊を見れば沖の上ながめを添へぬ島なかりけり

わがはだへ見えすくばかり澄みかへるあしたの海の泳ぎごこちよ

夏休みなかばは過ぎぬあな暑しやゝ涼しなどいひてあるまに

心なき庭の木草もをのゝきぬ鳴神すごき夕立の雨

湯だらひに一日の汗をあらはれて嘶く馬やすゞしかるらむ

落合直文

門松

一つもて君をいははむ一つもて親をいははむ二もとある松

緋縅の鎧を著けて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山ざくら花

春のものと思はれぬまで餘りにも寂し靜けし白藤の花

小瓶をば机の上に載せたれどまだまだ長し白藤の花

閼伽の水汲まむとすれば谷川の白く映れりしら藤の花

少女子が扇の風や弱からし二たび立ちて飛ぶ螢かな

駒とめて返り見すればほととぎす一聲啼き妹が家のあたり

近江の海夕霧ふかし雁がねの聞ゆる方や堅田なるらむ

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころ此處と定めむ

をとめらが泳ぎしあとの遠淺に浮環のごとき月浮び出でぬ

磯山の小松を引きて寄る波に手洗ひをれば鶴鳴きわたる

城あとと聞きにし岡の古瓦拾ひてをれば雉子鳴くなり

安房にて

霜やけの小さき手して蜜柑むく我が子しのばゆ風の寒きに

鷄も雛をいだきて塒のうちに寒さを侘ぶるこの夕かな

おくところ宜しきを得て置き置けば皆おもしろし庭の庭石

やよや子ら東路に載せてある道はこの道春のわか草

椿さく久能の御阪の七まがりまがりて來れば雉子鳴くなり

さわさわと我が釣り上げし小鱸の白きあぎとに秋の風ふく

我が歌を哀れと思ふ人ひとり見出でて後に死なむとぞ思ふ

田端にて根岸の友に逢ひにけり蛙鳴くなる春の夕ぐれ

ま白なる石より成れるこの少女おのれ刻まば衣きせましを

波とほく月出で初めて砂の上に君と我れとの影はうつりぬ

砂の上に我が戀人の名を書けば波の寄せきて影も留めず

山寺の石のきざはし下りくれば椿こぼれぬ右にひだりに

町中の火の見やぐらに人ひとり火を見て立てり冬の夜の月

我が宿の萩に露おく夕ぐれを訪へと思ひし人は訪ひきぬ

ふるさとの野寺の池は田となりてその片隅に蓮咲きにけり

原町のめしひ二人が杖とめて秋の夕をなに語るらむ

如何にともせむすべ無しや我が戀ふる人は此世の人とし思へど

竹三もと蘭丸かぶ巖四つその巖めぐり清水ながれぬ

打ち打てば石にも聲はあるものを何時までつらき心なるらむ

おくつきの石を撫でつつひとり言いひて歸りぬ春の夕ぐれ

岩清水立ち寄り見ればその底に痩せし我が影老いし松影

一たびは瀧となりても落ちつるをまた立ちのぼる峰のしら雲

秋風に柳散りくるこの夕つくづく戀を止めむと思ひき

病み臥して床にある身は人よりも早く知られぬ秋の初風

涼みする四條の橋に休らひて知らぬ人とも語りつるかな

をとめ子は摘みて碎きて棄てにけり薔薇の花には罪もあらなくに

大前に鳴らす小鈴の音聞きて社の鼠も出できぬ

捨ててある草鞋の上に霜見えて並木のあたり月かたぶきぬ

長らへて今年も秋に逢へれどもそぞろに寒し萩の上の露

舟寄する夕川岸の蘆の上にかすかに見ゆる小筑波の山

朝風に裏白の葉の裏を見て心のまよひ少なくなりぬ

引き上ぐる四手の網に蝦跳ねて秋風さむし磯の夕ぐれ

此の宿は寝なから富士の見えにけり死なばここにて死なむとぞ思ふ

秋風に吹かれ吹かれて折れながら穂に出でし薄われによく似たり

木枯よ汝れが行方の静けさのおもかげ夢みいざこの夜寝む

陸賀氏の南国に行くを送りて

かへるまで死ぬなと云ひし其の人も猛き身ならず神まもりませ

父君よ今朝は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

喜戸波江君に父の遺物なる残月と云ふ硯贈るとて

ともすれば膝に 涙はこぼれけり 如何に弱りし心なるらむ

天がける人の形見と君は見よ雲間に残る夜はの月影

明治三十一年一月十一日、皇太后陛下、悲しくも崩御ましましぬ。十三日の朝、雪踏み分けて参内せしが、その道すがらよめる歌どもの中に(一首)

世に在さば歌をも召さむ世に在さば御酒賜はらむ今朝の白雪

かかぐべき簾下ろしてこの雪に少女が伴は物おもふらむ

鎌倉宮にて

御楯ともならましものをそのかみに生れぬ身こそ悔しかりけれ

注連こそは引き延へたれど山里はおのづからなる門の門松

大洗磯前にて

大洗我れ下り立てば裾のあたり寄せて砕くる八重の白波

いにしへも斯かる歎きの有りきやと問ひても見まし軒の橘

興津の友を訪ふに、近くみまかりぬと聞きて

住む人の名は知らねども涼しさに訪ひても見ばや松立てる門

呼べど呼べど人は歸らず呼べど呼べど人は答へず田子の呼坂

加茂川にて、橋本光秋君に

別れかねたゆたふ身をば外にして流れも行くか加茂の川水

立ち出でてかへりみすれば吾妹子が門の柳にうぐひすの鳴く

庭に散る花にも春の闇ゆなり如何に寂しき夕なるらむ

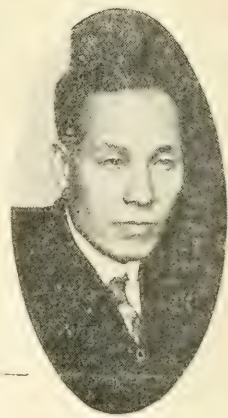
秋もなほ人は訪ひけり我が宿のさくらの紅葉いろ赤くして

玉すだれゆらぐとも無き春風の行方を見せて舞ふ胡蝶かな

母の背にむかし眺めし我が身とは知るや知らずやふるさとの月

朝月夜かすむ野守が垣根道かげ踏みゆけば雉子鳴くなり

ははそ葉を時雨の叩くここちして秋に紛るる蝉のこゑかな

咲く花は跡なく散りてうぐひすの陵寒く春雨ぞ降る

與謝野寛

爐の上の雪（六十八首）

爐のうへの雪と題しぬ此集のはかなきことは作者先づ知る

若草のおのれ若けどいちはやく世の露霜に濡れにけるはや（以下明治二十九年以前の作二十首）

たらちねはかもかもせんと思せども貧しき母は由もあらなく

吾を如何に思せか父は雪の日も木これ芋ほれ風呂たけと告る

たらちねは手もて隠せど著せるきぬ膝のほどろの裂けて見えずや

悔しけど川に菜あらふ我がまへを知事の若子は馬よりぞ行く

春日すら父に嘖ばえ默をれば母なぐさめて餅くはせます

山里の竹ふく風のさらさらに言も交さじさぶしけれども

あが年は十あまり八つ斯かれども戀ちふことはつゆも知らなく

孔子のふみ讀みてこもれど天雲の立たまく欲しく止みかねつも

あが父は神代の卷を額に戴せ午睡しましぬ袈裟かけながら

こわだかに蟹の行く如す文よめば父は叱らず笑ましたるかも

加茂川にかたゐと語る孔のある錢ふたつあたへかたゐと語る

野ら猫の尾を吊るし持ちまふたつに斬れこそ心しづまりにけれ

むなしくて家にあるより己が身し谷に打はめ死なん勝れり

屋のうへに霜か置くらん藁を打つ我が槌のおと冴えまさるかも

ひときれの堅きもちひをあかがりの手に取りもちて歌をしぞ思ふ

うもばたの高きうもの葉おく露のしろき朝けに米とぐ我れは

つづりさせさせちふ蟲も我が家に鳴けばさぶしきものにぞありける

はしきよし少女なりせば泣ける面しろきものもて塗り消たましを

やれごろも著つつ恥ぢざるますらをの子路ちふ人も尊きろかも

十字の木われ先づ負ひて世人みな殺さんと云ふ市なかを行く（以下明治末年までの作四十七首）

時計屋の時計の針のさす時のみなちがへるもうつせみの世ぞ

高光る日のいきほひに思へども心は早くたそがれを知る

二時ごろの夜の空氣にほとばかりさびしく泣くはどこの汽笛ぞ

あるときの我が喜劇にはかの人のつれなき女も役だちしかな

わが指のあまきを嘗めてあるときも身の卑ければ人に嗤はる

たはぶれに悪者の童ひとすぢの纜を引きたる我が行手かな

この男ふかきこころの有りて無しふとせしことに溜息をつく

秋の雨初戀よりもいやまさる痛きわかれのこころに徹る

かなしみは裂けし芭蕉の葉を越えてしろき硝子を打ちぬ夕暮

この鵠空より行かずうつくしき少女とありぬ泉のほとり

かの空に似たるむなしき怖ろしき大虚言を書かんと願ふ

手をとりて泣きくづれたるけしきかな亂れし草と朝のしづくと

萩の花はつはつ咲きて蟀なく九月の二日母の日は來ぬ

われあたらおほみひかりのなかにゐて花にあらねば匂はざりけれ

かなしきは淺草寺の本堂のとびらしまりて火のともる時

をかしくもみそか男の立つごとく我が立つ軒に霙したたる

皮ころも虎斑のなかにうづまりて寢ねて笛吹くましろなる人

あめつちを愛しとぞ思ふわづかにも君を見ぬ日の氣まぐれにのみ

川おちて海に入るかた光さし白き霧たつ夏のあけぼの

行方なき人と云ふこそ悲しけれ天つしら鳥飛ばましものを

與太郎か失物をしておどろけば目じり下がりぬ喜ぶがごと

別れをば惜む女にもふみ書かず遠き流離の國さして行く

思ひ出でてひとりふたりや歎くらんしら菊さけば我が旅のため

たそがれの神戸の街の山の手の白塗を見て大船の泣く

あるときのかの人の頬を見るごとく紅き帷を透けるともしび

わたつみの浪のきざはし朝東風に紅き領巾ふる帆の少女ども

草高くなびける末に白かりし遠山消えてゆふだちきたる

床ちかく鏡は据ゑじ我が歎く太息の白く觸れもこそすれ

わが手より空にのがれぬ嘴あかく鳴く音身にしむ鳥なりしかな

わがなみだ野分のなかにひるがへる萱草の葉の雫の如し

うまごやし踏めば濡れつつ香を立てぬ霧にまじれる朝月夜かな

青だたみ朝の素足のここちよき殿の御内にうぐひすを聞く

そのむかし少年にして師の大人の後ろより見し秋萩の花

山のかぜ凍りて寒し草焼けば青きけぶりに薄みぞれ降る

觸れがたくこちたき枝に木瓜の花こぼるるばかり赤き花さく

かの君は眞しからぬなぐさめも聞きよきほどに語りけるかな

長き壁あかく爛れし夕やけに一列くろき牛もだし行く

なたまめの煙管のやにをじいと吸ふこの氣持をば油蟬なく

大濱の五町がほどをくろくして網ほすうへの初秋の月

わが夢をひじり占へ東海に飲まんとすれば鼠となりぬ

手間ゆのがれし神のごとくにも愛でのあまりに失ひし君

いろいろに雲ちぎれ飛ぶ初秋の野分の空に富士も吹かるる

路次のおく酢倉の裏のくらがりに盲人のごとく泣ける三味線

二日ほど家を明くればさくら草しをれて泣けり妻のたぐひか

かのをとこそのをんなとて指さゝる淸十郎の戀ならねども

ねがはくは若き木花咲耶姫わがこころをも花にしたまへ

白金抄

與謝野晶子

木蓮の散りて干潟の貝めける林のみちの夕月夜かな

ただ一人柱によればわが家も御堂の如し春のたそがれ

ありと聞く五つの戒の一つのみ破りし人ももの歎かる

天人の一瞬きの間なるべし忘れはててんとし頃のこと

金蓮花そよ風吹けば砂山の紅蟹のごと逃げまどふかな

何れにもひたさまほしきおのれかな温泉の中冷泉の中

若き日は安げなきこそをかしけれ銀河のもとに夜を明すなど

秋風のうちとけぬごと吹くものか町の女も寂しきものを

薄の穂つひに野澤の水よりも白くめでたくひろごりにけれ

日の沈む方も見えずて暮れ行けば心さびしき山莊の客

いつしかと椿の花の如くにも繋がれてゐし君とわれかな

身の半沼に卷かれ寂光の世界を見るも戀の不思議ぞ

樂みを極めしのちの人のごと寂しなど云ふわれもはかなし

今知るはつひに天馬の馳せ入りし雲の中なる寂しさにして

天地のもの皆われを思ふなる證見すれど慰まぬかな

きりぎしの椿の花のあぢきなし紅を寄すは百尺の下

紫の盛りの藤とおとろへし藤とむかへる蛇骨川かな

うら寂しところどころの剝がれたる築地の如き五月雨の空

妙高の裾野の道は廣けれど中に藻のごといたどり茂る

ほととぎすわが赤倉にこし日より亂れ心となりにけらしな

閨を吹く妙高おろし烈しけれ戀も恨みも
これに譲らん

高茅が反橋あまた懸けたれば渡りて行か
ん戸隱山に

草中に白樺立つや上林雲がのこせるみ
なし兒のごと

秋風や千曲の川の船橋はたなごころほど
中低くして

物見臺さることながら目を閉ぢてわれは
木の葉の散る音を聞く

夕方は霜枯時の朝よりも雁など渡り若や
かに暮る

いさり火は身も世も無げに瞬きぬ陸は海
より悲しきものを

網乾しぬ梅蘭芳の輕羅よりかしこきもの
をもてなすやうに

この度は犬吠岬の燈臺の冷きいろにおど
ろかずわれ

ひるがほは何處に見てもわが脱ぎし衣と
覺えてあはれなつかし

藻の寄りぬ思ひの根など云ふもののさま
にもつれて哀れなりけれ

山の雨溪へ落つれば音もせずなほ雲との
み呼びてあらまし

御空より半はつづく明き道なかばはくら
き流星のみち

戀と云ふ身に沁むことを正月の七日ば
かりは思はずもがな

濡れてあり命傾くあかしとは思はれが
たき熱き涙に

人の子は岸の砂湯に埋もるる新湯の川に
月埋もるる

かはほりの羽をもちたる山ありて溪をお
ほへり月上れども

象の背に隱るる如く河原なる石の窪湯に
人かくれけり

大空の光がわたる輕さもて山をおほへる
秋の穗薄

飛び立たんさましたりし朝の山襞のや
うやく濃くなりにけり

人切りて木の倒れ行くここちして悲し長
尾の山の落日

共に居て落葉のやうにうち解けぬ心をも
たば寂しからまし

しかすがに右左より散りかかるおち葉に
逢へば心華やぐ

銀杏葉をたくはへたれば溝川も人の手箱
のここちこそすれ

内房に淺き綠の羊齒の葉をとりいれし夜の雪の音かな

伊豆の奧天城の山を夜越えぬ淋しきことになれはてぬれば

片側の長き溪川夕月が流す涙のここちこそすれ

雪と云ふ他界のものの勢ひにけおされぬらんはかなかりけれ

雲の峰ありとあらゆる蟬の身に熱の發して鳴き出づるころ

なつかしや文を給はず恨めしやなど云ふはても寂しからまし

尼君の黑きころもは身じろぎにそよとも鳴らずいみじかりけれ

散るをのみ見て沙羅の木の榮華をば眺めぬこともさびしかりけれ

もろしてふ沙羅の花をば手に取ればことわりのまま萎れけるかな

潮鳴る音にくらべて寂しけれ樹海の風は一しきりにて

ひなげしは夢の中にて身を散らすわれは夢をば失ひて散る

ひなげしが飲みしめでたき藥をば人も服してその毒に死ぬ

わが都火の海となり山の手に殘るなかばは燒亡を待つ

大地をば愛するものの悲しみを嘗める九月　朔日の天

空にのみ規律殘りて日の沈み廢墟の上に月上りきぬ

鈴蟲がいつこほろぎに變りけん少しものなどわれ思ひけん

こほろぎが清く涼しく鳴きいでぬ雲の中なる奧山にして

故ありて苦しき人とゆゑありて樂しき人となりにけるかな

昨日の榮華の屑の身なりとも思ひなさまし寂しきに過ぐ

夕立にてまりの花の濡るる見てゆあまなほしくなりにけるかな

風吹けば見え隱れすれありしのちの京の灯も船の灯のごと

あぢきなし夜におされて地に近く點る灯がちとなりし東京

薔薇を嗅ぐ蘇りたるあかつきの大氣もこれに似んここちして

連山の襞の一つに觸れも見で淺間の丘に寝るあぢきなさ

平野萬里

沓掛にて作る

月いまだ登らざるこそ淋しけれ黒紫の山の輪廓

赤倉にて作る

透きとほり硝子のごとき風吹けば分けても高き山の水音

路廢れ乾きて白し虎杖の莖を動かす秋の風かな

信濃より越後の谷に湧く雲をあまねく照す月あかりかな

上林にて作る

山五つ背景にして夕方の澁の河原の遠白きかな

山の壁迫るところは翡翠の羽の色して暮方となる

山の皮四角に剝かれ乾けるに風のあたるがあはれなるかな

伊豆山にて作る

雨となる大つごもりの我が寢ぬる枕の下の海の音かな

海の雨止みぬとおぼし既にして水際の石白く乾けば

湯のけぶり樓をのぼるを切り放ち海の風吹くあさぼらけかな

夕陽をうしろの山に隱したる熱海の海の白き上面

湯ケ原にて作る

棚の上に羽根を載せて春を待つ湯ケ原の日は曇りたるかな

淋しさを徒にて山を越ゆる子はみづから知らぬ足音は知る

青根にて作る

山の色心を撫づる手さはりの忘れかねたる遠山の色

鳥鳴かず靜まりかゝる秋の日の花房山に生ひ茂る草

陸奥の山の芝草青みしだき行くへも知らぬ我が心かな

雲白く藏王の山の横顏を隱しあらはし初秋の來る

國見れば國のをはりに遠白く阿武隈川の見ゆる秋かな

立ち枯れし雜木が白く山々の線に筋を入るる初秋

諏訪にて作る

信濃路の影繪のごとき富士山の肩に光りぬ曉の星

氷とも霜ともつかぬ色をして明るくなりぬ湖の朝

鹽尻にて作る

山の上の天つ風とも云ふものに追はれて散りぬ雪雲の粉

輕井澤にて作る

乘鞍や桔梗が原を見おろかす峠の芝は枯れにけるかな

路ばたに灯をかかけたる月見輒信濃の空の有明の月

野澤にて作る

いたづらに雲は蒸せども雨降らずこの物憂さを湯さへ洗はず

山の風吹き來と思ふおなじ時山を越えしや夕立の雨

歸るべき五時は迫れど雨止まず憂き世の山に雷鳴止まず

碓氷峠にて作る

下界より一段たかき信濃とて牧場のごとき青き國かな

草哀山莊にて作る

林には鶯來鳴きこなたには水の音する君の家かな

朴がしは日陰をつくる山莊の水に添へるは山百合の花

先生の目を樂ませ言ふまでも無きことながら山百合の花

仙石原にて作る

山の上二尺ばかりに借りものの月のかかれる寒き朝かな

山あはれ黃ばみて淋し鶴一つ晴れたる空を翔けよと思ふ

遠く立つ大涌谷の煙さへ寒さを一つ加へしごとし

湖尻に落つる夕日をとどめ得ずこれよりまたも嚴寒きたる

しかすがに南京城の壁よりも高き足柄風を防がず

風當る金時山を見守れば冬うづだかし到るところに

山風の聲に從ひこごまれる足柄山の榛の木の枝

霧立てて湯船の末を流るるは我を出でたる惡か寒さか

枯草に天鵞絨の艶あらしめて牧場を渡る朝の風かな

足柄に雪降り出でぬ天球の十の七つを雲占めし時

湖の音權現道をなかば行き左に聞くは山風の音

高原の茅萱が上に日を浴びて思ふはやはり人間のこと

淺綠山笹原のふくらみを裸の富士がのぞく朝かな

高村光太郎

海にして太古の民のおどろきをわれふたたびすおほ空のもと

おほ海のまろきが中に船ありて夜をみ晝を見こころおそれぬ

地を去りて七日十二支六宮のあひだに物の威をおもひ居り

おほきなる力とあつきなぐさめと我に來たかき空をみるとき

秋たつと音する風はふるさとに似たる空より來てさむきかな

ああこれ山空をかぎりて立てるもの語らずおろかさびて立つもの

しみの牙の痛しともなきいたきもの心のそこを刺すしきりなる

わが耳に禽獸蟲魚極惡のせめぐをききぬ人をよぎりて

天そそる家をつくるとをみなより生れし子等はけふも石切る

かの雲をわれは好むと書きをへしボオドレエルが醉ひざめの顏

極惡のひと言をもておそろしきかかる無言をやぶりけるかな

爪きれば指にふき入る秋風のいと堪へがたし朝のおばしま

につぽんはまことにまことにせまくるし野にねそべれば廣きがごときに

みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人立てる見ゆ

しきりに櫻の幹をいそぎのぼる蟬は止まりてなきはじめたり

なきかけ又なきなほすみんみんのあかるきかなや必死のうたは

鳴きをはるとすぐに飛び立ちみんみんは夕日のたまにぶつかりにけり

ちりぢりときしる蟬の音すみゆけば耳にきこえずただ空に滿つ

天上にひびきどよもす夏の日の歌のうたひ手さびしき小蟬

だしぬけにぢぢと聲立てまた默るかなしき蟬よ籠の中の蟬

生きの身のきたなきところどこにも無く乾きてかろきこのあぶら蟬

つつましく手にはふ小蟬ぢぢと鳴きたちまちとびて青葉に入る

飛びたつとき音が手を掻きてゆきし蟬の足の力が忘られなくに

小刀をみな研ぎをはり夕闇のうごめくかげに彫刻るわれは

蟬を彫り眼たまをほれば木の蟬もぢつと息して夕闇にはふ

ひつそりと翼をさめてゐる蟬のつばさ手ずれてやや光りたり

檜の香部屋に吹きみち切出の刃さきに夏の雨ひかりたり

はだか身のやもりのからだ透きとほり窓のからすに月かたぶきぬ

ひとむきにむしやぶりつきて仕事するわれをさびしと思ふなちゐ子

熊いちご奥上州の山峡にひとりたうべてわれ熊となる

天然の湯に身をひたしわがきくは遠き地中の鬱密の聲

こつそりと母の背ながし小娘は湯氣を身に着て立ち去りにけり

かわきたる赤岩のかど湯にぬらしざぶりと立ちて腰かけにけり

あたたかき靄わき出でて身をめぐり杏仁くさき魔の國となる

よき爲事われを待つなりすかんぽのすい葉うまけれど今はかへらむ

ていねいにかさなり合ひてまんまろく玉菜のあつ葉たたまるやさしさ

誰もみな寂しい顏をしてゐるぞ深尾須磨子のわんはくさへも

どしどしと季節あらたまり風吹きてそこらいちめんに涼しきもの滿つ

米無くばじやがたらいもをわが喰はむみどりの風に身を養はむ

久しぶりに來しわが友のふところにさやさやと鳴る新らしき風

かどかどのこごしきかどをまろめよと友も師もいふ驕慢さへいふ

乳酪をつくりて生きむ蠶をうりて生きむと彼はゆきてかへらず

山にゆきて何をして來る山にゆきてみしみしあるき水のんでくる

おのづから雲こごりきて夏の夜の明神嶽の尾根をはなれず

茅野蕭々

明治三十六年より四十五年までの作(二十一首)

圓き石に屋根ふく山の家にうまれ雲と風とに男の子となりぬ

君を慕ひ鳥もあつまる森かげの小窓を蔦の鎖してけるかな

そよ風も山の木の葉も瀬の音も君が聲して暮れぬ夜あけぬ

天なるや信濃は雲の奥なるや逢ひてわかれし人をおもへば

友もしかいひぬ己れも疑ひぬさは君ゆゑに落つる涙か

我れわれを欺き得たるひと時の笑みにも熱き涙こぼるる

笑みてあひし日か涙を押へ得し苦しき日か涙ながるる

ああさなりこころの奥に住む君を白き刃に刺してばよけむ

寸ほどの人あまた來て春の夜のうたげするなり我が眠る下

眼よなどて沈む黄金の幻に見ずや我がおく生命の眞珠

音といふなべての音を聞くごとき沈默にありてもの思ふ我

かの星を空のうつろに繫ぐ絲みえざる絲の我にからまる

月見草まぼろしにゐて溜息すかなしき樂の斷間たえまに

青き貝の一葉をとりて日にかざし明日を知るてふ片目の翁

いたましき荒野のごとき心こそ新しき日をみてふるひけれ

ただ一羽群をはなれて飛ぶ鳥のさびしき心しりそめにけり

かへりみれば野に一つ立つ榛の樹の樹の生命より寂しきものを

天つ日も燒けて嘆きぬさびしくも我が仰ぐべき光あらぬを

天そそる山に來りて山みれば山さへ持てり山の悲しみ

あはれなる兒よ超人を汝が父に夢の女を汝が母に持つ

あはれなる兒よ汝が父も汝が母も未だ覺めざり誰を頼むや

大正五年までの作(二十二首)

ふるさとの戀しき山か立科か彼方の空に雪のひかるは

わかれ來てひとり思へば我が沓のうすき塵さへはかなかりけり

クリスマス近き日ごろは行人もなつかしきものを泥して雪ふる

部屋の壁あかく塗らせて鬼の面をとめの面を懸けむとぞ思ふ

おもふこと切なき時は見も知らぬ行人にさへ告げむとはしつ

しみじみと一人飯はむ夕ぐれの雪あかりこそ泣かまほしけれ

なつかしき淺黄いろなる葱ばたけ韋駄走りて土ほこり立つ(郊外の歌二首)

人ならば肌と肌とを寄せつべしあはれに秋の樹の立てるかな

手ふるれば夕日にひかる樹の幹も秋の肌の冷たかりけり

思ふこと人に告げなば嘆くらむ林に入りて樹にものをいふ

氣ちがひの如くころげて櫟の實の水に落ちたり秋しろき路

何を知り何をうなづく路ばたの木にとまりゐて我を見る鳥

竹山に夕日さし入り竹の幹あかくひかりて風たちにけり

樹は樹とて己が生命をいとなめり蟲は蟲とてそを食ひてをり

すなほなる小兒の心かへり來てぢつと見つむる薔薇なりけり(舊作十二首の中より六首)

花さうびあまりに赤く懸命にさけるを見ては身のふるふかな

張り裂けむほどに眞赤にさく薔薇ことわりせめて悲しかりけり

さうび薔薇ふかく見いれば人間の淺間しささへ汝は持てるかな

一心にひとつことのみ思ひつめ思ひあまりて散るさうびかな

花さうひさける生命をまじろがず眺むることは祈禱なりけり

みづからの短命を知りさばかりに烈しく生きし弟なりけむ(二十五歳にて死せる弟を悲む歌の中三首)

火葬場の鐵戸くろぐろと弟よ汝が棺をば閉ぢこめにけり

かなしきは命なりけり弟を燒ける骨さへ今日我が拾ふ

茅野雅子

日にひかり青田のなかにきらきらとおもちやのごとく風車まふ（信州諏訪にて二首）

風ぐるまぢつと動かずむづかしき顔してひとり入日みつむる

大なる山のちからのせまるらむ山にみほれてひくく鳴く牛（旅の歌の中より七首）

ふかぶかとすめる空かな日のてらす蕎麦の畠の上にひろごる

山と山重なりあひて大空をうちふさぐさへさびしかりけり

つややかに南京豆のほされたる庭のむしろに小犬ねむれり

快よしかなしきこともよろこびもつよく心にふるるものから

人も樹もあらしの後のしづけさに身をまもりつつ涙こぼるる（大正六年秋東京に嵐ありし其歌の中より首）

さけし木のいちばん上に鳥ひとついとさびしげにとまりたりけり

夜ひと夜家なりどよめく颱風のそのなかにしも蟲の鳴きゐる

人ならば如何にならまし夜もすがら落葉しつつも靜なる樹よ

秋の風西の空ふく燕われかいいろの寺の塔にかへらむ

秋のそらうち仰ぎつつ何ごともふつと忘れてありけるものを

大なる聲してよべば大なる月いでにきと子のつぐるかな

うづたかく子のひろひこし紅椿まこといづくにさきし椿か

病ゆゑもののあはれをいちはやくしりそめし子をかなしと思ふ（子の病篤かりし時五首）

やうやくに死はちかづけり今宵こそよく遊ばむと病める子の云ふ

涙さへいまはながれずくるしめる病む子の手とりこの身世になし

匂ひよきぱんを噛みつつ何故か涙ながるる朝の食卓

試みにまたわがまへに運命の投げし憂に心おののく

山川登美子

髪ながき少女とうまれしろ百合に額は伏せつつ君をこそ思へ

そは夢かあらずまぼろし目をとぢて色うつくしき靄にまかれぬ

ひとすぢを千金に買ふ人もあれ七尺みどり秋のおち髪

わが息を芙蓉の風にたとへますな十三絃をひと息に切る

人に別れ生きながらへてよめる(二首

虹もまた消えゆくものかたがためにこの地このわれひとり殘れる

歸り來む御魂と聞かば凍る夜の千夜も御墓の石いだかまし

ほほゑみて火焔も踏まむ矢も受けむ安きねむりの二人いざ見よ

獅子よ毬よみな母君にかくされて肩上あとの針目さびしき

きぬでまりましろきなりに春のきてかがる色絲みなもつれたり

われ無しや有りや母よ只小雀女の二尺の空を飛ぶほこりだに

わが死なむ日にも斯く降れ京の山しら雪たかし黒谷の塔

いま殘るこの半生はわれと我が葬る土ほる日かずたるかた

目を開く奇し御藥や賜びにけむ今日萬物の美しさ見る

灰色のくらき空より雪ふりぬわが焚く細き野火を消さむと

父君の喪にこもりて(四首)

わが胸も白木にひとし釘づけよ御柩とづる眞夜中のおと

御輿舁く白きころもの丁たち藁靴はきぬいかがとどめむ

雨氷するゆふべの谷に泣きからし呼ばば御靈をふとか聞くべき

たのもしき病の熱よまぼろしに父を仄見て喚ばぬ日もなし

ながらへばさびしいたまし千斤のくさりにからみ海に沈まむ

おつとせい氷に眠るさいはひを我も今知るおもしろきかな

香川不抱 (照影無し)

風狂調

そのすがた尼によく似て尼よりも更に心の寂しき男

我を泣く鴉の聲と聞きにけり少女が下駄を路に鳴らすも

人生の底か終りか極まりか死なんとすれば心おちつく

貧しかる身なれど矮き下駄はかず死に瀕すれど祈らざるかな

我のため母はあれども母のため我は有り得でまた酒に行く

泣かしめし事と使に行かしめし事とあるのみ死にし妹

世の中の薄なさけにもことごとく涙を持ちて答へけるかな

天地をくつがへす程とどろきて針の先ほど光るいなづま

カメリアを吸ふ先生を思ひ出し敷島を置きカメリアを吸ふ

我が行けば必ず我を映しけりかの硝子戸ぞ君にまされる

四つ辻に出會ひてあれど君の目に我は附かざり空氣の如く

からかさを高くかかげて仰のきて歩きてあれど寂しき人ぞ

かの君に見すべき折のつい無くてわが美きこころ失せなんとする

何もかも足り餘りたるかの君を誘ひ出だすはむつかしきかな

わが胸を傷つけずして快くかき裂くものは音樂のみ

美しき男にのみは風吹かずわれの肩にも花ちりかかる

失ひぬあらゆるものの慕ひ寄る日なたの如きわれの心を

燐寸をば十本ばかり取り出だし何か占ひ出て行きし父

われもまた暗き所は手を振りて男らしくも歩き得るかな

猶すこし去年の夏の夏痩の殘りてあるにまた夏の來る

北原白秋

春（十六首）

黄の蜂の林に住むは幽けかり落葉松も芽ぶきそめにし

うち響き山のこだまのけざむきは唐松の枝扱き放つらし

碓氷嶺の南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを

深山路は鶯きやすし家鳥の白き鶏に我が遭ひにけり

山路来てひたすらひもじ路の葉に滿ちあふれゐる光を見れば

春眞晝向つ山腹に猛る火の火中に生るる色の素さ

春山の尾根もとどろと燃ゆる火のたちまちさびし消ゆらく思へば

裏丘の椿枝がかげの花すみれ乏しくは咲けど咲ける皆濃き

まだ白き野火の煙の春じめりゆふべは靄にこもらひにけり

春あさみ背戸の水田のさみどりの根芹は馬にたべられにけり

霧雨のこまかにかかる猫柳つくづく見れば春たけにけり

鞠もちて遊ぶ子供を鞠もたぬ子供見ほるる山ざくらばな

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ

咲けとていまはた目白僧園の夕べの鐘も鳴りいでにけむ

いつしかに春の名殘となりにけり昆布乾場のたんぽぽの花

夏（十五首）

定齋のきしみせはしく橋わたる江戸の横網鶯の鳴く

水車船瀬々にもやひて搗く粉のしろくかそけき夏も去ぬめり（木曾川）

眞日中をとわたる月の臈たさよきのふもけふも海は荒れつつ

日はかすめ清にこごしき妙義嶺の檜山のなだり夏たちにけり

香ばしくさびしき夏やせかせかと早や山里は麥扱きの音

晝ながら幽かに光る螢ひとつ孟宗の藪を
出でて消えたり

日のさかり村かたつけば株だちてまだ
柔かき箒草のいろ

紫蘭咲いていささか紅き石の隈目に見え
てすずし夏さりにけり

寂しさに堪へてあらめと水かけて紅き
生薑の根をそろへけり

雨ふれば青きみ空ぞなつかしきその青空
も寂しと思へど

うつらうつら海に舟こそ音すなれいかな
る舟の通るなるらむ

天の川棕梠と棕梠との間より幽かに白し
闌けにけらしも

新らしき野菜畑のほととぎす背廣著て啼
け雨の霽れ間を

病める兒はハモニカを吹き夜に入りぬも
ろこし畑の黄なる月の出

手に取れば桐の反射の薄青き新聞紙こそ
泣かまほしけれ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとし
く寢て削るなり

秋（十六首）

かぎろひの夕月映の下びにはすでに暮れ
たる木の群が見ゆ

はらら飛ぶ小禽あはれと見つつゐて病葉
おほき木々に驚く

植ゑまぜて撓りよろしき秋草の花の盛り
を見て遊ぶなり

この庭の日の照る方に咲きむれて紫苑は
うれし秋づきにけり

影面の棚田の狭霧らがなしこのごろ聽
けば刈り繼ぎにけり

草深野月押し照れり咲く花の今宵の蒼み
滿ちにけらしも

朝かげのおもてに見れば山松や全くしづ
けく秋めきしかも

茅蜩の啼き出るきけば眉引の月の光し白
みたるらし

目にたちて菊は白けど置く霜の紫の凍
み光りこもれり

乏しくも今は足りつつ茶の花のにほふ
隣を樂しみにけり

おのづからうらさびしくぞなりにける稗
草の穂のそよぐを見れば

枯れ枯れの唐黍の秀に雀ゐてひようひよ
うと遠し日の暮の風

華やかにさびしき秋や千町田の穂波が末
を群雀立つ

寂しさに秋成が書読みさして庭に出でたり白菊の花

木々の上を光り消えゆく鳥のかず遠空の中にあつまるあはれ

ひいやりと剃刀ひとつ落ちてあり鶏頭の花黄なる初秋

（冬十五首）

薄野にしろくかぼそく立つ煙あはれなれども消すよしもなし

松風のしぐるる寺の前どほり通る人はあれど日の暮のかげ

目に見えて冬の日遠くなりにけりきのふもけふも薄く霙して

田末わたる時雨の雨は幽かながら初夜過ぎて出づる月のさやけさ

ぼつぼつと雀飛び出る薄の穂日昃まぢかに眺めてゐれば

石庭に冬の日のさしあらはなりまだ凍みきらぬ青苔のいろ

椎の根に薄日さし入る暫の間は冬も幽かに美しくして

木の間洩る冬の朝日のすがしくて時ならぬ土のかをり息づく

朝凍の大野の霜となりにけり早やあざやかに冬菜積みたる

ほろほろと行くにくづる崖の土こごりきびしき霜ぞ立ちたる

まれまれに椎の葉にもつたまり日も照りは反さず冷えまさるなり

大王の行幸かあらし旗立てて雪の御門を騎馬出づる見ゆ

君かへす朝の鋪石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

ふくらなる羽毛襟巻のにほひを新しむ十一月の朝のあひびき

日も暮れて爐の實探りのかへるころ廓の裏をゆけばかなしき

（大正天皇を悼み奉る歌六首）

冷えとほるほどろの霜や冬青の葉の垂葉のうごきゆらぎやみたる

現神天皇にましましてなほし常なく坐すが畏さ

すけく常は坐さずも大御命長く坐せよと仰ぎしものを

ほがらけき崇きたふとき大御業つがせたまひき短かかりにき

石の面にいやさむざむと日はかげりたづき知らずも生ける蟻匍ふ

冬木の根に凍む土の張り乾きからうからうと響く道を行くたり

河野慎吾

その折ふし

ひひらぎの刺もつ枝もやはらかにけさ淡雪のふりそめにけり（春九首）

あさあさの光すがしも青空に沁みてひろがる白梅の花

日にけにみどりのりくる楓のねたましきまで滴らむとす

楓の目立たぬ花をいとほしみ手にとりて見つそのこまかさを

さやさやにみんなみ吹けば藤浪は揺れこそあまれその藤浪を

水ぐるまかたりことりと音のして夜もすがら何を搗くにやあらむ

ふる雨に音たつるまであさみどり芭蕉の玉芽ほぐれけるかも

あはれ春もこれが終りか蠶豆の鐵漿くろぐろと染めてゐにける

春蟬の一つ二つが鳴くこゑに藪の竹の子伸びもてゆくらし

朝のまのひかげ涼しみ井戸のべに蜆の泥をはかしめてをり（夏三首）

あぢさゐのうつらふ見れば燕のみなみへかへる日も近からむ

ゆゆしくも雨過ぎしかばさ庭べの百合はしどろに亂れてあらむ

秋の野に遊べる馬の尾にふれて眼ざむる花もありと思はむ（秋四首）

芭蕉葉にときのま雨をこぼしたる夕べの雲はしづまりにけり

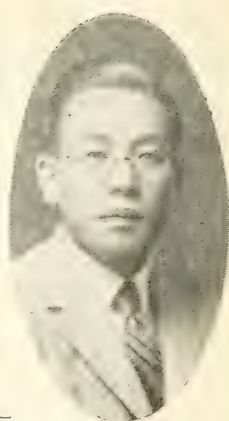
秋ふかし何におどろく青鷺の水の上ひくく脚さげて飛ぶ

羽ばたきて飛びたつ鷺のかげ寒し水のおもてにしましうつらふ

呼びかへす寒鯉賣は音たてて庭の落葉を踏みにけるかも（冬四首）

一本の竹にあつまる木枯のさむざむとしてさ夜ふけにけり

われさへやこころ寄るらし霜氷るさ庭のま竹こゑ冴ゆるなり

日ごろうとき隣の人も聲かくる雪のあしたのおもしろきかな

村野次郎

いつしかに春來るよと庭の面に流らふ光ふみてあゆめり（春來る六首）

薔薇の芽のうすくれなゐに春雨のしづくするほど降りいでにけり

めさむればさ庭の土に春の雨音なく降りゐてもののこほしき

春のあらし明るく吹きて松の葉のこぼれてゐたるここの障子に

春のあらしすぎしなごりの松の葉に光しづけき朝づく日かも

歸り來し水邊の道の夕あかりひくくしのびて楮芽ぶけり

慕ふべきもののむなしさ鷄頭の花さへすでにうら枯れにけり（秋より冬へ六首）

障子にうつる干柿の影うそ寒し秋の日あしのつづまりにつつ

水甕に漬けておきたる根山葵の青きも今朝は凍りたるかも

夕ぐれは玻璃戸にかかる冬雨のしづくすらさへうらがなしけれ

いましがた霰こぼしてゆきし雲の寒々として夕燒けにけり

ははき木を立ちし群鷄冬空に吹かれてさむく飛び散りにつつ

うつけ居しわが身にちかく腐れ柿落ち來し音に驚きにけり（をりをりの歌四首）

氣ぬけしてわれは居しもよくらがりのあたりには蚊がなきて居しもよ

ながうれひとかしがたく對ひ居て今日も夜となりこころはうづく

くるほしき一夜はすぎて朝光にまさしくわれの立ちて歩める

いささかのいとまを持ちて山の湯に來りて遊ぶさみしかりけり（山の湯四首）

つかれつつ宿にはつきぬ湧ける湯のにほひまがなし土間のくらきに

湯あみどに晝のひかりのあらはにてうつそみの肌のあをく怪しき

いはけなきはかたさならむ眼をつむり湧く山の湯を口にふくむに

酒井廣治

うろくづ

谷地蕗の花ひそかなるこの澤にうろくづいまだ上らざるべし

わがこゝろなごむとすらむ山の湯はくさむらなかに澄み透りたり

山くだる人におくれしわれながら惜しむ花ありひとりごころに

灯のもとに釣りてすがしき青蚊帳を朝々たゝむ夏さりにけり

ゆふべやる馬の飼葉にたゞひとつまじりてゆかしひる顔の花

八ツ手葉の庭に陰なす梅雨じめり蚯蚓は土を吸ひてをるなり

うら成りの青き南瓜ものこされし山の畑に霜いたるらし

谷みづを引ける筧は水垢のなめらかにして音澄みにけり

日の暮れの暗き廊下を下婢がはこぶランプのかげうつりくる

霜ふればいよゝ冴えゆくもみぢ葉の束の間にしておとろへにけり

玻璃瓶に生けらく乏しうろくづの日ねもす沈む寒さいたりぬ

うろくづの動かぬまゝに玻璃瓶の夜ごと明るきかたに寄りゐつ

溝板を越えて露路口出でしとき電車はしりぬひろき通りに

用ありて抜きし書棚の書の上のしろき埃を吹きてはらへり

まさ目には見ゆることなししかすがに面影そこに立つ思ひあり（弟の死四首）

うつし世はさびしけれども享けがたき命なりけりふたゝびはまた

軍服のまゝ子をあやしつゝ日曜の家居たのしみし弟あはれ

身ひとりのうれひはあれど年まねく子を育てつゝ思ひますべし（義妹に）

隠しもちてたまたま獨りもの食めりこどもにかへるおほ母あはれ

をさなどちいねむとしつゝむつまじく兄弟なれや末を眞中に

穂積忠

山間遊歩抄

山ゆくと面にしみ照る日のかげのいささか痒き春は來にけり

山ゆくと靜かすぎたり日面の枯枝にしろき四十雀の糞

消え殘る澤邊の雪に子らは手を大きく抑して去りゆきにけり

朧めくこの谷深くひとり來て淀の水泡をわれは見にけり

楤の芽にをりをりほめく月あかり谿まの雲は流れつつあり

この谿の朧夜ふかくなりにけり廐の庇の鶯のかご

首のして雲の影追ふ懸巣鳥たのめなきもよ春ふかむらし

この山の安けさみたり日だまりに木を樵る杣が背中の木屑

山深く來つつ悔なししみいづる木膚の樹脂に手はふりにけり

山に來てわれは見にけり冴え冴えと曉露にぬるる杉の果

山かげにきほひ啼きたつ鳥のこゑ曉近くなりにけるかも

澤のべの日莫安けきものの影つややかに蝦蟇も出でて遊べる

青蛙こもり鳴きつつ青草の日向のそよぎ秋めきにけり

雨の日は自づ垂れつつ白萩の映えよろしもよ塀にかさみぬ

秋ふかむ山下川にゐる蟹のひそけき泡を見て來たりけり

熊つれて膽を賣る人等とほりけり冬を愛しむ村となりぬらし

つつましきものをぞ見つる川床に雪をかづきてまろむ石一つ

冬ふけてしづ心なしこの日頃うさぎの羂も背戸にかけたり

雪の山の道おのづからあはれたり猪は猪の道杣は杣の道

雪降れば驚くことも時たまあり昨夜は猪出て麥あらしたり

吉井勇

かにかくにいとにこやかに親しみぬ薄なさけびと深なさけびと

七人の子がうつされてありしごとわれ映されぬ君が瞳に

君おもふ子なれどをかし或るときは嚢家に入りて骰子なげしかな

よその子を思ひうかべてある時と知らでわれ凭る君が腕に

その夜また身に染むことを君に聽く沈丁花にも似たるたをやめ

かりがねは空ゆくわれら林ゆく寂しかりけるわが秋もゆく

夏は來ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ

夏の帶砂のうへにながながと解きてかこちぬ身さへ細ると

君がため瀟湘湖南の少女らはわれと遊ばずなりにけるかな

船大工小屋の戸口にあらはれてわれらを笑ふ晝顏の花

海に入り浪のなかにてたはむれぬ鰭の廣もの鰭の狹もの等のごと

砂の上の文字は浪が消しゆきぬこのかなしみは誰か消すらむ

伊豆も見ゆ伊豆の山火も稀に見ゆ伊豆はも戀し吾妹子のごと

なでしこや大佛道の道ばたに君の棄てたる貝がらの咲く

草土手を蜥蜴はしりぬわが君の足の音にもおどろくものか

悲しげに海邊の墓のかたはらのなでしこを摘みかへりたまひぬ

かの宵の露臺のことはゆめ人に云ひたまふなと云へる君かな

酒の國わかうどならばやと練り來貴人ならばもそろと練り來

杯のなかより君の聲としてあはれと云ふをおどろきて聽く

酒を見ていかにせましと考ふるひまに百年千年過ぎなむ

戀がたき挑むと云はれおどろきし弱き男も酒をたらべぬ

な戀ひそ市の巷に醉ひ痴れてたんなたりやときたる男を

博打たずうま酒酌まず汝等みな日をいただけど愚かなるかな

薔薇の香にほひきたりぬわかうどが涙ながしし物語より

すかんぽの莖の味こそ忘られねいとけなき日のものの悲しみ

珈琲の香にむせびたる夕より夢見るひととなりにけらしな

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも萬葉集の歌ほろぶとも

いづれともわかなく君はながむらむ鎌倉の海長崎の海

鎌倉の海のごとくにひるがへる青草に寢て君を思はむ

宗演はなほすこやかにわれを見て笑ひたまひぬ戀はいかにと

酒にがく女みにくしこのごろは心しきりに獅子窟にゆく

死ねと云はば死にもやすらむかかる夜のかかる心のみだれし時は

紅燈の巷にゆきてかへらざる人をまことのわれと思ふや

夏ゆきぬ日にかなしくも殘れるは君が締めたる麻の葉の帶

悲しくもみづから棄ててあることをさばかり悔ゆるわれと思ふや

秋風はつれなやこよひつくづくとわれの見つむる紅燈をふく

いささかの未練はのこれ野晒となる身のはての何を思はむ

廷升は歳ゆき荷風世を遁れわれのみひとり人を戀ふるや

尋あまり何を書きけむ戀しやと云ふ文字のみは目に殘れども

風の音に耳かたむけぬかなしみにわれも吹かれて飛ぶここちする

わが机海に向ひて据うるときすこし明るきここちこそすれ

世にそむき君にそむきてわれひとりいきどほろしく向日葵を植う

わが家に君來ずなれば冬がまへはやくもするや鎌倉の里

秋の夜はものぞなつかし夜毎ゆく銀座通りの好ありきかな

人の世の旅のなかばもはや過ぎぬ戀ふた
つ三つ失ひし間に

戀知らず情知らずのかのひとは卑し首
陀羅の娘なるべし

かにかくに祇園は戀し寢るときも枕のし
たを水のながるる

病みあがり吉彌がひとり河岸に出で河原
蓬に見入るあはれさ

ゆるやかにだらりの帶のうごく時はれが
ましやと君の云ふ時

一力のおあさに聽きしはなしよな身につ
まさるる戀がたりよな

かより合ひ頰で合ひたる雜魚寢びと遊び
倦きたるあけがたの月

かなしみは蓬の香よりきたるなりおれん
なゆきそ加茂の河原に

世之助が大原の里の雜魚寢よりわれの雜
魚寢はなまめかしけれ

鞍馬より天狗風ふく夜もあらば抱かれて
寢むと君は云ふかや

島原の角屋の塵はなつかしや元祿の塵
享保の塵

菜の花の花のさかりや傾城のたましひの
ごと蝶ひとつ來る

寂しければ大德寺にもゆきて見つ時なら
ぬ雪降るがまにまに

一力のはなやかさよりこの秋はかの落柿
舍の寂しさにゐむ

秋の風馬樂ふたたび狂へりと云ふ噂など
つたへ來るかな

うつらうつらむかし馬樂の家ありしとこ
ろまで來ぬ秋の夜半に

ありし世のありのことごとしのびつつ馬
樂地藏に酒たてまつる

三日月は黃楊の櫛より細かりき馬樂を訪
ひし夜のおもひで

秋の夜に紫朝を聽けばしみじみとよその
戀にも泣かれぬるかな

盲目の小せんが發句を案じゐる置炬燵よ
り悲しきはなし

いにしへの防人たちも筑紫路に來て嬬を
戀ふ歌をうたへり

ぎやまんの大杯を手に取れば寬濶ご
ころおさへかねつも

消えて往なむ日本も住み憂しとなげく
子を見ぬ長崎にして

白秋とともにとまりし天草の大江の宿は
伴天連の宿

石川啄木

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

×

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

×

目さまして猶起き出でぬ兒の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

×

たはむれに母を背負ひて
そのあまり輕きに泣きて
三歩あゆまず

×

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

ふと深き怖れを覺え
ぢつとして
やがて靜かに臍をまさぐる

×

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に會ひしに

×

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

×

ダイナモの
重き唸りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

×

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

×

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
ぢつと手を見る

×

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ

×

ある日のこと
室の障子をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

×

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ來て
妻としたしむ

×

何事も金金とわらひ
すこし經て
またも俄かに不平つのり來

×

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

×

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

×

盛岡の中學校の
露臺の
欄干に最一度我を倚らしめ

×

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聽きし雀の鳴くを
三年聽かざり

×

あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

×

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

×

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

×

わが思ふこと
おほかたは正しかり
ふるさとのたより着ける朝は

×

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の蟲こそすずろなりけれ

×

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

×

友われに飯を與へき
その友に背きし我の
性のかなしさ

×

わかれ來てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頰をつたへり

×

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照せり

×

手套を脫ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり

×

朝の湯の
湯槽のふちにうなじ載せ
ゆるく息する物思ひかな

×

新しき本を買ひ來て讀む夜半の
そのたのしさも
長くわすれぬ

×

赤紙の表紙手擦れし
國禁の
書を行李の底にさがす日

×

ほそぼそと
其處ら此處らに蟲の鳴く
晝の野に來て讀む手紙かな

×

夜おそく戶を繰りをれば
白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

×

あはれなる恋かなと
ひとり呟き
夜半の火桶に炭添へにけり

×

二三こゑ
いまはのきはに微かにも泣きしといふに
なみだ誘はる

×

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
凩よりもさびしきその音！

×

旅を思ふ夫の心！
叱り、泣く、妻子の心！
朝の食卓！

×

何となく、
今朝は少しくわが心明るきごとし。
手の爪を切る。

×

手も足もはなればなれにあるごとき
ものうき寝覚！
かなしき寝覚！

×

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、
ときどき我の心を通る。

×

新しき明日の来るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど——

×

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる満足が
今日の満足なりき。

×

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
元日といふに
うとうと眠し。

×

そんならば生命が欲しくないのかと、
医者に言はれて、
だまりし心！

×

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寝台の上にそつと来て乗る。

×

寝つつ読む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

×

ふるさとの寺の畔の
ひばの木の
いただきに来て啼きし閑古鳥！

×

新しきからだを欲しと思ひけり、
手術の傷の
痕を撫でつつ。

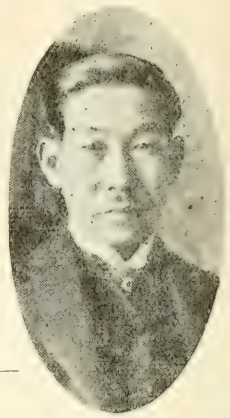
×

やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。

×

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

×

猫を飼はば、
その猫がまた争ひの種となるらむ。
かなしきわが家。

生田蝶介

野をいゆきかろきつかれに若草を妹とし敷けば日のありがたし『寶玉』より（四首）

月光のあまりしづかに胸にさす泣かじと濱に出たりしものを

今日もしもいのちしづかにありけるとおのづとわける感謝のこころ

うちつづく山脈越えて峯より峯に風をさぶしみ渡るわれかも

あきらめの瞳に紺青の海の色うつりて若さつよまりてくる『凝視』より（二首）

せんなき別れあきらめかねてたもとほるここな小川に澄める青空

打ちよせてわきたちかへる土用浪九十九里濱とどろきにけり『旅人』より（十一首）

よりそひて咲けばさびしき秋の草こぼれて咲けばさらにさびしき

濡れふかむまだきの露の萩原をわけゆく妻に晴るる高原

いづくにか音たてて散る落葉ありひそまりふかき山の林に

ふところの時計の音に山の氣の澄み渡りつつ樹々しづかなり

懸巣鳴く山のおくどの楢林うらさむくして瀧の音きこゆ

駒ケ嶽のふもと廣原松林坂にかかりて霧に吹かるる

草にねて草の心となりにけり陽にしたしみて思ふことなく

よき人を心にもてばたぬしさのおのづからなる日もありにけり

朝風の色とこそおもへよせてくる波のおもてのその水あさぎ

わきたちかへるおもひこそあれしかすがに心しづめて見る水のいろ

かたりつつあぐる瞳に夕凪の海はいつしか月夜となれり『渦潮』より（一首）

白萩の庭はあやなし宵暗にまぎれてひとの唇あつかりし

くだりくる人松籟のなかにありかへりみすれば夕月のかげ（十四首にて）

富田砕花

雲とその雲が投げたる影ありて高原のひるのしづかなるかな

山皺に大きく雲が投げし影うごかずわれは落葉松に凭る

鉦たたく音かとも石を切るひとのはるかに小さしひろの河原に

山はくろくはたむらさきに暮れゆくに默々として耕せるあり

はるかなる夕川べりに立つけぶり水かとも見えてなびくぞかなし

われのみかあわただしさは夕雲もおなじこころに嶺を過ぐるなる

草青きうへの秋川のぼる帆の風ははらめどうごくとも見えぬ

あかあかとされどちからのなき夕陽草青きうへの秋の虹かな

仰ぎ見ればやまもやまとて雲わけり百五十里のはてのうまや路

秋は來ぬ青きがままの野よ山よ旅びとにこの日泣けと強ふるや

月がながく投げしおのれの影にさへ心痛みき旅なりければ

置きわすれゆかむとしつる沙のうへの皮手袋を吹ける海風

野の遠にやがて名殘も見せぬまであわただしかりき冬の落日

たなぞこにのせえむほどのやまの町いま脚もとにひろげられたれ

やまなみの波折のかぎり月あかくてらして飛驒ぞ靜まりて居れ

あかるさのうちに愁の影見するそらをうつして秋の水逝く

落日に向ひ大きく手をひろげ身を投げかけむ春徂く春徂く

からまつの實のかさかさと鳴りながら風吹くなかにさびしくもあるか

太陽は地平はるかに匂ひ居れ野に立つひとに涙あらすな

秋や秋や大きく雲のたたなはるそらの月にも涙おぼゆれ

相馬御風

いきのみのいきのいのちの愛しさや羽蟲はとべり春まちがてに

雪の上に散りて眞青き柚子の葉や雪はふりたまるまたその上に

ゆふまけていや荒れつのる浪の音の底にこもらふ海鳥の聲

佐渡が島眞野の入江は秋をふかみ波の穗しろく日に光りつゝ

心つかれながむる空のさやけきに姿を見せず鳴く鳥のある

若葉かげつがふ雀を今朝見つゝ心あかるくなりにけるかも

雪もよひの灰色空の一ところほのにあかるし日のありどならむ

ちりぢりに風にふかるゝ群鷗あつまらむとしてはまたちらばれる

子が描きしはいづこの家ぞその家の戸口はかたくとざされたるも

大空を靜かにしろき雲はゆくしづかにわれも生くべくありけり

わがふきし煙草のけむの行末をけさしみじみとながめたりけり

雨さそひ松の林をわたる風高まるときけやまたひそまりつ

松の長きにひ芽は風にたわみつゝゆれをりいまだやはらかみかも

林かげ草の葉だにもうごかぬにしづかに聞けば松風の音

うと〳〵とねむけ催すこゝろよさたまたま鳴くは濱千鳥かも

いなづまの光る束の間たか山のさびしき姿わが見たりけり

庭隅のいさゝむら萩いさゝかの雨のなごりの露をたもてり

あかときのねざめに聞けばふる雨の秋をもたらすけはひしるしも

つぎ〳〵に漕ぎいでゆきし海士小舟つぎつぎに見えずなりにけるかも

川むかひの山ふところや夕されば灯はともりたり家あるらしも

金子薫園

十歌集から

（『片われ月』から『濃藍の空』まで）

駒ながらうたを手向けて過ぎにけり關帝廟のあけがたの月

鳳仙花照らす夕日におのづからその實のわれて秋くれむとす

松かさのこぼれてさむき山かげに口笛ふくや頬の痩せし人

同じ世に生れあひたる嬉しさはわれも御弟子のつらに入りぬる（落合先生に）

水を見て君をおもひ雲を見てわれ歌おもひ秋の川わたる（結城素明君と舟を泛べて）

うすぎぬに光つつめる紅玉の花とうまれてさむし寒牡丹

卯の花の垣根ぬらして雨すぎし灯ともしごろを訪ふ人のこゑ

われとわがよわき心を嘲りぬ牡丹くづるるともし火の前

迫りくるうす薔薇のにほひあり君が御手とる野の夕月夜

牛小屋に木の葉みだれて牛啼きてミレが繪に似る夕景色かな

沈む日の光さびたるまなざしやいまはの君に掌を合させぬ（祖母の臨終に）

ひぐらしの啼きやむくれは人戀しなき人こひし裏の小林

ゆく春や薄日かげさすあみ竹の小縁にうつる金雀枝の花

ほほけては銀色なせる穗すすきにおなじ色なる朝時雨すも

朝風は遠き青葉の丘こえてわが倚る窓の花蔦こぼす

すすき野や夕べにちかき秋の日のきらめき薄う雲ながれゆく

ゆけどゆけど花ましろなる躑躅野や空には白き雲もながれて

ふもと野や林に風のはためけば粉雪ちるなり月夜ながらに

むさし野の夜の雨きかむ村住を君とねがひぬこほろぎ啼けば

市すぎや天幕はづせば紅林檎玉菜にかかるひる小雨かな

遊蝶花母に引かれて春の夜の花市に見し
灯こそおぼゆれ

山百合のかをり露するしののめの湯瀧の
上にひぐらしの啼く

向日葵の頭かたげしおとろへに小鳥さざ
めく背戸の秋の日

しづやかに梢わたれる風の音をききつつ
冷えし乳を啜りぬ

武藏野の風の夜に來て落葉のさびしき音
をききつくしけり

庭の面の青の木草はこもりあひ夕さりく
れば濃き陰をなす

夕凪の波うちぎはのひたひたにさびしき
ことをおもひつゞくる

青草のかをりに寢ねてわかき日をおもふ
に何のおもひでもなし

わが事のやうに厄日をおそれにし祖父は
まさず空のしづけさ

書くものはみな書きをへて冬の日の暮る
るに間あり雪の降りくる

ならはしの如く目ざめぬ花賣の白川いで
て來る朝あけ　京都にて（三首）

天龍寺の屋根の瓦のうへをゆく秋雲の鈍
く光りたりけり

下加茂の森をあゆみて木洩れ日の黄なる
を見れば秋とおどろく

多摩川の川原に立ちて暮れぎはの遠く明
るき山脈を見る

草山にのぼれば秋の一すぢの多摩のなが
れの白きをちかた

大漁の鰹の腹も背もひかる月夜の濱の人
のどよめき

なりはひの蜑の兒がする物眞似に釣すれ
ば章魚のかかり來にけり

口つくれば酒のにほひも苦からず暮春は
もののなつかしきかな

ぼうと鳴る汽船の笛の耳に入る港のひる
のわがねざめかな

硝子戸をざいとあくれば藍色の秋空があ
り夜明けの高臺（父の家に宿りて）

白き靴はつ歩む兒がまろき脛あらはに見
せてよく動くなり

秋ちかき銀座のまちの入口のアカシヤの
樹のうへの夕月

門を入れば雌竹のかぜの汗ばめる肌衣を
ぞ吹く青き水無月

春過ぎて築土のくづれ躑躅さく汗ばめる
日の晴れぐもりする

かへり來てをぐらき室に置かれたる旅鞄など淋しかりけり

春草のはてに夕べの星空がちかぢかとして低くも見ゆれ

針の如き松葉の尖にかるがると動く雀に秋の陽が燃ゆ

合歡の花山の湖畔の夕ぐれにひと木ほのかに立ちてあるかも

睡るごときままに冬日は落葉樹に光落して夕さりにけり

一杯の珈琲をすするしばらくも父は話をやめざりにけり（父の家にて）

曇り日の御苑は雨となりにけりしづかにかへりゆける庭師ら（新宿御苑）

ほほゑみて逝きし妹の死顔に落さじとするわがなみだかな（妹を喪ひて）

兒をつよく叱りし後のさびしさよ向うをむいて遊びをるぞも

夕ぐれのがらんとしたる一室に紅き林檎が投げられてあり

さむざむと廚の隅の棚の上に紅き林檎は笊にしありけり

うつむきて草刈る女の半面に草がうつるか青ざめて見ゆ

國府津のや濱べの砂に寢て見れば月夜の富士に雲なかりけり

嵯峨の路いづこともなく鷄啼きて暮春の晝となりにけるかな　洛西にて（二首）

一歩前二歩前晝のかげろふのもゆる暮春の路のしづけさ

白き帆の風をはらみて來る時綾瀨の川はゆふべなりけり

唐朝の埴輪の武人塑とりて塗の箱よりいでにけるかも（吉川靈華氏と話す）

橡青葉一枚一枚ゆれゐしがやがて樹をゆする風となりけり

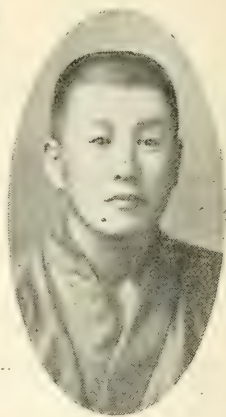
晩秋の空たかく立つ青桐の上枝の鳴るに眼を擧げにけり

たまさかの休みに花を插しをればとのもに荒るる晝の木枯

野にちかく家居しをれば遠くより來る夜のしぐれさやにきこゆる

しんかんと日は空にあり落葉をふみつつわが生の久しきをおもふ

藤の花ひたぬれたれど雫せず晝かけてほそき雨ふれりけり

しづくすと見えねど藤の花垂るる棚の下べはぬれてありけり

吉植庄亮

『寂光』抄（十六首）

夕づく日あらはに照らす地の肌に蟻あゆみつつみな影がある

實をたべて栗鼠がこぼせる松毬の青き剝片澁ふきにけり

合歡木の葉のねむる宵來てわが嬬はかしぎの煙たてそめにけり

怺へつついまはこぼるる雨の粒三つ二つききて驟に多し

一ふりにあがらむきほひすばらしき夏の雨來てかた空曇し

しとどなる今朝の白露は立ちにさ霧となれり見ゆるかぎりは

紫蘇の花さけりともわが思はぬに土にこぼるるむらさきの花

夕餉にと子供らかへる頭の上あとよりあとより雁の列見ゆ

松毬もおつるかぎりは落ちはててこの冬の日に音ひとつなき

啼きうつる森の小禽らけふもまた朝たくるなべに庭とほる多し

小波を見てゐるよりも忙しなき小禽のあたまみなみな啼き居り

堂の扉のきしむ音ありてゆふちかし山の向うに日のゐる寒さ（寂光院二首）

前山の峯越しにしみる晷あり翳りはてたる堂の扉に

深川の街に入りたりゆふ凪の水照あかるき店つづきなる（深川三首）

わが倚れる橋の下より船の舳にはかに出でて子供のこゑあり

あまりにも水照明けば橋の上を渡らふ人ら影搖れにつつ

『くさはら』抄（十七首）

ふるさとの出津のひろ野の葭穎の矛並め萌ゆる春立ちにけり

靜けくもころろと鳴ける初蛙こゑのありかのこと思ふに

まさしくも眼にとめがたき初蛙天つ光のかがやきのなかに

初蛙そこかとおもふ聲ありてしづけきかもよ春の光は

蘭のかげ幽かにうつる花ぐもり障子を閉てて今日いとまあり

春雨や降りいでぬらし窓の外の蛙のこゑのけはひかはりぬ

桐の花さけるあたりにほのかにもいくばく見えて春の雨ふる

松の花ちるべくなりて朝あつし春蟬のこゑしづかにそろふ

いつしかに障子のそとに來て居りし馬のはなぶえのあらあらしけれ

朝飯をうから食うべ居りはなさきに默りていでし馬の額二つ

汲みて來し手桶ながらに飲ます水仔馬の腹に鳴りて滿ちつつ

花かつみむさぼり飽かぬわが仔馬の口の端すずし青くそまりて

土間に來てまた叱られてゐる仔馬のわれを見あげしその幼さや

なよなよと繭のなかよりあらはれて青蠶づれの顔のしたしさ

はるかなる國にものいはず母のこゑ言葉敵は新家の翁さか

揚葉蝶花をくづして去りしよりふたたび庭の光の閑けさ

三日月の光かすかにかたぶきて闇うつくしきわか竹のかけ

『病畫帖』抄（十一首）

天つ日の照らす韃靼のうしほ波ただくろぐろと光にそまらず（樺太四首）

眞日一つ空にさぶしも韃靼の海は見るかぎり光をはなたず

韃靼のかぐろうづしほ見るかぎり眼をあそばするなにものもなし

國土のはてしにわれは來りたりことごとく名をしらぬ草花

まことによき月夜なり修道院の窓といふ窓より光あふれこみて（トラピスト修道院七首）

たまさかのこのしづけさに落つきてわれの心はなにも願はず

まことによき月夜なり窓のしたを木履ならして人通りたり

しづかなるパン燒小舍の朝けむり緬羊は山にゆくところなり

露ふみてパン燒小舍に來て見ればパン燒けてゐるよき匂なり

パン燒きて人ひとり居りパン小舍の壁にかけたるマリアさまの像

牧草を青青と積みて一臺の農用馬車の來りしにほひ

田波御白

ゆく雲に雲の聲なしゆく水に水のこゑなし秋きたるらし

相見ざる二日こころも火となりて君を欲りすれひるよるとなく

いつとなくつくり笑する君を見てわが身さびしき秋に入りけり

ああ皐月ふぢさく時に母うせきあやめさく日に君をえてけり

あひわかれて日は死魚のそれのごとやがてひからび石とかならむ

秋の夜のありあけ月の色見せてうなだれはてしわがこころかな

馬の眼をみつめてあれば彼の眼にわれなき如くしづかなるかな

つゆ草の花など越して清淨の野の水ながれ夏は來にけり

冬の日よなれが死ぬるも近からし力なげにも照るひかりかな

ふともわが跫音ききてなほわれのあるをおどろく日となりにけり

草も木も生きむとしてはつかれぬる眞夏の光みなぎれる野に

枯草のうへにしづかにいねてあり木の葉ちり來てわれを埋めよ

ふるさとのさびしき村にちやるめらの聲きくここち春はくれゆく

野に一列ひとしきほどにたけのびて赤楊樹どもも若葉しにけり

ただひとりしづかにいねてただひとりしづかに起きて生きてあるべき

今日はまたわれみづからのおそろしきばかり心のしづかなるかな

母いまさば絶え入るばかりかなしまむ兒が病むといふただ一語にも

力なくまなこをひらき力なくまなこをとぢて幾日あるべき

七里ケ濱このあはれなる歌人のつひの墓ぞと海ひろごれる

なれもまた人妻となり母となりみにくく老いて死にてゆくらむ

岡 橙 里

てらてらと夕日さし入り幹赤き松原のおくにかなかなが啼く

近江野の青田の末にまばらなる蘆をへだてて湖ひらけたり

靜閑の身を掩ふごとく雜木はかさなりあひて青葉しにけり

物の本すこし見るまに午後の日は書齋のまどにくれかかりけり

逢坂山さくらの落葉柿のおち葉そこはかとなくふみまよふかな

夕ぞらの秋めきたてる雲をもれて何のけはひぞ草に入る聲

しろがねの壺の底などおもひゐぬこの山國の雪のこのごろ

いたましく踏みにじられし野の草のまた遲々としてもゆるが如し

時としてこぼるる白き木苺の花のさびしき草のうへかな

黍の穗の青きこのごろの日癖とて山よりたえず小雨ふるなり

草はかれ石はいでけり野の石のしじまにかへる冬は來にけり

小半日父の子守は子もりうたひとつようせで乳母車おす

加茂川の瀨のおときこゆふと京にあるをわすれてものおもふ時

鉢植の西洋花としたしみし秋の十日の京をしぞおもふ

吹雪する夜の山家に寢もやらずしたしきものに居間の灯を見る

蒲公英の黃なる小山をとびたちし小鳥の群の羽根のひかれる

熊樫の落葉の多き風の日のなまあたたかさ綿入をぬぐ

逢坂山電車の窓にすれすれにこぼれむとする黃いろき木の葉

いそがしく君と逢ふかな氷雨する師走二十日の上京の宿

底びえの身にしむ京に君をおきて去なむとすれば川千鳥なく

わがこころ君をおもへるひとつよりもたざるをしも親はあはれむ

客間より父のかたらふこゑ高くあたりしづけき秋のひるかな

褐色ににじめる木々のこずゑより秋のこころは晴れなむとする

ことごとく君に捧げしうらわかき心のままに衰へゆくかな

君をおもひ親をはなれてさびしくもうらわかうひとり住みなれにける

あたたかきわが掌にふれえたるものの感じの今となりけり

武山英子

やはらかく乳房をふくむ脣のあるがごとくも夜ふけぬるかな

咳すればいづくにかひそむさびしさを喚ぶごとくにもひびきぬるかな

ふくらなるうらわかき母のおとがひを乳の香りを夜におもひ出づ

ひとりあれば廣き家内の音もなくそこはかとなく暮るるさびしさ

いく年かかなしかりにし心ぞとおもへば涙とどまらず落つ

わがためにさびしく君も生きたまふおなじ都の夜ぞふけにける

聲立てて泣かば晴れなむ哀しみの如くをさなく親はおもはむ

よのつねの女とするをねがひゐるわがゐまはりの人も憎からず

たそがれになれば日毎にいづる風この音なりわれに涙を強ふるは

母にすがりてさめざめ泣きて見たき夜なり叱りつつあはれ泣きたまふべし

さびしさをわすれえぬよわき娘のためにほとけの道を說きませしかな

靜やかに君をおもはしめよ拭へどもぬぐへども出づるわが涙かな

いつまでも坐りてありぬ家人等のひとりふたりと寢につくを見つつ

月光のうするるままに消えてゆく木草のかげのごとく死なまし

佐瀬蘭舟

落葉松や山毛欅に直黄の峰いく重みなみへ落つる秋わたり鳥

この雨の葉月に入らば眞萩さく裏のあれ野に盥うかべむ

春の來て夢やはらぎし蔓草は垣にも戸にも花ふくみけり

待宵の花さくなかに笛とりてそよめき出でし夏の夕月

赤土の吉田の山の雨の日は根こそながれめ花つつじさく

河骨の一花莖に黄をおきぬとばかりたたむ夏は來にけり

夏の夜の障子のそとに蟲とぶを南來にはりとおもふわびしさ

馬追かやさしき蟲の戸にまゐりきつきつとして晝もなくかな

山の雪とけやそむらし葭芽の白きをこえて水なかれ來る

コスモスはみだれて伏しぬ秋風の遠き空より吹きも來ぬれば

形ばかり青き芽をもつやせ蔓の垣よりたれし春の夕ぐれ

芍藥のうす紅き芽の三莖ほど庭にもえ出ぬ春あさき日に

國原は雨ふれる日もふらぬ日も柳の色にしぐれぬるかな

水無月の疏水のへりのくさむらの青きをいでてとぶ螢かな

松の樹のあらき肌に聲ありて啼くとぞおもふはじめての蟬

ほの白く山の薄に月させば夢にもにたるわが世なるかな

葦の芽のそろひて萌えぬたぶたぶと河浪のうつ春の岸かな

青木の葉ゆれてうごけばさらさらと冬の雪こそちりこぼれたれ

秋はやし海邊の路のさるすべりさしもに著きわが背廣かな

わが持てる枝のかしらに三月の朝のひかりのうつつなきかな

山田葩夕

年古れば年古るままにわが母の母らしきことがしのばれてきぬ

汝が父はかくありきなど事毎に憶ひ出では叱りし母かな

除隊の夜初めてわれに酒のめと酒を買ひたる母なりしかな

まじめにむしろ愚かにつとめたる十とせあまりの報いはこれか（受難の日二首）

思ひきやこの悪名を負はむとは泣くに泣かれず笑ふに笑へず

ここもとの森の山路に咲くものはこのむらさきのつつじなりけり

やぶ蔭の椿のおほ樹花咲きてあたりかまはず花こぼしけり

穂すすきの穂のゆれかへる中にして吾子の帽子の見えかくれする

たづねあてて呼鈴の釦押しにけり 泥靴の泥ぬぐひもあへす（土岐善麿氏を訪ふ）

いつとなく不平持ち得ぬさびしさも二人の父となればなりけり

嫩草山歩く佇む寝そべれる鹿の背にある冬の陽のかげ（奈良にて七首）

わかくさ山一めんの芝生その中にくろぐろとして松のかげあり

冬ざれて黄なる芝生の夕あかり折から鐘の音ながれたり

日だまりの落葉の中にねむる鹿人がおどせどおきむともせぬ

二月堂剝げし朱塗のうらさびし冬の夕陽はくらかりにけり

社、寺、石のきざはしのぼりおり古き都は暮れ果てにけり

落葉径よぎらむとして見出でたる圓き柱の大き礎

案内者の古物語するひまにさやけくきこゆ松かぜの音（法隆寺にて二首）

一歩一歩白き砂路を踏みて行くわが足音もしづかなる寺

寝椅子かつぎ来りてまづわれに寝ね心地をためせと言ふなる（秋人君より椅子を贈らる）

早川幾忠

大正十二年、関東大震災（四首）

原中に我らともせる提灯のひかりをしぬぐ迫き火の照り

かくだにも人の骸をうかべつつ満干するとふ大川の水

母と妻がもらひて来にし玄米を徳利に入れて我搗きにけり

緑葉の幾重におほふ大宮のみ濠にけふは鴨あそびをり

同じ十二月、弟午佐久死す。十七歳（二首）

いつくしむ思ひのはてや弟のむづかるをみな母はききたまふ

息だにもとほらずなりし咽に水つけやりて何かたらはむ

同じく偶感

袴着て學校に行く、弟のをさなき姿胸にうかぶも

十四年十二月、弟の墓に詣る。

水かけてをろがみにけりみ墓石のはだへの苔のうるほひにけり

十五年八月、兄民代治死す。三十三歳

ぬるき湯をふくみつつ吞む兄の癖我にもありといま知りにけり

同じ十二月、天皇陛下崩御（四首）

霜の音の夜ふけてさむし號外の来るべき時と思ひさめをり

うつし身の我らがごとくうは言を宣らせたまふと聞くがかなしさ

皇のみやこに我の生れながら大御姿はをがまざりける

ますらをの奥元帥の泣きしといふ新聞を見れば涙こぼれぬ

水の上にただよふ苔の淀みごり春の光のしみとほるべし

夕靄の上より見ればはるかなる鳴尾の濱に花火あがるも

昭和二年八月、大和金剛山（三首）

一時雨とほりしあとの丘の上林に鳥のあつまりて鳴く

かなかなを遠くに聞きて灯のともる峡の村に下りて来にけり

天雲の行きかふ中にしけりたる杉の梢は常にしめらふ

道の上の落葉うごかす水清し石に腰かけて汗ふきにけり

山ひとつ越えて来にけり峡田になづなの花のそよぐすずしさ

土岐善麿

昭和三年以後

村莊（七首）

春のひかり今朝やほのめき庭の樹樹の諸葉のつやいまだ鈍みある

鳥の聲いつか遠しと聞きをればまたさへづる耳近くむれて

むらすずめの朝さへづりの中に時どきするどき聲を投ぐる鳥あり

庭芝のかしこここひとかたまりづつ雜草はえておなじ種類なる

戯れのマチの火ひろがるおどろきに枯篠原をかけ通る子供

ぐつすり眠りていつせいに床を離るるこの健康の朝の家族

牡丹ばたけ嵐過ぎたる曉の地面のはなびらこんもりとある

壇上（四首）

講堂いつぱい段層をつくる顏の快き彈力にむかひてわが聲を放つ

説き盡せりとわれは思ふになほあくまでうべなはむとせざる老のかたくな

わつと叫び手をうちざわめく會場のこの昂奮はいつまで續く

憤るべきを憤らざる慣習のわれにもあるをひそかに怖る

孤蝶先生六十賀（九首）

先生の筆蹟のいまだ若若しさよ記念にいただきし扇をひらけば

先生が六十におなりなされしとは譃のやうなれど眼の前におはす

先生はいつも若しとみゆれどもわれや老いたる今夜の會話

かへりみれば既に一家をなせるそのころの先生の年齢をわれは過ぎつつ

食卓の隣りにおはすおほけなさ時時さかづきをさしたまふなり（席上藤村先生）

海月の酢の物かみしめたまふ口もとや兩頰にかけてたぶたぶと動く（席上花袋先生）

青年は意氣あがらずと罵りつつみじかかれる鬢の白さ（席上草平君）

淺草にともに生れて相逢はずたまたま逢へばをさなく語る（席上万太郎君）

書いてくれ書け書けといひて持ちまはる書畫帖と筆すずり酒壺諸共（席上放郎君）

トマト忌（四首）

梅雨じめりの風ふかく吸ふおほ寺の石段の途中にたたずみつつ

一生涯よく惚れたる男なりき惚れられしことは一度も聞かざりし

片隅におほく語らずいつのまにかふたりの友は歸り去りし

親に先だち死にし不孝が最後なりきと老の涙をかくさむとせず

天平文化回顧（二十九首）

わがいま正眼に居對ふおごそかたる大きたましひはいにしへのもの

にぶいろのこのおん袈裟をうつそみにまとひたまひけむ聖おほ帝

經寫すその靜ごころ春の日永も秋の夜長もわれはもち難み

この辛鋤わが手にとりもちいにしへの大地をすかば慰まむか

汽車おりてたちまち聞ゆる蛙のこゑ歩廊に立てばしきりに聞ゆる（法隆寺村）

桃林はな滿開のつづきにはたたへ冷たく水田鋤きかへす

さへづりなきかはす鳥は松のこずゑおほ空うららかに聲あふれつつ（法隆寺）

橘の厨子玉蟲のづしの前に立てばいにしへのいのちわが體に感ず

夢殿の老樹のさくらの花あかるく人來らずしばらくがあひだ

菜の花のむかうの堤あらはなり制服生徒くわつぱつに歩む

小鼻のいきの通ひおほらかに有る事なき事世を嘲る（伎樂面）

つかね髮空をあふぎとがりあご地に向ひて尺にある顏

顎長におほき耳垂れ深深と頬にきざめるいくすぢの皺

額皺眉毛もひげも純白なり笑顔なごやかにかくも老ゆるか

あごひげ遮二無二生えて荒荒しくひた黑なる齒なみくひしばりぬ

これはこれは思ひも設けぬことにぞあるいつおのづから長鼻の缺

いにしへの土ほりかへし掘りいだせる太刀はくづれつ唐草の黃金（東大寺）

興福寺の塔のほとりにわがくればこんもりさき滿てるしだれ櫻（猿澤池附近）

南圓堂の石段くだる眼の前に枝垂れ柳の芽ぶきあかるさ

たそがれの池のたたへの冷冷し片岸につづくさくら花盛り

朝のさくらしづかにひらける路遠く行進ラッパひびき來たる

くつきり枝垂れ柳のかげうつれりそのなかに佇むわが影もまた

大鐘のまひるのひびき松にこもり櫻にこもりひろがりゆく

松かげの芝生まだら青き春冷にかたまり伏せる鹿のけだるさ（奈良公園）

松かげのあしびの房花しらじらとさきみちたればひそやかなり

はたはた、はたはた、おほぜい手をうつ音すなり政談演說櫻の下にある

宴樂のみすこ限の下にあり草路の花すみれひそやかわれは憩ふ

この路は人まれに少女せんべい賣る五六匹の鹿ゆきつもどりつ

吹きすます尺八のおと花むしろに近づきゆくは虛無僧ふたり

六實(六首)

わが球に折れて落ちし松の小枝の青青しきにほひのそばを過ぐる

青空遠く飛びつつみゆる球は更にひとうねり高くかかりゆくなり

何をいひかけても默默たるキャディの少年の微笑とならびてゆく

ここと眼にとめて來れば球はいづこへ陽炎なり芝はら一面

くさむらに逸れてまぎれし球のさがすよしもなさ蟲を聽いてゐる

小岩井農場(八首)

秋、日光の直射の雨煙のこそばゆさを手のひらに撫づる

濛濛とあか埃にうづもるわだちなり岩手山をひだりにまはる

事務所前のこんもりひばに聲ひとつ書閑古鳥がなきまたないてゐる

かいばかむ音おとの快さ朝まだきの厩舍にまづ入るわれは

シャンモア號の星鹿毛つやつやと厩舍の高窓よりさす綠の反射

場長のながぐつおと朝露をふんでゆくかなたに學校の鐘

製乳場午前の作業終りたれば少女素足になりいしだたみ洗ふ

うつむきてくびきの綱に暑苦しくうなじなすりつくる乳牛の瞳

柵ふみこえて樹かげを來し男は山刀と羊の毛皮とをぶら下げつつ

いま刈りひろげし牧草より渦まく陽炎なり樹かげに遠のけば

大熊信行

見まいとしても君等の眼に火を點じわれらのかけはひろがつてゆく

けだものごとき光を眼にやどしをれりといふや呆けてゐるしのみ

放しても逃げてゆかうとしない一瞬のあはれなすがたを見てしまふ

あなたの通りすぎてしまつた世界が僕に遺されてゐる

ねるまへに足のうらだけ拭かうとしてよろよろと柱につかまる

何もないもう駄目だと思つた次ぎの刹那忽然めのまへに極大のもの

街頭にあらはれた鮮人の勞働をまぼろしほどに市民は思ふか

ふたりしてよかよかかついだ鮮人の脊骨はゆがむひと足ひと足

東京驛前に深夜來てみろくらがりに鮮人むらがり石掘りかへす

よい速度にゆれゆれ身をはなしてゐるなにもいはずにゐる

屋上にいま二人だけ東京の空をおしふく風の大きさ

さびしいと思ふと何か白い花が木にたくさんさいてゐる

求めてゐるのは愛ではなくてわけのわからない強いたしかなもの

よなかに目がさめると胸のなかに明るうい燭が點いてゐるではないか

よし暴れろ暴れろ天井裏の鼠きさまおれの喜びを感づいたのか

このおれの性格をひし曲げるぐらゐならいつそ全世界よ碎けてしまへ

泣いてゐるほんたうの心を隅つこから發見するのが何故こはいか

笑顔がとてもキラキラするあなたにはくらいみどりの木蔭がきつといい

こんな夜ふけ歩道輕く往くものは揃つてかへるバスの車掌だち

いかに綺麗といつたところで灰皿は吸がらを誰もおとすだけのもの

妹は軒の葡萄を指ざして熟せむ日まで
とゞまれといふ

草鞋して渉る淺瀬の水きよみさばしる鮎
のかずもよむべし

栃の木に葡萄のつるのはふあたりましら
の聲す甲州の山

見じといひて筥に納めし戀人の文なつか
しくなりにけるかな

物皆は若き時こそよかりけれ薊の葉もて
頬も撫づべし

來てはわれ幾度船を眺むらむ岸のいはね
の一本の松

久保猪之吉

百歳の後をおもへば姫小松鉢にうつすも
苦しかりけり

死にてのちまこと行くべき空ならばかの
明星を宿と定めむ

梅の花うけて興ぜしさかづきに藥つぐ
べくなりにけるかな

墓のべに生ふるばかりをなつかしみ摘み
てかへりぬ名もあらぬ草

ほとばしる瀧の水沫を手にむすび書に疲
れし目を洗ふかな

天つ日をさしてちかひしたゞ一人の友に
別れて日へぬ月へぬ

百合剪ると相携へて入りし山神の妬みを
こはしと思ひき

霧深き南獨逸の朝のまど　おぼろにうつ
れふるさとの山

老いたりと我を思ふや十年へておもかげ
うつすテイムスの水

十年の昔の友は髪おちて尊き學者の相
を得たまふ

火に入りて火に焚かれむは本望ぞ火をも
とめたる蟲にやはあらぬ

たれにまづよごときこえむあら玉の年は
立てれど親はいまさず

美しき追憶の日を吾生にことしも賜へ時
の大神

散りはてし小瓶の薔薇は地にさゝむいき
む力よ根となれ芽となれ

服部躬治

つらかりし憂かりし冥門の手ばなれてわが世楽しき朝ぼらけ哉

貴人は誰よりうけし勢力ぞわれに詩あり神の授けし

富士百首　明治三十一年八月二十一日登山時（三首）

見かへれば雲より外のものもなしいづこより来しわが身なるらむ

手をのべて取らばやとしもおもふ哉なゝめになりぬ北斗七星

身の代の金を抱きてかへり見る廓のあたりなくく郭公

挽歌五十首　幼友ともなりける人の結婚の約ふみあへず身まかりたりと傳へ聞きて（一首）

黄泉なる高きにのぼりかへり見よここに人あり君を戀ひ泣く

錢乞ふとわれにすがれる乞食の顏相見れば憎くしもあらず

房州百首　明治三十三年一月作（四首）

海宮のかくろひ事をもたらして沖つ白波われを許はなむ

たどりゆく浦おもしろみ浦の名をわれ試みに附けむと思ひつ

うるはしき安房の七浦夏ならば一浦ごとに濯浴ましを

鴎のゐる中つ洲あたり雲はれて夕日の中に雪おろしくる

峠路に今ゆき合ひし巡禮の唄は霞の中になりぬる

幸に人と生れて幸に君と相みつ死なむともよし

世に厭きてただこのままに死なむとも君し忘れぬわが名なりせば

われ知らずうちほほゑみてわれ知らず庭のしげみに隱れつる哉

葉櫻の蔭去りあへず物おもへばそそや何とも知らぬ音あり

さりともと思ひかへしてさらにまた同じ思ひをくりかへすかな

試みに問はむ昨日の春の夢今はたさびし松風の聲

秋風に胸は吹かせじこの胸は君が情を祕めおける胸

人知らぬ涙ありとは嘆ならでああ神ならで誰か知るべき

尾上柴舟

なつかしき思湧く日は市に立ち物乞ふ子らも知る人の如

夕靄は蒼く木立をつゝみたり思へば今日は安かりしかな

夕暮の空に富士ありわが心著くところなく旅の道行く（汽車にて）

つけすてし野火の烟のあか〳〵と見えゆくころぞ山は悲しき（伊豆にて二首）

春の谷あかるき雨の中にして鶯なけり山の靜けさ

日の入りて空の靑きが悲しさに下りむともせぬ若草の山（奈良にて）

夏に入る靑草山のふもとより烟のぼれりよき朝けかな

[illegible]に何を歌はむ枯草に小菊すこしが咲きまじる山

山にして立てれば海は廣く見ゆ廣きがまゝに淋しかりけり

新しき手袋はめてこゝちよく冬の巷をゆくあしたかな

春の日の玉のやうにも照り透る若竹原に靴の紐結ふ

春の雪ちらつき來れば宵に立つ停留場こそなまめかしけれ

ほの〳〵と部屋の白めばまづ思ふ出でて行くべき戸の外のこと

病み疲れよく寢る妻の枕上秋の蟲こそ啼きはじめたれ（妻病む）

倒れたる藥の瓶を起すさへさびしき秋になりにけるかな

熱やゝに高まり來れば安からずまことわれ猶生きむとすなり（病みて）

灯をとれば木の下暗のつめたきにぽつかりと浮く木蓮の花

生き〳〵と庭の木の芽の光る故初夏の日を見にいでにけり

たえ〳〵に一筋の瀧流れたり午後の御寺の冬の庭山（淸見寺にて）

靜かなる光の中にうすいろの花を見て立つ夏の曉

蒸暑く閉ぢたる部屋の瓦斯の灯に検温器見る夏の夕暮（妻病む二首）

病む妻のすこし落ちゐてねたる間に貧しき夕食するがわびしさ

大空の色も深さもかはらねばまたわが涙落つるなりけり

天地のなしのまに〳〵なる事の中にわれ居てひとり歎かふ

夕日さす川原の小草さら〳〵と鳴らして秋の蛇ぞかくるゝ（玉川にて二首）

細々と鳥の跡こそつゞきたれ川原の砂のゆふべ白きに

さく〳〵と草刈る鎌の響より野べは霧晴れ空青く見ゆ

病みぬれば大天地に一人なる妻よとおもふいよ〳〵思ふ（妻病む）

大海のくらき緑もにほふまで春の日あたる壁の油繪

うち寄せし波の白泡岩の間に消ゆる音して日ぞ正午なる（伊豆にて二首）

春山のあしたの緑あかるくも鶯ぞ啼くあはれ鶯

初夏の日をさま〴〵に照りかへし輕く林の葉の躍るかな

御前追ふ騎兵の小旗ちら〳〵と二重橋いまあけわたるなり（京都へ行幸せさせたまふ日二首）

大帝いまわが前を過ぎたまふかく思ふだに畏きものを

こま〴〵と緑ひたせる水溜り靜かに庭は夏めきにけり

前近う立たせますとは覺ゆれど心空なり臣の子われは（拜謁）

逆まに汐入川の水流れ夏の濱口風強く吹く（木更津にて）

物のかげとすれば薄れ薄れしてはかなき秋の日となりしかな

堰塞越す水のつめたくなりぬらし菜洗ふ音のしみ〴〵きこゆ

厨より妻の笑ひのこゑひゞきこの夕暮の家内たのしも

よる波のあかるき濱に夏近き雲ぞひとむら影落したる（大磯にて）

舟ばたに躍るは鯔か川口の葭洲ゆらめき近づきにけり（舟にて）

街路樹のあしたの雫肩うちて涼しくぬれし麻の夏服

裏山は松山ならしこぶかくも渡るあらしの音ぞきこゆる（旅にて）

目馴れては蚊帳の古びも何ならず初秋の夜を樂しくは寢る

夜の氣も月の光もうちしづみ動かぬ中にさをしかなくも（春日野にて）

若葉みな光り疲れて夏の山靜けき午後を藤の匂へる

大空のふかき綠のちか〳〵と迫るを覺ゆ山のいたゞき（四明嶽にて二首）

さやりなく青き空より吹く風にさやぎあかるき山の小竹原

一すぢの月の夜風の頬に觸れて道は峽間に入りにけるかな（箱根にて三首）

月のさす夜山の雲をすかしつゝ暗き谷間に立つ林かな

澄みまさる夜半の心に堪へがたみ月下の山をいでゝこそ見れ

つとふめば爭ひ立ちて濱の砂暮春の風に光り流るゝ（旅にて二首）

夕近み渚の石をめぐりつゝ汐は靜かに波を揚げたる

日は入りて名しらぬ小木の花白しこの夕かげになく鳥もがな（石山にて）

落葉あまたひかりてあらむ鋪石に新聞おとす音ぞきこゆる（ある朝）

夏來ればさ躍る心白き服白き帽して手振り道行く

垣下にならぶ小篠の銀の穗のすく〳〵として月に向へる（小庭の夜三首）

木々のかげ黑く寒けく縮まりて中空に月の今しなりぬる

緣近き手洗の水月ながら氷らむとして强く光れる

見るが中に岩間の水の盛り上りすはや汐尖こゝまでも來つ（江の島にて）

雨止みてまだ薄暗き空の虹青葉が岡に末消えて見ゆ

月かげの及ぶかぎりは烟りあひ小夜の大野の草は靜けし（春日野にて）

白き岩うつろふ淀は灰だみて初秋しるき薄濁かな（長瀞にて二首）

漕ぎ上る舟に逆らふ水早み弓と撓める竹の棹かも

のぼり來て見れば人あり秋風のさやぐ音する初秋の山（修善寺にて）

山ひだの緩き流をのぼりつゝ光に消ゆる一筋の霧（箱根にて二首）

雲もゐぬ夏の草山高ければ朝の淺黄の空は狹しも

岩谷莫哀

松原の松の樹の間に人間がひとり交りて秋のさびしさ

濤の音とほく聞ゆるまひるまを國手に胸を叩かせてゐる

熱退きて小春日和のかたじけな何も要らぬと日なたぼこする

ちらほらと渚に子らのあそぶ見ゆ汐先とほくうちけぶりつつ

ありし子のあらずなりたるこの家に宵はやくして蓄音機鳴る

ありし日に子がこはがりし獺の皮梅雨晴の縁に干されてあるも

朝日子の匂へる空にうちむかひ今日の命をよろこびにけり

堪へて來しこれの月日の侘しさも馴れてはられし松風の音

ここをしも終の棲家とおもはねど夜を沁みゆく松風のおと

松風も絶えて音なき夜の室にひそかに死地を思ひ居しかな

眞夜なかの冷えに背柱の冴え痛みこらへて居るに松風の音

まつかぜのたえまにひびく潮騒や心はろけくなりなむとする

ほのぼのと窓にほのめくあかときの夢ともつかぬ松風の音

病室の窓より見ゆる松の木に朝は朝日の先づさしにけり

あしびきの山のけものに身をかりて穴にこもらば思ひ消なむか

蜂のこゑ日毎にせしがいつのまに藤棚の花の咲き揃ひにし

梅雨めきて今日も降る雨藤棚の花房重く咲きたれにつつ

月光院なれが卒塔婆も古りつらむ父はこの世に病み殘りつつ

しづたまき數ならねども三代の君がみかげに歌よにみけり

やすらかにあらなと切にねがへれど夜を日を惱み心とがれる

石井直三郎

いにしへの寧樂の宮居のあとどころ野菊すがれて咲ける寂しさ

あたらしき竹のすだれを軒にたれおちつく部屋にもの書くわれは

たたへたる水一面の月あかり鳴き立つ鳰のありど知られず

月のひかり水に隈なしにほどりの浮きてあそべるこの夜ふけかも

池の向うを夜ふけの人の行くらしきはなし聲するかすかなれども

秋ふかき今朝のあさけに見し夢のかなしきことは妻にかたらず

椎の葉の搖れてしづけき朝かぜや妻のひとみに涙を見たり

人言のしげきこちたき中にありてををしくもひとりありし人はも（原首相を悼む）

このゆふべちまたの風に立つちりのかすかに見えて秋さりにけり

宵あさきわが門口に立ちとまりものをたづぬる人のこゑかも

あたらしく人移り來し隣り家に子の泣くこゑもさびしあさけは

草山をゆきつかれたり鶯のなく松原は過ぎてはるけし

山の蟬は鳴きしづみたり月の夜をおのづからなる風のおとおこる

月の坂を馬のぼり來るこゑとほし松の落葉はしづかなるかも

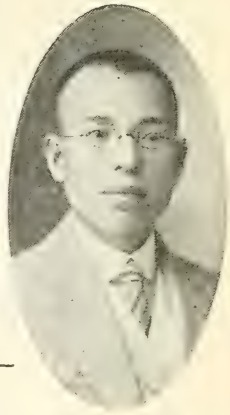
野分の風吹きつのりゆく月の夜の月夜鴉のこゑのとほしも

戸に散るは松の葉ならむ月の夜の野分の風はかすかなるかも

伯耆境山ふところの鑛山に日がうららかにさしてさびしき

しつとりと大竹藪にさ霧おりて竹守の灯は更けにけるかも

竹守がうたふ追分藪のうちにすみひびきつつ夜はふけにけり

山幾重夕山いくへ鳴かぬ鳥寂しき鳥のおちて入る山

岡野直七郎

ふかぶかと青澄む空に群れ飛べる鳥影小さし秋は來にけり

落ちかかる遠き夕日にまむかひて芒のなかの牛はうごかず

磯山の赭土崖をひもすがら洗へる浪は土にごりせり

海の面ゆ吹く潮風に斷岸のともしき芒動きやむなし

濠端をわがさむざむと行く時したつきのみちはさぶしかりけり

世の常ののぞみはわれは持たざらむ夜の巷をゆきてかへりぬ

かくならむさだめに生れてこしかたの長きとしつきものまなびしか

氷切るのこぎりの音きこゆなりこの街なかの朝闌けむとす

むしあつき一日なりしか夕まけてきつねのよめいり降り明りけり

大あらし過ぎてしづけきこのゆふべ燒けたる雲の空にたゆたふ

冬の日のひかりに透きて山茶花のはなびら白くゆらぎつつあり

枝川の幅せまければわが船のすすむ重みに水ふくれあがる（深川二首）

水の面に跳ねたる魚のまくろなる頭のとがりわれは見にけり

炎天の芝生の上を跳ねあるく雀のからだ細く反りたり

みちのべの芋の畑に雨ふれりたがひちがひに動く芋の葉

厨べに寝しなの口を嗽ぐとし豆をひとつぶ踏みつぶしけり（節分の夜）

誰が捨てし帽子にやある原つぱの赭土の上にひしやげてひとつ（代々木の原二首）

いく組か若きひとどちあつまりて野球をあそぶ春の土原

朝なぎの濠をへだてて向岸にひとかたまりのたんぽぽの花（三宅坂二首）

北國にやがて去ぬらむ鴨鳥の草生にまるくかがやきてゐる

上田英夫

立願寺溫泉

大正十四年十月上旬立願寺溫泉にて（四首）

山あひのいでゆの宿にひと夜ねむり小鳥の聲にさまされにけり

秋晴と今日もなるらしあかときの宿近く來て鳥さはに啼く

ききをれば鴉の聲も鵙の音も近々にして山はうれしき

穗にいでていまだも若きすすき穗の露に光れり朝たちくれば

大正十四年十一月上旬大慈禪寺に詣る（三首）

もののいろなべて古りたり大寺の庭松をふく風のしづけさ

秋日照りて人かげもなきひろ庭にちりこぼれたり松の枯葉は

天ざかるひなの田なかの古寺にいのち寂しくはてたまひけむ（開祖寒巖禪師の御廟に詣りて）

大正十五年三月妻肋膜肺炎を病む（二首）

おのづから寂しくやあらむ玻璃越しに庭樹のうれを見入れる妻は

わが肩にすがりて床にたちそめし妻の瞳によろこびのみゆ

大正十五年九月筑前新宮海岸に遊ぶ（三首）

けさの朝け潮風さむしひとへもの二枚かさねて濱に來にけり

松原にあした來りてひとりなり地をつたひくる海のとどろき

秋づきて眺めさやけき相の島に波のよるみゆ昨日も今日も

昭和三年一月産後の妻病む（六首）

病み妻の枕べに坐て吾子がためミルクとかすと湯を沸かし居り

病み妻の胸に面よせ寢入りたる吾が子の頰のやつれ悲しも

母の乳なき兒と思へばかりそめのその泣き聲も聞きすて難し

下心つね思へかも夢にさへ乳を求めて吾が惑ひゐし

乳多き人はあらぬか夢にさへ乳を求めて吾があるものを

吾子消化不良の頃（二首）

ミルクにて育つ兒多し健かに育て汝もと子に言ひきかす

腹の子のやや太りぬと妻のいふにはられしくて涙流れぬ

かくもよき便をしたりと病み床の妻に見せてうれしも吾は

岡本かの子

十年間の歌のうちより

魚板のいただき昏くふきとざす櫻ふぶきを見仰ぎにけり

剪りたての花のつめたき重味をば食後のたゆき手にうけにけり

端近く持ち出でて見ればむき玉子軒の青葉の色うつりたり

出でて見よあな卯の花の白さよと呼びさして汝のあらぬを知れり（子は家に居ざりき）

足あらけく歩み寄れども曇日の罌粟のしめくひふかくして揺れず

伊豆の海の和ぎのはろけさ暗緑のみかん畑をわが[illegible]は行く

伊豆の海に白浪たてば暗緑のみかん畑は暮れ初めにけり

夕蟬はなきしづみつつ葉鶏頭くれなゐ寂びて秋さりにけり

叱りつつ出しやりたる子の姿ちひさく見ゆる秋風のなか

男子やもいとけなけれど人なかに口惜しきこと數々あらむ（子を暫時寄舍におく）

君が踏む北の國なる氷雪をわれはおもへり白梅のはな（人ははろけき旅路に行きて久し）

浪の音よかなしくな鳴りそ幾千年ひと思ひつつわれは生くべし（海[illegible]にて）

流るる風ながしつつして厨邊に死魚ひかるなり春の静けさ

わがいのち寂しかれどもをみなごのこころ[illegible]常[illegible]に

わがこころむなしき時し白梅のかそけく散るを眼に見つるかも

山川のあらき流れのふちにしていのち静けく咲く花のあり

うつし世にわれはをみなと生れつつ陽にも月にも掌を合せけり

同じ根にふたつ咲きたる緋ぼたんの一つちひさきすべなかりけり

梅の樹に梅の花さくことわりをまことに知るはたはやすからず

桔梗の花むらさきに揺れにけり晶もて刻むみほとけのまへ

水町京子

妙高の山風ふきあるる高原にわが行く家は見えにけるかも（池の平五首）

高原の風になびかふ草の中に白樺の門は立てりけるかも

あけちかき光ながらふ高原のなびかふ草は露にぬれたり

あかときの光かたてる高原にほそぼそと立つ稚樹白樺

草刈がつなぎし馬は白樺の細樹が下に草食みてゐる

山霧のゆきかよふ井戸の水くみてかはるがはるに顔あらひけり（箱根六首）

大き枯杉伐りたふしあり舊道の杉並木みちのぼりて來れば

あし白き雀ぞ這ひゐる降る雨のすぢめこまかなる庭石のうへに

朴の木の大きしら花さききはまり散らむとすなり夕づく峡に

大きなる朴の白花の吐くかをり峡の木くれに降りみつるらし

雨すぎて俄かに明るむ光の中峡こえて飛ぶ鳥のはろけさ

日ならべて五月雨ふれば窓にせまる石崖の苔ぬれふくれたり（身邊雜唱九首）

石崖のはざまはざまに根をさして羊歯は渦葉をつぎつぎ開く

わが庭の薄はいまだたけひくし朝朝にむすぶ露のすがしさ

わが庭につぎつぎにあれてまひあそぶ蝶の稚羽けふはくろき蝶

いささかの熱にこやりて心ぐくかたづかぬ部屋の中を見てゐつ

埃おほきわが枕べを掃はしめむとした思ひつつまた寐入りたり

雨の中を夫はいでゆきぬ長靴のよごれゐしことをいねつつおもふ

夫の帽子ほこりづけるにおどろきぬ朝光さし入る電車の中に

夕支度をはりて來れば疊の上月のあかりに花鋏ひかれり

若山牧水

別離より(七首)

白鳥はかなしからずや空の靑海のあをにも染まずただよふ

幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ

涙もつ瞳つぶらに見はりつつ君かなしきをなほ語るかな

みじろがでわが手にねむれあめつちになにごともなし何の事なし

いざゆかむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや

林なる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなくも無事なりしかな

『路上』より(八首)

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき魚の戀しかりけり

わが足のつきたる土もうらさびし彼の蒼空の日もうらさびし

光なきいのちのありてあめつちに生くといふことのいかに寂しき

山々のせまりしあひに流れたる河といふものの寂しくあるかな

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飮むべかりけり

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあそぶかな

多摩川の淺き流に石なげて遊べばぬるるわが袂かな

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれにもおもふひとのあれかし

『死か藝術か』より(九首)

われ人もおなじ心のさびしさか朝靑みゆく夏の停車場

あさなあさな午前は曇るならひとて今日も悲しく海をおもへり

うす靑き夏の木の果を嚙むごとくとし三十路に入るがうれしき

かんがへて飮みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

夏はいまさかりなるべし、とある日の明けゆくそらのなつかしきかな

窓ひらけばぱつと片頰に日があたるなつかしいかな秋もなかばなり

おなじくば行くべきかたもさはならむなにとて山に急ぐこころぞ

山に入り雪のなかなる朴の木に落葉松になにとものを言ふべき

枝もたわわにつもりて春の雪晴れぬ一夜やどりし宿の裏の松に

『みなかみ』より（十首）

われも木を伐る、ひろきふもとの雜木原春日つめたやわれも木を伐る

春の木は水氣ゆたかに鉈切れのよしといふなり春の木を伐る

身體のうち眼の玉ばかり何として斯く重きやらむ蟇なく春日

指見れば指ばかり眼とづれば眼ばかり、春のひなたに蝶が群れとぶ

わけとてはなくぢだんだを踏んでよろこんでみた、喜んだとてなにになららぞ

蟇の眼のかなしさよ、つまが戀しとひたなきに啼くその蟇の眼

踏めばくづる山の赤つち乾いた土どこにしのんで蟇の啼くぞえ

新たにまた生るべし、われとわが身に斯くいふとき淚ながれさ

ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の夜の枝のなやましさよ

晝は晝で、夜は一層薔薇が冷たいやうだ、何しろおちつかぬ自分の心

『くろ土』より（十首）

いついつと待ちし櫻の咲き出でていまはさかりか風吹けど散らず

聞きゐつつ樂しくもあるか松風の今は夢ともうつつとも聞ゆ

ひむがしの朝燒雲はわが庭の黍の葉ずゑの露にうつれり

いつしかに月のひかりのさしてをる端居さびしきわが姿かも

手にとらばわが手にをりて啼きもせむそこの小鳥を手にも取らうよ

朝ぞらに流れゐし秋の雲散りて山はつめたき日のひかりかな

きさらぎは春のはじめは年ごとにわれのこころのさびしかる月

みじか夜のいつしか更けて此處ひとつあけたる窓に風の寄るなり

ひとしきり散りてののちをしづもりてうらけきかも遠き櫻は

ゆく水のとまらぬこころ持つといへどをりをり濁る貧しさゆゑに

『山櫻の歌』より（十一首）

青紫蘇のいまださかりをいつしかに冷やし豆腐に我が飽きにけり

愛鷹の根に湧く雲をあした見つゆふべみつ夏のをはりと思ふ

明け方の山の根にわく眞白雲わびしきかなやとびとびに湧く

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士が嶺の夕まぐれかな

落つる日のかがやきみせてガラス戸はいま冷やかに照りわたりたり

うすべにに葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山櫻花

うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花

ひともとや春の日かげをふくみもちて野づらに咲ける山ざくら花

瀬々に立つ石のまろみをおもふかな月夜さやけき谷川の音に

鐵瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寢む（深夜獨酌）

『黒松』より（十三首）

若竹に百舌鳥とまり居りめづらしき夏のすがたをけふ見つるかも

さかづきのいと小さきに似てもをれや浮きて咲きたる水草の花

水草の浮葉ひとところに片よりて靜けき見れば花咲けるなり

靜かなる椿の花よ葉ごもりに咲きてひさしき椿の花よ

われはもよ泣きて申さむかしこみて飲むこの酒になにの毒あらむ

立ちよりてわが驚きぬ若竹の葉末は露の玉ばかりなる

ぬぎすてし娘が靴にでで蟲の大きなる居り朝つゆの庭に

潮干潟ささらぐ波の遠ければ鶴おほどかにまひ遊ぶなり（朝鮮珍島にて四首）

遠干潟いまさす潮となりぬればあさりをやめて鶴はまふなる

うちわたす干潟のくまの岩のうへに眞鶴たてり波あがる岩に

おほどかに一羽の鶴はまひたてり三つ並びたるなかの一羽は

庭の池の溢れつつありて靜かなり部屋には蠅の三つ二つとび

紫陽花の花をぞおもふ藍ふくむ濃きむらさきの花のこひしさ

若山喜志子

大正十五年作

益良夫のさかりの歳と今はなりぬゆゆしきかもよ君の齢は（夫に贈れる五首）

さわやかに澄めるみ空のはて遠く生きむいのちをひた祈るなり

わが生ける寂しさをひたと思ふ時君の命にま向ひてをりき

君を思ふ時一すぢ暗きなげきありいましめて我ひとには言はず

形にそふかげとし我は生くるなりいよよかがやけ君の命の

霧島のこごしき山の日あたりに出でて摘みたるりんだうの花（丸尾温泉にて四首）

露霜に葉は枯れたれど龍膽の花の紫いよよ澄みたり

再びを來むか來じかも霧島の山といふだにはるけきものを

時雨雲ゆきかへしげくたちまちに峯をおほひて雨降り來る

ゆく路を埋めつくせるはこべらに足袋の爪先染めてけるかな

をり／＼に鶏の來て啄ふらべしこそこのはこべらは春の和草

おゆびもてひねればただに露と消え青臭くしてかなしきはこべら

はこべらの露けき中ゆとび出でしいまだ幼なき青蛙一つ

はこべらはかなしき草よ春もややととのふ頃は實をこぼすなり

心おちゐぬ時しいよいよ喫ふ煙草棄てがたきものとなしはてにけり

身のたゆさしるけき宵をひとりゐて梟の聲に耳すましたり

見てをりし草に風吹き一しきりゆらぎ亂れまた靜まりぬ

夏の夜に目ざめがちなる床の中に目ざめゐてきく茶柱蟲の聲

茶柱蟲のかそけき聲は夏の夜のわびしさなれや年ごとにきく

露霜にたわみ伏したる穂すすきのあはれは人は見ざるなるべし

高臨背山

松の若實

尾上より吹きおろし來る花ふゞきこゝの
谷間に亂れたゞよふ

この山の谷深からず若草の上にさくらの
散りたまる見ゆ

ひと山は若木ばかりの山ざくら花より紅
き葉を出したり

人を思ふ(二首)

心なく櫻花ちる朝あけのしづけきなか
に我たちつくす

はら／＼と熱き涙は頬を傳ひ萌えそめし
草の上におつるも

ひとしきり雨つよみ來て下坂くだりい
そげばなくほとゝぎす

梅雨のあめ今宵は晴れて月涼し向つ山ね
にきりかゝりつゝ

野茨の白々見えてその香さへながれ來る
なりきりふる月夜

梅雨の夜の電燈消えしまくらさや思はぬ
に螢街を飛びをり

路ばたの大き松の木ゆ朝露のしたゝる見
れば眞青き實のあり

眞青なる松の若實が朝露にぬれたる色の
すが／＼しかも

高くはたひくゝきこゆる草雲雀くさにな
くとも思はれなくに

生命あるもののいとしさ雪の夜をかまど
こほろぎ絶え／＼になく

犬吠岬

大濤の寄來るらしはるかなる岩礁こゆる
その濤がしら

沼津にて

富士が嶺も愛鷹山もけむりあひて其所よ
りや來る涼しき風は

山鳩のこゑのなごさを思ひつゝ松の落葉
をしきて我がをり

信行生れて四月ほどになりぬ

朧夜の月に言葉のある如き吾子の笑ひ
のくしくもあるかな

庭の萩(三首)

夕まけて水撒く頃は若葉皆葉裏をぞ見す
ねむるか萩は

眞夏日の照りつゞけどもしかすがに朝は
つゆけしこの萩むらは

のび／＼て萩の梢の地につけば汚すまじ
いと手をやりにけり

和田山蘭

短夜集

はつ春のやみどりの酒をくむときはうつし
この世にこころわかやぐ

春の夜のやみにもしるき玉あられかのこ
まだらにたまりけりはや

はらりはらり霰はふりて春の夜のかたわ
れ月の影きえむとす

はるの夜の湯あがりびとのしろき足ねた
しとばかりうつ霰かな

きさらぎの朝のうすらひはりはりと下駄
もてわりてあるくうれしさ

夕まけて沫雪やめばたまがはの川瀬のお
とのさやかにきこゆ

ふらはりとまよひはてたるこころなり春
ふる雪にあとつけてゆく

多摩川のかはらの空に鳴くひばりわがあ
かつきの窓にひびきく

みちばたに歌よみをれば子供ゆく雲雀の
こゑをきくやきかずや

崖下の小川のきしにゐる螢わが青蚊帳に
きてとまるかも

あけぼののこかげに鳴けるせみの羽のす
がしき夏の朝にもあるかな

あけぼのの木かげしみみになく蟬はいか
にすずしきはねをきるらむ

くるほしきわが夏のうたすらばやな君が
すそひくそのましろぎぬ

庭くさのしげみの上をおとたてて秋のし
ぐれのごとくゆく雨

まどかにも照る月みればひるのまのなや
みくしたるわが身ともなし

たまがはの川原の尾花ふくかぜにひかり
かがやくあさぼらけかな

すみきりて濃きからあゐのいろなせり山
にきてみる秋月のそら

たれも來ぬ秋のまひるはわが子らと尾花
を折りにたまがはへゆく

教室のくもり硝子に落葉木のかげのしづ
かにおつる晝かな

ふるさとの津輕ひろはら雪ふればうまそ
りの鈴きほひてきこゆ

加藤東籬

狩野川の川口の宿立ち出でゝ時雨の朝を船にのりけり

ゆくところゆくところみなさびしけれ穂すゝきなびく野にかゝる汽車

岡の上の燒あとの草青みけり踏まむとすればほとゝぎすの啼く

汝をおもひ稻田のくろをわたり來て初秋風に鳴子をひきぬ

野より山へ青葉がくれにゆく吾れの後姿を見む人もなし

秋雨のさむきが中をとぎれとぎれ鴉のなくはいづこの杜ぞ

この子より何を求むる犬吠えぬ鶏啼きぬ木枯吹きぬ

父のやうに無我無心にて眠りえず父の齢をかぞへても見き

蟲の巣のやうにつまらなく人世を思ひつつ李さく家に晝寝をぞする

荻の葉うすらつめたくなりにけり秋風の家に兎を飼へば

働けば身につきまとふ疲れあり車前草の實のこぼるゝ秋の日

わが村ぞとまなこをあげて見まはせど何事もなしたゞ落葉する

午飯は殊に身にしむ眞赤なる漆もみぢのちるころほひは

おもひ屈しおもひきはめし後にして口をひらいて笑ふなりけり

はや父のねざめなるらむマチすりて煙草を吸へる秋のしづか夜

何かなし空のなごりのをしまれて冬木がくれの宿立ち出でぬ

つばくらめつばくらめ吾がをさな子が土筆を摘めば青の空とぶ

夏山は青しふたゝび見かへれば夏雲ゆきぬ青き夏雲

にはかにも秋の蟲なくふかぶかと空には星の生るゝ夕

眼ざむれば三河あたりの朝ぼらけしみじみ汝の顔に見入るも

菊池知勇

風景の歌より

薄に拂ちつけて飛びゆける鴉はとほく谷を越えたり　（[illegible]山三首）

いつしかに遠くも來しか山の霧車前草の葉に降りてゐるなり

草の中にところどころにあらはれし路のおもても霧にぬれをり

山の上のこの純白雪さきがけてわれの踏みゆく音もこそすれ　（冬山三首）

老松のあから太幹ことごとく湯氣を立てたりこの雪山に

晝たけて風吹きつのる小松山飛び入る鳥の見えてさびしも

藻の上に浮びうごかぬ魚一つかすかなれども鰭ふれり見ゆ　（水族館）

つもりたる梢の雪のおのづから放つ光に夜は明けにけり　（春の雪三首）

玄関にわが出でくれば格子戸のひまより見ゆる春の白雪

雪搔けば雪の中よりあらはれし蘭の青葉を風は吹くなり

立て添へし竹はうら枯れしらじらと豌豆の花は咲きにけるかも　（豌豆畠）

雪ふかきこの山頂に立つ杉のすくすくとして皆眞直なり　（武州御嶽二首）

谷の底ゆいましのぼれる白雲のかたまりごとし夕日さしたり

人の世の塵のとどかぬ山頂の石楠の花に霧の降りをり　（[illegible]）

雨の中にいやつよき雨のきたる音旅籠屋の庭にみちてきこゆる　（日光町）

信濃甲斐みなくれゆけどはるかなる富士の高嶺に夕日さす見ゆ　（富士見高原）

ひむがしの曠野のするにくれなゐの雲のゐる見れば夜は明くるらし　（[illegible]）

沼の面をとほくはなれて大空の雲より雲へわたる鳥あり　（手賀沼）

はるばると眼もてたどれば松しげる曠野のはてにうかぶ海原　（[illegible]山上）

上總より安房へ越えゆく路ほそみ濤卷く海の斷崖をかよふ　（外房州）

中村柊花

山の温泉にて（二首）

かげるものなき山原の草の根ゆ鶉とびたつ涙のごとく

湯疲れの深きをおぼゆ朝の飯ひとり食し終へしあとの疊に

旱天（四首）

ひでり雲今朝ものぼりて山の峯のけぶらひ青みつばくらめとぶ

夏山のいろのふかきに照りいれる眞ひるの光けぶらへるかな

雷たけて群立ちのぼる夏雲の陰ふくみつつ輝けるかな

山の峯を離れていまし蒼空にのびのぼりたる雲のかがやき

山上（五首）

ほそぼそと焚火のけむり靡きつつ山の頂の風晴れにけり

かたはらの焚火のけむり狂ひ立ち高くは立たず頂の風に

小松原にやせたる芒ありにけり頂の風に吹かれながらに

小松山の芒が原に時ありて蜻蛉ながれ來ぬ風に吹かれて

青空のひろきを眺め寢てあれば眼なかひに蜻蛉流れ來にけり

鯉の子（四首）

この朝の水寒ければかたまりて動かぬ池の鯉の子のむれ

池の面ゆいき立ち騒く小さかも水底にくろき鯉の子のむれ

眼をとめて見ればかすかに動くらし朝寒き池の鯉の子のむれ

池の水ひとところ黒く青みゐてそこにかたまる鯉の子のむれ

勞働哀歌（五首）

うつつなく吾が瞳ひたりと思ひつつ樂しき酒のさかづきは置く

父も斯くありきその子の吾れもまた安げに夜々の酒に親しむ

働きて吾が飲む酒にくもりなし曇りなきこの酒のたのしさ

人間の吾がいとなみのいとちさく恥かしき中のこの酒の味

安居して吾が飲む宵の一合あまり二合足らずのこの酒の醉

さびしければさびしき顔をせるばかり何の不思議もあらざりにけり（大正十二年）

しみじみと庭の青葉を見てゐしがまたも心の騒立たむとす

あくび出であくびの涙目にたまりわびしいかなや秋の日向に

おもかげはまなかひに玉と見ゆれども玉にあらねば手にもとられず（大正十三年）

さびしきものはなつかしきかな青草の野蒜の花の風に吹かるる

こころよく笑ひたるかな聲あげてげにこころよく笑ひたるかな

大悟法利雄

狩野川の朝の河原にひとりゐて聞くは川べの鶯のこゑ（大正十四年）

かいかがみ朝の河原に時久し遠き瀬の音うぐひすのこゑ

二日三日吹きつづきたる風の痕の砂にこりて濱は冬凪

さつき見し疊の上の塵ひとついつまで我をなやますことぞ（大正十五年）

ふと見れば廊下のはてに日が射せりいかにも春の朝らしき日が

浪音も聞えずなりぬ靜かなる初冬の夜のいま十時過（昭和二年）

いそがしさ口にはすれどつぎつぎに仕事片づけてゆくたのしさよ

しつかなる心にをれば窓に來し一つの蠅もたのしさとなる

可愛さよわれにいたづらせむと來て岬子は庭の池に落ちにき（昭和三年）

畑いぢりこの頃すれば畑つ物茄子胡瓜などの夢も見るなり

子供たちさきにすまして出で行けば大人ばかりの靜けき夕餉

出がけには朝刊を買ひ歸りには夕刊を買ふならひもしたしき（昭和四年）

立ちながら讀む夕刊の讀みづらさラッシュアワーの電車のなかに

東京もよしとおもへどたまさかに沼津に歸れば沼津の靜けさ

内藤鋠策

歌集「旅愁」より（七首）

人を見ぬ寂しき昨には秋花の白きかげのみ映りぬるかな（一九〇六年）

薄青き霧・夜明のそことなくかの小鳥らの死骸は見ゆ（一九一一年二首）

おともなく鴉は樹より樹へうつる一羽の鴉さびしかりけり

われ、汝の[illegible]を欲す、何よりもその無言は愛すべければなり（一九一二年四首）

五月来る、苦痛に集る若者のうへ蒼空は無事に臨むなり

かの、オランダのギヤマンのしづけさもて、わが空想の前に青む夏の夜

一群の青すすきたそがれゆき、今か水上に月出づるなり

＊

あなふかく霧おりたりと人らいひておどろきかはす夜明なりけり（一九一七年二首）

くさむらに水の音きこゆぬばたまの月夜にきけば人のごとしも

はらだちてものいふときは幼児の持たぬことばを眞佐子がいふを（一九二〇年）

はしかかぜひきたるならむ兒のはだへふきでのいでてあますところなき（一九二一年二首）

口にも口にもあぎとにもゐるといふ吹出見てゐるからに兒を[illegible]死なしむ

ふしをがむこころなりけりともといふともはなれてひとりゆくわれを（一九二二年）

まれにあへるひととひととのはなしごゑたけのそよぎのなかになりにけり（一九二三年）

しんさくもこころよわりてありけりと死にてののちにいふにかあらむ（一九二五年）

かたなのつば二つ

あふひのはが、うらとおもてをみせてゐるみづうみのみづのてりかへしのなか（ゐちぜん、きない）

くもとくもとよりあふかげか、なみとなみとまきかへすくまか、くらいひとところ（さうしう、よしふる）

ひるのつきがそらにしみるのかひるのつきにそらがしみるのかあをいひるのつき

かはどこのみづあかをためてゐたあゆのそのみづあかのやけるにほひです

おばあさまはほとけさまでせうくるしみにも
たのしみにもいつも[illegible]してゐる

前田夕暮

大正二年――三年

樹に風鳴り樹に日は近くかがやけりわれ青き樹にならばやと思ふ

雪の上に空がうつりてうす青しわが悲しみは靜かに燃える

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日の小ささよ

岩はみな觸覺をもてるごとし夕日あかあか岬にしたたる（白濱）

傾けるこの岩かげの古船の胴の間に赤いいつぱいの夕日

腹しろき巨口の魚を背に負ひて汐川口をいゆくわかもの（大原海岸）

大正四年――五年

日の反射はげしき山の麓行き黑き洋傘ふかぶかとさす（富士山麓）

ひたふきに眞竹藪吹く夕あらし眞竹なびかひ日はただよひつ

あからかに濁る日輪地になびく大竹藪の上に光らず

初冬のつめたき朝の日の光あたらしき山羊の乳のしぼりたて

大正六年

うつばりに青き烟草をつるしたりその下にゐて樂しかるべし

日の暮の街路を走る亡き父の柩車のきしり體にひびきたり

亡き母にわが申すべき言葉なし一人の父をここに死なしめき（父、病院にて沒す）

青竹の平そぎ竹のひるがへりひるがへるなかに籠あむ男

青竹を二つに割りてさらにまた音たてて割る四つにはた八つに

階段のもとにきたりて父よ飯とよぶ聲のする父は病めるに

大正七年――八年

秋の夜は土間におかれし泥甘藷のなかにてなけりこほろぎのこゑ

故郷は冷たき土のにほひしてこほろぎのなくうす月夜かも

春あさきうしほのながれ大空のいろより寒くうねりたるかも

磯草の穗立は粗く砂を抽きて新木船の腹にふれなむとする

雪かつぐ山にむかひて幾うねり寄せくる波のおほうねりはも

あかつきの波の光はかそかなり渚べ人のどよめき聞ゆ

くろぐろと人動きゐる渚べに光りて消ゆる波のほかしら

砂山に立てる小松のくろき葉の時折り光る波のうねりに

大正九年

ただなはる秩父むら山ふもとべの曠野にいでて人畑をうつ

あらはなる野土のうへに夕日さし人群かりて山に急ぐも

空濁く日は照りながら曠野行く人はかくろふ雪解の靄に

山原に人家居して子をなして老いゆく見れば命いとほし

出水川あから濁りてながれたり土より虹はわきたちにけり

大正十年

淺宵の濡れし硝子を這ふ螢、螢の腹はしとどに濡れたり

打水の冷え冷えとして光りをり彼の刺されしところなるべし（西[illegible]さろ）

いただきの尖れる山はあかあかと朝焼けにけり高山の上に

山原の落葉林の山毛欅木立もとだち太くむらだてるかも

大正十一年

風ぎあかきあけ汐どきの外海に日は寒々と夕づきにけり（武臣）

對岸の砂原遠き日のかげり徒歩行く人はつばらに黒し（經子）

ただに赤き斷崖のもとへうべうと風浪あがる眞冬の海は

日はあかくしぶきにぬれて風波のたちのまにまにただよひゐるも

床のうへからうつすらと黒い男體のいただきが見え夜があけてゐる（中[illegible]）

あをあをと蔽れて冷たき男體のまろはだ近し硝子戸の外に

わが部屋の障子の紙のしつとりとしめりて朝をこほろぎなくも

いづくにか地蟲かないてゐる朝を芝刈りをれば心しづかなり

大正十二年

春あさき山の麓の山崩あとに紫雲英の花の咲くあはれなり（山の歌七首）

山崩あとの一面あかき日の光雉子尾をひきいてて遊べる

山原の伐り拓きたる新畑のばら播き麥のいまは青みつ

青空とすれすれに高き五千尺の山の尾根にも木を植うるなれ

雪解靄日に烟りたる山峽に炭燒の妻もいでて木を伐る

しろじろと光る炭木の白山毛欅をはらりはらりと伐り仆しゐる

朝はまだ冷たき山の五月なり朴の丸太のうす青みたる

山時雨ひそひそとして濡れながら馬に話をする男あり

夏されば木の花しろく雜草の花あかくして山は樂しき

吹き晴れし薄暮の空に傾きて富士うつすらとあらはれてゐる（山中湖畔）

春あさき大棚山の朝ぼらけみそさざいゐて高鳴きにけり（山小舍にて二首）

うすあかくぬれし小枝をさしかはす窓べの雜木手がとどくなり

いろうすき島の二月の菜の花の水仙まじりさくあはれなり（城ケ島）

洗ひ場に投りだされし一本のまぐろは黑く影つくりゐる（魚市場）

大風に吹きあふらるる岡の上の警報球は赤かりにけり

しんかんと心寂しくなりにけり日あたり明き路ゆきにつつ（御嶽三首）

山上は雪に照る日のさみしけれ塗り赤き門を吾等は入るも

朝風に吹きあふらるる青樫のざわめくきけば既に春なり

莖太き山獨活の花しろじろと日をささげたり山は空晴る（鹽原二首）

秋あつき山の日照りのあかければ山獨活の花開きすぎたり

土の上に青き幼きはたはたとともに眠りし夜はあけてゐる（震災三首）

大空はしろき炎の層をなし地震雲わき人地を走る

大川の青き流れは燒原のなかま二つに押しわけてゐる

大正十三年

行くところまで行くのだといふあきらめのみづからをみる寢臺のうへに（病院にて四首）

施療室の春の夜さむを蒲團よりみな足うらを出して寐てゐる

ぽつちりと電燈くらい大部屋の空ベットのそばに誰か立てるらし

鉢植のすかんぽの穗はほほけたり晴天の日を退院するも

矢代東村

街上

來る自動車も
來る自動車も
むせつぽい砂ほこりあげて
通りゆくばかり。

●

ここにもゐて、朝鮮人の人足は
石をはこんでるよ。
幾人も、
幾人も。

四十

これが四十といふ年が持つ
倦怠なのか。
若葉に見入る。

小さい兩手

兩手を出して
小さい兩手を出して
その父に
その父に特に
抱かれたいといふ。

●

疲れて
外から歸る時にも
お前のことを思へば
愉快になるもの。

第十回メーデー

××。
××。
また××だ。
しかし思へ。××しきれないものを
みなが持つてる。

●

見ろ!
司會者のあのよれよれのネクタイを、
だが何とひきしまつた口だ。
かがやいた眼だ。

●

今に、必ず——
今に、必ず——
歩調をあはせて、行列は進む。
この音をきけ。

歌舞伎座の廊下で

今となつて
誰が
君達の、その立派な
服裝なんかに
ひけ目を感じる。

●

君達だけに
この長椅子と絨氈が
あると思つてるのか
煙草吸つてやがる。

流行おくれのパラソル

妻よ。
お前も勇敢になつたな。
流行おくれのパラソルを持つて
平氣で出てゆく。

中島哀浪

柿

柿もぐと樹にのぼりたる日和なりはろばろとして脊振山見ゆ

のぼりゐて吾が柿を食ふ樹の梢に小鳥つぎつぎ來てにぐるなり

熟柿をとりおとしたり樹の上に惜しむ言葉をひとりわが言ふ

柿の樹にひとりのぼりてゐにければ痙攣る脛をさすりやはらぐ

彼岸花咲けるところと落しつる柿の在處を子に教へをり

もぎたての朝の柿露しとどなり竿よりはづす掌にしみにけり

見きはめてわがもぐ柿は皆うましこの山里に生ひたちにけり

聲あげて吾子ら追ひをりのぼられぬ高樹の柿をつつくひよどり

熟柿を食ひすぎし子の寢床をはなつ夜頃となりにけるかも

柿をむく刃音身にしむ夜ふかし外の面は霜の降りゐるならむ

柿むきてかじけたる手を榾の火のほだちに向けて妻とあたるも

野風呂より柿の熟れ實を見させつつ肩まで沈め子をぬくもらす

柿落ちし音とおもひて聽くときに裏畑の雞のおどろく聲す

今日もまた野分やみたる夕緣の柿の落葉を掃きおとしをり

柿の葉のしきりに落つる夜なりけり月のひかりに見えてさみしき

村人ら柿をもぎつつ話しをり大樹の枝に分れのぼりて

枝ながら遠足の子がさげてゆく柿の實赤しわが見送るに

澁柿と知りつつ見るにおもしろし都の友らもぎて食はむとす

昨夜の風の吹き折りにける柿の枝實のなりながら地に青々し

風折れの枝の青柿あまき實に齧りあてたる子はよろこべり

熊谷武雄

寒の雨

霧ひきて寒の雨降るあしたなり角兵衛の獅子ぬれつゝは來る

尾根越えのつまさきあがりとなりにけりしだいにひらくる遠海のながめ

ふき通る山のなぞへの風さきにまひあがる黄葉の谷越えて飛ぶ

くらふ米つくるにすぎぬ百姓の此一生も半すぎたり

手長野の霧のしづくにぬれて咲く通草の花はたゞに散るべき

閑古鳥木の芽田樂山ずみのこの一日も無事にすぎにき

秋風なり妙見山の夕壕の青きまこもを吹きならすおと（磐城相馬にて）

白萩の露をめでつゝしましだに靜かなる心たもちてあらむ

野分のあとの東日本は朝晴なり青空にそびゆる牟呂峰、けんもつ

百姓のあきあけどきとなりにけりおちつきて茶をのむ日少なき

誰にとの心づかひはなけれども山ふかく來て見る草紅葉

朝ざむの野路をゆけば冬枯のすゞめのちいいいいいやひき風にふかれゐる

みちのべの冬枯蓬しをれ葉のまゝにたもちて霜月に入る

みちのべの霜枯小草黄くち葉のわづかにたもつかげのさみしさ

米の値の下がる一方なりいたはりてこの老いの馬飼はねばならず

霜月も末となりたり老いし母大師團子の粉をつきてゐる

濱の男の地聲とほりてものものしふつけ雨をふせぐ船かけ

荷鞍馬に乘りおろしゆく谿の路くだるにつれてふかし朝霜

あきらめて百姓となりし日は久しこのたなそこのたこよりのかたさ

みちのくの草屋の軒の大氷柱見なれても倘おびゆる尖り

楠田敏郎

工場長はしよぼしよぼの眼つきして不平云ふ若者にとりまかれ居る

あきらめてひとり差換をしてゐた老職工も酔ひては何か云ふ、云ふ

手に掴んで握飯食ひながらなんとみんなのあかるい顔は

みんな健康な顔を突き合せて物も云はずに食ふ、食ふ、食ふ

あかぎれのきれた手に切符を受取つてぱちりとはさみを入れた（女車掌二首）

着飾つた娘の前でもたじろがぬ女車掌の氣もちがぢかにこたへる

切符に鋏を入れるときすこし氣取つたのをこのもしく見てゐた

つねに口はばつたく云ひながらとおもふゆゑみすごしがたきなり

何がさうさせたかにはおもひいたらずわが立場ばかり云はうとするか

彼女らはほがらかに自分の仕事をしてゐるのだと、そんならあの眼をみろ（マニキュール三首）

厚化粧の顔の表情を歪めて商品棚に立つのをみても女の進出だと云ふか

人形で濟む仕事を生きた我々の仲間が奪はねばならぬ世相に思ひ至らないか

嫁になつた會社を自分だけやめてそれでよいかと責められる

いざとなれば自分の身だけを護つたではないかとあざわらはれてゐる

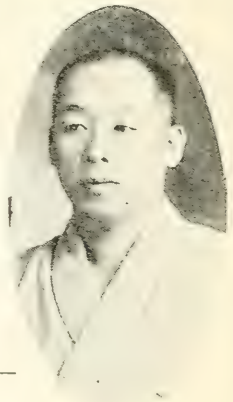
誰の下でもこだはりなく働けるあいつらが羨ましいけれど

唄はせて置くと知らぬ間に仕事のはかどるのを誰か考へついた（よいとまけ）

年齢を考へたがるくせだけを殘してもうそばにはゐなくなつたひと

やつはりわたしを寂しがらせに來ただけのひとだつたと書く返事

ビルディングの窓から窓へいまほがらかな夜景となる

若い記者をむきになつて叱つたあとのさびしさにハンカぎつてゐる

米田雄郎

片照りの山に百合の根ほりにけり鶉のとほねかそかなるかも

しづやかに輪廻生死の世なりけり春くる空のかすみしてけり

おほきなる入日目にあり立枯れの原を默してゆけどもゆけども

白藤の垂れ咲く下をとほりてはこころさみしく花に手ふるる

兒がために目ざめがちなる小夜ふけにきく松風はさみしかりけり

柴部屋の戸まへの砂のもりあがりつくしいでしをよろこべり妻

なく蟲をたどりていでしこどもらはみな素足なり月光の庭

をさなごは床にめざめてうぐひすの朝の音色をまねてゐるかも

あくびすれば涙いでたり松山にまじりてさけり山ざくら花

ひとりゐの心安さは麥の飯隣に行きていただきにけり

竹やぶに白き木の花咲きそめぬ今年の旅にいでてゆかなむ

ぬか漬の淺きうりにお茶づけの朝餉するなり山にむかひて

おだやかなる聖法然を思ふなりこの國の空のあけ雲雀のこゑ（旅に）

ひとり居の安さねそべるかたはらにきたりて蛙舌出してをり

一枚の葉書におのが思ふことやうやく書きて末の子は七つ

霜晴れの空に轍の響あり坂を車の下り來る見ゆ

雪投げのそれたる玉は正面の御堂の障子つらぬきにけり

子が投げし雪の跡なり本堂の扉にかたく凍みついてゐる

きちがひの作業畑の麥の穗は風にゆられて曇天である

きちがひの血をさされても子兎はらすらに赤いやさしい瞳

廣田樂

被搾取階級のあらゆる感情が聴えるのだ
夕空一杯に湧きあがる汽笛

絶叫と悲鳴と呪咀ともつれあひ呼びかは
すやうな日暮れの汽笛

自分のからだからほとばしるやうにも感
じられる夕方の汽笛のなかのひとつが

はたと鳴りやんだなかにひといろいつ迄
も低くのぶとく響きわたる汽笛

都會を包んで鳴る夕方の笛を聴けそこに
こめられた感情を聴け

屋根から屋根へ煙突の影の引く線が煤け
た視野をひきしめてゐる

視野のかぎりは煤けた屋根だ煙突に影の
斜線に日が遠く落ち

室へ這入るなりある反撥を感じながらわ
ざと笑つて自分をもごまかす（ある會合の席十首）

みんなの視線が邪魔者とかいて消えたら
しいストーブの火が赤々搖れてる

這入つたとたん華やかな空氣がすつと褪
めて其滓のやうな色に椅子が据ゑられた

邪魔な奴だと滿座の目がみんないひなが
らでもとり〲に華やかな挨拶

室の調度の豪華さにひしやげた心をば額
の風景にそつと遊ばす

存分に人をもてあそぶたのしさを目と口
で喋りながら靜かな婦人達

針のやうに吹つかゝる輕侮の目にかこま
れとりすまして飲んだ紅茶一杯

誰も話しかけない自分も默つてる電燈を
こめる埃りの細かさ

程たつて死んだ者でも歸つたやうな仰々
しい挨拶にまた椅子を立つ

自己宣傳に利用されてると感じながら其
挨拶をすなほにうけてる

白く輝く建物の間を停車場から觸手の
やうに汽車がのび行く

草土手を淡綠の線に映してるすつきり晴
れた朝の濠の面

陽がけぶる朝の鋪裝路靑バスが眞一文字
に突つぱしるなり

川端千枝

落葉松の林なかばの下り坂豫感まさしく
湖が見ゆ（山中湖三首）

親馬の頬におのが口とゞかせて放牧の仔
馬ひそかにぞ居る

吾がまなかひかすむとおもふ須臾にして
湖の面を雲のゆく見ゆ

うたゝ寝の子の服ぬがすポケットの中に
ちりちり小鈴が鳴れり

手袋をはめてやるなりかじかめる小さき
五つの指先わけて

眼の前にひそみて迫る死を知らず落葉は
きよせ母の在しき

こゝに倒れて終には生きぬ母なりき萩の
根土の少ししめれる

電燈をつけむと探るつま先に子が敷きく
れしふとんのさはる

井戸ばたに捨てし氷のきよらかさ芹の若
芽の青きが透きて

藁沓に雪ふみしめていつも來る小松菜う
りの今日も來にけり

向う岸の家に灯はつきおのづから歸る
心の急がれにけり

弱き身に今のやすさも捨てがたし縁談の
ありてしみじみおもふ

天洋丸の大き胴體岸壁をはなれて青き海
の眼に沁む

川風の吹きて涼しき木下かげゆるみし帶
をわがゆりあげつ

夏されば子らは輕げにゆきたけのみじか
き着物つけて遊べり

馬目の實の屋根にころがり落つる音いね
つゝきゝて寂しかりにし

ひとくきの小草のかげもあざやかに吾が
居るほとり光さみしき

川原風さむけく母のきり髪をみだして吹
けばはやも歸らな

脊のぶれば手ふるゝみかん枝しなひ搖る
がうれしさ迭みに手觸る

ひと度の怒りも妻にみせずして終りしと
いふものたりなさか

窪田空穂

大正十年春、信濃なる家兄の重患を見舞ひて

通なるがわかりたまふやと兄の顔に顔さし寄せて我が問へりけり

聞き分くや否やと惑ひものいへば嬉しくも兄の頷かします

兄を葬る（二首）

見をさめと我が見る兄のその面慕へる父に似ては見ゆるを

父母の御墓の間をわが墓と羨しやも兄は占めましにけり

故里の野に出でて（二首）

げんげ田の敷く紅の打續き打重なりて雪の山に迫る

目をつけて我を見にける目上人今は殘るなし兄の死ねるに

夏さるころ（三首）

淺みどり初夏の空見を廣み眺めわがをれば涼風の來る

冬青の葉の群葉の暗さかがやかし瑞葉あらはれぬ梢梢に

岡の上に一もと立つ木眼をやりて我が見る毎に瑞葉をどらす

母なき我が子と語りて

その母に生寫しなる女の童今は忘れて母を知らずとふ

この子ゆゑ命懸けにし母なりと我は知れども子は知らずけり

母のこと忘れしといふ子を聞きてそぞろにも涙我が落しけり

うつし身の今にかかはりあらざればうべ忘れけむなき親がことは

忘るれば悲みあらず悲みのあるなと死なむ母は願ひき

或夜

勝ち負けを爭ふ一人手をとどめほととぎす啼くとつぶやきにけり

盛暑の頃に（五首）

立ちこむる八重白雲の鈍く照り一人動く我の汗流れやまず

我が行くは眞日照りひかる白き路しばしたたずみ眼をつむりなむ

腹這へば疊ひややかにして快し蟬の聲する眩しき外の面に

鳴く蟬を手探り持ちてその頭をりをり見つつ童走せ來る

槻多き雜司が谷通り夏の夜を人出で來り靜かに歩む

筑波山、男體の峰にて（二首）

筑波やま男峰の傾斜三千尺を直にしなだる眼に障るなく

筑波やま男峰のなだり日に追ひてなだれ極まる裾を見にけり

大正十一年、元日に（三首）

新しき年立つ今日を廣き見む遠き望まむと家出でつ我

松立てる町とほりくれば洲崎の海雲なき空と向ひ相照る

大川の豊けき流れ家に隠れ雲たなびけりその家の上に

大隈早稲田大學總長薨去の前後に（九首）

君なくば早稲田學園なかりけむ學園なくば我よここに居じ

學園の幾つはあれど失意にておはしし君が學園を我は

その人のあらぬさみしさ我がいへば人もいふなり國内然らむ

總長の遺囑語りつ語りあへず高田學長泣くといはずやも

天皇の御使來まししぬび言宣らすを見れば畏しや君

髭白き逍遙先生遠道の長路行かす今日の御供と

病重き高田學長遠く來て仕へはまをす今日の御供を

萬國の公使が捧ぐる珍の花君ます殿を狹め埋めぬ

かかる葬儀またあらむやと人のいひ見はりしその眼しばだたきたり

初冬

冬の空澄みて深きに槻の枝いよいよ繁くいよいよ細し

春

うららかに日のさす庭を眺めをれば土いぢりたく木を移しけり

大垂水に遊びて

蕗の葉の翳す圓葉の青笠の小きが並ぶ小草の上に

諸友と犬吠岬に遊び、犬若の大岩を望みて（四首）

海の上に躍りいでたる一つ岩寄する波嚙みてしぶきと散らす

海の上に立てる一つ岩その形怪しと見るにいよよ怪しも

青波の照り廣らなるに一つ岩黒き頭擡げゆるぎ出むとす

青海に向ひて立てる一つ岩そこに人行けば人を蟲と見す

同じ犬若の浦にて（四首）

眞裸の色黒わらべ盥舟海に漕げればその盥走る

裾からげ小さき尻出しよちよちと歩む手童海に入りて遊ぶ

海に入りて遊ぶ女童寄る波の顔にかかれば聲立てて笑ふ

磯の上に腹ばふ童女童に顔さし寄せて笑ひもの言ふ

ものを思ひて

いつの時か今宵の如くわが前の紫檀の卓に電燈照りき

日本北アルプスの縦走をし、槍が岳西の鎌尾根にて、暁、雲海のいみじきを見て(八首)

まどろむにこの夜明けたり槍が岳西の鎌尾根の一つ岩根に

高天の海となれるか眞夜中を湧きて凝りたる眞白雲かも

我が立てる岩を殘して凝れる雲白く平けく遙けくも空に

雲海の上に横臥す乘鞍や嚴しと見ける峰の靜けく

雲海のはたてに浮かぶ燒岳の細き煙を空にしあぐる

明け昏れの空明らめば雲海の雲打光り光りつつ崩る

凝り沈む雲くづれては散るなべに千尺の深谷あらはれきたる

白雲の騒ぐが上にあらはれて鎌尾根つづく槍の穗の方に

石神井、三寶寺池にて(二首)

睡蓮のしげき浮葉のあひに見る水眞青なり古き大池

水の奥にある睡蓮の青き葉のかすかに見ゆる日のさし入るに

をりをりに(二首)

鳴かずなりし鈴蟲放ちわが童庭を見つめゐる小腰屈めて

欲しかりし玩具の積木買ひてもらひきよろきよろと町を見廻せり童

箱根に遊ぶ(五首)

初冬の澄み渡る空の深みどり松山の松に溶け入るらしも

薄原ほほけつくしし白き穗の日に光りつつ消えかも行かむ

薄原ほほけつくしし白き穗のただに立ちたりそよぎだにせよ

薄山この面は暮れていただきの並穗の白く入日に光る

ほほけたる眞白穗薄初冬の空を背向にいよいよ眞白し

碓氷峠の頂より俯瞰して(五首)

冬山なみ見おろしをれば山はただ線としなりて我が目に見えし

山なみのいただき貫く線の行ほしいままにして目にたどり難し

冬山のいただき貫く一すぢの線は隠れぬ澄みたる空に

冬山のいただきの線は空に消え分るる線は谷に亂れ入りぬ

冬山なみ見おろせばただに線と見ゆ亂れに亂れ靜かなる線や

松村英一

白粥の煮えをよろしとわが妻に病みてやさしきものいひにけり（病妻）

草原をわがよぎる時伏せ樋にたぎりて通る湯の音きこゆ（日光湯本）

山峡に晝をこもりてとどろくは簗にせかれて落つる水かも（佐貫川上川）

沼べりの人住む家の噴井戸に大き紫陽花いけてありけり（印旛沼）

まつしたに見おろす海の一つ岩かぶる潮を四方に垂らす（大原二首）

岬の路きはまる端は急に高し蒼潮波の揺れて日に照る

梅雨のあめしたたる軒にむらがりて蚊柱たてばたそがれにけり

七月のあつき日の面横切りて飛び疾きかも一むらの霧（鎌倉二首）

青山の頂かすめ飛ぶ霧に眼うつし見れば晝の月あり

うち寄する波のしぶきは岸のべの柴垣越えて田の中に飛ぶ（和倉）

起き出での眼に鮮らしき青杉の秀つえにかかる一むらの霧（筑波山三首）

しづみたる霧のうすれて眼の下に肌明り来る青草の山

天つ日の光かくしてふりしづむ霧の底ひをわれは歩めり

江の水のつめたき色や遠方に梅雨雲うごき夕さらむとす（潮来二首）

梅雨ふくむ空ひそびそと暮れかけて江の上ひろく波立ちそめぬ

立襖のかげに隠れて子ぞゐると時には迷ひ嘆きつるかも（子逝く二首）

わが部屋をとりかたづくと見出しし亡き子が玩具袋でもかねつる

深霜に凍てて落ちたる茶の花の小さきがあはれ落ちたまりつつ（初冬三首）

茶の花は開きつくさでこぼれけり日かげの庭の土は凍てつつ

眼に立ちて土のからびし庭の上にしぼみて落ちぬ小さき茶の花

つややけきつはの葉の上にかすかなる日の影しみて冬ならむとす

たのみつるこれの藥ものんどさへ通らずなりし父のおとろへ（父逝く四首）

筆の穗に水をしめして含まする今日の別れと遂になりしか

草萌ゆる春の朝の土ふかく父をうづめて歸り來にけり

この庭の青苔の上に散る松葉ひろひたまへりすこやけき日に

曇り空くらきにうつる篝つ火の焔はあかく消ゆるともなし（大震災雜詠八首）

閉されたる門の戸叩き呼びおこすわれの聲音はふるへたりけり

家の中に妻がいらへの聲きこゆ恙もあらずここにありにし

いつ如何になりて果つらむわが身かと焼けひろがれる町見つつ來し

廣庭の土にし殘る骨のかけら心つつしみ踏まであゆめり（被服廠跡）

ここにして死にける人は數知れずみ骨ちらばる土の上に居り

焼灰の立ちまふ中をかけめぐり失ひし子を親のもとむる

らふそくの光をぐらき室隅に馬追ならむ翅をする音

白壁の家づくり多き櫛生村奈良街道はここをとほれる（月ヶ瀨行）

埼玉の大澤の町の國つ道地圖ひらき見て一人行きけり（古利根附近四首）

東京をわづか離れし町ながらこの靜けさよ保たまほしき

町裏の深田の土を鋤ける馬大き栗毛は汗にあえたり

家並のあはひに見れば馬が鋤く深田の水は白く濁れる

久延寺の裏山ぬけており來れば東海道の道とほりたり（小夜の中山六首）

日にしろく光る若芽は水楢か古きみ寺の裏山みちに

楢の芽のしろくかがよふ春の日に小夜の中山我が越ゆるなり

路の邊の石のおもてにかすれたる南無阿彌陀佛讀みたどるなり（夜泣石）

紫のいろの淺きをあはれみて摘める菫は莖ながかりき

淺谷の白砂の上に道つくり水乏しらに流れたるかな

半田良平

水郷潮來（六首）

牛が鋤く出島の小田の堅土のかぐろき土は舟の上ゆ見る

一日の田爲事をへてかへり行く農夫の舟は妻が漕ぐなり

與田の浦を漕ぎたみ行けば思はぬに帆を傾けて大き舟きたる

あは〱と夕日さしたる大河を漕ぎよこぎりてわが舟泊てつ

水の邊は夜明くる早し軒並にこも〲起る鷄のこゑ

まむかひの河岸に凝りたる朝靄の流れはじめて天明けにけり

祖國日本（二首）

年まねく賴みたりけるこの國をいまだも賴む吾命を賭けて

この國をたゞに賴みて在り經れば憤ることのなしと言はなくに

讀書（二首）

善し惡しは我に分かねど讀みもてゆくカルルマルクスの書の親しさ

とつ國のカルルマルクスが書きし書よみ親しみてわれの苦しき

庭前早春（二首）

庭さきの槇の根方の盛土のしろく曝れつつ春ならむとす

霜柱いたくは立たぬ庭の面に昨夜のなごりの風ありにけり

晩秋（二首）

庭の面にさ筵敷きて乾す籾の乾しあまりてか路にまで乾す

乾してよりいくらも經たぬ籾の上に槻の落葉の既にたまれる

冬の甲斐路（三首）

迫りあふ高石垣をよろしみと橋は架けけむ珍の猿橋

今日たま〱町に出で來て自動車に驚きやすき馬にあるかな

遠世人の心ともしも夕日さす傾斜を選りて村をつくりし

箱根（三首）

深谿の底ひに激つ早川の水の乏しさ覗き見すれば

秋山を淸しみ行けば電車の軋み山の上にしてすぐ止みにけり

箱根路の舊街道の石疊踏みくだるわが頭に應ふ

武藏志木町（三首）

一筋の町なりながら通には細き流が音立ててゐき

大槻がおとす木の葉の屋根に散り樋にたまりてその色のよさ

鳥さへも勢ふとならし大槻にこの朝群れてむき／＼に鳴く

をさな子（二首）

いつの日か活動寫眞俳優の名は覺えけむをさな子がいふ

をさな子が常聞き知りていふことの面白くして夜をこもりぬ

大和にて（二首）

田の中に殘る礎おのも／＼へだたりもてり大き寺の址

卑しき際にあらぬがこの丘に葬られければ跡とゞめたり

梅雨ごろ（二首）

下草に昨宵かも散りし野いばらの花びら白く眼に觸れにけり

雜草のおどろが上に降る見ればこの五月雨にこゝろゆくなり

銚子―犬若（三首）

川口にこゝだく泊てし船さへも片寄る見れば廣き川かも

わが見るは壁なしつゞく斷崖にうねり寄せゐる浪ばかりなり

この浦にわづかに人の住みつきし名洗の村は浪越しに見ゆ

越ケ谷御獵場（四首）

御獵場に群れてや騷ぐ鳥が音の喧しくして寂しかりけり

御獵場を彼處と見れば百鳥の聲鳴きこもる常磐木の森

人避けて川のまなかに泳ぎ出し鴨はいさゝか流されにけり

鴨どりにたま／＼まじる鷭の鴨は洲にのぼり鷭は水に浮けり

高澄山（三首）

向つ尾につけたる道は山奥の老川村にゆくといふなり

草蔭にわづかに見ゆる細谿をわれは賴みて山くだるなり

椎茸の苗場ちかくまで降りしとき細谿川は音に出でつる

淺間高原（五首）

高原にとび／＼立てる家の前中仙道は行き春けかり

日の暮にわづかに晴れし淺間嶺のふもとの宿に今宵寢むとす

街道をゆきつゝ見ればこの原の傾く裾に村ありにけり

古宿の家並はすぐに出はづれて道はまた行く高原のうへ

原なかに小學校が立ちてありこゝに通ふ子の家はいづらぞ

宇都野研

鉢の白梅に對して（三首）

打ちみだれ息づきをれば傍なる鉢の白梅しづかさに過ぐ

息づかひ和にあらぬか白梅の傍への花をかへりみて思ふ

しづかなる花なるかもと顔よせ見るわが眼うたがへり白梅の花

卓上

水揚げずなりし水仙卓の上に捨てずしもをればよき友となりぬ

三階の窓から（三首）

うすぼやけ睡むたゝをればその聲のなまめく雀頭のうちに啼く

いぶし銀に照れる瓦屋眼に展け濁りぼやけて空ひくく垂る

空ぼやけ眼のまへの瓦屋まぼしかりなまめきて啼く雀はいづらぞ

ある日（二首）

觸れなばあやふかるべき頭なりそつとしておくに如かずありけり

けふの頭かみそりのやうなり觸れくるもの切りさいなまば後のさみしからむ

書齋の窓より（二首）

ぼやけたる空に一ひらの雲あらはれけぶれる梢の上に坐りぬ

この室に坐れば見ゆる大煙突わか葉せる槻の向うになりぬ

深夜

ねむりぐすり服みてほどあり枕もとに初蚊のこゑ一つきこえをり

ねむり人形（二首）

就眠かれぬ今夜のこゝろに眠り人形足投げさせてあかるき顔を見る

ねむり人形あかるき顔にさめてをり寝かせば眠るうらやましきかな

子と語る（三首）

日曜はまる〳〵業を休めと云ふこの子よやんちやと今も思へるを

のび〳〵と一日もあり得ぬ窮屈さをそこ父の上に感じをるらし

窮屈とも本性となれば苦にならぬをさな心に移して思ふな

省線に沿ふ途上（三首）

郊外の家並とぎれ草原あり夏草のみだれほしいまゝなり

刈り退けて今にも人の住みつかむ郊外空地の荒草の原

たけたかき道の竹煮草省線電車の窓にあらはれ葉裏ひからす

對馬完治

戯れ(五首)

はかなき戯れごとと思ひつつあな怪しくも我が胸をどる

戯れと偽しつつ胸のをどるなりこの喜びをまことといはむ

戯るる心持たずば今の世は得べき愛すら得ずや終らむ

我が父と母とより享けしこの性の我の心を戯れしめず

盗人が物ぬすみする喜びを戯れをして我れ味ひき

復興途上(六首)

日本橋の本通り一氣に横斷せり東京驛に至るべき新路

新路よくも擴げられたり下町より東京驛の全景が見ゆ

工事中の新道路の幅いつぱいに東京驛は現はれてあり

日本橋より東京驛に至る新道路焚火もえ立ちて野原のごとし

日本橋より東京驛に至る新道路刻々に完成されつつあり

御大典の折、大井町の寓居にて(三首)

繩張りて通行止めせる橋の上犬さきにゆきて振り返りたり

宮廷列車過ぐる音きこゆ朝日さす玻璃窓にわが面むけにけり

宮廷列車過ぎにしあとの靜かなり玻璃窓に來て蜂の飛びをり

窓さきを人通りをり宮廷列車を拜みし人の今か歸りゆく

友の家の階上にて(三首)

窓あくれば隣家の庭のまる見えなりあわて心に閉めむとはせり

隣家の庭みゆるに見じと我がせしが人の居らぬに見下しにけり

山吹の黄の花搖るる庭にむかふ縁の硝子戸さむく閉されぬ

濱口新内閣を評す(三首)

大命降下一擧に組閣を終りたり新時代的の急速度もちて

嘗ての國民大會の猛者小泉が閣員に列し生色ただよふ

金解禁を目的とする經濟政策の外なしといふその鮮明さ(政策發表を)

川崎杜外

山の雨

大正十五年の元旦をむかへて(二首)

天地のあらたまる今日と思へかも家にこもりて心うき〳〵し

我門の雪ふみ通る人ありて元日の夜の更けにけるかも

寒夜深く井水を汲む(二首)

冬の夜をわが汲む井水あたゝかし幾つるべくみぬ心足らひて

水汲むと下す釣瓶はやゝありて底邊の水に届きて音する

明治神宮寶物殿(二首)

かしこみて今見る御硯大君が在りの世にして御手ふらしけむ

國民に仰せ事しも作らしゝこの御机よ常よらしけるを

上尾の丘上(二首)

武藏野の開墾の小畑しろ〴〵と朝霜ふりぬ時のいたりて

このあした落葉を焚きて煙あぐる上尾の里は土に霜降る

大行天皇崩御の報を聞きて(四首)

すめらみこと神さりますと知らせ來る電話のベルの音けたゝまし

午前三時電話のベルはひた鳴れりすめらみことは神さりましき

夜明けぬに號外配り走りゆけりすめらみことは神さりましたり

御惱の知らせ日に日にわがきけりしかすがに今は心悲しき

一月に入り一夜寒の雨ふる(二首)

寒あけといまだならぬを窓ゆする南の風は雨もちて來ぬ

寒の雨一夜ふりあけ朝空のあか〳〵として晴れしすがしさ

北陸旅行の折に(二首)

あら濱は凪ぎて靜けし夜の明けの波打際に舟かへり來し

石置ける渚の家の屋根越えてたゞに眼に入る荒汐の海

信濃に住み古りて(二首)

鹽びきの魚くらひつゝ山の上に身のおとろへを思ひけるかな

人厭ふ心抱きてこもり居りいつか秋來り空さびにけり

木曾路をすぎ(二首)

木曾山の峠の家にうる酒のつめたき味をかなしとぞ思ふ

萱の穂を打ちゆるがしてふる雨や山路をふかく來しと思へり

氏家信

磯山の家に我れをり目につづき海ひらくれど波の音はせず（伊豆山にて）

湯に入ると磯山坂を下り來れば海の面に照れり冬の夜の月

磯の香にまじる湯の香のほのかにも吹きあげて來る磯山の上に

溪川にのぞむ磯山の山椿くれなゐの花咲きてはみだる

磯山の坂に村なす伊豆山村古き草家の立ちて重なれり

磯山坂石垣きづき草屋根の大き家建てり伊豆山古村

居ながらに日ごと我が見る磯山の枯くさ山に照る日のどかなり

戸を繰れば目の前にひらくる伊豆の海今日も沖邊はかすみ渡れり

梅の香のほのかに匂ふ磯山の花のなかみち月照り渡る

髪つみて頭大きく見ゆる子ら枕ならべて三人寢てゐる

まる／＼と肥りし足をなが／＼と伸しい寢をり夜着はげる子ら

單衣着て身のかろ／＼とおとの童跳ねまはりをり狹き部屋ぬちを

輕井澤にて

落葉松に雨かも降ると戸を繰ればあかつき露の落つる音なり

落葉松よりおつる露をば雨と思ひ外に出て見れば月傾きぬ

落葉松の林すき來る朝日かげ青々しもよ下草に照りて

武藏野に月は上れりほの／＼とすすきか原にその穗そよげり

野のなかの家に夕炊のけむり立ち月照るみちに蟲鳴きいでぬ

麥の芽ののびし畑に時雨降り一羽の鴉降りゐて啼けり

ほそみちを埋めて茂る枯すすき風にさやげり時雨降るなかに

働くより乞食するよしといふ子等の顏よく見ると人なみの顏（浮浪兒の寫を見て）

太田水穂

ところどころ

高野山にて(二首)

あけぼのゝさしくる土に手をつきて額をあげたりこの僧らは

道はたゞ岩の根方にうごくもの土の色なる[illegible]をあげたり

[illegible]

漕ぎ入れて荒海の波をよぎる時はるかに友の我を呼ばへる

鐘が鳴る紀伊の御坊はさざなみの春日のをちに屋根をならべて

潮岬突端を出でて見霽しの空より来る船ひとつなし

那智(二首)

きりそぎの一枚岩を落しくる瀧のひゞきはみな煙なり

瀧壺の岩に懸かるゝ水けむり杉の青葉に這ひあがりたり

[illegible]

汽車[illegible]て我に向へる子の顔の面がはりしてはにかむらしき

春土にもえでて紅き百合若芽すこやかにして児はここにあり

花ぐもりいささか風のある日なり晝野火もゆる高遠の山

このあつき日焼の畠の土の上に這ひひろがるはひる顔の花

このゆふべ外山をこゆる秋風に椎もくぬぎも音たてにけり

柿の葉の下闇くらしほとほとと暮れても人の姿を搗き居り

戸を開けて簾の外は鶏頭に秋の朝日の細くさす庭

秋の日の光の中にともる灯の蠟よりうすし鶏頭の冷え

ひそやかに夜雲の底をすかしゆく秋稲妻のうすごころかな

つゆ冷ゆる月夜の壁にすがりなく一つの蟲に枕よせばや

枇杷の葉に雨あらく降るこの二日鶏頭の色とみにあせたり

大河の闇を打ちゆく艪の音の夜寒となりし水のともし火

落葉して庭は冬木の木梢のよもすがらなる月あかりかな

風止んで街は師走の灯明りの靜かに雪の
ふる夕べかな

土の色に雲はそそけて街くらし蒼き光り
に櫻さきをり

善光寺

曙の霧の中より大み堂雪をふかぶかと
あらはれにける

京都法然院

冬青き山を軒端に[illegible]の落葉の金は古り
につるかな

鳥羽(二首)

船つくる工場の邊を山彥に日和さだまる
島々の冬

島々のあひに入りかふ潮筋の夕凪しろき
木枯の海

伊勢參宮(三首)

木がらしにこのもかのもの山際は曙し
ろく吹き晴れにけり

渡會の街路の山は松に日の鶴も啼くべき
朝たけみかな

梢々に嵐の音をふきためて大杉の幹のし
づけき宮居

箱崎神宮

潮にしみ嵐にさびて黑む葉の松たのもし
き箱崎の宮

筑前國府跡

をちこちに雲雀あがりて古への國府跡ど
ころ麥のびにけり

青桑の嵐のなかに人呼ばふをんなの琴の
遠きゆふ燒

風ふけばはらはらと雨の露ながら落ちて音
ある杏のうれ實

枝ながらむしりつくして村の子の今日は
來てゐぬ畑の李

黃金蟲もろこしの毛に喰ひ入りて朝から
暑き雲日照たり

露しづく草の中より水引の二筋ばかりす
いと眼にたつ

物枯るる霜日の庭をのぞくとて晝の鼠の
出でて隠れし

打ち合ふや枝の光りのきらきらと晴れゐ
て空の氷る木がらし

旅中にて

屋廂にとまり雀のくる頃はかきくたび
れて吾れもゐる頃

みんなみの海のはてより吹き寄する春の
嵐の音ぞとよもす

南洲翁墓前

詣で來て花も涙もちりぢりの侘あはれた
る淨光明寺

こし方も行くべき方もおもほえず春の
霞の立迷ふ野に

肥前島原

櫻さく島のあらしに雲仙の大嶽の曇りよ
こたはりたり

古城のよもぎの上手に白々と山より雨の
走り來にけり

西明り町は瓦の屋根並みのさくらにそそぐ島原の雨

青き背の海魚を割きし俎板にうつりてうごく藤わか葉かな

酒藏の壁をぬらして明り雨一日ふりぬ菜のはなの村

食卓の茄子の漬物むらさきに朝々晴れてもずの鳴くころ

雲ひとひら月の光をさへぎるは白鷺よりもさやけかりけり

見し月の空ともなくゝて明けゆくや十六日の朝ぐもりかな

秋しぐれ霽れて月夜となる庭の砌にひびくこほろぎの聲

富士(二首)

ひむがしの天の眞中にしら雪の山をふとしくうなばらの國

海原は波ちらちらとしら雪の富士も遊ばむ島日和なり

三十里谷の霞にねむり來てまなこにすずしあを海のいろ

永平寺 六首

流れ出て千とせの岩にたぎつ瀬の音をこたふる谷の山彦

このあたり瀧はありとも見えなくに杉にぞ響く音たしかなり

萬四千谿間に吼ゆる水の聲道元和尙ここにおはせる

廻廊に立ちて見おろせば谷の杉あをあをとして玉を盛りたる

ここにして杳かに谿に渡したる廊うねうねと雲に入りゆく

法堂に百人ばかりひつそりと大蠟燭の灯をかかげあり

第六公園

このあたり大手と思ふ道幅のゆたかにうねり山に入りゆく

戸隠山

老杉のこずゑを雲のすぐる時心けどほく思ほゆるかも

寒晴れの大日坂にあらはれて盗人ひとりかき消えにけり

渦まきつつ吹きよせ來る土煙寒晴れの空をみるみるよごせる

風いく日乾び果てたる空ながら春みづみつと柳青める

山鳥を送られて

父こひし母やこひしと山鳥のおろろに啼きて打たれけむかも

大阪(二首)

花ぐもり水ひつたりと白けをりねむりねむりの船頭衆の顔

大並藏かべにつやなしのつたりと花曇る日の淀川の水

四賀光子

富士五湖(三首)

長濱のみ坂を越えて日のかげの傾く悲し湖なみのいろ

何物の生けりともなき湖のいろ啼くひぐらしの水にひびける

旅一日不二をこひ來て夕づくや山かげにして宿りもとむる

若竹の風のそよぎに磨る墨の匂ひを立つる朝の手ならひ

戸隱山

青空の北を支へて神山の戸隱山は雲ひとつつけず

また詣る日をいつとしも賴むべき拾ひし橡もいつか落せる

夏空に天つ日ひとつけぶるなり響きをつたふ山猿の聲

雲に濡るるみ山の杉をそのままに庭木となして人は住まへる

飯綱原野馬の背にのりゆけばをちかたにして雉子とよもす

善光寺大門の扉はみんなみの淺間がたけにむかひ開ける

昭和御卽位大典(四首)

玉砂利に馬のあがきの音すると思ふ時しもみゆき通らす

ゆきゆかす秋の海道はるけくも天照る光くまもなからむ

大みゆきの夕となればわが宿は齋ひて掃きて落葉たくなり

法隆寺

秋こゝに十日御代の祝ひに恍れ恍れと遊びてありし我しうれしも

朝空に鵙のなくねも冴え入るや山の根際の塔ぞ見えくる

しきわたすいさごの上に移る日のゆくともなしに千とせ經にけり

吉野(二首)

見るものに谷のもみぢば峯の月いかにいましし月日なるらむ

音もなく霜の日向におつる葉のあはれにつもる月日なるらむ

日光

白々と蓼のしげりに風ふけば秋はま近き戰場ケ原

眞向ひの白根が嶽にどの山の嵐にかあらむ濃くうつれるは

小田観螢

景情

春はまづ雪にうもれし門川のある夜の水のおとに來にけり

春はまだみなかみ遠き雪山にくもらで月ののぼるなりけり

春いまだ霙雨雪とふりかはりけぶれる空の月の形かな

冬ざれの木肌の荒れもほとびつゝ降る霙雨のやゝなじむころ

はだらなるとのもの雪に三日月の春の光の色匂ふころ

呼子鳥鳴き鳴き山の暮れゆけばあまるおもひの身をたゝずみぬ

呼子鳥ことしも春を來て鳴くや四つになりたる下駄の足どり

五月雨のはれまの空の日の道にうれひはすてゝ立ちむかふべき

かはづ鳴く聲もともしく里田には野火のけむりの吹き流るなり

麥焼の煙をやどの蚊遣にて端居しづかに更かすなるかな

うつくしく空のあかねを透かしたる筳山みちの夏がすみかな

さわやかに月に照りくる川波のさびしきときに侘る情なり

木のかげのおのおのうつる西障子日のしづかさのしみる冬なり

瘠せ瘠せてもののあはれを沁ませたる冬山一つそばたちにけり

寂しさのかぎりを堪へて冬の山見る人もなき姿立ちたり

もろ木みな芽ぶけど谷は白枯れの一木の骨に沁む寒さなり

菊の鉢炭櫃のよこにうら枯れてたもつにかたき身の清さなり

庭松の雪にまたゝく星いくついたくは冬を侘びしまぬなり

根室

崎裏のみぎはの蘆の風折れに日もたのめなく落ちて行くなり

潮音社

竹嵐露をたゝみに吹き入れて語らひきよき夜々ともしかた

峰村國一

旅愁

鳥が音にかよふ峠の松風はひとり聞くにぞこまかなるかな

椿搗く杵のひゞきも春いまだ淺々磯に波くづれをり（伊豆）

旅いつか十年となりぬ父母に誓ひしことを憶ひいでつゝ

ひむがしの淺間が嶽に立つけむり嘆きを惹きていまも霞める

あをみつゝ幾重の谷の落ちあへる入山とほき白雪の峯

向う山の青葉にこもる鳩の聲とほきこゝがらに聞けばきこゆる

ばら咲くや庭に五月の夕闇のおぼろとなりし人のおもざし

夏の夜の明けむとしつゝ花いばら咲きつづく道は遠くあるかも

あたらしき麥稈の籠にあをき火の螢をのぞくをさな子の顔

薄青く咲くいたどりの花ありて梅雨に入りたる町中の山

つばめ飛ぶ日ざしの檐にあをあをとそだつ蠶を思ふ夏かな

麥秋の窓のいきれの吹込に絲の小枠は風を光らす

蠶種賣青山岨をゆきゆきてかなしく見たる山里の夏

夕立の雲をあげたる山脈のはろかなるにもゆく心かな

秋風の日にけに吹けば裏ばたけ獨活の立枝は花をつけたり

昇降機すいとかくろひゆきにけりまなこに殘る白足袋の人（三越）

日を赤く落して靄の街並は涯しも知らぬ秋の色なり

秋さむし遠音にひゞく三味線をながしてきゆる水の稻妻

武藏野に公孫樹のもみぢかゞやくと思ふすなはち冬は來にけり

木戸あけてみぎりの石の寒竹にあるじゐたまふ思ひするなり（二田莊）

野澤柿葺

あけくれ

萬歲の聲地にみちて高光るくまなき秋の陽のこころかも（御大典）

うす雲の消えぎえうつりゆく空は秋も更けぬれか雁のこゑ

北山へ夕べとなればかへりゆく雲いささかのしぐれこぼせる

つくねんと蓑鷺一羽おりてをり田づらの靄に朝日射しつつ

地鼠のいでて落葉をかさつかす音うそさむし霜日の庭に

八千尺の高根の雪にさしきたる雪路のあかり明けにけるらし

朝嵐杉檜の雪を吹きしまく空には富士の峯晴れて居り

この道にともにと思ひし精進の得がたき友をまた亡くしつる

南縁の日ざしの枝のしなしなと春を早めにきざすガラス戸

朝夕のおもひをいかにおはすらむ大會はてけふ十日なり（「潮音」大會）

賣りにくる京の酢莖菜春はまだ朝あささむく起きわぶるころ

もも鳥の聲はる春となりにけり眠起きねおきの身もをしまれて

春やまだいつくるとしもなき雪の更級こえてゆく旅路なり

千曲川淺瀬の波に立ちなづむ春は寒けし網代木の雪

白雪の峯のたをりの薄雲はいつ消ゆるともなくて消にけり

さだめなき北國日和雪しぐれ馬も小笠をきせられてゆく

春立つや佛足石に一二寸陽のかげろふのもえて居りつつ（善光寺）

兵庫の海かますご網をひく聲の潮路をとほく霞む春なり

泣かされて歸りゆく子に山笑ふ入谷の道のしづかなる音

稻光ひらめく方や雲幾重しづかに秋の立つにやあらむ

大井廣

岩うちて玉瀧川のながるゝは寂しや水のきよきあまりに

椎の實のときをり落ちて秋ふかき黄檗山のおくのしづかさ

この夜おそく山のふもとにふる雪のふかくなりゆくその寂しさは

もえいでし草のあたまをかくすほど雪はつもりぬ春のしら雪

からからと鶴の啼くなり朝まだきいかにもしろく雪のはれしに

寒明けと思ふ夜なりきみづみづと寝しなの月の槇にかゝりて

啼きかはす木の間の鳥は何ならむ神樂が丘の春もあさきに

竹垣をあたらしくして春あさしまたしら雪のふりつもりつゝ

音たてゝ鞍馬をいづる山川のしらべをきけや春のしらべを

山ふかきさくらの枝もみづみづと紅をさしたり雪のなかより

木の芽はるひかりみづみづ雪とけて山の奥にも春は來てをり

あととめてかなしや春の雪ふかし七百年の日はゆきしなり

ふみわけし跡さへもなしうつくしき貴船の宮の春のしら雪

草の戸にいくたび人の住みかはる世にしあるらむ山の奥にも

いにしへの春はかへらね忍ぶ草くさ家の軒に青むさびしさ

ふるとなくはるゝとなくていちにちの春は寂かなりしら梅の花

雨やみしばかりの空の夕焼けに杉葉のしづくまだおちてをり

なにゆゑに沈む心ぞ日も暗く霞のおくに燃えてをりつゝ

椿おちてくらき念ひのなほくらくはるの光の土に沁むらむ

栗の花の世は寂かなる田を植ゑてさみだれちかくなりにけるかな

尾山篤二郎

（大正十五年の四月より [illegible]）

雲かけが向ひの山を昃らしをり本山寺葉もりあひて見ゆ（晩春四首）

桐の花なほさきつゞり葉の葉もくはしみどりとなりにけるかな

うるはしき春野を過ぎてさわらびの萌ゆる山邊の藤浪を見つ

躑躅さく春山がくり木高みと緑は深くなりまさりつゝ

塀越しに煙草の煙あがりたり人通りすぎて夕蝉の聲（土用八十三首）

暑き日を夕方まけていく往く人食後の煙草すひゆくならむ

電柱の碍子に赤き日の名殘夕かたまけて南風ふきいづ

庭樹の葉裏にさせる夕日影の端にこたへし暑き日も暮れぬ

家にゐてのらりくらりとしてをれば寝ても起きても今日は暑しも

氣根衰へて直ちに駄目になるおのれ年にはあらず病みてをるらし

暑き日を汗を流していそしみし愉快なりし日かへらずなりぬ

いかほどのこともなし得で終るなり世の人然りわれも然らむ

ぱつくりと開き切りたる百合花の香にむせびて吾や生けりともなし

山百合花の大いなる花の影泛けてさし入る月は茅屋に深しも

夜を更かしひとりさめゐる庭にさす月かげ清く涼しかりけり

小夜更と夜のふけゆけば照る月のさやけきかげの涼しかりけり

（胃弱の為、胃腸を損ひ、その上、神経痛を患ひ、病身自嘲四首）

背まろめ一時ものを書きしかば鐵棒背に匿すがごとしも

いねながら書よみしかば頸の根も首もひきつり勝ものぼせず

糞まるにいきばるいらだ嬉しさよ流しくだするに時によりたり

風邪ひけど熱はあがらずはらわたにしむる夜風をいとひ暮しつ

八月上旬旅に出づ、奥州白石町に添ひて走る汽車にて

白石の青麻の山に奇しき山かもいかにゆくともいつも見えをり（みちのく二十四首）

鹽釜神社に詣づ。庭に鶴、鷄の前に林子平の碑なるを見て

この庭の鶴の鳴く音を旅ながら幽けき心になりてきゝをり

石の面に時のめもりの殘りをり西にかたむく錆鐵の影

單純に心はなりて南向し晒れる鐵の影が時なり

松島は既に稲田の秋なり、白石に残りし熱をのがれ來りしを思へば、涼しさたへなし。

草なかに馬が尾を振る尻寒し涼しさ過ぎて心もとなき

松島の松ふきわたる風の音秋風なりときてをりつも

夕暮の鐘の音ひゞく海の上ときまでありし浪は靜みぬ

松島に明日もあさてもわれをるべし島々白く夕暮れにけり

午後六時半のかそけき光が殘りをり大なる木の下草あはれ

下腹のしくしくいたむうそ寒さ日向にいでて今朝はわれをり

平泉は舊藩の地なり。再び毛越寺のあれはてし址に立つ。

毛越寺の池の塘は低きかも實ひくきかもわれは登れり

いにしへに疑ひもなし南大門の御門のあとは荒れにけるかも

さしむかふ池の中島あはれあはれ曾て見つるを今もわれ見き

大泉が池に橋なしぐるりとまはり捨田に草のしけれるを踏む

嘉祥寺は毛越寺の本堂なり、礎石の址おほらかに、松風の音のみしげし。

みちのくの黄金鶯の羽龍の馬を三船に積みて得て佛はも

人氣なき境にわれは立ちてをり石にとしをる木漏日あはれ

久遠劫にながるゝ時のあゆみのあと松ふく風にきくべかりけり

池尻の堰わけいづる水の音小溝と思へどあはれなりけり

平泉金色堂に、藤原三代の靈柩を拜す。此處も昔來りしことあり。

光堂を再び見むとおもへかも再び見つるわれはうれしき

豐かなる人の心は今もあり遺さばのこるものにしありけり

岩手の三戸木となむいへる温泉に二三日あそびつ。

山に來て一夜をねむる夢現に百合花のかをりをわれはきゝをり

盛岡を過ぎてゆくゆく詠める歌

姫神をさしみ見つゝ桔梗のむらがりさける野を過ぎにけり

秋草の八千草みだれ咲く見れどこゝに花摘む人影もなし

澁民村は石川啄木の村なり。汽車よりこの村の見ゆと教へられしが、

澁民の村の街道かこゝに見ゆ馬一つ通るほかに物ゆかず

岡山巖

智積院なる山樂の描きし襖の櫻（八首）

大書院の四つの襖にところせく描きてなほし足らぬ大櫻

大襖のさらに上より垂れ下る枝は斜に地につかむとす

苔むせる櫻の老木大襖の一つをほとほと占めて傾く

大襖四つにはびこる枝ながら咲き極まりし花の大いさ

惜みなく繪具もり上げて描きにけむ珍花びらの浮き出でにけり

花びらの一つ一つは飯を盛る陶の茶椀と太さあらそふ

茶椀なす大き花瓣の群りゆ蕊垂れ出でて大豆の如

太幹のかくれむとする大襖の下つべかけて霞たなびく

嵐のあと（二首）

嵐やみて今朝はしづけし向ひ家のま垣こはれて庭みえにけり

向ひ家のま垣こはれて路のべに山吹の花咲きなだれたり

柏原、一茶の墓（二首）

明專寺、一茶の墓は秋早き萩のさかりの片岡の上

のぼりゆく片岡のべの萩の花喰ひ散らしつつ馬一つをり

宿直のあした（二首）

醫務室の裏の畑ゆ刈りて來て漬けし菜種を朝食しけり

春の野に萌え出し菜種の若みどり愛でつつぞ食す宿直のあした

濱名湖畔、館山寺（二首）

湖を見おろす寺の庭しづか大き葵の花咲きにけり

湖の空をさやけみ咲き出でし葵の花の紅の濃さ

たき火

たき火すと空地に立てばわかそばに茶の木のありて白き花さく

浮世繪展覽會にて初期肉筆浮世繪を觀て（三首）

げすばりの醜の奴もゆたかにし樂しくあらし遠き世のさま

見るからに異様ながらけすばりのあやにかしこく生きにけるかな

遠き世のさまをし見ればおほけなく閑にゆたけき大和振はも

橋田東聲

時雨抄

某年秋中村岳陵郷倉千靱氏と良寛の遺跡を探って越後に遊ぶ

朝しぐれにはかに寒し見放くれば遠き高嶺は雪降りにけり (柏崎)

雨すぎて海の上の雲照る妙に太き株虹あらはれにけり

壁の上に芋殻干して冬に入る町のかまへもそゞろわびしき (出雲崎)

おのづから心ときめきて下り立つや堂のうしろ遠く佐渡が島みゆ (出雲崎良寛堂)

寒しぐれ沖より晴れて堂の扉のあはき日ざしとなりにけるかも

門に立ちて靴につめたき敷石道松葉の降るに眼をとめにけり (光照寺)

僧と對へばおもひいやふかしにがき茶の冷たくなるになほし坐るも

土のうへに木賊のかげはありながら動くともせでしたしき庭や (佐藤吉太郎氏邸)

冬の日の照るとおもふにまたしぐれ石置く屋根のさむざむとみゆ

ときの間に海の上の雨はれたれば佐渡が島根はあらはれにけり

三島郡島崎村の素封家木村氏は良寛終焉の地にて庵あり

庭の上に老松しげり閑寂に人らむつみ住みてなつかしき家

近づきてこゝろつゝましくぬかづくにしぐれ降り來てあたりの寒さ (良寛墓所)

ながれ行く月日はてしなし遠く來て大きみいのちをろがみまつる

塋域のめぐりの木立冬枯れてしたしまむ色の松のみぞ青き

このおもき空のくもりにさしかはす木梢のもやひ雨にふるへる

こゝをしも終の棲家とさだめつゝさびしかりけむ雨の降る日は

さながらに生きてをどれる大き文字の配列の品塵もとゞめず (遺墨拝見)

この家の午食の馳走になりてをり立てまはしたる上人の屏風 (島崎村木村家)

墨いろも古りてけだかき筆の蹟屏風いつぱいに書きてゆゝしも

この道をあるきましけむと思ひつゝしぐれの雨にぬれて來にけり (國上山)

臼井大翼

ゆづり葉の重き撓へにつもる雪つもりやまねばしづれたりけり

障子の一角かけて陽ざさせりしぐるる朝の時うつる間に

衢路の春日あかるき埃風あるひは小さきつむじに捲けり

木槲の青芽をぬらす雨いつか雫におつる朝しづかなり

吾がおもひひそけかりけりみなぎらふ濱松山の晝のひかりに（鵠沼二首）

松山の紙鳶にうなりのありにけり夕しほざゐの音にまぎれず

雷は遠きにありてしづかなり青葉がくれの空くるるなり

夕立雨降り霽る庭の青葉雫あかるきなかに電燈點けり

垣内なる堀井につかふ流し水ながれのびたり路のおもてに

星合のこよひとあふぎ見る空のひかりただならず時なるらしも（七夕）

この庭の水引草の旱に來て蜻蛉はとまれおちつけぬらし

庭の暑に蜻蛉ひかりてはなれたり水引草の穗のうごくなり

朝庭を掃きつつおもふ人と爲しやくそくふたつけふはあるなり

蜩の鳴けるを聞けばおもふことあまやかされし祖母のいつくしみ

この庭の秋の朝日にたけひくき野菊も影を地におきたり

眼にとめて見ればぞ見ゆる庭石にこの朝うごく紅葉しぐれの靄

氣迷ひを自がこのごろの癖にしてしぐるる朝の紅葉に對ふ

薄ら日の岸田のくろのゆるみ霜草葉の影は見ればありたり

木生り熟む柿のはだかに冬の日の郭落のひかり空にたらへり

大歳の更けて明るき灯に居たり時のうごきの觸らふごとし

今中楓溪

大神のみ前畏こみぬかづけるひとときのこゝろ永久にあらしめ（伊勢大廟）

赤子擧けてさゝげまつりし神庭の樹々の圓幹年古りぬはや（明治神宮）

とことはに眞澄の鏡くもらめや遠つ祖よりわれらつぎ來し

皇太子のみ前畏こみかしこみてすめらみ國のはじめをぞ說く（學院教授二首）

何事をきこえあげしかみ民われ授業終へしのちに汗おぼえけり

この部屋ゆ湯殿にかけて白妙の布しきまをす御湯めさすとて（久邇宮殿下御宿泊二首）

しきゐ越しにかしこむ父にみほゝゑみ言たまひし宮なりしかな

われら來し法隆寺村は春寒し西吹く風は粉雪降らせつ

つきよみの月落ちぎはにあよみつゝほのかに見たり山の姿を

曉近き山のそぎへの薄霧のはれむとしつつ月傾けり

星かけの道ゆくわれに仰がせて幾夜をさける枇杷の花かも

朝曇やうやく深くなりゐたり宇治の川瀬の立つる白波

工廠の空地の砂にこぼれちる櫻のはなの薄紅のいろ

夕空の金剛の嶺にゐる雲は葛城やまになびかむとする

いえがたき病にやめばさみしきか母は握れと御手さしのばす（母逝く二首）

やがて逝く母ぞとおもひ看護つゝ涙は落つれ蒲團の上に

われを見て起きなほらむとする汝を叱りつゝよる枕べちかく（教子その子逝く二首）

うつし世に汝を見出で夕陽に醉へる黄水仙のごとき少女なりしかな

露草や野菊やこゝを通ひゐし垂髪の子は今は見なくに（中途退學せし教子文野に）

われかつて父にそむきしことあらずわが子らもあはれわれにさからはず

四海多實三

神保町旦暮

寝あきたる兒にむづかられ朝闇のひかりふゝめるちまたに出でつ（朝光十首）

朝闇の冷氣のながれいつかしき力をおぼゆ寝たるき肌に

肉親のぬくみいとほし兒を抱きて白闇ちまたわがひとりなる

朝闇のあかるむなべに見えつゞく地肌の小石頭ぬれてゐる

しらみゆく地上にかそけく街燈のおのれ落せる朝影さぶし

夜道かけし野菜車の列きたり提灯けしてまた曳きゆくも

朝光にくつきりうかむ店々の看板の文字めづらしみ見る

朝はやく半戸をあけしくすり店薬瓶ふりて灯にすかしゐる

夜の明けをまちかねて薬買ふならむ薬をまちて人やなやめる

大路小路歩みかろらにゆく人の朝日にむかふ額ひかれり

荷造の釘うつ音を頭に堪へて夕づく店にものかくわれは（夕闇十首）

夕くらき机はなれて店先の明るみに立ちふかく呼吸する

つく呼吸につかれをおぼゆ風埃夕日のなかに澱みながるゝ

夕方の掃除する間を店先にこゝろゆるめて手足はのべつ

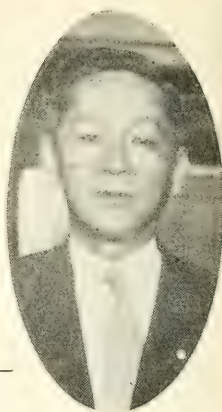
夕あかりしづもる店にいそがしく算盤よする音のこもれる

いそがしくひと日をくらし夕店にあかりを點けて心ゆるぶも

奥ふかき店に灯はつきたまたまに出で來し妻の顔のにほへる

街なみの露店をかこむ人だかり默りし顔々たゞ灯に對ふ

墨すりつゝおもひはなけれ向ひ店の雛人形に灯の點くを見たり

店先の大戸はさせど耳につき露店の聲のいまだもきこゆ

森園天涙

土ほこり空に吹きあげ武藏野はきのふも今日も風立ちにけり

あらくさの丘のなぞへを切りひらき人のすむべき路とほりたり

晝あらし小止む時なし土堤上の高萩むらを吹きかたむけて

けさみれば向う斜面の畑みなさみしき麥の穂となりにけり

電車すらいまは通はずふけたらし外は蛙のこゑばかりなる

さやかなる水車の音すこよひまで水車の音を氣付かざりにし

いらいらしねむり藥も利かずしてながき一夜の明けゆかむとす

闇空に黍の穂ゆれてゐたりけり夜ふけて今日もつとめよ歸る

郊外の電車おり立ち天の川あふげば白くかたぶきにけり

宵はやくつもれる雪になやみつゝ我家の門にかへり着きたる

高臺の西の松むら積む雪の吹きはらはれて遠く散る見ゆ

新しき家成りて人や越しぬらむ二階のあかり路にさしたり

野をわたる風は寒けどさへづりのこゑたしかにもあがる雲雀は

生みの子を育てあぐみてとがりゆく妻のこゝろをあはれむわれは

鳥居素川先生を憶ふ(二首)

いくとせを侘びはすみつゝひたごころ國を憂ひて燃えたまひたり

國をうれひて心はつねにもゆるからはげしかりけり大人の言葉は

伊豆に靜養中の吉武大人より生椎茸を贈らる

天城山古樹がこぼすあまつゆに生えふとりたる椎茸ぞこれ

外遊中なりし城戸主幹の舟無電圏内に入りしといふに打電せる

ひたすらにこひたのしめり刻々に太平洋を近づく舟を

亡兒埋骨

亡き子の名口にするさへくやしきを土深く埋めていま別れなる

夜道いそぎて汗ながれたる故郷の河の音きけば家ちかづきぬ

西村陽吉

昭和三年抄

山房の雪（七首）

見る風景に古風な飛白おいてゆく　ふりだした雪のしづかなテムポ

上から下へおりてくる雪　少年の夢もつてくる　春の牡丹雪

總持寺の山門の甍をすこし見せて　胡粉をまいた版畫の雪です

かぎりなく遠く降る雪　日本の紀元節の空を遠く舞ふ雪

あるものは　雪を被いた木の群と　まつしろな原と　それを見てる私

いゝいゝふらんす語の　れくてうるをさらふ　傍らの　ぼあある　の呟き　窓へくる雪

おぼつかないふらんす語のあゆみ　日本の空にふる雪　世界はひろい

早春小情（六首）

穴から　半身出してあをいやもりが　まだ寒い陽を　ぢつと喰べてる

かさかさに凍てて乾いた早春の　庭土にさむく　飛んだ　竹の葉

日曜は土窖に開く窓のやうに　私のくらしに蒼空をくれる

籐椅子にぢつと凭れて　背の痛む　一週の疲れを味ひ直す

あたたかい南風が梅を吹きとばす　丘でみてゐる　聿火事の焔

蕗の薹　伸びて花咲く枯くさの　ここの丘には　春まだ來ない

春日行樂（四首）

まつ四角な窓のむからは春の空　ほくろのやうに鳶ひとつゐる

あかあかと暗い陰もつ椿の花　ガラスの外から顔よせてくる

ここにかうしてこの女らの世界がある　杯の底にうけて舐めよう

菅の根のながい春日も酒いろの夕日となつた　さあ出よう　友

街のビザアジ（七首）

生きることの苦しみを捨てよう　生きることの樂しみをとらう　自分の心で

まつかな日曜の夕日だ　青バスがひいてく埃だ　行く家もない

ウヰンドのガラスの中のアスパラガス　細い葉つぱが動きもしない

すてきな微笑を街角へ投げて消えてつた女のあとに日が暮れかかる

木の卓に染みこんでゐる酒の香だ　はやくあかりをつけて下さい

饐えきつた酒場の卓のドモアゼル　君の今夜の化粧をお見せ

辨當たべて　さつさと歸つてゆく男がある　銀座の裏のとある空地から

ニヒリテ(八首)

行かねばならぬ私の道がおかれてある　その道をけさも安らかにゆく

この夏はどこへお出でと晴れやかに笑ふ額付につれて笑つた

社會機構に　はじき出された人達が　蟲のやうに死ぬ　犬のやうに死ぬ

むしや〱と草を喰べてる駄馬の顔　近よつてみて笑ひも浮ばぬ

明るい世界ばかりを尋ねて行つたら　こんなにも明るい世界になつた

人生からほほ笑みかける顔ばかり見てゐる男の　世界觀よ　死ね！

なるやうになつてゆくだらう世の中を　ここにかうして　けふも見てゐる

かうやつて　ここにゐるこの仕合せに堪へられぬ不幸がいま落ちてこい

社會機構(十二首)

ある部分のある人達の困ることは　ある部分のある人達の困ることでない

土用入のめちやな天候にこの地方は一層疲弊するだらうと書いてある記事

避暑の人の賑やかな記事を讀みすてて　とまる電車の腰掛を立つ

しつかりと社會生活の大波に面をむけて私は生きよう

永い永い饐え腐る雨だ　地の上にも生きながら腐る人間がある

どぶ泥に向つて叫ぶ――一體誰が社會惡に責任をもつのか

三面の木かげのひる寢の寫眞版　柳のそよぎに私も休まる

「やあお早う」出勤の路で行き逢つて語ることもないサラリイマン二人

金があれば涼しい山の木のかげで暑さを避ける住居のしづかさ！

空が晴れて今夜の月がまるく出た　涼しい風だ　俺の住居だ

なんにもない　この世界にはなんにもない　資本の法則だけが確かに

しりぞいて一切を否むか　進軍して敵を斃すか――おんなじことさ

西出朝風

この妻もある日は暗い裏口を泣いて出て行く女だつたか

單純な女もいつか世の中の人の心をさとるあはれさ

世の中の一人二人の人情の中に死ぬのもいいと思ふ日

半身を宙にのばして可笑げにめめず餌さがす夏の日は來た

ふと見れば、夏の日暮の公園の便所の窓の蜘蛛もせはしや

生き甲斐のない生涯を、うまさうに荷馬車の馬が枯草をくふ

壯快に小便たれる事一つあつて荷馬車の馬は死なぬか

指やれば夢の中にも指握るわが子可愛や、わけはなけれど

いつの日かこれが別れるわが子等か、一人は膝のあたりに眠る

花やぎの羽子の禿の羽子の音、そこらあたりに今日も響いて（長女の死二首）

讀み方のハタ、タコ、コマを來る年も、またくる年も讀んでゐようか

一つ寢をする子が時に一人寢をする事さへも寂しいものを（その一周忌に）

ゆく秋のそれでなうても淋しいに、別れともない。別れともない

より添うて行けば、雨夜の薄明り、返り花など咲くけはひして

晝の蟲、草の匂ひといふやうな、そんなものをも長く忘れた

その頃は鳥の歸る秋空もあまりに長く明るかつたが

妻に、子に、空の日かげに、月かげに遠いあたりを往き還りして

しみじみと貧しい者のしあはせを四十を越えてすこしおぼえた

飼ひ犬の殘した飯を棄てるより、よりたわいなく棄てられるもの

金の話、着物の話、同じ話をよく二十年もきいて來たもんだ

木をきるな　梢のさきの　さきまでも　命が躍る　春彼岸の木

また寒い　風呂をあがると　一しきり　春の霙が　街ぬらしてる

花花花　點々相追うて淀む　花の中に　えたいの知れぬ　黑い流れ木

地に落ちる　までの遊戯に　大象の鼻　撫でてゆく　散る花びらが

蒲公英は　をんな地に笑み僧の土筆は　天を仰ぐ　池のはしりを　こす春の水

大地震　家とび出した　人々の　聲に氣づくと　自分も出てた

青山霞村

犂

桐の木の　なんの執着　琴の材に　きられた幹が　青い芽吹いてる

鷄の　聲は華やか　鐘の音は　嚴かで　ある　あけよこの日も

神の子だ　けれどもおれは　繼兒だと　夕の祈　かいた幾日

人がふれたら人　馬が觸れたら　馬を斬る　青薄雨に　葉がのびきつた

短夜は　乳の足らない　狗の兒の　泣きやまぬまに　もう白んでる

細指で　碁石ならべる　奧深う　燈籠ともした　祇園會の家

大夕立　街を洗つて　小石つぶて　痛いこそばい　泥足の裏

夏草の　花がゆれ搖れ　うけてゐる　横降りにきた　夕立の雨

名家でも　無名家でもいい　夏の會　畫幀にしぶく　瀑の涼しさ

はらはら　とすれ合うて鳴る　蓮の葉の　青い裂け目の　涼し秋風

地に坐り　烟管鑄潰し　生活に　疲れた　鍋の　底ついでゐる

悲が　不平があるか　あの牛も　車ひき引き　もうもうと鳴く

胃をみたせ　どのテイブルで　食ふ者も　顏に殺氣の　あらはれがない（ある食卓で）

親どしの　小作爭議に　泣いてます　戀の館から　連れ歸られて

正岡子規

雜の歌（三首）

榛の木に鴉芽を噛むころなれや雲山を出でて人畑を打つ

寢しづまる里のともしび皆消えて天の川白し竹藪のうへに

霜防ぐ菜畑の葉竹はや立てぬ筑波根颪雁を吹くころ

われは（二首）

吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

富士を踏みて歸りし人の物語聞きつゝ細き足さするわれは

繪をひろげ見て（三首）

なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ

岡の上に黑き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ

木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ

雜の歌（二首）

菅原や伊久米伊理毘古伊理毘古の陵こめて立つ霞かも

臥しながら雨戸あけさせ朝日照る上野の森の晴をよろこぶ

金槐和歌集を讀む（錄二首）

人丸ののちの歌よみは誰かあらむ征夷大將軍みなもとの實朝

はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば慚ぢ死ぬわれは

寫眞（二首）

四年前寫しゝ吾にくらぶれば今の寫眞は年老いにけり

かりそめに寫し置きしがわがのちのかたみと思へば悲しかりけり

雜の歌（二首）

四年寢て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり

旅にして佛つくりが花賣に戀ひこがれしといふものがたり

同羯宅（錄一首）

あたらしき庭なつかしみ足なへのわれ人の背に負はれつゝ來ぬ

君と我ふたり語らふ窓の外紅葉の木末夕日ゝ横目さすなり

水莖のふりにし筆の跡見ればいにしへ人は善く書きにけり

新室に歌詠み居れば棟近く雁がね鳴きて茶は冷えにけり

秀眞を訪ふ(四首)

亡き友の亡きをかなしみ思ひをれば車の上に涙落ちけり

敷物をあつみうれしみ家のごと股さしのべて物うち語る

かぬち君はかぬちのみおや天津麻羅をかしこと鑄よそのあまつまらを

我口を觸れしうつはは湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

茶

夜をこめて物書く業のくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり

森

うつせみの柩をおくる人絶えて谷中の森に日は傾きぬ

平賀元義(二首)

上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人

血を吐きし病の床のつれづれに元義の歌見ればたのしも

佛足石(二首)

御佛の足のあとかた石に彫り歌も彫りたり後の世のため

我が手[illegible]紙におしつけ見てあれど雲も起らずたゞ人にして

玻璃窓

病みこもるガラスの窓の窓の外の物干竿に鴉啼く見ゆ

龜戸まで

御社の藤の花房長き日をはりこづくりの龜が首ふる

左千夫來る

歌がたり夜はふけにけり立川の君が庵に牛の乳取る頃

自作土像

渾沌が二つにわかれ天となり土となるそのつちがたわれは

愚庵和尚へ

歌をそしり人をのゝしる文をみば猶ながらへて世にありと思へ

春雨

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

悟不悟の歌(錄四首)

茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花咲く

本庄の四つ目に咲けるくれなゐの牡丹燃やして惡き歌を焚け

寒山拾得豐干皆非なり 鉢栽の小櫻草の花綻びぬ

頭痛み寢ころびて見る抱一の古繪の椿花玉の如し

牡丹

病み臥せるわが枕邊に運びくる鉢の牡丹の花ゆれやまず

曇天(二首)

わが庵の檐端にかけし鳥籠の鳥さへづらず春の日曇る

ひさかたの曇り掃ひて朝日子の麗らに照らす山吹の花

左千夫へ(二首)

我が庵の硯の箱に忘れありし眼鏡取りに來歌よみがてら

竪川の流れ溢れて君が家の庭の木賊に水は越えずや

松の露(四首)

松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

緑立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ

玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる

庭中の松の葉におく白露の今か落ちむと見れども落ちず

六月七日夜(五首)

ほとゝぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見ればよき月夜なり

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

夜の床に寝ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月ふけわたる

小庭にかくれて月の見えざるを一目を見むとゐざれど見えず

月照らす上野の森を見つゝあれば家ゆるがして汽車往き還る

新年(二首)

うつせみの我足痛みつごもりをうまいは寝ずて年明けにけり

下總の結城の里ゆおくり來し春の鶉を食はむ齒もがも

藤の花

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

行春(六首)

佐保神の別れかなしも來む春にふたゝび逢はむわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかむとす

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪に描けるかも

夕顔の棚つくらむと思へども秋まちがてぬ我いのちかも

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

山吹(二首)

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

歌の會開かむと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹の花

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

杜鵑(二首)

我病みていの寝らえぬにほとゝぎす鳴きて過ぎぬか聲遠くとも

ほとゝぎす鳴くべき月はいたづきのまさるともへば苦しかりけり

病床

くれなゐの梅散るなべに故郷につくしつみにし春し思ほゆ

伊藤左千夫

牛飼

牛飼が歌よむ時に世のなかの新しき歌大いにおこる

鎌倉懷古(二首)

あだつ國蒙古の使時もおかずはや打ち斬れとたけびけむかも

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ木も鳴りふるひけむ

麓を訪ふ

さすたけの君がこの頃歌の上のかはれる意見聽かむとわが來し

後の月(二首)

天雲の切れめさやけみ月すみて隅田の水かみ雁なきわたる

ほのぐらき夜霧たちこめ押上や請地のあたり物の音もせず

藤

龜井戸の藤も終りと雨の日をからかささしてひとり見に來し

正岡大人をおもふ

吾が大人が病おもへば月も蟲もはちすの花もなべて悲しき

鎌倉大佛(二首)

かまくらの大きほとけは青空をみ笠と著つつよろづ代までに

こしかたのかさなる罪も御佛の光に浴みて消えざらめやも

落葉

ちりひとつなしと歌はれしわが庭の荒れにけるかも落葉つみつつ

釜は初代寒雉の作、茶碗は本阿彌光甫の作、茶庵の重宝なり(二首)

冬の夜のさ夜靜まりて釜の煮えさやさや鳴るに心とまりぬ

爐に近く梅の鉢置けば釜の煮ゆる煙がかかるその梅が枝に

靜(二首)

さ夜ふけの空のしらしら霜白き月夜入江を人渡る見ゆ

天地は眠にしづみ小夜ふけて海原遠く月朱にみゆ

日知の釜

春雨に雪とけ流れ山川のあふれみなぎる思ひす吾は

合歡木(四首)

秋立つと未だいはなくに我宿の合歡木はしどろに老いにけるかも

秋の色に老いし合歡木の葉しかすがになほ靑々に眉作るあはれ

庭の木のさびれ合歡木の葉しひたぐる風のものの荒れ來るらむか

此ゆふべ合歡木のされ葉に蜘蛛の子の巣がくもあはれ秋さびにけり

玉の歌(三首)

白玉のぎよくの勾玉貫くべくは紫の緒
に貫くべかりけり

白玉のうれひをつつむ戀人がただうやう
やし物も云はなく

白玉は色は透かぬと透かずとも底にうた
がひありと思へや

心の動き(四首)

うつそみの八十國原の夜の上に光乏し
く月かたむきぬ

秋の野に花をめでつつ手折るにも迷ふこ
とあり人といふもの

さしなみの隣の人の置去りし猫が子を産
む吾家を家に

夜ふかく唐辛子煮る靜けさや引窓の空に
星の飛ぶ見ゆ

春來

釜の煮えのおほに鳴りつつ春とおもふ
心はみちぬ夜のいほりに

九十九里濱(三首)

人の住む國邊を出でて白波が大地雨分け
しはてに來にけり

天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の
濱に玉拾ひ居り

高山も低山もなき地の果は見る目の前に
天し垂れたり

鶯(二首)

あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひ
居れば鶯のなく

朝霧に鳴く〳〵やうぐひす人ながら我れ常世
邊に家居せりけり

信濃蓼科高原(二首)

朝露にわかこゝ來れば山つみのお花畑は
雲垣もなく

ひさ方の天の遙けくほがらかに山は晴れ
たり花原の上に

浮草(二首)

濁水の池を八十たび悔いめぐり歎きみ
しかど履物もなく

汝を歎くもの外になしいまの限り汝を戀
ひまもろこの父と母

水害の疲れ(三首)

水害ののがれを求だかへり得ず假住の家
に秋寒く〳〵なりぬ

四方の河溢れ開けばもろもろの叫びは立
ちぬ闇の夜の中に

この水にいづこの鶏と夜を見やれば我家
の方にうべやおきし鶏

あづさの霜葉(四首)

ひさ方の天の時雨に道いそぐおく山道を
うらさびにけり

うす日さす梓の紅葉しかすがに今かくる
らむただよふ天雲

おく山にいまだ殘れる一むらのあづさの
紅葉雲に匂へり

くぬぎ原くま笹の原見とほしの冬がれ道
を山ふかく行く

冬のくもり（四首）

我がやどの軒の高葦霜がれてくもりに立てり葉の音もせず

獨居のものこほしきに寒きくもり低く垂れ來て我家つつめり

ものこほしくありつつもとなあやしくも人厭ふこころ今日もこもれり

裏戸出でて見る物もなし寒む寒むと曇る日傾く枯葦の上に

富士見野にて（二首）

富士見野は野をさながらの花園に時雨の雲がおりゐまよへり

すむ空ゆやがて這ひ來し白雲は人を花野にこめてつつめり

我が命（三首）

今の我れに僞ることを許さずば我が靈の緒は直にも絶ゆべし

生きてあらむ命の道に迷ひつつ僞るすらも人は許さず

世に怖ぢつつ暗き物陰に我が命僅かに生きて息づく吾妹

ほろびの光（五首）

おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しどしとと柿の落葉深く

鷄頭のやや立ち亂れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり

秋草のしどろが端にものものしく生きを榮ゆるつはぶきの花

鷄頭の紅ふりて來し秋の末やわれ四十九の年行かむとす

今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅の光

靜なる家（二首）

厠に來て靜なる日と思ふとき蚊の一つ飛ぶに心とまりぬ

物忘れしたる思ひに心づきぬ汽車工場は今日休みなり

ゆづり葉の若葉（二首）

世にあらむ生きのたづきのひまをもとめ雨の青葉に一日こもれり

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そそぎ榮ゆるみどり庭に足らへり

小天地（六首）

朝起きてまだ飯前のしばらくを小庭に出でて春の土踏む

まづしきに堪へつつ生くるなど思ひ春寒き朝を小庭掃くなり

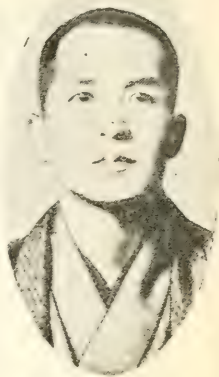
海山の鳥けものすら子を生みて皆生きの世をたのしむものを

朝さへを霧とはなりぬ町のとよみ又常のごと我が小庭かな

漬物に汁に事足るあさがれひ不味しともせぬ兒等がかなしも

いとけなき兒等の睦びやしが父の貧しきも知らず懽樂しかり

長塚節

悼正岡先生

秋風のいゆりなびかす蜀黍の止まず悲しも思ひしもへば

早春の歌

天の戸ゆ立ち來る春は蒼雲に光どよもし浮きただよへり

初秋の歌(五首)

小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ

秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く立ちわたるめり

馬追蟲の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

外に立てば衣うるほふうべしこそ夜空は水の滴るが如

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く相迫り見ゆ

晩秋雜詠(二首)

黄昏の霧たちこむる秋の田のくらきが方へ鴫鳴きわたる

こほろぎははかなき蟲か柊のはなが散りても驚きぬべし

濃霧の歌(五首)

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶺ゆいつ湧きいでし天つ霧かも

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒に相馬が嶽ゆ搖りおろし來ぬ

ひさかたの天つ狹霧を吐き落す相馬が嶽は恐ろしく見ゆ

うつそみを掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも聲立てて鳴く

おぼほしく掩へる霧の怪しかも我があたり邊は明かに見ゆ

病中雜詠(八首)

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき

往きかひのしげき街の人みなを冬木のごともさびしらに見つ

打ち萎えわれにも似たる山茶花の凍れる花は見る人もなし

我を思ふ母をおもへばいづべにかはぐくもるべき人さへ思ほゆ

ゆくりなく拗切りてみつる蠶豆の青臭くして懷しきかも

日に干せば日向臭しと母のいひし衾はられし軟かにして

（題の如く六十四首）

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり

無花果に干したる足袋や忘れけむと心もとなき雨あわただし

おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり

冬の日はつれなく入りぬさかさまに空の底ひに落ちつつかあらむ

藥壜さがしもてれば行く春のしどろに草の花活けにけり

朝ごとに一つ二つと減り行くになにが殘らむ矢ぐるまの花

窓の外は螢ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春行かむとす

梧桐の夏をすがしみをりをりは疊の上にねまく欲りすも

小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ

おそろしき鏡の中のわが目などおもひうかべぬ眠られぬ夜は

よしといへば水には足はひたせどもいたづらにして小夜ふけにけり

やはらかきくくり枕の蕎麥殼も耳にはきしむ身じろぐたびに

ゆくりなく手もておもてを掩へればあな煩はし我が手なれども

ひたすらに病癒えなとおもへども悲しきときは飯減りにけり

咳き入れば苦しかりけり暫くは襲ねて居らむ單衣欲しけど

頬の肉落ちぬと人の驚くに落ちけるかもとさすりても見し

すこやかにありける人は心強し病みつつあれば我は泣きけり

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

蚊帳の外に蚊の聲きかずなりし時けうとく我は眠りたるらむ

厨なるながしのもとに二つ居て蛙鳴く夜を蚊帳釣りにけり

小夜ふけて厠に立てばものうげに蛙は遠し水足りぬらむ

おろそかに蚊帳を透してみえねどもしづく懶く外は雨なりき

單衣きてこころほがらかになりにけり夏は必ず我れ死なざらむ

脱ぎすてし單衣のあたりがふくだみしちぢみの單衣[illegible]り[illegible]みぬ

あまたには蚕とり籠など賣りありく淺夜をはやく蚊帳吊らせけり

低く吊る蚊帳のつり手の二隅は我がつりかへぬよひよひ毎に

硝子戸を透して蚊帳に月さしぬあはれといひて起きて見にけり

小夜ふけて窓に蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ

かかるとき葡萄畑に立ちなばとおもひてもみつ今は外に出でず

よひよひに必ずゆかむ白蚊帳に心落ちゐて眠るこのごろ

水打てば青鬼灯の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

牛の乳をのみてほしたる罎ならで插すものもなき撫子の花

蝗釣るとかやつり草を外に置くが務めたりける我は痩せにき

抱かばやと沒日のあけのゆゆしきに手圓ささげ立ちにけるかも

石炭の屑捨つるみちの草むらに秋はまだきのきりぎりすなく

あさがほの莖のうすきが唯一つ縋りてさびし小雨さへふり

手を當てて心もとなき腋草に冷たき汗はにじみ居にけり

寒鳥は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠ざきにけり

かくしつつ我は痩せむと茶を掛けて硬き飯はむ豈うまからず

酢をかけて咽喉こそばゆき芋殼の乏しき皿に箸つけにけり

手枕に疊のあとのこちたきに幾ときわれは眠りたるらむ

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに咽びてわれはさめにけらしも

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のおらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな蓬萊をとめのことは暫し語らず

こほろぎはひたすら何に怖づれどもおのれ住かに草に居て鳴く

こころよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

此のごろは淺蜊淺蜊と呼ぶ聲もすずしく朝の嗽ひせりけり

落葉しきて寒き一夜の曉は灰に霜置かむ庭の土白く

岡　麓

震災（六首）

眞夜中とおぼゆる頃に雨ふれり燃えたてる火は燃え盛りつつ（大正十二年九月一日夜）

眞夜ふかく雨ふりいでてすべなけれ松の木蔭にかばへり我子を

わが家の燒跡はまだ灰あつしいづこよりかきこゆ蟋蟀のこゑ（我家燒けぬ）

みちにして夕立雨にぬるれどもをさなき子すら泣かずあゆめり（三日夕）

きぞの夜はみちの芝生にあかしけり疊のうへにこよひすわるも

今までは馴れて心にとめざりし朝ゆふ事ぞみなありかたき

草原のしげみが中を行きしかば雲のかげ浮く水たまりあり（本郷兒を訪へるみち）

草原のしげみがなかの水たまり跨ぎて行くはをしくおもほゆ

地震ゆりしあとかたもなし風むきに青草波は露をこぼせり（大正十三年）

孫（六首）

みどり兒のあゆみはじめし足どりを數へはやしてよろこびかはす（重麿歩きはじむ）

みどり兒は立ちてあゆめりゑみはやす母のわかければわれはかなしき

手をのばし花かむとすれば聲あげてなく兒すべなしあやしかねつも

智慧のつくまではじめかやみどり兒の人みしりして大聲になく

母親の乳ぶさに頰をすりよせて見馴れぬ顏の人みしりすれ

櫻咲く春べにならば紐つきの草履はかせて外あるかせむ（大正十四年）

九品佛（五首）

春の日の夕日うすづくかけひろしはたけの中の寺に詣るも

春の日の暮陰せまる山門をくぐれば赤き椿まさかり

菫咲くみ寺の庭の芝原に春の夕日のかげ遠退きぬ

寺庭の古木の銀杏芽をふきて夕あつまる鳥さわがしき

春の日の夕おそく來てみ佛の御顏もさだかにをがみかねつる（大正十四年）

五　五日　五首）

孫の手をとりて門べをあゆませつ心だらひにけふは遊ばむ

抱きあげて外に出づれば嬰兒のすこしおもたくなりにけるかも

この朝け桐の花咲く屋敷町いとけなき兒を歩かせにけり

坂になるみちのかたへの桐の花見あぐる空は皐月ばれかも

手をはなしあゆましむれば嬰兒の小石つかみてなげすてにつつ（大正十四年）

柿蔭山房（六首）

はしゐして湖の見ゆるをよろこびぬ君が家居に今日は來つるよ（大正十四年十月二十五日諏訪赤彦君の家を訪ふ）

焼胡桃噛みつつ飲めば茶の味の專にしたし君がもてなし

亡友の訪ひ來しむかし物語その人たちもここにすゑるか

額のうへに眼鏡おしあげ外にむかふ皆が面をば今日ぞよく見き

行きさきにたちてあたりを見せらるれ井戸の深さをのぞきなどしつ

春鳥のなきとよもさむ時思ひて背向の山にむかひつるかも（大正十四年）

高野山（七首）

高野山無明の橋をわたりてはむらがり泳ぐ魚に見入りぬ

串跡の斑のある鮠は救はれてよみがへりたるいのちとぞいふ

まのあたり今ここに見つ高野山御廟の橋の流灌頂

不可思議かもひびく三聲は鳥ながら鳥の聲とも思ほえなくに

高野山御廟のみちをかへりくるうしろの杉に月はのぼりぬ

佛法僧鳥ききしかへさの暗まぎれ低く尾を引く螢火の光

御燈明の數の中には點らぬもあるを有緣のうへに嘆きつ（大正十四年）

金剛峯寺（十一首）

古寺の門前せまるなだり坂荒畑のはなに海すこし見ゆ

荒畑のむかうに海の端見えてみ寺往還の足をとどむる

古寺の門に女男の童遊びをり繩飛をしつつみな跣にて

蘩蔞草あたまのうへにのせかぶり兩手ふり來る女童に逢ふ

はねかづらせりといはむに女童のまるがほなるぞよき子柄なる

古寺の僧の夕は人氣なし若葉木のかけ御堂を掩ふ

ふる寺の跡は荒れしままながら若葉ひらきて暖に静なり

いにしへの由来あるみ寺しのびつつ若葉の色に染みて息ひぬ

こちごちに蛙なきつぐ聲きこゆ御堂の前の池に臨めば

み寺田を耕す二人の人を見きものをもいはず春の日なかに

いにしへの兼好法師ここに來て貝をひろひてかへりたりけり（昭和三年）

菩提樹（二首）

菩提樹の花ちりしきて人もなし入つ日遠しわが世の心（帝室博物館後庭）

ふるき世のもの觀し後は澄む心菩提樹の花の吹くにさへ會ふ

春の彼岸（五首）

藤の芽はとがり[illegible]し形ばかり棚をつくりて昔[illegible]けり（細島住吉神社）

春の日の彼岸の入の午後に永代橋を二度わたりけり

末の子の娘つれたり花鳥の春の彼岸に佛をがまむ（淺草寺）

光ひろき春の彼岸の入日ぞらわが子つれたり淺草寺内

淺草の御堂の額の繪を見する年齢にもなりぬ末の娘も（昭和三年）

秋の山ぶみ（四首）

箱根路はもみぢの山とむきあひて初雪白し富士の頂上

人みなのあそびに來つるみづうみの浪わけ船にたつ水けむり

船前をむれ立つ湖の水禽は船とほらせて浮きぬ後方に

箱根山一日あそびてかへるさの前山づたひしぐれきにけり

近よりし時雨の雲に森はやし笹山なびけ風わたるなり

冬日の詠（七首）

ここに來て勤務につくも年月久し寒けき朝を庭あるきしつ

今朝出でて岸にむかへば黄葉せる銀杏のうへにうかぶ白雲

井戸端に硯洗ひて水汲めりここにとどかず冬の日ざしは

井戸端の流に流す濃墨はいつ物書きし硯なるらむ

竹藪のかたへに枇杷の花白し閑さにつく冬構せむ

けふもまた豫約配本とどきたり拾讀して冬の夜ふけぬ

木槿の木さぶゆふべのくれゆきてきはめてうすき空の色彩（昭和三年）

香取秀眞

磯を淨み磯を匝きつゝ大濱のよせてかへしてやむ時知らずも（九十九里濱四首）

遊びありく小蟹らとると近ゆけば皆居らずけり遠のけばをり

蟹の入りし穴を指先に掘りしかど一つも居らずいづち行くらむ

行けば逃げ去れば出で來も三つ五つたゝ八つこゝの蟹這ひありく

言いへぬ三つ子いはほは母ともへや食ふにも寢るにも姉を慕へり（妻を失ふ二首）

母のなき幼き子等は姉が守るあはれなる子の母なき子たち

醉ひかたり語らふ春の夜は明けてほのぼのあけて鶯を聞く（樂之軒にて）

常磐木の老松の芽のさ芽立ちをめでたき人にたぐへて祝はむ（子規居士母堂八十賀）

この里に鳴きいでければ遠方の村つぎつぎにひぐらしの聲

眞杉の木立をしげみま晝すら夕さびてあれや蜩のなく（高野山にて三首）

高野山千年の今も生御魂大師は生きて坐すところなり

淡路の海灯の見えぬかも八重山のたゝなはるかも星あかりの夜

朝戸出の涼しきに似ずきりぎりす鳴きさかる野の草いきれかも

ませ垣にしどろもどろと手入れせぬ黄菊白菊みだれて咲きたり

靜けくも夜くだつ鷄と戸をくれば庭木眞白く雪ふりてをり（或時の國醇會席上）

日や月やならび輝く天地はあきらけきかも御代のみさかえ（大婚二十五年奉祝）

折れふして蓮の枯くき殘れるに浮葉卷葉に夏よそひせり（首夏不忍池畔を過ぐ）

華なるやさ百合の花のほの匂ひやぬちに滿ちて五月雨のふる

苗植ゑし人もその子も過ぎし世に此杉山は空を覆へり（上總埴谷の薮氏を訪ふ三首）

人は去り人はあれつぐ代々を經て此の大きなる杉はそだてり

百年の大杉がもとに我が如く代々の人等は仰ぎ見にけり

朝毎の障子にうつる陽の影のかはるを見つゝ病み居る我は（病中三首）

うつら〳〵物思ひつゝ晝いねて夕さり來れば熱高まりぬ

心よわくなりにける哉いとけなき兒たちを思へば涙おちにき

五月雨の降るや野川の村蘆のにひ葉押ならし水流れ行く

蘆かびや春の潮のさしひきにかくれてはまたあらはれにつゝ

ひし餅をひゝな祭に供ふらくよもぎ摘む野にはだれふりけり

佛たちもだしおはせにかはほりは堂間も飛べり寺のうつばり

さ百合花さくには早き淺茅生の茅花ほうけて夏たけにけり（佐倉に病父を訪ふ）

やう〳〵に霧晴れ行けば山もとのはじのもみぢのあか〳〵と見ゆ

富士が嶺はさやかなりけり秋ふかき此頃雲はたなびかずけり

武藏のや横折伏せる岡の上に富士がね立てり雲もあらなく

鶴首の小瓶の椿八千代にも葉がへぬ枝に花は咲きけり（板谷波山の瓶花圖に題す）

年久に都にすめば戀しかも蛙の夜聲きかまほしかも

櫻井の味麻之がもとにわらはたち今日もつどへり呉舞をしに（題伎樂面）

死ぬる術知りける人は思ふまゝに眠りてさめず成りにける鴨（芥川龍之介枕前）

菊祭り定めたまひて百年の千秋長けくいはふかしこさ（初めての明治節に）

焰爛れところゞ鍋の下に居ておごそか聲よ法華經を唱ふ（日親上人）

天地の靜もるなかに椎が枝のゆらりとゆれて雪しづれたり

鷄の遠鳴き聞ゆいねかぬる病の床に朝まちかねつ

をす國の多摩のみやまの松影に臣のなげきし吾大君はも（大正天皇を誄び奉る）

何事の懷ひもなしとのたまひて冷たくなりてねむり給へり（吾父逝去七十二歲）

我いのち全けくあれば櫻花さきの盛りを起出でにけり（百日間の病床を[illegible]）

萌黃なす木々のわか葉にこの朝け見る日すがしき山のふりはも

櫻花

みいくさの勝ちしるしと植ゑおきし櫻の花に鶯鳴くも

瀧

たゝなはる青垣山のもみぢ葉に見えかくれつゝ瀧おちたぎる

上總國大東崎にてよめる(二首)

にはつとりかけの初聲あらたしき年はきにけりま東の崎

すめ國の國の樂しき新年の海の玉波まきもとほせり

やすみしゝわが大君の知ろしめすたふときくにに春とゝのへり

木の苗をわく兒の如くはぐくみて植ゑたる今日は物もひもなし

蕨眞

大年の御年祭ると杉の穂の瑞秀とりして美酒たてまつる

成木餅

ときじくのかくのこの實のいにしへをしぬぶとかもよ成木玉餅

春月

春の爐に夕にる瑞葉くはし茶のにほへるなべに月出でにけり

鶯の聲のとよみに櫻花さきの盛を小松うゑけり

蛙子の依手の楓を大島のしり羽やつでを露おちわたる

茶をひくや臼の音よけみひきがへる出でてもこゝか垣の木蔭よ

常陸の[illegible]

まこも生ふ瀬々の淺水行く船のふりし小舟に波のしつけさ

新茶に妹がとりける茄子の實の紫こくも夏たけにけり

白雲に黒雲まじり鉾杉の峯の上の空に風ふきわたる

松島

玉松のうづの島かげかぎろひの夕日かゞよふ神代さぶらし

香取兄に

かぐ山のほつまの神かともしみと吹きこすを風八野[illegible]かす

[illegible]

秋草になけるこほろぎわがなげくおきその風にきほひなくかも

落葉

北山のふりにし寺のふる池に落ちて浮き寄る松葉かへて葉

佐保神を送る女神のみすまるの玉ふさたるゝ楯の美豆花

鐘の音の山をわたれば夕べ田に霞を呼びてなく蛙かも

みづくきの陸稻廣畑さや〳〵にふりさけ見れば筑波山見ゆ

栂尾にてよめる

あら玉を栂尾山の青淵の白雲橋をおほへる紅葉

鶯のさゝなきわたる庭山の眞木の巖山寒菊の花

雪とくる松の木影のおぼろけに山田に映ゆる春の夕影

梅雨晴るゝ杉の山路風さやに小鈴白花つらつらゆらぐ

熱海

熱海山風雲さわぎはつ〳〵に初島かけて船かへる見ゆ

秋の夜をわたる薄雲白妙に月の光を包みて行くも

きぞの夜の雨しおもほゆしどめ咲く芝原くぼに水たゞよへり

新材切る手斧の音の山里にとよもす音は耳によろしも

春くもり峠越ゆれば鵯鳥の森に群鳴く菜の花の村

ぬるき夜の青葉の木立雨水のたまれるあたり蚯蚓長鳴く

井の水のくみてこぼれしうるほひの土に聲あり夏のおぼろ夜

くゞもりや月のありどのおぼろかにみゝずなく夜を思ひなごみぬ

富士山上三島岳にて

さにづらふ五百いは玉をま手にもちしやかのわり石立ちかへり見る

吾病日々にいえつゝさち草の咲けらく今日にあへる嬉しも

鶯の保田の軒に麗はしもみとりの妹と居るが憐しも

久方の神代の空にたゝなはる紅葉木曾山天の瑞山

朝ぎらふ尾張の廣田豐榮に美光わたる國の最中を

松影に白玉寄する波の音のかそけき月夜神天降るらし

吾ひとり木の種まけば掌にその躍る音土につく音

哀傷

開きたる岡の廣畑ちゝのみの父は見ず逝く麥生吹く風

草刈ると我とぐ鎌のさら〳〵に音のよけくを誰とかたらむ

吾山の潤のよろしき松影にとゞまり居らな心すがしく

島木赤彦

明治三十八年

日の本の山なみ千なみ青ぐもの空にきはまり湖きよき國（諏訪湖）

明治四十二年

妻子らを遠くおき來ていとまある心さびしく花ふみあそぶ（廣丘村客居）

明治四十三年

冬枯の野に向く窓や夕ぐれの寒さ早かり日は照しつつ（桔梗ケ原）

明治四十四年

草枯の國のくぼみにかたまれる沼のいくつに日あたりにけり（廣丘村）

いささかの心動きに冬がれの林の村を去らむと思ひし

この森の奥どにこもる丹の花のとはにさくらむ森のおくどに

この蘚に來てあそびたる友二人亡き人となりし昨日のごとし

眼のまへにその人はありとこしへに消えてゆくべきその人はあり

たまさかに人のかたちにあらはれて二人睦びぬ涙ながるる

大正二年

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白じろと吐きにけるかも（御牧ケ原）

大正三年

白雲の山の奥がにはしけやし春の蠶を飼ふ少女なりけり

月の下の光さびしみ踊り子の體くるりとまはりけるかも

椿の蔭女音なく來りけり白き蒲團を乾しにけるかも

薊咲く岩の上高み島の子の冷たき手をば引き上げしかも

常磐木の林の奥に家有らしある時は子の泣き聲聞ゆ

大正六年

雨曇り暗くなりたる森の中に蜩鳴けば日暮かと思ふ（北海道行）

眼のうへの櫟の山のふくらみに焚かぬ炭竈の口二つ見ゆ（牟禮原）

土剝げて岩あらはるる芝山の立ちのふくらみに風吹く音す

ふるさとよりはるばる來つる祖父にものを言ひたりこの日のくれまで（逝く子）

田舍の帽子かぶりて來し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず

大正七年

雪はれし夜の町の上を流るるは山より下る霧にしあるらし（善光寺）

雪あれの風にかぢけたる子を入るる懐の中に木の位牌あり

いくつもの寺は見ゆれど鐘鳴らず冬山の町は暮れはてぬ（飯山町）

この町のうしろに低き山の落葉踏みのぼり行く我の足音

大正八年

夏蠶桑すがれし畑に折りをりに降りくる雨は夕立に似つ（山居）

體の汗拭きつつおもふ今日このごろ蟬の少なくなりたることを

雪ふれば山より下る小鳥多し障子の外に日ねもす聞ゆ

大正九年

冬空の日の脚いたくかたよりてわが草家の窓にとどかず（冬の日）

大正十年

時鳥夜啼きせざるは五月雨のふりつぐ山の寒きにやあらむ（梅雨ごろ）

降りしきる雨の夜はやく子どもらの寢しづまれるはあはれなるかな

寂しめる下心さへおのづから虚しくなりて明し暮らしつ

大正十一年

山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり（歸途）

小松原雨の名殘りの露ながら袂にさはる青き松かさ

野分すぎてとみにすずしくなれりとぞ思ふ夜半に起きゐたりける（野分）

むらぎもの心澄みゆけばこの眞晝鳴く蟲の音も遠きに似たり（九月十九日、規忌）

天とほく下りゐしづめる雲のむれにまじはる山や雪降れるらし（[illegible]）

冬空の澄むころとなれば思ひいづる子の面影ははるかなるかな（初冬）

大正十二年

高槻のこずゑにありて頰白のさへづる春となりにけるかも（春）

山にして遠裾原に鳴く鳥の聲のきこゆるこの朝かも（[illegible]）

谷川の音のきこゆる山のうへに蕨を折りて子らと我が居り

我さへや遂に來ざらむ年月のいや遠ざかりゆく奧津城どころ（左千夫忌）

現し世ははかなきものか燃ゆる火の火なかにありて相見けりちふ（關東震災）

あな悲し火に燒かれたる人の背に[illegible]りつつわれは思ふも

一ぽんの蠟燭の灯に顔よせて語るは寂し生きのこりつる

久方の空ひろらなり鴨綠の流れのはてに低き山一つ　(滿洲)

みたまやの青丹瓦にふりおける霜とけがたし森深くして

大正十三年

冬枯れて久しき庭や石垣の苔をついばみて小雀の居り　(一月)

いくばくもあらぬ松葉を掃きにけり凍りて久しわが庭の土

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ　(諏訪湖畔)

山の上の栂の木肌は粗々し眼にしみて明けそめにけり　(燕嶽の上)

高山の木がくりにして鳴く鷽の聲の短きを心寂しむ

わが齡やうやく老けぬ妻子らとお花畑にまた遊ばざらむ

朝な朝な湖べにむすぶ薄氷晝間はとけて日和つづくも　(柿蔭山房の冬)

大正十四年

土肥の海搒ぎ出でて見れば白雪を天に懸けたり富士の高根は　(土肥)

富士が根はさはるものなし久方の天ゆ傾きて海に至るまで

わが馬の腹にさはらふ女郎花色の古りしは霜や至りし　(赤嶽行)

仆れ木にあたる早湍の水も見つ寂しさ過ぎて我は行くなり

深山木の仆れ木くぐり行く水のささやかにしてせせらぎにけり

山道に日は暮れゆきて栂の葉に音する雲は過ぎ行きにけり

谷かげに苔むせりける仆れ木を息づき越ゆる我老いにけり

谷の入りの黑き森には入らねども心に觸りて起臥す我は

奧山の谷間の栂の木がくりに水沫飛ばして行く水の音

栂の葉に音する雲は折りをりに小雨になりて過ぎ行かむとす

武藏野原枯れゆくところは町中の庭に小鳥の來て鳴きにけり　(番町の宿)

大正十五年

或る日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず冴え返りつつ　(恙ありて)

信濃路はいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黃なる空のいろ

わが村の山下湖の氷とけぬ柳萌えぬと聞くがこほしさ

魂はいづれの空に行くならむ我に用なきことを思ひをり

齋藤茂吉

ものの行とどまらめやも山峽の杉のたいぼくの寒さのひびき

身ぬちに重大を感ぜざれども宿直のよるにうなじ垂れゐし

草づたふ朝の螢よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ

たたかひは上海に起り居たりけり鳳仙花紅く散りゐたりけり

潮沫のはかなくあらばもろ共にいづべの方にほろびてゆかむ

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり

ひよろ高き外人ひとり時のまに我を追ひ越す口笛ふきつつ

狂人に親しみてより幾年か人見むは憂き夏さりにけり

まかがよふ晝のなぎさに燃ゆる火の澄み透るまのいろの寂しさ

すき透り低く燃えたる濱の火にはだか童子は潮にぬれて來

ここに來て心いたいたしまなかひに迫れる山に雪つもる見ゆ

きのこ汁くひつつおもふ祖母の乳房にすがりて我はねむりけむ

ふるさとに歸りてくれば庭隈の鋸屑の上にも霜ふりにけり

ひむがしはあけぼのならむほそほそと口笛ふきて行く童子あり

いのち死にてかくろひ果つるけだものを悲しみにつつ峽に入りつも

ふり灑ぐあまつひかりに目の見えぬ黑き蟋を追ひつめにけり

山峽に朝なゆふなに人居りてものを言ふこそあはれなりけれ

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも

山ふかく遊行をしたり假初のものとなおもひ山は邃しも

ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下りたちて鴉は啼くも

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや

こらへゐし我のまなこに涙たまる一つの息の朝雉のこゑ

あま霧し雪ふる見れば飯をくふ囚人のこころわれに湧きたり

どんよりと空は曇りて居りしとき二たび空を見ざりけるかも

みちのくの我家の里に黒き蠶が二たびねむり目ざめけらしも

みちのくに病む母上にいささかの胡瓜を送る障りあらすな

めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり

土のうへに赤棟蛇遊ばずなりにけり入日あかあかと草はらに見ゆ

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蠶のねむり

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

ほのぼのと諸國修行に行くこころ遠松かぜも聞くべかりけり

東海の渚に立てば朝日子はわがをとめごの額を照らす

しまし我は目をつむりなむ眞日おちて鴉ねむりにゆくこゑきこゆ

この夜は鳥獸魚介もしづかなれ未練もちてか行きかく行くわれも

われ起きてあはれといひぬとどろける疾風のなかに蟬は鳴かざり

日向葵は諸伏しゐたりひた吹きに疾風ふき過ぎし方にむかひて

さんごじゆの大樹のうへを行く鴉南なぎさに低くなりつも

夜おそく電車のなかに兵ひとりしづかに居るは何かさびしき

昨の夜もねむり足はず戸をあけて霜の白きにおどろきにけり

ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅ひとつ障子にあたる音ぞきこゆる

むらぎもの心はりつめしましくは幻覺をもつをとこに對す

ひさびさに外にいづれば泥こほり蹄のあとも心ひきたり

しづかなる午後の日ざかりを行きし牛坂のなかばを今しあゆめる

もの投げてこゑをあげたるをさなごをこころ虚しくわれは見がたし

かみな月十日山べを行きしかば虹あらはれぬ山の峡より

たたなづく青山の秀に朝日子の美のひかりはさしそめにけり

石の間に砂をゆるがし湧く水の清しきかなや我は見つるに

西ぞらにしづかなる雲たなびきて近江の湖は暮れにけるかも

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並みよろふ山

しづかなる峠をのぼり來しときに月のひかりは八谷をてらす

Thanatos といふ文字見つけむと今日一日焼けただれたる書をいぢれり

尋常のごとくわれはおもへり羽蟻が羽おちて疊まよひありくを

焼死にし靈をおくるとゆふぐれてさ庭にひくく火を焚きにけり

家いでてわれは來しとき澁谷川に卵のからがながれ居にけり

ものの音に怖づといへどもほがらかに蟋蟀鳴きぬ山のうへにて

ひる過ぎてくもれる空となりにけり馬おそふ虻は山こえて飛ぶ

むしばみてわが齒なやみし日ごろより日に日に秋は深くなりつも

信濃路はあかつきのみち車前草も黄色になりてしもがれにけり

寒水に幾千といふ鯉の子のひそむを見つつ心なごまむ

國の秀を我ゆきしかばひむがしの二つの山に雪ふりにけり

桑の葉に霜の解くるを見たりけりまたたくひまと思はざらめや

むかうより瀬のしらなみの激ちくる天龍川におりたちにけり

壁に來て草かげろふはすがり居り透きとほりたる羽のかなしさ　（弔芥川龍之介二首）

やらやくに老いづくわれや八月の蒸しくる部屋に生きのこり居り

空海のまだ若かりし像を見てわれ去りかねき今のうつつに　（高野山）

ぬばたまの夜にならむとするときに向ひの丘に雷ちかづきぬ

中村憲吉

明治四十一年

新桶を伏せしかたへに割るたけの竹紙かろく春風にとぶ（竹）

明治四十四年

宵ふけてわが行く野べを草の家にくくと鷄鳴くあはれ月夜を（薄ら夜三首）

枯立ちの林にこもる壁のねむり月照りくればしるけく浮くも

しらじらと夜のふけ行けば新芽吹く森にこもりて寝るいめを思ふ

大正三年

新芽立つ谷間あさけれ大佛にゆふさりきたる眉間のひかり（眉間の光四首）

夕まぐれ我れにうな伏す大佛は息におもたし眉間の光

暮れそむる淺山かげに大佛のはだへは蒼く明からむとす

大佛の乳見そむれば松の間が眼にわづらはし松葉こまかに

大正四年

大河ぐちの夕燒がたの船工場音をやめたりその重きおとを（構橋晩景三首）

ひろびろと河の口より夕映す橋にむきたる街のとほくに

ひろびろと河のくちより夕ばえす構橋にちかづく大き帆のかげ

大正五年

身はすでに私ならずとおもひつつ涙おちたりまさに愛しく（鏡の光五首）

わたつ海のうしろの岩のかげにして妻に言らせる母のこゑすも

磯を行くいまだに母はあはれなり我が新妻を愛みたまへり

かかる海の珠ひろひつつ磯かげの山かた付きて行かす母かも

おぎろなき息をもらせり内の海八十島かげに水の光れば

大正六年

山かひの秋のふかきに驚きぬ田をすでに刈りて乏しき川音（歸住四首）

今日も出て眼に入るものみな山なりひと日ひと日と冬のさみしさ

忘れたる十円算になづみつつ村びとの顔を日日に見知りぬ

朝の間はこころに忘れかぎろひの夕べとなれば悔いつつぞ居る

夕ぐれは端居の鍋にもの焚きて食すによきほど雨したたれり（夕雨三首）

御寺よりこほろぎ鳴けり夕雨にやや〳〵濡れし鶏頭のはな

たまさかの雨に落ちつくわが夕餉妻にくはしき物言ひにけり

大正七年

日ならべて寒き風かも川の瀬の五百箇岩群は濡れてこごれる（氷川二首）

足もとの凍つく夕べとなりぬれば山した川の音のともしさ

大正八年

秋づけば山のぬすみのまた増加えぬ今朝もこと告げ山守きたる（山守三首）

荷縄さげて山へゆく人とほりたり霧のなかよりわれに會釋す

この村に貧しきがおほし天然の山にいりて半ば食を求むる

うら山の芽吹きをはやみ殖えてくる春鳥のこゑ繁にかなしも（裏山の春二首）

としらにゐ堰がうへの茱萸のはな河鹿鳴くべき時にいたりぬ

大正九年

酒つくるみ冬とおもふ心せはし雪ふる今朝の洗場のうた（酒かみ三首）

聲かけて水擔きとほる男らの向うへいそぐ臀さむし

樽負ひてはひる人あり小蓑より乾ける土間に土をこぼして

大正十年

日のくれの雨ふかくなりし比叡寺四方結界に鐘を鳴らさぬ（比叡山六首）

夕鐘はふもとに鳴りて白くもの結界のうへにかすか聞ゆる

夕さればいにしへ人の思ほゆる杉はしづくを落しそめけり

山に坐して湖をひろく見ほがらかに大き寂しさに入りたまひけむ

山のうへ世をかなしみて下りて來ぬ僧のおほくが山にはてけむ

あかときに山ふかき鳥を聞くものか比叡寺にゐるを寢て忘れたる

大正十三年

いとまなき我はきたりて伊賀の野の十日の月に照らされてをり（月ケ瀬行六首）

我がくだる小溪にかかる幾つものかたりことりと月夜の添水

月ケ瀬の旅籠屋につきし思ひふかし土間の手桶の白梅のえだ

部屋の戸を何時までも開けて月にむかふ旅のやどりの軒のしら梅

月のまへに白梅のはなを見て坐りむかしの人になりぬるごとし

月ケ瀬の川おとしつみ暗くなるは神香野へ照りて月うつるならむ

大正十三年、大阪にて

大きみの國のうれひの夜に入れり都のたより遂にきこえず（帝都大震災五首）

常はただ其處に思ひしすめらぎの國のみやこゆ言の通はぬ

すでに聞く富士山帶に地震おこり國裂けて湯氣を噴きてあり云ふ

國こぞり電話を呼べどほろびたりや大東京に聲なくなりぬ

人みなは愚なりける昨日の日の晝餉の飯を知らず食みける

大正十四年

大内の御庭の砂はひろくして樹は何も植ゑず雨のしづかさ（清涼殿七首）

殿づくり正しくかこみ庭たらへり御階のまへに小竹ただ二株

大うちの白砂庭へひびきゆく我がしはぶきを憚りにけり

うつつにも靜かに鳴れり宮のうちのうつぼ柱につどふ雨みづ

清涼殿の階をのぼりて鳴板の音こといとするに足をおそれき

通りゆく身をつつしみぬ御帳よりもし咎めてや聲のしたまふ

清涼殿の落敷に下りてふりあふぐ時雨のそらの大きなる簷

大正十五年

阿波の海に潮立ちさわぎ打ちいでて淡路をみれば磯もしら波（鳴門潮渦十一首）

磯にでて鳴門を見ればうごきくる青海ばらにしら波のとぶ

淡路島向きて大きしその磯の潮のとよみも聞けばきこゆる

磯たかく波のしぶけば聲あげて淡路の島を呼ばむとぞおもふ

漕ぐ舟も下にたゆたふ阿波の門は海をさながら大河とせり

天にひびく渦の鳴門と戀ひしかどただ海なかの川にしありけり

山ちかき淡路をまへにこの迫門をつぎつぎに下る大帆かけ船

はだか島へ下りゆきて見れば潮の干し岩秀へかかり落つる白なみ

鳴門の岩瀬が塞きし海ばらは二段となりて落ちて居りぬる

春の日の夕づきそむる飛島にめぐりに渦の大きくなりつ

鳴門より戻りてわたる撫養のうみ潮のながれは北へかはりぬ

土屋文明

荒川水門(四首)

乾きたる道を來りて青草の堤のふき井のめば淸しき

大川は水上ながら夕潮のこの水門に來りいきほふ

土手の上の工事のこりの人造石人來りては蹴おとすらしき

水の上はさへぎりもなき山彦は鐵の扉のひとところより

雜詠(四首)

池鯉のここだく死にて浮べるは雪代水にうたれしならむ

流れ合ふ池の水口にあぎとふは生きのこりたる鯉群るるなり

汗ばみて夜なかの地震に覺きし吾は宿屋にとまり居しなり

戸を閉めて物の香こもる宵ころを下水にあつまる蛙らうるさき

西國より歸る(四首)

東京に雨つづけりと汚れたる障子を閉めて妻子ら住めり

高き熱いだしたりといふ幼兒の朝飯むさぼり食らふを見たり

錢湯に子等つれいでて東京の蟬の靜かなる聲に氣づきぬ

明るき海にあそびて來しとさへ妻らに言はず晝寢つづくる

妙高温泉(二首)

つよき日は草野のうへにさしながら野分に似たる風のふきゆく

あかあかと崩處に射せる朝の日は靑きはざまを照し出だせり

歌集「ふゆくさ」より(三十首)

この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず

日だまりの赤土がけの崖の下ふゆくさ靑き泉にいでぬ

久方のうすき光に匂ふ葉のひそかに人を思はしめつつ

霜ふれば霜に枯れゆく山の上に濃き紫のりんだうの花

山の上は秋となりぬれ野葡萄の實の酸きにも人を戀ひもこそすれ

西方に峽ひらけて夕あかし吾が戀ふる人の國の入り日か

夕べ食すはうれん草は薹立てり淋しさを遠くつげてやらまし

春といへど今宵わが戸に風寒しわがこころ妻さはりあるなよ

砌べの莢實となりこぼれたりわが一と庵すわれならなくに

茂りあふ草のもろ葉をしひたげて秋づく日影照れるひととき

丘の上のまばら榛の木秋ざれて騒ぐ夕べをゆく人もなし

水落ちて野菜の屑のくさり居る湖のみぎはに歩み來にけり

ゆるやかに圓き山裾めぐりゆきて一すぢ白くかわきたる道

並ぶ山みな圓やかに低ければ夕べのかげは谷に深しも

谷底に盛り上る青葉目にいきれ峠舊道をわが下るなり

温泉わけば借りてわが住む家の前をのろく流れて行く衣渡川

朝な朝なつなげる艀に米洗ふ向うの人等いまだ馴れずも

並ぶ町家大戸おろせば上諏訪のゆふべの道は凍りて寒し

朝寒き木戸は開けたりとろとろと凝らむとしてゆく川のみづ

牛込の揚場に來りわれは立つ石おろし場の桐冬枯れにけり

石つめる貨車ならび居てざらざらと眞砂を落す堀の荷足に

野の上に露るる砂みな白しこと國さとを行く思ひかも

白砂に清き水引き植ゑならぶわさび茂りて春ふけにけり

しらじらとわさびの花の咲くなれば寂しとぞ思ふおのが往來の

おしなべて雑木はいまだ芽ぶかねば日陰は寒しぢしやの木の花

澤下る水も親しと思へるに今日みれば冬の草生ひにけり

寒國に來り住みつつ春を待つ心ともしきふゆくさの青

いただきは立つ木も稀に笹原と枯草原と色をわかてり

幼兒は懶げに疊にねころべり狹き家ぬちに暑さこもれば

ひろすぎてなほ下つゆの乾かざる落葉の中のりんだうの花

平福百穂

國見峠にて

ここにして岩鷲山のひむがしの岩手の國は傾きて見ゆ

釧路行(二首)

天さかる釧路の國にならびたつ雌阿寒の山雄阿寒の山

ほの白く鴨翔ばたくや夕寒き二日の月に光ありけり

生垣をくぐりていゆく孕み猫土に腹すりくぐりけるかも

櫻田の家なき原に乞食らの焚きてゐる火を見て通るかも

金剛山

よもすがら山の氣身にぞ沁みわたる大寺のうちに曉待ちかねつ

雪の下の蕗のたうを掘るあら土の匂ひ高しもその雪の上に

ふきのたうを鉢にうつして吾が室の明るみに置き見れば樂しも

高臺の駒馬目黒をつらぬけるいささ小川の水ゆたに滿つ

春さればいささ小川のうす濁り早瀬をなして今日ぞ流るる

山の宿(二首)

蝉のこゑにはかに止みて山峡の夜明けむとする狹霧のうごき

夕いまだ合歡咲く宿にあゆみ着き古き草鞋をぬぎ棄てにけり

一日ひと日かげりてさむきわが庭の池の金魚を寫しつるかな

病院にて(二首)

手術うけむとひかり明るき大廊下友と二人し默して通る

赤き帽子目深にかぶり入り來る吾子は常より大きくし見ゆ

長崎にて

大波止のあかるき街の人ごみにあはれ異國の捕虜も居たりき

自由舍歲晩(三首)

落葉焚きて烟立ちのぼる今朝の冷えよこの舍守る弟子と吾が居り

枯草を焼きつつ心さぶしかりはるけき道に思ひ至るも

雪の後のしめりしたしき世田谷の木立の中に家多く見ゆ

先考を思ふ

旅にして父のありけむこの家の古りにしままに人住みて居り

大震災（四首）

地震のむた土煙りせる下街はただにあやしく靜けきに似たり

燃えあがる大き火むらを立ちまもる人群に交り默にさぶしも

騒がしき市は包る今宵なほ二夜にかけて火むら立ち見ゆ

はてしなく燒けにし街のあとゆくにかくもほろびし青きもの見ず

信濃路

み山べは雨もよひせり立ち歸る母の俥に幌を垂れたり

富津にて（二首）

盆の上にとりし松露の太きもの小さなるものをかぞへつるかも

みちのくのみ冬をこもらす母上に松露おくらむ少なけれども

清澄山（二首）

足の許にくづれこぼるる山土のおのづからにし止まる閑かさ

雪解の赤土道を下りけり谷間ふかく山にあかるさ

滿洲行（四首）

曠原に濁りうねれる太子河はいづらに流れゆくにやあらむ

山だにも見えぬこの原とよもしし戰の蹟に我は來にけり

夜をつぎて戰ひ止まぬこの原にみちのくの兵士多くはてける

土凍てて見とほす原のま面に戰ひはてしかあはれ吾が兄は

阿蘭陀繪（二首）

みちのくの出羽の太守と生れけむこの君にして描ける阿蘭陀繪

いちはやくおらんだぶりを畫きしは吾が鄉人よ小田野直武

月かげは臥所の窓にかたむきぬ寒さしみしと思ふ夜ふけに

雜詠

ふるさとの山の起き伏し目にしめり夕やけ雲のあかき一時

島木赤彦君を悼ふ（三首）

ことなげにものをいひつれかくまでにおとろへましししかしばし會はぬに

眼さへすでに黄いろくなりにけり言葉詰まりて對ふ悲しさ

しまひおきし友の寫眞をとり見つつ涙おとせり吾が妻も共に

仙臺詠（四首）

ひとときに芽ぶきたち匂ふみちのくのあかるき春にあひにけるかも

見さくればさやけくもあるか山脈に雪はのこれり國々の山

雪の上に鴬はたつらしみ山木の木立を望めてふかき谿々

嶺の上をきりひらきたるみちのべに標木立てり國を境す

土田耕平

目にとめて信濃とおもふ山遠し雪か積れる嶮けき光 (伊豆大島詠十首)

潮なみとよむを聞けばおぼつかな島べの春となりにけらしも

乳ヶ崎の沖べながるる早潮のたぎちもしるく冬さりにけり

三原山裾の榛原うら枯れて鵯鳥のこゑを聞くべくなりぬ

夕洛人こそ見えね間遠くの岩にほのかに寄する白波

この宿にかくて三度の年暮れぬ机の上の御佛の像

天雲はいまだも深し梅雨ばれの光ひととき海を照せり

月影は疊の上に照りにけり足さしのべてひとり安けさ

とのぐもり暮れゆく沖にいさり火の影かと見しは伊豆焼くるなり

落葉する島の木原はしづけくて艦の砲音とほくより聞ゆ

やや暫し入日のかげをとどめたる山の頂を雲つつむなり (信濃詠十首)

山かげは眞萩しみみの花明り晝さへ露をたもちたるらし

きぞ見てし月の光をおもふときこの降る雨や久しかるべし

ふみわくる落葉の音はもろくして月ぞわが身に沁むここちする

道のべの枯草かげのほそり水凍りあがりてけふは音せぬ

夏衣たたみて行李にをさめたりまた來む年はいづちにあらむ

秋ふけしおどろが下におのづから滅びにむかふ深き色見ゆ

とんぼうの羽もこの頃よわりたり日向の縁に來てとなりつつ

裾原につくる桑さへ丈低し人のたつきのおもほゆるかな

稲妻のひらめく下に見ゆるもの道も巖も常の目に似ず

藤澤古實

赤石山脈雜詠（三首）

深山木の倒れ木あまた越えて來つ人の入りけむ跡さへもなし（白根山に向ふ）

青空は雲かげもなく澄みとほり天つたふ日にさはるものなし（東岳頂上）

ひむがしに夕暮るる富士や吾が立てる赤石山の陰のなかにけり

晩秋

日ならべて日は澄みながら北空のしづめる色は時雨なるらし

冬の信濃に歸りて（二首）

雪山に入日の光しづまりて澄む天の涯いや限りなし

山道は落葉まつかさ栗のいが音を立てつつ上り來にけり

木曾御嶽行詠より（二首）

朝日さす御嶽の峯に照る雪の鏡のごとし天澄みわたる

御嶽のいただきの雪は天の原日の暮るるまで光りけるかも

父を葬る

ふるさとの道にすべなしおのづから溢るる涙しづめかねつも

碓氷峠眺望（二首）

碓氷嶺にのぼりて見れば山の沈む信濃の國は起伏しにけり

雲の蔭の山々の傾斜いや延して隈なかるらなり東曇る

晩秋小情（四首）

鷄頭は濃きくれなゐに寂びつつも雜草なかにありて思ほゆ

思ひ見る月は二階の縁にさし向ひの屋根を照りて行くらし

言ひやらば一心にしづめむか吾にまされるその行末はも

一日の日の落つるより冷まさるこのごろ漸く鎭まらむとす

赤彦先生一周忌にゆく

一年は過ぎつつもとな雪白き御墓の前を踏みよごしたる

昭和二年微恙ありて（二首）

吾が死にし後のなきがらは火に燒きてことごとく白くなりたかりけり

これの世に嫡子をもたず夜空行く月沈むごと死なしめたまへ

昭和二年十月甲斐を行く（二首）

山深き七面山に寢しことを行きてまをさむ父母は亡し

富士が嶺に寄れる斑雪をこのあした山の上より驚きて見し

結城哀草果

稲の葉のひとつ螢よ田のみづに影うつりつつ一夜ひかれり

畑なかに妻がくれたる青胡瓜肥料くさき手に持ちて食ふかも

うつくしき少女ひとり藁仕事の男のなかにゐたりけるかも

日もすがら汗をながして掘る藷は旱にやけて小さかりけり

世の中に弱く生きたる一族は御詠歌あげて冬夜こもるも

山窪の清水湧く邊に乞食住み其處にをり犬吠え聞ゆ

藁塚のなかに見つけし鼠の兒眼あかぬゆゑ罪なかりけり

あかがりに露霜しみて痛めども妻と稲刈れば心たのしも

山くづれして谷間の雪を汚したる板谷峠はわれにおそろし

夕ぐれのゐろりに赤く火が燃えて南瓜の煮ゆる音がするかも

繭ぐるま妻とし挽けばおのづから睦むこころのわきにけるかな

しとしとと雨の降る夜のこほろぎはあをたは鳴かず竈のべに鳴く

畑道に脣くろく染めし兒は熟れたる桑の實を食ひしなり

ひとり默して稲刈る小田の近くにしながるる川よ音たてながる

火をあかくゐろりに焚きて下男らと夜業はげまむ冬は來にけり

稲を刈り濡れて歸るにわが妻は南瓜を熱く煮て待ちをれよ

古峯山の萱は刈られて牛一つのぼりてゆく道みゆるなり

吾と妻は寒き朝あけ飯食ふと火鉢のふちに卵わりをり

磐城のやまに朝夕たつけむり炭焼く秋となりにけるかも

秋雨の降りつぐ宵は妻として蠶のへやに火をまもりつつ

いとまなき軀となりぬ道ばたの若葉の色のたけしに驚く

日にちかき若葉にくだる霧見えて朝の小鳥の鳴く聲きこゆ

目ざめたるあしたの床にきこゆるはわが家のうちに妻のゐるこゑ

起きいでて吾にあたたかき思ひあり土に音して雨ふりにつつ

わが母と睦ぶ言葉のかくばかり愛しき妻と思ひ知りたる

かなしくもものの音なし相向きて吾らふたりの息づくこの朝

竹尾忠吉

唐黍の繁りみだれて吹きとほる晝の風さへ目に立ちそめし

思亡妻（四首）

健かにわが幼兒はそだちけり母を知らねば呼ぶこともなし

春雨の降る音きけば健かにわが幼兒のそだつ心地す

夫われの涙を欲りしこともあらむ逝きてののちのこの涙かな

うつつなき蛙の聲や亡き妹の面わもいまはとほく思ほゆ

日常吟（九首）

朝あさの電車の窓に眺めゆく御濠に鴨のをらぬ日もあり

忙しく往き來する人やきかざらむ夕舗道に落葉する音

心ときめくこともやかなと出で來しが獨り歩きはすぐ倦きにけり

時をり雪を交へてふきとほる比叡颪は夜も來るなり

おそ秋の霧は立ちをり勤終へて銀座通に出づる夕べを

樂しまむもくろみありて淺草の夜の仲見世にまづ飯を食ふ

いましがた過ぎし時雨に濡れて來し友を火鉢の邊に坐らしむ

日のありど見えつつ過ぎし雪荒れは谷の檜原をはだらかにせり

何處にて交す言葉ぞ人群の顔あかあかと行く道のなか

高田浪吉

震災詠(十一首)

人々のせむすべ知らに渡りゆく橋の上より火は燃ゆるなり

母うへよ火なかにありて病める娘をいたはりかねてともに死にけむ

人ごゑも絶えはてにけり家燒くる炎の中に日は沈みつつ

いとけなき妹よ泣きて燃えあがる火なかに一人さまよひにけむ

目に見ゆるものみな火なり川にゐて曉まちかぬるわがこころかな

まがつ火のみなぎりし夜や明けはてて向ひの川岸に人よぶこゑごゑ

道のべに火は殘りをり朝ぼらけなになすがらむ人のこころよ

燒原に重なり死ぬる人を見て泣き悲しむ聲も起らず

たのめなきこの世のさまや人々の亡がら越えてうから探すも

妻や子に似たるすがたと思へばか父は手づから水をそそぎぬ

數々の人死にゆける時の間を遠世の如く思ほゆるかな

築地藤子におくる

君が面みるに泪のとどめ得ず亡きをさなごをいだき給へり

信濃にて(二首)

青葉山朝ゐる雲のはれがてぬこゑを短く啼くほととぎす

小鳥らのさへづる山にほととぎす短く啼きて過ぐるは惜しき

十國峠(二首)

秋草や結ばれしまま生ふるあり海べより來し高き草山

草山の草ふく風や飛びたてる鴉の影の山にうつれり

病間(二首)

病みをりて過ぐる日思へばうつしみは悔いごころさへかすか湧きつつ

子の病氣づかひて來しわが父とたまさかなれや晝の飯くふ

區劃整理にあひて(二首)

引越しのあわただしさや暑き日をいづこを家と定まらなくに

夏きたる日にさわがしく家こはすひびき身に沁む巷にし住む

今井邦子

大正十五年三月二十五日御病床の島木赤彦師を見舞ふ（六首）

迫り來る信濃の山に雪白し甲斐より入りし汽車冷えきたる

わが師よと呼びてすがらむ村肝の嘆きにたへてひたすらにをり

みひとみに會ひにけるかもうつし身のみ心に通ふかたじけなさよ

ことごとく心は苦し御教に至り得ざりしみづからを知れり

かにかくにみ命はもち〻夜明けぬ我等は朝のひまに髪結ふ

雪明りおぼろに遠き山に向ひありどを知らぬ靈こひまつる

三十三間堂にて（二首）

立ちならぶみ佛の像いま見ればみな苦しみに耐へしみすがた

み佛につかふる吾れにあらなくに大き階段つつしみのぼる

新年能（二首）

たちかへる春をことほぐ元滋が翁の舞に心は和む

ほがらかに御代をことほぐ聲もよし婆々吒囉哩囉吒囉哩婆々

龍樹菩薩の一代記（二首）

とほき世の菩薩龍樹も未通女らを犯ししといふかなしきはなし

發願の縁は深しすぎし日の己を悔いて死ぬ事なかれ

故郷の夏（八首）

朝々に水とりかへてをしみ見る山桔梗は吾子が折り來し

めづらしみ山の花とりに子が行きし山をかくして夕立きたる

此朝の山根に雲はなけれども心がなしくおほに霞めり

こまやかに散りゆく庭の萩もみぢ目にたたなくにあはれちりしく

夕顔の蔓のみだれもきはまりて二つの鉢の土乾われ居り

朝な朝なたたみなれたる麻蚊帳の折目くづれて立秋に入る

をみな吾れおとろへにむくかそけさを身にしみ知らゆ事なき日には

ほうじ茶をのみて語らふ家人と笑ひすくなき明け暮れなるも（議會開會中）

久保田不二子

夫の歿後折々（十首）

山の上にたまさか遊ぶたのしさを我は思はむ悲しかれども

ふる雪は今宵あまねく積るらし折々うみの氷鳴るおと

うみ風の日すがらに吹く部屋にしてこの一冬を明暮れにけり

眞夜中に吾子旅立たす我家の庭はこほりて雪あかりする

草屋根の雪解のしづくおちそめて昨日も今日も音のきこゆる

みづうみの厚き氷のひびく音をおほつごもりの夜ふけてきく

わが心深くうれひてをりといへど晝はつとめて夜は眠るも

折々に時雨の雲のくだり來る庭べすがれて見るものもなし

時々に明るみにつつ時雨のあめつひに止まずして夕暮るるなり

たまたまに雨の降る日は我が心ゆるやかになりて物書きにけり

挽歌（十首）

きそよりの雨あがるらし郭公のふかくかかれる奥若葉山

包めねばならずとひたに思へども心弱りて父ねむるなり

咲く花のうつろふが如悲しさもうつろひなむか月日へにつつ

旅遠くいでたつ吾子を送りつつ思へば愛し父なしにして

ことほぎて夕餉をとれど吾子も我も心の内は寂しかりけり

慌しかりし君が一世をしのび居る外には寒き湖風の音

亡き人の數に交りておかれたる小さき石を見れば悲しき（亡き子の石）

亡き吾子をひたに嘆きしその父も今は世になし憶ひ知られず

青葉山つゆ曇る山に夜晝のけぢめも分かずほととぎすなく

やうやくに芽ぶきそめたる萩の芽に胡桃の花の散りかかるなり

釋迢空

冬深く 山はものげのなかりけり。いで湯も、今は ひえてゐにけり（山[illegible]首の中）

年を經て 聞くさびしさや。教へ子は おのも／＼によく生けれども（今宮中學校七首の中）

師の道を つたふることも絶えゆかむ。我さへに 人をいとひそめつゝ（冬草八首の中）

ふる國も こゝも住みよし。妻も 子も、人のそしりに安けき 見れば（[illegible]五十首の中、[illegible]）

朝けより 埃のにほひ鼻に沁み、しくしくに 腹の ひもじかりけり（「失業人」）

秋にむかふ山のたつきのかそけきに、今年は早く、雹ふりにけり（上州河原湯十一首の中）

まれ／＼に 我をおひこす 順禮の跫音に あらし 遠くなりつゝ（[illegible]六首の中）

氣多の宮 籬にいそぐ海の音。耳をすませば、聽くべかりけり（氣多はふりの家二十一首の中）

たぶの杜 こぬれこと／＼空に向き、青雲は 今日も雨なかりけり

諒闇に 歳窮れり。世の人のうへも、靜かに 我は惟はむ（門[illegible]事四十四首の中）

若くして死にゆく人は 日ごろさへ言ひ出る語の、胸に沁みしか（秋山太郎[illegible]首の中）

山中に わが見る夢のあとなさよ。覺めて思ふも かそけかりけり（山道十八首の中）

山晴れて 寒さするどくなりにけり。陸をたゝけば、身にしみにけり

青空のうらさびしさや。瀑布でら [illegible]む いらかをゆびざしにけり（夏のわかれ十二首の中）

飯倉の坂のゝぼりに、汗かける白き額見れば、汝はさりかたし

さびしさを 我に告げむとする人よ。いこひて行かな。圓山の塔（ある時）

あやまたず あらしめしかのをみな子も、かつ／＼我を忘れゆきけむ

木場の水 わたればきしむ橋いくつ こえて來にしを いづこか行かむ（[illegible]物集五十六首の中「木場」）

わが心むつかりにけり。砂のうへの力芝をぬき ぬきかねて居り（「芝浦」）

穗すゝきのみゝづく 呆けて居たりけり。日ごろ けはしく 我が居りにけり（「雜司谷」）

司びと事あやまてど、何ごとを 大き御
門に向きて まをさむ（二重橋）

思ひつゝひとりあらむ と言ふ人よ。若
きはたちのことばにあらず（ある人に二首の中）

山川のたぎちを見れば、はろ〴〵に 滿
ちわかれ行く音の かそけさ（先生の死十四首の中）

山茶花のはな散りすぎて、庭のうへに
あたる日の色 濃くなりにけり（冬来る庭二首の中）

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。
この山道を行きし人あり（島山十四首の中）

山岸に、晝を 地蟲の鳴き滿ちて、この
しづけさに 身はつかれたり

ゆき行きて、ひそけさあまる山路かな。
ひとりごゝろは もの言ひにけり

いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹
のはさみを もぎはなちたり

いまだ わが ものに寂しむさがやまず。
沖の小島にひとり遊びて

すこやかに網曳きはたらく蜑の子に、言
はむことばもなきが さぶしさ（蜑の村十三首の中）

船べりに浮きて息づく 蜑が子の青き瞳
は、われを見にけり

山中に今日はあひたる 唯ひとりの を
みな やつれて居たりけるかも（木曾川十一首の中）

啼き倦みて 聲やめぬらし。鴉の止へる
木は、おぼろになれり（夜六首の中）

山の霧いや明りつゝ 鴉の 唯ひと聲
は、大きかりけり

澤なかの木地屋の家にゆくわれの ひそ
けき歩みは 誰知らめやも（木地屋の家十五首の中）

山々をわたりて、人は老いにけり。山の
さびしさを われに聞かせつ

山びとは、轆轤ひきつゝあやしまず。わ
がつく息の 大きと息を

澤蟹をもてあそぶ子に、錢くれて、赤き
たなそこを 我は見にけり

木ぼっこの目鼻を見れば、けうとさよ。
すべなき時に、わが笑ひたり

山道に しば〳〵たゝずむ。目にとめて
見らく さびしき木ぼっこの顔

人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。
旅寢かさなるほどの かそけさ（供養塔五首の中）

邑山の松の木むらに、日はあたり ひそ
けきかもよ。旅びとの墓

山ぐちの櫻昏れつゝ ほの白き道の空に
は、鳴く鳥も棲ず（遠州奥領家八首の中）

山のうへに、かそけく人は住みにけり。
道くだり來る心はなごめり

ほがらなる心の人にあひにけり。うやうやしさの　息をつきたり

はやりかぜに、死ぬる人多き町に歸り、家をる日かず　久しくなりぬ（大阪九首の中）

ふるさとの町を　いとふと思はねば、人に知られぬ思ひの　かそけさ

ふるさとはさびしかりけり。いさかへる子らの語も、我に似にけり

をり／＼に　しいづる我のあやまちを、笑ふことなる　家はさびしも

久しくはとまらぬ家に、つゝましく　人ことわりて、こもる日つゞく

兄の子の遊ぶを見れば、圓くゐて　阿波のおつるの話せりけり

いわけなき我を見知りし町びとの、今はおほよそは、亡くなりにけり

まれ／＼は、土におちつくあわ雪の　消えつゝ　庭のまねく濡れたり（母十八首の中）

苔つかぬ庭のする石　面かわき、雨あがりつゝ　昔の久しさ

竹山に　古葉おちつくおと聞ゆ。霜夜のふけに、疊あつゝ居れば（霜沒七首の中）

朝風に、粉雪けぶれるひとたひら。會津の櫻　固くふゝめり（[illegible]三十八首の中）

庭草に、やみてはふりつぐつゆの雨　心怒りのたゆみ來にけり

額のうへに　くらくそよける城山の　梢を見れば、夜はもなかなり

燒け原の町のもなかを行く水の　せゝらぎ澄みて、秋近づけり（[illegible]八首の中）

もの言ひて　さびしさ殘れり　大野らに、行きあひし人　遙けくなりたり（[illegible]山三十九首の中）

この家の人の　ゆふげにまじりつゝ、もの言ひことなる我と思へり

山岸の葛葉のさがり　つら／＼に、仰ぎつゝ來し　この道のあひだ

峰の上には　さ夜風おこる木のとよみ。たばこ火あかり、人くだり來も（端山九首の中）

[illegible]つ。遠吸の門の波の色。年の夜をすわる疊のうへに（[illegible]十九首の中）

村の子は、女夫のくなどの　肩擁きています心を　よく知りにけり（だろ／＼神をつり七首の中）

白じろと　經木眞田を編みためて、うつつなきかも。草の上のをとめ（野あるき二十二首の中）

衢風砂吹き入れて、はなしかの高座のまたゝき　さびしくありけり（いろものせき七首の中）

誰一人　客はわらはぬはなしかの　工さびしさ。われも笑はず

横山重

寒き夜を片瀨へいそぐ濱づたひ夜鴨のこゑは山手に聞ゆ（鵠沼六首）

燈火なき家の角々よかり來て夜鴨をきけり暗き濱邊に

夜くらき砂山の下ひろ〴〵と枯葦つゞくなぎさつら道

暗やみに飛び立つ鳥の羽の音か葦原と云る風のさびしさ

川ばたの道の片がは葦ふかしますかし見れば夜の潮どき

戸外に吹きたまりたる濱の砂ふみこむ足はいたくつめたし

傘を借りて來しかばかたき地に一頻り降る雨の樂しさ（新堀河八首の中五首）

家間の新堀河の石垣に下水の水のしたたる音す

河中に粗代立てし木賃家を橋の上より覗く人あり

橋下の暗き流れに地下室の燈火はさして水よどむ見ゆ

角の湯は湯尻をぬきて靜かなり雨の小路に湯氣は立ちつゝ

燈火は家ごとにくらし霧うごく夕べの街に海苔を買ひけり（品川の海八首の中四首）

泥のうへを潮落ちかゝる夕なぎの遠き沖邊に波白く見ゆ

おもおもと泥土のうごく泥の海霧ふりながら近くまで暮れぬ

海の藻は寄りてくさりぬ霧の中すり火に見れば青くなぐめり

湯を立つる母屋の土間に燃ゆる火を著しと思ふ夕の目覺めに（山國）

家蔽ふ槻の大木を眼にもちて歸りは來つれ古き我が家（槻の木七首の中四首）

槻の木は賣られてあらず積み上げし家垣の石も荒れ果てにけり

槻の葉はさらさらと音す長雨のこまかになりて風の寂しさ

槻の木を伐りて賣りしかば家がこひ寂しき家となりて居にけり

山利貞三

風の上にすこしもゆるぎなき大き艦艦腹は深く水に入りたり（觀艦式展景のうち四首）

艦の腹波はゆたかに搖りにけり吃水線の朱紅の巾

しづかなる風にし見ればいろ寂し高き舳の汐に錆びたる

榛名艦正しく艫を向けにけりマストの据りこゆるぎもせず

春山の澤の蕗の芽喰ひに來る熊の唸をわれは聽き居つ（山の歌のうち五首）

嵐すぎて今宵音たかし廣瀬川雜木の青葉おし流し來る

玉川は音のさびしさ手に投ぐる石にも寄るか魚のしづけく

玉村の夜はくだちたり草屋根の大き勾配棟を並べぬ

みんなみに山[illegible]まりぬ白雲のかがよふ嶺は奥出羽の嶺

おほははのみ面の皺目榾の火の赤き焔にあかりておはせり（祖母の歌のうち五首）

老い呆けしおほははのみ面あはれなりまなこは涙なくして泣けり

爐がたりに圍む榾火のしづかなり焔に心の青く立ちゐる

榾火に煖るおほははの膝こぶしいつも火照の赤くつきゐる

冬木原村の結氷に朝日さしほがらかにして心むなしき

雪の上に汽車は停りぬふるさとは山河すでに冬の久しき（母の歌のうち三首）

うからにとりかこまれてうらがなしひとり離れて久しかりけり

冬木原凍るこずゑゆ吹きうつる夜風の鳴りは澄み立ちゆくも

息づみて對ふ瞳のひたよりにわれをみつむるその目ゆるむな（黒[illegible]のうち三首）

ふるるだに怖き思ひををみな子のかなしきみちに思ひいたりぬ

ほとほとにその手をまかせありにけり泣かじとはいへど涙ためゐし

杉浦翠子

みつからの命に深き憐もてり子のありなしを我にな問ひそ

一つもの二つに分けて食ふべつつ子の無き生活も夫もろともに

山吹の一重は散りぬつぎて咲く八重のさかりもまた獨り見む（夫の外遊中）

我が夫よ稚な妻なるこの我に見しめしさまをよそにつくらすな（巴里の夫へ）

ガラス一重に夜風をふせぐ家なれば宵の稲妻枕にひらめく（千ヶ瀬五首）

時しらず松は古葉を落すらむこの松が根に積るを見れば

天つたふ昼日のあゆみを今日もまた山に入るまで全けく見し

ここに来て我が伏しし跡を残したり敷きたる草は起きかへらざる

薄き雲濃き雲の下を走りつつすなはち亂雲夕日にかさなる

死はも死はもたやすかるらむ飛ぶ鳥は小銃に當りてひとときに墜つ

しみじみと命おもへばをみなごは愛しまれつつ死すべかりけり

死にたしと言へば否々死なさじと頰すりよせて戯れ給ひぬ

天上に果つる日のなき戀ならし星はならびて二つかなしき（七夕の歌）

軒の端に渦巻き降れる雪片々玻璃戸に當るは大きく見えたり

病む床にもてあそべる手鏡に疊のおもてをうつして見るも

自動車のヘッドライトは過ぎむとしたまゆら青し我が白足袋に

電車いまカァーブを曲るその奇音夕べちまたの塵土に響く

をみなわれ罪つくらじとみづからを縛るは刃に伏すよりもつらし

戸を締めずて玻璃戸のままなり部屋の灯を覗かるる如き青葉の茂り

誰が言にも我は質さじひとひとり瞳に秘めおくそのよしあしを

山のうへに入日あかあかとかがやけりわが祖たちは健かにありし

昨日の日に替へし井戸水中つべはかつ泡立ちてうすく濁れり

牡丹(五首)

くれなゐの尺ばかりなる牡丹の花このわが室にありと思へや

大輪の牡丹かがやけり思ひ切りてこれを求めたる妻のよろしさ

瓶の中に紅き牡丹の花いちりん妻がおごりの何ぞうれしき

うつし身のわが病みてより幾日へし牡丹の花の照りのゆたかさ

まづしくて老いたる妻が心よりこの大き牡丹もとめけらしも

田植(五首)

これの田を植うるにしあらし畦の上に早少女ならべり十五六人

おり立ちてこの大ぜいのよろしもよ原の大田を今日植うるかも

うちならび植うる人らのうしろよりさざなみよする小田のさざ波

下の田に今うつりたる早少女ら小笠はとりてすずしかるらし

ねもごろに二足三足ふみ入りて浮き早苗さす妹がすがたや

沼畔雑歌(十一首)

梅雨はれて夕空ひろしここに見る筑波の山の大きかりけり

蘆原のあしの葉ずゑの夕あかりよしきり飛びて光りつつ見ゆ

分け入りていくら歩みし夕あかりいよよかすけき高草の原

夕ふかき高草のなかに歩み入れり頭のうへを鷺の飛ぶ音

高草原あゆみかへせば西あかりまたここに沁みていよよ暗しも

草原をあゆみきたりて湯に入れり草傷さへににくからなくに

夕されば馬の親子はかへり居り蚊遣してやるその厩べを

夕ふかしうまやの蚊遣燃え立ちて親子の馬の顔あかく見ゆ

おぼほしく厩をおほふ蚊遣火のけぶりは騰く夕沼のうへに

朝早み鳥屋を出でたる鳥のむれ鵞鳥はすぐに堀におりゆく

朝あけの堀におりたる鵞鳥のむれ眞菰の葉をばしきり折り喫む

左千夫忌(八首)

病める身を靜かに持ちて鐵井戸のみ墓のもとにひとり來にけり

さながらにおのれみづからをいだしけむ
大き命しおもほゆるかも

つれにつれになまけてありしいまにして
わが健康はおとろへにけり

去りがてにこのおくつきに手をかけて吾
は立ち居りひとりなりけり

なき人のふかき命をおもふ時われはわが
身を愛しまざらめや

よき友はかにもかくにも言絶えて眠れる
てだによろしきものを

み墓べの今朝の靜けさかたよりゐるわれの
心は定まりにけり

み墓べに今日はまゐりぬ鶴井戸の[illegible]
ひて歸り來にけり

稗の穗（十一首）

いきのをに息ざし靜めこの幾日ひた仰向
きに寢ね居る吾れを

ひたごころ靜かになりていねて居りおろ
そかにせし命なりけり

妻はいま家に居ぬらし書深くひとり目ざ
めて寢汗をふくも

おもてにて遊ぶ子供の聲きけば夕かたま
けてすずしかるらし

うつし世のはかなしごとにほれぼれと遊
びしことも過ぎにけらしも

うつし身は果無きものか横向きになりて
寢ぬらく今日のうれしさ

秋空は晴れわたりたりいささかも頭もた
げてわが見つるかも

秋さびしもののともしさひと本の野稗の
垂り穗壺にさしたり

秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穗
のさびたる見れば

うつたへに心に沁みぬふるさとの秋の青
ぞら目にうかびつつ

みだちわたる空の青さを思ひつつかすかに
われはねむりけらしも

焚火（五首）

秋晴れの長濱のいさくの蓮ひらけひむがし
の海よく見ゆるなり

秋晴るるこの山の上に一人ゐて松葉かき
つめ火を焚きにけり

この山の峽の小田に稻刈るはたれにかあ
らむわが村の人

山の上にひとり焚火してあたり居り手を
かざしつつ吾が手を見るも

ひとり親しく焚火して居り火のなかに松
毬が見ゆ燃ゆる松かさ

拾遺（一首）

この頃のあかとき霜に門畑の蕎麥の白花
かつ黑みけり

並木秋人

雷鳴れし眞下狹間の青杉にふたたび揃ふひぐらしのこゑ

群山に昏れおくれたる富士ケ嶺に横雲なびく月夜なるらし

ぬれ濡れて狹田に刈る手の少女さびたまゆらさばく音のよろしさ

龍膽のまだ霜にあはぬ花のいろおどろがなかは栗、茸、山蟻

はや白き松の寒芽に印旛沼の沼照りほどよき季いたるらし

暮れかかる錆沼洲越しの一部落ともし火見せつにほどりの聲

このごろの寒さこたへて剝がれたる庭苔照らす十三夜月

松の芽の搖りもたつべきうららかさあたりかまはぬ鹿とびまはる

人の音の遠きがごとし椿花照り馬醉木も照らふ竹柏の林も

出洲田打つ近江少女の頰かぶりふたりならびて田波にごらす

山羊齒の絮芽をぬらし日もすがら夜は夜もすがら落つる水かも

ねもころに吾兒が爪きる音ひびきふりやむらしき庭の上の雨

土筆もよ花粉をこぼすまでなりしあたまが揃ふわが往くらくは

この家にとどまりがたきわがなげき誰にかいはむ檐巣の聲す

山かげの長狹水田に蛭藻浮け蛙を鳴かすときは來にけり

刈田、草山、木山、阿夫利嶺、焼雲の下びに立ちて我もしづけき

ひそけくし生きてし見つる高岡の麥搖る春は近づきぬらし

大江山はいづこ遠邊の晝霞目に追ふかぎり楮芽ぶきつ

この國の春のをはりと見ゆるなる菜種莢畑白き蝶ひとつ

ここはしも竟の栖處と軒闇におもひ深めて根菖蒲をさす

大熊長次郎

鱗

（[illegible]）

うつ潮のかなたに見ゆる[illegible]し照る海中に舟ゆきなづむ

四方に潛む鯛を呼ぶと柄杓にてうしほ汲みとり海面に撒く

鯛のかげ見えてほのかなり海底に明りさすなす群れ來るかも

水深く投餌をまてる鯛のかげむれて徐かなり蒼き底ひに

さわだちて餌を襲ひくる大き鯛ちかく觸るるを荒鱗に刺す

餌にそれてきはひあまれる荒魚鯛二尺におよぶ見事なるもの

水底に餌をうばひ去る黒鯛の前をしのぎて深く沈むに

海底をとしのぞくわれの額よりうしほの上に汗はふり落つ

眞夏日のい照り耀ふ蒼き波いづくに鯛のゆきひそみたる

香魚（三首）

荒籠に青き笹葉を折りしきて見もすがすがし若鮎の列

鹽ふり一串に刺したる若鮎の焼くる間たのしき裸のまま

日の暮の厨の中にかぐはしも鮎に炭火のいろのぼり來る

鯉（父の大患の[illegible]三首）

大いなる鯉をはなてりゆらゆらと光ゆらめく春の池水

冬の間を氷の下にあ[illegible]みし鯉のいのちはふかくもゆたかに

水清き池の底ひにひそみたる大き眞鯉の背はくろく見ゆ

池の面に散りばふ見れば松の花粉わが肩にふれて落ちにけるかも

春の花やうやくむなし池水に青葉かげさす山吹の枝

わが父をつれに見がたくけふ逢ひてよる年波の寂しく思ほゆ

いまにして父をあなづり遠ざかり遊びゐし身を思はざらめや

池水に淺くうかびて靜かなるゆふべの鯉をたとり見に來つ

三ケ島葭子

病床雜詠抄

格子戸を隣の人かあけたてする音よりもののこほしくなりぬ

あらはにもこの身苦しむなとときは尊きものもおもかけに來ず

すこやかになりおほすべき日は知られ床あげしけふの心よかしも

ひとときは胸こそをどれ俄雨のなつかしき音は我を眠らす

今にして我ぞ知りけむ寒き日は火鉢に炭火つぎて足らふを

頭、惡きわれにはあれど生きてあるほどはわれにはよきこと思はむ

いのちかけてなすべきほどのことはあらね起きなることをなせば熱出づ

からうじて一つづつ書くわが歌よこの原稿のきたなかりけり

今死ぬとはたおどろかぬこころもて日々に生くれば心やすけし

わが家とさだめられたる家ありて起き伏しするはたのしかりけり

夕ぐれとなりて毬投はしめけりあそぶ子どもの心やすけし

この夕べ窓の板戸にはずみたるそのごむ毬は大きくあらむ

[illegible]き聲を心ほのかにたゝみゐるわが子のことのおもほゆるなり

何もみなすててしまへといましめし醫師の言葉はつねに思ほゆ

ゆくりなく眠さめたるこの夜半のあまりしづけしわれ生きてをり

やとひ人障子の脚を切りてくれぬ幾年ぶりにはづれし障子

フリジヤの花買ひたれば花賣が桃のつぼみを落してゆけり

思はぬにこぼれてありし紅の桃のつぼみのただこの一つ

賣りに來し花屋をとめてひとり買ひし花見ることのさびしかりけり

[illegible]らめればならぬすべなきうれひなり枕[illegible]しよ、ぞ眠らむ

石原　純

富士見高原(四首)

高はらのすぐろなる空　我れは見ぬ　ゆふべを深むかげはうごけり。

ゆふぞらのひかりたふとし。いまうごく陰ひろごりて　高原めぐる。

たか原の丘の上たかき望臺に　赤き貝みる、うつしさふかく。

測候所の望臺に立てり。ゆふせまる　この高原の空のすぐろし。

山原、木崎(八首)

驟か雨ゆふ毎に降り、松の林、樺の林を濕めらしにけり。

ひむかしの山にたちゐる　白樺のひとつ木ともし。月黄ばみのぼる。

吾木香くろずみふかくさくゆゑに　我れは山原をともしみにけり。

高はらは霧しげくくだる。山腹の桑畑の末、桔梗いろ濃し。

ともしき山原なるかも。我がふめる草生のしたに　水わきながる。

舊道は山に倚りをり。廢れたる路のかたはらに　はしばみ實る。

乳こぐさ白きを摘みて　ゆふすかきたか原のうへに　路をもとめぬ。

ゆふ闇く月の出おそし。山すそを我かもとほれば　畑を掘るひと。

苧環の花(二首)

春うらら陽はかぎろふに、部屋ごもり戀ひをもちてうたたかなしき。

しろき汚染窓のがらすににじみつつ　春日はにごる、うつしさもなく。

きみがやまひかならずよしと、苧環のむらさきの花　さくを待ちにし。

平生(三首)

ゆふべ[illegible]しろさはてなし。枯原をひとりあゆめればともし、我が生は。

みちのくを寒しとおもひ、木綿ごろも風邪病めるよひは厚く着にけり。

黄のいろの淡めばさびし。ひそかなる空をしたしむ、さむきこころに。

晩春

おほきなる木蓮のはな、春の日向　風にゆすれてちりしくものを。

曇り(二首)

こころなく　よそびとに對かふさびしさに、我がおのづから寡なくかたる。

樹のはな　あまき粘みをもちてとく　曇りのなかに我が佇ちひたる。

荒るる海邊(四首)

風暴れて砂狂ひふぶく　磯濱のすさまじきなかに立てり、我れはも。

暴れ空にはからず來り、ふきとぞる砂のまなかに　身を塗るるも。

海くろく潮鳴りゐれば、漁り處に　ひとのけはひもひそみあらなく。

天に息づくおほ暴れのひまに　海にむき、くろく揺らげるさか濤目もる。

夜の山路(四首)

にはかなる雨にうたれて、夜をくらき道よりあがる　埃のにほひ。

寝しづもる山の村廻にわがたどり、戸を漏る灯さへ　見ぬがさぶしき。

このあした　川芎の葉をひとと摘み、しるきにほひをむさぼりにけり。

海ぎしへ(三首)

いり海の渚につづくひろきみち、鴉おりあゆむ、朝のしめりに。

鴉くろく　我がめのまへにおほいなるかげをつくりて　砂はまに飛ぶ。

砂はまに貝をひろへり。まがなしきいのち足りゆく　虔しみごころ。

湯宿(四首)

雨ふりて木立濡れをり。湯の宿に、湯をあびて來てしづかに居るも。

ひとのいのちのくすしきを我れは思ひつつ、いで湯に浸る、この夜のおそきに。

雨の日は湯の量おほし。湯に浸り、わきあふれゐる湯を目守りをり。

このゆふぐれ、こころとほしく湯に浸り、いで湯を汲みてくちにふふむも

欧亞行(三首)

酷しくもま寒き冬の續きぬれば、火酒嗜みぬ、しべりやびとは。

涯なきとほりのうへを、橇ひきて馬がゆきにけり、眞はだかの馬が。

停車場に汽車着きにければ、半鐘の合圖がさみしく　曠野になるも。

孤村の方へ(六首)

あるぷすの山に雪降り、さむざむと　氷脈は峯を埋みけるかも。

わがひとり異國に住まむさびしみの　うたた湧きけり、日のかげあかく。

しづかさの深き晝なれ。はしどいの花匂ひよどむ、山腹の街。

ひかりしろき北極星のきらめくを　厭かず眺めぬ、異びとのなかに。

きたなき勞働者らが　うちむれて街を眺てゐたり、酒場のかげゆ。

かりそめにひとり我が寐ね、部屋のなか　霧の匂ひをしれる朝明。

ひとりの境地（三首）

黒髪もこの雨乳もうつし身の人にはもはや觸れざるならむ

日の光洩れぬ峡の木がくれにひそかに帯を巻きなほすかも

日の前の刈草原にいろあげの青蚊帳乾せりこほろぎ鳴きて

呼子鳥

初夏の朝けの畑の胡瓜葉に啼しろし鼓まゆとなるころ

都の春に（二首）

土埃あがる街のちまたをくれなゐの帽子を被りゆく子供見ゆ

兒におくる玩具の馬を膝におきこころ寂しく電車に居るも

原阿佐緒

山中閑居（二首）

幼な子を背負ひて今朝は大雨の川の出水を見せに來にけり（みちのくにて）

傘かたげ背の兒に見す天ぎらふ空鳴きわたる鴉のむれを

夏より秋へ（四首）

夕餉すと子ら坐らする廚のつ蠶棚つりてせばく背居り

ひとり起きて蠶に蘊す夜のふけの冷えに身ぬちのひきしまりおぼゆ

ゆふやくに桑やり終へて襷ながらすわる夜ふけをこほろぎ鳴くも

桑まけに痺き雙手をさすりつつ夕ゐろりべに心萎えつつ

雪ふる夕

風呂に焚く松木の匂ひ寂しみつ雪來むとする空をあふぐも

寂しき春（三首）

病む母にしばしばはよらず夕さりし門邊に吾子が吹くラッパはも

病み起きのぬくき素足に心地わろし下駄みな濡れ居りこのなが雨に

其處ここの雨洩りに桶をさしおける吾が家の内をあゆみて寂しも

惜みつつ（二首）

ひとつひとつ吾が子が拾ふ栗の實の蟲喰ひも捨てず吾が掌に持ちたり（わが[illegible]）

惜み稲のそこ此處にありてせばき畔を吾子とめぐりて蝗を追へり

かなしき極みに

生きるてわが生まくの子を欲しと思ふ日のありかなしき極みに

青き花房

夜ふけて喉かわきたれば啜りたる冷茶は慣れし茶の匂ひかす

[illegible]にこそわがしきしまのやまと心といまさらに思ふ

しきしまのやまと心をめざますと雨風はげしいまの日本に

すむところにおこるあらしのはげしきを神のまもりとあふぎまつらむ

ねむれるをよびさましたまふみさとしと思へばまことにありがたきかな

また

[illegible]なく[illegible]もしにしのあひだとなりにけるかな

つたなかるその[illegible]日ごと〱たくみになるをきくがともしさ

春ごとに来なく鶯ことしこそ耳かたぶけてきかれけるかな

わが眼にはあまりしたしきわが庭の草木[illegible]日を去らず

世の中はみだるゝこともあるべしとかねてまうけをなすべくありけり

また

君をおくり門を出でむとするところを君がうつしゝ写真なつかし

をさな子ら二人をまへに妻とならび門の前にてうつしゝうつしゑ

ふるさとを去りにし今ぞうつしゑにわが家の門を見るがともしさ

ますらをはいづちゆくともむらぎもの心の友とともにしありけり

ふるさとを去りても心ひるまぬに友らを思ふゆゑとぞ知りぬる

いにしへのいくさものがたり現しくもいまのまへにくりかへさむとす

また

家うつりすみたるわれをなぐさむときみがたまひしこれの草花

水ふくむうすくれなゐの茎のさきの厚きみどりぞうつくしきかな

みどり葉をぬきいでて立つくきの末に花のつぎつぎさきていまもさきをり

をゆびをり一つきあまりとかぞへつゝさきつぐ花をみるがともしさ

水をやり日にもあてつゝ文をよむ部屋にかざりて目をたのします

いま

窓の外の青葉にあたる日の光みつゝ思ひぬこの世のめぐみを

はてしらぬみ空の光あふぎつゝ心のおもひのぶるはうれし

むらぎもの心のおもひおもふまゝにのぶるがうれししきしまのみちは

日のもとのしきしまのみちふみわけてゆくときしひらくるくさ〲のみち

大正九年十一月一日、明治[illegible](二首)

ひさかたの天の御座を乞ひ降し代々木の宮に斎ひ祀るも

あきらけき御霊は永遠に國民の慕ひ敬ふ神にしましま[illegible]

攝津西宮に閑居せし折(三首)

櫨紅葉散りかひみだる庭隈に黄のつゝましきつはぶきの花

いねがての閨の庇に時雨なし落葉を散らす小夜の風かも

秋の夜の永夜もすがら庭隈に鳴けりし蟲は死ににけらしな

庭上所見(二首)

ほろほろと葉は散りはてし樹が枝に新年待ちて蕾こもるも

花田比露思

つゆじもの置きのしとゞに雫する庭樹の下に水仙の芽や

週刊新聞「西日本」を創刊せむとして(二首)

かりごもの亂れ苦しき世に立ちて默に堪へねば言はむとぞ思ふ

言ふ人は多にあれどもわが思人の言はねば言はざるを得ず

大正十年一月、一人荒庭に對して

白々とほうけて立てるつはぶきの花の外には見るものもなし

此の年の議會に、滿鐵事件、阿片事件、賣勲局事件等、政友會にまつはる[illegible]難せられし折柄、政友會所屬代議士、所謂[illegible]事件」、[illegible]其の[illegible]を逆轉せしめむと企てしことを(三首)

淺小田の泥鰌が泳[illegible]いすじ[illegible]をあげておのれ[illegible]ふ

おのが身を匿ろひ急ぎことさらにあけし濁のいやひろがるよ

濁りあけて[illegible]れしかなや然れども濁澄むとき汝が姿見む

十一月、皇太子殿下攝政御就任(三首)

いにしへの中大兄をまのあたりをろがみまつる畏けれども

内外の國のいきほひいにしへの大化に似たり俯して惟へば

いにしへの中大兄の御勳を今の世にして建てさせたまへ

大正十二年九月一日夜、戸山ケ原より大地震にて起りし火を望見しつゝ(五首)

戸山の原より見ればひむがしの夜空一めんの焔のなびき

遠見つゝ心は寒しこの燃ゆる焔のなかにあらむ子らはも

ひたすらに祈る心になりにつゝ燃ゆる[illegible]をわが[illegible]なり

更け沈む夜を照る月やひむがしの都焼く火は燃えひろごりつ

火をいたむ同じこゝろに相知らぬ人と淋しき笑交しけり

被服廠跡所見

捲き返す焔の渦に逃げまどひ重り合ひて死にしむくろや

大正十三年[illegible]、長女のゆき子を自由學園に入學せしむるとき(五首)

みづからの在學證書を手に持たせ愛しきやし吾子を學校にやる

ふた月を試驗準備にいそしみし疲れか吾子のにぶきまなざし

若草のなほ軟らかきをとめ子を競ひごころの奴隷となしぬ

うちひさす都のなかに人多におのづから子等を相競はしむ

若ぐさの春は萌ゆがにおのづからあらせむとせし心たがひぬ

[illegible](四首)

庭の木に來居るうぐひす[illegible]ひそひそと枝移りつゝ

ひそましくわれもあらむと移り來ておぞや幾日か心和ぎつる

おもほへば險しき世かもむらぎもの心和みて居む里もなし

ふるさとの小夜のくだちに篁のひそけき風を聞きしともしさ

ある日

くしけづる小櫛にからみ拔くる毛のこのごろ多くなりにけるかも

獨不樂吟(六首)

さぶしさはいにしへびとの歌を讀み及び難しと嘆かゆるとき

さぶしさは今代の歌の許多のなべて空しくおもほゆるとき

さぶしさは一人の道ぞとあきらめつゝ人には告げず默に居るとき

さぶしさは我國人のなすわざのいづれを見ても物足らぬとき

さぶしさは我國人にあきらけき大けき靈のひかりを見ぬとき

さぶしさは人をも世をも罵りてひそかにわれをかへりみるとき

大正十五年三月、病床蟾蜍を聞く(三首)

きさらぎの淺宵月夜くゝみ音にひきがへる鳴く聲のかなしさ

戀ほしさに堪へねば故もしらまゆみ春の月夜をひきがへる鳴く

病やゝ癒え來しわれの心和み淺夜のひきは聲あはれなる

あるたり(二首)

斯の道を遂に一人とさぶしむときはてしも知れぬ神業が見ゆ

夕ばえの丹づらふ空のかゞやきや大き御[illegible]にうなじ垂り來も

安江不空

梛乃杜

富士山の春日、前の山を梛乃杜といふ、山は悉く梛の木なり、ふに下を流るに、神淺茅原より吉野に到る

秋山の下水貢の貢がいゆきけむとしのしらなく梛の杜のかぜ

あをによしならのやまなる梛の杜の木ふかきみれば伊爾之邊おもほゆ

齋垣なす瑞の梛杜霧ふかみとはにたれたりこけのゆふ垂手

あきかぜのふきとふきこす梛の杜を見あげつつゆくおもひしづけみ

四柱の神鎭けし阿佐久良の齋垣の山と生ふる梛かも

山の阿陽朝しとぼしき梛が枝の秀つ葉ひらめくゆふづくかぜに

おほ霞久度におくなすかむもりのすがし出に幣しみ垂り

梛の葉のかぶさるところすず凝りの伊久[illegible]はへり

あをによし寧楽にしてよき梛の杜いしみさびふかみ人はしらざらむ

みちの隈おちいたまれる梛の實をひりひてゆくからた人よしみ

梛の杜かへりみすればかぎろひのゆふざり燻り月うすみかも

青草に陽かけあやなしゆくゆくと神淺茅原風ゆふづきぬ

人ちりぬゆふかげおちぬ樹の間ゆも草のたひらに灯のながれ見え

あららぎのかげはくらみてこまつるぎわか草の山に月ほのめけり

梛の杜ふきこすかぜのさいさいに小竹の葉もそよぐやまのくなだり

比牟侶木を梛のいみ杜あきの日の陽かげうらてり小枝しきゆる

あさのみぎりゆふべのみ霧に梛の葉はときじくうるみみづみづしかも

やまおろし一かぜくればはらはらと梛の葉ちらふわがゆくあたりに

しぬはらや小枝ひろりて梛の杜は神びかしこくみちあともなし

かみどりにしけりかさなり秋の日のむらさすひかげうらさびしかも

依田秋圃

富岳麓北の秋

大正十五年晩秋、甲斐大月より吉田に到る途上（五首）

甲斐の國の秋は闌けし山はだに大みづくろま着たてめぐる

大丸太積める置場に咲みだれこすもす咲くも甲斐の山べに

道隈の流のほとり白々と障子を立てゝ暮るゝ家あり

畑のうへにつもる桑の葉霜はあど明日晴るべくと明りすらしも

富士の嶺の北の裾野の風さむし日暮れて着ける宿のともしび

次の日富士森林帯に入り伐木事業を視る（八首）

秋ふかき裾野をかよふトロ道に馬の飼秣がこぼれ居にけり

富士の嶺の裾野わが行き松に這ふ蔦の紅葉を手に賞でにけり

わが前に開く裾野の秋とやに鳴津の家鶴ヶ島も見ゆ

トロの音ちかづきてくるなつかしさ落葉松が根に寄り憩ふ時

櫟の木の老いし古枝に相倚りて楢の紅葉は過ぎにけるかも

青木原しみ立つ木々も人じもの競ひ爭ひ相生きにけり

裾野なる青木ヶ原を通りくと拾ひて持てりさるのをがせを

夕空にいつかなびける白雲の富士にさやらず過ぎにけるかも

[illegible]、[illegible]に展望、それより西湖河口湖を渡る（四首）

眼の下に小舟漕ぐ見ゆ明けやらぬ湖に二すぢの線を曳きつゝ

こゝにして見る裾野べは朝雲の明るく暗く寄りにけるかも

西の湖のうみの眞中の波のうへに一ひらの紅葉浮き居たりけり

富士の嶺の裾野の秋のうらら日を舟泛けてわたる河口の湖

[illegible]甲府に宿る

稲刈りて麥蒔く秋の晴れつゞき甲斐の少女は働きにけり

山峡に子供が群れて遊び居り今日は日曜にありにけるかも

一夜寝る甲府の平秋ふかし富士の眞上をわたる月かも

宗不旱

茗荷竹（長男研一郎数へ三歳にして いまだ脚たたず、ここにあり）

三歳になりていまだ脚たたず天井のふし穴のぞき目はり叫ぶも

たらちねの膝なる夢にめぐまれて三歳をふれどその脚たたぬ

たてよとし百日夜をしも乞ひにける願はふれど脚のたたずけり

くもの絲棚にひさしに張れる見て手ふりおらべど脚たたずけり

あやまたず起つべかる世に脚たたぬ一人をおけば世もさし曇る

こひのめば天のまにまと言に云へど生くれば脚はたてよとぞ願ふ

時のうつり月日の移りひたすらに待ちこふるにも親はまどひつ

とりてあたふ玩具によらず襖の繪見まもる繪にし頸かたむくる

新聞紙とりてつらつら讀むに似たりその新聞紙さかさには持たぬ

垣がねに插きたちにける茗荷竹生れのうゐ兒しけふ見つるかも

夏さらば立ちもやせむと待ちこひし夏もすでに晩るその茗荷竹

かきとりていたはりやれど何事もまだふるひ立てぬ瑞の魂かも

明日をたのむ明後日如何あらむたまくしげ蓋も底もなし君をし思へば

鎌倉什刹瑞泉寺

碑衣の草ぶき寺のみ庭には老木の梅のくれなゐに咲く

み墓は今もとざされて屋根の上の斑の雪の目ゆ離れがたし

夕霞ふきおろしたるあたりには小竹疎々に雪のかたまり

夕そらに二ひら三ひら浮びたる雲もかなへる宮殿づくり

畑麦のそのふた葉にも霞ひく門のべくれば水の鳴るなり

夕日てる畑なかの道よふりかへり木の間の斑雪しばし見やりつつ

蜻蛉を見つつ

かげろふの遊ぶを見つついにしへの憶良かなしくわれなりにけり

佐佐木信綱

春夏秋冬(十二首)

山すその枯木の上に鶯の來鳴く春べとなりにけらずや

初夏の若葉のかげを歩みつつまさびしきわが心なりけり

やはらかに初夏の日ぞうるほへる風少し吹き動く若葉に

槻並木若葉あかるし二時間の講義ををへてゆるらに歩む

見つつあればありなし風にゆれゆるる薄の葉かなわが心かな

庭の枇杷赤らみにけり末の子がかく文ややにととのひ來けり

白雲の思ふがままにちらばりて青きに過ぐる秋の空なり

この心しづかに澄めば秋風のさわたる空の雲にまじれり

秋の夜の雨しとどふるに親しけれ畑のあなたの家の燈火（鎌倉二首）

どこの家も皆ねむりたり門の燈がこの月の夜の夜ふけににじみ

からうじて我がものとなりし古き書の表紙つくろふ秋の夜のひえ

くらき空に十日ばかりの月出でたり夜さむの風にふかれて歸れば

[illegible]の歌(二十七首)

香具山にい立ちのぼらひいにしへのやまと國原かすめるを見つ

やまとの青垣山の朝がすみはろかに見つつ春の草ふむ

人とほくゆきて歸らず秋の日の光しみ入る石だたみ道

小法師い大き鍵もち扉明くる音のきしみのうらさら寒しも

冬近き藥師寺の道うすき日はついぢの上の雜草にさす

上つ代のにほひ戀しみさ丹塗の大きまろ柱に手を觸りて見つ（法隆寺）

おん頬にかそかに匂ふほほゑみの畏こかれども愛しき御佛（中宮寺）

正目に見まつるものか御佛の思惟しおはすかしこき相（廣隆寺）

ぽうと鳴る艀の汽笛がこだましつ漁村の
うらの冬がれの山

寒げなる親子は夜の汽船まつ渚における
五六の荷物

湯あがりの廊下を歩む身のほてり遠くに
ひびく山の風かな

隨感隨想（二十一首）

敷島のやまとの國をつくり成す一人とわ
れを愛惜まざらめや

人の世の物みな亡ぶ然はあれど亡びざる
もの天地にあり

言擧しさやぎふるまふ今にして靜かに吾
ら思ふべきなり（時事偶感）

天をひたす炎の波のただ中に血の色なせ
りかなしき太陽（癸亥九月一日）

やごとなく心はもたりしかれども此世に
しては乏しくぞすめる

心とほく雲のはたてにまじらひて身はお
ぼつかな石原を行く

この思かの思は誰がならずわが分身
と思ふにかなしき

つつましく我を守りてありふれば時にさ
びしき思ひぞわがする

爭ひて我をみにくくせじと思へど下の
心はいきどほりもつ

心ややになごみもて來ぬ我しらず面わけ
はしくなりてありつらむ

むれをはなれ一人秋風の中に立つ心さび
しく嬉しくありけり

雨の音しづかに胸に響くなり思ひのどめ
ていねむ此夜を

わが姿ならじかと心をののきぬ塵にま
みれたる街路樹見つつ

いたむ肩いたむかひなもわかなればわれ
といたはりさするなりけり

秋の夜の澄みしづもれるわが胸に通ひな
づさふ水の音かも

病む吾子の齡の頃に吾も病みて父のなげ
くに泣きし夜ありき

仕事終へ今はも安きうつそみの身をよこ
たへて心さびしも

わが足はしかと大地につきてありつきて
ある事をよろこびとする

朝の胸の清くすがしくまむかひに大天地
とむかひてありけり

白き鉢の水仙の花に晝の日さし吾子が住
む家のあたたかなりけり

神富士はみ空に立たし日の大皇子國土し
らす尊とし日本

石榑千亦

震災以後

地震さけて昔河岸にをり歸りたる吾にしがみつき喜ぶ小さき子　(大震劫火十三首)

ゆり出でむなゐの力をはかりかね内には入らで遠見る我が家

うつせみの命ををしみ急湍なす火の子の河岸をかけ走るかも

子らをば草の上に臥させ八方にとゞろきもゆる火中に立てり

大き都炎々ともゆる火の上の濁れる空に月しらけたり

草の上にやゝ落つきて明日よりのわが身を思ひ子らを思ひぬ

底冷ゆる草の上なれ親のそばにありと思へかすや／＼と寐る

草しきてまどろみをればしみ／＼とこの夜の冷の骨にしむおぼゆ

むしろ汝は幸なりけらしながらへて恐しき今日のこよひにはあはず　(憶妻)

玄米の粥をしみ／＼味ひぬ蠟燭の灯のをぐらき前に

亡き兒は夢に來ませり地震のため燒け出されし吾をか憂ふる

燒け土を堆くつみし路傍にぶら提灯を灯ともして賣る

雲きれてくぼめる空の底ふかくけしき星一つ吾にむかへり

山の風竹にゆらぐを見て久し玉蜀黍のこぐる匂ひす　(裾野六首)

苧の草鞋めづらしみつゝ曉のしめりふかき路をわれは歩めり

提灯は先だちて早し手心にいまだなじまぬ草鞋をなほす

唐松の流れし末に湖若し妻よぶ雉の聲はこだます

朝の湖静かに晴れたり此の岸にして彼の岸にして雉よびかはす

たゝなはる燒石原にはじかへて夕立の雨のたぎちふるかも

蓑きたる學童數多行きすぎぬよしきりは又鳴きいでにけり　(佐渡二首)

ここにして遊べる鷗夕されば佐渡にそかへる越後にやかへる

赤き花つけたる門の石榴の木石切る音の日もすがらなり（郡山三首）

山の風玉蜀黍の穂を過ぎぬ釣瓶の音の何處にかきこゆ

池の上にさるすべりの花こぼれたり秋づく風に人と默るゝ

山の木立木立はなれてとぶ小鳥皆鳴きて島の夜あけぬ（渡島）

翼張りて鷗とびゆくをち方に又はじめての島見出でつる（千島四首）

大きくうねりうねる海につきいでし岬の上の[illegible]々の雲

燈臺に灯の入る時も近からむ岬の上ふく風冷えて来ぬ

明日もまた晴にしあらし赤々と海に入りし日の名残まばゆき

向うむきて馬のならべるをち方にみどりの海の遠くはろけし（日高三首）

波はくろふ水草つきし大岩をかどのみて吐きかどのみて吐き

虎杖の白きこまか花ひそかに咲きこの曇日の晝をしづけし

車の上風冷え冷えしからつゆの高知の夜空澄みはれにたり（高知）

濱の草ふめば露けし土用波折れかへるなぎさ既に秋なり（新舞子二首）

雨晴れて月いまだ晴し忘れゐし峠の峰をふと思ひ出づ

おくつきのあるが中には新しき兄の墓さへ苔むしにけり（故郷四首）

赤土の崖あらはなる禿山にたゝずみをれば夕冷え来る

夜はくらしあゆみ馴れぬ道危ふからむ背につかまりおくるな我が妻

月おちて暗く更けたれば厠にゆく妻のためにと火をすりにけり

ぬく手きりて泳ぐが如く這ふちごを圓くかこみて手をうちはやす（乳兒五首）

抱かれむ手をえらぶらしならびたる數一つ一つ見まはせりちごは

一たびのちごが笑まひにかへぬべく人さまざまの作り顔する

手を出せば手につかまりて立ちながらちごが眼はなほも母よりはなれず

そのちさきからだすべてを聲にして泣きいさちるか大きその聲

川田 順

朝鮮半嶋の旅

京城景福宮後苑

松蔭の夏深草をふみ來ればいつとは知らに御苑のなかなり

昌徳宮秘苑（六首）

この御苑は雉子多くゐるとそのもりの言ひけるものをいまだ啼かぬに

今啼きしがそれなりと言へど雉子の聲ひた歩みゐてわれは聞かざりき

睡蓮のともしき花を韓の王の林泉の御池に咲ける今日見つ

李王さまは時をり此處までおはすと言ふにつつしましもよ池のべを歩み

雉子鳴く赤松ばやしの坂歩みこれの御苑を深しと思へり

韓の王の御苑は深し歩み疲れ足ひこづりて出で來つわれは

大正十五年五月韓國最後の皇帝なりし李王坧殿下の御葬に遇ふ、昌徳宮に參候して詠める挽歌十首

おもほえず海隣より來て韓の王の殯の今日にあひにけるかも

殯する新喪の宮のみかきもり朝鮮歩兵を見れば悲しも

しら砂のすがしき道のゆく手にし殯の宮は深くこもれり

大殿のこの廻のしら眞砂衞士のほかには人影もせぬ

言さへぐ韓の國はなしそこゆゑにいや悲しかるこの王かも

自が民を常安かれとおもへこそ國なくしけめこの王ろ

韓の國のをはりの王とよろづ世に悲しき今日を言ひ繼ぎにせむ

高麗の都なりし開城にて（五首）

朝霧のふるきみやこぢ高麗人はまれまれ行けりわれもひとりを

朝霧の消行けばさびし眼に見えて低屋の街のあらはれきたる

高麗の女しろき被衣をかぶりたりわが向うより來なり後ゆも

白栲のかつぎ眉深にきるゆゑに高麗のをんなをわれは見にけり

街を行く高麗の女のおほどかに傍目ふらねばわれは見にけり

滿月臺、高麗王宮の址なり

高麗びとの打つ石砧間遠にもこの朝山にきこえ來るかも

かなしびの言きこえ上げて殯殿まかり出づればゆふべとなりぬ

かはたれを香の音して參來るはあらきの宮の殿居人かも

夕まけて朝鮮歩兵の疲れ立つ宮のみかどをまかり來ぬれは

新羅の舊都慶州に遊ぶ、驛に降車して

この道をわが來と逃げし山羊の仔ら麥畑のなかに隱ねて居にけり

皇龍寺址

麥の穗は伸び高けれどいしずゑの大き稜石かくれずもあるや

芬皇寺

僧坊のさ庭に植うる芍藥は蕾なほ固し屈みて見るに

栢栗寺道にて（二首）

寺をさしてわが行く道のひとすぢは穗麥が原にさやに通れり

岩山の岩群の間にひとところ樹のしげり見えて寺はこもらふ

[illegible]の碑、花崗石の大龜趺（二首）

栲ふすま新羅の王のみはか邊は石碑据ゑつ石の龜の背に

古石の大龜の背は雲形彫り頭のあたりに寶相華の花

昌林寺址（三首）

牛が犂く泥田の岸の寺の址の平らされし土は千年をそのまま

田を犂くと大きからだに撥泥あげてきたなきものは牛にしあるらし

遠くには桐の花見え古丘のこのあたり邊は泥田のみなり

九政里の一墳壇（二首）

牛の糞に靴すべらしつあたり邊をつくづく見れば牛の糞多し

牛の糞の粘るわが靴こすりつけこすりつけたり王陵邊の草に

文武王陵、土俗これを掛陵といふ（三首）

みささぎに參來る道に石人の帶まで埋み立てらくさびし

千年を此處に立てる石人おのづから土を窪めて埋もれむとす

石人は胡人なりけりちぢれ毛の鬚深面の愛憐しきかもよ

この陵のめぐり護石に二十支の神像を陽刻せり（一首）

栲綱の新羅の王のおくつきは鳥けだものら四方八面に立つ

み墓邊の守部が作と戈とれる鳥けだものの顏の愛憐しさ

戈とらし十まり二つの神居ればここに近寄るまがつみはあらじ

いにしへにありける王は獸らを守部に立たせ安眠したまふ

遠き世の新羅の王のおくつきを今日の夕日のしづかに照らせる

[illegible]山の古墳群

草山の夕かげ行くと古墳の土の脹れにつまづきにける

木下利玄

晚年の作より

牡丹（八首）

牡丹花は咲き定まりて靜かなり花の占めたる位置のたしかさ

花びらの匂ひ映りあひくれなゐの牡丹の奧のかゞよひの濃さ

この室のしづもりみだるものもなく床の牡丹のほしいまゝに紅き

花になり紅澄める鉢の牡丹しんとしてをり時ゆくまゝに

床の間のまぐらきに置く鉢の牡丹白牡丹花は底ひかりせり

花びらをひろげて大き牡丹花に降り出の雨のぢかにぞあたる

牡丹花の大き花びら蕚はなれ低木の下の地に移りたる

低き木の大き牡丹花なくなりてその根の土に花びらぞある

芥子（三首）

のびきれる芥子の太莖たゞ一つこの眞白花を今日ひらきたり

芥子の蕾花になり了へ花びらに蕾のときの皺のこしゐる

芥子の蕾咲きてあらはれし眞白の花びらの皺の光りかげりはも

夜道（二首）

夜さむ道向うにきこえそめしせゝらぎに歩みは近より音のところを通る

せゝらぎの音するところに來かゝりしがまた遠退きてわが夜道すも

冬來る（二首）

森の木の幹立深くうづめつゝ日溫みたもつ今年の落葉

今年の葉うづたかく散りこの森のどの木の幹にも冬日ぞあたる

菊（三首）

白菊は花びらの光澤おのづからかゞやかにして園に臨めり

朝つゆのつめたき庭に下りたちて菊の花剪れば香のきよみかも

陶壺に黃菊白菊插したれば花々寄りそひ黃のそばに白

鎌倉の家

この谷戸の紅葉をぬらす夕時雨移り住ひて冬四たびなり

鎌田敬止君に（二首）

枕邊に草花鉢あり君が來しきのふの今日と思はざらめや

きのふ君が坐りゐしところ今日の日は疊の上に朝日さしをり

芍藥(四首)

花を下に婿がもてこし莖ながの白芍藥に蟻つきてをり

瓶にさす白芍藥に蟻つけり季節の花のこの鮮らしさ

瓶にさす芍藥の花莖長にかたむきかゝりて此方に[illegible]る

瓶にさす白芍藥の花二莖あまりうつくし室内に來て

新秋

手を洗ふ水つめたきに今朝の秋や身を省みて虔しくあり

曼珠沙華(七首)

春ける彼岸秋陽に狐ばな赤々そまれりここはどこのみち

曼珠沙華群赤に咲き立つほそ徑を通りふりむけばそのまま又見ゆ

曼珠沙華毒々しき赤の萬燈を草葉の陰よりささげてゐるも

曼珠沙華叢の中ゆ千手も觀も咲き佐片佛の供養をするか

曼珠沙華あやしき赤の[illegible]の日もあやに炎ゆ草生のまどはし

曼珠沙華咲く野の日暮れは何かなしに狐が出るとおもふ大人の今も

町を近みくたびれ歩むみちばたにさいなみ捨てある曼珠沙華の花

折にふれて

寂しさを思ひ開きて枕邊の草花鉢を私かに愛づる

早春花

土間より直かに若芽もたげつゝこれ等の福壽草の太短かさよ

紅葉(四首)

木の下の毛氈に坐りさし仰ふもみぢが枝と何ぞしたしき

身近くの一木の楓枝ぐみのみやびやかさよもみぢ葉つけて

[illegible]に椅子を[illegible]て仰ぎ見るその紅葉の木こそもみぢの木

紅葉の重なりふかみ夕日かげ透りなづみて紅よりも紅

水仙(二首)

冬庭は落葉の後をおちつきてすがしく日に立つ水仙の青

冬庭の[illegible]なし土に水仙は葉に反りうちて萌え立ちてをり

萬兩(二首)

霜しのぐ水仙の葉の萌え立ちは或はよぢれて若芽ぬけり

嗽ぐ寺の庭座苔ふかみ萬兩の實の赤さもあかき

大泉路へ父入り來りこの朝け寺にありてみる庭の萬兩

印東昌綱

千町田の穂波の上に岩代の信夫の山はしとやかに立つ（[illegible]）

船をすてて岩根ふみゆく登り道島守る鹿のなづさひ來よる（金華山二首）

犬毛欅の老いし木立ゆ吹きくなり人の世遠き島山の風

下しゆく筏いかだの話し聲秋多摩川の水にひびかふ（多摩川）

とつぷりと暮れし夕濱棧橋に七八人はなほ語りゐぬ（北條）

岩隈につきあたる水のひと戻り逆らひて更に流れゆくなり（長瀞）

松の膚あかあかと皆ときめけり砂なほほてる濱ぞひの道（酒匂）

ゆく春を女御更衣のやごとならめでたきさまの藤なみの花（其折々十三首）

梅雨晴の空まちつけて野の家は麥打ちはじむ西に東に

川むかうの土手にたてる人等日影せおひこなたの土手を見る其まくろき影

あぢさゐが色づきそむる六月の薄き暑さは身に心地よき

うらぶれて力なき海老ただ一つ鰯の網にかかりたるかな

言ひたげの言葉もだして穏やかにひかふるさまの白芙蓉かな

かげろふが蚊帳の廻りに遊び寄る秋の夜涼となりにけるかな

暮れむとして紫づきしひむがしの中空に早もいでてあり月は

青木の陰日のさしがての薔薇の枝に杖たててまともの光あびせたり

岸にたわむ雪のむら竹吹く風に千本ゆすれて水に消ゆる雪

國五郎が羽根のかむろの早變り面白み見つ父のかたへに

土船の土運び上ぐる渡り板水の面近くしなひゐるかも

今日の日を給びつる命あなかしこ抱きつつみて夢に入るかな

三浦守治

「移岳集」より

うつし世の千とせ百年なにかあらむとこしなへに人は生くべくありけり

嚴かに道は守れどいささかはほこりかにこそすすみをゆかめ

ありふれし書よまむより時しあらばそを枕にて寐るこそよけれ

今日のことは今日なし遂げつ明日のことは心靜かに慮ひはからむ

いささかはとるべきふしもありぬべし心のままを我に言はしめ

山ざくら汝をおきて世にますらをが戀ひしと思ふ人なかりけり

光なき石一つだも天地にかくべからざる物にしありけり

さして行く道はひとすぢあらむ世もあらざらむ世もなどか迷はむ

おろかにてわれ學びがたし唐衣三重に二重に膝をし折る業

小法師がほりそこねたる猿の面つくづく見よや誰にか似たる

天の原ふく風つよみ鳶飛んでかけらひめぐる秋日和かも

時つ風眞帆にし充ててゆく舟のをちへ遠へとすすむとごころ

汝が椅子は危ふかるべしたく繩のながくしよらば鞚とたふれむ

身はもののふの數ならねどももののふの八十氏人の一人とし思ふ

笑はずてわれをり得むや小猿ども人まねしつつさかしらするを

あしひきの山の岩がね駒なべて誰かはわれと共に越ゆべき

ますらをのわれいやしくも天地にはぢらふ心かつてもたなく

斯くしつつ見しあきらめむ百世にもかはるべからぬ天のおきてを

なにがしは正しかれどもにぶしてふうはさを聞きて我かと思ひぬ

海の果穩やかにして夕づく日穩やかにこそ入り畢んぬれ

から梅雨の風吹きわたり大河の波の騒立ち閃けるかも（大河十首のうち六首）

夕映えのひかりうち亂れ潮疾し船子がおらびのいらだたしかも（夕潮）

滿ち潮のしほのあしはやみ船と船と觸れなむとしてまた事もなし

今は萃れてひたすら暗き河口におもひ杭と呼べり少年のころ

小蒸汽の吹き棄つる湯氣にあか暗き機關の室の灯かげにじむも

まんまんと凪ぎし日なれど汽船の波河一ぱいにひろがりゆくも

新井洸

「微明」より

波止場の路つまさき暗く空荒し人のうしろを見つめて行くも（函館埠頭）

もの思ふ媼の涙さめ〴〵と氷雨に濡るる古き郵船（室蘭海頭）

車中に疲れ臥す時土地者の泥長靴の目よ離れずも

降り足らぬ今朝の雪ぞら凍みまさり出帆の銅鑼とどろこだます

郵便馬車ぬらりと赤し氷屋の店さきの灯に粉雨久しも（街頭十首のうち六首）

ちろちちろ蟲の音さやに闇ふかしたちまち啼きて飛べる蟬かも

二百十日の朝あけの空に町尻の工場の笛ひきもまれをり

潮そこる材木堀の巨材のうへ眩き晝の風を聞くかな

理髪師は朝戸あけつつ白百合の鉢持て出でぬ街の露けさ

さ夜ふかく暑さもあつし高臺の病院の窓に煌たる灯かな

置き馴れし單笥のあとのしらじらとあまりあかるき秋の日ざしか（轉居）

いかならむ人か棲みしとこの隈の釘をこじ抜く其根錆びたり（まだ親しみがたき幾日）

烏玉の夜のふけゆけばつかれひく明日をわびしみころぶすなりけり

そむかれむ日の悲しびをうれひつつ百日に足らぬ子をいだくなり

齋藤瀏

北海道（三首）

こもり居る我が[illegible]て外の面に窓の灯をとどかしも

ちらばれる馬糞の周圍の雪すこしとけ居りて道の保つ靜けさ

眞背後に月はのぼりて冴えにけり愛しくゆるる橇馬の尻

荒崎濱の鶴群（三首）

此の濱の群れなく友になびきつつ鶴群くだる天の高きゆ

打ち仰ぐ田面の友にひた向ひ舞ひいそぐ鶴は列をみだせり

大き翼煽りて鶴のむらがれば日光ぞみだる天の高きに

浪（二首）

聲あげてここの荒磯に打ちをよれ干潮の浪の力こもらず

ひた壓されやむにやまれぬ浪かこれ打ちを碎くる聲のさびしき

濟南（十首）

否と言はば火蓋きるべく整へて言やはらかに我が告げにけり（支那革命軍に日本軍の要求を發す）

街中に逃ぐる敵を追ひつめて打たば打たむと砲据ゑにけり（日支兩軍の交戰となる）

敵の包圍破る得たりと思へるとき同胞の死をつけて來にけり（[illegible]）

しこの敵うちきはめつと恥しつつあはれなるかも筆のしふれる

我が兵の打ち据ゑられて居りと思ふはげしき銃の音のつづくも（濟南攻擊）

戰は人間の事か大明湖の青葦叢になけるよしきり

張宗昌も蔣介石もこの椅子に我がごと寄りて居ねむりやせし（督辦公署に入る）

督辦をたたへし額の金文字の輝く下に兵飯をはめり

獨居（二首）

おもむきの乏しき室やかへり來て葵の鉢を置きかへにけり

葵の葉につきし埃を拂ひつつ死なしめし人思ひ出でにけり

内地歸還（二首）

歸る荷を[illegible]めりはらからに面むけかたき[illegible]も

ゐて行きし兵死なしめて歸り來つ歡迎門を我がくぐるかも

下村海南

此あした天地の中に我ひとり立ちし姿をわれと吾見たり (官を辭して)

過勞ゆゑ靜養せよと醫師いへり過勞する位ゆゑ靜養出來ず吾は (富田吟)

山の秋の水はさやけし橡の實の水底ふかく沈めるが見ゆ ([illegible])

宿を出づと馬ならぶれば二階より三階より客の見下して居り (伊香保)

たゝなはる白雲わけて大信濃淺間の山とすれ／＼に飛ぶ (東京高田間飛行途上)

うなぎ釣る舟たゞ一つ見えたりしがいつしかそれも見えずなりけり (手賀沼)

四明が嶽のぼらひ見れば風をつよみあわたゞしかも白き雲黑き雲 (比叡山)

我が乘れる飛行機の影は山を越え谷を渡りて追ひきたるなり (大阪東京間飛行途上)

天地の廣きが中に踏む足のはじめて輕し我土を得て (海南莊四首)

眼さむれば松の下草を刈る鎌の音さやに聞ゆ日和なるらし

よべの雨にはぜのもみぢ葉色はえて庭の一くま明るみにけり

小繩もて束ねあげたる萩の花はたばねられしまゝになほ枝垂れたり

わだつみはとゞろき暮れて室戸崎燈臺の燈のたゞ一つのこころ ([illegible])

どの島もどの島も除蟲菊の花眞白に咲きてあり山のてつぺんまで (尾道鞆間海上)

ア狂介ヤ俊介と槇垣のこのかげにして手を握りしか (萩市松下村塾)

日の本のみんなみのはしに吾立ちてふりさけ見れば黑潮をどる (臺灣南最端ガランピー)

河をのぼる船の上の人と岸の人と高らかにかたる好々とかたる (支那白河號上)

うづくまる小さき駱駝のせなの上に顎をのせをり大き駱駝の (北支那)

朝もやの晴れゆくひまにドーム見え鐘の音きこゆローマは近し (以太利の旅)

戈とりて立ちつるところ戈を納めねむれるところ秋の水長し ([illegible]遺跡ヴアーノン丘)

大塚楠緒子

いつの間に咲きて散りしか苔の花それは
た花の散なりけむを

胡蝶さへとはじと思ふ草の中に小さき花
をわれぞ見出でし

足折れてとべぬこほろぎ汝もまたこの秋
われに物思へとか

來し方を行末をはた今の身を思ひくらべ
てみる夕べかな

あの星に語らはましや秋のよる人の歸り
をまつ淋しさを

今日は過ぎぬあすも斯くてと見つめたる
燈火風にきえがてにする

いかに深きちぎりかあると見し閨の萩も
散りけり蝶も往にけり

語れども心汲まれず聽く人のわき得ぬ
やはたわれか狂へる

詩人の心にも入れ白百合のこの世に高き
花のかをりの

青空にそびえてたてる松の木の下にちひ
さしかたばみの花

櫻花さきみちしより木のもとの菫は人
にふまれつゝのみ

書の中にはさみし菫にほひ失せぬなさけ
かれにし戀人に似て

さめむかな醒めむかな春の眠より世はあ
き風のつめたうぞ吹く

人のゆきし遠き國べのとほ〳〵にたより
あらぬ頃を秋の風ふく

水車おと今やみて里川のながれしづかに
月は出にけり

うらがれし林のうしろ薄雲のゆきき見え
すく秋の暮かな

人を見しところの景色それとなく友にか
たりて消す思かな

人つどひさゝめく聲につゝまれていよい
よ我ぞさびしかりける

雛あまたかへしつるより鷄の猫にもお
ぢずなりにけるかな

しばし世のつらさ忘るゝ眠かなこのまゝ
息のたえよとし思ふ

橘　糸重子

ぬば玉のやみ夜の暗にうづもれて思ふまにまに泣くよしもがな

わが命きえぬかぎりはこの胸の此苦しびのつきずやあるらむ

草がくれつゝましげにも咲き出でしちひさき花をかざしにはせむ

人しれぬ露にかたぶくさま見ればおなじすくせの花もありけり

恐ろしき名をおはされて捨てられてしげみにひそむ鬼あざみかな

いへばとて聞き知る人はあらざらむ此世のかぎり胸にひめばや

おもひ出も望もなくて經ぬべくはなかなか安き此世ならまし

我身一つ入るゝばかりの小舟うけて水のまに〳〵ゆかむとぞ思ふ

さま〴〵に思ひ亂れしはてはたゞ弱き心のうらめしきかな

身にせまるのろひの聲よあざけりよいづこまでとか我を追ふらむ

いさぎよく思ひすてつと思ひしを何に殘りしなみだなるらむ

罪なるか罪ならぬかのたゆたひにむなしく暮れぬ今日の一日も

一つ消え又一つ消えぬつく〴〵とながむる空のちひさなる星

葉がくれの名もなき花に命かして其まゝもろくちるよしもがな

人にそむきおのれにそむきゆく道のつひのとまりのいかにかあるらむ

一もとに二つ咲きたるさゆり花思ふどちにて何かたるらむ

木がくれに山鳩なきて手向けつる花の香さむしゆふぐれの風

いたづらの昨日のさとり今日のまどひはかなきものは心なりけり

たえ〴〵の望の光つひに消えてくらく寂しきわがゆくてかな

いふべくもあらぬ此思ひいはずして幾たび人にあやまたれけむ

九條武子

「金鈴」より

見渡せば西も東も霞むなり君はかへらずまた春や來し

ゆふがすみ西の山の端つつむ頃ひとりの吾は悲しかりけり

星しろき秋の夜なるを今のころ梟のごとし寂しき夜かな

三夜荘父がいましし春の日は花もわが身も幸おほかりし

空高う月ののぼるも知らざりき物もひしづみ幾時か過ぎし

あふぎ見れば月は澄みたり忘れなむ涙すとても何のかひぞも

夜の雨にまじる蟲の音わが胸に白刃のごとくいたしつめたし

縮ぶすまの吳春の人に冬の日が薄ら〱とさすもわびしき

ふる雪に今日の夕べのとく暮れて悲しき空をひとりながむる

かりそめの別と聞きておとなしううなづきし子は若かりしかな

いくとせを我にはうとき人ながら秋風吹けば戀しかりける

いとほしと悲しとかつは思へどもつよきしもとにわが心うつ

ひとたびの誓こそげに尊とけれ生死の道はいと輕きもの

わづらはし朝の人はあざみ行きぬ夕べの人はたたへて過ぎぬ

もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが髪さへもそむくかと思ふ

ものうさに二日こもりてつくろはず我が黒髪も悲しかりけり

まなかひに金色の雲かがよひぬ忘られがたき夕べなりけり

たふとしや千草もわれも光あり山に入らむず夕日のまへに

何事も人間の子のまよひかや月は久遠のつめたき光

千萬の寶はむなしたふときは親よりつづくただこの身のみ

かぜあらく
大ぞらのにごり澄みにけり
山々にしろき卷雲をのこし

しみじみと我は見るなり
あさの日の光さだまらぬ
浮洲の夏ぐさ

さびしさの大なる現はれの
淺間山さやかなり
けふの青ぞらのなかに

かげもなくしろき路かな
信濃なる
追分のみちのわかれめに來つ

われら三人
影もおとさぬ日中に
立つて　清水のながれを見てをる

片山廣子

日中

しづかにも
まろ葉のみどり葉映ろなり
「これは山路」とおなじことを言ふ

土橋をわたる土橋はゆらぐ
草土手を
おり來て見ればのびろし畑は

さびしさに壓されて
人は眼をあはす
もろこしの葉のまひるのひかり

あかるすぎる野はらの空氣
眞なつ日の
荒さを持ちてせまりくるなり

日傘させどまはりに日あり
足もとのほそながれを見つつ
人の來るをまつ

日の照りていちめんにおもし
みちのうへの
馬糞にうごく青き蝶のむれ

四五本の
樹のかげにある腰かけ場
ことしも來たり腰かけて見る

しろじろと
うら葉のひかる樹々ありて
山すそのかぜに吹かれたるかな

われわれも
牧場のけものらとおなじやうに
静かになりて風に吹かれつつ

友だち別れむとして
草なかのひるがほの花を
見いでたるかな

をとこたち
煙草のけむりを吹きにけり
いつの代とわかぬ山里のまひるま

柳原燁子

われはここに神はいづこにましますや星のまたたき寂しき夜なり

南無歸依佛まかせ奉りし一筋の心としらば救はせ給へ

雲水の笠かたぶけて行きすぎしそのよこがほよ誰にかも似し

したたりのこの一滴數千年の祖の血汐も流るるやなほ

朝化粧五月となれば京紅の青き光もなつかしきかな

何事か地異天變のあれかしと願はるるかなあぐみ果てては

吾なくばわが世もあらじ人もあらじまして身を燒く思もあらじ

毒の香たきてしづかにねむらばや小がめの花もくづるるゆふべ

わたつ海の沖に火もゆる火の國に我あり誰そや思はれ人は

兒らはまだ起きてまつやと生垣の間より覗く　わが家のあかり

待ちあはす人まだ見えぬ停車場の群集の中のさみしき一時

ややさみし心のままになりていましみじみ泣かむいとまさへなき

そこまでと云ひて送りつ電車道狹霧の中に人と別れぬ

身じろげばさとこぼれたる山の湯のその音のよさそのこころよさ

思ひきや月も流轉のかげぞかしわがこしかたに何をなげかむ

子等にきかすこのまりうたも悲しやな母ならぬ人を母とせし頃

よひの雨いつか嵐となりにけりしづまくるもわが胸のうち

かへりおそきわれを待ちかねいねし子の枕べにおく小さき包

添乳しつゝ子守唄をばうたひたればふしぎに泣かる涙の出でて

手まくらのかひなのしびれにふとさめて見れば靜けき兒の眠りかな

ともし火にうかぶ歌舞伎の絵かんばんお七吉三がおもはゆさうな

緋ぢりめんの襟かけた子にあひしかばかろいねたみに走せて帰りぬ

千代紙でつくつた手なしのあね様のやうな女とあぢきなう思ふ

たんぽぽの乳でそだつた人のよに夕べが来ればただはかなくて

めづらしきもののやうにもまじまじと指をながめぬなつかしかりき

廣重の江戸絵の夏の葉ざくらの向島こそ戀しかりけれ

松本初子

藤むすめより

水藝の女太夫のかたぎぬの浅黄のしゆすがすずしかりけり

櫻ちるはらはらと散る忠信と静御前の三まいつづき

美しうありたき願をとめ子は青葉のまどにうす化粧する

湯上りをえんがはに出て爪とりぬ銀のはさみと若葉のいろと

三味線のふつつり切れた三の絲ひかでしまひし日のあぢきなさ

ふはふはとしやぼん玉のよにはかなげな魂のとぶ春のくれがた

まなじりへ紅などさしぬすつきりと道成寺をば踊りて見たき

蛇の目傘ついとくぐつたつばくらや唄にあるよなさみだれの町

石だたみ薄齒りきうでからころと行けば櫻の花みだれ散る

かけふみのかけのないのが悲しくて母にすがりて泣きし夕ぐれ

はかなさは二まいざうりの緋の鼻緒おもひ出のごとそまりたる足袋

しめじめと小雨そそぎてうら淋し吉住が唄きかまほしけれ

秋風はおしろいばけのはだざはりそれによく似てえりもとを吹く

ほのぐらき宵は葉茶屋のまな娘のれんかかげて世の中を見る

現代歌壇諸家略年譜

井上文雄　和學者、通稱元眞、柯堂、調鶴等の號あり。田安藩の侍醫にして、岸本由豆流に國學を學ぶ。後一柳千古に從ふ。和歌に達し、景樹以後の名匠と稱せらる。明治四年十月十七日歿す。年七十二。家集を「調鶴集」といふ。

八田知紀　鹿兒島藩士、喜左衛門と稱し、桃岡と號す。京都留守居下役、のち近衛家の貞姫に仕ふ。歌を景樹に學ぶ。明治六年九月二日歿す。年七十五。「忍草」「都鳥集」「白雲日記」「桃岡雜記」「八田知紀歌集」等の著あり。

福田行誡　增上寺の住職なり。武藏國豐島の人、幼にして小石川無量山に投じ、のち諸方に參學し、明治十二年增上寺大敎正に補す。二十年總本山知恩院門主となる。翌年四月二十五日寂す。年八十三。「行誡歌集」あり。

三條西季知　正親町三條實織の子、國學に通じ和歌を善くす。幕末天下多事、三條實美等と尊王攘夷を唱へ、幕府の忌む所となり、實美等六卿と難を避け太宰府に居ること五年。慶應の末京師に還り、歌道を以て天皇に侍し寵遇厚し。明治十三年八月二十四日歿す。

三條實美　實萬の子、天保八年二月八日、京都に生る。維新の大業を翼賛す。明治二年右大臣、三年太政大臣、十七年公爵、十八年内大臣となる。二十四年二月十九日正一位に敍せられ、同日麻布の私邸に薨ず。國葬を以て葬儀を行ふ。家の集に「梨の片枝」あり。

佐佐木弘綱　文政十一年七月十六日伊勢鈴鹿郡石藥師に生る。歲十四初めて歌を詠じ二十歲足代弘訓の門に入る。二十五歲「歌詞遠鏡」を著し、爾來數十部の著書あり。明治十五年東京に移り、東京大學講師、後、東京高師講師たり。二十四年六月二十五日歿す。歲六十四。

與謝野尚絅（禮嚴法師）　丹後國與謝郡の人。細見氏の二男に生れ、與謝野の新姓を建つ。西本願寺の僧となり、維新前後に王事に盡す所多し。歌と國書を八木立禮に學び、遺す所の短歌參萬首に及ぶ。明治三十一年八月十七日寂す。年七十六。大正七年從五位を贈らる。

鈴木重嶺　德川家旗本の士。初め名を大之進といふ。勘定、吟味、旗奉行を經て、佐渡奉行となり、兵庫頭となる。維新後、濱松縣參事、相川縣權知事となり、明治三十一年十一月歿す。

税所敦子　京都の人、林氏、二十歲薩摩藩士税所篤之の後妻となり、二十八歲夫を失ふ。明治八年、掌侍に任じ、皇后皇太后兩陛下に仕へ、文學の諸務を掌り、御歌の拜寫より、宮女の百事質疑に答ふる等、力めて倦まず。三十三年二月四日歿す。年七十六。幼より和歌を善くし、家集「御垣の下草」あり。

池袋清風　日向國都城の人、後京都に出でて同志社に學び、神學を研究す。歌は專ら桂園の流を汲み、同志社にありて同志と共に研鑽し、「淺瀨の波」を編む。家集「案山子廼屋歌集」一卷あり。明治三十二年七月歿す。年五十。

天田愚庵（五郎 鐵眼）　磐城國平の人。十五歲、維新の奥羽戰爭に、又明治七年征臺の役に從軍す。十一年、清水の次郎長の養子となる。其の後、寫眞師、神官等となり、二十一年三十四歲にて京都林丘寺に得度す。三十四年、伏見桃山に移る。三十七年一月十七日寂す。年五十一。歌は「愚庵遺稿」に收めらる。

大和田建樹（「現代日本詩集」參照）

小出粲　石見國濱田藩士、天保四年八月、江

戸八丁堀の藩邸に生る。幼時毛木寛斎に書を學び、後武藝を好み、槍術は宝蔵院流の皆傳を受くるまでに上達す。十六七歳より、歌道に志し、明治十年始めて御歌所に入り、文學御用係を命ぜらる。後御歌所主事に累進せしも、晩年辭して御歌所寄人となる。明治四十一年四月十五日逝く。享年七十八。

中村秋香 不盡之屋、槐陰雪屋、乾坤蘆、今かくれが、松下庵等の號あり。天保十二年九月二十九日駿州府中に生れ、國學を松木直秀の門に、漢學を明新館に學ぶ。維新後、內務文部の諸省、帝大、東京高女、女子高師、一高等に歴任、三十年、宮內省御歌所寄人仰付けらる。四十一年一月二十八日逝去。行年七十四。

小杉榲邨 阿波の人、若くして學に志し、池邊眞榛、本居豊穎に從ひて國學歌文を研究し、最も有職故實の學に長じてゐた。維新後、東京大學古典科の教授となり、美術學校教授、御歌所參候を兼ね、後文學博士の學位を授けらる。明治四十三年三月歿す。年七十七。

高崎正風 天保七年七月、鹿兒島に生る。少壯學を好み、夙に八田知紀につき歌道を修め、頗る造詣す。その後國事に奔走し功多し。明治九年御歌掛を、十九年御歌掛長を命ぜらる。二十八年樞密顧問官となる。和歌を以て寵眷を受け、長く御歌所長の職にあり、四十五年二月二十七日薨ず、年七十七。一生の詠歌數萬首、選して凡そ四千首を得、家に傳ふと。

本居豊穎 本居宣長の曾孫。天保五年和歌山に生る。家學を繼ぎ、明治二年權中宣教師に任じ、のち大教正に累進。二十九年東宮侍講、三十年御歌所寄人となる。東京帝大講師囑託、帝國學士院會員たり。國學に精しく、また和歌及び書を善くす。大正二年二月十五日歿す。「秋屋集」「本居雜考」「古今集講義」等の著あり。

海上胤平 天保元年元旦、千葉縣海上郡三上村に生る。はじめ武人にして千葉周作の門に入り、安政の初め諸國を武者修業し、和歌山に入り、文武二道の盛なるを見て、止まつて加納諸平の門に入る。戊申の役に遇ひ、江戸に歸り、潔く太刀を捨てゝ歌道の師となり、專ら野に在りて歌道に盡す。八十八歳にて沒す。

黒田清綱 薩摩藩士黒田清直の長子、天保元年三月生る。明治元年山陰道鎭撫總督參謀を命ぜられ、ついで東京府大參事、元老院議官等に歴任し、明治二十年子爵を授けらる。三十年樞密顧問官に任ぜらる。少より歌を嗜み、八田知紀の高弟たり。高崎正風の歿後、御歌所長たり。大正六年三月二十三日歿す。

大口鯛二（周魚）鯛二、又旅師といひ、白檮舍と號す。元治元年四月、名古屋市押切町に生れ、歌を伊東祐命に學び後高崎正風を師とす。明治二十三年御歌所に入り、三十九年寄人に任ぜらる。大正五年、臨時編纂部の委員に任じ、明治天皇、昭憲皇太后御集編纂に力を盡し、勳五等に敍せらる。九年十月十日歿。年五十七。從六位。「大口鯛二翁家集」あり。

山縣有朋 天保九年四月二十二日、長門萩城に生る。安政五年吉田松蔭の門に入り、國事に奔走す。維新以來の功臣として明治三十一年元帥府に列せられ、內閣總理大臣たること二回、四十年公爵に陞敍、四十二年樞密院議長となる。大正十一年二月一日薨去、九日國葬の禮を以て日比谷公園に於て葬儀を行ひ、音羽護國寺に埋葬す。從一位、大勳位、功一級。

森　鷗外（[illegible]）

入江爲守 冷泉爲理の三男、明治元年京都に生る。七年入江爲福養子となり十七年襲子爵。十九年上京學習院に學ぶ。三十年貴族院議員に當選。爾來改選毎に當選。四十一年御歌所參候被仰付。明治四十五年及大正二年文部省美術展覽會審査委員被仰付　同年御歌所御

用掛被仰付。大正三年東宮侍從長に任じ、御歌所參候被免。大正四年大嘗祭及大饗主基歌詠進被仰付。同年兼任御歌所長。御歌所御用掛被免。大正五年帝室技藝委員選擇委員被仰付。同年より八年迄明治天皇御製編纂に從事す。大正八年より十年迄昭憲皇太后御歌編纂に從事す。十年皇太子殿下海外御巡遊供奉被仰付。同年兼任侍從次長。昭和二年任皇太后宮大夫、御歌所長兼任如故。三年大嘗祭及大饗悠紀歌詠進被仰付。

井上通泰　慶應二年十二月二十一日、姫路に生る。姫路藩の儒者松岡操(號[illegible])の第三子なり。明治二十三年醫科大學(今の東京帝大醫學部の前身)を卒業し眼科を專攻す。三十七年醫學博士。四十年八月、御歌所寄人を命ぜらる。大正八年十二月明治天皇御製編纂の功により、勳三等に敍せられ旭日中綬章を賜はる。九年二月願に依り御歌所寄人を免ぜられ、宮中顧問官に任ぜらる。十五年從三位に敍せらる。此年醫業を廢し、專ら古典の研究に從事す。「萬葉集新考」八巻及び「南天莊歌集」一巻等の著あり。

阪　正臣　安政六年三月二十三日、名古屋花屋町なる父正緒翁の寓處に生れ、八歳初めて歌を詠ず。十九歳東京に上る。三十三歳侍從屬。四十一歳華族女學校教授に任じ、四十三歳御歌所寄人被仰付。五十二歳華族女學校教授を辭し、御歌所主事心得被仰付。五十三歳任御歌所主事。六十二歳、臨時編纂部委員。七十三歳、「三拙集」刻成る。七十四歳敍從四位。

武島羽衣　(「現代日本[illegible]」參照)

落合直文　(「現代日本[illegible]」參照)

與謝野　寛　京都の人、明治六年二月二十六日に生る。森林太郎、落合直文、吉田増藏三家に師事す。學校の經歷無し。初め歌と國書を父禮嚴に學べり。慶應義塾大學教員。著述なし。曾て詩友と雜誌「明星」、「スバル」等を刊行せし事あり。(「現代日本[illegible]」參照)

與謝野晶子　明治十一年十二月七日、堺市甲斐町に生る。鳳宗七の三女なり。宿院小學校を經て堺女學校補習科を出しは明治二十七年にして、三十四年出京、同年の秋與謝野寛と結婚す。三十六年より大正七年に至る間に六男六女を擧ぐ、六男は夭す。四十五年五月に出發して歐洲に遊び、半歳にして歸朝す。著書は歌集二十、詩集一、評論集十三。(「現代日本詩集」參照)

平野萬里　(「現代日本[illegible]」參照)

高村光太郎　與謝野寛に就きて短歌を學ぶ。歌集無し。(「現代日本詩集」參照)

茅野蕭々　(「現代日本[illegible]」參照)

茅野雅子　大阪に生る。舊姓増田。日本女子大學に學び後茅野氏に嫁す。曾て歐洲に遊ぶ。現に日本女子大學教授。歌集「戀衣」、「金沙集」、「[illegible]日」のいづるまでの他、短篇小說童話に作あり。

山川登美子　明治十二年七月二十六日、若狹小濱町外雲濱村に生る。大阪梅花高女を出で、新詩社創設と同時に加盟。三十三年山川駐七郎と婚し、翌々年死別。三十七年日本女子大學に入り、翌年歌集「戀ごろも」を出版、病の爲めに退學す。四十二年四月十五日逝く。

香川不抱(本名[illegible])　明治二十一年香川縣綾歌郡川西村に生る。丸龜中學時代より新詩社に加はり、「明星」「スバル」に短歌を發表。自家の窮境を歌ひてユーモラスなる新體を開くことは石川啄木に先行せり。大正八年頃大阪に在りて歿す。

北原白秋　(「現代日本詩集」參照)

河野愼吾　明治二十六年四月、播州赤穂郡河野村に生る。早大出身。東京朝日社博文館等に奉職せしことあり。大正三年北原白秋と共に巡禮詩社を組織し「地上巡禮」發刊、後「アルス」「煙草の花」等を經て、「ザムボア」編輯同人となる。大正七年秦皮詩社創設、「とねりこ」を主宰し今日に及ぶ。多くの歌作評論あり。

村野次郎(本名田中) 明治二十七年三月東京府北多摩郡多摩村上[illegible]屋に生る。[illegible]大商科卒業、三菱在職後辭して輸出入商を營む。作歌は北原白秋主宰の「朱欒」に入りて啓發され、其後「地上巡禮」「烟草の花」「アルス」等に發表し、更に「日光」同人たり。現に「香蘭」を主宰す。

酒井廣治 明治二十七年四月二十七日、福井縣今立郡岡本村に生る。東京齒科醫專出身。北原白秋に師事し、「地上巡禮」「烟草の花」その他を經て一時「とねりこ」に加はりて、後中絶、大正十四年より再び作歌す。「香蘭」同人。

穗積 忠 明治三十四年三月十七日、伊豆田方郡田中村吉田に生る。大正十二年國學院大學卒業後、松本高女、三島高女に奉職現在に至る。歌は中學時代より北原白秋に、國學及び土俗學は折口信夫に師事す。

吉井 勇 明治十九年十月八日、東京芝高輪南町に生る。早大半途退學。中學時代より歌及び俳句を作り、新詩社に加盟。歌集に「酒ほがひ」「昨日まで」「毒うつぎ」「祇園歌集」「夜の心」等十數冊、歌物語集に「水莊記」以下數冊の他、戲曲、小說の著多し。「相聞」を主宰す。(詳細は「[illegible]作集」[illegible]讀)

石川啄木 (「石川啄木集」參照)

生田蝶介 明治二十二年五月二十六日、山口縣長府に生る。早大英文科半途退學後、時事新報社に入社。一年にして博文館編輯部に轉じ、十八年間勤務。現在は、創作と歌作とに專心、「吾妹」を編輯しつゝあり。

富田碎花 (「現代日本詩集」參照)

相馬御風 歌集「睡蓮」(明治三十八年)、御風歌集あり。現在木蔭會を主宰す。(「現代日本詩集」參照)

金子薰園(雄太郎) 明治九年三月三十日東京神田に生る。二十六年十月落合直文の門に入る、作歌生活の初めなり。三十年、「新聲」の佐藤橋香(義亮)と識り、爾來同氏との關係絕えず、現に新潮社に在つて調査部を監す。三十六年十月白菊會を起し、大正七年十月その主宰せる短歌研究會より「光」を出し、今日に至る。「片われ月」(明治三十四年)、「小詩國」(三十八年)より「濃藍の空」(大正十二年)に至る十歌集の他、誕辰五十年記念なる「金子薰園全集」(大正十四年)、共選「叙景詩」(明治三十五年)、「歌の作り方」「作歌辭典」「歌に入る道」「歌文作法」「歌に志す女性へ」等作歌入門その他の著多し。

吉植庄亮 明治十七年四月三日、千葉縣印旛郡本埜村に生る。十七歲、短歌を詠み金子薰園の門に遊ぶ。一高、東京帝大に遊び、大正十年中央新聞社入社。同年秋「橄欖」を創刊。十三年中央新聞社を辭し、十五年より郷里に開墾に從事、今日に及ぶ。歌集「寂光」(大正十四年)、「草原」(昭和三年一月)、「煙霞集」(昭和三年六月)の著あり。

田波御白(本名庄藏) 初め水韻と號す。栃木縣の人、上京後、歌を金子薰園に學ぶ。六高を經て東京帝國大學文科に入り、明治四十三年五月病んで歸國す。翌四十四年十月、鈴木療養所に入り、大正三年八月逝く。白菊會同人。三年四月「御白遺稿」出づ。

岡 橙里(忠太郎) 明治十二年五月十九日、滋賀縣蒲生郡鎌掛村に生れ、京都の中村確堂に國文學を學ぶ。初め稻里と號す。白菊會同人。大正五年十一月十四日逝く。晚年京都祇園に平安畫房を創す。歌集「朝夕」(明治四十二年)、「早春」(大正二年)の著あり。大正六年、「橙里全集」(金子薰園編)出づ。

武山英子 明治十四年一月東京に生る。東京府第一高女卒業後、小學校女學校に教鞭を執りしが、後病んで國文和歌の研究に專念す。歌については兄金子薰園に計るところありしもその傾向を全く異にす。大正四年十月二十六日逝く。白菊會同人。「武山英子選集」あり。

佐瀨蘭舟(本名代雄) 明治十四年三月三日、千葉縣山武郡大平村に生る。大正二年京都帝大機械科卒業後、滿鐵、山東鐵道等に勤務、十四年朝鮮

はじめ尾上柴舟主宰の「水甕」を編輯し、十九年「水甕」を退き、「[illegible]」を創刊、今日に至る。

上田英夫　明治二十七年一月五日兵庫縣[illegible]郡大路村に生る。大正九年、東大國文科卒業。十年三月、五高教授に任ぜられ、現にその職にあり。前「白日社」同人。現「水甕」社同人。

岡本かの子　明治二十六年三月、東京青山南町に生る。生家は大貫氏。幼時より帝大文科生なりし兄晶川に日本古文學、西洋文學、語學等を學ぶ。跡見女學校、櫻井英學塾に學び科外にフランス語を修む。歌集三冊、合著歌集一冊の外、[illegible]「散華抄」の近作あり。

水町京子（本名宮坂みち子）　明治二十四年十二月二十五日高松市に生る。大正元年、東京女高師國文科に入學、尾上柴舟に作歌を學ぶ。「車前草」「創作」「水甕」を經て、十四年古泉千樫の門に入り「青垣」會員となる。歌集「不知火」（[illegible]）の著あり。現に「草の實」同人、「青垣」同人たり。

若山牧水（本名繁）　明治十八年八月二十四日、宮崎縣東臼杵郡東郷村坪谷に生る。四十一年、早大英文科卒業。歌は中學時代より試み、上京後尾上柴舟の門に學び、四十四年「創作」社を起し、これと終始す。大正十五年「詩歌時代」を創刊せしことあり。昭和三年九月十七日逝く。「海の聲」「ひとり歌へる」「別離」「路上」「死か藝術か」「みなかみ」「秋風の歌」「砂丘」「朝の歌」「白梅集」「さびしき樹木」「溪谷集」「くろ土」「山櫻の歌」等の歌集のほか、散文、歌話の著多し。その全作は「牧水全集」全十二卷に收めらる。

若山喜志子　明治二十一年五月、信濃國東筑摩郡桔梗ヶ原に生る。十二三歳の頃より、詩歌繪畫にあこがれ、二十歳前後「女子文壇」に詩を寄せ横瀬夜雨に認めらる。明治四十五年五月、若山牧水と結婚。牧水歿後、「創作」を主宰す。

高藤青山（本名[illegible]）　明治十五年二月二十日、栃木縣喜連川町に生る。前橋中學校中途退學後、祖先以來の神職と小學教員とを兼務して、今日に至る。明治四十年ごろ、約一年間、尾上柴舟に師事。後「創作」の同人となり、昭和二年、和田山蘭、菅沼[illegible]勇等と共に「ぬはり」を創刊、今日に至る。歌集「峽間」の著あり。

和田山蘭　明治十五年四月、青森縣北津輕郡松島村に生る。青森師範卒業後教員生活をなし、大正二年夏上京。歌は初め金子薫園に學び、後若山牧水に接近し、「創作」に據る。昭和二年六月、高藤青山等と「ぬはり」社を起し、「ぬはり」を創刊、今日に至る。歌集「酒壺」の著あり。

加藤東籬（本名[illegible]一）　明治十五年八月二十一日青森縣北津輕郡松島村に生る。東奥義塾に一年間及び高木[illegible]に漢學を學びし他は獨學なり。歌集「加藤東籬集」「[illegible]」等の著あり、「創作」社員。

菊池知勇　明治二十二年四月七日岩手縣東磐井郡澁民村曾慶に生る。岩手師範卒業後創作社に入り、後「ぬはり」を創刊す。歌集「落葉樹」「山霧」、口語歌集「[illegible]」、「兒童萬葉集」、[illegible]「童詩讀本」の他、兒童讀物、教科書等に著書多し。

中村柊花（本名[illegible]）　明治二十一年九月、長野縣埴科郡東條村に生る。蠶業學校に學び、日下部蠶種株式會社に關係しつゝあり。歌は若山牧水の門に學び、現に創作社員たり。

大悟法利雄　明治三十一年十二月二十三日、大分縣下毛郡大幡村大悟法に生る。歌を若山牧水に學び、その歿後は喜志子夫人を助けて「創作」を編輯す。

内藤鋠策　明治二十一年八月二十四日長岡市に生る。歌集「旅愁」の著あり。抒情詩社主宰。

前田夕暮（本名洋造）　明治十六年七月、相州中郡大根村に生る。病弱と放浪の少年時代を送り、三十七年上京、尾上柴舟の門に入り、三十九年白日社創設、「向日葵」を發行、四十二年處女歌集「收穫」を上梓、四十四年「詩歌」發刊、大正七年廢刊、十三年病を得て入院中「綠草心理」

を執筆、昭和四年三月「詩歌」を復活今日に至る。歌集『陰影』『生くる日に』『深林』『虹』『原生林』の他、散文集『烟れる田園』『雪と野菜』等あり。

矢代東村（本名 亀廣） 明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村に生る。東京青山師範を出で、のち日本大學に學び、大正十年、辯護士試驗に合格。十三年「日光」創刊に際し同人となり、昭和三年「詩歌」の復活と共にその同人となる。大正四年以降口語による表現をとる。

中島哀浪（本名 秀連） 明治十六年七月三十日、佐賀縣佐賀郡久保泉村川久保に生る。早稻田大學中途退學。かつて小學校教師、郵便局長たりし事あり。大正の初め白日社に入り、現に「詩歌」同人たる傍ら「ひのくに」を主宰し、又、清和高女、福岡女專等に短歌を講ず。目下歌集『朝霧』出版準備中。

熊谷武雄 明治十六年一月、岩手の國境に近き手長山麓に生れ、父祖の業をつぎて田園生活をなし、晴耕雨讀を樂む。歌は初め叔父知足庵に導かれ、及川義亮に學び、四十二年白日社に入り今日に至る。歌集『野火』（大正四年）の著あり。

楠田敏郎 明治二十三年四月京都府宮津町に生る。夙に文學に志し、二十歳、前田夕暮を知りてその結社に加はる。二十二歳以後諸新聞に記者たり。目下歌舞伎座出版部囑託、白日社同人、「短歌月刊」「文珠蘭」主宰。歌集『彩雲』『流離』『三歸來』『身邊雜唱』の他著作多し。

米田雄郎（本名 雄還） 明治二十四年十一月、奈良縣磯城郡川西村に生れ、十一歳、叔父（師僧）に養はる。早大文科中途退學。近江國極樂寺住職たり。明治四十四年前田夕暮の門に入り、今日に及ぶ。歌集『日沒』（大正六年）の著あり。

廣田楽 明治十九年三月東京市本郷區駒込動坂町に、七人兄弟の次男と生る。小學校半途退學。四書五經を父に學ぶ。爾後工場勞働を續く。白日社同人。

川端千枝（本姓 川畑） 明治二十年八月九日、神戸市下山手通に生る。神戸親和女學校卒業。大正二年頃より白日社に入社、七年同志と「耕人」を創刊。大正十三年「日光」に加盟、同誌廢刊後、香蘭詩社に入社、現在その同人たり。

窪田空穗（本名 通治） 明治十年松本市に近い農村に次男として生れた。松本中學を出た。富國強兵が國民的標語となつてゐて、日清戰爭が終つた時であつた。今の早稻田大學の前身である專門學校に入つた。漠然たるあこがれからである。退學したが、また入學した。卒業した時は日露戰役の時であつた。爾來東京に住んでゐる。新聞記者、雜誌記者、教員と、職をかへた。今は教員をしてゐる。詩を作らうと思ひ、小說を書かうと思つた時代もあるが、結局、歌に心を引かれて、今に携はつてゐる。時間の大部分は、この方面に費して來た形である。（自記のまゝ）

松村英一 明治二十二年十二月三十一日、東京芝愛宕下町に生る。日露戰爭のころ、窪田空穗に師事し、間もなく十月會をつくり、今日の「國民文學」の基礎となす。一方、「國民文學」の編輯に從ふ。目下「短歌雜誌」を主宰し、歌集に『春かへる日に』『やますげ』あり、その他、論集編著多し。

半田良平 明治二十年九月十日、栃木縣上都賀郡北犬飼村に生る。明治四十五年七月、東京帝大英文科卒業。大正二年兵役を卒へし後は、私立東京中學校の語學教師として今日に至る。「國民文學」同人。歌集『野づかさ』歌論集『短歌新考』註釋書『芭蕉俳句新釋』の他數種の著書あり。

宇都野研 明治十年十一月、愛知縣額田郡本宿村に生る。四十一年東大醫科卒業。昭和元年東京本郷に開業、今に至る。夙くより歌を詠みしが、大正九年窪田空穗の門に入り「朝の光」「國歌」「白檮」を順次に編輯、昭和三年末「勁草」を創刊す。『木群』『平本末子歌集』等の編著あり。

對馬完治　明治二十三年一月十六日生。四十年、窪田空穗を中心の十月會の歌集「白露集」を刊行す。大正九年「地上」を創刊、十二年震災後「國歌」を刊行す。十四年「白樺」を刊行。昭和三年「地上」を再刊主宰して今日に至る。

川崎杜外　長野縣東筑摩郡和田村に生る。少年時代、村に窪田空穗、太田水穗あり、自然兩氏に親しみ文藝の道に入る。一時早稻田高等豫科に學びしも、四十年より父を助けて農業に從事、大正十年郷を出て別居、記者生活に入り、名古屋新聞長野支局に職を奉じて今日に至る。歌集「山守」の著あり。國民文學同人。

氏家　信　明治十五年三月、仙臺市清水小路に生る。四十一年東京帝大醫科卒業。三十六年、歌集「新韻集」を出版し、「新韻」を創刊、同、秋上京、佐佐木信綱の門に遊ぶ。大正九年、窪田空穗に師事、「國歌」「白樺」を經て「勁草」を創刊、今日に至る。

太田水穗　明治九年十二月、長野縣東筑摩郡廣丘村に生る。長野師範を出でて、小學校長、松本高等女學校教諭等に就職し、四十一年上京、もつぱら評論の筆を執り、しばしば小說を作る。三十六年、歌集『つゆ草』を出し、三十八年、歌集『山上湖上』を久保田山百合合著にて出す。四十四年「同人」を發行。大正四年「潮音」を發行し、今日に至る。著書の主なるものに「新譯伊勢物語」「紀伊歌集講義」『短歌立言』歌集『雲鳥』歌集『冬菜』等あり。

四賀光子　明治十八年四月、信州諏訪郡四賀村に生る。原姓有賀。長野縣師範學校女子部を卒業、明治四十二年三月東京女子高等師範學校卒業。同年四月太田水穗に嫁す。東京府立第一高等女學校に就職し現在に至る。

小田觀螢(本名哲彌)　明治十九年十一月七日、岩手縣九戸郡宇部村に生る。北海道に移住し、半農生活を營むこと十餘年、其の間數種の文藝雜誌に關係す。大正四年七月「潮音」の創刊と共に據りて今日に至る。歌集『隱り沼』の著あり。目下中學校教師。「潮音」同人にして選者。

峰村國一　明治二十一年十二月十二日、長野縣小縣郡富士山村に生る。上田中學校卒業の他、學歷無し。初め農業に從ひ後銀行員となる。久しく太田水穗に師事す。潮音社同人。

野澤柿葺(右之助)　明治二十三年七月五日、北海道小樽に生る。三十九年、備中笠岡商業學校を卒へたる後は銳意貿易商たる家父を輔け、現に野澤組神戸支店に勤務す。三十七八年の交、「古今集」を讀みて歌心動きしことあり。大正四年潮音社に入り、現在に及ぶ。

大井　廣　明治二十六年、信州に生る。長野師範を中途退學、小學教師をしながら、太田水穗について歌を學ぶ。大正十五年、京都帝大に入り國語學を專攻。目下第一神戸高等女學校高等科に教鞭をとりながら、「國語國文の研究」を編輯し、また「潮音」の選者である。

尾山篤二郎　明治二十一年十二月十五日、金澤市に生る。十七歲私立金澤英學院に學び、詩を「新聲」「文庫」等に投ず。二十二歲上京、前田夕暮、富田碎花、若山牧水等と知る。大正二年、處女歌集「さすらひ」を出す。その後、歌集「明る妙」「野を步みて」『曼珠沙華』『草籠』等あり、また多くの歌書を出す。大正八年より自然詩社を起し、「自然」を發行し現在に及ぶ。

岡山　巖　明治二十七年廣島市に生る。大正十年東京帝大醫科卒業。十五年名古屋鐵道局木曾潛函醫務室に聘せられて今日に及ぶ。歌は六高在學中に始め、大正七年「水甕」を編輯、八年「連作」を發刊、昭和三年「樂境」を創む。

橋田東聲　明治十九年十二月二十日、高知縣幡多郡中筋村有岡に生る。東京帝大法科卒業後、農大講師、東洋拓植會參事を經て現在文部省囑託たり。歌集「地懷」、論集「自然と歌律」の他、「萬

葉傑作選」、「萬葉女流歌人歌集」、「評正岡子規傳」、「十大人長塚節」等の編著あり。

臼井大翼 明治十八年、下總海上郡鶴[illegible]村に生る。大正二年、東京帝大法科卒業後、大安生命保險會社を創立、經營十餘年、大震災にて人生觀一變、短歌に[illegible]を開始す。大正九年同志と共に「珊瑚礁」を創刊、さらに「覇王樹」創刊し、今日に至る。著「秋燭」(十四)あり。

今中楓溪 明治十六年四月二十日、大阪府中河内郡英田村に生る。廣島高師卒業後、栃木縣立大田原中學に奉職。四十年今中家を繼ぐ(舊姓)。四十四年大阪府立豊[illegible]川高女教頭として赴任、今日に及ぶ。「あかね」「白日」の二歌集あり。著白日社同人、現「覇王樹」同人。

四海多實三(本名) 明治二十三年、神奈川縣中郡吾妻村二宮、書籍商家に生る。書籍光風館にて修業後同店を總理し、現に同店書籍主任、歷史教育研究會主幹たり。新詩社末期頃より歌作に親しみ、大正六年、同志と「珊瑚礁」を創刊、更に「行人」を發行、後「日光」に同人たり。

森園天淚(本名) 明治二十二年七月十日、鹿兒島縣薩摩郡東鄕村に生る。大正元年「白[illegible]の山」出版、四年九州詩社を起し「出土の火」を熊本にて發刊。八年大正日々新聞社入社、後大阪每日新聞社に轉じ、十二年「東京日々」に轉勤現在に至る。著「[illegible]」、「[illegible]」。「日光」同人。

西村陽吉(本名[illegible]) 明治二十五年四月九日、東京本所に生る。三十八年日本橋東雲堂の小僧となり、後乞はれて西村家の養子となる(舊姓[illegible])。現在株式會社東雲堂、同學藝社專務取締役の職にあり。歌集として「都市居住者」「街路樹」「第一の街」「晴れた日」の他、編著「現代口語歌選」等がある。「藝術と自由」を主宰す。

西出朝風 明治十七年十月六日、石川縣大聖寺町に生る。大正三「新短歌と新俳句」を發刊。七年金澤市にて「朝風詩歌集」三卷、其の他出版。十一「純正詩社雜誌」を發行。十三年「青春の日に」を出版。昭和三年第三次の「今日の歌」を起し現在に至る。

青山霞村 明治七年六月七日、京都[illegible]に生る。同志社に學ぶ、三十四年關西學院で口語詩と口語歌を創始。三十六年米國に遊學、中途病氣で歸朝。三十九年、口語歌集「池塘集」を、四十三年、「[illegible]草山の詩」を出す。大正八年「カラスキ」を創刊し今日に至る。

正岡子規 (正岡子規[illegible])

伊藤左千夫(本名) 元治元年八月十八日、千葉縣山武郡成東町に生る。三十二年正岡子規の門に入り、子規歿後「馬醉木」「アララギ」を發刊。短歌、長歌、新體詩、寫生文、小說等に作多し。大正二年七月三十日歿。(行年五十歲)

長塚節 明治十二年四月三日茨城縣結城郡岡田村國生に生る。根岸短歌會同人、「馬醉木」同人たり。長歌、短歌、寫生文、紀行文、小說の作多し。大正四年二月八日歿。(行年三十七歲)

岡麓(本名) 明治十[illegible]年三月[illegible]日東京本鄕湯島に生る。中學校を中途にて退學し、寶田通文の精義塾に國文を學ぶ。寶田翁逝きし後、友人等と雜誌「うた」を發刊せし事あり。明治三十二年正岡子規和歌の革新を叫ぶや、翌三十三年春その門に入り、子規歿後作歌に遠くなりしかど、同門の伊藤左千夫、長塚節とは親しく交りき。左千夫節つぎて世を去り、大正五年三月より「アララギ」に歌を發表して今日に及ぶ。歌集「庭苔」(大正十[illegible])の著あり。

香取秀眞 明治七年一月一日、下總印旛郡船穗村に生る。三十年東京美術學校卒業。三十三年正岡子規の門に遊ぶ。三十六、美術學校講師、大正八年工藝審查委員、昭和二年帝室博物館學藝委員、何れも今に及ぶ。同年帝國美術院會員、同[illegible]審查員、四年同院會員任命。「日本古鏡圖錄」「日本鑄工史稿」「新撰釜師系

書其の他多くの編著あり。

蕨　眞(眞一郎)　明治九年八月二十日、千葉縣山武郡睦岡村に生る。三十三年、正岡子規の門に入り、根岸短歌會同人と議りて「馬醉木」を發行、四十一年九月、埴谷の自宅にて「阿羅々木」を發刊し、翌年九月同誌を東京伊藤左千夫宅に移す。四十四年睦岡農林學校を設立し、また農村文藝を企つ。大正十一年十月十四日逝く。のち蕨橿堂その歌稿を編し『林潤集』を作る。

島木赤彦(久保田俊彦)　二水軒、伏龍、山百合、柿乃村人等の別號あり。明治九年信州上諏訪に生れ、久保田家の養嗣となる。長野師範を出づ。當時新體詩、和歌、俳句、文章等を「文庫」に發表。後左千夫に師事す。大正二年諏訪郡視學を辭し上京、「アララギ」發行所に移住。傍ら淑德女學校に國語漢文を教授す。歌風萬葉調たり。短歌寫生に於ける鍛錬道を唱へて事あり。太田水穗との合著「山上湖上」の他、「馬鈴薯の花」「切火」「氷魚」「太虛集」「十年」「赤彦童謠集」「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及び其批評」「柿蔭集」等の著あり。大正十五年信濃柿蔭山房にて歿す。

齋藤茂吉　明治十五年七月二十七日山形縣南村山郡堀田村金瓶に生る。二十九年上京、齋藤紀一に養はれ(實姓守谷)、一高を經て東京帝大醫科を卒業。大正六年長崎醫專教授に任ぜられ、十年獨墺に留學、十四年歸朝。現在青山腦病院長たり。醫學博士。日露戰役の交、子規の「竹の里歌」を讀みて作歌の志あり、ついで左千夫の門に入り、「アララギ」發刊と同時に同人となり現在に及ぶ。歌集「赤光」「あらたま」「朝の螢」等の他、評論集「童馬漫語」「金槐集私鈔」「良寛歌集私鈔」「短歌寫生の說」その他の著あり。

中村憲吉　明治二十二年一月二十五日、廣島縣雙三郡布野村上布野に生る。大正四年東京帝大法科卒業。十一年大阪毎日に入り、十五年退社、歸村して家業の酒造を相續す。短歌は七高在學中堀內卓造の誘導にて伊藤左千夫に師事、明治四十一年「日本新聞」の募集歌に應じ初めて「竹」の歌數種を作る。「アララギ」發刊と共に同人となり、今日に至る。島木赤彦との合著「馬鈴薯の花」(大正二年)以後、「林泉集」(九年)、「しがらみ」(十三年)等の歌集の他、未刊の短歌約七百首あり。

土屋文明　明治二十四年一月二十一日、群馬縣群馬郡上郊村保渡田に生る。四十一年「アカネ」に歌を投ず。四十二年、村上成之の紹介により上京、伊藤左千夫の家に寄食、その庇護の下に一高を經て大正五年東京帝大哲學科卒業。七年信州諏訪高女教諭、次いで校長となり、後松本高女校長に轉じ、十三年木曾中學校長に遷され、辭して上京、法政大學豫科教師となり今日に及ぶ。大正五年以來「アララギ」の選者たり。歌集「ふゆくさ」(十四年)の著あり。

平福百穗　明治十年十二月、秋田縣横手町に生る。川端玉章に師事し、三十二年東京美術學校選科を卒業。三十五年のころ伊藤左千夫と知り、その選を經て「馬醉木」に歌を發表。「アララギ」發刊と共にその同人となり、現在に及ぶ。帝國美術院會員。歌集「寒竹」(昭和二年)の著あり。

土田耕平　明治二十八年六月一日信州諏訪町大和に生る。四十五年島木赤彦に歌を學ぶ。爾後「アララギ」の一員として今日に至る。

藤澤古實　明治三十年二月、長野縣上伊那郡箕輪村に生る。十八歲、出京、島木赤彦の門に入り「アララギ」發行所に起居、大正十二年頃より「アララギ」選者に加はる。東京美術學校彫刻科卒業、昭和三年以來「アララギ」選歌自作歌發表を中絶す。「國原」「赤彦遺言」等の編著あり。

結城哀草果(光三郎)　明治二十六年十月十三日、山形市下條町に生る。原姓黑沼。結城家に養はれ、農耕の傍ら獨學に勵む。大正三年二月「アララギ」會員となり齋藤茂吉に師事、十五年以後「アララギ」選歌の一部を擔當し、萬葉輪講に加

はる。歌集『山麓』(昭和四年七月)の著あり。

竹尾忠吉 明治三十年七月十九日、山形市に生る。中學五年の頃、「アララギ」に入會し短歌を投稿して後、歌より遠ざかること約三年、慶應義塾豫科二年頃より再び作歌に志し、島木赤彦に師事す。千代田生命保險相互會社員。

高田浪吉 明治三十一年五月東京隅田川のほとりに生る。少年時代主として講義錄で勉强、後松倉米吉と知り「アララギ」へ入會して今日に至る。歌集『川波』の著あり。

今井邦子 明治二十三年五月三十一日德島市に生る。十七歲「女子文壇」に詩を投じ、二十歲河井醉茗の門に入り、四十三年「中央新聞」記者、四十四年今井健彦に嫁ぐ。大正二年島木赤彦に師事、「アララギ」會員となる。隨筆集『姿見日記』(大正六年)、歌集『片々』(三年)、歌集『光を慕ひつゝ』(五年)あり。

久保田不二子 明治十九年長野縣下諏訪町高木に生る。三十三年下諏訪高等小學校卒業。三十五年久保田俊彦(島木赤彦)に嫁ぎ三男二女あり。四十年「アララギ」に入會、作歌を發表し今日に及ぶ。大正八年生母を、十五年夫俊彦を喪ふ。

釋　迢空(折口信夫) 明治二十年二月、大阪府西成郡木津村(現在の大阪市浪速區一丁目)に生る。四十三年國學院大學卒業。翌年大阪今宮中學囑託となる。大正三年上京、金澤庄三郎の『中學校用國語教科書』の編纂に從事。六年「アララギ」同人。七年、『神奈川縣足柄下郡史』編纂を囑託せられ、又「土俗と傳說」を主幹す。八年國學院大學講師、後、教授となる。十三年「日光」同人。昭和三年慶應義塾大學教授、兼國學院大學講師。歌集『海やまのあひだ』の他、『口譯萬葉集』三卷、『萬葉辭典』及『古代研究』二部三卷(昭和四年)の著あり。

横山　重 明治二十九年、長野縣東筑摩郡片丘村に生る。慶應義塾大學文學部英文科出身。明治四十四年、島木赤彦に就いて歌を學び、大正八年まで引續き「アララギ」に發表。以後歌をつくらず。現在慶應義塾教員たり。

由利貞三 明治二十七年、秋田縣に生る。志願兵として海軍に入り後海軍屬より雜誌記者等を經て今日に及ぶ。歌は釋迢空に師事す。

杉浦翠子 明治二十四年五月生。杉浦非水夫人。大正五年より短歌を齋藤茂吉に學び、十年以後獨行研讃す。又國文學を折口信夫に學ぶ。歌集『藤浪』『みどりの眉』『朝の呼吸』の他、長篇戲曲『かなしき歌人の群』あり。「香蘭」同人。

古泉千樫(幾太郎) 明治十九年九月二十六日千葉縣安房郡吉尾村に生る。十三四歲の頃より歌作を始め、三十七年夏伊藤左千夫の門に入る。四十一年上京、帝國水難救濟會に奉職。「アララギ」創刊と共にその同人となり、大正十三年「日光」創刊と共にこれに加盟。この年、病を得、翌十四年自選歌集『川のほとり』成り、十五年青垣會を起す。昭和二年八月十一日逝く。『竹の里歌話』、『竹の里歌全集』、『長塚節選集』の編著の他、遺稿歌集『屋上の土』『青牛集』(近刊)及び遺稿歌論歌話隨筆集『隨緣鈔』等がある。

並木秋人(本名、三島一) 明治二十六年六月二十六日福島縣安達郡石井村平石に生る。「詩歌」會員、「アララギ」會員、「風景」同人を經て、大正十年七月「常春」を、昭和三年八月「ひこばえ」を創刊。歌集『巢藁の卵』『穗明』『楢の秋』の他、「常春第一選集」『現代短歌表現辭典』の編著あり。

大熊長次郎 明治三十四年六月六日、武藏八王子市に生る。十四歲初めて歌を作り、十七歲『萬葉集』を讀む。古泉千樫の門に入り、青垣會を結び、千樫歿後同志と共に「青垣」を發刊、今日に及ぶ。歌集『蘭奢待』の他、未刊に『夏實集』あり。

三ケ島葭子 明治十九年八月七日、埼玉縣入間郡三ケ島村に生る。埼玉女子師範出身。四十二年與謝野鐵幹夫妻に師事。後、「アララギ」に入り古泉千樫に師事、青垣會に屬せり。舊「日光」同人。昭和二年三月二十六日逝く。歌集『吾

木舍」あり。

石原　純　明治十四年一月十五日東京本郷に生る。東京帝大理科卒業。三十六年頃より短歌を作り、日本新聞に投稿す。「馬醉木」發刊以來、同誌選歌欄に投稿、引續き左千夫に師事す。「アララギ」の發刊に際し之に加はり、爾後大正十年に至る。十二年、歌集『靉日』を公けにす。その頃より、古典的形式による短歌作に對して漸く不滿を感じ、現代語法を用ひると共に韻律形式を自由にせる作品を試み、現に同人と共に「三角洲」を刊行して發表機關となす。

原　阿佐緒　明治二十一年六月二十一日宮城縣黑川郡宮床村に生る。宮城縣立高女中途退學。四十二年頃より短歌に專心し、與謝野夫妻に師事。大正四年頃より齋藤茂吉、島木赤彦に學び、大正十年に及ぶ。歌集『涙痕』(大正二年)、歌集『白木槿』(五年)、歌集『死を見つめて』(十年)、歌集『うす雲』(昭三年)等の他、「阿佐緒抒情歌集」の近著あり。

三井甲之　明治十六年山梨縣中巨摩郡松島村に生る。四十年東大國文科卒業。四十一年二月、根岸短歌會を代表して「アカネ」を發刊、後「人生と表現」と改題。これ今日の「原理日本」「青人草」の前身にして、「しきしまのみち會」の源流なり。又それと共に「日本及日本人」に選歌を發表し、論文を寄稿し、連續二十年今日に及ぶ。歌集『消なば消ぬがに』(四十一年)、詩集『祖國禮拜』(昭和二年)、『明治天皇御集研究』(三年)、『ヴント民族心理研究附古事記論』(四年)等の著あり。

花田比露思(五郎)　明治十五年三月十一日、福岡縣朝倉郡安川村に生る。五高を卒へ一年間北米桑港、アラスカに遊び、歸りて京都帝大法科に入る。卒業後「大阪朝日」「大正日々」「讀賣」等に勤め、目下大阪商科大學學生監兼教授たり。歌は正岡子規の遺風を慕ひ、著書に歌集『さんげ』の他『萬葉集私解』あり。「あけび」主宰。

安江不空　舊日本美術院研究部員として、岡倉天心、橋本雅邦等の指導を受く。かつて根岸短歌會創始頃の同人たり。現今は香取秀眞、寒川鼠骨等の「子規庵歌會」に關係あり、累年の詠歌蓄積せるも、未だ刊行せしことなし。

依田秋圃　明治十八年一月八日東京市深川區佐賀町に生る。三十九年東大林學實科卒業。初め歌を「馬醉木」「アカネ」初期「アララギ」に、小說寫生文を「ホトトギス」に掲ぐ。大正十年「歌集日本」を同人と創刊。『林間歌集』(大正四年三月)、文集『山と人とを想ひて』(十二年九月)、文集『山にて聞いた話』(昭和四年一月)等の著あり。現「あけび」「山林」選者。

宗　不旱(耕一郎)　明治十七年五月十四日熊本縣鹿本郡來民町に生る。園工。歌集『[illegible]』あり。

佐佐木信綱　明治五年六月三日、歌人佐佐木弘綱の長男として、伊勢鈴鹿郡石藥師村に生る。明治二十一年東京大學古典科卒業。二十七八年の交、歌壇に革新の機運興るや、その一員として力を盡し、「心の花」を主宰して、明治三十一年より現今にいたる。一方、明治三十八年以來、東京帝國大學に和歌史を講じ、今日に及べり。明治四十四年文學博士の學位を、大正六年帝國學士院より恩賜賞を受く。歌集『思草』『新月』『常磐木』『豐旗雲』等の他、『日本歌學史』『和歌史の研究』等。著作多し。

石榑千亦　明治二十年八月二十六日、愛媛縣新居郡橘村横井良三郎の二男として生れ、明治二十二年上京、帝國水難救濟會創立に參與し、爾後現今に至る。目下同會常務理事たり。明治二十六年佐佐木信綱博士に歌を學ぶ。二十八年石榑利八に養はれ、家を繼ぐ。明治三十一年「心の花」を創刊、編輯發行の任に當り今日に及ぶ。『潮鳴』『鷗』の二歌集あり。

川田　順　明治十五年一月十五日東京下谷三味線堀に生る。父は文學博士川田甕江。帝大英文科に入り法科に轉じ四十年卒業。中學初級の時竹柏園に入り、爾來「心の花」同人たり。大

學時代「小山内薫等と「七人」を發行せり。大正七年窪田空穂を知るに及び歌風に變動を來す。十三年、北原白秋、前田夕暮等と「日光」を創刊す。『陽炎』『伎藝天』『山海經』の三歌集あり。

木下利玄 明治十九年一月一日、備中足守町に生れ、五歲、子爵木下利恭の養嗣子となり、東京に移る。十三歲、竹柏園の門に入り、二十五歲、白樺同人となる。二十六歲東京帝大文科卒業。大正十四年二月十五日、四十歲にして歿す。『銀』『紅玉』『一路』『紅玉改訂本』『立春』『木下利玄全集』の他、遺稿『李青集』あり。

印東昌綱 明治十年九月、伊勢鈴鹿郡石藥師に佐佐木弘綱の次男として生る。幼より父の教を受け、夙く國語傳習所に學ぶ。明治三十六年、『礎馴松』を、大正十一年歌集『かへりみて』を刊行す。楓園と號し、歌及書道を教ふ。

三浦守治 安政五年五月十一日磐城三春在平澤に生る。明治十四年東大醫學部卒業。十五年獨逸に赴き、ベルリン大學に學び、歸朝後醫科大學教授、三十四年醫學博士の學位を、大正三年名譽教授の稱號をうく。五年二月二日歿す。歌集『移岳集』の著あり。

新井洸 明治十六年十月九日、東京日本橋に生る。竹柏會の同人となり、大正五年、『微明』を刊行す。帝國水難救濟會に勤務し、大正十四年十二月二十三日歿す。

齋藤瀏 信州松本の人。三宅逸平次の男にして、齋藤其軒に養はる。陸軍幼年學校に入り、日露の役に出征、凱旋後陸軍大學に入り、旭川、久留米等に勤務、近く濟南に出動せり。陸軍少將。歌集『曠野』(十五年)、歌集『霧華』の著あり。

下村海南(宏) 明治八年五月十一日和歌山市鷺[illegible]町に生る。一歌よみの父の子として文書に親しみながら歌に入る機縁うすく、年四十一歲聖路加病院の一室に仰臥し、徒然のあまり初めて數十首を作る。即ち佐佐木博士の叱正を求め、以來歌悅に浸ること十有五年今日に及ぶ。」といふ。歌集『芭蕉の葉蔭』、歌集『天地』、『歐洲より故國へ』その他の著あり。

大塚楠緒子 東京控訴院長大塚正男の長女にして、お茶の水高等女學校を卒業し、後、文學博士保治の夫人となる。歌を竹柏園に、畫を橋本雅邦に學び、小說作家としては、『露』『晴小袖』等の作あり。また長詩をよくす。明治四十三年十一月九日世を去りぬ。年三十六。

橘糸重子 伊勢龜山の藩士橘氏の女、東京音樂學校を卒業し、母校に教授たること多年。現に講師たり。歌を竹柏園に學びて名あり。

九條武子 本願寺明如上人の女にして、九條良致男に嫁ぎ、外遊より歸りて、獨居十年、文藝に親しみ、大震災後社會事業に盡瘁せり。歌集『金鈴』『薰染』及び隨筆『無憂華』あり。昭和三年二月七日歿す。年四十二。

片山廣子 明治十一年東京麻布に生る。曾て米國領事たりし吉田氏の女にして、故日本銀行理事片山貞次郎の夫人たり。東京英和女學校出身。歌を佐佐木信綱の門に學び、歌集『翡翠』(大正五年)の著あり。筆名を松村みね子といひ、外國文學、特に愛蘭文學の飜譯多し。

柳原燁子 明治十八年十月十五日伯爵柳原前光次女として生る。十歲、北小路隨光の養女となる、十四歲、華族女學校に入學。二十一歲北小路家を離緣して實家に歸り、麻布英和女學校に入學。二十七歲、九州伊藤氏に嫁し、三十七歲、伊藤氏と離婚す。『踏繪』、『幻の華』、『几帳のかげ』等の歌集あり。

松本初子 大阪朝日新聞社創設者の一人たりし松本幹一の女。奈良に生れ、大阪に住み、東京に移る。竹柏會の同人にして、艷麗なる江戸趣味の作風をもつ。歌集『藤むすめ』(大正三年)あり。

現代俳句集

序

戰國時代の末葉、連歌やうやく圓熟を來し、外格式が重んぜられ、内又新意の之れに加ふる餘地が見出せなくなつた時、其の發句十七字を以て一の完き思想表現の形式となす企てが山崎宗鑑、荒木田守武等によつて試みらるゝに至つた。これ俳諧の濫觴である。次いで松永貞德、貞德派を成し、西山宗因、談林派を起し、上島鬼貫、伊丹派を成す等、いよ／＼盛觀を來し、松尾芭蕉出づるに及んで遂に文學としての十分なる存在價値を持ち得る迄に高揚された。その後蕉門の十哲あり、天明に至つて俊英谷口蕪村の出づるあり、俳諧は益圓熟し、普遍化せられ、完全に平民文學としての特質を發揮するに至つた。然しながら、蕪村以後蕪村なく、徒らに多くの宗匠を擁して、遂に明治の盛代を迎へた。

明治開化期に於ける外國文化の輸入は、一面無批判、無制限なる歐化主義に徹底せしめると同時に、他面純粹なる日本文化への翹望を胚胎せしめた。俳諧亦此の風潮に激せられて、早くも明治二十六年には正岡子規を中心とする所謂日本派が新聞「日本」に、雜誌「俳諧」に、その革新の第一聲を擧げた。續いて二十七年には筑波會興り、二十八年には秋聲會が組織され、又、地方俳句會の續々として起るあつて、所謂新派の革新運動は靡然として擴充され、着々成功の道をたどつた。其の後數十年、新興各派中、殊に日本派は内部に多くの專門的俳人を擁して益發展し、高濱虛子の居然として「ホトトギス」を守るあり、河東碧梧桐の新傾向を唱へて「三昧」に據るあり、其の他多くの尖鋭はおのおの其の俳風を持して對立した。而も尚正風俳人の數は、全國に尠しとせぬ。今や俳壇の視野は、餘りにも擴大せられ複雜化せられて、一見雜然たる觀を呈して居る。

此時に當り俳諧をより正しく批判し、より良く味得する爲には、少くとも明治大正の俳諧史を知り、重要なる各派俳人の代表作を再吟味するを要する。

「現代俳句集」の編纂に當つては實に如上の目的に添ふ可く意圖し、努力した。

時代と環境に生きる俳人無しには、俳句は存在しない。如何なる句も之を完全に理解するには、其の作者の時代と環境とを知悉する事が必要である。此の意味に於いて、本集は先づ類題句集の型を破つて個人を主とし、照影を掲ぐると共に、略傳を附して其の人を知るに便した。

句の選擇は代表作を網羅して遺憾なきため、現存俳人にあつては自選を乞ひ、故人にあつては最も良き理解者と信ずる諸家を全般に求めてその嚴選を乞うた。又略傳は各自記を乞うたが編輯の都合上加除按配した。

人選は最も注意し、宗派的な偏狹さを超越して嚴正に公平に、史的觀點に立脚した。配列は大體を各派別とし、年代を從として系統づけた。然しながら其の尺度的正確は期すべく不可能である。

卷末に添へた「明治大正俳諧史概觀」は高濱虛子氏が特に本集の爲に執筆せられた貴重なる文獻である。

一生に佳句十を遺す者は名匠であると先哲は言つた。本集收むる所各家僅に數十句に過ぎぬが、なほ且つ明治大正を通じての代表的俳人の傑作を悉く網羅し盡したと云つても過言ではあるまい。最も知縮され、最も洗練せられた文學である俳諧の百七十家の、長年月に亙つて心血を注いだ玉作のみを收めた本集は、燦然玉の如きものであらう事を信じて疑はぬ。

月の本為山

春

あふれ井もけさ若水の釣瓶哉
なの花の上をゆききや土堤の人
連翹や突きあげ窓の雨はじき
烏賊干した簀子や門の桃の花
山焼も消えて巣に鳴く鼠かな
春の夜の屏風にかけし袴哉
青柳やよきほどへだつさらし臼
花に人明けはなれ行く堤かな
鳥の巣の見ゆる早瀬や下り舟

夏

蘆間ゆくふね底するや青あらし

湯島天神
石坂の石照りつけて蟬のこゑ
火串さす道も通ふや堂籠り
川風に痩脛さらす御祓かな
こぼるゝと見しは影なり藤の花
舟あがる番所のうらの青田哉
雨こぼすひとひら雲や蓮の上

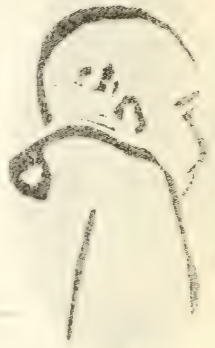
秋

蕣や野風をよける垣まどひ
やり水にくつろぐ庭や菊の花
朝顔やそれさへ賣りて世のたつき
香をとめし露のしとりや藤袴

箕面山
峯のみちひとすぢ中に紅葉哉
むら雨や水田々々の月に雁
霜はやき尼が垣ねや梅もどき
鞍壺にふはつく笠や秋の風

冬

白壁を月の照らすや鴨の聲
時雨しも忘るゝ磯の入日かな
焚埃り拂うては又置頭巾

越後國振
山に雪牛の寐わらも仕替へけり
穴藏の松脂くさしえびす講
干上りし岸の筏や霜けぶり

佳峰園等栽

春

なほあまりある初空や神路山

一月と見るとおもふや松に雪

ふいと出て見る折々の霞かな

草に見るまでやまことの春の風

室の八島

此花の香に澄みわたるけぶりかな

見る中に睦月のものや鶯番ひ

のどかさのあまりを寒し日和山

さし花に穂麥もよしや初松魚

夏

腰扇かいつくろうて牡丹かな

魚賣の又かけりこむ若葉かな

峰の松白眼みて立てり田螺とり

又ひとつ見かけし家やかんこ鳥

すゞしさや鯉は洗ひに銀屏風

伐るはずの榎見やりて蚊遣哉

秋

魚虎鳥の筧に來たりけさの秋

朝かげや秋にうつりし江の光り

初秋の人通りけり濱びさし

蕣やけさは柳にとりついて

宿下りのあるじするなり生身魂

鬼灯の盜人だいて送りけり

蜩や午睡こらへし氣のかるみ

澁鮎やおもひまうけし山旅籠

松杉はしづかな木なり秋の水

冬

明の聲一々冴ゆる千鳥かな

寒菊のきよき匂ひもことし哉

七日見る門田の鶴も小春かな

浮寐鳥見て居る雪のからす哉

此月にたゞにやはとや啼く千鳥

凩やはみ出てあかき藪の荊

能く人の來る日なりけり煤はらひ

小築庵春湖

春

とし立つや結びに長き箱の紐

正月や藪の小家の丸行燈

呼つぎの元剪るおとやはな鋏

菜の花に入らんとするやはしり波

面箱も芝のしめりや薪能

落ち來るや豆の粉めしに蝶一つ

鍬少し入れてある田のよかん哉

夏

魚は藻の下やみ持ちて雲のみね

風爐の灰直すやがてほとゝぎす

大雄山に宿して環溪禪師に呈し奉る

米搗に慧能居るべき茂りかな

夜坐獨吟

ぬけ落ちる瓦のおとや五月雨

白はえや夜すがら焼きし鹽のうへ

炎天や額の見らるゝ船の火夫

奥ありて水鳴る庭やわか楓

我住む佐賀町に老大なる一木あり

卯の花の後の月夜や藪椿

秋

はつ秋や草扱ひし縁のぬれ

精靈の出舟そろひぬ草のかぜ

花びらにつゝむもあれや蓮の飯

迎火やもろき麻殼の一けぶり

茶けぶりをあふぎ返すや桐一葉

初あらし先づ落ち來るや團扇店

千僧や供養の膳に置扇

戸をひけば行燈と我と秋の暮

冬

山茶花や水屋の水に影のさす

十月や腰張かれし居間の壁

牛はよもしらじ霜ふむ乳配り

雪空の日や鳥の子紙の薄ぐもり

凩にふかるゝ額や木の葉猿

榮耀着のひとつ帋衣や名古屋染

節分

身のうちの鬼もおどろけ年の豆

老鼠堂永機

春

一月も三日過ぎけり樹にからす

松過の朝のかるみやあぶり海苔

やぶいりの雨詠め居る戸口かな

汽車のうちに紙入を落し申して
ふところに殘るもの只梅の塵

春寒しすてゝ十日のたまご殼

灯を出せば朧動くや水の上

流れ海苔藻魚の鰭にかゝりけり

切落す岸ほろ〱と夕がすみ

鴨の毛の流れとまるや芹の中

夕櫻惜まれぬ身に降りかゝる

夏

笠の端のさみだれ重き瞼かな

下駄提げて茨跨ぐや舟上り

天地同根唯一指
灌佛や乳をひねるのはどの御手

夕風や松葉吹きちるけしの上

菓子盆に拾ひそへたる牡丹哉

延寶調
卯の花の雪轉をかゝぐる女あり

秋

鰻裂くはしりの先や蚯蚓鳴く

動く葉はうごきながらや暮の露

吼え止みて流るゝ牛や秋の水

馬木戸のひるの縞や栗の毬

初汐のとゞくしとりや石の腹

簗作る瀬を放れぬや川烏

冬

時雨來よ竹のあみ戸の青きうち

風一段雪霰を打つ梢かな

錠かたき門にし立てば木の葉降る

冬枯や沼をたつきの家二軒

初雪や青きより見し窓の蔦

契題
鐵瓶を袖の火のしや夜の雪

八幡
冬ざれや入日のうへの男山

水仙の花の寒さやあら疊

老鼠堂機一

歳旦

蓬莱や酒は不老の薬にて

望みある月日ばかりや初暦

眞直な道さへ行けば恵方かな

とし玉に鉢巻とるや渡し守

大服や茶釜の色も若みどり

草庵の正月易し鰤の骨

春季

梅白し木の間〱の星明り

柳見るそとは明けたり雨の窓

鶯に笑はれやせむ耳袋

佛骨を嘲り顔の蛙かな

花盛り世にかくれ住む里もなし

夜あらしやけさ花も夢春も夢

夏季

はつ夏の凝りほどよし風爐の灰

時鳥闇にも聲は見ゆるかな

牡丹咲いてあたりに花のなき如し

艸の戸や有なしの日は常の事

からき世を簾一重の安居かな

夏氷金剛石も何のその

秋季

秋來しと思ふや朝の茶一服

秋暑き色に蜀葵の夕日かな

嬉しさは眼鏡もいらぬ月見哉

衰へや露の音にも幾寐覺

心には見えて明るし雨の月

山里の朝三暮四やこぼれ栗

冬季

青空の旋相も嬉しはつ時雨

冬籠り我れと遊ぶはこゝろかな

達磨忌やから紅の壁の蔦

身のほども反古に等しき紙衣哉

埋火や夢は昔を見るばかり

薪あり米あり積れ〱雪

其角堂永湖

初鶏や僅かに見うる霜明り

人日や手に觸れそめし薄氷

子の顔のよくも汚れぬ小豆粥

數人の何かな語る眞顔哉

ゆきかひや鳥追一人浮世めく

春立つや酒をふくみし朝心

初午の灯を三閑の我家かな

絲瓜種吾にふさはしと蒔きにけり

春の灯に目さむれば人の家たりし

起き〳〵や雌雄の間を初櫻

兎に角の蛙聞ゆる泊りかな

春風や遙かの丘の人の聲

酒の香の夜を憧憬るゝ暑さ哉

一煎の茶に甦へる晝寢哉

かく迄に打たれて蛇の動きけり

雨到る夏野の草や膝を沒す

寒食や白さ尊き僧の髭

とかくして酒の軒や郭公

夜寒さや筑波の町の灯が見ゆる

御佛の愛づ花きらん露の中

定家忌や菊燈檠づる蟲の影

蛬にさくる踵の草履哉

秋の灯に箔蝶落ちし硯かな

寝ずあれば出水事なく明けにけり

冬凪の草青きあり丘なだら

咲き初めし山茶花白き火桶哉

乾鮭をきらんとし今日も暮れにけり

子供等と狭くいねたる冬夜哉

眞夜中の寄興かりて歩きけり

何なさで机に寄りぬ庭の冬

不白軒梅年

春

歳旦

年たつや我歯にかたきにし肴

菜の花に汚れながらや雀の子

うごきては大空みせる柳かな

寒食や柳績みに日をくらす

紅梅や水の月夜も今宵より

おとろへや櫻ちる日も置火燵

春の餘波そば掻に事濟せけり

夏

初午やけさ代かへる小田の雁

ひとつゆく螢に草のあらし哉

商人もありて根岸の柳かな

高良山眺望

涼しさも一折づつや屛風山

勧農局魚養場に函館より種を取寄せ鮭の飼付を見る

若葉からわかばの雨の雫かな

鮭育つ水に藍なす若葉かな

梅若六郎月並能見物

帷子や棧敷々々の紋盡

青あらしふくや小溝の流れ苗

秋

今朝秋の風ぞ吹くなり簾越し

ともし灯も鎔けき數の燈籠かな

棚經に露のめぐみや捻り錢

かたはらに蚊帳干してある紫苑哉

ふとさむる暑さに秋を知る日哉

淋しさに醪くみけり後の雛

人の住むけぶりも見えて秋の山

白露の深みも見たり星明り

冬

木がらしや追ひかけて行くもどり馬

能き月と人に聞きけり冬ごもり

降りやみて薄日さすなり雪の上

遲田刈る人のうしろの小春かな

たそがれや又ひとり行く雪の人

淺漬の切ぐち白しすゝはらひ

淺草

年の市荷置く隙もなかりけり

雪中庵雀志

春

初すみれ野に植ゑて戻らばや
鶯にある夜まさりて初蛙
鶯のさゝにもどりし雪解かな
騒がしき春はきのふや八重櫻
幾とせの簪も亂さず昔雛
いさゝかの雨かしましや花の時
梅が香は梅におされて春の月
賓來子をいたむ
谷の戸も覗かずに獅子の雪解かな
獅子の兒の眠こそぐる胡蝶かな

夏

朝冷え四月はいつもこんな物
舟乗の小唄にくらし青嵐
町中や蚊を逃げて來た夜の人
見て頼て葉に心づく牡丹かな
ほとゝぎす此大空に音のあまる
蟬時雨比叡にも風のなき日哉
善盡し美盡しそして白牡丹

秋

名月やながるゝ露をまのあたり
見るよりも仰ぐものなりけふの月
垣間見の鼻をこそぐる木槿哉
よし原に啼いても淋しきりぐ〵す
聾者にも耳の騒や蟲撰
夕顔の宿あれ〱て夜寒かな
草刈らぬ怠りもよし蟲の聲
名月や芒はなくも鉢の中
露の戸や大門打つて一昔

冬

鶏がねも今は恨みず反古紙帳
初雪やしぐれにつゞくしをり物
かたまつて朝を受取る千鳥哉
水仙や花には安房のあたゝかみ
戀といふ曲者さりて雪寒し

雪中庵宇貫

旭にかざす瑠璃の翅や初鴉

大人びし影や二日の福壽草

一粒は梅の苦味よ瓢れ萢煎

橙や轉げぬ丸みのおのづから

曉の星や孕みてうめの花

やぶの鳥何語るやら暖かし

よき絲のさらりと解けし柳かな

鶯もすがた見せけり紀元節

やごとなき寵顧ずはるの猫

湖もおなじ由來や一夜酒

有明に一入ふかし夏の露

芍藥を尻目に語る鸚鵡かな

業ものは無反りなりけり初がつを

之はなほ武をもて立てよ菖蒲太刀

恙なき我影揃ふしみづかな

古釘のあるにまかせて宵飾

七夕や露知りそめし朝ごころ

桔梗やおもひぞ出づる花菫

燗風爐の火も皆にする月見哉

經筒のうつろに蟲の啼く夜哉

白菊やくらべ物には富士の雪

柿一顆詩箋の風を押へけり

白露や茜さしたる峯の雲

龍膽やくさむらを縫ふ水の音

澄渡る磬にうなづく芭蕉かな

木がらしや皆凋る江のかもめ

邪魔せねば蠅も友なる冬籠

さや／＼と石に聲あり散紅葉

花や有る木立まもれる冬霞

皂角子や氷の上に反り返る

雪中庵東枝

うぐひすに移る心のゆとり哉

清きもの雪の中なる探梅かな

夜は露の重みに堪へて花の房

潤ひの石にも見ゆれ菜種入梅

囀や一羽はなれてみそさゞい

暮れなんとして行々子の入江哉

乙花のすこし褪せたりかきつばた

蟬花に灌ぐや椎の一雫

薬玉や夜の静かさを揺れる音

思ふさま雨吸ふ樹々や時鳥

富士を呑み雲を吐き蛙いそがしや

梅の花白きはことにいさぎよし

霧截つて翡翠掠めきりにけり

紅白に蓮も咲かせて浮世寺

町道やきびの穂明り露時雨

花と氣のつかで過ぎけり我が紅

月と我れ外に物なき天地哉

稲の穂のへと続づつの重み哉

秋の暮傷かぬ身の置き處

朝顔に遅かりし年を思ひけり

宵々を別莊の子の花火かな

時雨々々我が腸も染めよかし

椋鳥は知らぬ納豆茶漬かな

塔かけて稍僅かに冬日かな

夜や闇やさくり〱と霜を踏む

こぼるゝは山茶花なりし筧かな

旋風の渦巻き起す吹雪かな

来るふりを見せて千鳥の沖の石

梅もそのぬくみに笑ふ湯桶哉

奥宿や年經る梅を偲ぶすま

春秋庵幹雄

眞直は太平洋や初日の出

國の春立ちけり富士の高嶺より

月の出て見れば地を這ふ霞哉

梅咲きてふるりとなりし月日哉

春の草昨日は今日のむかし哉

花に來ても只騷がしき雀かな

戎さしのよ告鶯の栖かな

留守の戸に幟立て置く在所かな

夏の日の夕風したり日本橋

涼しさも三千階や羽黒山

手も足も隙のあきけり蚊帳の中

里深う見ゆる蚊遣の煙かな

夏山のあけぼの草や百合の花

雲に路あとこそ見えね不如歸

鐘つけば不圖歸り行く鹿の子哉

白萩も野萩も交る踊かな

眞くらな里から揚る花火かな

初月や蘆の一穗に入りかゝる

名月は空にも塒のなき夜かな

砧聞く氣から眠氣のさしにけり

夜は草の上に聞えつ蟲の聲

行き違ふ時の速さや渡り鳥

末枯るゝ頃に花咲く嫁菜哉

小春日や雪の遠山みな見ゆる

來る筈のやうに來るなり小夜時雨

暫時小笠の中のあられ哉

其影のさゝぬ國なし枯尾花　芭蕉翁

浮寢鳥吹寄せられし景色かな

何もなき心になりぬ神路山

吉野に一憩しや花の吉野山

春秋庵準一

言はで知る神の御國や初日出

粟稗の身にいたゞくや初み空

兵強き本もこれなり芋の頭

荒小田をあら鋤きかへし春淺し

二三分は白きさかりや梅の花

うたかひは人間にあり初蛙

宮が小島

見る我にもの云ひとうぞ夕櫻

青麥や虎放ちたる跡もなき

撫子の寄添うて咲く巖かな

松に立つ白鷺城や青あらし

千松島涼し生島足らし島

渓越しや温泉宿を襲ふ灯取蟲

牧小屋に積れかゝるや雲の峰

古き香に倚さみたまへ法隆寺

華嚴

大瀧や虹をつらぬく岩燕

秋の風眼涼しく成りにけり

蜻蛉の翅風のみなり夕日和

蓑に吹く風を命の案山子哉

箸迄も焚きて戻るや紅葉狩

百姓の大構へなり百舌鳥の聲

天地の默止くらべや星月夜

思出の繊手眺むる火桶かな

風待ちて居たやうに散る木の葉哉

驚かす鳥一羽なし眠る山

歌反古に魂こもる紙衣かな

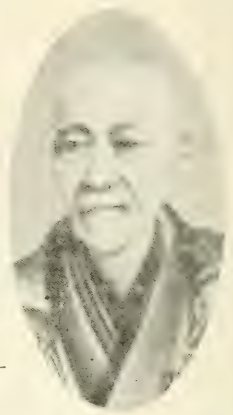
黒潮にひらひら白き千鳥哉

寒月や汽車に背向の村長き

戻り路も脇眼はふらず寒参り

夜稼ぐ顔さへ見せず浮寝鳥

榛名山

岩とこそ世を祈まつれ神の秋

花の本芹舎

春

川々のみなながれこむ霞かな
柳見て這入ればとむし雲雀だはら
夕やなぎ雨の向ふと成りにけり
畑打のそこに居りけり塀の窓
近よれば畑打あちら向きにけり
路傍
柳見て居たれば馬士の叱りけり
いねとてか居よとか花の散りかゝる

夏

麦秋やむしろ踏みこむ溝の上
うら道や茂りのぞけば窓ひとつ
石橋や竹の子時のこぼれ土
追立てゝめしくふ舟や行々子
田家
ふかれ来て螢の辷るはしらかな
蚊遣火や藪の空ゆく夕がらす
門すゞみ鼠を追ひに這入りけり

秋

村口や寄つて見て居る天の河
しら露や仰向けば又空のいろ
雨間にて
いなづまや小舟おしあふ橋のかけ
みの脱いだ跡のさむさや鹿の聲
秋のくれ柱たゝいて居りにけり
稲づまの下に芋の葉ゆれにけり
おとし水して飛越えて戻りけり
行秋や入日の木の鳥おどし

冬

しぐるゝやまだ土なりの谷の岸
夕かけや刈田の空をちる木の葉
旅中
木がらしやかれ枝落つる篭の上
投込んで小舟のゆれるふとん哉
居すくみてぐるり掃かるゝ火燵哉
舟寒し雪の遠山日のあたる
ゆききみな逃げるやうなる寒さ哉
ひとつ家の背戸のとまりや雪の山

四世 夜雪庵金羅（無事）

春

初夢というたばかりやもの忘

子別れの其方より花に鐘

危判して

巣に在りしことな忘れそ雀の子

金龍山晩鐘

暮告ぐる庵無量のかねや花曇り

藻を冠る蜆かいなかおぼろ影

とこぶしに肉しまりけり東風催ひ

親よりも大きな形ぞからすの子

鉛瘂の鰈うごめくかすみかな

霞みけり大庭一日爽じまる

夏

暁の風や光らむ鶴の聲

夏萩に裸灯重き擬みかな

世は遁れても流行の病ひになれぬもをかし

草の戸は寄らでもの事皐月風邪

空翔る鳥のうつるや鰹の背

青東風に汗する汨磐柱かな

郭公垣穂は雪に撓みけり

先達知らぬ道あらむ雲の峰

甥に示す

石に背突くな若鵜のはやりすぎ

はつ袷鹿も身輕に成る日かな

秋

ものいくは老なくなり迎ひ鉦

蓮葉に心うつせば露の月

船の行く汐のくぼみや海の月

手折るなよ野に置けばこそ女郎花

菊の香や纏にすかき塗り車

蘭の花わざとならざる薫り哉

冬

北海道に赴く錦風子に

腹ふくらして來る雁ぞ待たれける

焚くものに添ふる心や時雨の日

白馬の年寄りけらし炭俵

蘆原や篋啼からの手爾葉鳥

庵安し人の師走を花ばさみ

辭世

見送られ見返る雪の旅出かな

東杵庵萬齋

春

若水やここも萬代八[illegible]流れ
囃すなら薺摘まうぞ茄之丞
初手桶あふひかつらもあらまほし
人の目やならべて見たき男の子
散る迄が花咲くまでが櫻哉
世の中に手放してある柳かな
都には造り木多き柳かな
市中は人にまじはる柳かな
月日にもくつろぎ見えて梅の花

夏

美しき世にして晴れぬ夏の雨
あやにくに鵜匠の妻の美しき
嵐去りの雲靜かなり夏の月
人の世はさつさと更けて夏の月
取持も過ぐれば暑し煽風器

秋

戦ぎ出て萩の紛らす暑さ哉
白蓮の何捨かねてみのるらん
折鶴の白きも露の時雨かな
花に寐し鳥の寒がる紅葉哉
紫陽花や秋にはいつ出て薄浅黄
萩らしう成りけり少し凋れけり
露の味かたらば霜になりぬべし
水も日の霜風めくや紅葉鮒

冬

二百十日庵は屋のあらし哉

いきのびければ

またのぼる露やらいし朝ごころ
庵振も今日はと思ふ時雨哉
大雪やされど馬居に馬も居ず
いろ〳〵に風あしらひ一草枯るゝ
さつと來し時雨みかゝらむ櫓かな

顧言翁手向

わすれては父見に立つや寒椿
寒明や葉さへ花さへ玉つばき

阿心庵雪人

春季

新年の佛法如何梅の花

道の邊の柳に交る根芹哉

山人の飢ゑて拾ふか松の花

梅寒く蜆の眞珠見つけたり

友にせん李は花の癡なるもの

太刀佩きて神の渡るや春の水

人戀しこのめ春雨鄙曇

行春や何懺悔する古御達

夏季

拂拭を勤むる朝やほとゝぎす

人間に名を知らるゝな閑古鳥

菅の雨水鷄の來べき夕べなり

山芭蕉手折らんとすれば雲起る

山寂寞どこに滴る泉かな

夏帽に名利の油流れけり

沈醉の後相引いて納涼かな

秋季

古里や軒端にかゝる天の川

宵闇や燈籠かけたる水の上

今落ちし一葉を渡る鼠かな

底紅に咲くうれしさよ白木槿

一竿に我天地あり秋の風

月ひとつ爭ひ流す早瀬哉

艸の戸や十日の菊に人集め

掛稲や水治りし諏訪の湖

冬季

日は西に川面あかきしぐれ哉

木がらしや竹を畫かば千萬竿

俳諧の腹調へん河豚汁

水鳥やあるかなきかに船の者

曉や氷を渡る鐘の聲

雪二日花なき瓶を愛す哉

冬籠一羊裘を寶かな

正岡子規

新年

元日や枯菊つこる庭のさき

長病の今年もまゐる雑煮哉

病室の煖爐のそばや福壽草

初曾我や團十菊五左團小團

前文略

年玉を並べて置くや枕もと

春

橄欖のほろ／＼落つる二月かな

金州城にて

行春の酒をたまはる陣屋かな

春雨や金箔剥げし粟田御所

鶯の今朝も鳴くなり梅の枝

縁へ出てたま／＼庭を見る日かな

草庵

雪の繪を春もかけたる埃かな

春雨や傘さして見る繪草紙屋

灯くらく蛙きく夜や寫し物

病室

煖爐取りて六疊の間の廣さかな

律院の苔の光りや春の雨

蟇鳴るや上野の鐘のかすむ日に

紅梅の落花をつまむ雛かな

夏

いたつきに名もつきそむる五月雨

蚊をたゝくいそがはしさよ寫し物

夏川や小橋たわゝに水を打つ

汐引いて泥に日の照る暑さ哉

人は皆衣など更へて來りけり

夕立に樹の木多き小村かな

孑孑や松葉の沈む手水鉢

山門に雲をふき込む若葉哉

夕風や白ばらの花皆動く

御門主の女倶したる蓮見かな

僧俗し本堂側の茄子畑

暑くるしく亂れ心や雷をきく

廊に見る腊所の城下の幟かな

送秋山黄之介國行

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く

行水や背中に戰ぐ楡の影

客居庵偶

靈山や虛窟の朝雲起る

單物飄然として郷を出づ

病間

椅子を置くや薔薇に膝の觸るゝ處

穂の白き砂地の麥や汐曇

晝顔の花に乾くや通り雨

三日にして牡丹散りたる句錄かな

和歌にやせ俳句にやせぬ夏男

把栗鼠骨が、昨年我病を慰めたる牡丹今年は咲かずて

三年目に蕾たのもし牡丹の芽

滿園の露日に動く五月晴

一陣の托鉢僧や五月晴

若竹や蚊燻らしむる庭の椅子

椎の木の茂りて見えぬ上野かな

六尺の百合二尺の土塀かな

秋

乞食の錢よむ音の夜さむ哉

町へ來て紅葉ふるふや奈良の鹿

竹緣を團栗走る嵐かな

我袖に來てはね返るいなごかな

鳥啼いて篁にこぼるゝ何の實ぞ

法隆寺茶店

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

團栗の落ちて沈むや山の池

奈良

人形をきざむ小店や菊の花

八月の太白ひくし海の上

草花や露あたゝかに温泉の流れ

書に倦みて燈下に柿をむく半夜

門前に船つなぎけり蓼の花

犬が來て水のむ音の夜寒哉

草庵

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

藪澤の竹も久しや庵の秋

元光院

三十六坊一坊殘る秋の風

蜩や神鳴晴れて又夕日

水車場を閉む小藪や烏瓜

ところ〲菜畑青き稻田かな

冬近く今年は薪を貯へし

追込の小鳥しづまる秋の雨

秋一室拂子の箱の動きけり

病人に八十五度の殘暑哉

母と二人妹を待つ夜寒かな

寢所をかへたる蚊帳の別れかな

病床

伏して見る秋海棠の木末かな

病間に絲瓜の花の落つる音

驚くや夕顔落ちし夜半の音

臥病十年

首あげて折々見るや庭の萩

絶筆三句

絲瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗絲瓜の水も間に合はず

をとゝひの絲瓜の水も取らざりき

冬

湖青し雪の山々鳥かへる

病中

庭の雪見るや厠へ行きもどり

冬ざれや狐も食はぬ小豆飯

行年を母健かに我病めり

狼の數見てさむし白根越

風呂吹や小窓を壓す雪曇

鷄頭を切るにものうし初時雨

いくたびか雪の深さをたづねけり

氷る田や八郎稲荷本願寺

落葉して宿り木青き梢かな

王孫を市にあはれむ師走かな

霜よけの笹に風ふく畑かな

耳蕢の蜂になるまで冬籠

鷄頭の黒きにそゝぐ時雨かな

透き通る氷の中の紅葉かな

山茶花の垣に銀杏の落葉哉

からびたる蠟の鑄型の寒さ哉

釋迦に問うて見たき事あり冬籠

凍筆をホヤにかざして焦しけり

懐爐冷えて上野の闇をもどりけり

煖爐たくや玻璃窓外の風の松

冬の日のあたらずなりし乾飯哉

病牀やおもちや並べて冬籠

室外(病牀口吟)

枯れ盡す絲瓜の棚のつらゝ哉

落葉掻き小枝ひろひて親子かな

内藤鳴雪

陀羅尼品春の日脚の傾きぬ

春雨や祇の宿の白拍子

浅茅生の宿と答へて朧月

暖かやかちん汗かく重の内

指さきで経蔵まはす日永かな

永き日や花の初瀬の堂めぐり

三蔵を重ねて語る日永かな

行春や仏掻き出す灰の中

涅槃絵の下に物縫ふ比丘尼かな

古寺や昼も灯ともす涅槃像

出代の下女も祇王と仏かな

出代のあらき涙や革羽織

出代の涙や膳の向ふづけ

荷車に用乗せて行く彼岸哉

乞食の子も孫もある彼岸かな

古雛の衣や薄き夜の市

大雛の影物凄き灯かな

旅人の汐干見て行く馬上哉

啼過して雲と中洲や二の替

此頃は女畑打ついくさかな

窓下に打つ田の音や石多し

曇る日や深く沈みし種俵

一畑は接木ばかりの暮淋し

蚕棚守る行燈暗し物の本

風船のあまた飛びつゝ一荷かな

暁鶯の詩成つて退る宿直哉

鶯の朝の高音や施薬院

二羽打ちて啼かずなりたる雉子かな

五羽六羽雉子掛けぬ鞍もなかりけり

腹見せて水門落つる蛙かな

夕月や納屋も厩も梅の影

野の梅を折らんとすれば牛の聲

灯ともして夜行く人や梅の中

人戀し夕山櫻黑木賣

花一山紫衣の僧あり稚子あり

茶の花のゆきとまりなり法隆寺

青嵐云ふ師は藥を採り去ると

五月雨の折々わつと野山かな

夏山の大木倒す谺かな

清水ある家の施藥や健胃散

大沼や蘆を離るゝ五月雲

短夜や蓬の上の二十日月

短夜や眞闇の鐵橋中絶えて

短夜の人立たせたる跡始末

客人や[illegible]の簑着て子雁鰹

夏にこもる黑谷邊の小寺かな

花御堂月さすまでに暮れて居る

矢車に朝風強き幟かな

羅を曳くや天女の天津風

帷子の洗ひ晒して主の栞

曝しつゝ讀めぬ書多き子孫かな

雨乞に法運も動かぬ夜空かな

竹婦人瀟湘の雨を聞く夜かな

半身を出して物喰ふ蚊帳かな

買ひ居る風鈴に早や町の風

鮓つけて妹が一夜の馴れ加減

新茶煮てこの綠蔭の石を掃ふ

心太の瀧に片寄る嵐かな

甘酒の命なりける峠かな

時鳥左近の陣の弓の數

時鳥逆付の驛かな

碧梧桐、寒子の二子と野崎行

旅せよと我を吹き起す若葉哉

古關の卯の花吹雪人絶えぬ

古御所の蓬にまじる牡丹哉

大妓小妓起き出でて牡丹日午なり

怠らぬ棒の稽古や百日紅

松浦爲王

日永鳥うたひつゝ巣の工み哉
涅槃會や朱色目あまる太柱
草餅に烙印おすや松の茶屋
連翹に吹かれて遅し菊根分
古枝に病葉青し桃の花
石楠花の上を渡るや尾長猿
日あたりや蜂の下りゐる流しもと
雉子追ふや朱を横筋の狩衣
日傘開く音はつきりと別れ哉

た中のひとり通りや雨の竹
粽食うて鎌倉山の物語
萍や草のなぞへに花の數
やす／＼と芭蕉玉巻く軒端哉
いつまでも青電灯や露時雨
鷹取に路通居るよし初嵐
朝寒のまた一人なる棧敷哉
芒原十日の雲流れけり
瓢箪の大器に心遊ぶかな

狒黙蟲花かと吹きて逆立てり
就中假の世にある放屁蟲
短日の提灯買ふや旅支度
行年のそゞろ心や病起
音寒く壁の中行く鼠かな
爐開や渓に聞ゆる寺の音
掻き立てゝ埋火の色動く哉
一生に十九の包の雑魚寝哉
荒壁のあつくなるまで榾火かな
茶屋の灯を牡蠣船かけて飾る哉
冬の菜に訪はれ草の萠ゆるかな
鞨鼓の遠音神樂や宿下り

峯青嵐

遠まさる初荷囃しや迹を掃く

引幕に妬き名ありぬ初芝居

奈良は鹿の我に親しむ眼麗ら

樹など植ゑて朧めく灯の一廓

行くにつれて松に沈みぬ春の山

野の子喫む草根は甘し百千鳥

紙解けば皆覺めし眼の雛達

入船の春の町とはなりにけり

茶摘に連れし子のいつ去りし午鷄啼く

手繰る凧近づけばはや落ちにけり

晝に遊ぶ日年の如し新茶哉

木枕を我に投げ倚せ蠅の宿

雨終に來らず百合に風暑し

菖蒲湯に傘を高めて髮大事

麥打つや遊びに倦きし子を叱り

生駒澄んで秋近し摩耶六甲も

立たんとして膝の固さよ夜長人

草に飛んで反古濡れ沈む今朝の秋

新涼や芭蕉の影を緣に拭く

鍋釜で借る鴉金秋の風

蒸し籠や湯氣の底なる走り藷

賣る菊に水噴くや灯をかゞやかし

秋の宿灯を强めては又弱め

今朝霜や一羽は嗄れし鷄の聲

梟の影冬木の瘤と月に見し

沙彌二人落葉掃き〳〵相背く

時雨るゝや灯のある舟へ乘り遂へ

灘鳴るを冬の夜辭となりにけり

子のかこと火鉢の母の肩に凭り

參禪の白湯の甘みや冬の雨

渡邊水巴

何の木か穂揃へけり明の春

雑煮待つ間八ツ手に打ちし水凍る

初夢も無く穿く足袋の裏白し

餘寒惜む獨りかも風の音に來たり

木々に觸るゝ手の生き〳〵と朧かな

お涅槃や大風鳴りつゝ素湯の味

月夜蕾水吸ひあぐる椿かな

大雪にとまりたし木の芽盛なる

障子張る妹に花も過ぎにけり

短夜や引汐早き草の月

月明に老ふるへきなし夏の露

書齋

小照の父咳も無き夕立かな

屋根瓦のずれ落ちんとして午寐かな

宵よ月に夕べの花は咲きにけり

蝙蝠の眠れず歩く風雨かな

會釋したき夜明の人よ夏柳

夏木仰げば花をこぼして老いにけり

引く波の音はかへらず秋の暮

うしろから秋風來たり草の中

雲に明けて月夜あとなし秋の風

天漸々焚へたくなりし花野かな

日の出叫ぶ鳥や柿の葉びしよ濡れて

[illegible]

睨るゝやいづこに住むも月の人

郊外に住む事早六年になりぬ

いあはひに枇杷の葉青し秋の空

冬山やどこまで登る郵便夫

大雪や闇明わかず町寐たり

赤い實を嘴に落とす鳥寒う見ゆ

落葉踏むやしばし雀と夕燒けて

白日は我が靈なりし落葉かな

[illegible]夜の灯のところ人住む野山かな

庄司瓦全

春

春曉やかさなり響く二寺の鐘
春の野や匂ひ出でたる宵の月
雁風呂や蜑がつたへて古き鉦
鳥雲に歸る國なき鴉かな
花うてば飛去る蝶の怒りかな
散る花に眉靜かなる尼たち哉
落ち落ちて地に咲くものや花椿
物乞ひの狹むしろ巻くや夕柳

夏

水呑うで飛び去る蜂や日の盛り
梅雨寒や屛風を渡る蝸牛
酒壺に櫓櫂勿觸沖なます
麻刈るや古音かけ行く時鳥
貧乏に親類うとき袷かな
草庵や一升ばかりかたつむり

秋

牡丹剪る心定めて立ちにけり
夕空や秋は悲しき雲の峰
櫂執つて老いし津守や月の秋
腹いたむ夜にも馴れけり露の宿
嵐來る雲のけはひや燈籠吊る
風流男に燕は去にし曲輪かな

草廬

放屁蟲主客の間を這ひ行けり

冬

寒空や白雲光る一ところ
くだら野や賴めて來ぬる灯は娼家
木枯や切れて落ちたる吊忍
綿入や彌陀賴みても老淋し
足袋いたく汚れし妻の起ち居哉
藪深く咲き居る花や十二月
元日や凜冽として松の霜
今朝さめて波濤あとなし寶船
憂きことも去年になり行く懷しや

高濱虚子

早春の庭をめぐりて門を出でず

早春の鎌倉山の椿かな

春寒や砂より出でし松の幹

暮遲し人ちらばりて相寄らず

野を焼いて歸れば燈下母やさし

此の村を出でばやと思ふ畦を焼く

もたれ合ひて倒れずにある雛かな

葛城の神饗はせ青き踏む

踏青や古き石階あるばかり

草摘みに出し萬葉の男かな

競べ馬一騎遊びてはじまらず

春風や闘志いだきて丘に立つ

海に入りて生れかはらう朧月

春雨や少し燃えたる手提灯

さしくれし春雨傘を受取りし

春水や蠢々として菖蒲の芽

我を見てやがて啼きけり春の猫

囀りの高まり終り靜まりぬ

鶯や洞然として晝霞

山下りて人なつかしや夕蛙

蝌蚪の水動きしづまる時もなし

花莚たゝめば高く蝶々かな

巣の中に蜂のかぶとの動き見ゆ

梅を探りて病める老尼に二言

黄昏の月何處にか梅の影

道ばたの風吹きすさぶ野梅かな

腐れ水椿落つれば窪むなり

山寺の寶物見るや花の雨

ぬれ縁にいづくともなき落花かな

吹きみちてこぼるゝ花もなかりけり

花衣脱ぎもかへずに芝居かな
舟岸につけば柳に星一つ
岩の上に傾き置きぬ海苔の桶
晩涼や池の萍皆動く
薬玉に人うち映えてゆききかな
一人居の廻り燈籠に灯を入れぬ
踊うた我世の事ぞうたはるゝ
はじまらん踊の庭の人ゆきき
七夕の歌書く人により添ひぬ
百官の衣更へにし奈良の朝
老夫婦衣更へたる靜かかな
紅袍の下に袷の古びかな

戀はものゝ男甚平女紺しぼり
熔岩の上をはだしの島男
古蚊帳の月おもしろく寝まりけり
コレラ船いつまで沖にかゝり居る
今日の日も衰へあほつ日覆かな
早苗籠負うて歩きぬ僧のあと
早苗籠草を握つて負ひ立ちぬ
水に浮く蝶のむくろや早苗取
枯松を降りかくしたる夕立かな
門の子を母が呼ぶなる蚊喰鳥
御車に牛かくる空やほとゝぎす
老僧の蛇を叱りて追ひにけり

金亀子擲つ闇の深さかな
螢火の傷つき落つる水の上
寂として殘る土階や花苺
白牡丹といふといへども紅ほのか
雨風に任せていたむ牡丹かな
開くとき蕊の淋しき月見草
山路に石段ありて葛の花
はなびらの垂れて靜かや花菖蒲
新涼や佛にともし奉る
仲秋や院宣を待つ湖のほとり
落し水かぼそくなりていつまでも
掛稻の下に水づきし徑かな

山々の紅葉しそめぬ下り簗
二三子の携へ來る新酒かな
老の頬に紅潮すや濁り酒
手をかざし祇園詣や秋日和
秋日和子規の母君來ましけり
秋晴に足の赴くところかな
月遲く出でたる山のたゝずまひ
はなやぎて月の面にかゝる雲
故郷の月の港を過るのみ
月の友三人を追ふ一人かな
鷄の空時つくる野分かな
石の上の埃に降るや秋の雨

露の幹靜かに蟬の歩き居り
部屋々々に配る行燈や鹿の聲
大空にまたわき出でし小鳥かな
蜻蛉のさら／＼流れ止まらず
何の木のもとともあらず栗拾ふ
桐一葉日當りながら落ちにけり
いちじくのまことしやかに二葉三葉
土近く朝顏咲くや今朝の秋
彼堂に賽せんとして萩の道
茶をよぶに眞萩の叢の上よりす
枝豆を食へば雨月の情あり
冬ざれの石に少し降りて止みにけり

年を以て巨人としたり歩み去る
大いなる春を待つなる貧士かな
蘆の葉も笛仕る神の旅
霜降れば霜を楯とす法の城
遠山に日の當りたる枯野かな
狐火やはだしで歸る母一人
霜を掃き山茶花を掃く許りかな
茶の花の眞白にあらぬもの淋し
大空に伸び傾ける冬木かな
徐々と掃く落葉箒に從へる
草枯れて夕日にさはるものもなし
枯薄ほつ／＼出でぬ雪の原

西山泊雲

我山にわれ木の實植う他を知らず

春風や我苦言容る君が眉宇

暖や土躍り出し貝割芽

簷雫いよ／＼しげし涅槃像

澄みわたる星の深さや門の梅

花人を鎭めの風雨到りけり

昨夜の雨吸ひし大地の落花かな

折りよせて椿は濃ゆし山櫻

廣縁に柚腹這へる夏書かな

睡蓮に水玉走る夕立かな

口やれば波たゝみ來る清水かな

川藪に夕靄下りし青田かな

月の面に蝙蝠しば／＼かゝりけり

蝸牛ののびてひるまず風雨かな

灯の下に金魚あかさや風雨の夜

去る人はとめず燈籠に向ひけり

明月や萑の中の水たまり

秋風や芙蓉食ひ居る青き蟲

ガラス戸の青みどろなり後の月

とくゆるく露流れをる木膚かな

後れ來て灯せる菊の客となりぬ

白菊に汚れし妹が櫛笄かな

土間にありて臼は王たり夜半の冬

ゆくわれに星も從ふ水田かな

焚きつけてなほ廣く掃く落葉かな

菜畑へ次第にうすき落葉かな

庭の椎一日濃やかに落葉かな

道埃どうとあがるや枯木中

埋め樋又こゝに噴き出し落葉かた

ぬかるみの凍てゝかたさや歸跡

野村泊月

蒼空の松の雪解や光悦寺
ほとばしる水のほとりの蕗の薹
石段に立ちて眺めや京の春
昨日今日流れそめたる落花かな
花は早北へ移りし京都かな
鐘楼より見下ろす伽藍の春
窓邊掃く下僕と春を惜みけり
行春の窓にたれたる袂かな
若竹や砂に落ちたる蝸牛

清水湧くいづくともなきひゞきかな
短夜やさゝやきそめし汀波
上の瀬に鮎釣るゝ見て漫歩かな
遊船のつゞいて落つるのど瀬かな
早乙女の笠の上なる男山
麥秋の埃に沈む夕日かな
見上げたる枝をはなれし一葉かな
門を出て濱へ四五歩や秋日和
明月やうすき煙の淺間山

秋風に倒れしもののひゞきかな
屋根の上に人現はれし野分かな
霧晴れて一叢よりたちし鵙かな
數雲に日は沈みゆく野菊かな
遙かなる行手の道に一葉かな
野々宮や四五人寄りて神迎
遠千鳥入るさの月に見えわたり
ちぬ釣るや友舟今し時雨中
鞍馬山見上げて門に焚火かな
お天氣やほたり／＼と松の雪
水鳥や夜は間近く浮きつれて
大風の落葉の中の捨箒

岩木躑躅

初かまど燃え立ち家人起き出づる
松とるや鶏は田に犬日向ぼこ
君遷るなかれ燈下の櫻餅
瓶の藤なよびかに垂れ晝長し
石垣に午かたむきし梅の影
牡丹の天長節に逢ひにけり
水に寝る犢や晝遅々と更く
塗畦の乾きかけたる田螺かな
露けさに袴綰ねつゝあやめ草

人の香や安居のふどし干しをれば
舟出すや海月足蹴に舟子共
母の忌や露のさうびを插す事も
母の忌の後も雨降る薔薇かな
籐椅子にはや秋草をまのあたり
この頃は葭戸も寒くなりにけり
息しづかに黴の閾を踰ゆるかな
腰張の黴に日をやるいとまかな
干草を踏む憚りや墓参

夜の妻や子に取卷かれ柿を剝く
かな〳〵や母と汲みし井草がくれ
太幹へ露やおりると耳よする
露の道風しづかなる人に從き
足もとの徑夜ばなれつゝ草の露
人のあとたどりてをかしきのこ山
栗のもとの人やくびすをかへしをり
名月に水打つ婆子の茶店かな
家祖の墓小さきがうれし落葉掃ふ
落葉中道あるまゝに進みけり
賽すれば禰宜のまたゝく炬燵かな
出で入の息も消ゆかや枯林

杉山一轉

元日の埃かゝるや藥罐
蝙蝠の早とぶ花の堤かな
蕨出る工場の中の小山かな

越後親不知

涼しさや束ねては干す菅の草
黒鯛つりに夏二三夜の闇濃さよ
打水や對家水鱧を買はまくす
蚊帳干すや吉野河原の二處
我もありと金魚の中の目高かな
山梔子の香にこそこもれ蝸牛

老いにきと丸く眠れる毛蟲かな
朝の蛾や庭より松へ小きざみに
麥打や麥に躍れる影二つ
やゝ寒や一筋町に架る橋

堺大濱

秋の夜や見ゆることある兵庫の灯
參り了へて墓の後ろへも立ちにけり
秋風や苔も持たず薔薇の芽
萍の根をさかしまに野分かな
鰯網かつぐ前下り秋の雲

はけどころなかりし秋の水いつか
ほろ〳〵と木の實殖えゆく熊手かな
梳く髪の秋海棠に艶もなし
花びらを曲げて明日なき野菊かな
徘徊す陵守や草紅葉
稚松に二度の心ある小春かな
鴉われに皺嗄れ啼きしよりの風邪心地
秋の蛾やくらき灯を大まはり
冬川や竿振り晒す茜染
酒桶洗ふ裸すさまじ道の冬
ストーブにあさましき繪のかゝりけり
朝顔の今日は二つや枕上

田中王城

元朝やうつゝながらの正信偈

初寅や施行焚火に長憩ひ

左義長や灰ふりかゝる雪の宮

男山のぼりつゞけて厄詣

立木觀音

山冷えにおどろき下る厄詣

春の雪つみてゆれゐる生簀かな

海苔掻きのあまた出てゐて岩がくれ

夜櫻や梢は闇の東山

花屑のしづかにとぢぬ鯉のみち

蕗の葉の蟻とゞまりぬ風渡る

大原路やころゝ／＼と晝蛙

虻の輪の二つとなりぬ花の前

比叡山

春惜む中堂の扉のほとりかな

佇むや實梅やうやく葉がくれに

下加茂や木下闇なる神の道

飛び交うて一つはくらき螢かな

清瀧や流れくるもの皆涼し

巖がくれ下りし舟や鮎の宿

かたまりて哀れさかりや曼珠沙華

月に來て清水寺に詣でけり

寶前へ音羽の月のさしわたり

月の燈仰ぎてのぼりはじめけり

秋の暮植物園を立ちいづる

高雄路や門ひらきある菊の宿

秋の暮しまひ渡舟にのつたりけり

羽前鶴岡にて

夜空なる雪の月山まどかかな

句境界さめじとすがる火桶かな

短日や御菩薩ヶ池に鳰を見る

杓のぼる深雪の中の手水鉢

喜捨人も寒念佛も合掌す

奈倉梧月

助炭おく音に鳥立つ池館かな

古寺や椿に風呂の火燻すつ

芋の葉に塔見えそめし詣かな

舷にもたす櫓や乗初

炭斗の底に熊野の落葉かな

物を干す人に葵の高さかな

竹に上る寺の鼠や秋の風

朝霧の晴れに見ゆるや長門鼻

故郷思へば彼の藪川の椿かな

乗合や帆の蟷螂にどよめきて

蟲に宿る我に灯せり厠にも

此山車やいつの祭の雨の泥

汲み水に一片の苔餘寒哉

秋雨や馬の桐油の山印

柔に通る荷に見えたりや鮫の顔

窓明りすれば君在る夜寒かな

馬の尾のさばきも耳に秋の立つ

遠く来し馬の機嫌や風光る

山下りしが茅寒りや閑古鳥

魚形の大判讃ぞや河豚の文

牡蠣舟や障子の外の蘭の鉢

蟲に灯の落ちて隣の早寐かな

野に連れし犬の空寐や春の雲

地について見ゆ藥屋根や鶉鳴く

[illegible]鉢を廂に忘れ月夜かな

尾袋の淺黄に晴れつ騎初

たてかけて傘ずりぬ春の雪一升

歸庵の戸鼻白見せて犬夜寒

館見えて松のむら立つ餘寒哉

子規庵

秋風や故人用ゐし穂長筆

石島雉子郎

新年

手毬つくや悲しめる母につゝましう

春

神代より濤と闘へる巖朧

やゝありて午砲氣付きぬ森のどか

田打つ兄何か此頃怠け癖

里親とも知らで紙鳶の子育ちけり

旅人や泣く子に凧を揚げてやる

泣き止んで草を摘む子に蝶々かな

朝鮮へ明日發つ花に遊び居る

水草生ふ江も知らで讀む書堂の兒

夏

セルを着て遊女なりしと誰か知る

罎の金魚憐れみつゝも忘れがち

戸を開けて又寐る雨の杜若

幾度も脚折る驢馬や青芒

秋

我子病めば死は輕からず醫師の秋

兵役の無き民族や月の秋

秋雨や歸され嫁の荷宰領

案内者の松明棄てし川や朝寒き

夜學人何かは心激し居る

夜學子の心汲み得て老師かな

會はで發つ義理や乳母知る蟲時雨

水に沈む日を追うて蜻蛉消えにけり

慶宮

蜻蛉や盜るにまかせて門瓦

木槿垣水仕濟む待つ乳貰ひ

冬

頬凍てし兒を子守より奪ひけり

葬の前の物爭ひや冬日落つ

父を待つ杣の子に椎の冬日消ゆ

此巨犬幾人雪に救ひけん

賣れぬ機織る窓や山眠りけり

ストーブの談笑常に似ぬ夫よ

耶蘇と言へば辭儀して去りぬ寒念佛

久保田九品太

立春の飯吹き上がる竈かな
日の暈やどんどの煙の大流れ
かるた人と暗き一間を隔てあり
萬歳の醉うて居るなり船の中
稀にある父と遊べり暖かき
春の夜や嫁入を見に門を出る
年々や古き雛を取り出だし
地に下りて凧に魂なかりけり
野遊のお供と見えて男かな

種蒔や曇れる中に日のうつる
春風に首振る虎や玩具店
人形の首を干しけり風光る
下萌や庭のつゞきに海曇る
我とともに老いたる牛や麥の秋
すいと出て名も知らぬ草秋近し
富士詣東京を經て日數かな
書を曝す主人の前に通されし
植付の濟みて明るき繩手かな

汽車道に低き家居や青簾
昨日祭すみたる村の青田かな
夏柳人來ては立つ汀かな
紛れ來し猫を飼ひ置く今朝の秋
葬式に僧借る寺や暮の秋
灯を消して人なし月の供へもの
松の幹に夕日今ある紅葉かな
野芝居の小屋解きしより末枯るゝ
初冬や瀬音包める藪疊
切干の屋根に凍てたる山家かな
埋火や諸士うづくまる御次の間
松風や氷の上の塵埃

前田普羅

如月の日向をありく教師かな

插木すや八百萬神みそなはす

絶壁のほろ〳〵落つる汐干かな

蔓かけて共に芽ぐみぬ山櫻

立春の曉の時計なりにけり

なき立てゝ曉近き蛙かな

春月や諸をうたふ僧と僧

春更けて諸鳥なくや雲の上

立山のかぶさる町や水を打つ

夏草を搏ちては消ゆる嵐哉

片富士の雪解や馬に強藥

みどり兒の眼あけて居るや田植雲

大寺のうしろ明るき梅雨入りかな

信者來てねぎらひ行くや蚊火の宿

山寺の局造りや鳳仙花

人の如雞頭立てり二三本

葛の葉やひるがへる時音もなし

あわたゞしく大漁過ぎし秋日かな

二三人木の間はなるゝ月夜かな

蟲啼くや向ひ合ひたる寺の門

夜長人耶蘇をけなして歸りけり

行く秋や隣の窓の下を掃く

山邊より灯しそめて冴ゆる哉

冬山や徑集りて一平

冬こもる子女の一間を通りけり

寒雀軀を細うして鬪へり

雪たれて落ちす學校はじまれり

湖を打つて年木の一枝下ろされぬ

雪の戸にいつまで寐るや御元日

人の日や讀みつゞくグリム物語

原石鼎

風呂の戸にせまりて谷の朧かな

花影婆娑と踏むべくありぬ岨の月

短日の磯を汚せし烏賊の墨

月夜かと薄雪見しや夜半の春

春雷やどこかの遠に啼く雲雀

春泥やみち行く人を蓐より

閑さや畑打つ人の咳拂ひ

葉牡丹を活けて靜けし猫の戀

蜂の巣を燃やす夜のあり谷向ひ

山の色釣り上げし鮎に動くかな

松風にふやけて疾し走馬燈

籠の螢みな歩き出し嵐かな

夜の雲みづ〴〵しさや雷のあと

こめかみに汗二すぢや花圃の人

烈日やころげし雹に草の影

大いなる蚊帳吊つて門のやすらかに

高殿の疊にありし蠅叩

夜のかなた甘酒賣の聲あはれ

月明の疊にうすき團扇かな

頂上や殊に野菊の吹かれ居り

淋しさにまた銅鑼打つや鹿火屋守

芭蕉高し雁列に日のありどころ

大風の日の朝顏に七面鳥

ほそ〴〵と又二ところ庵の蟲

椋鳥の大群默す樹上かな

月を見る面上にしてあらき風

捨扇萬朶の露の下にかな

氷上や雲茜して暮れまどふ

北方に北斗つらねし焚火かな

竹馬の羽織かむつてかけりけり

土砂降の夜の梁の燕かな

咲きたれてそよりともせず初ざくら

落椿雨けぶりつゝ掃かれけり

老衲のさつさと椿掃きにけり

雨やどりやがて立ちゆく遍路かな

浮藻より蝌斗かぎりなく出で來る

ごほ〳〵と咳きて庵主蚊帳より

主人まづ涼み臺より寢に下りし

蠅拂ふと見えし病人すや〳〵と

清原枴童

誘蛾燈左右に夜深く戻りけり

をり〳〵に葭切聞え雨やどり

樹雫の端居の耳にしづけさよ

母人や病をおして魂まつり

燈籠の下に兄弟久しぶり

一つ消えし燈籠に兄起ちにけり

吊り添へてまたゝきしげき燈籠かな

星祭る縁の妻子に寢よといふ

蟲賣に漸く更くる博多かな

靜みつゝ名月西にかたむきぬ

梅津只圓翁主催能舞臺大破(筑前)

絲車臆病口にいく秋ぞ

冬菜かけて雨戸一枚しまり居り

莖漬や吹きさらされていろね達

慈善鍋餘所目に急ぐ家路かな

久濶や風邪の衾を出でて逢ふ

恪勤の雪沓を穿く汝かな

子出でし障子すきゐて雪けぶる

都鳥二三羽とべる焚火かな

陋巷や雪ちら〳〵と年歩む

除夜の雪下り立つたびに深さかな

除夜の鐘かすかに聞え深雪かな

吉岡禪寺洞

春あくや銀ほどきたる猫柳

啓蟄や日暈が下の古畠

しば〳〵のなゐのあとなる麥踏めり

落椿疎らになりてかへりみる

女房の江戸繪顔なり種物屋

閼伽桶に遠忌の菜種插しにけり

早乙女や笠をそびらに小買物

半蔀によりかゝり見る出水かな

斑猫や遠送り來し湯女かへす

蛇の尾のをどり消えたる萱かな

嚴き葉のかさなり映る泉かな

大空の下あるき來て花御堂

方丈の沓かりてもぐ杏かな

露草の瑠璃をとばしぬ鎌試し

藍植うや嫡ながらも一長者

天の川この秋の客誰々ぞ

そこはかとなき雜音や秋の暮

槌あぐれば聞ゆる音や網代打

篠曲げて拙き罠や鳥の秋

ひたすらに精靈船のすゝみけり

火になりて松毬見ゆる焚火かな

鳥取も夕日の中や日短き

いづこより來てつくる菜や冬の山

馬車發つて垣に殘れる干菜かな

干菜見えて男やもめにあらざりき

干菜落ちて塀にもどさん人もなし

炭部屋に炭出す音のあるじ待つ

日南ぼこにかげして一人加はれり

菰むらを刈ろと思へど日南ぼこ

さわ〳〵と霰いたりぬ年の市

楠目橙黄子

春寒や郊行返す亭を得たり
廢宮の鼎大いなり春の雷
鳥の巣や江畔のポプラ伸びやまず
行春や輿の小窓に花鳥彩
春風や江沙へ道の自ら
新涼や夜の烏羽玉の松容
一時雨いや高まさる瀬音かな
一幅の繪雛の春や草の宿
前山や杉の高きゆ春の雨

五月雨や漁家の軒端の地藏尊
筆硯に小柄の錆や梅二月
ふるさとに旅籠住ひや蜆汁
春水や沈みおほせし鯉の影
春もはや籬の山吹一括り
磐石へ道ののりたる落葉かな
ふみ渡る伏木の苔や年木樵
夕つづに阿蘇の外山の野燒かな
干蕨山家の春は盡きにけり

滿山の芽杉かぐはしほとゝぎす
花桐やがら〳〵ゆるみ竹廂
ちか道は澤深みかも葛の花
大川を斜めに斷てり下り簗
濱垣に鷗しけとぶ霰かな
燈臺の根礁がかりに和布刈舟
白桃に笊の魚介やみづ〳〵と
蜑が戸や浪もひゞかず葱の花
日ねもすの山ほとゝぎす來そめけり
提灯に西日つよけれ涼み舟
いつまでも菊咲かせたり河豚の宿
階に御鬮のちりや初詣

鈴木花蓑

猫柳風に光りて銀鼠

薔薇色に暈して日あり浮氷

蒼白く夕かげりたる辛夷かな

明るさや白魚たばしる月の網

暗き夜や伊豆の山火と漁火と

大いなる春日の翼垂れてあり

風船のはやりかしぎて逃げてゆく

囀や月に終りし一くさり

雪の嶺の霞に消えて光りけり

大比叡の表月夜や猫の戀

遠くゆく七里ケ濱の日傘かな

おわ／＼と蓮吹きすさぶ涼みかな

庭めぐり薔薇を摘んで手にしつゝ

蓮の風立ちて炎天醒めて來し

夕かげのずん／＼見えて蟹涼し

海上に驟雨の虹や鱚を釣る

鰯雲晝のまゝなる月夜かな

お天氣やまばゆきばかり稻むしろ

芋の闇鼠花火の流行りけり

頂上や淋しき天と秋燕と

海の上に月よもすがら盆踊

大綿の澄みゐる暮のゆとりかな

うす／＼と月あびてあり夕紅葉

蜻蛉やゐざりながらに鰯雲

浦不二は夜天に見えて鳴く千鳥

大霜や不二は黄色に日の當り

鴛進むやしさるが如く筑波山

枯蓮の大傾かゝる緩慢かな

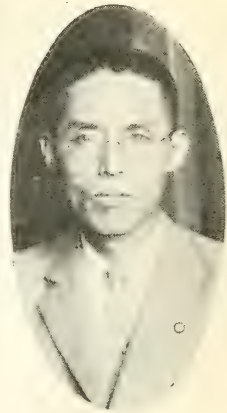
スケートのこけしはずみや冬日影

夕映えて夜の影持てる冬木かな

池内たけし

夜桜に話のあとを出かけけり
春暮るゝ花なき庭の落花かな
舞ひもつれ吹きもつれつゝ蝶二つ
仰向きに椿の下を通りけり
摘草や俊基卿の墓ほとり
甘茶佛すこしまがりて立ち給ふ
初午の太鼓たゝいて遊ぶなり
遊船の中に居りたる夕立かな
蚊遣火の根なし蘆のそこらかな

葭の風葭切たけり鳴きにけり
麥藁を焚き放したる煙かな
玉ときて風に破れし芭蕉かな
何處やらに風鈴鳴りて家廣し
這入りたる門の内より孔雀草
人出でし門を通るや秋の暮
來るあとにかゝる霧あり野路の秋
秋扇の破れやまざる折目かな
燈籠の灯影またゝく杜かな

宇治川に映れる山の薄紅葉
大道にもたらし來りいぼむしり
何といふ宮ともしらず秋祭
門火たく土に映りてもゆるなり
道端の物を見て行く枯野かな
冬櫻ほとりに咲いて茶店かな
取り下ろすものゝ埃や冬籠
笹鳴や山道にして莊の道
炭斗に炭を出したるばかりなり
牡蠣船にゐて大阪に來てゐたり
水仙にかげりながらにさす日かな
四十とはなりし雑煮を祝ひけり

田村木國

山門を出でて秋日の谷深し

枯芝の雀いくつも居たりけり

金屏にやゝあり上げし面輪かな

もろこ釣り堤を下りて徑ひろふ

山の如く寒鮒釣りに堤あり

草餅やもつとも太き前の杉

接木ふと心もとなき夕餉かな

牡丹をはなれし蝶に颱かな

春愁の倚りて冷たき柱かな

蝕める宮の扉や春立ちぬ

白菊に十日ばかりの月濃さよ

指觸るゝしみ〴〵と濃き桔梗かな

折りとりし芒の丈けや雲もなし

花の幹に押しつけてゐる喧嘩かな

鶯の啼く谷々や下山僧

薫風や樹海の中の東大寺

馬同士顔ぢつと寄せ梅雨の塀

杉の奥ひそかに晝のかすみかな

早春やひとり焚き居る松の中

春月や詣で下がりし石だたみ

松原にさしかゝりたる神輿かな

日盛や御堂の奥の燭一つ

虹立つや再び出でてきすご釣り

夕風やのりそだに來し波がしら

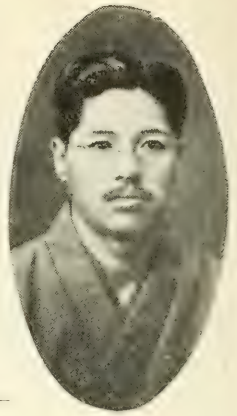
一灣や吹き收りて月の鴨

寒月や今流れ出しくりや水

月光に一枚白き芭蕉かな

提灯に案山子の面を見屆くる

元朝の日あたる山や籬の上

烈風にかゞりを焚いて祭かな

宮部寸七翁

梅活けてなほ如月の籠りかな

春徂くやかりそめ事に痩せもして

たまきはるいのちの聲や猫の戀

啓蟄の河鹿に水を湛へけり

花人に見られて俥徐ろに

病人に寒き旦暮や猫柳

ほそ〴〵とまもるいのちや蚊遣香

己にて絶ゆる血統や墓參り

夕凪や佛づとめも眞つ裸

ひそやかに晝行水や病みほうけ

頬の蚊の鳴く音をかへて飛びにけり

勞咳にとはの孤閨や閑古鳥

板橋や顧みすれば秋の情

その後はかゝる雲なし十三夜

一服の煙草甘さや蕉の秋

手をのべて筧の一葉落しけり

茱の實のうましといふにあらねども

二つづつふぐりさがりのむかごかな

絲瓜忌や附添つれて一作者

鐵窓吟(一句)

勵精に風呂の賞與や小六月

皸の母のおん手に觸れにけり

たゞ一目會ひたしとて十餘年前の戀人訪ね來る(一句)

咳けば風邪かと問ひぬかなしけれ

觀音と置かれて土偶や冬籠

牡蠣舟に流るゝ塵も夜なれや

輕ければ病む身もよしや日向ぼこ

寒雀遊べばこゝろ遊びけり

正月や刈らずの髮に福頭巾

正月や塵も落さぬ侘籠り

たらちねに還る暦や家の春

臨終吟

血を吐けば現も夢も冴え返る

山本梅史

風鈴や見馴れたれども淡路島

獨り居の簾おろしぬはたゝ神

一力の團扇を腰に舞の客

とかくして漕し出たり露の舟

きら／＼と波隱かす渡り鳥

草の花萬葉の跡こゝにあり

萬葉の古道猶をかつぎけり

稲掛けて畝傍は行幸待つばかり

一時のしぐれ先立つ行幸かな

なか／＼に目の飾物葉鷄頭

野菊咲く／＼龍田川なるしがらみに

新尼のなぞ／＼讀くるらつきよかな

道のべに落葉したまふ御陵かな

時雨るゝやいよ／＼まろき鷹ヶ峰

探梅やあつと見えたる三笠山

釣人にもたるゝ犬もあたゝかき

夜櫻の灯明り見えて廓角

なほ繕む上の龍閣やさくら狩

陵も名もなき塚も春の雨

春雨や蕪くつしの宿浴衣

なか／＼に電話も引きて花の坊

箱めがね曳いて移るや和布舟

和布舟加太の波間に飯食へり

めかり棹入れてあるなりつなぎ舟

水底の若布の園生見れど飽かず

大いなる國旗の下や入學兒

拝すや嶺見し雲を午後に又

くちばしに春水こぼす荒鵜かな

老の手にまねき消されぬ綿の燭

七夕の笹持てる子や秋篠寺

原月舟

襲名を繼ぎて閑居や爐の名殘

春立つや大野雨降る朝ぼらけ

春淺き色を織り込む錦かな

春の夜や障子に落つる山の鐘

日の渡る聖像を踏み渡りけり

茶摘女がいつも暮行く土橋哉

關の跡に人もどかしく摘む茶かな

山吹のちるまであるや上り簗

日の立つや岩噛む浪も夏隣り

五月雨を汽車大宮へ着きにけり

短夜や軍馬積み込む筏船

蚊を焼くや簞笥の上の寐ぬ人形

風の神山の神訪ふ若葉哉

荷を捨てゝ火事に走るや金魚賣

花垣へ高く上りぬ合歡の蜂

屋根越しに山車の人形や桐の花

川崎の場末で買ひし金魚哉

山の家の蟲干風や棉の花

堂前に騒ぐ駒下駄や百日紅

百合低し蝗飛ぶ時及ぶ波

河骨の蕾に水の巴かな

山の田の高きに咲きし蓮哉

萍や洗へば輕き戀の櫛

古池の藻の花に湧く清水哉

實梅入れて底やぬけなん盥哉

外人の眼に神饌の夏大根

杜若下女も使はで家廣し

花活けて部屋の靜かに野分哉

冬日動く地上寂たり蟻も見ず

ものを愛する心に吹きぬ秋の風

島村元

元日や小火のありたる山の内
初凪や千鳥にまじる石たゝき
春曉の破璃戸や椅子の庭向きに
暖や皆返事よき農夫達
人よりも土戀しさよ暮の春
机上なるカルタ一片紀元節
出そびれし我を囚へて接木せり
爪を剪る呆うけ話や晝霞
春雷や蒲團の上の旅衣

囀やピアノの上の薄埃
夜櫻や二階灯りて大藁家
一片のなほ空わたす落花かな
菜の花や渦解け結び日もすがら
七夕や芭蕉人麿一枝に
病
衣更肋抱へて待つ間かな
青嵐や向きかはりたる瓶の薔薇
するどけれど澤なる聲やほとゝぎす
撫子や沖さしかゝる船もなし

鷄頭伐れば卒然として冬近し
一言の忘れ扇に及ぶなき
秋風に生きねばならぬ我身かな
秋晴やそこはかとなき朝を消せり
稻雀上らぬ夕田戻りけり
夕凪や蟷螂鎌を營むなり
冬籠る家や婢の減るまゝに
明眸や藍襟卷の一抹に
木枯に何聞き出でし火桶主
笹鳴や古總太き客間椅子
我に大きく冬日の電車とまりけり
牡蠣舟や芝居はねたる橋の暮

本田あふひ

山吹のうてなばかり袷かな
牝鶏の一つ離れて秋の山
しぐるゝや灯待たるゝ能舞臺
新涼や月光らけて雨しばし
焚火すれば崩れ逃げ行く霜柱
戀猫の毎夜泥置く小縁かな
襟巻の飛んで長しや橋の上
手に當る虻流れ行く春の風
黴色の日毎に變る紙袋

引く潮に砂利鳴る音や夏の月
手にふれし秋の團扇や晝寐起き
俄雨蟬鳴き落つや夏草に
馬追の聲ばかりなり天の川
コスモスの花なき時に訪ひしまゝ
數珠玉の通りすがりのこぼれかな
のうれんに淡雪ふりて消えにけり
あの男此雛店に佇めり
人積んでよるべいづこぞ祭舟

七夕の歌ばひあうて書きにけり
家見えて行かれぬ村や秋出水
蟲鳴けば老の近づく思ひかな
打向ふ瀧の面の何もなし
草庵を結んで花に置火燵
川下に流れ來にけりへごの花
大蟻の蘆の葉さきに佇みぬ
孔雀草になげかけてある襷かな
炎天に走る女のありにけり
わが庵は櫻落葉の三軒目
餅花の埃かゝりて美しき
湯豆腐や昔ながらの四疊半

久保より江

かるたきれどよき札出でず春の宵
たんぽゝを折ればうつろのひゞきかな
土手につく花見疲れのかた手かな
猫の子のもらはれて行く袂かな
かの窓による人ありや春の月
泣むしの小猫を抱にもどしけり
花の窓冷え〴〵とある燈かな
春愁やこの身このまゝ旅ごころ
水かへて鯉やいのち長かりし

病間やとる手鏡の梅雨ぐもり
窓ごしに與へ去りたる螢かな
湯上りの素顔よろしき浴衣かな
夏瘦のわれいとほしむ端居かな
京の宿浪速の宿や青すだれ
そのかみの絵巻はいづこ涙あふるる
新涼や露臺の椅子のわれごころ
蜩やひとりに馴れし山ホテル
主客たゞあるがまゝなりさわやかに

別れ路やたゞ曼珠沙華咲くばかり
野分めく風や紫苑を右ひだり
朝かけや露の芝生の投縁
宿の子をかりのないきや草相撲
秋汐にやぶれかるたの女王かな
苫垣に露の袖おく良夜かな
この月よをちかた人にまどかなれ
さすらひの小唄もよしや秋の風
打てばたゞくわれと思ふや秋の風
從容と異がもとの小松まきり
猫の眼に海の色ある小春かな
一枚の紅葉投げある暖爐かな

杉田久女

春

あたゝかや水輪ひまなき廂うら
花衣ぬぐやまつはる紐いろ〳〵
鬢搔くや春眠さめし眉重く
嵐山の枯木もすでに花曇り
芥子蒔くや風に乾きし洗髮

夏

晴天に苞押しひらく木の芽かな
つれ〴〵の小簾まきあげぬ濃紫陽花
夕顔を蛾の飛びめぐる薄暮かな
夕顔やひらきかゝりて襞深く
逍遙や垣夕顔の咲くころに
夏痩や頰も色どらず束ね髮
さうめんや孫にあたりて顏不興
上陸や我夏足袋のうすよごれ

秋

つゆけさやうぶ毛生えたる蘭瓢
露けさやこぼれそめたるむかご垣
朝顔や濁りそめたる市の空
雁なくや釣らねどすなる母の供
露草や飯噴くまでの門歩き
紫陽花に秋冷いたる信濃かな
八月の雨に蕎麥咲く高地かな
好晴や壺にからいて濃龍膽
龍膽や莊園背戶に顧せず
葉鷄頭のいたゞき躍る驟雨かな
うそ寒や黑髮へりて枕ぐせ
いつつきし膝の繪具や秋袷

冬

こもり居の門邊の菊も時雨寂び
病間や破船にもたれ日向ぼこ
風邪の子や眉にのび來し額髮
牡蠣舟に上げ潮暗く流れけり
雪道や降誕祭の窓明り

藤田耕雪

春

ほろ〳〵とあしび散るなり水の上
七十の老師に屠蘇をつぎ申す
奉る花にひゝなのまぶたかな
夕づつや春水池にそゝぐ音
湖の風全く絶えし柳かな
投扇のはねたる勇々し春灯
寝られぬも懐ふに宜し春の旅宿

夏

渺として山門高し花曇
座ぶとんに合歡の影ふむ月夜かな
つん〳〵と早苗置きたる水田かな
門涼み歸れば居間の月夜かな
四五本の楠森なして鯉のぼり
老鶯や笹刈る女去つて後
螢火のゆれつゝ上る木の間かな
並び歩く鳩と雀や夏の芝
縁團扇捨てしが如く置かれたり

秋

初秋や八幡につゞく山平ら
秋の空群鳥分れて木津と淀
好き夜半を端に灯さば月うとし
朝顔の葉を巻き上げし簾かな
萩植うや鉢の雫に濡れ〳〵て
蜻蛉や雲の重なり解け初めて
灯して秋の簾をおろしけり
良く見たる大和の山や秋の空

冬

雲間より月のふくらむ枯野かな
もこ〳〵と雪の茶の木の打並ぶ
全山の雪よりはねし數穂かな
知る家の門を過ぎたり小春道
牛飼の牛にそひ立つ霰かな
短日や淋しき母を音信れし

中田みづほ

春水のたゞ静けさに人だかり
鋤き終へし水田はげしく夕映えぬ
蝶一つ衙門を出でつ入りつかな
花盗人ほゝ笑みながら折り呉れぬ

香港

春月やこの小路にも彈く胡弓
春泥やセロを大事と立ち出づる
玄關を日夜守りて卒業す
牧場は花盛りなる燕かな
噴水も明け方近き巡邏かな

神輿まだ遠くは行かず出でて見よ
涼み馬車一つ戻りて空きにけり
涼み舟出づと賑はふ水すまし
晝寢猧子そこらの童罵りぬ
ゴンドラに路をゆづらぬ南瓜舟
夏服のなにがしのパシャ乘船す
空蟬の背の裂け目より縷の如きもの
牧牛に花咲かぬ草なかりけり
秋晴やいそしみ打てるタイピスト

芋蟲の土を這ひつゝ惡びれず
コスモスや燎亂として日曜日
語りつゝ絶えず聽ゆる草雲雀
子供等や空に弓射る秋の暮
茣蓙を敷くうちにもあがる花火かな
獵犬や茶店の犬に嗅ぎ寄られ
枯園や神慮にかなふ薔薇一つ
頰杖のがつくり醒めし煖爐かな
刻々と手術は進む深雪かな

ヴェルサイユ宮殿

皆覗く王の寢室日短か
凩や小屋を出て舞ふ鉋屑
雙六のうへに顫へる小犬かな

酒井默禪

初詣天平よりの手水鉢

春雪や眠りに沈む城下町

伊豫法華津峠

鶯や天嶮にして海の景

囀りの折々聞え文書讀む

日本醫學大會出席

春雨や幌より覗く東山

城山へ一寸上り來し櫻かな

松山城

弓の窓鐵砲の窓や花曇

ふるさとの港に着きし幟かな

白扇や袴付けたるお城番

紫陽花や鬱々として船疲れ

登山口御岳自動車二三臺

蟻の徑草の中より砂の中

一聯の青鬼灯に風生死

山陰遊草

晝顔やまだ見えてゐる日本海

伊豫吉田港

夜となれば船も着かぬや星月夜

夕月や皇靈祭の草の家

松山

萩咲くや人離り住む子規舊廬

日陰より伸びて日南や女郎花

寶[illegible]室

この窓に訪るゝものの中の百舌鳥

大正十四年琴平神社に詣でて

月の出て再び仰ぐ象頭山

一と頃の盛り過ぎたる野菊哉

草庵や月の出るまで法師蟬

明けたてのきかぬ障子や十三夜

見えずなりて復た鳴いてゐる鶲かな

腐れ蔓曳けば曳かれて烏瓜

日數經て色失へる木の實哉

雲梯や冬の一日の城掃除

雪の不二見ゆる程なく暮れにけり

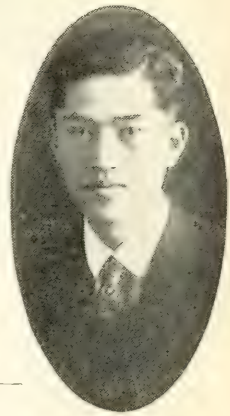
學問やたまにほりする日南ぼこ

冬雲雀西日に少し上りけり

鈴鹿野風呂

雑煮腹鼎あぐるに足りぬべし
雑煮椀そろはぬながら紋所
薺粥椀のうつり香よかりけり
あて人の歩くといひぬ春の月
灸据ゑに二月の湖をわたりけり
内裏雛冠を正しまゐらする
面の下咽喉笛太し壬生念佛
近江路や湖よりひくき花菜畑
雲を吐く三十六峰夕立晴

竹伐るや錦につゝむ山刀
鉾觀るや遠きゆかりの許に來て
靑天に樗花咲く祭かな
武者草鞋歩々にふみしめ祭人
落方の月の靑さよ簾越
うす黴を指に拭きとり書を曝す
何すさびや岐阜提灯に灯を入るゝ
しぼり出す新茶つめたき綠かな
夜使の悲しくなりぬ遠花火

山百合や嵐煙岩を這ひのぼる
疑義とけて夜寒の机邊にあり
牛祭露けき松の下根氣
江鮭一枚おろし秋祭
ついと來てついとかゝりぬ小鳥網
雪洞の消ゆるは消えて萩の月
帝陵のほとりに住ひ菊作り
秋海棠嵐のあとの花盛り
下りたちて眞上に日あり溪紅葉
枝豆にみちのくの旅續けたし
水洟や一念寫す古佛畫
世に生きて器好みや蕪蒸

日野草城

藹岵堂句抄

きさらぎの藪にひゞける早瀬かな

春曉や人こそ知らね木々の雨

春晝の松籟遠くきこえけり

朧夜や人にも逢はず木の間往く

春の夜のくつたびを脱ぐ女かな

曾根崎の晝闌けにけり春の泥

高々と雨意の木蓮崩れけり

流水に垂れて靜かや濃山吹

手をとめて春を惜めりタイピスト

松明の長き煙やほとゝぎす

梶の葉やあはれに若き後の妻

日盛の土に寂しやおのが影

初蚊帳のしみ〴〵青き逢瀬かな

小百足を搏つたる朱の枕かな

しろ〴〵とうなじをのべて晝寢かな

青簾片はづれして暮情かな

月明く揉瓜の酢の利きにけり

妻の來て白粉匂ふ涼みかな

星屑や鬱然として夜の新樹

朝寒や白粥うまき病上り

朝寒や齒磨匂ふ妻の口

稚子のしゝ秋草の根をぬらしけり

白菊や風邪氣の妹に濃甘酒

醉ざめの水のうまさよちゝろ蟲

水洟のとめどもなうて味氣なや

見て居れば心たのしき炭火かな

高きよりひら〳〵月の落葉かな

木枯や翠も暗き東山

寒菊や宵寢覺めたる老二人

更けて燒く餅の匂や松の内

水原秋櫻子

鶯や龍山いよゝ雨の中

山燒く火檜原に來ればまのあたり

遠つ世の面輪かしこし木彫雛

天平のをとめぞ立てる雛かな

連翹や眞間の里びと垣を結はず

馬醉木咲く金堂の扉にわが觸れぬ

高嶺星蠶飼の村は寢しづまり

春蟬や學僧一人逍遙す

葭切のをちの鋭聲を背ぐもり

羽拔鷄童に追はれ蘆の中

葛飾や浮葉のしるきひとの門

桑の葉の照るに堪へゆく歸省かな

古町のとある館の牡丹かな

藤棚や初夏の繭雲うかびたる

靄の中朝藻刈る舟見えそめぬ

七夕やつねの浪漕ぐわたし守

この原の桔梗や濃ゆし霧の中

海霧打ち灯ともり給ふ觀世音

厨子の前燈のひかりの來てゐたり

燭あかし彌勒のおはす良夜かな

秋耕やあらはの甍に手向花

鯊釣や不二暮れそめて手を洗ふ

四ツ手網あがる空よりわたり鳥

鯊釣る子障子洗ふは媼ならめ

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

むさしのの空眞青なる落葉かな

雲海や鷹のまひゐる嶺ひとつ

好晴やほと〳〵枯れし野路の蔓

八重葎潰えて咲ける茶の木かな

茶枯れ一なりはかもたき町の音

雑魚散つて如月田圃澄めるかな

西開いて遠山を見る遅日かな

独り焼く目刺や切に打返し

蜂の高さに眼を挙げて逃げにけり

老の手をかざしに春日眺め立つ

蕾摘んで花の巧を眼に見入る

梅と插されて葉牡丹低し自ら

咲きて木々の春を惜みけり

棚[illegible]の掃けしべ[illegible]を見る

篠原溫亭

爾等が灌ぐ甘茶に御像

傾けて大樹を吹けり青嵐

剥ぐ如く汗の肌着を脱ぎしかな

背向けて曝書の老や終日

蚊遣香焚きて燈下に在しけり

勤行に寝冷の腹を労れり

なめらかに石を越えたる蛞蝓かな

木瓜の執着として樹肌かな

畔に立てば四邊に起る秋の風

松を仆して早き灯に寄る夜寒かな

干竿の落ちて流るゝ秋出水

蜻蛉の頭越す時皆赤し

擔ぐ櫓を芒の上に廻しけり

末枯れてしまひけり園に呆と立つ

烏瓜蔓に曳かれて下り来る

胴着着て胸の厚さを合せけり

ストーヴに足明りして立ちにけり

冬芒紅葉が散れば拂ふなる

傘の上の落葉や霽れてあり

押し撫でて大きく丸き火鉢かな

霜の葱土に深々と著たるかな

村上鬼城

新年

元日をふとゝたゝんで紙[illegible]

初日影豊旗雲に[illegible]ざりけり

御慶申す手にいた〳〵し按摩膏

庵主の禿筆を噛む試筆かな

古鍬を研ぎすましたる飾かな

相撲取の金剛力や鏡餅

どこからか日のさす閨や嫁が君

福壽草さいて筆硯多祥かな

春

春寒やぶつかり歩く盲犬

行春や机の上の金襴簿

春の日や高く〳〵とまれる尾長鳥

慈恩寺の鐘とこそ聴け春の雨

殘雪やごう〳〵と吹く松の風

眞青に沖高凪や春の海

治聾酒のゑふほどもなくさめにけり

大男の佛男や畠打

たんと食うてよき子孕みね櫻餅

猫の子や親をはなれて眠り居る

手燭して疊棚見せけり小百姓

鬪鷄の眼つむれて飼はれけり

ゆさ〳〵と大枝ゆるゝ櫻かな

芝焼けて蒲公英ところ〴〵哉

菜の花の夜明の月に馬上かな

夏

麥飯のいつまでも熱き大暑かな

涼しさや白衣見えすく紫衣の僧

短夜や枕上なる小蠟燭

五月雨や起上りたる根無草

石段に根笹はえけり夏の山

南風に凧あがりたる小村かな

泉わくやとき〴〵高く吹上ぐる

宇治の茶、鴻古の笑顔、相生の茶室、芳野の櫻の杭、伊香保の湯、[illegible]中に出なんとする事なし

新茶して五箇國の旅に出る身かな

大雨に獅子をふりこむ祭かな

行水や夕顔棚のこぼれ月

凉しさや音なく起つて行く螢

傘にいつか月夜や時鳥

瓜小屋に伊勢物語哀れ哉

白百合の花大きさや八重葎

夏草に這上りたる捨蠶かな

秋

けさ秋や見入る鏡に親の顏

弟子達の一つ灯に寄る夜長かな

十五夜やすゝきかざして童達

御佛のお顏のしみや秋の雨

秋山に僧と携ふ詩盟かな

出水や牛引出づる眞暗闇

秋耕や四山雲なく大平ら

絲瓜忌や俳諧歸するところあり

小鳥この頃音もさせずに來て居りぬ

街道をきち〳〵と飛ぶ蟆蚱かな

大空をあふちて桐の一葉かな

讀鮮嘆日記

落柿舍の小さき柿やうまかつし

新米を食うて養ふ和魂かな

冬

庵主や寒き夜を寐る頬冠り

俳諧の帳面閉ぢよ除夜の鐘

遠山の雪に飛びけり烏二羽

凩や手して塗りたる窓の泥

冬山の日當るところ人家かな

冬川に遊んで龜を掘りにけり

沼涸れて狼渡る月夜かな

維摩會にまゐりて俳諧尊者かな

美しき蒲團かけたり置炬燵

埋火や思ひ出ること皆詩なり

鮟鱇の愚にして咎めなかりけり

木兎のほうと追はれて逃げにけり

北向の大玄關や花八ッ手

一汁の掟きびしや根深汁

風呂吹や朱唇いつまでも衰へず

飯田蛇笏

[illegible]日ゝ芭蕉たゝへて山籠り
俄[illegible]や山びこつくる子のたむろ
いんざんにことづてたのむ淑氣かな
ぬぎすてし人のぬくみや花ごろも
春蘭や巖苔からぶけしきにて
いばら野や盛りとみゆる山ざくら
お涅槃の古きすがたやこひわたる
切株や雪解けしたるましら茸
すはだかに熟寐したる籐椅子かな

殞つさまに光りもぞするほたる哉
鍼按の眼のみひらけぬ浴衣かな
いかなこと動ぜぬ婆々や土用灸
深山木に雲ゆく蟬の奏べかな
くちつけてすみわたりけり菖蒲酒
山泉杜若實を古るほとりかな
憎からぬたかぶり顔の相撲かな
やま風にゆられゆらるゝ晩稻かな
桔梗や又雨かへす峠口

蓮の葉にかゞみておほき盆供かな
月影や榛の實の枯れて後
吹き降りの淵ながれ出る木の實かな
山柿や五六顆おもき枝のさき
たくらくと茄子馬にのる佛かな

芥川龍之介氏を悼む

たましひのたとへば秋の螢かな
小[illegible]やとても榾火の下あかり
寒灸や惡女の頸のにほはしき
かしづきて小女房よき避寒かな
積雪や埋葬をはる日の光り
かる萱の凍雪とけし穗枯れかな
冬風につるして乏し厠紙

籾山梓月

正月に書たさめに
屠蘇一具女禮者に殘しけり

鎌倉にて
山路來て土栗のこる雪間かな

古き世の物語よみゐつつ
蘆の芽に姿も寒きあそびかな

草庵
紅梅や瓔珞蘭を幹の藤

繪の島
足柄の山燒の火の見ゆるなり

葛飾なる紫烟草舍おとづれてかへさ
月は十日花は若や初蛙

山寺や花にうづめる多寶塔

瑞泉寺
椎茸や花のうしろの藪の中

石塚(一句)
田にうつる縄手の花のくもりかな

山あひに富士見る花のきれめかな

芳野
夕闇の花にこみ入る旅籠かな

北風の吹きてすずしき立夏かな

柏尾川
初夏のひと夜の雨に出水かな

草庵
初夏の月をうつすや縁の板

白藤もともに若葉のそよぎかな

うつぎ咲く山邊を行けば燕かな

苗代に姿あらはす案山子かな

蓮の葉もひらめきそめて田植かな

秋草もややに出そろふ宵月夜

伊香保
擬寶珠も湯治の客もさかりかな

殘暑
しのぎよき暑さになりぬ蟬の聲

梓月庵
きささぎの千筋に垂るる秋暑かな

仙石原俵石閣
ひややかに西日さす水流れけり

蘇子庵
手のとどくところにありぬ烏瓜

梓月庵
山茶花の散るともよしや四十雀

田家
山茶花やまろく刈られて花さかり

靈雲寺
せんだんの實を照しけり冬の月

枯枝や月は雪もつ雲の中

岬の宿
枯木山十日ほどなる霜の月

[illegible]より歸る
花白し草の庵は寒けれど

岡本松濱

淺[illegible]や[illegible][illegible]野をわたる

女[illegible]浪に千鳥の[illegible]の雪

磯わらべ青海苔きざみ遊ぶなり

住吉や蛤店の繪雪洞

山河古りぬ沼澤蝌蚪の春となり

啓蟄の城山に人動き居り

かげろふや土に坐つて鉦たゝき

畝傍山暮るゝ風吹き蚊喰鳥

[illegible]夜やありとも見えゝ月の蝕

いく里を流れ流され濁り鮒

掌に泥を吐きけり濁り鮒

かゞんぼを吹けば飛ぶなり形代も

行々子江口の里は今いづく

雨空や月冷けきありどころ

星飛ぶと鶺鴒の子の叫ぶなり

露けさの一つの灯さへ消えにけり

露空に雀のしらべのひゞくなり

龍田川蘆吹く風の家二軒

一つ鳴く[illegible][illegible]さよ渡り鳥

白日の影婆娑として墓燈籠

除隊兵待つや俎上の鯛一尾

寐かさたき母になられし蒲團かな

埋火や海苔屑包ふうすけむり

富田屋の戸口流るゝ煤の水

妻子なき芭蕉を思ふ冬ごもり

六歌仙の誰に似たらん冬ごもり

初からす鳴きたゞよへる深雪かな

初夢を誰にか告げん雪の梅

掃初や銀元結の屑すこし

由井ヶ濱年酒の醉に踏みにけり

島田青峰

元日の枕安らかにはされけり
お降りや暮れて靜かに照るゝ松
松とりて侘しき心立ちて見る
いつの手ずれの道中雙六なつかしき
狂亂や朧の影は鐘にあり
工女等に遲日めぐれる機械かな
櫻餅に暮春の鐘の響聞け
舟に乘れば春風水をわたるなり
壺燒や島をめぐりて潮鳴る

街となりて殘る溝川蛙の子
前山に雨走りをる櫻かな
ネル着たる肉塊の女に熱暑かな
夏帽や今年銀座に柳無し
我れに早や古り行く月日曝書かな
晝寢覺め大事去りたる西日かな
たゞ蟻の爲すまゝに蝶の衰へる
醱して若茄子の酸味口にあり
[illegible]寒のこの道日々かつとめかな

秋雨の溫泉親しさや早[illegible]り
參道の並木の晴れや明治節
嫁入の行列囃せ童子明け
柚味噌燒くと洛內外の鐘鳴らせ
木の實降る道漸くに細きかな
我が影や冬の夜道を面伏せて
慈善鍋に霙れて街の往來かな
時雨傘相傾けて別れけり
まこと人に背き得てんや冬籠り
背き行く心を隔つ火鉢かな
貧兒の眼石炭の爐に[illegible]るかな
煤掃の殘りの日[illegible]卓子入れ

小野蕪子

エレベーターに相天上す御慶かな
山吹をからみあけたる井桁哉
ちりそむる薔薇の紅の櫻花
川風の枝ふきたわむさくらかな
風の中に春惜しむ人来りけり
戀猫の月に尾あげし長さかな

巴里オペラ
春の夜の蛇の紋ある圓柱

渡欧船中、客に団扇を配る
その中に和蘭嬢の団扇かな

シャトルにて
夏帽や相顧る日本人

編輯局即事
心中のあまりの電話花便り
飼猿の面むらさきや春の月
仔猫咬へて猫虎の如し日輪草
晝寐人の足よけて仔猫咬へゆく
漸らに芯をみせたる牡丹かな
船の腹を掠つてあがりし鰹かな
瀧口の岩にわかるゝ芒かな
爽かや餌にもよごさず鳥の腹
瀧壺をみて犬吠ゆる月夜哉

大瀧のかじやき落つる野分哉
一寸法師の地割不平や年の市

秋田花街川反（二句）
川反の氷柱くゞるは誰が子ぞ
川反や氷柱のかげの御神燈

溝鷺と申し一對の石燈籠
荒鹿の角ふりかぶり伐らしめず
うたがひはみたかけにあり冬の星
餅搗や餅らちはるゝ東山
浪音より松籟高き二月かな
石燈籠の灯皿は貝や夜の梅

奈良東大寺の国宝八角燈籠の扉を仰ぐ
雪ふるや天女笛吹く高燈籠

大佛殿
煤を掃く僧の鉢巻あちこちよ

長谷川零餘子

草花の行儀に咲きし春日かな

我たのむ苗田小さし天が下

山笑ふ峠に富士見て下りけり

梅の幹静かなるに蛇動くを聞きし

駒鳥に鴉應へて山櫻

木蓮に翔りし鳥の光りかな

花笠を軒にもかけし祭りかな

病む妻の衣を見て居る晝寐かな

起し繪や[illegible]人に消し惜む

帷子の古るきを着たる花摘かな

鮎焼きて殘る火赤し時鳥

蚊寄つて菩提樹の日影惜みけり

壺の蝮をうかゞひて夜の扉立去れり

一夜々々星高くある槐かな

苔の花に温泉煙の輪の見ゆるかな

雛芥子は美しけれど嫌惡し

爽かな大地に咲きぬ花ほつほつ

秋深く玉をくだいて紅と見ん

柚味噌焦ぐる返刀を以て火を埋めよ

秋草に泣き人形を泣かせけり

夕雲に身を倦し灯る晩行かな

我宿にさす柊をもらひけり

冬山のいたゞきにすこし日當れる

嵐山の樫木にとまる千鳥かな

纜に水鳥並び曳かれけり

時鳥の枝ふみわたる冬木かな

元日や蘭の日南に常の如し

雲怪し見る〳〵萩を捲いて去る

夕立雲淺間を蹴つて逃ぐるかな

俳諧の月に澄みゆくすがたかな

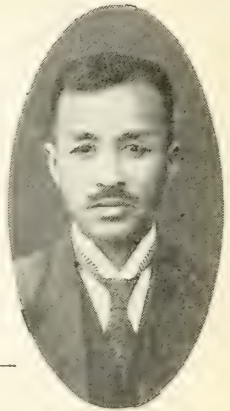
長谷川かな女

時鳥女はものの文祕めて
汐上げて淋しくなりぬ澪標
羽子板の重きが嬉し突かで立つ
招かれて祭の店に並びけり
願ひ事なくて手古奈の秋淋し
空濠にひゞきて椎の降りにけり
尺八吹けば琴のよくなる秋の風
母とあればわれも娘や紅芙蓉
戸を搏つて落ちし簾や初嵐

芝居見たき火鉢に凭りぬ針供養
星合や歌のほかなる思ひ事
傘さゝぬまだ人通り春の雨
痩せし頰に五月の冠たゞしけれ
袴つゝみて使ひに渡す朧かな
夏山の重なりうつる月夜かな
子雀に楓の花の降る日かな
蜘蛛這ひし疊に寢ぬ假の宿
古き帶しめて遊びし卯月かな

燈籠に母思ふ事しげ〳〵と

零餘子世を去る

半月に一人歸りぬ呆として
月を見る面かくしぬ芭蕉葉に
なほ冷ゆる火燵の中や千鳥啼く
母戀しければ落葉をかむり掃く
拂ひきれぬ草の實つけて歩きけり
冬さうびかたくなに濃き黄色かな
散紅葉子の輪に入りてふと淋し
鹿島發つ人も送らず更衣
逝く春や飼猫追ひてたのしまず
旅好きの人なし萌ゆる草の日に
靈棚につかふるひとりふたりかな

原田濱人

羽子の音聞えて金屏に灯りけり

屠蘇飲んでほうと酔ひたり男の子

暖に投げ棄てゝある箒かな

涅槃像堂に餘りて垂れにけり

海人が墓に香煙上る彼岸かな

白紙の小ひさき凧を上げてゐる

父旅中病を得余が任地の寓居にて卒死す

一本の菜の花壇に枕經

南風に陽炎立てる田植かな

朝雨に實櫻赤し旅戻り

干浴衣淋しや夕日昃りゐる

小翅を寄せて死に居り雀の子

夕蟬のふるさとに着く俥かな

蒼海の風わたりゐる若葉かな

茄子畑に晩涼の糞一流し

蟹石を這うて朝川流れけり

只一人泳ぎ上るや秋の雲

秋晴や半日歩く只の道

打ち連れて晴るゝ面や墓詣

山風に吹かれて白し秋の蝶

秋祭すみたる機に向ひけり

二年振りに歸郷

我を迎ふ星一ぱいや夜寒空

稲架けて故郷の徑の小春かな

裾野長ケ島に風岩の下に立ちて

此の淵に棲む鶺鴒の下りて來し

落葉掃いて御成拜みし日も暮れぬ

板壁の水車しぶきや日短き

親の葬すみし火桶に老姉妹

もてなしや妻も火桶ににじり寄り

子供らと日向ぼこしに上る山

傘届け來し我子の丈や冬の雨

月明に殘り仕事や大三十日

松瀬青々

新年

東海に此國ありて初日の出

野の初日萬に叶ふ日なりけり

蓬莱に船着きてより幾世かな

蓬莱へ使の樂や海の上

ありとのみ柱にうつや根引松

春

梅の花凜と已に足りにけり

隱逸の装ひ赤き椿かな

眺めゐる日南に雨氣や春の山

先朝の閼伽の折敷や涅槃像

連翹の宿中食や泊りとす

大和國原あるがまゝ戀に霞みけり

劉阮やことし上巳の男客

鳥雲に北の果にも人は住む

桃の花を滿面に見る女かな

開帳や六朝夢の如く過ぐ

阿波海村

豆の花に力の限り住んでゐる

母も來し此道來たる茶山かな

夜のしばしけふを贏ち得て花見かな

鳥の巣も共に一家や花盛り

うつとりと竹のある日に山櫻

城主をまつる遺民や暮の春

夏

國始め給なんどや着たりけん

山花水鳥皆知己にして更衣

源に筧なほしつ餘花の奥

餘花まじりの青葉をぬけて山鳥が

青簾かけてゆる〳〵在府かな

少閑を牡丹に旅の時移る

舍利放光ほとりの崩れ牡丹かな

若竹や賢劫永きのどかさに

知に酬ふ矢竹心の矢數かな

風雨たゞ知れる治承や頼政忌
奈良の御代はみやびの限り桐の花
日本は男うれしき幟かな
藻の花のまはる時あり魚涼し
砂の上流るゝ螢が清水かな
艸の上を逃ぐる小雨や雲の峰
二三年見ぬ間の紙魚や方丈記

秋

薄雲に一雨なごりやけさの秋
七夕や長生殿の水時計
きらとしてぬれて有りけり女郎花
秋の空の深みに我を見出しつ
蜻蛉の艸来て暇見するかな
數ふれば月見し古人限りなき
この月を今洞庭に誰か見る
故山出し其日わするな渡り鳥

天台智者大師賛

秋の峰山主一衲三十年
先皇をしのぶる晴や菊山家
里の菊日南しづかに野埃す
豆の莢女もゐしと見ゆるかな
夜學子は狭き庵に重なりぬ
下駄の音峰わたりして紅葉かな
秋ふかし枯木にまじる鹿の脚

冬

寒さよりけさは日さして神の旅
埋火に思ひ出されぬ誰ならん
霜に飽く黄葉村の垣根かな
ひつち田の塚と呼應す暮山かな
木の葉中つき出て咲けり冬椿

芭蕉賛

風雲のとゞまる所しぐれかな
胼の手を拭へばあたる薄日かな
冬枯に赤きや雉の眼のほとり
海鼠くへばいつもの味ぞ思ひなる
冬日南が遠くの山に少しかな
夜着の中此夜ぬくうも思ひつぐ
しづかさを下男下女澤に雪の宿
手をぬくう酒屋を雪に出でにけり

二祖賛

求めなき求めに立つや雪の中

武定巨口

午過を吹雪てやめば鶯が

吉野神宮

更けわたり花の盛りを見するかな

淀の町も暮惜むらん春の水

小鹽山鹿の徑も木の芽かな

花曇行けば小畦の雪柳

春深く薄紅さしゝ小貝かな

下蔭に幣とも花のちる日かな

貫之の船路を何處と浦若葉

思はずも菖蒲咲きゐつ城の中

出づべくと妻が扇をさがす也

故園今如何とうたふ更衣

でで蟲を落して通る山邊かな

竹の内を越しゝ昔も單物

水雞啼く蘆荻もありて水無瀬川

暮るゝより粟津が原の露けさよ

菅原

終夜月の影さす廂かな

廣澤は草木にしるゝ夜長かな

箕面西江寺(二句)

この寺や思ひしよりは月あかき

開成皇子の墓に誰ゐる山の月

美しき落葉を砂に神無月

蜜柑在處亥の子の餅はぬくからめ

滕蔓の溝北風の木の葉かな

一ぱいに蒲團敷きけり庵の内

青柴もめでたく交る年木かな

祇園ぞと拜み過ぎけり雪雫

小てまりも山吹もあらめ雪の中

秋萩の眞葛に近く雪見かな

水鳥(二句)

雪風に若狹も近き思ひかな

若狹井の柴もぬるゝか雪解風

野社に袖する梅の寒さかな

横山蜃樓

新年

元日に何のおもひもなかりけり

鳥追の笠はまぎれぬ都かな

家にゐておろかになりぬ松の内

蓬萊の有りとばかりもたのもしき

蓬萊にところの山の木の實かな

屠蘇の香や紅絹の袋にいぶかしき

春

峯入や雲かゝり消ゆる鳥の聲

靜なる歎きのさまや涅槃像

旅をして歸りし人や花盛り

夜ざくらに侶のなかりし今宵かな

春風や雙岡の松の中

花を見て戻りし夜にゐる蚊かな

夏

木の下に住みて立つるや竿つゝじ

うすき色の團扇四五本重ねたり

形代に書きて我名をよみにけり

川風に咲きて散れ〳〵合歡の花

花御堂の花解く寺の若葉かな

栗の花折り來てさせば葉の長き

秋

こすもすの一かたまりの日かげある

秋の夜は人のおもひの言ひやすし

十六夜や水よりくらき嵐山

山吹を萩とおもひし月夜かな

人に逢ふ栗青き山の萩の花

はなやかに見られてゐるや角力取

冬

冬山の道にゐたりし小鳥立つ

歎異鈔かゝれし時の深雪かな

家をはなれて十日あまりの冬日かな

芭蕉忌に粟津原は刈田かな

雪舟走りなかなる人をうたはしむ

雪道を人行けばこそ行きにけり

西村白雲郷

ひとり〳〵が起きてくる雑煮とろ火なり
かりそめに摘む七草をそろへけり
芽柳のざら〳〵せるが扱きたき
二日三日花こんで来し八重櫻
草摘の二人離れてしづかなる
囀りに眼ふたぎ居ればありがたき
鳥の巣や見まじきものを見し思ひ
若葉むく〳〵蕾の藤のもたれたる
老鶯は水ほとばしるやうに鳴く

たち迯る羽蟻に交り蟻うろ〳〵
夜の目寝ぬ雨乞人に曉の蟬
瀧の上田の通ひ路の萩の花
眼縫鵙の眼に秋日影赤からめ
朝霧に个字破分字竹の尖
案山子どれも顔あるものに眺められ
稲雀空が廣うて飛びまどふ
落し水いつを頃とて終りけり
水の音添水鳴らんずけはひなり

草枯やその木その木の根に落葉
土に入る蝸牛這へり蕗落葉
麦蒔やほろ時雨やら霞やら
枯木槿幹に黄な葉の一二枚
革のやうな軸に咲きたる枇杷の花
寒雀顔寄せて何か暇ある
雪の泥葎の雪のもり上り
牡丹雪となりて入日や風呂あつき
獸に似しこゝろ人にある寒さかな
みそさゞい二つであるがほゝ笑まれ
鴨の嘴日經てしなびの見ゆるなり
鴨捕は枯葉臭うて穢なる

松尾竹後

柿花叩く戸もれ灯ざしに立たし人
牡蠣舟を搖りし上げ汐上げきりぬ
榾あかりとそとの明りの夕まぐれ
江に水車かけしさゞなみ簾かへる
沼ぞひの草戀ひ馳せし雪舟のあり

『海鼠の如く』より（九句）

をとつひの海鼠と。もだしけふもあり
のどかなる聲とては絶えて久しき窓
たらちねよかすかに啼くは春の鳥
春の夜を二人しあればうたがはず
春の夜をもえは上らず燃ゆる火の

銀座にて

びろうどに眞珠は冷ゆる雪はふる
水鳥のながるゝ水の流れかな
をどらしき乳房つゝみて單もの
樫の實のおちまろび寄りしづまりぬ
迎へ火のもえつけり母のうしろにゐる

震災に罹り老母を奉じて歸郷（五句）

われらのものの縫はるゝ夜の菊の花
我家ほしくおもひ歩けり冬山邊
なにかしてをればやすさよ菊枯るゝ
九月一日とおもうてゐしがまぎれけり
冬のもの母のも交へ一行李

行水

夕がほにあかるきかくしどころかな

再び上京して九月一日日比谷にて

恐しき地のおだやかさ花芙蓉
木兎の飛ぶことのあるか猶のある

京都

車までの雪の深さよ東山

鹿野山の花

夕には雪せむ吹きのきはみかな

亡母のなきがらを埋め歸りてふる里の人々に申しおくる

墓ひとつふえて故山のみじか夜や

亡母一周忌

常夏や花のたぐひも一めぐり

御大典

菊かざせゐならびて萬歲と申さむ

獨居

冬夕霧の來てゐし留守格子
花盛りのいづくとなけれこゝろ急き

精神は斷花白し老梅忌

雪山はうしろに聳ゆ花御堂

欣然口を開くに似たり蕗の薹

春泥やいづこを關の蹄跡

春泥や嘴を浮めて枝に鳥

某子新居

松籟を聽いて巣にある燕かな

十方庵を訪す

幾里行く脚の力や春暮れて

山燒の燧袋も古りにけり

奈津芽與親會

琵琶罷んで皆春惜む人ばかり

石井露月

晩年の作より

大葬遙拜

大空の春は立てども陰りけり

能代俳句大會席上北涯、碧、一堂、鴻南四君の靈に俳星復興の事を念じ

世の中は小判の沙汰や猫の戀

住吉や探題更に藤の花

蕃山の葉山の中の幟かな

合翠來る翠曉起山に案内す

山に上る僧俗二人夏の露

牛莊果園産の蜜柑を贈來る

蓬萊の香の果やたかむしろ

煙霞の旅より歸りて

蚊帳の夢きのふの山の翠哉

短夜の心あまりて鳴く蛙

金澤柵

薰風や兜を祀る杉の中

水を戀ひて啼くらん鳥ぞ早苗取

露涼し夜と別るゝ花の樣

日中や地に梅干の壺一つ

菱江來一泊

只是の如し夕餐と蜩と

宇外桃實を贈來る

羅や王母が袖にかくすもの

悼

胸打騷ぎ葛吹く風止まず

徯後坂

月日知らぬ岩に青蔦からみけり

鮎を釣る故人の面や上つ瀨に

串けづる鮎の七瀨の主ぶり

雨乞に行くや埴生の小屋を出て

雨乞や涙を綴るのりとごと

再遊松源院(二句)

青山やかさねて嗽ぐ水の秋

禪院の流水蜩の鳴く

大館能代間

稻妻や筆ゆるまゝに一の山

三郡の水平らかに稻の花

眞野宮

鄙めきてさるすべり咲く畏けれ

眞野御陵

蜩に何まどふべき物もなし

佐渡にて（二句）

君が星臣が星宵々の秋

浦波に足ぬらし來つ胡麻の花

井波瑞泉寺

幾秋の泉を旅の鏡かな

木津神崎別

杯を置けば鳰啼く別れかな

金福寺

鷄頭の種採ることを咎むるな

桃山御陵

菊昔ながら畿内の霞かな

思ひあがり雀もとべる花野かな

花野行く耳にきのふの峡の聲

普門寺住職に寄す

聞說伽藍の內外秋の風

魚肥えぬ萩の下露しげきより

北陸道中

墨の痕と泉の聲と今朝の秋

[illegible]坂

天の川注がん岩門開けたり

木枯や脂がかりし魚の味

年中行事

用もなき暦買ふなり主人ぶり

短日や搗きこぼしたる畑つ物

御[illegible]川舟中有作

水鳥の浮くも潛るも淨土かな

西遊歸途

草枯や一夢と消えし都の灯

新築小學校開校式

寒日や敕語捧讀奉答歌

妙心寺聖澤院

朱の椀にすこし飯盛る霜夜哉

短日や誰ぞ下り來る大悲閣

法成寺

短景に鳥を點ずる木末かな

吉野行

歌垣のむかしを匂ひ草の花

太閤はしぐれを知らず吉野山

塔尾御陵

陵やありとも見えぬ時雨の灯

藏王堂

ますらをが鎧の塵か草紅葉

大阪城址

露霜の結ばん草木なかりけり

伊勢

秋深し神馬も戀ふる五十鈴川

御方に楯けぶらすな吉野人

黄檗山

黄檗の道場冬の片日かな

羽越線車中（一句）

草枯や海士が墓皆海に向く

百姓に教へて倦まず山眠る

島田五空

射場

矢屏風の三斑中黑や明の春

梅さむし驚き易き魚の影

文舟父古稀

遠つ嶺の殘んの雪と眉白し

初雷や梢色づく嵐山

巣の鳥の嘴黄なり佛生會

灌佛や鎌倉山の青嵐

蝙蝠に磯たそがるゝ藻の香かな

避暑人に果もの紅し卓の上

馬に乘れば瓜も呉れたり暇乞

雨乞や雲白々と嶺の松

能代鴻擧婚

灯の水に親しき若葉かな

十方庵小庭成る

鯉の背に淺き水やな夏の月

露けしや星の逢ふ夜の袖袂

一葉ちるや檐に洽き月明り

朝顏や十和田觀し眼に淺碧

稻の秋一茶と云ふは彌太郎か

奉迎鶴駕

高歌へこの國ぶりの籾磨も

巖裂けて天門闢く紅葉かな

引よせて枕冷たし後の月

張り換へて行燈白し魂迎

瀧つせの絲の亂や神の旅

草枯や郷先生の墓二つ

暮早き渡し一つをかゝへたり

髭黑の大將もゐて玉子酒

正宗寺鳴雪翁埋髯塔

しろがねの髯埋めけん霜柱

福知山途上

しぐるゝや明智の城のありどころ

長孫女出生

眼を擧げよ春來る空の朝みどり

病中

枯つたと細り行く身や風の音

わりなしや朱研に及ぶ榾埃

絲垂れし障子の針や暮早し

青木月斗

新年

元日や一舟行かず川靜

初鏡五十の面剃りにけり

初芝居大阪が持つ鴈治郎

聖旦や蒼生の賀に

屠蘇の醉金短冊に覺束な

淀川や水の碧に初明り

春

奈良一日寒き佛と梅の花

奈良にて

燈籠に殘る鍍金や梅の花

山峽を朝に下る霞かな

峽中の遲日鶯鳴きにけり

春陰にかり寐さめたる欠び哉

春曉や燻香匂ふ枕上

遲き日や机の前の川の色

城頭に大阪を觀る霞かな

春晝や瀬につき立てし竹動く

囀つて／＼野を曇らしぬ

昨日見し女に逢ひぬ花の旅

醉へば寐る癖を春夜の憚りに

連翹の覗ける牆や醍醐道

久方の月の仄かに春の雨

壺燒や暖と云ひ脱ぐ旅合羽

夏

舟中に山を仰ぐや青嵐

神樂歌聞ゆる宮の茂り哉

乍雨乍晴や今年竹

百合の蕾狐の顏に似たる哉

黴の香も物なつかしき佛間かな

梅雨茸や柴積み小屋の立ち腐れ

吉野川の落花ふくみし鮎なる歟

白雲の峯つくりすや月の前

若楓風雨の山となりにけり

夕立や夜宮の町の宵の程
大雨に濁りかへせし植田かな
ことりとも庭木動かぬ暑さ哉
夕凪のとけて來りし涼みかな
簟焜爐の灰を飛ばしけり
涼み寢や隣家の蟲のよき聲に

秋

天の川夜汐音なくなりにけり
萩の花晝僧久しく便りなき
朝顔やよべ焚きすてし花火屑
山の燈の消えてはとぼる野分かな
蟲の中に寢てしまひたる小村かな
雁鳴くや浦の泊りの波の音

稻の花朝日涼しくなりにけり
秋の夜や旅籠の硯中凹み
山本や露の燈の三五軒
蠟燭に佛拜むや秋の昏
粧ふ山峰より飛泉懸けにけり
落日が一時赤し稻を刈る
末枯や竹積む馬に道ゆづる
行秋や日々に瞑さの北の海
宮様の森黑々と夜寒かな

冬

春日野や留守もる鹿のそゞろ顔
凩や日暮したる金福寺
朝寢よし庭の焚火を聞きながら

山深み幽禽鳴いて水涸るゝ
大風の日を曇らする枯木哉
まつ黑な小家解きゐる冬野かな
冬籠死灰に似たる心かな
沍にある草木にのぼる朝日かな
寒聲や目鼻そがるゝ向ふ風
蕪村忌や蕪村を知れる人や誰
風落ちしあとの寒さの年の暮
宮の枯木ま白な富士の見ゆる也
炭ついで主人見せけり翡翠環
霜の鐘芒が骨となる夜哉
飄々と風に一羽や寒鴉

湯室月村

元日のよき火となりし圍爐裡哉
つゝじ柴して戻りけり山始
雪の上を竹引き行くやとんど燃ゆ
藪入の蒲團の中や親拜む
藪入にくすべ上げたる小家かな
藪入や覺えの石に川渉る
東風吹くや一の鳥居に我小さし　明治神宮
近道に飛び越す溝や蕗の薹
つめ替へて焚く炭竈や冴え返る

下萌や裏門這入る西大寺
藁小屋の一方口や春の風
麥打つや流るゝ汗の手に額に
晴れて今朝冷たき水に田植かな
三室戸の寺出て買ひし新茶哉
草取に身を焼かれ來て晝寐哉
麥飯に腹がふくれてひる寐かな
山に獨ゐるに夕立止まぬかな
稲運ぶ重たさ云はず人の前

厩の戸納家の戸しめに夜寒かな
實の入らぬ山田いつまで添水かな
暮の雨庭せまき迄稲入るゝ
ゆかしさよ落穂はさみし縮の帯
人折々嵯峨の徑の秋の暮
年貢納めに交る一人の女かな
短日や米買ひの來て倉開ける
水霜や家内揃うて田に出づる
炭焼の辨當菰に包みけり
柴くゝる藤見て置きし枯木かな
拭かでかへす重箱ぬくし亥の子餅
干菜湯に誰れ入り居るや音のなし

岡本圭岳

新年

大杯のあと覺えなき年酒かな

禮帳や第一筆の御老分

冷泉の朗詠すゞし讀始め

あたゝかく暮れて月夜や小正月

藪入や人に見らるゝ町の髪

藪入の夢に日のさす蒲團かな

春

花待つとしもなく山の眺められ

なか〳〵に返さぬ渡し風光る

巣をつくる氣配枝とぶ小鳥かな

野遊びや酒をにげゐる五形摘み

霞濃き海にそゝげる大河かな

椀が泣く熱さ匂ふや蜆汁

夏

船に見る湊城下の五月鯉

雨霽のあけいそがしつ子規

洗濯の疲れ出でたる晝寐かな

鯖鮓やつましくためし竹の皮

舟宿の朝寐起すや行々子

蓮の花崩さで止まぬ大雨哉

秋

引きからうて夜のもの小さし秋の蚊帳

立つ秋を閑かに居れば蟬遠し

山寺や桔梗さしたる筧うけ

朝露や渡舟にかゞむ裾からげ

遲れゐし雁追ひつきぬ湖の空

からすみに盞なむる酒量かな

冬

薄雪や往來まだしき町の曉

水鳥の叫びいよ〳〵江晴れたり

切り落す石が皮剝ぐ冬木かな

うとまれて佛いぢりや冬籠

門に立つかたゐ咎めつ年の暮

年の瀨の往來に交る夜番哉

花木伏兎

朧よりさめじと眼伏せてゐる
花散ると見れば我れにもかゝりけり
春陰やあらぬ方より蝶の飛ぶ
いつとなく春睡われを樂しうす
道々や草芳しく熈々たる日
大鰻のうねり動くや鯛の下
鶯に日暮るゝ山の住居かな
藪入や車の行かぬ奥在所
蟲干の風さや〳〵と匂ふかな

いづくより來る涼しさや燈し時
のこしくれし行水つかふ夜の庭
水雞鳴くねざめうと〳〵夜明方
罵つて燒酎ふくむ火の如し
つくばひて煙草に乏し螢賣
陶枕のすべり心地をうまいかな
端居しつ話少き夫婦かな
門さきに山の尾低し月今宵
ねる前を月見に出たり二三丁

小望月田水の溢れふみにけり
秋の野や探しあてたる人と行く
帚持つ門の曉澄めるかな
括り置きし萩中々に亂れけり
太祇忌や眠るが如く句をうめく
水霜や紅折れし蓼の莖
默しゐる心よみかねつ炭の世話
掻きよせて山成す雪や夜の辻
ふるさとに絶えて戻らず日向ぼこ
眠る山かさ〳〵足を踏み入るゝ
朝の間に掻きし落葉や籠二はい
行年の日ざし茫乎と庭ふめり

阪本四方太

春の夜や物に恐るゝ女の童

雛の間を掃く朝の掃除かな

品川の汐干曇や舟の数

打ちつゞく菜の花曇壬生祭

紙鳶に蘇枋塗るべく繪具皿

舟中に冷たき酒や鮒膾

市を出る柳の道や春の雨

ぬるみてや蜷はひまはる水溜り

蜜蜂や雨に集まる箱の口

青麥の中に伸びたる杉菜かな

松杉の暗きが中や藤の花

夕川を渡りて涼し麻畠

山遠き霞が浦や蘆の角

一坪の苗代水やさゞら波

日入るべく遠雷や雲の峰

夏羽織懐にして戻りけり

茶を賣つて世を渡りけり更衣

午過ぎや卯の花くだし柩行く

梁上の君子の尻や明易き

古疊つめたき秋の書齋かな

石上に梅の落葉や庭の秋

稻妻や物靜なる西庇

雞頭に芋掘り盡す畠かな

冷酒に柚味噌一つをつゝきけり

水仙や葉蘭の陰に日の寒き

とろ〳〵と榾火消え行くあくびかな

あらぬ方に鴨の聲して湖心亭

大津繪を壁に張りけり置火燵

冬の蠅臼ひく上をまはりけり

枯蘆や川を亂りて渡すべく

萩原蘿月

菓子食うて茶屋を立出る木下やみ

侘しらに菊なつかしみ植ゑにけり

雲鳴りもこの頃きかず茂る樹よ

金屏に後をかこふ露けくて

小鳥鋭うひらめく茂家あらた

草投げて別るとも見えず蜩に

稲の穂波に來し方も忘れ鴫の疾き

しぶき草に落ちてやすけれ寒照りが

葉づや荒きねばり木の一芽隠るゝよ

あかねそめし海の眞光り萱の芽に

砂の音のかそけくも消えぬ萩の根に

たのしみに蟲を殺す野のかゞやき

花に遠ざかる野には風も立つなれ

乙女よこち向くな沈む〳〵陽

青空となり水際の蟲のゆくへ

炭火をかき起し今日も終りの夜ぞ待たる

あたゝかさ足につく厨の砂

をどれ〳〵若草に風到れり

をどりつかれて足もとの草の影

火鉢の灰が立つ病む顔に

枇杷山の枇杷のをぢさ酒飲まそ

齒朶に陽見ゆ盃とく持て

芒戰ぐ日蔭へ歸り行くなり

減汐の西風強し蠅を見つけ

窓下の芒の中の人と見合はす

子供のあくび冬の夜が來たぞ

子供健やか父の酒もゆたか

行く方に陽の入るや空地の青草

はれあがる風をいとひ兄弟二人

五月人形すゝぼけて妻の晝寐

新海非風 (照影無し)

抱いて居る鷄も鳴きけり今朝の春
野も山も神の灯ともる睦月かな
品川や海一面の雪濁り
捨舟のひとり流るゝ雪解川
釣鐘に梅の影這ふ月夜かな
鶯や黒門を見に旅の人
鶯や生麥村の四つ下り
一のじに御成街道燕かな
一のじに思ふことなき燕かな

玉川の眞中をぬく小鮎かな
芝山や眞夜中頃の花吹雪
若草や野末に富士の三分の一
山里の春は淋しき茗荷かな
住吉にともし一つや時鳥
時鳥中洲は雨に消えて行く
古道にあふ人もなし墓參り
松の露竹の露くる筧かな
三日月や阿波の鳴門の波がしら

鹿の聲細谷川を飛んでけり
山寺に鹿のあつまる月夜かな
千丈の瀧の岩間やむらもみぢ
白萩の末は小川の月夜かた
鐵橋の靑さびふくや年の暮
こがらしのあるゝが中に入日かな
寒月や下町かけて塔の影
川一筋夕日に光る枯野かな
橋三四水ちよろ〳〵の冬野かな
獺の氷を叩く寒さかな
炭竈にちりこむ峰の落葉かな
其中に氷る池あり冬木立

五百木飄亭

昭和新春

若くいます我大君と御代の春
草の戸の我に溢るゝ初日かな
庭松に凪元日の日ざしかな
初空の雲皆山にしづもりぬ
此の年もしたゝか雜煮參りけり
陽炎に丈なす髪を梳りけり
滿を引いて花に天下の憤り
日もすから囀り鳴いて好き日哉
春風や折々かるき街ほこり

松に煙る暮色の雨や南禪寺
天下猶ほ取り得ず獨り蠅を打つ
急湍や滿山の綠迸る
水更へて金魚目とむるばかりなり
蜻蛉取り日にくやけて逞ましや
草も木も夕立つ雨にをどりけり
散る一葉我に天地の響あり
一面に月下の蟲となりにけり
やゝ更けて良夜の簾うごきそむ

秋晴の雲高々とかゝりけり
水底に雲の光や秋たけし
酒氣白虹の如く寒月を貫けり
凩よやよ我裸木をそれ奈何
雪折れの竹凄まじき力かな
默想の顏埋めたる炬燵哉
ともかくも冬暖かに着たりける
海鼠ともならで海月の五十年
無爲の君無能の我と暮れにけり
乏しきを分かちつくして除夜の鐘
行年や我愚益々ほしいまゝ

大正除年

行く年や畏こかりける十五年

藤野古白

元日や夜に入りしより女聲

初日影夜は明けていまだ富士見えず

吉野路や冬の櫻に松飾

傀儡師日暮れて歸る羅生門

のどけさや五器に飯ある乞食小屋

畑打や柳の奥に村一つ

松風も村雨もあり須磨の雛

春雨や石の濡れたる金閣寺

花守の散る時は寐てしまひけり

大阪や煙突に立つ雲の峰

旅人の晝寐のあとや草の蚤

藻の花に小便をする船頭かな

夕立や笠の上ゆく峰の雲

山陰や一村暮るゝ麻畠

出汐の浪走り行く月涼し

蚊柱や蚊柱や三十三間堂

八月や月になる夜を寐てしまひ

高燈籠枯葉と共に卸しけり

傾城の送火急ぐ化粧かな

吉野にて
稻妻や天の一方に花の山

名月や鶯の啼く山あらん

乞食を葬る月の光かな

今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

芭蕉破れて先住の發句秋の風

秋海棠朽木の露に咲きにけり

凩のあとやまことに山と川

島陰やしぐれて落ちし三日の月

古杉に路ある雪の峠かな

松の葉をこぼれて落つる霰かな

洛陽の灯おびたゞしき師走かな

佐藤肋骨

若水や裏戸を出づる星明り

歯朶枯れて餅に斑ある十日頃

陽炎や藁掻き出す厩番

滿潮やかくれんとして海苔の麁朶

亡き妻の鏡に春の寒さ哉

盃になるふる花のむしろ哉

敵遠し午あたゝかき壕の内

苗代の水田に晝の雲動く

菜の花や町家はるかに薄煙り

繪雜誌の附錄なりける繪雛哉

奉納の手拭さがる若葉かな

夏山や砲聲遠き雨の中

亡き足の蚊を打たんとす寐覺哉

泉水に藻の花入れて魚放つ

日影となり蟻蘂にひそむ牡丹かな

白雨や蓮の浮葉に風わたる

戀塚や女竹ひよろ〳〵夏瘦する

一つづつ小皿にのせて柚味噌哉

七夕の色紙ぬれて籬に落つ

掛稻に夕榮えて比叡の雲白し

紅葉ちる筏の上のけぶりかな

蜩や呼びこまれたる豆腐賣

傘の如く開きて花火消えにけり

五六人蜻蛉つる子の川渡る

腰繩の寒き姿や笠まぶか

片隅に落葉吹きよる水田哉

新らしき筧設けつ冬構

高く低く紙鳶のうなりや町はづれ

足伸す湯婆のあとのぬくみ哉

小屋かけて木を挽く冬の山田哉

柳原極堂

春風や船伊豫に寄りて道後の湯
土筆いばらの中に痩せにけり
ふみにする他愛なきこと旅の春
船呼べば灯うごきけり春の雨
病む人に看護のひまや梅を折る
灯ともしてありけば梅の影うごく
明くる夜をまだ起き出でぬ雛もあり
樹にちら〳〵濠にちら〳〵春の雪
夕立のあとを小草に入る日かな

家はみな海に向ひて夏の月
大井川舟矢の如しほととぎす
清水わく其勢を見て居れり
團扇とりて思ひ〳〵の端居かな
朝寒や空を日の照る谷の家
奈良は鹿の鳴かざるを見て戻りけり
書に向ふうしろに妻の夜寒かな
我庵は南をうけて菊の花
菊くれる隣の優婆夷ねむごろな

朝寒やめら〳〵燃ゆる黍のから
鈴蟲や燈火ふかき草の奥
奈良の町鹿尻ふつて走りけり
寒菊に米喰ひこぼす雀かな
我影の崖に落ちけり冬の月
座蒲團に木枕つつむ泊りかな
戸の外をすぐ長圓寺の冬の月
白足袋の十文と云ふを女なり
餅つきの裏家の人の多きことよ
ぬけ出でし蒲團をかしく我に似たり
海鼠汝ふみつけるべき面もなし
合客の蒲團引張るぞ小ざかしき

村上霽月

轉和句屑

風梅花落紛々
雪に似て散る梅に似て白き飛ぶ

鳥啼山客猶眠
筧落ちて檐に湛へて水ぬるむ

一灶香中得意
鶯の聲終日や不作不食

人忠信宗許書
鶯の日々訪へり老いて猶

穆如清風
書を措いて打仰き寐たり簟

養意延年
須來經擇びて夏書始めけり

放情自娯
竹描いて夏書の餘墨盡しけり

時來道泰
雲の峯彌勒の姿仰ぎけり

天涼人健
網の澁と漁夫の裸と孰れ濃き

樂哉無一事
就中李太白集涼しとし

壺中有酒頭有髮
短檠の灯に迫りけり五月雲

長作閑人樂太平
鮎釣りて酒買ふ價剰しけり

方床曲几傲羲皇
蘭湯や岩間の溫泉槽に汲み

人吾容者但有清風
話盡きて湖の夕立瞰下しけり

天上人間諸仙無恙
谿を隔てゝ大瀧望む窓涼し

萬卷山積一篇吟成
筆擱けば流鶯の聲遠きより

萬重雲樹千疊雲山
蒼天に雨の名殘やほとゝぎす

由我者吾不我者天
犢鼻褌の痕の白さよ眞ツ裸

拂彼白石彈吾素琴
丹頂の頭かたまけ青嵐

白雲在天滄浪無際
更衣川尻の洲を歩きけり

半日讀書半日靜坐
降り晴れて殘花流鶯今日も在り

芳草有情夕陽無語
京を出て流れ淀めり春の水

落花翻落紅徑無人掃
醉ひ臥せり花の庵の主客なく

白鷗飛處極浦黄犢歸時夕陽
耳に澄む遠雲雀あり佇めば

詩可呈於佛愁難說向人
晴れて猶雨の名殘の柳かな

靈石一千尺大華百億年
倦まず鳴く鶯厭かず聽く日永

濁酒聊自適鼓腹无所思
寐て聞くや深山木に降る春の雨

道遠非常道天小有天
芳草に寐轉び石を枕とし

春秋多佳日園林無俗情
花白し主翁の髯の白きより

閒法看詩妄觀身向酒慵
無字もなく趙州もなく秋涼し

獨園禪師相國寺に住し塔中玉龍庵を以て居士林に充てらる。山内の東北隅に在り、後ろは名高き相國寺藪なり。

笹ちるや深くも來ぬる佛路

藪に生ひ出る筍は居士等の折るに任せたり。

筍に十日生きけり捨坊主

入室痛棒を喫し出でゝ涙を竹林の走水に洗ふ。末は流れて大内に入り御溝水となると聞くも畏し。

螢火や涙を洗ふ御溝水

筍盡きし頃とて藜に生く。

朝にけに藜くひけり夏籠

獨園禪師遷化、代つて東嶺禪師嗣法の後は、居士等次第に散り〳〵て遂に余一人とはなりぬ。

居士林も蚊帳の別れと散じけり

庭隅一叢の山茶花、藪をうしろに咲きては散り、散りては又咲くを見るも只一人の物淋しく、

無始無終山茶花たゞに開落す

寒川鼠骨

或時は大衆に伴はれて托鉢に京の町へ出づ。

冷めたさや鉢さゝげ行く掌

冬至の夜を大衆の無禮講に打交りて、

冬至の夜弟子の踊ぞ佛なる

庵より師室に通ふ道の茶畠は、冬かたまけて清しき花を咲けるも我心は結ばれ勝なり。

師の坊へ茶の花道を行きがてつ

極月一日臘八の接心に入る。昧爽枕頭に響く鐘もつれの音にはあいずけり。

臘八の頭くだけと曉の鐘

鷄を起床して咳嗽に行く僧堂の廊下、人のしはぶきの聲もつゝましく、

臘八のしはぶく聲も闇の中

庭に出づれば霜晴れ深き空を仰ぐ。

臘八の第一朝や深く晴れ

太鼓　音につれ大衆に起して講堂に入る。

臘八の提唱に入る太鼓かな

夜あくれば禪堂を出づ

趺坐疲れ粥座にかへる道の霜

路にして顯る山門。一僧將に去らんとす。痛棒に耐へでやと思ふも我心さむし。

山門を一僧さむし石の道

子欲しく思ふ正月よその子の着物
全紙へ一字老師の吉書龍躍る
初荷の灯向ひ合せて問屋かな
座について加留多上手のさりげ無く
脚氣やゝ怠る湯治春暮るゝ
松が根の笹に及ばず春の雪
腰かけて讀むやふらここ輕く搖り
柵の杙に角摩る牛や蝶とべり
月天心身に影浴びて梅に立つ

大谷繞石

泉水に篝くづるゝ櫻かな
推敲の一偈一日落椿
舟出送る宿の提灯明け易き
夢心夕立すらしと寝返りに
方丈の油團の光澤や棕櫚團扇
松手入れ日高にすみぬ心太
祭更けぬ軒提灯の或は消え
馬賣りて久しき厩栗の花
一山に響く魚板や秋ゆふべ

鹿笛の一つは谷へ下るらし
僧と仰ぐ山門の月遠砧
立つ鹿の頸が見えけり常夜燈
蟲なけばなかねば更に夜の淋し
作りすての菊何時からの明家なる
在りといふに皆寄り來るや茸狩
洛外や一路の果の小春寺
冬の雲いつ沈みたる夕日かな
黄檗を出て宇治道の時雨けり
鯨汁熱き啜るや外吹雪く
宵火事の消えて霙となりにけり
奥の院鎖しに上る落葉かな

吉野左衞門

元日やたゞの樣なる小百姓
兎角して寒に入りけり松の内
小角力や初番附を一抱へ
御戸帳のはづれ拜むや春の風
肥車畑に引き去る霞かな
雁風呂にカンテラ灯す廂かな
溫泉を出でし疲れや二日灸
白梅に下駄よごしたる畑かな
短夜や明け行く月のあり所

夕立のぽつりと來たる八ツ手かな
雲岫を出でて日かげる青田かな
里方の田をなつかしみちよと植ゑし
繭買の逸早く黃帷子著て來たり
風呂の火を火鉢に移す蚊遣かな
心太かな〳〵啼いて水ぬるし
日每掃きてすさめぬ栗の落花かな
夏菊に唐箕の塵のかゝりけり
初秋や眼覺めて被る夜のもの

寐つゞけて夕べとなりぬ秋の雨
案山子喟然として曰く如かず遺民とならんには
柚味噌是あるかなと酒煖む
休暇盡くる心忙しや鯊を釣る
朝顏や庵あらはに夜のもの
菊に對し心靜かや置厠
山畑や蕎麥の花より霧晴るゝ
來年の眼前にある德利かな
今朝の雪虛子市に蓑を得しや如何に
豆打つて廻る間每の灯かな
海晴れて水鳥近く啼くあした
枯木宿親しきもののランプかな

中村樂天

大皿の鮓の出前や松の内

通る人に落ちたる羽子を侘しめり

軒先に皆海苔干して小家勝ち

芽柳の並木見下ろすホテルかな

水底に映れる空や蘆の角

爐塞いで淋しき老となりにけり

雨戸まだあけぬ二階や花の土手

勝馬を曳いて通りぬ東風の町

夏めくや花鬼灯に朝の雨

家と倉のあはひに涼む床几哉

土手下に紫陽花見えて小料理屋

日傘傾けほゝ笑みかはし別れける

乳子搖りつ窓より日傘受取りし

松落葉めぐり流るゝ清水かな

各〻にダリア持たせて歸らせし

朝顔や枯竹攀ぢて垂れ咲けり

日除ゆらぐ毎に日あたる西瓜かな

障子閉めて庭一ぱいの秋櫻

行き過ぎて呼び戻されぬ墓詣

垣外は家並人語や墓地の秋

秋晴を佛の御手の修繕かな

穗先すこしほのめき出でし芒かな

籾干して庭の隅なる雁來紅

門を出て刈田淋しく眺めけり

この宮の紅葉しそめし雜木かな

髮置や白粉の顏に觸れし幣

夜の海へ靡く焔や大焚火

著ぶくれて晩餐會の主人かな

藁苞のすが〳〵しさの納豆哉

室咲きの木瓜の赤さや春隣

水落露石

春

君が齢よ春はこれより百千鳥

春宵や遊子行の句をこはれかく

春雨や軒をつらぬく松二木

伸ぶるまゝに伸び蒲公英のほほけ毬

松間たどり來て磯の明るさ春の潮

蒲公英の蓄めるまゝにやかれ居り

櫻垂れ枝の雌よりの見下ろしのやけ芝

終焉の句

昨日の事が夢のやうな春曉の雨

夏

衍流るゝはたゝがみ強羅への細みち

ほとゝぎす茶摘みにかゝらぬひとむれの女ら

明治天皇崩御の節

天日悲し明治の御宇の夏盡くる

蜩の秋さそふ夏の夕淋し

扇の地紙の幾代へしその金沙子哉

卯の花くだし濁らぬ井愛す淀にすみて

秋

天の川暮から潮の逆流れ

高きに登れば眼前よぎぬ渡り鳥

鉢を洗ふ山僧や栗は爐にはぜて

牛祭り牛出す村の灯を藪ごしに

萩の筆ひさぐ家叩く月更けて

堤そひ來て低き家疎ら十三夜

貝割菜摘みし畝の穗蓼

合歡咲き殘る崖近の椅子により

堀を覆ふ芭蕉やぶれて歸燕哉

後の月も過ぎて尾花のちる夕

踏繪の事も爐邊の話柄クリスマス

いけがき刈込みしまゝさける山茶花

冬

干菜ほし暮るゝ粉雪のちらつき

鮟鱇鍋芝居の型を書き記す

春ちかき蒔ゑ鼓の胴しらべ

春をまつこゝろそゞろに手毬うた

小弓引冠落したまひけり

鞦韆を蹴つて下り立つ芝生かな

接木すと隙見す人や垣の外

二三人殘りて汐の滿ちんとす

捨てるといふ鷄を貰ひ養ひし

藤棚の片寄せてある普請かな

菜の花や小村にはやる鷄合せ

棧の上初めて涼し新豆腐

牛は皆榛の木蔭に夏の雲

數藤五城

蓮池を前に夏書の机かな

踊らんとするわれを見る恥しき

乘合の舟の相場も花火かな

水打ちし餘りの水や金魚鉢

芥子の花雲のかげろひ見ゆるなり

家々の籾すり歌や月更けぬ

宵闇やポストあるべき此邊り

添士可人

橋一つ我に掛れり秋の川

燈籠に留守と思ふや明放ち

或る日小鳥空を蔽うて渡りけり

他力迴向

止るも飛ぶも是なり蓮の實

いささかの油こほるや龕子の灯

蒟蒻の累々としてこほりけり

幾代の肖像寒し大廣間

雪礫車胤が窓を驚かす

鷹狩の士を得て城に歸るかな

酉の市に到りも着かず戻りけり

河豚食うてあしたの朝を笑ひけり

鶺鴒や菱取舟の舷に

寒菊や蕪引いたる裏の畑

柿落葉梢侘びつゝ掃きにけり

柴浅茅

貧乏を妻と我れ知る雑煮かな

初夢にまざと踏みぬるものの尾よ

旅人に伊勢路の松の緑かな

梅咲きぬこの窓夜は灯るべし

桃咲くや毛深な馬に女乗る

燕や法隆寺村の百姓家

鳥は雲に愁ひを誰れと別つべき

白日深夜の如蝶二つ浮めり

春雨やすたれし藝を守り居る

打晴れし袷にはしる銀波かな

或る日五月のまたやあるべきめぐりあひ

今宵しも青き團扇の風愛しむ

金魚夕珍陀の壺もなやましや

殺されて死なんとぞ思ふ閨の薔薇

さすらへて粽も知らぬ男の子

水を淺み心太心太の上に

竹氣に染まりて秋の立つ日かな

人の腹のからくり見えて秋の風

さびしらにかな〱鳴かぬ夕あり

好事來今日も明けぬる鵙高音

朝歩きコスモスの宿を見て返す

臼轉かし來てな折りその菊赤し

秋の空に黄落を待つ銀杏かな

いつの間に時雨れてゐたる坪の石

霜風を滑らに漕ぎぬ日の出前

雪つぶて雪の寐鳥を追ふあはれ

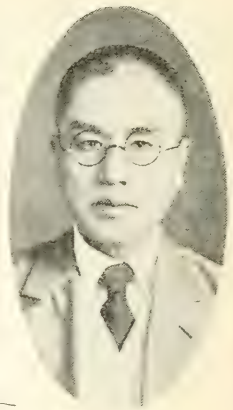
大まかに鱶は凍て居り市の泥

酒さめて老少を言ふ寒さかな

沖つ邊は波の穗白し冬椿

鴛鴦の立つ時水に映りけり

野田別天樓

蓬萊の南は海へかたぶけり

錦木の門の早梅ひらきけり

蕗ニ蘆江の白魚とならべ見る

あらそふところなき鶯の高音かな

河内赤坂楠公城址

蝶鳥の久しき址となりにけり

籠になれし小鳥みなゐて春の暮

大和岡寺の觀世音菩薩を拜して

御佛の御膚春の匂ひかな

春の海渡らばそこに何がある

野ざらしの旅より旅へ鳥雲に

花七日ものの盛りの淋しさよ

草に散る櫻はやすき日なりけり

暮れてよりしる灌佛の寺住居

雲うごく茨の花の咲き散る日

大山の雲を下りて鮎を見る

ものの味鮎雜炊を知音かな

昭和御大典奉祝

新涼の草をにぎりて野におもふ

色鳥ややぶしもわかぬ御光りに

夢殿の夢の上なる秋の雲

寺簀子つやゝかにして秋の聲

法隆寺子規忌にて

柿くしく寺の秋風つもりけり

いざと別るゝとき蜻蛉のおびたゞし

夜學寺遊行の杖を床に置く

夕榮に草の蟷螂からみつく

稻の中水の音して日和かな

行秋の二日三日や蕎麥の莖

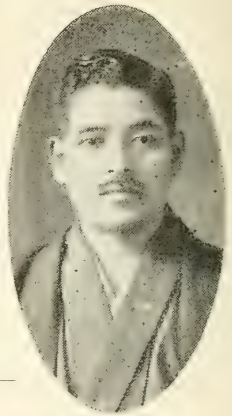
鉢の木の枯葉うごいて暮れやすき

夜をこめて灘の千鳥の遠音かな

とはに星凍てゝあるべく仰がるゝ

日の曇りに梢ならぶる冬木かな

春近し寒きが中に日の匂ふ

手の平に初日の惠み滿ち足りぬ

年賀人地震を知らで來りけり

立止れば香我れをつゝむ野路の梅

天變は雹雷つむじ桃日和

小石蹴る大川端や春の宵

春曉の雨が泥濘を作りけり

四國俳遍路

先達は石の佛や遍路みち

鳴雪忌

殘雪を紡がばあらん翁が髯

木因坊一世の墓

傾けば、石を下す音の餘寒かな

中野三允

俳毒句屑

醉眼に伊豫節の小杜若躍る

腹中もまた新綠や茶一椀

短夜の夢や溺るゝ酒の海

巨人一度手振へば虹や夕立後

蟻の愕き大地に牡丹崩るゝ音

舷を叩くより遠き水雞かな

線香花火夜のでで蟲の角の上

息つまればうしろ歩みや青田風

雹の大きさとても鎭守の力石

明治大帝御一周年

夜涼水に似て神去りましゝ刻到る

西那須乃木神社

雲の峰に現ず將軍の騎馬姿

暑さ戻れりアップルパイに動く頬

差鮨の心にもなりて見たりけり

淀君は關東恨む秋ぬけ毛

子規忌

吾行けば共に歩みぬ遠案山子

俳諧の秋の涅槃や蟲繁し

露月を悼む

寂寞たる乾坤や南無南瓜佛

身をくだつ姿寒しや漬け絲瓜

周郎が魂大に放つ霜の聲

東京市主催上野公園御大典奉祝

枯野見の女を待ちわぶ火燵かな

勅語畏し樹々の蓑蟲音を潛む

矢田插雲

新年

友垣や何時か賀状も絶えにけり
御園生の鶴皆鳴くや初日の出
萬歳のさす手引く手や鼓打つ
書初の筆力今を盛りとす
輪飾や卒土の濱の蜑が軒
歌右衞門今も若やぎ初芝居
初夢に月宮殿も過ぎりけり
數の子や痙攣るやうに老が頬
雙六に知りてぞ戀ふる都かな
凧あげて宴するなり奈良法師

春

米鹽と干鱈と屆く家塾かな
寒山も拾得も笑ふ落椿
大空に搏ち合ふ聲か鳴く雲雀
出代や一主一僕離別の句
鹿の子や武家の頭巾を怖れけり
鳥の巣や樹勢斜めに水の上
足投げて湯女同士かたる宵の春
猫の戀散る花に癡を盡しけり
故郷の變り果てたる柳かな
魚下げて磯に陽炎ふ流人かな
春の月溫泉町の上の娼家町
氷山や流れて出づる春の海
春潮や日ざし屆ける珊瑚岩

夏

落暉今火箭を廻し雲の峰
雲鎖ぢて雷鳴走る五劍山
黒部にて
夏の月溪流遠く死を誘ふ
百合の粉を浮べて曉の泉かな
渡米の折
行きて見ん酒無き國の夕納涼
長崎へ虎が着きたる大暑かな
麥秋に戰塵今日も揚りけり

山川に晒布うつ音一つかな
蚊帳を出て何思ふ妻の寐覺かな
白眼に男を見やり舞扇
國振りの鮓に書生を會しけり
夏帽や夜の都を愛す人
川狩を見て居る闇の天狗かな
霍亂の母の名を呼び子巡禮
麻頭巾汗を知らざる老師かな

秋

人の子の手癖わびやる夜寒かな

信州高原
末枯の一茶の國を通りけり
夜長蜘蛛死んだ眞似して我を見る

震災
人が人を殺すをいたむ月の色

寺々の鐘おごそかや市の霧

楚人冠氏の悲み
白露に二人が骨の抱きけん
天の川外海へ漕ぐ小舟あり
思ひきや新酒に君が不平ある
風騷の此身を市に踊かな
旅人稀に範頼の墓に詣でけり
芋掘に伍して誠の句は成らん
青年が柿かじりゆく祭かな
朝顏の盃ゆがむ風雨かな
渡り鳥高し箱根を越すやらん
怒る事無きを蟷螂怒りけり

冬

御出門に雪大晴れや天皇旗

冬の月按摩を殺す人あらん
夕時雨猿やあたまに手を載せて
手を打つて死神笑ふ河豚汁
手も足も心も縮め湯婆かな
物云はぬ三日となりぬ冬籠
爐を起たぬ主に客の代謝かな
目を出して口ばかり笑ふ頭巾かな
母人に提灯さげぬ十夜道

悼青映
冬枯に遺る俳句は錦かな
塚の上の土となりゆく落葉かな

諒闇
此冬の歸花なし天が下
枯葎草骨庵と題しけり

室積徂春

春

春雨や雉子の巣濡るる亂れ萱

蛤を焼く手ひろごり萌ゆる野や

春泥や船と地繼ぐ板一枚

百千鳥わがこだまにも鳴くなめり

蜂の亂舞蜂の歡喜を見やるかな

野人土に木の芽祉に生くるかな

夏

草原や光る薄暑の走り水

鯉幟立てて子一人母一人

句を望む人の手馴れし扇かな

遠泳や焼く日の潮に見えがくれ

山上湖湛へ鶯老いを鳴く

秋

蟷螂の生を我が世に思ふかな

明月に寐し番町を歩きけり

いざようてしるき草木の匂ひかな

里の燈を見てともす秋の山家かな

てつぺんに懸巣絹裂く籠渡し

終りの蟲と思ふ夜毎の蟲の聲

曉の芙蓉に煙かかりぬる

冬

あまつちの寒さとろこが舞へる雪

雨戸閉づ日毎日のある枯野かな

ショール眞白明眸春の如き人

湖に響く寒餅搗きにけり

鴛鴦の杏魔の穿き渡る古江かな

塀の日は支へ柱に石蕗の花

新年

元日や鏡まどかに幣白し

初空や高千穗の嶺のたたずまひ

初東風に息づく星の光りかな

小松曳緒をこぼれ出て野に動く

大鼓小鼓春を打ち初めぬ

松過ぎや栞緒垂れて増鏡

夏目漱石

(句の下の數字は作句の年代を示す、二八は明治二十八年の如し)

朝寒や雲消えて行く少しづつ　(二八)

名月や故郷遠き影法師　(二八)

あまた度馬の嘶く吹雪かな　(二八)

初冬や竹伐る山の鉈の音　(二八)

叩かれて晝の蚊を吐く木魚哉　(二八)

日の入りや秋風遠く鳴つて來る　(二八)

白露や芙蓉したゝる音すなり　(二八)

鳥飛んで夕日に動く冬木かな　(二九)

若草や水の滴る蜆籠　(二九)

舊道や燒野の匂ひ笠の雨　(二九)

松山客中虚子に別れて

永き日や欠伸うつして別れ行く　(二九)

短夜の芭蕉は伸びて仕まひけり　(二九)

紅白の蓮擂鉢に開きけり　(二九)

滿潮や涼んで居れば月が出る　(二九)

ひや〳〵と雲が來るなり温泉の二階　(二九)

内君の病を看護して

枕邊や星別れんとする晨　(二九)

凩や海に夕日を吹き落す　(二九)

日あたりや熟柿の如き心地あり　(二九)

窓低し菜の花明り夕曇り　(二九)

松立てゝ空ほの〴〵と明る門　(三〇)

人に死し鶴に生まれて冴え返る　(三〇)

寒山か拾得か蜂に螫されしは　(三〇)

ふるひ寄せて白魚崩れん許りなり　(三〇)

落ちざまに虻を伏せたる椿哉　(三〇)

明天子上にある野の長閑なる　(三〇)

朧夜や顔に似合はぬ戀もあらん　(三〇)

春は物の句になり易し古短冊　(三〇)

菫程な小さき人に生れたし　(三〇)

濃かに彌生の雲の流れけり

五月雨や小袖をほどく酒のしみ

歸源院即事

佛性は白き桔梗にこそあらめ（三一）

某は案山子にて候雀どの（三一）

夕立や蟻めく市の十萬家（三一）

大喪中

此春は御慶もいはで雪多し（三一）

有感

有耶無耶の柳近頃緑なり（三一）

ばり〳〵と氷踏みけり谷の道（三一）

戸下温泉

草山に馬放ちけり秋の空（三一）

内牧温泉

秋の川眞白な石を拾ひけり（三二）

同上

秋雨や杉の枯葉をくべる音（三二）

教室（熊本高等學校秋季雜詠の内）

釣瓶切れて井戸を覗くや今朝の秋（三二）

朝寒の顔を揃へし机かな（三二）

渡歐（香港にて）

阿呆鳥熱き國へぞ參りける（三二）

同上（印度洋にて）

雲の峰風なき海を渡りけり（三三）

落ちし雷を盥に伏せて鮓の石（三六）

引窓をからりと空の明け易き（三六）

雲の峰雷を封じて聳えけり（三六）

無人島の天子とならば涼しかろ（三六）

釣鐘のうなる許りに野分かな（三九）

お降りになるらん旗の垂れ具合（三九）

障る事ありて或人の招飮を辭したる手紙のはしに

打つ畠に小鳥の影の屢す（四〇）

時鳥厠半ばに出かねたり（四〇）

塩辛を壺に探るや春淺し（四一）

悼亡（松根東洋城より文鳥の死を報じ來りた返しして）

青梅や空しき籠に雨の絲（四一）

別るゝや夢一筋の天の川（四三）

秋の江に打ち込む杭の響かな（四三）

秋風や唐紅の咽喉佛（四三）

殘骸猶春を盛るに堪へたりと前書して

腸に春滴るや粥の味（四三）

冷やかな瓦を鳥の遠近す（四三）

風に聞けいづれか先にちる木の葉（四三）

曉や夢のこなたに淡き月（四三）

肩に來て人なつかしや赤蜻蛉（四三）

床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る

有る程の菊抛げ入れよ棺の中（四三）

迎火を焚いて誰待つ絽の羽織（四三）

一人居や思ふ事なき三ヶ日（四四）

涼しさや蚊帳の中より和歌の浦（四四）

芝草や陽炎ふひまを犬の夢（大三）

寺田寅日子

日當りや手桶の蜆舌を吐く

文鳥や籠白金に光る風

蜘蛛の圍に夢の白玉明け易き

翡翠や亭をくゞりて次の池

山牛蒡の葉陰ほのかや莖の紅

鴫飛んで道夕陽の村に入る

野良犬がついて來るなり墓參

うなだれて灰汁桶のぞく柘榴哉

コスモスや束ね上げてもからめても

遠花火開いて消えし元の闇

客觀のコーヒー主觀の新酒哉

名月や絲瓜の腹の片光り

口笛を吹くや脣そゞろ寒

藁屋根に鷄鳴く柿の落葉哉

殯宮

唯寒し白き御帳黑き椅子

塩原(四句)

稻妻や谷の深きに湯船の灯

稻妻や湯船に人は玉の如

山の湯や霧に蒸されて樹々の苔

釣橋の下は空なる蜻蛉哉

羽越紀行(十一句)

驛の名の峠と呼ぶや雪の聲

雪の國もんぺの國へ參りける

雪の原穴の見ゆるは川ならめ

山の根の雪の根を嚙む濁り哉

あのやうに曲りて風の氷柱哉

しんかんと時雨るゝ松や蚶滿寺

やよ鴉汝も時雨れて居る旅か

雪霰帆一つ見えぬ海淋し

殘雪や名のない山の美しう

御山雪裾野芝原蕗の花

三毛よ今歸つたぞ門の月朧

松根東洋城

(明治三十年頃)

茹栗を辻で買ふや二合半

(同三十二三年頃)

のどかさに寐てしまひけり草の上

雛棚や崩しもやらで二三日

(同四十年前後)

黛を濃うせよ草は芳しき

摘草や主従女五六人

曲水やのそりと鶴が盞へ

蝶見るや針とる疲れおのづから

市に出づや行人征馬春惜む

負けし草草紙洗の姿かな

絶壁に眉つけてのむ清水かな

蟷螂や人に生れてほ句作り

花野行くや犬十町に我一町

樽柿をへろへろと喰ひぬ矢継早

行雁や飛驒高山の灯をあとに

一力の暖簾にかゝる粉雪かな

臍をちゞめ肝をちゞめて寒さかな

雪女郎に逢はず山駕に逢ひにけり

光氏と紫と寐る蒲團かな

(同四十二年頃以降)

寒月や黄檗の僧皆踞死

春曉を尚おもむろに大河かな

朽ちはつる時のこの堂の芒かな

秋風や裝束き習ふ大喪使

岸打てば又泊船の砧かな

長き夜の隣の國は信濃かな

(大正四年以降)

敕を畏みほ句奉らく

澁柿の如きものにては候へど

牡丹伐るやお妾を斬つて捨つる如」 (」脚仕切各年別)

世に人あり枯野に石のありにけり

元朝や二世に仕へ式部官

我が祖先は奥の最上や天の川」

初髪の初元結やしまりやう

法華經にさく花あらば赤椿

しのび〱に通ひたる宿の椿赤し」

雛の子や踊知り居る道成寺

月の出や麓暗さに松林」

一もじや夜の渚の潮白く

海の中に櫻さいたる日本かな

樣見えて土になりゐる落葉かな」

鶴引くや丹頂雲をやぶりつゝ

金銀瑠璃硨磲瑪瑙琥珀葡萄かな

日出沒潮干潮や冬ごもり」

燕やもし還さざるものならば

落し水落ち盡す音もなかりけり

天地に人と生れし寒さかな」

四方拜す[illegible]に下り立たせ給ひけり

生れあひて二月の性を守りけり

蝸牛の遠く到りしが如くかな」

大震

こほろぎよ地軸折れしと人のいふに

ともせどもあかうすれどもや秋の宵

庵ぬしの西日たのしむ柘榴かな」

松過ぎや遠國よりの文の樣

古蚊帳や隠れし後の世をかしく

一望に唯だ鴫の尾の動きけり」

蜂飛ぶや鶴にかも似て足を提げ

富士の嶺を下り來ものあり春の風

寒明くや松の尾はさて桂川」

筍で人を招くは牡丹かな

秋風の秋の一字を觀じけり

冬海や凪げるにつきてすさまじき」

旅人におくれて峡の雪解かな

衣香扇影人の膝行く櫻かな

鮑貝の鴨脚草とは薄暑かな

走り帆や東風吹きつくる五色の矢

夕立や並べる山を皆貫はう

すめろぎや秋晴れ給ふ高御座」

そのかみの舟行くあると枯野かな

炎天や山には草の人の丈

中川四明

春

元日を雪や粟田は松青く

ひちりきの舌なほからぶ二月哉

金剛を出れば四條や春の月

東風吹くや塗りの乾きし密陀僧

春風や祇園清水孔雀茶屋

さび聲の地唄法師や春の雨

夏

安良居や花傘かへる釆女村

御番衆の交代したる卯月かな

弦召せの緋縅きたる暑さかな

涼しさや脚ぶらさげて半伽像

薫風の路傍に拜す葱華輦

瓦となり全きもよし苔の花

麥秋を我も行くなり丈山忌

風流の花落ちてあり葵橋

秋

鉾の灯の見ゆるあたりや烏丸

立秋の星うつくしや二歳駒

新涼や偶ま早起易を讀む

救荒論終に木の實に及びけり

同じ寺の土になる身と萩折りて

地下二人ちやうどまゐりぬ梶の鞠

松明や牛に乘りたる摩陀羅神

大文字の主人は山紫水明處

冬

初冬や御所のかはらけ燒く在所

木枯や夕日の中の寶寺

鷹匠の彌七まゐりぬ霜の朝

寒梅に裾を曳く長し節會人

鴛鴦を飼ふや粟田の七寶師

人中の鮟鱇と我れを罵りぬ

顏見世の版取寒き素顏哉

一瓢や東湖は儒者の鉢叩

大谷句佛

春

元旦の目出度きものは念佛かな

春風や佛を刻むかんな屑

御簾越しに短檠ともり春の宵

永き日やあくびながらの數息觀

畫を描いて勸化に酬ふ暮の春

落柿舍へ提灯戻すおぼろ月

春の海に沿ふ一郡や行脚漏れ

師德

音なくて涌井戸あふる春の水

畑の雪すりては上る凧の尾や

鶯や川まで下りし雲の中

口あいて落花眺むる子は佛

戀々として古都に住みたき柳かな

この遠忌に獲信の緣も木々の芽も

末寺こそ心安からめ花大根

染絲の藍したゝるや春の草

梅日和天子離宮へ御幸の日

田螺取薺咲く田へ踏み移る

夏

涼しさや塵なき風の茂り吹く

蠶棚すれ〳〵蚊帳垂れて秋隣る灯や

逢阪や藤の實ゆるゝ青嵐

五月雨や十里の杉の梢より

馬はなす馬車に子遊ぶ幟かな

螽斯を賣る鉾の通らぬ祭町

夏斷せん我も浪化の世ぞ戀し

田植すみし水に早乙女映りゆく

篤信の人の素朴の袷かな

朝風の蚊帳に帆舟の遲速見る

瓦椋過ぎて鷭聞きに來よと思ひけり

麥打つや糠雨そぼつ栗の花

椎茂る澗底に田あり一蛙聲

杜若登黌に田舟さし馴れて

農閑も已に麥秋寺無沙汰

信濃川は分流多し行々子

秋

新涼や芭蕉の破れ葉切りしより

草の戸へ泣く子を送ろ秋の暮

月見る日移す草家の持佛の灯

初汐や或は屆く芋畑

星祭る浦の家々烏賊干して

ともりそむ大文字峰に雲かゝる

晝を廻る燈籠の畫や日影さす

再進も久しき寺の門茶かな

浪化忌や司晨樓進つる志

耳蛸の奈良人も聞くや鹿の聲

赤とんぼ晝を鳴く蟲の草の上

母に供して紅葉にありく久振り

消さである佛燈に來ろきり〳〵す

白樺の大樹や蘆の穗中より

退職

しろし召す祖師の膝下に秋澄む日

桑に埋りて石置ける屋根の殘暑哉

冬

紺足袋の女も冬の初めかな

短日や八瀨の使の片たより

齋の衆去んぬ蠟心長き寒さ哉

冬空や畑の遠きに青きもの

しぐるゝや山村稻架に豆干して

荒海やしまきの晴れ間陽落つる

御講果てゝ歸路の人聲の野暮れゆく

一しきり雨に止みけり鉢叩

勿體なや祖師は紙衣の九十年

行脚すれば振舞うけん納豆汁

冬籠讀みあまれども買書癖

雪沓や駕籠舁きどもは我が門徒

鴨の聲江の眞中に月を印す

千鳥鳴くや雨になりゆく東山

大根もて來しが看經拜み去る

行年や誠を守る一心事

年籠白眼にして檐を看る

大須賀乙字

春

魚陣うつる初凪の空の鴎かな

初鶏や蒸籠重ねの宵のまゝ

春月や幕取り残す山遊び

亡き人の梅花に贈位せられけり

武者落し今に残りて藤の花

袴から首がぬけたる土筆かな

帆の端のひたりて行くや春の水

半仙戯七禽の戯の一つかな

六道の無人の辻や落椿

渡す時さす松のあり蕨山

松浅き砂に身をする雉子かな

雪はあれど山鳥の立つ朧かな

峠踏みもこれきりの殘雪となりぬ

苗代床浮くばかり降るさ中かな

沖雲の全くとぢぬ餘寒空

番蜂の巣をめぐりをる風日かな

雲流れ〳〵ても星一つ鳴く蛙

森うしろ染めて暮るゝに囀れる

夏

青嵐蠶棚を拂ふ天氣かな

峰渡り行くや手届く雲の峰

何の花か香甘く匂ふ氷室山

一睡の主總一の譽れかな

雨雲の天心裂けて時鳥

山中に樂師の宿や夏の月

晴天の芭蕉裂けたりはたゝ神

君にすゝむ玉垂る粽解かばやな

螢出て峠の草木眠りけり

短夜や盗みて寫す書三卷

凡兆の妻に縫はしぬ夏衣

樂堂の面も雫す合歡の花

獺が又森銜さす夜振月

遠く夕立つて來る森音を聞きゐたり

それ鵜鳴いて人を追ひけり月見草

落雷の光海に牧場一日かな

秋

秋晴や畑仕事して柿の味

長き夜の水聲樓をめぐりけり

松原の通ひ路來れば砧かな

ほら〳〵というて鹿追ふ仕丁かな

月代の雲につかへる芒かな

西ゆ北へ雲の長さや夕蜻蛉

槻瓜の山ゆ新涼到りけり

菱飯を焚くべらなりぬ秋の水

山下る灯を見てゐたり蟲の宿

山守の犬何に鳴く月夜かな

送別に舟をやとふや天の川

雁鳴いて大粒な雨落しけり

豆引けば隱るゝものは鶉かな

朝寒や日あたる臼に鷄の居る

芭蕉葉をすべる蟻見ぬ初嵐

船底の閼伽に三日月光りけり

冬

軍門に俘擄うるや冬の月

奥人の大飯食ふや蕪汁

己が聲の己にも似ず夜半の冬

寒中の毛衣磨れば火の走る

凪に木の股童子泣く夜かな

湯婆抱いて大きな夢もなかりけり

冬籠火上に瞳涸らしけり

火遊びの我れ一人ゐしは枯野かな

木搖れなき夜の一時や霜の聲

寒雁の聲岬風に消えにけり

背戸鎖してからりとしたり總落葉

雪中に煤けて咲けり枇杷一木

から舟に鳧こぞりけり寒の雨

綿にする木皮搗きけり小六月

默しをれば時雨の音のつのりけり

干足袋の日南に氷る寒さ哉

名和三幹竹

春

猿曳の賤しき宿も都かな

東風吹いて箔煤洗ふ大寺かな

松柏に春かくれゆく畝傍山

殘雪の國の平らや桃李

我に又齋强ふ主や鳴く蛙

鶯に土筆煮る鍋洗ひけり

花人の粟田ぬけ行く戻りかな

天下皆梅の句申す鳴雪忌

夏

若葉わたる三遲の鉦や競べ馬

夕影や神樂すゞしき鍋祭

葵橋花傘二つ並び行く

結界の外に鳥鳴く一夏かな

拾ひ得てうれしき鉾の粽かな

早乙女や奈良菊といふ名なるべし

鵜舟見の人連れ立つや月見草

秋

秋晴や藁打ちひゞく林丘寺

瀨の果てを知らず船やる天の川

大文字や燈りて淡き東山

月のなき夜道となりぬ牛祭

秋風や言靈やどる神の杉

夕鵙や澄む池見ゆる楢林

市振の驛も古りけり盆の月

鳴瀧や暮れ行く道の木犀花

冬

北風や鮭の鹽ぬく桶の水

瀧も涸れて聲明衆の冬籠

乙字忌の今日を又なき寒さかな

空也忌や世にも稀なる市上人

蕪村忌や殘照亭に灯の用意

樂僧の名古屋顏なりお霜月

西吹いて人日つめたし大根引

吉田冬葉

春

障子締めて聲しづかなり梅の花

天心の月ふるひたる雪崩かな

種つけや池借りにくる小百姓

ふるさとや苗代つくる軒の下

古畑や韮もえいでて塀の内

海苔粗朶にかくれて低し安房の山

行く春や夫婦づれなる水車守

夏

佛法僧この山に鳴く一夏かな

織りあげて綾はしる絹や青嵐

忘れまじき歌結びけり竹夫人

五月雨や雲の中なる山くづれ

月見草咲いて釣竿納めけり

松にかけし笠とんでなし心太

秋

蟲干しの寺に花咲く蘇鐵かな

朝霧や釣橋渡る人のこゑ

澁鮎や笈の中なる峡中記

花火筒馬につけゆく薄かな

小男鹿や何におどろく月の前

ふるさとや添水かけたる道の端

ぼのくぼに髷ある老や生身魂

山宿の燈にきく雨やきのこ汁

荻の中に鳴く鳥きくや秋の暮

冬

うつはりに鶏の鳴く深雪かな

凩や厩の窓に月のさす

冬ざれやつけ忘れたる筊拾ひ

牡蠣船の搖るゝと知らず醉ひにけり

二日たてばあとなき年や納豆賣

柴漬や枝川ながら三とこ程

忘れゐし袂の錢や年の暮

乙字忌

掃くあとに石あらはるゝ寒さかな

臼田亞浪

雪屋根のもと藪入りの子が急ぐ

木より木に通へる風の春淺き

梅の髓風日の波の響くなり

わが影に家鴨寄り來ぬ水の春

淺間より富士へ春曉の流れ雲

草嵐虻地を打つて吹かれけり

死ぬものは死にゆく躑躅燃えて居り

深山つつじ閑古啼きやみにけり

水見てるどの顏もゆたかなる櫻

壁かげの雛は常世に冷たうて

鐵嶺泥棒市

人間の齒を賣つてゐる暖かに

春惜む心に遠き夜の雲

朝鮮京城古王宮

石疊ぺんぺん草の實になりて

山蛙けけらけけらと夜が移る

螢呼ぶ子の背丈けの磧草

麥こなす隣りが暮れを呼ばふ聲

嶋蟬や子は子ながらに網干して

くらきより浪寄せて來る濱納涼

蠅に頬をなめられてゐる子は佛

一心に蟲は鳴くのみ日が炎えて

飛行機上にて

雲へ雲へ我れはも昇る青嵐

こんこんと水は流れて花菖蒲

ひとへもの徑の麥に刺されけり

青田貫く一本の道月照らす

東京の空やいづこ

照り雲や夜見の浦浪寄せ返せ

郭公や何處までゆかば人に逢はむ

黴臭な夜の壁かげに壓されけり

流れ消ゆ雲かよ野路の閑古鳥

日かげ無き暑さに堪へて歩むなり

丁字かつらの花が曇れば蚊の聲す

蚊に暮れし草家草家の傾ぎさま

墓起す一念草をむしるなり

深山なる小鳥の道の日ざしよく

庭の土青くなりたる月夜にて

ころころはころころと鳴く雨の宵

草原や夜々に濃くなる天の川

灯も秋と思ひ入る夜の竹の影

曉深く萩おのづからみだれけり

夕凪や濱蜻蛉につつまれて

漕ぎ出でて遠き心や蟲の聲

門の菊西日に人の澄みゆける

柱鏡に風見えてゐる朝寒き

きりぎりす夜の遠山となりゆくや

大震火の後

焼原の日も暮れてゆく秋の風

松明照らしゆく霧原の水音かな

霧よつつめつつめ獨りは淋しきぞ

話聲奪ふ風に野をゆく天の川

今日も暮るる吹雪の底の大日輪

顔寄せて馬が暮れ居り枯れ柏

氷挽く音こきこきと杉間かな

冬木中鳥音したうて歩きけり

すがりゐて草と枯れゆく冬の蠅

夜明け待つ心相寄る野の焚火

鵯のそれきり啼かず雪の暮

萱刈りのかくて日暮らす山小春

木曾路ゆく我も旅人散る木の葉

足袋裏を向け合うて爐の親子かな

吹き入りし疊の木の葉暮れにけり

ぎつしりの材木の底にある冬日

大石の風音照れる枯野かな

ぽつくりと蒲團に入りて寐たりけり

原へ出て見たくなりたる草枯れし

紐足袋の昔おもへば雲がゆく

野の道に電燈ついて寒參り

寒き日の疊の蠅が這ひ出しぬ

常磐木の懐ろに雪舞ひ入りて

井上日石

明治三十五年以前の中より

白露の上に月澄む今宵かな

明治四十五年以前の中より

蜘吊りて雨の音聴く夜なりけり

大正八年以前の中より

春風や針の間に焚く蜆汁

鳥寄せの笛聞ゆ朧木立かな

すゞみ果て一つ大嶺に月が淋し

雪やんで炭切る音のさやかなり

大正九年の中より

蟲音そゝる空の深さや二日月

家ぬちのさゝやき聞ゆ日向ぼこ

大正十年の中より

虻すがり居る芽草一本の埃りかな

鬼になる子の顔いとし夏木立

大正十一年の中より

元日に居て光明に居るこゝろ

青葉いろへる中の日光いぶかしや

何事もなき初冬の眼に涙

大正十二年の中より

蝸牛這へ〳〵角に日が移る

汗沈むまで待つ人の遅かりし

大正十三年の中より

東風の樹々そのまんま夕日沈んだり

すがれ行くものに時雨のなやみかな

大正十四年の中より

薮入の日のいそしみをつゞけたし

浸り温泉の香に泣く冬や修善寺

暖かや船かはす船の女夫もの

木の葉舞ふすさびし空のお月様

大正十五年の中より

春の底ひのなげきの水の音聞かん

行き〳〵て櫻散りしく野にも寝ん

ひそと立つ月に我が脊の高すぎる

昭和二年の中より

明星の我を見下す寒さかな

圓くなりて鶯がたれし銀の糞

昭和三年の中より

木蓮の花の大ゆれ晝となりぬ

もの言はぬ芙蓉に我は立つて居り

昭和四年の中より

知らぬ人住む隣家の柘榴口開いて

親子三人の久の夕餉の暖かに

福島小蕾

明治[illegible]年[illegible]年七月にいたる

散る木の葉水[illegible]日[illegible]すれは

[illegible]の木かみんな太しき石路の花

さけられて魚が光つて[illegible]れぬ

蒼草のしつりなからず大日

身をよせて雪の金魚の夜も[illegible]も

四日となりぬ返し賀状は書かずけり

ちちはなきどの子もはばにすかる寒

鬼を追ふ聲をこだまも添はざりぬ

我と我が[illegible]む泪かな

八ッ手の雪のいよいよかたき夕焼かな

着物きかへて見し正月の松夕

あしたゆふべ熱れて幽かや冬苺

朝の道川へぶつかり霜消えぬ

をみな象足駄光らし雪となる

蕗の薹や湧くとこしらぬ野の霞

雪天の日は眞近なる鶫つぐみ

しやくやくの芽に雨が降る猫の戀

芹は青きも、晴光の散り菜ッ葉

生きてゐる金魚何びき氷割る

芹田水川へ流れて濁りけり

村の夜は風があふれてゐる朧

野火あかり野のふくらみのあなたより

椿落ちし風のひらめき見まはしぬ

ひたすらに雨降り春の深うなりぬ

風の聲さびしきものの晝いぶし

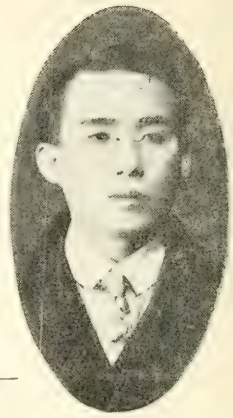
つくしんぼ富士の夕風ひたむきに

五月雨しきりに水が[illegible]殘り

青芒うかうか晝となりし雨

木を吹いて風はうせける鴨足草

田かへて嵐の走り月見草

飛鳥田孋無公

枯枝の折れやすさ雪まひ來り

踏み踏みて落葉微塵や寒の入

わがかげを踏む人そこに落葉風

霧はれて湖におどろく寒さかな

炎天や人がちひさくなつて行く

人ごみに誰か笑へる秋の風

水にある日たのしきを大霰

誰もかけぬ石に坐りて花くらし

山にのぼりて月吹く風はかなしけれ

寒山に風やむ音のこるかな

萱わけて眼は寒波に憑かれをり

寝起きにてさむき山吹ながめをり

かさかさな眼にくれてゆく霞

風おこる雲ひらひらと夏はじめ

消えやすき日のさらさらと何ふらす

雹のなかつめたき蔦は葉を寄せて

柿食ひし夢まだすこし早かりき

わがかげのすこしくふるふ落葉風

小春山草ながくして人も來ぬ

雨あびて鵯は裏山へとぶ

風おとのことつきそめし庭のもの

きよらかに川がありたり冬はじめ

朝おそき日を霧ばれの湖の上

山うすくなる直面のさむけかり

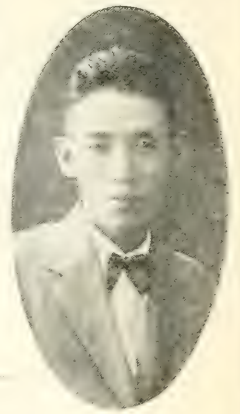
ふと見れば大寒の日空徂くなり

雪すぐにやんでおほきく磧かな

河の水うごいてゐたり凍ての日も

身のほとり雪まひ寄ればふしぎかな

山に來て櫻かたくもたてるのみ

幟まだあり山かげになる日かな

安藤甦浪

大正三年以後（十五句）

岸離れ潮先きに乘りし氷かな

風空にいよいよ静し枯冬木

岩の窪砂吹かれゐる寒さかな

路の落葉に風流れこし冬の川

立春の夕焼雲に交ふは鳥

春白し朝かけみつる畑の面

夕べ暑し煙り浮く町の草杉

稲田遠き日暮の篠の光りつつ

焚火ほけし寒さ漆屑かぶりけり

戀猫が聲こんでゆく槇暮れて

いたどりがくらみて夕べ寒い水

ゆく蜻蛉白きまで水暮れにけり

餅たべる秋日の木かげ見えてゐる

セルの胸厭して冷めたき夕野分

北風ひましづみゆく遠き雲

昭和二年以後（十五句）

明け易き萬年青に蠅の光りゐて

夏の日や草山のまぶしくなりぬ

蚊帳に入る闇に月のある夜かな

猫鳴いて涼しき裏戸しめらるる

初秋や朝餉語りの風を見る

炭の上の煙りの白き夜は明けし

夕月ののぼり蓮根洗はれて

寒くなる子の月代の唄きいて

西日ざし岩海苔採りの吹かれをり

出入りの門の音みだれ風夕べ

田枯しの水の中なるは青々と

寒なかば富士の雪すくなかりし

海を前にして袖の蜻追ひもしつ

雨となる麥の穂にも蠅もとりゐて

山は雨となりて白きもの松の花

河東碧梧桐

正月散步がてら由良の砲臺はだかで筒口

正月をしに山下りし菜青み小鳥行く空

伊豫石手寺

手ずれな正月は遍路が笠を肘をよせ松

島に住めば柑子澤山な正月日和

某釀酒所

なだれて藪の梅のさす枝が醱酵が時

柿の二本芽立ち來る枝かはす空

散る頃のさくら隣のも吹きさそひ來る

第一樓の櫻だらけの中から島使りする

櫻活けた花屑の中から一枝拾ふ

晝の酒さめて戻る土筆のあれば土筆摘む

つゝじ咲く山海は深し朝は漕ぎ出で

雛かざる朝の渚をあるき貝拾ふ

あちら廣み白根つゝじは齒朶背の花で

汐のよい船脚を瀬戸の鷗は鷗づれ

網船そろた出島背並みの汐見の松が

伸びの秀立ちの竹になる穗の汐干の風や

交かるといろを映なん湯女が爪染めの紅

敷地と草の野良で咲く花春べ椎の木

磧の湯野蒜そろへる湯ざれんひまに

つゝじは寺へ薗田の草とり人手は足りぬ

奈良での山の灯泊る夜になるぜんざい二杯

ネモロアイヌは雲雀飛びまぐれ野の子供

青梅藁屋の嫗の雛は內裏と一座

ひとりかへる道すがらの桐の花おち

蚊帳に來た蟬の裾のべに一鳴きす

夜も鳴く蟬の灯あかりの地に落ちるころ

鮎をきゝに一はしり小女の崖下りてゆく

夜のけはひ鮎は生きての酢びたし腸を

竿伸べかゝるが鮎に友鮎いとほし生きを

遊蝶花夏永き花の馬を次ぐ驛

枇杷をたべ煙草殘りの殼なそこ捨て
枇杷の種吐きての掃くが手澤山で崖へ
けふ見ぬ主の早乙女の笠竈の上に
汗入るゝ間の絲引く毛蟲帽子にうけて
門を出れば學校休み日の銀杏そよぎゐる
洪水に殘つた天井を蠅の晝寐物語
柵を打つ湖にて嗽ぐかはりて打たな
あらゝか聲を筏くむ冷え餘り木より來
湖のあなたからとも指して萱山百合峠
草深かな桔梗夏花鎧でさはるに
籠り音蜂の水にも蜂の椎の二木が
峠七里の泊りをきくに猿つれて日脚

山越しの風の展くが萱や草々
桑葉なよ葉峠の丁度下りに雷り
門べ栗の花おち一人二人の草鞋捨てゆく
藥師咲く花湯女の參るがかさし赤花
神輿舁きの水飲みに來る鈴鳴る朝から
岩の亂れ衣ぬぎかけし牡蠣殼さはる
岬とびかはす白い鳥の波間に消ゆる
よどまずいひつゝも妻らし油葉桑葉
蜷の泳ぐも湯槽朝熱たゞに汲みすて
ぬる湯ゆぶねの眠氣さましを一人でじやぶ〲
木振ふ雫蘆の葉分れ家鴨より來
芒の中松の立つ山二山の瀑をかゝへて

芒吹きなびく風かりそめに家を離れ
雌雞鬪ふとさかの榮えを桑の下葉に
今宵泊らん脚いたはりつ紅葉濡れゐつ
川霧朝の酒ゆゑとなくに咽を傷みな
故事鳥追ひの桑畑づらや鴨となく行く

伊豫吉田秋祭

祭酒牛鬼が人のなだれを尾を角を
袖ふれて客のおのれを策をかへりみ
コスモスくねる枝々の蕾をもち起き來る
寺にて話す柿のもられし酒ョ出るまゝ
蜻蛉釣る竿寄る波に捨てゝ行きぬ
樫の中紅葉吹きゆらるゝ夕榮えて來る
木の間低く出た月の戸を引いてしまふ

きのふの餘りの此頃の灯沙魚を煮る

濱で又しばし住むが實になる濱茶

葉雞頭幹の太しき蟲枯れ姿

雨になる枯原音の湖水見るまで

たわゝ垂り枝の小づめ小菊は衰へぬ花

櫻並木の落葉砂利しらみ住居はこちら

陸穂の稔る垣越しの夕日照ひそひ

家々の菊大方は黄菊咲く海の照りかへす

並木風吹きとほる行き〱て稻の穗白み

臺灣風景

下葉刈るやら甘蔗の葉ずれの家鴨がこゐを

木流す焚火の烟朝あげて竿立て

雜木紅葉栗も散る葉の苗葉うまり葉

讃岐觀音寺琴引公園

すわり松か砂を掻き目の根引き松か

立木廣葉澤の風早や芒の上に

焚火してあたるひろごろの木口そろひぬ

樗散る葉の足もとの爐ほとりゐざり

裏は磧石の濡れ端のしぐれて過ぎつ

一軒家もすぎ落葉する風のまゝに行く

爐の火箸手にとれば火をよせてのみ

大根を煮た夕飯の子供達の中にゐる

雪をかきそめて次ぎ〱に起きて來る子供達

山まで蜜柑いろづきぬ壁を色塗る

もぎ殘る蜜柑島の乙女ら凪の日を選る

廣場枯れて立つポプラの下もう三度とほる

一つに渡る柑子積む苫濡れのまゝ

栃の平峠ゆ〱人獲物を勢子ら

牡蠣船羽織ぬぎ捨てある書生を一人

沼まで犬がトロの行方の枯萱がくれ

車中一眠りして一人になりし蜜柑手にふる、

橋來る恰好が似るとて女朝眺め雪

櫨の古木に茶うねさす枝のなき葉吹かれ

温泉びたりな朝起は霰のしらむはしり音し

寺の甍を中に湖べ小村の小吹雪する

猿を飼うてゐる赤い紐なとつけて笞に

師走の柿奈良よりとゞく笹しいて

悼

高刈り桑が頬白來て去ぬつゝいて枯葉

中村烏堂

瀬蟲釣なら郷里で覺えた一竿借ろや

枇杷もくこく風の落としの雨と山から

今宵敷寢とる子の祭衣の袖長な

ガードの下で嬲りゐし蛇歸りには見ず

歸り小荷駄そゝくさ雉子の尾のさかさ

蘆間漕ぐは舟舳音か立ち漕ぐよばふ

杙を芥を水の藪根を三十三歳鳴きの晴れ

藪上草山枯れの晴れと空色わかつ

向つ峡一木黄まさる楡か暮れさそふ

庭をある日の髯草の實と分けて見つ

霜解敷ごも敷けばふみよげ間木ちるべ

朝づく日はしり山茶花を籬花白み

大嘗祭

今宵をともしつぐ穗の靄じめるにも

葉々の蘇枋つむに冬ばら冬けき花と

雨のあしたの軒端實を垂れて枯木の一木

海苔齒朶に汐みち一人で泊る氣でゐる

今日の佛に花山椒一枝は机の花に

ゆすらなど裸木の垣に來る雀の糞白く

雙六やめて唄ふ泊りの子供一巡唄ひぬ

市場裏一時の牛車溜りにて反芻へしゐる

おそくかへり火鉢の前坐蒲團重ねある坐る

雛祭すぎ包など提げとまりに行く子

書類包みに買ひ添へし草餅屋出づる

爐べり寐てしまふ坐蒲團をかけ醉ひ仲間

麥のむら生えのペン〳〵草白花の添ひ立ち

橋から流す花子は摘んで來る河原撫子

歩く夜小店で煙草一つ買ふ花火音する

藪かげ麥ところ出來梅咲き名殘り

試驗の朝の麻裏の赤緒の老先生

十月祭の夜のどか寒となる空埃

歸る舟かや窓から暮れの空吹かるいろ
水仕手强な夜は硝子のともし
こゝと瀨落す雨吹かれ赫顔舟人
山男夕餉耽るの吹かれ雨のぽつ／＼
野鼠か餌あさる玉蜀黍葉鳴る月出で
自動車で出での手の手のそれぞれ花の
森夕やけのまとも馬とぶ追ひ吹く風の
むくむか蟇はめかるが時の藪なだる池
枯れの葦原おどろ羽音の月白ら

梅野米城

濱風吹き明け潮はなのとび來川口
飛魚も一しきり日盛船の波の穗白み
猪わたぬきの轉かしの凍てゝ耀るが雪
駒岳連峯の押しの斑雪は天ぞら冴えて
はためくの帆や風變る南風へ乘るの
いらいら雨か日曜でびら剝ぎ殘るで
牛買が斑らは人の俺れ赤牛で飲み
橋行く牛は行く／＼鞍荷の鳥呼ばる
小雨普請場吹かれる芽おそ樹今日も

行くさ來るさ昔火事跡の濕みか巷
何時だらう夜業人聲凍てゝ外の
幕垂れての黃花ほうけの寐くたれ着長
筏物投ぐる焚火する人達集ひ
鴉屋根の端まで歩く阿呆らし去なう

伊豆紀行（七句）

伊豆は山段畑蜜柑風は雪にもならず
天城猪今朝も捕れたのこゝな湯心
箱根さらゆる眞竹のまだまだ青かれ
汐見松群か富士見ゆ見えず淺蜊掘る
こゝな峠道端雪を灯しの樹の間
山斑雪凪ぐ日間々松むれが冴え
鰤一籠指し値飛び値の一杓浴びせ

啼きのほほけに青みの山のゆふぐれ森の

野茨も桑も埃だちなるを馬車喇叭

雲をつき出の槍の秀の穂は尾根座で仰ぐ

たべんずら喰へんずら葡萄みのりしたゝる

磯づたひ夕日を鰤の切身と葱さげて母と子

啄木鳥に日晴るゝ溪のぬれのもみぢ葉

暮早工場電燈來て鷄遊ぶ

けふ柳青みを櫂並み揃へ一日

またあぶれて一人渡しをわたるナラヒ來く

松宮寒骨

あぶれて今日も口笛ふいて日南で暮す

この晴れ二階あけて二階一杯に

火燵で話す豆腐汁に一本ついてゐる

桑畑で唄ふ笠陽ざしゆるゝ桑の葉

峠がかり馬は勇みの旅もはや穂芒の

水はゆ曉の穂だれ渡る雁羽鳴れ

夕べ啼く聲筵を分け山羊の白鬚

山なみ四方を雪積み雪のふりつのる

入江くろゝ陽冬浪とうねりあふ浪

山はらなぞへ枯れ〴〵萱の褪せてやつゝじ

峰かけ茂る楢を櫻の麓の原ッぱ

萩の小徑昇る日の近山に來た雪

臨海學校ひろね喇叭の屋根の赤い花

夕上り磯松原は蜩の一さかろ中

檜笠一つづゝ持ちては船に乘る支度する

小雨降る朝の木蓮の大きな葉

ボートをおろすたなさかの疲れ出る上衣ぬぎすて

夜となれば爐に下りて來て人々の話

白樺めぐる沼を漕ぎまはる霧の來る

きのふの凍加減スケート行李から出して見る

山のさくらの吹きの終りの照る陽の

染川藍泉

弓を弓袋矢つぼも老いの腕太な
祭果てゝの提灯の紅にじみ幾日
ラヂオにとり添うて犬の首鈴の音交り
干菅道蛬を鳴く蟲温泉の町近く
朝凪を帆舟のならぶ濱出し砂糖積むかや

宮島所見(二句)

枝入れかはし取り合せ紫苑女郎花
杉の木空ざま照る灯宿居る夕立つ雨

磯部行(二句)

橋渡る川上か今宵の宿は桐花畑
障子あけてる瀬音河鹿の下闇になり

植ゑかへし木のたゝずまひ裏から見る
ひとりの軸物のはしたなくて飯醤豆で
冬雨降るにも下町娘らの傘さしつれ
やもめ暮しの葉刈りも今年蝋まで過ぎし
ステッキ振りのそゞろ歩きで口笛散椿
夜毎ねにくる夜半吠えもす狗身ごもり
鸚の手柄の赤い喃々喋るステンドグラス
槻切り株その根張るべにいばりす道の
男にまじりプレス工場の女工等の春朝

踏切番水を撒く〻春ひなか或時
きさらぎ早りの花火鉄入れ来ての堅くも
渚は岩の出入り小魚泳ぐを浪のさしひき
晝の酒飲み不漁のあぶれのシャムロ染め蒲團
峡の櫻のけふを吹きさる居れば音もなく
宵から降りの歯朶や新葉の白々張りの
向日葵仰向けざまな曉からの嵐をさないでしまふ
床にニス塗りの涼みのゆふべへばりて衣に
部屋々々とざされてある廊下行交うてはさゝやく
霜除けに敷いた炭俵浮いてゐる踏みわたる
凪ぎの濱べの舟おろすらし聲東雲
稲の花にふれつなはてゆく湯の沸く里の

田市往き來のばさ〳〵畔のそら豆葉反り

一雨晴れのみかん麥畑山の夕靄

一雨晴れは澄む山の端の蜜柑葉茂り

霜柱蹴る朝な出路の小草もほこり

海女の連れ節藻草焚く朝泊りゐつ

岩鼻水づく垂れ根の雫は屋根に

さげ汐頃をまひと釣あなた洲の黑

雫つむ今宵ぞと門を出でゆく

洲黑蘆枯れ岸べは波の

木下笑風

今宵ゆく女中掃目たて椿木の下

雲のゆき〻山ぶすまゆけばおけさ節

朽葉菊土鍬の手なれな埋れ葉かへす

花なりの皐月花屑卓の上に

垣覆ふ藤からむ大き八ッ手葉

バラの蟲指さきつぶす青み筆持ち

子の枕べ去らで皐月一鉢をかへ

百合の種青う下葉なき影草に

料理場若人の赤き一色瓶にさす花

日くる、庭さきの異母にと五ツ葉クローバ

林間學校女教師雜木林を手ふり連れゆき

落葉音なき今朝の雨晴れ海へぬけて

けさは梅鉢ふた芽殘しの切りの枝々

朝な小蜘蛛拂ひつ鉢ならべかへて

驛前廣く入江の見ゆる大き蟹賣る

逗子(二句)

垣外松葉牡丹の咲くに足あと

葉を落つ雨の夜につゞく箒木の立ち

新聞を讀む母の前椿の花を並べた子供

一雨二雨土なじむ百合の根ながき手のひら

一夜二夜の舟がかり夜となれば丘に出でゆく

菊根づきしふた朝はわづか陽のさす

國又蕞爾

稲や日だまり[illegible]みこし稲干か[illegible]と

おぼろ夜々夜だちを花へ[illegible]べた

夕靄かゝ[illegible]にかゝる[illegible]の芽ぶき木

夕づく夜つぶら蕾む木枝にむけ

荷あげすんだ艀の世帯の汐をまつ間

おのづ晴るゝと朝な小鳥立つ小徑をひろひ

曉白む瀬鳴り濡れ簀の大き[illegible]ならべ

風々のあひをしじまひそけさ耳を

草生ながら耕やすに水つき穂立ちの

萌え／＼草の夕風を丘の露はな踏む

兄一週忌

摺餅匆などひとりごちし籠[illegible]けよせて

灯を灯を立ちはだかるけ男ばかり電車

萱枯れ穂午後の一雨波音ちかく

眞菰葉ずれくれきらぬ櫂でやる舟

悼

濱べゆくたよりなの汐に手ふれ石くれ

兄の死の前後

引く汐にうつりゆく翳る陽

ふみ立ちし藻草のなびき汐滿つ庭に

十姉妹月あまり五つの卵あたゝめ

蛇口しまりの水音に夜すがら奥な部屋にゐ

霧雨來るに六月の樹葉ゆれ水吞む

庭石運び去る曇りかぜやみ土のいろ

いぶき深し朝入り來樹の下むらさき小草

汐滿つ蘆根ともしさやぎつ釣りを今

藻の花雨來る前の南風をさそひ

ところせく山蛭のおち朽葉

桐咲いて川原へかけ旅はての日を

馬車埃り照りこみ道の薊花

日表いろづく柿の葉つゞる檜葉は下枯れ

祭一日して雨に籠りゐかげまつり

雨上りけぶる和む芽街の往來の

關口比呂志

落葉埋まるがらね〳〵煙の暖をおくる

寐ほうけ桑のおどろが雪來そゝくさ

穗草埋りのうろな何とな江島が墓か

けふ葬とや雪りの山際見やる消え處を

南岳斑雪がからに干し竿をかけてゐた梅

枝仲びよさの秀ずれを駒居は斑雪をひたに

凪いでの大栃そゞろ遠を藁乳穗よう見え

川鴉晴れを夕ばゆる山が尾根を空

たわみゆらるゝ實桁大木が葉の朝の映え

戸倉山時雨の落葉も枯れが齒朶さそふ

山は降らずななんの笑ひつ茸狩り笠で

暮るゝ山さす鳥の一かへりそれて來る高う

來る人來ぬ雪を殘りの陽の駒はゆ

瀬音遠川對ふ夜鳥ないた山

刈りあと秋萌える草のなぞへ山の面

山は降らず風となる蕎麥のうねたち

足跡はてしなきを來て崖下の渚花

朝からの雨氣の降らじ蟲葉のしるき

更けて月代戻る明日のひまほしく

片手所在なくおろかしきけふも立つ雲

磧の道さゝ流れそふ草しける花咲いて

大栃このごろの白き葉らの風しるく

くぶしの花山神祭る人と來て崗の上に

日暮るゝ風踊りすがらの何げなき磧へ下りる

除雪人夫にまじり頰かぶりして子供ら

雪道行く子供等につゞく一つらとなり行かん

家の裏ことしもたつる藁塚をつらね

瓶つやが磨くとよか夜の山羊乳もゐた

土まみれ新聞議會つらや空風ぼこり

悔み戻りの連れ藥包みを夕づく散歩

雨あがり宵ごゐ山は光に出て灯

なよ／＼陽の葉毛氈なつやゝ一かめた馬

指す木かづら木垂りの水ずり葉で吹かれ

朝の陽杈枝で坊主に伐つた樹

空む／＼夜の神灯のしめり母のいふがに

鰤が廻遊をぞ劔御嶽雪かけた

携げ籠小走り寒そゆきずり袖袂

糯洗ふ粉にひくな唄又た別な唄

地曳きひきつけさゞ浪の足もと藻草

須藤水心樓

汐さきイキナゴ橋は往き來の人等でのぞき

夜焚き漁のなく麥畑雛の白きレグホン

遠を鷗で羽白かへすは魚群にもつくや

貝で呼ぶ音の干し物手ぶれ海へ下りゆく

ホイロ火加減もみ茶るにきの手だれを盛り

きだち商ひあゆみより値の桑畑あるく

のる汐春を青洲の鷺は聲を追ひ

竿を手頃ハネさき釣るゝ落日ではやる

一〆め釣絲底物と手强よ竿張り

沖は夕立つゝ流しさぐりのチヌかけはづれ

一漕ぎのしてカイヅ川尻さゝ濁り釣る

夜明け漕ぐ舟洲づたひ潮の釣場よせ潮

チヌの來る潮流れ藻による釣りそに邪魔な

繭田は降りしむ田舟やるかや鴉の往きも

庭木手入れ青葉掃きよせしそれから雨

夜積みする柿舟に灯を提げて持ち

紫苑活け置きし咲きもやらざる容のくづれ

蚊帳染めし手のかくていつまであるや

藥袋つるす戸棚釘打つ爪立ち

木々は垣穗は芽よぶ日ざし土あびて雞

八ツ手葉なみの水さすべ來て去んだ鳥

哭亡父

別るゝ奥宿酒の一夜もとゝせになりぬ

岩組へ鼻すりつけて金魚一つがひ

凧一つある空はろ／＼に家路を急ぐ

出あるく宿の水べ灯ざす橋のべ行くの

杏が咲いた／＼枝ぶりの濯ぎ腰伸し

移り住みたき櫻二本盛りすぎぬ

重ねつぐ手刷り色繪を賀狀が數に

踊りとぎれかそけく鉦の枕かしげ

宵ぞらうちで爐の長あぐら膝かゝへ

吉永壺音

森深く行く朝の雪じめり人聲して來

づら／＼枯葉庭のそゝけし猫ないてゆく

吹きがて蕾いろをふゝみ來うばらなよ枝

日ある間麓まで牛を仔牛をつゝじ松山

狭白飛ぶさへ島渡りよばひの舟づたひ

棹さばき舟荷瀬取るが橋の灯さすべ

椿葉の花のしづくを鬪鷄がふむ霜

竈火ほのとそゝけて髮の頭巾うしろ

櫨を葉を打ち夕べをもす葉掻く葉しめり

壺の口細み插さう丁度な菊もろた

お晤つぎ／＼法事のはてし乙女らは重は

庭木のしなへ小雨しと降る葉裏をかへし

手とゞくが下枝の柿の爪がたどれも

さくら若木のよな吹く花外の木散るが

七夕待つに插さば花屑こぼれて机

みち／＼手折り來宿に盛らな黄花をこゝに

づか／＼水乞ふ陶土干し場一釣瓶

腹ばひに讀みゐし煙草とる肱のしびれ

手すり近く灯のさしてゐる池のうつろふ

朝な來なじむこの寺の茶垣露畑あるく

寐群り塵の虻を身ふるひ立つが尻毛

泉天郎

池の蓮の赤きを言ひ戸毎住みけるなり
穗まだき稻葉の立てるかぎり乾けり
梨の木ならび花咲き散りそめてゐたり
きうり苗植ゑる頃までの家にゐた
原の中葉重もりする黍の立ち並びゐる
夜更け橇の鈴そこらまで鳴らし來ぬ
夕べ出づる星の石垣の上にそゞろ來し父
飛び地の高草を刈りに來て立つ
海うねりうねる沖の人ごゑいきこえて來る日

抱きにつく鷄のこの頃の日の月を見まじ
鰊待つ夜ごろそゞろありきの垣に沿ふ
鷄四五羽ゐる時のうつりて雄たけびをしぬ
一番の火の見櫓ホースの數を干し垂れて朝
佛前とりつくろひぬお蠟のわきに春菊を立て
夫婦起き出でおもてめかた暗き松が根
工場けふの休みあけはなたれて白い蝶
皆とゐて赤つゝじ投げ插してあるまゝ
工場の叔父の家今宵廿日月の寢る頃を來し

椋鳥木に鳴く妻と出て行く青物を買ひに
足袋干してあるほとり人のあらはれし見えなく
爐にて出で行きし草原を乘りて居
さび石草うもれ大きなは宿屋の裏に
野の草赤花咲いたはまなす海べは
にはとこ芽つぶらな原のこる枯れのらへ
こだまし行くが聲音を張りの山も祭近
朝は女ら多摩を渡るが梅見と鼻白み
ふきんたゝむ四つのよろしき妻らしの
蓬摘み來しつゝみこぼれを舟にまろぶが
旅にさすつげの小櫛の日和の奈良に來
草から柳小鳥立つかけ夜あけて川べ

荻原井泉水

日のましたはるかにはるかに浪立てり

月褪せてある高嶺へ道つづけり

雀よ我はわが朝の深呼吸をする

佛を信ず麥の穗の青きしんじつ

空をあゆむ朗朗と月ひとり

かなかな鳴き連る島に島つらなり

草むらの草のなか蟲飼へる草家

陰もあらはに病む母見るも別れか

かんがり暮るる元日の明星かかり

樒の葉產衣の赤さ隱しつくさず

泉あり腹這うて口つくべし

月入りてより佛へ詣る人と連る

太陽のしたに是はさびしき薊が一本

鞠を抱いて子供ひとりなり露けし

水に浮けた氷のかけらにて妻とゐる

日が果つる更に麗かにして月うまる

月高くして漁火それぞれの座につけり

浪の底を探らん裸身の寸鐵なり

冬空れいろう聞きばかりに子供の聲

夜が雪が夜が雪が降りつむばかり

牛の鼻づらにも積む雪となる積るらし

身の雪拂うてゆく既に路に積む雪

かれくさやまの雲しろく夕べおそし

椿の朝日の椿椿へ照りわたり

冬帽ぬくとく手にし父の墓のまへ

月にぢつと顏照られ月見る

月夜の微風にして落葉する湖べり

黎明いたる土の月光に濡れたる葉

沼波しづまり山の日いづらし

空はさびし家あらば煙をあげよ

詩を狩るとし小鳥を驚かせしか
草は枯れけり山の大いなる懐
凧持たぬ子は樹に攀ぢのぼりよい風ふく
湯呑久しくこはさずに持ち四十となる
かれ獣のごとく笑はず冬を籠れり
一日の太陽とわかれ妻の許に歸る
母のしびれぬ方の手に團扇をとらす
糊仕事のはかなき生計のひぐらし
蜩鳴けば鳴けば蜩、鳴きつれ日ぐるる
月光ほろほろ風鈴に戯れ
ただに水のうまさを云ふ最期なるか
今際の彼が時を問ひしんと時移る

事きれし後の湯婆を明ける誰か音させる
佛の物を捨てに出る遲き月が出る
通夜の我等を笑はさう赤兒抱き來る
棺を打つ石を拾ふ夜のほの白みゐて
佛の杖を何として棺に忘れし事
迎火焚くと暮を待つ草暮れてくる
佛の梨の葡萄の青く小さきもの
はつきり火の燃える音に目覺めきる
更けて鐘にひた寄る月ありけり
月をかざるに瓔珞の雲微風あり
つゆけき草の中の蚊帳つり草は
ひぐらし日の暮ほいほい駕來る

私の首も浮かして好い湯である
乞食のすわるだけの木蔭はある道
はればれと行き山の町過ぎ行くなり
山の晝月に馬車を待つ少年
軒にざくろ笑みくづるるにまかす
雀に鳴かれけさはここに寢てゐる
あくれば秋の曇れる泉石なる
わつさり竹動く一つの着想
竹林の隱れ家めけば人に訪はるる
石のしたしさよしぐれけり
いてふの根のひろさいてふの葉を掃く
自分の茶碗がある家に戻つてゐる

月の出おそくなり松の木楠の木

氷店がひよいと出來て白波

砂山赤い旗たてゝ海へ見せる

わかれを云ひて幌おろす白いゆびさき

人をそしる心をすて豆の皮むく

醉のさめかけの星が出てゐる

板じきに夕餉の雨ひざをそろへる

こんなよい月を一人で見て寝る

菊の亂れは月が出てゐる夜中

尾崎放哉

水車まはつて居る山路にかかる

海がよく凪いで居る村の呉服屋

足のうら洗へば白くなる

追つかけて追ひ付いた風の中

わが肩につかまつて居る人に眼がない

久し振りの雨の雨だれの音

入れものが無い両手で受ける

咳をしても一人

風凪いでより落つる松の葉

雪の頭巾の眼を知つてる

昔は海であつたと墓をならべる

とつぷり暮れて足を洗つて居る

山火事の北國の大空

月夜の葦が折れとる

あすは元日が來る佛とわたくし

ぬくい屋根で仕事してゐる

枯枝ほきほき折るによし

靜かなる一つのうきが引かれる

障子に近く蘆枯るる風音

八ツ手の月夜もある戀猫

肉がやせて來る太い骨である

芹田鳳車

燃ゆる火

あなあたたかく燃ゆる火の身に近くあり

心に遠く二いろ三いろ花咲けり

泣いて居ずやと夕日に子供見に出づる

夕べ静かに子を抱きて眠る草見居る

子に焼ける餅白し一つふくれたり

蛙いつぴき小さくとびつつ急ぐなり

又一日のはじまりに落つる木の葉あり

嵐の家静かにも帽子かかれり

慰めあひて暮るる日の鴉二三羽

心の上に照り曇る一日暮れたり

雲雀地に落ち空はかすかにゆらぎたり

葬送り出て日はぬくとしと思ひけり

風に夜あけていくつかも梅が花もちし

まづ耳に入る古里の流れなり

何事もすぎて冬木はつはつ芽をふけり

土にいそしみおろかもの迷ふことなし

流るる水にたはむれる

空になにもないひなた

雨と砂うづたかく暮れる

はだしを洗ふ水こぼす

雨うちかかる戸をしめてゐる

山が田へ落葉する

木の中の星が更けてゐる

夜となりゆく浪の押しあつてる

ひくひくと蛙泳いで近づけり

夜閉ざす屋根に葉をのせ

うす日の竹のみな靡く

手足休んでゐる

漕いでゐる舟に雨たまる

日かげる浪の倒れてばかり

秋山秋紅蓼

蟲一つ高鳴けり鳴きつづく蟲ら

釘がうたれてしまひたる棺の響けさは

寒き子供の手と云はず足と云はず

夢の中の女が靑い帶しめて來た朝

火を移してゐる二本のたばこです

しらなみ月となりゆくらし

風もないあかるさ暮れてる

一本の樹に月が照り出した

ふるさとの月夜の子ども

夕燒けの葉を手にする

夜は枝を流るる雨

船を滿月の町につける

野に牛を啼かせてゐる

かたむくひなたをあゆむ

ひとごゑのゆふぞらになる

濠ばた夏帽でゆく

螢ゐる葉つぱが濡れて葉の中

赤いイチゴも乳房も朝です

風吹く夕日があるばかり

うめもどきの雨が少し晴れる

灯ともしごろの犬がかけて來る

蝶のかげり來る風の出でて

栗の木の靑い實の夕空である

夕べの富士の晴れてるを貧しく住む

風が來てゐる一本の樹の夜明け

石垣雨となり居る灯火

水たまりが暮れてゐる林の中

野邊送りして風のある二三日

思ひ出し靑空を見てゐるのだつた

枯山日が照つて木にある木の葉

青木此君樓

はつ夏の平かなる岩

風あるからに雀飛んでゐる

鍬の音ある參道

草の赤い實黄いろい實である

豆殼たばねて置いてあるなど

炬燵に寄りて母の日

ぶらり冬の畠みにきた

緋桃白桃と咲けり

草なら咲いてゐる

水に横たはるも巖

二三本あかきは鷄頭

花をもち梅老いぬ

陽がさせば竹の青くて

夕べの門は閉ぢ暫くは掃く

ことしの暑さ裸になつた

もろこしの穂に出でたるなり

涼しさにひとり去りふたり去りけり

山に宿りて咲くは風蘭の花

竹の皮かろう干せてた

手のひやひやと夕べなり

青いさうして空

枯れてゐて草は

時雨來て石をぬらせり

牛の背中あたたかいな

土の高み低み春なれ

さうして居れば冬の鳥

あたたかく行くところへ來てゐる

夕風の椿は花盛りなり

蟻が石の上へ出てきた

深い深い呼吸をして死んでゆくのか

大橋裸木

地べたの落葉はがして年がおしつまつてゐた

夜雨の明るさは花すこし散つてゐる道

枯木の日が薄らいでもう子供居らない

寒い日さしていつから閉つてる大きな扉

脣あらして貧しい妻が蜜柑を食べるよ

しらなみ濱の子は濱で羽根つく

しみじみ寒ければ夜更の疊の日

短日の風が奪はう風船を賣る

曇る。いちにちの落葉たまれり

蓑蟲よ畫かきは畫の旅に出る

雨を照らす街燈が冬になつた

ことこと涼み臺しまうて寝るばかり

紐が解けるふらここの女の子

風。落ちし枯草に凧置く

冬さびた町と町をつないでゐる橋

たかだかみのるものに梯子をかける

障子あけてあれば秋の日なかの青桐

風に吹かれて花賣が行つてしまうた

短日の水のゆく川幅

霜どけの烏瓜かわく

秋の空から雨を落してゐる坂

葉のない空の生たまごをすする

はこべら咲き家そとの子供

さくらんぼう食べて妻子のいとしさ

三月風吹く淺蜊を水に沈める

やみなく降る雪を掻きに出てゐる

雪が降りこむ焚火をふとらせてゐる

ほうれん草の赤根そろへ束ねられたる

線香花火持つ子が母に顏よせてゐる

ちんぼこ・西瓜・雫たらして子のきげんよし

野村朱鱗洞（照影無し）

舟をのぼれば島人の墓が見えわたり
春日豊かに暮れてゐにけり囀りをはり
はるの日の禮讃に或は鉦打ち鈴を振り
巡禮の兒にやよ雲雀ないてをり
かがやきのきはみしら波うち返し
夕潮に舟を寄りよせ寄りそひ釣れり
一天かきくもり艪拍子そろひたる
山を高み雪ふかぶかと降れりけり
酒を食らべつなみだを拭きし父の顔

學校には子供がまなぶ仰いで行きけり
馭者の笛にしづかに馬はゆきかへり
人は林にいこひ林の鳥は啼き
さむき日向と思へば人が火をたきし
山へ行けばに山の木の葉はや乏しかり
よう枯れたる萱原にあそぶ山の鳥
日暮したしみ寄りし子の叱られし
夕風募る蟲こそ聲をあげてゆく
あかつき暗く火を焚けば火ぞ逸るなり

さをさを鳥が渡りゐて空は輝けり
ついついとんぼいつまでの夕明りかな
いち早く枯るる草なれば實を結ぶ
ふうりんにさびしいかぜがながれゆく
貧しき夕餉したたむる灯のすずしさよ
森の中陽にとどく椎は花ざかり
若葉冷えゆく星の光なり
あかあかと枯るる草たけをそろへて
甕の水にしばらくの月寄れり
かそけき月のかげつくりゆく蟲の音よ
月夜の雲ひえびえと野の四方にありし
淋しい灯と思ふに川が流れをる

栗林一石路

どつと笑ひしが我には病める母ありけり

死ぬ日近きに弟よ錢のことといへり

雨風たける地に伏して低き家家

一日のポケットから何もかもつかみだした

これが仕事にありついた雪掻人夫か

枯蘆の空の海あるさま

赤い實くらがりを黒猫通す

うづくまりほたる賣

シャツ褌草にぶつかけておく

蔓、空でもなんでもつかまうとする

葛の花ふかき水音がする

枯れつくし赤い旗立てた

暗い山のほかはびつしり星だ

土手がもうこまかい花を咲かせてゐた

夏夜の一角で勞働歌うたふのきこえる

屋根屋根の夕焼くるあすも仕事がない

仕事がない晝寢のからだおこされた

骨壺のある生活のどうしやうもない

なにもかも月もひん曲つてけつかる

組み重つた鐵骨の中に暮れてくる火花を散らす

曇つた太陽が落ちようとするに鶴嘴ぶつこむ

これだけの錢で一月働いて落葉した

街中で明けた元日の空のなにもない

鐵索が空をひつぱつてゐて一月一日

卷取紙を喰つちまつた機械と更けてゐる

もう夜勤に子の紙鳶をおろさねばならぬ

寒夜のビルヂングからもう出てくる人がない

鐵を叩いて人間が空のどこかにゐる

どしや降りのガード下で夕刊を濡らすまい賣つてゐる

天窓から明けてくる齒車が齒車とうごく

小澤武二

さめざめあめふるこごめばなこぼれ
潮風の花を摘んで徑を下りようとしない
年逝く煙らしてゐる
レール闇から出て曲つてゐる
海が咲きほほける風
父を乘せて汽車が出ていつた
水におたまじやくしがゐる
みづすましに風が出てゐる
たうきびわらべ並んでくる

ははきぐさ雨にうたれてゐる
秋の日の蓼はたけてゐる
繪の消えた繪馬がかかつてゐた
一夜に足りる炭いれた炭斗を置く
それから子の事を考へて火鉢にゐた
雀の飛びすがる五重塔を仰いでゐる
そらがめぶいてゐる
花びらを屋根においていつた風です
櫻すこし咲いて雨があがつてゐる

すこし散る桃に櫻を插し添へ
風ふきいでて連翹の花
枯れた林に黄ろい花が咲き出した
厨べ花もつ菜がおいてある
雲のなくなつた月を見て更けてゐる
日あたればうめもどき
寒い風の掲示新聞を讀んで去らない
赤い實の一枝を插してある
たわわにゆれてゐてちらずよ
病む妻の聲が子を叱つてゐるのだ
死顏に化粧する紅が見あたらない
骨壺にして來てねこけてゐる

鹽谷鵜平

尾花ふむこころおもしろくして風たち

曼珠沙華いよいよ奈良川のいろ

浴衣の襟かき合せ插話

萍や洪水うつりきし鯉つき

尾花であれ芒であれぐつすり寢たい

風邪のなごりのわが顔の鼻

小竹のとしよりの爺が言はした

むく鳥や小枝こぼれおつるなり

ささがにに屋根の雪をはしり

あが爐ぶちにはインキ壺もたつ

焼鳥が一つやひとりはをかしからず

なのはなにくもの絲ひく

をねこあねこうどこはうれんさう

苗代寒みづの泡

じねんじやうの蔓がのびるからなア

みやの木曾川をはりの木曾川の植田

門合歡、のしげり日のたつ

うなぎつかみのこれは長葉にうなぎ[illegible]

芋植ゑてゐる年寄にきかせまいぞ

水際の蠅の始終はしらね

まこと帽子によき年寄なるはむつかし

おれたちの汗くさい日がくれになる

爺さん筏の雪を掻きながし

朝づく陽や小猿を叱りものきせてゐる

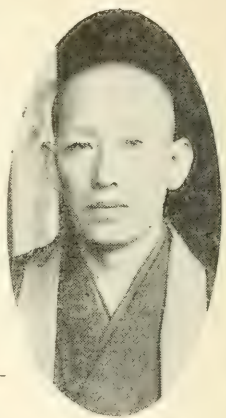
これが百姓地獄の霜の華

寒詣もせず[illegible]もみなく

風邪やつれした手のうらおもて

もの詣漫歩の小岸氷つた

家主の冬帽子白髪はみ出してゐる

寒ねずみが一つ水甕まはりして鳴いたり

喜谷六花

明治三十六年より四十五年まで（十七句）

山晴の空に聲ある鳴子かな

積藁の夜半に燃えたつ冬田かな

摘草の汝が汗われもほの暑き

凌霄花の吹かれ光れる夕立かな

墾きありて風溜りなる落葉かな

枯葦に岸の椿や隅田ほとり

春草や君訪ふかたの三つの丘

この家暮るゝ早きこの森蜩に

うらゝかや御堂は松と花とにて

殘雪の荒瀬光りや峯映り

短夜や嵐忘れし峠宿

梅雨晴のよつで景色や莖の外

我寡言知る客安き夜長かな

秋晴や島の近きは家見えて

朧夜や色綱を牛に解く疲れ

雪かく朝老杜氏家の兒を抱いて

大正六年より十四年まで（十三句）

鷦鷯この主の反古藪にまで

禮佛子に怠らせず春の朝々

草萠え初むる小みちながらこれを行き給へ

佛徒春の木の間行くよろこびに疾し

火鉢の中の小石棄つる石にうつ音

梅雨の青葉の近くあほる風のあとなし

子ら迎へ火おもしろく彼の家この家

疊に河鹿をはなしほう〳〵というて君ら

暖冬のひと間一人子庭にゐる

菊澄める朝のそよ風たちそむる梢

塒鳥のおちつくまさ木のうすら赤い實

みなに寢し佛壇閉ぢて一夜の蒲團に入る

子供ら遊び去ぬ草ほつ〳〵と生ひ初めし

人々夜浪の磯をはなれゆる〳〵去ぬる

小澤碧童

刈藻集

『昭和四年七月中浣於能古舍濟記』

菜畑の抜かれてありぬ朝の霜
街道に枯葭の沿ふ干潟かな
何鳥か啼いて見せけり冬木立
大根干す凪になりたれ浦の松
聯にして梅にからびぬ唐辛子
年惜む寫本幾册つみかさね
道遠き思ひの深し冬籠
古人かくて逝きしと想ふ蒲團かな
川口に鯨群れ來ぬ年のくれ

淨瑠璃の一節に寢る蒲團かな
大川に鷗の白し明の春
引窓に星のひつつく寒さかな
熱い茶にありついてをる霜夜かな
行年や富士をろがむ旅の空
初午や法華太鼓も眞似上手
初午やかゝるひでりは年代記
二の午や末社乍らも梅柳
初午や煮つめてうまき燒豆腐

如月や箒のさきの文の屑
珍らしき花も病む身に餘寒かな
桑の芽や踏藁を置く畝々に
青麥や桑畑つゞき雨の後
灌佛に一盆青しよもぎ餅
別堂を覗けば空虚や落椿
花咲くやあはれ檜の旱枯れ
色里の雨に濡れけり花三分
刈草の大束出來て行々子
雨一日咲き崩れたる牡丹かな
捨苗の束に生まれし蜻蛉かな
晝顔や葛の葉かげに咲きそめて

山口花笠

宮垣の雪に埋もれて三ケ日

春立つや梁から見ゆる鼠の尾

風の中の公園の花見逃さじ

幕ながら舞臺濡れたり花の雨

梅林や跣雄々しき尻からげ

堂の漏り僧と見に行く春の雨

種芋を植ゑて山鳥飛ぶを見る

あたゝかや炭竈つくる老一人

春雨や合羽かけたる高野籠

春の雪馬曳いて來し使かな

春風や筵着せたる水車

行春や老の尼來て住み更る

石楠の花散れば山椒魚沈む

立山連峰はつきり浮いて青簾

渦を見に誘はれ漕ぐや行々子

裏祭まで降りつゞく雨にくし

川狩や逃げてやゝ行く鷭の聲

提灯にひゞく夜風や時鳥

薫風や浪がもて來る貝の殻

上汐に麁朶動き居る秋の雨

踊更けてひとりこぼるゝ篝かな

黒部峡中

小鳥とんで紅葉かつちる渦の上

越中大牧温泉

磧温泉へ石段下りる月明り

越中有峰山中

月のさす樺の林を通り抜け

焚火あといくつもありて冬木道

餅搗やよくのめり出る竈の火

雪しぶく戸のあけたても獨り者

舟人にあらき雨かな枯柳

錢踏みて拜む佛や小夜時雨

誰れも居ぬ火燵淋しや火の匂ひ

筏井竹の門

植ゑかへし松にたま〳〵春の雪

水淺み石明かに春日さす

枝きりてくわらりと高き柳かな

宴つゞく思ひの朝寐さへづれり

時鳥なくや吉野の遲櫻

時鳥閻魔か君を睨む時

若竹に雀二三羽雨青し

水中に牡丹崩るゝ金魚かな

雨はれて白き芙蓉の雫かな

過ぎ行くや木犀匂ふ夜の門

庭を見れば萩に月あり遠砧

林泉の壯大を見る紅葉かな

妻がつりし名殘の蚊帳のたるみけり

妹が門山茶花散りて鳥とひぬ

冬の夜の小屛風たてゝ寐入りけり

今人は古人に如かず冬籠

橋二つ見えて雪の正月の水

殘雪蹴つて我足音におどろく夜

鶯の立木ある長い〳〵土塀

牛つかひそめた春田二三枚

蚤の跡を温泉にさする温泉も濁る頃

風に向ひ行く若葉明るき山々

勞働祭の踏みあらした草の雨あがる

わたり鳥が來る樣になつた庭木

いつも蟲なく父が命日の今年は暑くて

射干皆實となつたこの墓

富を積めば暗鬼あり落葉風荒ぶ

不治病を得て歡喜あり歸り花

鰤網に赤烏賊の泳けるいくつも赤く

書室の二階から川尻の帆柱の一杯な冬

菅原師竹

ほと〳〵とほと〳〵と撲つ門朧
死んだ子の阿難に似たる彼岸かな
なよ竹の雪折れ妻や二日灸
鉾に乘る稚兒の寐ざめや明易き
山の靄安居の眉を染めにけり
安居して古佛と坐して不言
今年又新たに涼し竹婦人
雲岫を出づるや鮓のなれる時
門外に行履を聞かず一夏かな

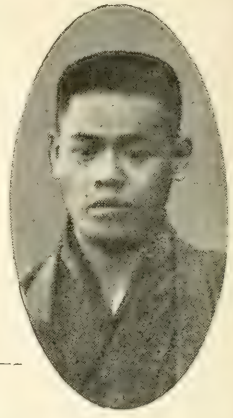
和尚と書いて安居の吾に文の來し
山の雲安居の膝に平らなり
靄下りて鐘暮るゝ長き晝寐かな
灯取蟲油の澱を灯す夜に
月は影を移せど蕣は動かざる
黑雲に染む白雲や時鳥
一字なくて佛の山や閑古鳥
入る月か出し月か見ゆ閑古鳥
先住のこれを殘しぬ蟇

夜機の灯一蝶布に織られけり
蟻王門蝶の彩翼齎らせし
初胡瓜河童に二本流しけり
産みさうな腹干す猫や若楓
姙み星有明けてさへ光りけり
女童が硯洗へば男童も
醫者法師山伏廻り燈籠かな
そち向きに案山子代々立つ田かな
日に三度鳴いて鶉の妻戀ふる
君に贈る道遠し晝蘭送りけり
蕎麥刈にかまはず山の日は落ちぬ
扁平にして百斤や莖の石

川西和露

あさからひるから山水ぬるむ
さみだるゝ人前の仕事する
ほたるとも寸水草は水は
日覆してかごの鳥
人のよい韃の黄帷子
七夕の舟さきの舟ごみ
二百十日河ばたの石屋
をみなへしかるかやは刈りし
いなびかり夜道の稲ざはり

蟲賣の手甲の手もと
落し水田の風にあたる
山がつにとんぼさとし
米ふみけいとう節くれし
かゞしの笠被せ小田暮れけり
牛ぐるまとんぼつるみけり
山道さだかに木の實降るべしや
山茶花かたい日常をかへりみる
地べたを飛ぶ赤とんぼがふえた

骨正月のとろとろこんぶ
けさの焚火を這はしとる
ひちひち下萠えてるんだ
朝貝蒔いたそこの石
日なたの日まはりどれだけのびる
つむじ風雀ついばんだ
木の葉落つ全き蟲穴
山にのぼるざやうさんな山山
しらくものうすれる眞晝
あくせく空の黒けむり
波止杭がつしり曝れとる
馬がどと馬子に凭つた

廣江八重櫻

榧を吹く音美妙なり春の風
野火を消す呪文や臼に伏せにけり
飾りやら牛馬を末に雛かな
干す船の腹起す空や歸る雁
蜆掻く江に春蟬の聲遠し
鹿垣に花かたまれる麓かな
窟なる鬼跡汐打つ明易き
舟宿に物見の窓や五月雨
夕立雲頭八股裂けにけり

日の道にあたるゆるぎや雲の峰
山に醉ふ人ありて草清水かな
清水あるほとり萱立ち逞しき
鮓の句を一夏一句とほめにけり
蚊帳に入つて返す詞もなかりけり
入海の喉の汐勢や時鳥
積草も暮れ合ふ藪や蚊喰鳥
秋晴れて七尾の隈を出舟かな
八朔や大社の鳥居稲の中

蓑蟲のそよりと二百十日かな
絲瓜忌や叱られし聲の耳にあり
大いなる雲の穴目や秋の風
葭の穗の影ある水や三日の月
此日荒れて此夜稲妻頻りなり
清談數刻にして罷る蟲の聲
紅葉山車の到る處かな
山國に大きな道の寒さかな
一峯の露領限るや冬の月
たてよこと氷伐り行く人數かな
百花譜に誰が思ひ刄を插みけん
家内して積む蓬萊の高さかな

家の空の三つ星が三つのさまのうれしく

くろちりめんひんやりすあかがねひばち

わが大爐の一夜一夜の山が根

霜夜逢へばいとしくて胸もとのさま

春の田の二三まいうちつらなりし水

山々の明けの春の河の流れ

二つおきたるほのかなるひかりすよるのすゑもの

蘆の花さきし道ありてゆくに

雞頭きるを見てをつてくれる

中塚一碧樓

飛騨のかた大空秋となり

河原蓬が枯れて逢はぬいくにち

北の山さくらの梢に見えて

住吉天王寺大阪の春の空

一夜さの名殘蚊遣の草も

庭前は梅の葉のちる朝の雲

寒き日の蓑をつけしがなつかしく

うごいてゐる空いつたいの冬の雲

こゝにても荒海のひゞき葱畑

裏口の梨の花さけよ野のくもり

來しも五月の海の松島瑞巖寺

白露の野原のみちをゆきかゝり

日のひかりこの谷の冬を待ちつゝ

雲のうすうす雀巣立ちたり

白河馬市の地を風吹いて

空へたちのぼりわれらが焚火のけむり

時雨るゝ魚の中にてもえびは藻につく

野に大雪も來よとおもふ冬菜をつける

我れにかも濡れて花さき薊草

子を生し子を生して棲といふに赤いゆすらうめ

川のべよ暑きこの川の上はいづこべ

安齋櫻磈子

東風ふけよ家路の暇にかゝり

きさらぎ此の村のみな夕日影

何木となく春のしら雪つもり

蓑も枯れくさのいろに人をり

松原つゞきこの町の冬の宵

山へゆく父のすがた霧のかゝり

月入るよひとひらの雲のうす雲

雲のさだまらず家々の竹の春

日もすぎすだれの北の空

閑古鳥鳴くべの白き木の花

釣舟を漕ぐ山影となり漕ぐや

空やひと夜のゆく月のひかり

葉のかたき枇杷の匂ふかな

秋風ふく山青し道もなき山

人いでて渚の舟を漕ぐかな

千葉衛戍病院に一子里治の病みて

癒ゆる時もなく下總の麥は熟れたり

里治の一周忌に

明け空八月の二日かな

平泉にて

ゆきかへり道しろき秋の中尊寺

尾花が丘の暮れゆけど麥を蒔くなり

須磨の浦

淡路島いま日のかげり浪々

大阪句會

つめたき夜の大阪の音をまどろみ

父逝く

いろ〳〵な木の芽の山よ父よ

おくつきのべわが見てあるは雜木の花

老母の死に

葭切よ鳴きやまんすべもなきさま

東本願寺枳殼邸

かしこのおも水に山茶花のうつり

石山寺にて

しぐれふる中に溢れみたらし

男體山

雪の山や人みづうみの橋を渡り

長女の嫁ぎの里にて

草枯れの島ちかく漕ぎて來しかな

山房冬

陽出でず枯れ山の明けてひさしき

山中寒明

山みづの音や山に雪ふり

瀧井孝作

雨衝くや土塀のかげに葱見ゆる

水鳥や水べりに住み兒痩する

人のけはひ暮方の降りて消ゆる雪

家の燕たれかれとなく眠りつく夜

梅咲きぬ教室の我々に窓ある

日覆に抜け猫つく下ろしたり

お會式近く壁にもたせかけたるものよ

欅の高い所よ會式濟みけり

蜜柑の荷土間の高窓の二つ

障子をたてきり麥稈蕗の葉

日高く著いた鮎の柿の葉すつる

夏場海が灣入してゐて女履はれて通ひ

汐っぽい板の間を踏み燐寸すり

日覆の下腰掛の被ひも汚れ

半玉が今年の二の酉をすましけり

病院の窓よ冬の太陽の行く

夫人 干蒲團を入れてたてきりにけり

枯草に帽子をおく かむりとほしたる

越中の海の日和の干鮨全し

わたしが夕べ通る堤の田の苗付けられし

ぬれた草に落した魚のあげられず

お前の歩むさくらの樹には櫻の實

眞赤なフランネルのきもので四つの女の兒

夜行列車一人の口のみかんの汁垂れたり

赤ゝ、枯れた芝の葉皆曲れり

七草の朝のまは焚きすてにけり

山科にて(二句)

こして來て田をながむれば田草取

菜畑へ子供のはひる裏庭

奈良の寓(二句)

冬越す魚に池に枯枝枝をつけて

ぜにかりにゆく家のありとしのくれ

角田竹冷

新年

元日や我は日本に生れたり

初卯詣古渡にばつちをなつかしむ

萬歳やそも〳〵飯を立場茶屋

追羽子のそれや京錢の小脇差

春

東風そよ〳〵暖簾のはしの旭哉

水はりて春を田に見る日ざし哉

時は彌生ひさご枕に鼾かな

草餅や二つ並べて東山

白魚やはゞかりながら江戸の水

一二三四五六七八櫻貝

蝶ひら〳〵天下の春をほしいまゝ

夏

千山を知る人にして川開

松遠み夕日うすづく沖鱠

草の雨晝の水鷄に物やらん

竹林や雨來りそゝぎ螢活く

合歡さくや壁畫に遠き日の光

明治六年(十八歳)岩倉右府公に謁し即吟す

動きなき巖ありての清水かな

秋

角力ふ句の今宵俳諧男七夕

お祭や神田つ子にて候と

蟲の音のちんちろりんや鉦の音

木の實〳〵我俳諧は成就せり

京といへば嵯峨とおもほゆ竹の春

草いろ〳〵我戀ふ野菊しほらしや

文久二年(七歳)初めて句あり

朝顏や垣にからまる風の色

冬

冬の日やしいしの絹に暮れかゝる

鳥の踏む通天橋や朝の霜

歸るさに宵の雨知る十夜かな

待つほどに蒟蒻賣の冬されて

酒の千鳥茶の鶺鴒鱈汁

升に落ちて忘られし除夜の鼠かな

巖谷小波

歳旦

極東の一等國や初日出

初日出海一杯の御旗かな

氣に入りの爺は醉うたり松の内

門に泊す萬里の船や松囃子

新年言志

言はんより行はんずる今年かな

春

櫻さく日本に生れ男かな

春の水附木の舟を泛べたり

鶯や春閑に五家の莊

西行を殘して富士は霞みけり

夏

虻一つ遊子悶の窓を打つ

克忠克孝なれと幟かな

夏の月臍の底まで照らしけり

蝙蝠や子を待つ門の二日月

風鈴にありや風賣る商人の

南國の土赤々と蟻の塔

秋

よく冴ゆる男の撥や宵の秋

長者なら雲買ひしめよけふの月

白扇の白きがまゝに會ふや秋

沃野千里露萬斛の朝かな

閑居秋深うして猿に小鍋を洗はしむ

冬

砂山の擬戰に烟る小春かな

時雨々々時雨と惟然走りけり

月落烏啼霜や天滿の橋の上

若干の詩債もありて冬籠

大雪の海に消込む靜さよ

年末

詩商人酒商人に如かず師走

大年をはや寐ねたる子供かな

古暦達磨に張つてしまひけり

及第や髭や春待つ男振

お噺も藝の中なり年忘

川村黃雨

新年

元日をゆたに流るゝ大河かな

草廬五尺にして元日の心大いなり

愛研齋徒を擁して

あら玉の息吹きかけて初硯

春

麗かや波住の江の岸を打つ

春の水十里家なき鄕を過ぐ

二日灸鶯に恥づ細き臑

船ばたや袖もと拂ふ春の雪

阿佛尼の笠に百里の落花哉

桃滿村白きもの只水なりけり

古歌を偲びて

百千鳥渚の院の松寒し

夏

夏來ぬと色に出でけり雨の竹

筑摩鍋その一枚に哀史あり

針妙の抱へて走る袷かな

曙や靄を隔てゝ黑牡丹

酒旗高く新樹を抽いて戰ぎけり

法隆寺

蟲干や壁畫にわたる古都の風

面壁の耳環ぬけたる藪蚊哉

秋

妹が帶初秋の色動きけり

露ころ〳〵轉げ盡して夜の明ける

天に月地に芋畑の今宵哉

時感

雁一聲囹圄に洟をかむ音す

蟋蟀ある夜は啼かで燭の下

酴醾醲や馬を叱する障子越

駕の醉熟柿啜りて醒しけり

冬

乾鮭に觸れて聲あり空瓢

家根船と云ふもの絕えぬ都鳥

霜の鐘古陵の松に答へけり

鶺鴒の尾に打つ水や朝の月

燭剪つて夜ふかくきくや雪の聲

歲暮書懷

禿びけりな筆も箒も年の果

森無黄

春

燈籠にのみ散る闇の櫻かな

春雨十日其の間に月の育ちけり

昔男ありけり吾妻の宿に蜆汁

燭を秉る長夜の飲や彌生盡

蒟蒻の泡雪消えて路次に入る

山吹の散るに任せし噴井哉

涙拭いて菓子貰ひけり二日灸

猪牙舟に八幡鐘の霞みけり

夏

涼しさや梢乘り込む二挺立ち

短夜は更けて葛西の馬鹿囃子

散る牡丹音すやと耳を欹てぬ

夕顔や縁に載せたる犬の腮

豎子をして名を成さしめぬ大矢數

蟲干や書庫は家人の手を借らず

啼き破る津守の夢や杜宇

清水吸ふや口さし寄せて身を斜

秋

焼き栗の熱きに剝し得も剝かず

竹法螺や堤を越ゆる秋の水

幕の湯に人のけはひや秋の暮

漆煉る笠に殘んの暑さ哉

初汐に巣を追はれたる船蟲か

枝卸す門の欅や冬近し

投げられてべそかく子供角力哉

新蕎麥や無理強ひしたるあるじ振

冬

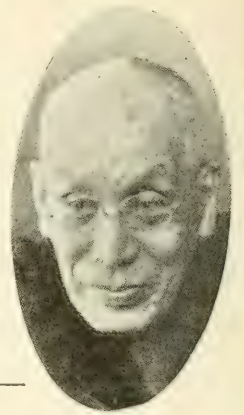
散れど／＼倚山茶花の莟かな

行く年を靜かに富士の暮れにけり

托鉢の時雨れて行くや數珠屋町

時雨忌の客もてなすや奈良茶飯

花足袋を撓れ京へと摩りけり

笹鳴や谷へ溢るゝ温泉の餘り

岡野知十

新曲や春の句二つ三つよせて

如月や紅梅匂へ下着裏

しめ鯖に落すポンスや春寒し

娘の雛を祭るを見て

天皇をいたゞく國や麗に

醒めし人となる願なし櫻かな

花戀し老尚春を一筋に

柳ばし柳島春の小舟かな

春雨の客となりけり枕かな

春の月戒を破れば曇りけり

蕪村遺什の一

ゆく春に印籠一つ殘りけり

沙羅いけて心しづまる簾かな

子規お江戸言葉のすたる世に

初ものに掛直かけたか子規

うつくしき心こぼれて櫻の實

本所にて

卯の花の咲く垣見れば母戀し

濡れし儘垂れし簾や秋になる

秋の灯や藍摺にせし原稿紙

飲み習ふ薄手の猪口や秋袷

半月に切りし西瓜の雫かな

秋草やどの花折らば人の眉

堂ケ島にて

三人の湯女住む秋の谷底に

つばめ温泉

山の湯の湯槽にあふれ萩桔梗

名月や錢かねいはぬ世が戀し

柳は傷ましき樹かな雁わたる

老懐

古榧の匂ひが抜けし身が侘し

寂しき人人かたりよれ初時雨

根岸即事

下駄にさはる櫻落葉柏落葉かな

釜掛けて誰待つとしもなく雪に

埋火や笑つて居れば春が來る

自嘲して暦の果の落首かな

伊藤松宇

しら〳〵と今年になりぬ雪の上
眞中に富士聳えたり國の春
春曉や君王の夢まだ覺めず
嵯峨へ行く道問はれけり春の暗
一羽飛び二羽飛び霞む鴉かな
如月や雪少しあるものの蔭
乙鳥や花散る里の晝の雨
薄靄に旭は包まれて雉子の聲
暮遲し返事齎らす傳書鳩

短夜や淡くも殘る水の月
輕井澤で汽車を捨てけり夏の朝
暑き日の中に我れある吐息かな
露涼し歸省して踏む草の月
露涼し未明を辿る文化村
十萬戶たしなき夏の風に活く
夏川や悍馬の渡る水煙
燭剪つて見守る太刀や夜半の秋
曠原に征馬進めつ天の川

大濤の岸打つ音や天の川
寺荒れて障子にあたる尾花かな
雄大な句を思ふ夜の野分かな
草市の一夜露けき都かな
憶良等が數へ殘りや菊の花
高浪の夕日洗うて木枯す
凩や浪の上なる佐渡ヶ島
一つ家に鋭き灯あり夜半の冬
大江の渺々として月冴ゆる
雪折れや竹の伏見の夜の音
枯柳斯くて回らぬ水車かな
一日〳〵師走心になりにけり

鵜澤四丁

新年

初空や淺黃にぬけて銀の富士

彈初やワグネルの像掲げたる

數の子や醉重りて酒苦き

群像の彫刻床に福壽艸

老措大年禮もせで庵に籠る

讀初のほろりと落ちし不審紙

春

白魚や浮世繪の美人脛細き

草餅の大き過ぎてや見詰め居し

濃艶の女に飽きて白魚鍋

棒につけた凧持つて居る背中の兒

燒海苔のちゞくれてあり春の雨

對岸の桃畑十里春の川

夏

洗鯉水ツぽき酒を叱りけり

稗蒔や文化に染まぬ人のある

水渡る風さら〱と鴛鴦涼し

大柄の單衣よ惠まれし若き娘よ

晩酌の猪口伏せる頃水鷄啼く

藻の花や隣村まで舟で行く

秋

知らぬ犬が後ついてくる花野哉

鵙啼くや人は緊張の生活に

稻妻や向ひ小山の先きの先き

鮭網の鈴鳴る利根の夜明かな

野の小家人安らかに草の花

露に伏す芒のはてや刀根見ゆる

冬

水鳥の丸まり並ぶ土手の上

錦繪を行火に貼りて惜まるゝ

傘持ちて後追うて來し時雨哉

鹿島立蹄の音や神渡し

天才は狂人に近し冬の月

長刀遂にぬかで藥を賣るや年の市

起きぬけて恵方の空も初日かな
夕雲のうつろひて羽子頻りなり
踏めば鳴る土のひゞきや別れ霜
ひたとけて軒めぐる樋の氷柱哉
咳すれば壁に聲ある二月かな
草摘むや日南の流れ聞き澄す
白魚や網をふるへば月ばかり
蛙沈むまゝや相よる青みどろ
夕風や寺に冷ゆる鐘一つ

武田鶯塘

ひつそりとありしを夏の夜雨哉
夏既に濃る藻の迅さかな
今日もまた白き[illegible]来て梅雨寒し
鞍鳴りや祭りの禰宜の默々と
蚊遣火のあら／＼闇となりにけり
金魚斃ちて鉢に淋しき浮藻かな
夕雨や色もなき山かけの餘花
うらなりの一つが小さきトマト哉
三日月やすがれてかゝるものの蔓

夜の空に沈む街たゞ稲妻す
あるだけの竹が戦ぎて秋涼し
夜長飽かず毛絲編み居り間借人
啄木鳥や木霊流るゝ茜雲
曉の戸や籠の鈴蟲鳴き細る
夕紅葉橋の下行く水の音
置く霜や田川ばかりが音たてゝ
霙日や北の港に干鱈積む
何を賣る聲か時雨の一はしり
木枯やうるほひもなく墨を磨る
水鳥や一羽立ちたるあとの闇
水仙や卓にあるもの皆冷ゆる

服部畊石

新年

屠蘇に醉ふ男と我を人知らじ

街のさま一夜見に出つ松の內

春

客去りて門鈴ゆるゝ遲日かな

やゝ強き春風に上手を吹かれつゝ

うつろひて花荷あるや雨の中

茶畑や一樹の櫻吹雪して

驛の名は法隆寺とや塔霞む

春淺き焚火見ゆるや垣の外

朧ぞと思ふや門に立ち出でて

鳶の巢を仰ぎ風音の中に居る

夏

睡蓮に雨四五粒の水輪かな

車前草や梅雨の幾日の潦

明け易し竹の枝皮ちれる水

買うて來て一夜ふた夜の螢かな

葭切やいつかきあてる鰻掻き

知る顏が窓の下行く夜の秋

蛙の音けゝれ〳〵と闇涼し

秋

初汐の夜目にもしるし橋の雨

高き木の高き空かな渡り鳥

雨音の中に老いたり蟲の聲

曉の雲菊の香に仰ぐなり

せゝらぐや露の小草の下流れ

水の色冷かに逸れし魚は何

甘藷の花秋の暑さをあつめたり

冬

ほの〴〵と窓の白むや掃納

木の葉降る丘の夕日や群鴉

何の木か寒の夜風にそゝり立つ

狀差の狀白し爐の榾明り

木枯の星ふりまいて夜をつくる

二三軒坂より下に霜の屋根

星野麥人

春

梅さくやひなたに濡れし霜柱

蟻の行く音蜘の走る音す古草に

吸ひつくや袖に袂に春の雪

芦の芽に小さき渦をまはしゆく

藪道や花の藁屋を行あたり

かゝと打つ草鞋とん〳〵と東風に立つ

春光や浪の揺ぎにゆらぐ島

大根の花白き夜のことなりし

夏

あさよさや膝うす寒き更衣

一人づつ肩揚おろす袷哉

大風の押ふせてゆく青田かな

日まはりの一すぢに日を戀ふ心

田草とる人でありしに驚ける

星涼し寐るを惜みて立つ門に

秋

新月や草にこそつく蟹の音

柳ちる風がふくなり魚を干す

名月や神田祭の山車の上

秋風や堺の浦の浪の音

ひぐらしや朝草刈に連立ちて

鳥の如く土器飛ばせ紅葉哉

かるさんの子に秋深き山家哉

朝空や露寒げなる青き艸

冬

京に來て時雨の雲をめづるなり

日を迎へ日を送り軒の干菜かな

夜は闇をはなれゆくなり霜の艸

冬木立芽ぐむが如く靄かゝる

きり〳〵とからみし蔓や枯木立

その頃の小梅は寒き冬田かな

寒紅や小菊にぬぐふくすり指

こゝらあたり寐てゐる家や除夜の鐘

大野酒竹

春

四方拜大日の丸を立てんかな

年男胡坐して謠一番す

菜の花に埋もれて握飯を食ふ

水長し梅ちりこぼれ〳〵

悼梧逸子

曉や石冷やに梅の散る

長き日を洒落ばかりいふ男哉

鐘一つ洛外の彌生山暮るゝ

祠あり櫻の奥に灯のともる

京の客櫻餅の赤きのみを食ふ

夏

なゐふつたあとを搖らるゝ牡丹哉

俳友帖序

涼しやと寢まり申せば蟻がさす

若楓石の凹みに水たまる

葉柳に引張れば月大いなる

擂鉢にマチと附木と蚊やり哉

漣や藻の花ふはり月を越す

雲の峯河原の石のにほひ哉

稻妻や不動明王の顏の色

秋

立秋の大鐘つくや瘦法師

鰯來い〳〵とて月になる

嵯峨の暮露裝束の敕使哉

物申すいざよふ門を明くるべう

萩を出て蓮を悲む朝かな

から橋の下に玉卷く芭蕉かな

ゆく秋を溫飩買ひけり貧か身ハ

冬

炭賣の小野で日暮るゝ話かな

鯨吼えて村に近づく嵐かな

埋火や晝を小暗きに戀歌よむ

炬燵出て經藏に入る律師かな

埋火の夜は更けけらし竹の雪

火の消えた石の閨入りの寒さ哉

笹川臨風

初霞鷄犬の聲遠近に

鶯や晝閑かなる女風呂

朧夜や土手八町の小室節

雛壇の夜はさゝめきの聞ゆらし

芳野懐古

南殿の御簾古りたり花吹雪

揚雲雀筑波に雲は無かりけり

「助六江戸櫻」

冴え返る雨の箕輪やぬれ燕

行春や落花をさそふ水調子

矢車の音高鳴す青嵐

關釜連絡船上

日盛りや石榴の花紅うして

朝鮮金剛山

梅雨晴れの日本海や雲耶山

涼しさや一萬二千峰の風

朝鮮漫遊歸途

高麗新羅箕子や衛滿と明け易き

朝涼の風に蓮の香さそひ來し

若葉雨軒に湯の香の立ち去らず

夏木立二荒山に雲の湧く

牡丹花の崩れんとしてたゆたへる

灯の港あとに出船の夕涼し

江州長濱祭

姥が茶屋眉毛に秋の山近し

江州多賀大社

秋祭雨雲低く灯の映ゆる

秋晴れに氷木高知りぬ神ながら

悼亡

芙蓉散つて曉の露を待ちあへず

殘月や胡馬の鬣野分して

燭乘りて祕佛拜めばいとゞ鳴く

まどろめば舊里の夢や遠砧

角町やおでん燗酒冬の月

初時雨庭わびしくも蓮枯れて

時雨るゝや黄昏れて行く菰と笠

宇都宮別館壁上題句

七年の面壁寒し影法師

寒椿雪解したる藪小路

佐々醒雪

春

据風呂の梅に隣れる山家かな

散り梅や蛇の目提げ行くぬかり道

傘の柄にくゝつて行くや梅の枝

其奥に堂あり梅花散らんとす

峯越せば雨に散りけり春の雪

朧夜や白玉椿散らんとす

駿河屋の暖簾古りたり乙鳥

もの思ふ傾城老いぬ夕櫻

枝ためて草紙干す子や桃の花

夏

山門の仁王に迫る若葉かな

青嵐お夏狂亂のたもと哉

蟲賣の蟲かしましゝ夏の月

五月雨や謠聲なる河東節

紅百合の草刈籠にしをれけり

かけこみし雨に酒よぶ浴衣かな

涼しさや下駄引ずつて寺の門

青麥に浮雲ちぎれ〳〵かな

秋

砧など打つて遊ばん山の月

下谷一番伊達の薄着の夜寒かな

影法師一つになりし夜寒かな

腹ばうて西瓜に集ふ殘暑かな

樂書きの扇に殘る暑さかな

冬

千鳥かよかけ行きすぎつはしの橋

時雨るゝや銀杏蹴ちらすむら鴉

かりはしの霜に痕なし朝の月

鴉ないて伊左が紙衣を時雨けり

遠山の雪見やりつゝ楊枝哉

寒さうに觀世痩せたり鬼の面

川風や小唄のあとに千鳥なく

繩のれん頭で分くる霜夜かな

沼波瓊音

春

年玉の故ありげなり小さき物
郊外や初日のあたる風の藪
菜の花や物語り行く車夫と客
暮れざるに電燈のつく櫻かな
泣けるやうな說法聽かむ花盛り
垣越しに隣の灯影夏近し
散る櫻幼き我を幻に
春の日やふと雜學に志す

夏

二階借の夫婦に親し桐の花
梅雨近き雲や若葉の大公孫樹
ほころびの肱がかはゆき浴衣かな
青嵐裸で走る女あれ
半日の俥の旅や蟬に飽く
雷の下に默する大都かな
心太活きて咽喉を走るかな
行水の背中に秋の近づきぬ

秋

天の川人の世も灯に美しき
西瓜太郎躍り出でよと割つてけり
兄がたほすまはり燈籠の加減かな
曇り日のふつと日のさす芙蓉かな
ほし傘に萩のこぼれてよき日なり
雨快し秋草の灯になじむ
障子しめて秋の夜となる一間かな

冬

深川や汽笛々々に冬の立つ
言問　冬の灯をちこち夕川は琥珀に搖ぎて
冬帽を買はむとぞ思ふ障子の日
推敲の再び炭をつぎ直す
雨寒くほそ〳〵と人行く日なり
語りつゝ小走る夫婦寒の月
冬薔薇や海少しある小料理屋

女湯に春の香の立つしやぼん哉

藪入や山の手の兄下町の妹

谷底の猿の團居になだれ哉

夕焼の富嶽に落ち來る雲雀かな

新左めの輕口聽かん春夜かな

かけ落の堅田泊りや春の宵

、山先生を悼みて

大凧のうなつて西へそれてけり

バラックに寒明の星瞬けり

濃く薄く四十八瀧の若葉かな

宮島五丈原

海賊の忘れ手斧や磯清水

夏の山毒ある蟲の美なる哉

夕立の雲八州を領しけり

人去てハンモック風に搖ぐ哉

羅に文身の龍踊りけり

嶺雲の「霹靂鞭」を讀みて

雲の峯は水也嶺雲は火なりけり

水藝の小屋傾きて夏果つる

茄子の紫唐辛子の朱や渾て露

家問へば瀧の水上菊の門

くしき夕顏一葉女史に似たり

黒潮に雲吹き落す野分かな

雨雲や踊太鼓の早調子

大花火源平藤橘と開きけり

柚味噌の底を叩いて曰く一切空

凩や傾城町の晝の月

右一町落葉をふんで下りけり

吉備津神社内鳴動釜殿を觀て

掻笥振る阿曾女の袖に冬日かな

韃靼の海の曇りや鯨船

霜月の臓腑に蕎麥の薬味かな

初風呂の新しき木の匂ひ哉

お寶／＼と大音聲に呼はつたり

安藤和風

句屑

元日を地球が廻る元日も

梅早し柞干す窓の日眩しく

春動く見よ風車水車

摺り減りし踏繪に尊き光りあり

鶯の來鳴く日々是好日

山吹に飛び付く魚や瀬を早み

硯石伐る崖高く藤垂るゝ

雪絶間絶間土の香春の草

草も木も春日の喜び輝けり

人間の皮着てけふの暑かな

男子兒と生れ裸に恥ぢぬ涼し

我儘の吾が家程涼しき處はなし

田舍者に治められて江戸の初鰹

右に見し山を左に舟涼し

簪の落ちて音あり金魚盤

晝顏に晝顏晝顏絡みけり

稻妻や水にうなづく芒の穗

其の夜寒僧も佛を焚きにけん

我生きて居たるなりけり秋の暮

花鳥の繪を透き燈籠消えんとす

青い鳥紅い鳥怪しい鳥も渡る

人文字を知り初めしより蟲憂ふ

蟲聽くと話し聞く別々の耳

基督の血を吸ひ足らず殘る蚊か

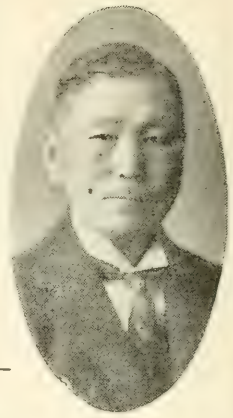
何處さ行く秋やら悲しヲバコ節

手に觸るゝ物皆寒し錢も金も

落し物なきやと枯野我を呼ぶ

狂人か豫言者か枯野風に叫ぶ

我を襲ふものあり落葉踏む後ろ

夜の底落葉に落葉落ちる音

坪谷水哉

温泉の客の御慶裸と裸かな
藍匂ふ初卯詣の法被かな
山門や樂書に立つ春の人
團子賣切申候花の山
漕ぎ競ふボート惱むや比叡颪
陽炎や馬の爪剪る多摩磧
鳶の輪の下を一刷毛霞みけり
春正に關や御木引く伊勢路
酒番は醉うて睡りけり汐干船

花も稍や醉へる色なり夕櫻
太平の色や花見る人の顏
青田から月叩き出す水雞かな
釣橋の下行く雲や夏の雲
鐵扇や正氣の歌を高らかに
主人先づ羽織脱ぎけり夏座敷
刈りし藻の花暫らくの命かな
橋くぐり柳くぐるや藻刈舟
岩燕見上げ見下すや瀧飛沫

北滿洲にて
平沙千里駱駝の背から雲の峰
幌蚊帳に大の字小さき晝寢かな
秋立つや燈臺守が髭の先
稻舟にすがる螽の別れかな
朝鮮にて
鵲や屋根に干したる唐辛子
朝寒や小舟棹さす頰冠り
天高く芋肥えて村は祭りかな
安房の眞帆上總の片帆小春かな
狼の吼ゆる谺や冬の月
火の番の炭團痩せたる夜寒かな
麥の芽や國分寺跡の缺け瓦
猪を獲し血は斑なり雪の岨

藤井紫影

髪刈れば首筋につく餘寒かな

この川はいづれ上下春の雨

春風や三人行けば下戸上戸

畑打や太閤様も死んだげな

菜の花につれ小便や壬生踊

揚雲雀五柳先生門を出づ

縁下の出し忘れ鉢木の芽ふく

大榎逡巡として木の芽かな

日ねもすのちら／＼雪や梅の花

竹藪の蛅蛾となりけり春暮るゝ

簗尻の風に流れて蟬涼し

尿して向き直りけり枝蛙

雲の峰南大門と相對す

こま／＼と砂吹きあぐる清水哉

竹影婆娑たり鮓を切る月の縁

打水の竹の雫や金魚池

盆梅の二つ實のりし嬉しさよ

朝寒や萩の小川に嗽ぐ

踊はてゝ露深草の戻り路

赤蜻蛉南瓜畑の雨あがり

醫の下手の詩のなほ下手の菊作

鯛味噌は柚味噌の貧に如かずけり

萩折れば小さき蝶のこぼれ立つ

椎の實の落葉の底につや／＼し

湯豆腐も三日つゞきて小夜時雨

水洟や提唱をきく寒山詩

古火桶古女房や冬ごもり

冬籠海鼠の傳を草しけり

寒菊に古鏡の塵を拂ひけり

牡蠣舟や廓に近き橋の下

氷室漏る水に手洗ふ菜摘かな

野の宮の竹吹く風や落椿

まゝごとや火燵の山へ柴刈りに

おのづから人ある島や耕しぬ

ほとり刈る草のこぼれや秋の水

舊年を坐りかへたる机かな

ほゝ螢とて吃り兒の追ひにけり

松茸の傘に照雨過ぎにけり

暮待つて流す芥や蚊喰鳥

志田素琴

諸を得て歸り行く夜長人

子畑蜥蜴蜥蜴を追ひにけり

蔓花のまとふ一樹や夏の月

しがらみの切れ間流れぬ浮寐鳥

花畑春蒔きの畝を打ちにけり

齧大事の例の接木師雇ひけり

暮れて越す草山一つ春の月

風立ちの月色となりし砧かな

山濤や無月の空の底明り

凩の湖鳰首も見えぬなり

牛の腹雫して行く春の雨

藪鶯飼ひ馴らす宿や春隣

花ながらまろぶ耕土よげ田鋤き

ひよこども浴びよ木蔭の砂涼し

晒布川水草の咲きし旱かな

冬木中鳥一羽ゐて淋しらす

落柿舎

三本の柿に秋光湛へたり

梅雨の月夜々となりけり時鳥

端近き犬のまろ寐や今日の月

靄凍てゝ月の蒼さや原の上

鳴き捨てゝ行く鳥淋し枯野原

勝峯晋風

元日の風かゞやくや枯芭蕉
春浅き土に鍬する力かな
映畫の女朧夜よびかけむ
白梅に雲動く見ゆ塀の空
梅落ちたり開かで朽ちし門に
花曇塔に人あり動きけり
ほそ〴〵と鹿の子の脛や卯の風
梅雨夜具の女くさきに寝もしたり
花桐に月呆けて啼く梟かな

白菜やうしろ向なる俳人
絶頂や清水くゝみて雲に立つ
燃ゆる眼の動きDahliaの黄に紅に
排龍や海怖ぢて來ぬ唐通詞
夏草や捨猫めぐり飛ぶ鴉
明易し火事俄なるあわてざま
泣きたさはりきつて草の花摘みけり
夕霧や洋燈つけたる川蒸汽
石に踞して秋の雲見る無關心

暮るゝ日を淋しと見たる花野哉
一茶忌の蕎麥箸つけてやめにけり
秋風やなべての人のうしろ影
煤煙の中なる月の寒さかな
うどんやの炬燵のかたへ借りにけり
電車近く枯原に影走らせる
坂のぼりきれば笹鳴く崖の家
朝窓や笹鳴く方へ椅子向ける
焼芋や頬あわて動きふくるゝ
うしろに迫る枯野の月かな
街路樹も日向寒しや慈善鍋
怒りこらゆる火鉢そゞろに撫で居たり

小泉迂外

新年

元朝や先づ大盃に酒盛らむ

軍人は勲章を胸に三ケ日

初河岸の御祝儀に鯛を買はさるゝ

春

春の夜や女の唇とダンヒルと

やはらかき女の膝や春の雨

春水や沓かとばかり都鳥

箸置の鴎二つや蜆汁

午過ぎの嗽茶碗や蝶の影

ヴァカボンドの群れの椅子にも散る櫻

二三日素足に馴れし躑躅かな

夏

勞働歌流れゆく新樹かな

肩をならぶるによき新緑の感觸

舟涼し鮓桶の笹ちるほどに

鯵の鹽直ぐ解けそむる眞夏かな

其神輿渡せわたさぬ祭かな

生きようとして焚く蚊遣のけむさ

秋

小鰭讀む河岸となりけり秋に入る

坂一つ四谷はちかき月夜かな

蒸し立ての菓子のうまさよ後の月

煮え切らぬ女の口の長夜かな

相倚りて薗八を聽く夜寒かな

秋袷河東聽く夜となりにけり

枝豆の殻をふるへばきりぎりす

弱き者はいよ／＼弱く蟲の聲

冬

何處へ行くも兩國わたる寒さかな

前彈に心しづまる火桶かな

歳の市金田を出でて別れけり

水洟や神に縋れと道を説く

三味線の絲を外せば川千鳥

マンドリン洩るゝ落葉に閉す家

久保田万太郎

「道芝」より

炭の香の泪さそふや二の替

新参の身にあか／＼と灯りけり

ふりしきや雨はかなむや櫻餅

なつかしや汐干もどりの月あかり

「船打込橋間白浪」

ゆく雁や屑屋くづ八菊四郎

渡鐵町といふところ

したゝかに水をうちたる夕ざくら

宵淺くふりいでし雨のさくらかな

梅雨かけてなつかし祭まつりかな

もち古りし夫婦の箸や冷奴

親と子の宿世かなしき蚊やりかな

町住居のおもひでを聞はれて

蚊帳つるや晦日の宵のふけまさり

夏足袋やいのちひろひしたいこもち

素人芝居する男に

白粉を塗る不所存や蚊喰鳥

うち日さす都べ淋し蓮の花

味すぐるなまり豆腐や秋の風

町中に老木の枝や盆の月

みえそめし灯影いくつや秋の暮

朝寒やいさゝか青きものの蔓

町ところおよそ夜寒のうろ覺え

人、大龍寺の踊りなりとて來る

うち晴れし淋しさみずや獺祭忌

八月二十六日は諏訪神社祭禮なり

かまくらをいまうちこむや秋の蟬

鎌倉香風園にて

短日やすでに灯りし園の中

まのあたりみちくる汐の寒さかな

桑畑へ不二の尾消ゆる寒さかな

ぬれそめてあかるき屋根や夕時雨

夜學子や鏡花小史をよみおぼえ

熱燗や狀書きさしてとりあへず

假越のまゝ住みつきぬ石蕗の花

茶屋へゆくわたりの雪や初芝居

正月の末の寒さや初不動

芥川龍之介

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

夏山や山も空なる夕明り

竹林や夜寒のみちの右ひだり

臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

白桃や莟うるめる枝の反り

自嘲

水洟や鼻の先だけ暮れ残る

元日や手を洗ひをる夕ごころ

あてかいな　あて宇治の生れどす

茶畠に入り日しづもる在所かな

秋の日や竹の実垂るる垣の外

伯母の言葉に

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

野茨にからまる萩のさかりかな

病中

あかつきや蛼なきやむ屋根のうら

木の枝の瓦にさはる暑さかな

山茶花の莟こぼるる寒さかな

雨ふるやうすうす焼くる山のなり

藤の花軒ばの苔の老いにけり

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

小春日や木兎をとめたる竹の枝

松かげに鶏はらばへる暑さかな

久米三汀新婚

明星の銚にひびけほととぎす

白じらと菊を映すや絹帽子

臘梅や雪うち透かす枝のたけ

偶坐

鉄線の花さき入るや窓の穴

車中

しののめの煤ふる中や下の関

悼亡

庭土に皐月の蠅の親しさよ

更けまさる火かげやこよひ雛の顔

鵠沼

かげろふや棟も沈める茅の屋根

さみだれや青柴積める軒の下

破調

兎も片耳垂るる大暑かな

想望

雪どけの中にしだるる柳かな

久米三汀

町は名古屋城見通しに雛賣りて

皆の日の濯ぎ物母を淋しうす

米國より爲替が着きぬ鳴く蛙

春浅うこの牧庫も明け行めて

馬上高う蝶も見つ野の春雷に

驛員の眼にも鹽荷や雪解風

乘合と賭はすまじよ歸雁鳴く

鐵漿染まり誘ふ嚙み草虻の聲

辻井戸の樹雫も祭夕となり

四天門外大群集や雲の峰

口三味に孑孑が浮く溝となり

夕立つや歸山を撒きし迎へ砂

五荷の水嗽ぐにも炊ぐにも夏行

時鳥衣架辷る風の白き夜や

蝸牛や囚屋にもかかる時計臺

朝顔に煤が降る月島に住む

戯曲脱稿出でて杯買ひぬ早稲田の夜

堤走る人數あり秋晴るる里

軍用に伐る竹かほど秋晴れて

櫃に湧く蟲にして甲ふ蚊帳の秋

舟の疊旦青さに雁晴れて

史蹟說くに背くは紅葉見て立つや

丘の家と木と屠牛場や渡り鳥

土の温みも親し一雪のあと打つ田

蔀あぐる時落つる雪松晴れて

千鳥來るや紅濃うす島蕪のあり

山茶花に取り越し物日晴れにけり

行燈に初日の句品川の海

陰陽寮へ樹影もまばら初日さす

魚城移るにや寒月の浪さざら

室生犀星

新年

寒竹の芽の向き日さしにけり

お降りや新藁葺ける北の棟

何の菜のつぼみなるらん雑煮汁

春

竹の風ひねもすさわぐ春日かな

はたはた干し日の永さを知る

おねはんの忘れ毬一つ日暮かな

あはゆきとなるひひなの夕ぐもり

下萌や薪をくづす窓あかり

竹の葉を辷る春日ぞ藪すみれ

干し鰈桃散る里の便かな

夏

澁ゆとんくちなしの花うつりけり

蛍くさき人の手をかぐ夕明り

青梅も葉がくれ茜さしにけり

青梅や築地くえゆく草の中

あまさ柔かさ杏の日のぬくみ

竹の幹秋ちかき日ざし辷りけり

秋

鯛の骨たたみにひろふ夜寒かな

隣間にいとどを捨つる夜半の秋

身にしむやほろりとさめし庭の風

青すすき穂をぬく松のはやてかな

裏山や枝おろしゆく秋の風

秋の日や柑子いろづく土の塀

冬

消炭のつやをふくめる時雨かな

山あひに日のあたりゐるしぐれかな

冬日さすあんかうの肌かわきけり

冬ざれや日あし沁み入る水の垢

短日や小窓に消ゆる魚の串

そのなかに芽の吹く榾のまじりけり

藁苞や在所にもどる鱈のあご

足袋と干菜うつる障子かな

現代俳壇諸家略年譜

月の本爲山 關氏、江戶の人、千條、梅間人、正風園、泄蟹等の別號あり。舊幕の左官御用なりしも、梅室の門に入り點者となり剃髮す。明治以前より大家の格で、明治七年俳諧教林盟社を起して社長となる。十一年十月十九日歿す。享年七十五。著書に「今人五百題」あり、「自筆句稿」「梅の本句集」二卷のほか、「月の本爲山集」(文章篇)二卷あり。

佳峰園等栽 鳥越氏、俳諧は、正風より異端視せられし大阪の八千房淡叟に學び、江戶日本橋に佳峰園を構ふ。溫厚にして恬淡、何派とも交際し仲間の爭ひの外に超然たり。爲山、春湖と共に當代の俳諧三大家ととなへらる。著書に「等栽附合集」あり。明治二十三年十二月六日歿す、享年八十八。

小築庵春湖(橘田) 甲斐の貧家に生る。通稱幸藏。一笑、五株、丘陰の別號あり。天保五年甲府の俳人通志の門に入り、後、百谷禾木に師事す。明治七年教部省より俳諧教導職に補せられ、全國門人の教化に力む。十九年二月十一日歿す、年七十二。「春湖發句集」及び追善集「きつから集」あり。

老鼠堂永機(穗積) 六世其角堂たりし、鼠肝翁の男、文政六年十月十日、江戶下谷に生る。七世其角堂として嘉永安政より明治に亙り、江戶座俳士として知らる。明治二十年門子機一に其角堂の衣鉢を讓り老鼠堂と號し、同年近江義仲寺に芭蕉二百年忌を營む。三十七年一月十日歿す、年八十二。著書に、「みゝな草」「新五元集」「元祿明治枯尾花」「鶯巢千句」等あり。

老鼠堂機一(田中) 神田須田町に生る。明治四年七世其角堂永機に師事し、二十年其角堂八世を繼ぎ向島三圍の庵に入る。大正八年一子に其角堂を讓り、隱棲す。著書に「發句作法指南」「元祿明治枯尾花」「支考全集」等あり。

其角堂永湖(田中) 明治十七年、神田須田町に生る。師父機一の膝下に俳諧を學び、大正六年九世其角堂を繼ぐ。「一つの」を刊行主宰す。

不白軒梅年 江戶深川龜澤町の足袋屋。上總の俳人雜江に學び、のち嵐雪の正統と稱する雪中庵七世對州に就きて八世となり、二十一年隱居して、不白軒を名乘る。三十八年一月十二日歿す、年八十。著書に「續一夏百歩」「俳諧畸人八百題」(明治十七年)四冊等あり。

雪中庵雀志 三井銀行に入り橫濱支店長を勤め、後下谷根岸に閑居す。俳諧を梅年に學び、九世雪中庵を嗣ぐ。四十一年十二月二十三日歿す、享年五十八。著書に、「[illegible]集」「初花集」(明治十九年)「溫故二十四番」等あり。又、古俳書の保存を一代の事業となし、その散佚を防ぎ得たる功沒すべからず。歿後その藏書は、一部は安田家に、一部は酒竹文庫に入りて珍寶たり。

雪中庵宇貫 別號眞外。十世雪中庵をつぎ下谷根岸に住す。大正七年一月五日歿す。享年五十五。

雪中庵東枝 俳諧は、初め[illegible]成雅に學び、後雪中庵雀志に就く。俳誌「正始」のために盡す。大正七年雪中庵十一世を繼ぐ。現に葉山より毎月東京に出張し門人を指導す。

春秋庵幹雄(三森) 文政十二年十二月十六日、磐城國石川郡形見村に生る。二十六歲の時江戶に出で、惺庵西馬に俳諧を學ぶ。明治二十六年春秋庵を繼ぎ、四十一年嗣子これを準一に讓り、天壽老人と號す。四十三年十月十七日歿す、

享年八十二。著書に、「俳諧自在法」「俳諧名誉談」「歳時記季寄」「文學心の種」等あり。

春秋庵準一 幹雄の長男、明治十四年一月二十日、東京日本橋に生る。長ずるに及び、父を助けて俳諧雑誌を編輯し、斯道に專心す。四十一年春秋庵を嗣ぐ。著書に、「俳道要訣」「俳諧獨稽古」等あり。

花の本芹舍 京都の人。八木氏、泮水園と號し、維新前より點者となり、明治初期に於て京都俳壇の權威者たり。明治二十三年一月二十五日歿す、享年八十六。著書に、「わか葉とき」「泮水園句集乾坤二冊」(元治元年刊)、「泮水園句集後編乾坤二冊」(明治十八年刊)等あり。

花の本聽秋(上田肇) 美濃大垣藩の出身、不識庵と號す。俳諧を芹舍に學び、明治十七年、京都に「鴨東新誌」を發行し、二十三年十一世花の本を嗣ぐ。以來全國を旅行し門人多し。著書、「月ヶ瀬紀行」「聽秋百吟」「鶴鳴集」等あり。

夜雪庵金羅(近藤榮治郎) 初號陰齋其成、晩年は三巴屋と號す。本郷湯島に筆道の師匠たりしが、俳諧師となるに及び忽ち繁昌し、夜雪庵四世を繼ぎ、明治に於ける月並及び點取運座の全盛時代を現出す。明治二十七年十月三日歿す、年六十五。月並集「風流會」あり。

東杵庵萬齋(松本顯行) 文久三年正月二十六日、江戸下谷に生る。東杵庵三世顯言の第二子。父の歿後は其弟寶の屋月彥に就き、二十四歳東杵庵五世を繼ぐ。「しのぶずり」を發行す。大正十四年二月十四日歿す、享年六十五。著書に、「古根草」「白かね草」「早月紀行」その他あり。

阿心庵雪人 姓は小平。明治五年、信州諏訪郡湖東村に生る。十五歳上京、芝公園阿心庵永機の門に入り、慶應義塾を卒へて、永機の後を繼ぎ、「東京日々」「時事新報」に俳欄を起す。「芭蕉全集」「其角全集」「校註蕪村全集」「澤庵和尚全集」「花實集」「阿心庵句帖」等の他十數部の編著あり。又俳畫を好くす。

正岡子規(正岡常規)

內藤鳴雪(本名素行) 弘化四年四月十五日、江戸に生る。伊豫松山の藩士、內藤同人の長男なり。幼より學を好み、明治二十三年文部省參事官となりしが、後專ら常盤會寄宿舍々生を監督し、又史料編纂に從ふ。四十六歳、俳諧を子規に學び、一歳を出でずして一家の風格を示す。また漢詩を善くす。晩年は哲學宗教の研究にその力を傾注せり。大正十五年二月二十日歿す、享年八十。「老梅居雜話」「鳴雪俳話」等著書多し。

松浦爲王(本名磐) 明治十五年一月八日、横濱に生る。三十五年横濱商業卒業後、正金銀行に入り現在に及ぶ。三十年「ホトトギス」創刊のとき連句會を組織し、鳴雪及虛子に師事、特に鳴雪の薫陶を受く。現に「俳人」の主宰者たり。「鳴雪俳句集」の編著あり。

峯青嵐 安政五年三月生る。東京高等師範學校を出で、廣島縣師範學校長、學習院教授を經、再び地方の學校長、視學官、事務官に歴任す。功により從四位勳三等に敍せらる。明治中葉より俳句に趣味を持ち、鳴雪等と親交あり。教育に關する著書多く、又「俳句資料解釋」の著あり。

渡邊水巴 明治十五年六月、東京淺草區小島町に生る。十九歳にして俳句を嗜み、鳴雪、虛子の指導を受く。大正五年「曲水」を創刊、現在に至る。「水巴句帖」「續水巴句帖」「曲水句帖第一輯」「第二輯」等の著あり。

庄司瓦全 明治七年十一月、東京市淺草區花川戸町に生る。十九歳遞信省鐵道局に入り、三十年臺灣鐵道部書記となり、後歸郷して都新聞社員となりて、現在に至る。現に「都俳壇」の選者たり。

高濱虛子(本名清) 明治七年二月二十二日伊豫松山に生る。池內庄四郎の末子にして祖母の家系、

高濱家を嗣ぐ。伊豫尋常中學校を卒業して、文學志望の下に、京都第三高等學校に學ぶ。二高に轉して中途退學。爾來正岡子規に就て俳句を學ぶ。明治三十年俳句入門の著あり。明治三十一年「ホトトギス」を主宰し、今日に及ぶ。中途國民新聞社に入り「國民文學」を創設せしが二年にして退き、爾來「ホトトギス」の編輯の一途に力を致す。この國民新聞社に入る前後、夏目漱石と共に小説に筆を染む。これより前子規と共に寫生文を始めたり。小説、寫生文、俳句に關する著書多し（詳「高濱虛子」に譲る。）

西山泊雲（[illegible]） 明治十年四月、兵庫縣氷上郡竹田村に生る。幼より冒険心に富み南米、南洋に渡らんとして果さず。明治三十六年虛子につきて句作を學び、ホトトギス・日本に投句す。後、「ホトトギス」の課題句、地方俳句欄の選者たり。『虛子俳句の解釋』を十數回に亙り「ホトトギス」に連載せり。

野村泊月 明治十五年六月、丹波竹田村に生る。三十八年早稻田大學英文科卒業。在學中より兄泊雲と共に虛子につき俳句を學ぶ。後東亞同文書院の職により支那に渡り、更に米國に渡る。歸朝後、大阪日英學館を起せしが、一たび故郷に入り後再び京都に移る。大正十一年「山茶花」を發行し、現在に至る。

岩木躑躅（[illegible]） 明治十四年七月、淡路生穗村に生る。父祖三代の跡をつぎ醫を業とす。明治三十六年虛子の門に入り現在に至る。

杉山一轉 明治十五年泉州堺に生る。東京和佛法律學校在學中より句作し、三允、碧青等と埼玉より「アラレ」を出せしことあり。大正六年復活、「ホトトギス」に精進し、大正十年一月[illegible]にて逝く。一轉句集あり。

田中王城（[illegible]） 明治十八年三月、京都書林文求堂に生る。中學時代より子規の句風を慕ひて句作し、後中川四明の指導を受く。三十七年上京、早稻田大學商科に入るや、虛子に師事す。後、一度俳壇を去りしが、大正七八年の頃より再び泊雲を先達として、句作に精進し、現在に至る。

奈倉梧月（[illegible]） 明治九年七月、松江市に生る。子規、漱石に師事。明治三十年、鼠骨の山陰行脚を機として碧雲會を起し、その會報を「日本新聞」その他に投ず。爾來繼續三十年、現在に至る。嘗て「ホトトギス」その他の選者たりし事あり。句集數種あり。

石島雉子郎（[illegible]） 明治二十年武州行田に生る。十六歳より句を作り、子規派の川島奇北に指導を受く。十八歳の時、「浮城」を發行し、六年間續刊。四十一年、基督教に入り、救世軍士官となり、現に同軍少佐たり。「雉子郎句集」「京日俳句鈔」正續二卷の著あり。

久保田九品太（[illegible]） 明治十四年五月、静岡縣小笠郡中村に生る。幼にして父を失ひ苦學中學を卒へ、三十五年上京、帝國通信社に入る。後大阪支社に轉す。その頃より句作漸く多く、堺市土曜會、住吉水曜會に入り又「春夏秋冬」の同人となる。大正十二年編輯局長として本社に轉じ、十四年十二月病を得て歿す。

前田普羅（[illegible]） 東京芝區七軒町に生れ、現在富山に松杉を植ゑんとしつゝあり。早大文學科に學び、後報知新聞社に入り、記者生活十四年を經て、今は句作の人となる。爲王、虛子の教を受く。「辛夷」を主宰す。年不惑。

原石鼎（[illegible]） 明治十九年六月、島根縣簸川郡鹽冶村に生る。中學卒業後京都に遊び、春蟬會を組織して「ホトトギス」に投句す。その後、京都醫專を中途退學し、吉野山中の兄の醫業を手傳ひゐたりしが、大正四年、上京、ホトトギス社に入り、後東京日々新聞社に入る。十年より「鹿火屋」を發行、現在に及ぶ。

清原枴童 明治十五年筑前福岡に生る。幼時叔

父の家にあり。長じて炭坑員、新聞社員など勤めしが、大正の初め上京す。後福岡に歸り、「博多毎日新聞」に俳壇を創設し、次いで「九州日報」「釜山日報」等の俳壇を擔當す。其の間、木犀會を起し「木犀」を發行、その雜詠選に當る。昭和三年東京に移る。

吉岡禪寺洞（本名善次郎）明治二十二年七月二日、筑前箱崎町北濱門戸に生る。三十六年春より句作し、大正七年七月「天の川」を創刊す。

楠目橙黄子（本名省介）明治二十二年五月、高知市に生る。大正四年在鮮當時より句作し、「ホトトギス」を通じて虚子の指導を受け、今に至る。

鈴木花蓑（本名喜一郎）明治十四年十二月、愛知縣知多郡半田町に生る。二十四歳より俳句を作り、虚子の句に親しみ、大正四年春上京。ホトトギス派俳句を作り今日に至る。

池内たけし（本名洸）明治二十二年一月、伊豫松山市湊町に生る。三十五年東京に移り拓殖大學の前身東洋協會専門學校に學ぶ。後三年にして學業を捨て、大正二年寶生九郎の門弟となり謠曲を修業、又虚子門に入り俳句を學ぶ。

田村木國（本名省三）明治二十二年一月一日、和歌山縣伊都郡笠田町に生る。中學時代作句を始め、後大阪新報社に入り、行友李風等と沈堰吟社を興し、更に碧梧桐の新傾向に就く。一時中絶せしも、その後、相島虚吼に刺戟せられ、作句復活。「山茶花」を創刊今日に及ぶ。

宮部寸七翁 明治二十年十一月、熊本縣下益城郡杉上村に生る。四十年、早大政治經濟科を卒へ九州新聞社に入る。大正元年肥後青年倶樂部を組織し、その機關紙「九州立憲新聞」を創刊せしが、偶々筆禍をかひ、六ケ月下獄。時に叔父三隅實淸「博多毎日新聞」を創刊するや、入りて編輯長となる。大正五年病を得、爾來句作の人となりしが、十五年一月二十日歿す。

山本梅史 泉州堺の産。年四十四。堺市會書記長たり。關西根岸短歌會の同人たりしことあり。俳句は水、碧梧桐坊に多く師事し、「同人」創刊當時、同人たり、現在虚子門。和歌山の「九年母」、堺の「いづみ」を主宰す。

原　月舟（本名[illegible]）大正二年、慶應義塾理財科卒業。在學當時より、虚子について句作を學ぶ。東京電氣株式會社に入るや、新に俳句會を起し、同志と共に俳句道に精進せしが、大正九年十一月病を得て三十一歳にして逝く。

島村　元 明治二十六年、米國に生る。父の外交官より實業界に入るに及び大阪に移る。慶大文科在學中病を得て退學し、虚子について俳句を學ぶ。爾來十年間作句に精進せしが、大正十一年虚子と共に九州旅行中に病氣再發して、翌年八月二十六日逝く。

本田あふひ 明治八年十二月、東京神田駿河臺伯爵坊城俊政の四女として生れ、貴族院議員男爵本田親濟に嫁す。大正二年甥島村元が虚子に作句を學ぶや、共にその指導を受く。後家庭俳句會を起し今日に至る。

久保より江 明治十七年二月伊豫松山に生る。幼時漱石、子規に愛せられ、作句をはじむ。三十二年上京、府立第二高女を卒業、後、久保猪之吉に嫁ぎ、良人に從ひ福岡に移る。暫く文藝に遠ざかりしが、大正七年頃より枳童につき、作句をはじめ、後虚子の門に入る。『より江句集』のほか文集「よめなすみ」あり。

杉田久女（本名久子）明治二十三年五月鹿兒島市平の馬場に生る。幼時父の任地琉球臺灣等に轉住し、後東京に移り、お茶の水高等女學校を卒業す。結婚後夫の任地小倉に移住二十年。大正五年兄月蟾にすゝめられて作句をはじめ、虚子について指導を受け、現在に及べり。

藤田耕雲（本名德次郎）明治十三年十二月大阪に生る、三高を中途退學し、米國に渡り、紐育大學を卒へ、歐洲を經て歸朝す。現に藤田組副社長、

薗田鑛業株式會社長、その他を兼ぬ。「ホトトギス」に關係し、虚子につきて句道に勵む。

中田みづほ(瑞穂) 明治二十六年四月、石州津和野に生る。十五歳の秋上京。大正六年東京帝大醫科を卒業、十一年三月まで近藤外科教室にあり。その間秦餘子等と俳句會を起し、後秋櫻子を中心に東大俳句會を作る。大正十一年新潟醫科大學に赴任、十四年より歐米に遊學し昭和二年歸朝、外科學を擔當す。傍ら「ホトトギス」の課題句選者たり。

酒井默禪 良曙、又は雪山とも號す。明治十六年三月、福岡縣大川町に生る。大正八年零餘子に就きて句作を始む。翌年松山の赤十字社病院に赴任するや、同地の出身者虚子の指導を受け、爾後句作に精進す。醫を業とす。

鈴鹿野風呂 京都市左京區田中大路八に生る。大正五年京都帝國大學國文科卒業。現在武道專門學校、西山專門學校の教職に在り。俳句は虚子に負ふ所多く、大正九年日野草城等の同志と共に「京鹿子」を發刊、今日に至る。「野風呂句集」の著あり。

日野草城(克修) 明治三十四年三月東京市に生る。三十八年朝鮮に赴く。中學時代より作句す。大正七年京都に至り、鈴鹿野風呂等と「京鹿子」を發刊す。十三年、京都帝大法學部を卒業。現在、大阪海上火災保險會社にあり句作をつゞけつゝあり。

富安風生(謙次) 明治十八年四月、三州八名郡金澤村に生る。四十三年東京帝大獨法科を出で、遞信省に入る。現に同省電氣局長たり。大正八年福岡在任中、同地の「天の川」を手にせるより作句を始め、東京に轉任後は專ら温亭の指導を受けしが、その歿後は虚子につきて、教へを受く。東大俳句會の同人たり。

水原秋櫻子 明治二十五年十月生。大正七年東京帝大醫學部を卒業。九年秋より虚子の門に入り、今日に至る。目下高野素十、富安風生等と、東大俳句會同人たり。又嘗て窪田空穂門下の歌人たりしことあり。

阿波野青畝 明治三十二年大和國高取に生る。幼にして耳疾あり。後阿波野家に入婿して、大阪に住す。

山口誓子(新比古) 明治三十四年十一月、京都市岡崎に生る。大正十五年東大法科卒業。句は三高在學當時野風呂、草城に學び、後秋櫻子について學ぶ。現在大阪住友合資會社にありて傍句作に從ふ。嘗て「ホトトギス」課題句選者たりしことあり。朝鮮に「青壺」を主宰す。

相島虚吼 常陸筑波郡小田村に生る。小學校時代より漢詩を學ぶ。日清の役、大阪毎日新聞の從軍記者として滿洲に赴き、偶々同じく從軍記者として來滿せし正岡子規と識る。歸朝後、四明、鼠骨等の滿月會に入り、盛んに「日本」に投句す。現在、多忙なる新聞記者の餘暇を盗み「ホトトギス」に投句す。

永田青嵐(秀次郎) 兵庫縣士族、明治九年七月生れ。三高卒業後三十二年判檢事登用試驗に合格し洲本中學校長、大分、熊本、福岡の各縣廳、內務省等に歴任したる後東京市助役に擧げられ、次で同市長として令名あり、現貴族院議員。俳句は子規派に共鳴し、虚子と親交あり。著書に「平易なる皇室論」「青嵐隨筆」等あり。

篠原温亭(英喜) 明治五年十一月一日、熊本縣宇土町に生る。句作は三十年にはじまり、力を用ゐしは大正十年以後なり。十一年「土上」を發行。十五年九月二日逝く、享年五十五。句は「温亭句集」に收む。([illegible])

村上鬼城(荘太郎) 上州高崎の人、寺小屋式の中學を卒へ貫名正邦の漢學書院に漢學を學ぶ。後、法學を學び裁判所書記を勤む。「ホトトギス」に句を投じ、現に「讀賣新聞」俳壇選者たり。乙字選「鬼城句集」の著あり。歳六十五、聾を病む。

飯田蛇笏 明治十八年四月、甲斐國東八代郡境川村に生る。小學校時代より句作し、早稻田大學文學科に入るに及び虚子の門に入る。後病を得て都門を去り、家郷の山廬にありて句作に親みつゝあり。

籾山梓月（仁三郎） 明治十一年一月十日、東京に生る。慶應義塾に學び、現在時事新報社在勤。「逝日」「伊香保日記」「鎌倉日記」「連句入門」等の著あり。

高田蝶衣（四十年のち千翠と改む） 明治十九年一月淡路釜口村に生る。洲本中學在學中大谷繞石の來任により新俳句を知るの機緣を得たり。三十七年春早稻田大學に入る、之より高濱虚子を始め先輩の知遇をうく、後病を得て學を廢し歸郷。大正六年末湊川神社に奉仕、後病んで職を退き、昭和四年春歸國、終焉の地を草香に求めて幽棲す。

岡本松濱 明治十二年十二月、大阪に生る。十六歳父を失ふ。二十歳父の藩和歌山に移り、銀行員として五年を經、二十五歳上京ホトトギス社に入る。在勤七年、虚子及其兄如水に負ふところ多し。後、大阪に歸り記者生活を續け、大正十五年「寒菊」を創刊、現在に至る。

島田青峰（名賢平） 明治十五年三月八日、三重縣志摩郡的矢村に生る。三十六年早大文科卒業。敎鞭生活五年後、四十一年、國民新聞社に入社、文藝欄を擔任し、昭和三年六月客員となるまで二十一年勤務。他面明治四十五年より大正八年まで、「ホトトギス」の編輯に參與、十一年一月温亭等と共に「土上」を起しその編輯を主宰して今日に至る。十四年、細田源吉、加藤武雄等の主唱にて青峰會を起す。「青峰集」「靜夜俳話」その他の著あり。

小野蕪子（賢一郎） 蓼山莊主人、麥中人の別號あり。明治二十一年七月福岡縣遠賀郡蘆屋町に生る。十五歳小學教師となる。その當時より子規の句に親しみ始む。後大阪毎日新聞社に入り現に東京日々新聞社會部長たり。虚子、鬼城、石鼎の選評を受けしことあり。後「鷄頭陣」を發刊し、一時中絶せるも再興して現在その選者たり。記者生活二十年の記念出版「明治、大正、昭和」中に「蕪子句集」を收む。

長谷川零餘子 明治十九年五月二十三日群馬縣鬼石町に生る。俳句は十歳位より趣味を持ち、十五六歳の時「子規句集」を編輯、「新選俳句」を出版す。同年上京、大學館に入る。大正二年長谷川家へ入籍、かな女と結婚す（舊姓富田）。大正六年、帝大藥學專攻科に入り、在學中高濱虚子の勸説によりホトトギス發行所に入り專ら俳句に專念し、大正十年「枯野」を發行す。昭和三年七月二十七日長逝。年四十三。

長谷川かな女 明治二十年十月二十二日東京市日本橋區本石町に生る。大正二年三月富田諧三（長谷川零餘子）と結婚す。四十二年頃より俳句を作りはじめ、「ホトトギス」「國民新聞」等に句を投ず。大正十年、零餘子が「枯野」を發行してよりは、「枯野」に終始し、零餘子歿後は、「枯野」を「ぬかご」と改題し零餘子雜詠選の後を引承す。

原田濱人 明治十七年一月一日、靜岡縣濱名郡長上村に生る。廣島高等師範學校を出で、現に沼津中學英語教師たり。明治の終ころより句作をはじめ、「ホトトギス」に投句十年、後、同人とせられしが、關係を斷ちて、「すその」を發刊し現在に至れり。

松瀨青々（彌三郎） 明治二年四月、大阪大川町に生る。父彌兵衞、能登國羽咋郡柳瀨の人、叔父に養はれて六歳大阪に出づ。明治三十年、初めて作句の爲し得べきを感じ、心窃これと句作す。明治三十二、東京に出で、「ホトトギス」の編輯を手傳ふ。年を越えて大阪に歸る。爾來、大阪朝日新聞「俳壇」の選者とし、一方雜誌「倦鳥」の發行を續け今日に及ぶ。

武定巨口　松瀬青々の門に入り、作句生活二十年に及ぶ。その間一張一弛あり。明治四十五年句集「つは蕗」を出版。外に小説戯曲の作あり。現に職を三十四銀行に奉ず。

横山蜃樓（本名[illegible]）　明治十八年一月、明石[illegible]屋町に生る。獨學。三十二年頃、家兄[illegible]人の誘導にて作句を始め、「ホトトギス」に投稿、子規歿後は松瀬青々に師事。大正三年俳誌「アユビ」發刊。一時「大阪朝日新聞」の地方版俳句の選をなす。大正十四年俳誌「漁火」を創刊今日に至る。

西村白雲郷（本名[illegible]）　明治十八年三月二十六日出生。大阪府北河内郡[illegible]村に居住。明治四十二年頃より作句を始め、松瀬青々の令下に参じて今日に至る。句集「瓜燈籠」（大正十四年十二月刊）の著あり。

松尾竹後（本名[illegible]）　明治十五年十一月五日、静岡縣[illegible]郡清水村に生る。はじめ坂本四方太等の指導を受け、三十七年以後は、松瀬青々の作風に傾倒す、四十年上京し「寶船」の選者となる。後一時中絶せしも、大正八年復活、「倦鳥」（[illegible]主宰）に句を掲げて今日に至る。現在日本無線電信株式會社員なり。

石井露月　明治六年五月十七日、秋田縣戸米川村に生る。秋田中學半途退學。二十六年上京後正岡子規の知遇を得て「小日本」「日本」等の記者となる。傍ら、醫學を修め醫師試驗に及第。明治三十二年、歸郷[illegible]を開業す。俳句は子規と交遊前後より興味を持ち始め、歸郷後は五空等と共に日本派俳句の鼓吹につとめ其の重鎮たり。「俳星」（明治三十三年創刊）、「五川」（「三鉄」）、「雲彩」（[illegible]）に關係し、「親鶏小[illegible]」「永[illegible]集」等の著あり。昭和三年九月十八日歿す。

島田五空（本名豊三）　明治八年四月一日、秋田縣能代港町に生る。俳句は明治二十八年頃より始め、後日本新聞「ホトトギス」等に投吟す。三十一年露月と知り、爾後日本派の俳人として一生を捧ぐ。俳誌「[illegible]しろ」、「北斗」、「俳星」等を刊行し、又「能代新報」を創刊す。昭和三年十二月二十六日歿す。

青木月斗（本名新護）　明治十二年十一月二十日、大阪船場に生る。大阪商業學校出身。若きより子規に師事す。かつて俳句雜誌「車百合」「カラタチ」を主幹し、現在その後身「同人」を主宰す。

湯室月村（本名[illegible]）　明治十三年十一月十一日、大阪府下枳根莊村山田に生る。年十八の春、大阪に出て、道修町の青木薬舗に奉公す。たまたまその主人の月兎（月斗）なりしにより句を學び、爾來三十年句に親しみて今日に及ぶ。

岡本圭岳（本名[illegible]）　明治十七年四月一日、大阪に生る。子規の日本俳句に學び、現在は月斗主宰の「同人」に拠り、その編輯を擔當す。

花木伏兎　明治十七年五月、大阪天王寺夕日丘舊伶人屋敷に生る。曾て、招かれて天然色活動寫眞株式會社（キネマ）脚本部に影響[illegible]作者たり。現在桃谷順天堂宣傳部主任を續[illegible]中。十六歳岡野知十の「半面」により作句を初む。月斗の「カラタチ」創刊以來其傘下に列し、「同人」と改題後の現在も同誌に拠る。

阪本四方太（「乃行」集參照）

荻原蘿月（本名[illegible]）　明治十七年五月五日、横濱に生る。最初[illegible]雪、虚子につきて俳句を學び、「ホトトギス」に寄稿す。三十四年獨逸協會中學を卒へ、帝大國文科に入り、卒業後中學教師として各地を轉々。大正九年、帝大文學部副手就任後、俳諧の創作に生涯を捧ぐる決心をなして、今日に到る。日下女子大學、慶應義塾、二松學舎等の講師たり。

新海非風　明治三年伊豫松山に生る。正岡子規と共に常盤會寄宿舎に在り、この頃より句作す。陸軍士官學校に入り、卒業に及ばずして肺患のために退く。それより日本銀行に入り、北海道に赴きゐたりしが父病のために退く。京都にありて新聞社等に關係せしが、遂に病の

ために三十歳前後にして逝く。

五百木飄亭（本名良三）　明治三年伊豫松山に生る。明治二十年頃、上京後、正岡子規等と句作を試む。日清戰役後子規と共に新聞「日本」に從事せしも境遇の變につれ漸次俳壇外の人となる。明治三十四五年頃、故近衞篤麿公を中心に對外問題に沒頭して以て今日に及ぶ。

藤野古白　明治四年八月八日、伊豫松山市に生る。九歳、一家と共に東京に移り、十二歳、赤坂の須田塾に、後、小石川の同人社に入る。十九歳、自ら古白と號す。二十歳、俳句大いに進む。二十一歳、東京專門學校に入り、文學を修む。二十三歳春、小說「椿說舟底枕」、夏、脚本「築島由來」を草す。明治二十八年四月七日自殺、十二日歿す。年二十四。

佐藤肋骨（本名安之助）　明治四年一月二十二日、東京に生る。二十八年歩兵少尉にて臺灣の役に從軍、右脚を失ふ。三十四年春渡支、爾後二十年間海外に勤務し、少將に任ぜらる。昭和三年春の總選擧に出馬、代議士に當選す。句作は、士官候補生のころ五百木飄亭の指導によりて始め、二十九年より、三十三年まで、子規庵の常連たり。現在も機あるごとに句作す。

柳原極堂　慶應三年二月十一日松山に生る。明治十六年夏東都に遊學し、二十八年子規に就いて初めて俳句を聽く。三十九年二月獨力「伊豫日日新聞」を創刊、昭和二年廢刊す。同三年三月上京、句作に專心しつゝ今日に至る。

村上霽月　伊豫松山在今出に生る。專ら產業方面に從事せり。明治二十四五年頃獨り蕪村に傾倒したりしが、偶々同鄕の先輩正岡子規の日本に俳句を唱道するや、大に共鳴して「日本」俳壇に投句し、後「ホトトギス」の松山に發刊せらるゝや、その同人となる。子規歿後は虛子、東洋城と親しみしが、近來獨吟、獨行、師なく弟なく野中の一本杉を以て自任す。本年齡六十一。

寒川鼠骨（[illegible]）

大谷繞石（本名[illegible]）　明治八年三月出雲國松江市に生る。小泉八雲に學資を給せられつゝ、三十二年帝大英文科を卒業す。洲本中學教諭、眞宗大學教授に歷任、四十一年四高教授となり、翌年文部留學生を命ぜられ英國に遊び、四十五年歸朝、大正十三年廣島高校教授に轉じて今に及ぶ。二高在學中斯道に入り、上京後子規の門に入る。「中央公論」の俳句を募集しゐたりし時その選者たりしことあり。『案山子日記』『北の國より』の他多くの著あり。作句は「懸葵」「俳諧雜誌」等に發表す。

吉野左衛門（本名太左衛門）　明治十二年二月十日、東京府北多摩郡三鷹村に生る。東京專門學校政治經濟科卒業後、國民新聞社に入社し、幹部として手腕を發揮し、後、京城日報社長として渡鮮、大正九年一月二十二日、胃癌を患ひて逝く。句集「栗の花」（明治四十二年）、「左衛門句集」（大正十五年）等の著あり。

中村樂天　慶應元年七月十日出生。明治十八年上京苦學生となり、二十一年「情」を發刊。二十三年「國民新聞」創刊と同時に入社し、後、「國民之友」の編輯に從ふ。同誌廢刊後「和歌山新報」記者となり、更に「二六新聞」再刊と同時にこれに入社す。作句を始めしは明治二十九年、後一旦中絶せしも復活現在に及べり。

水落露石（[illegible]）　明治五年三月、大阪市に生る。少時より、漢學、英語、繪畫、茶道、謠曲等を修め、後俳諧史學の研究に趣味を持ち、子規に師事す。初め天明調晩年新傾向に移る。特に天明俳人の研究に長ず。後年「下萌」を發刊。「[illegible]句集」「蕪村遺稿」「下萌句集」二卷の著あり。大正八年四月十日、參備地方旅行中歿す。

數藤五城（本名[illegible]）　明治四年十二月二十四日、松江市に生る。十歳の頃數藤家の養子となる（[illegible]）。二十四年、理科大學簡易科卒業。久留米中學教

谷派副管長、四十一年大谷派本願寺第二十三世の法燈を繼ぎ管長となる。四十二年敍從四位、大正十二年二月八日父光瑩伯逝去、家督を相續す。敍正四位。十四年九月管長職を辭すと共に隱居屆を出し、長子光暢に戸主を讓る。初め碧梧桐、虚子に作句の選評を乞ひしも、專ら「懸葵」に發表し今日に至る。

大須賀乙字（本名績） 明治十四年七月二十九日福島縣相馬郡に生る。明治四十一年東京帝大文科大學の國文科を卒業後、曹洞宗大學、麹町女學校等の教職を經て、大正五年四月東京音樂學校教授となり、大正九年一月二十日、東京小石川にて歿するまで奉職す。從六位。「乙字句集」「乙字俳論集」『乙字書簡集』の三册、世に出づ。生前の著書として「故人春夏秋冬」「乙字選碧梧桐句集」等あり。

名和三幹竹（[illegible]名） 明治二十五年三月、山形縣谷地町に生る。大正七年京都大谷大學を卒業。東本願寺に勤務、現在に至る。中學時代黎明吟社を起せしより句作をはじめ、初め碧梧桐選の「日本」俳欄、井泉水選の「層雲」等に投句せしが、後專ら乙字につき、指導を受く。大學時代より「懸葵」の編輯に與り、乙字歿後は句佛上人に師事す。『乙字句集』「四明句集」「[illegible]句集」等の編著あり。

吉田冬葉（本名辰男） 明治二十五年二月二十五日美濃國苗木城下に生る。小學校卒業後陶器畫工となる。明治四十三年上京。大須賀乙字に師事、「懸葵」「石楠」「常磐木」等に作品を發表。乙字歿後「獺祭」を創刊主宰し、今日に至る。「冬葉第一句集」「[illegible]野」「俳句に入る道」「俳句の初歩」「俳句の作り方」等の著あり。

臼田亞浪（[illegible]） 石楠堂書屋人又は北山南水樓の別號あり。明治十二年二月一日長野縣北佐久郡小諸町に生る。夙く東京に出でて苦學力行、法政大學を卒業後、新聞界に入り、居ること十有餘年、後病のため新聞を去り、大正四年俳道に[illegible]生すると共に斯壇の革正を企圖し、同年三月、「石楠」を起して、今日に至る。句集「炬火」『黎明』の外『俳句を求むる心』『芭蕉を中心として』『內容としての自然感』『形式としての一章論』の著がある。

井上日石 明治十五年八月、新潟縣北魚沼郡並柳村に生る、二十九年の頃初めて句作す。三十五年上京、大正の末年に至るまで、「紫陽花」「日本カタログ」「少年文壇」「石楠」「千鳥」等の諸誌を起せり。後の「水甕」は「千鳥」の後身なり。句集『螢[illegible]』（大正九年）の著あり。昭和三年神戸に移りて現在に至る。

福島小蕾 明治二十四年七月、出雲能義郡赤江村に生る。島根縣師範學校を經、廣島高等師範學校に入りしが、中途退學。爾來各地の小學校に教員、校長たり。大正五年以降、父祖の職をつぎ神職たり。明治三十九年頃より、句作に從ひ廣江八重櫻、奈倉梧月等につきしが、大正三四年より、「ホトトギス」を通じて高濱虚子に教へられ、六年以降は、臼田亞浪の門に入りて「石楠」に據る。

飛鳥田孋無公（本名忠作） 明治二十九年五月十日、相州愛甲郡依知村金田に生る。年少、三木露風、山村暮鳥について詩を學びしが、後俳句に轉じ、臼田亞浪に師事して今日に至る。現に「石楠」の同人たり。

安藤甦浪 明治二十七年九月、靜岡市[illegible]町に生る。大正八年「新愛知」に入り、後「靜岡新報」を經て、今は、靜岡經濟新報社記者たり。大正三年ころより臼田亞浪について作句を始め、現在「石楠」の同人たり。

河東碧梧桐（[illegible]）

井出台水（[illegible]名） 慶應元年[illegible]岡山縣に生る。正四位勲二等功四級。明治十六年陸軍士官學校入學、十九年工兵少尉に任官、獨、佛、[illegible]國に駐在

五ケ年。此後師團經理部長、陸軍大學教官、陸軍省建築課長、朝鮮軍經理部長等に歴任、大正六年實業界に入りて、今日に及ぶ。日露役從軍中より俳句を始め、爾來碧梧桐に師事。「三昧」同人たり。

中村烏堂 明治八年五月兵庫縣明石に生る。學歴なし、二十幾年官吏生活で高等官となる。三十四年上京。俳句は二十九年ころより始め、子規庵に出入。四十年京城に赴き、新傾向の擡頭に座して同派の句會「五の日十の日會」を起し、同名の雜誌及び「半島文學」等發刊。「元始日本語」の著あり。

梅野米城 明治四年十二月、久留米市に生る。二十九年東京帝大工科土木學科卒業。九州鐵道、大阪工業事務所、三菱合資芝浦製作所等をへて、大正九年三月南滿洲鐵道株式會社に入り、埠頭事務所長、運輸部長、滿鐵理事兼撫順炭坑長鞍山製鐵所長を經、十三年六月滿期歸京。俳句は碧梧桐に師事して今日に至る。「三昧」同人。

松宮寒骨 明治十六年一月、金澤市小立野鷹匠町に生る。三十四年東京開成中學校を卒業。この頃より句作を始め、四十一年早大商科を卒業後、天郎、乘泉、藍雨等と龍眠會を結ぶ。現に東京三越に職を奉じ三男二女あり。妻涼女また句を作り共に碧梧桐門下なり。

染川藍泉 明治十二年八月[illegible]に生る。幼少の頃上京、一ツ橋高等商業卒業。三十八年淸國商業視察のため淸國に赴き、二年後歸朝。現在十五銀行本店庶務課長勤務。俳句に遊んだのは高商時代からで、目下は碧梧桐氏に師事、「三昧」同人。

木下笑風 明治十八年十月日本橋に生る。十五歳俳句を覺え十七八歳より新傾向に走る。大正七年より「海紅」に助力、碧梧桐渡歐歸朝後「三昧」同人となり今日に至る。現在株式會社明治商店に勤務。

國見叢雨 明治十八年、東京に生る。宮內省官吏。俳句の道に入りしは、日露役の頃新聞雜誌に出し出征將士の日記通信の端々に書かれたる俳句を讀みしよりなり。爾來二十年常に碧梧桐傘下にあり。現在「三昧」同人。

關口比呂志 明治十九年長野縣下伊那郡中箕輪村に生る。大正四年新潟醫學專門學校卒業、自ら開業。俳句はその頃より始め、現在碧梧桐に師事す。「三昧」同人。

須藤水心樓 明治二十二年高知市に生る。父は泰畦と號し舊俳句の宗匠たり。二十三の歳土佐地方の俳壇の選者となりて、碧梧桐南下を迎へて以來日本派の俳人の列に連り、爾來「三昧」の同人として今日に至る。土佐造船株式會社、土佐臨港株式會社等に重役たりしことあり。現在は土佐被服工場主。

吉永雨音 明治二十三年一月、大和國五條町に生る。四十三年奈良師範を卒へ、海運業に從事すること約十年。昭和三年二月父の死に遇ひて心機一轉、爾來俳三昧の生活に入る。現在碧梧桐の門にありて「三昧」同人たり。

風間直得 明治三十年日本橋濱町に生る。大正五六年碧梧桐の門に入り、大正十二年「東京俳三昧稿」刊行。碧門に新句體の運動を起す。これ今の「三昧」の母胎なり。又、黑田清輝、梅原龍三郎に師事し、洋畫あり。

泉天郎 明治二十年一月、東京府下千住町に生る。三十八年より河東碧梧桐に師事し、四十三年頃「朱鞘」を刊行、凡そ一ケ年にして罷む。現在「三昧」同人。千葉醫專出身。北海道岩內町に醫を業とす。

荻原井泉水 明治十七年六月十六日東京芝神明町に生る。幼名幾太郎、父歿後家名を繼いで藤吉。中學時代より句作し、一高を經て四十一年東京帝大言語科を卒業。當時俳壇に新傾向

の運動勃興するあり。四十四年俳誌「層雲」を創刊し句界の覺醒に從うて今日に到る。句集『井泉句集』三卷、『井泉俳話』三卷、『層雲句集』六卷、『旅人芭蕉』二卷、『芭蕉を尋ねて』二卷の他、感想隨筆集研究書數册あり。

尾崎放哉(本名秀雄) 明治十八年一月鳥取市に生る。法學士。東洋生命保險會社に入りて要職を占めしが、大正十二年京都一燈園に入りて托鉢生活に入る。後諸所の寺院に寺男たりしが、讃岐小豆島南郷庵に至りて病を得、島民の手に抱かれて瞑目す。『大空』の著あり。

芹田鳳車(本名敬治) 明治十八年十月二十八日兵庫縣揖保郡旭陽村平市場に生る。現在横濱生命保險株式會社會計課長。神戸高商在校當時より句作をはじめ、出京後、井泉水につきて句作に猛進す。『雲の音』『生ある限り』の著あり。

秋山秋紅蓼(本名龍雄) 明治十八年十二月二日、山梨縣鰍澤町に生る。はじめ、佐藤紅緑の「トクサ」に投句し、「層雲」の創刊後は、井泉水の傘下に投ぜり。

青木此君樓(本名茂雄) 明治二十年四月越前國福井市松ヶ枝下町に生る。永年の役人生活を經て大正二年、大阪に一小店舗を開く。俳句に專念したるは大正四年「層雲」に加はりしに始まり、爾來、原井泉水に師事、今日に及ぶ。

大橋裸木 明治二十三年八月九日、大阪に生る。井泉水門の一人たり。著述を以て業となす。

野村朱鱗洞(本名守隣) 初め柏葉と號し、後朱燐洞といひ、更に「燐」を「鱗」に改む。明治二十六年十一月、伊豫松山市小唐人町に生る。幼にして十六夜吟社を率ゆ。同地「海南新聞」俳壇の選者たり。大正七年十一月、世界的流行感冒に犯されて二十六歳にして逝く。句集『禮讃』あり。

栗林一石路(本名農夫) 明治二十七年十月十四日、長野縣小縣郡青木村に生る。少年時代より俳句に親しみ、四十四年、荻原井泉水の「層雲」發刊と同時に之れに據り、以後引つづき同人たり。大正十二年上京改造社に入り「女性改造」「改造」等の編輯に從事、昭和二年新聞聯合社に轉じ新聞記者となる。句集『シャツと雜草』の著あり。

小澤武二 明治二十九年一月二十五日東京芝に生る。十三歳の頃より句作を始む。大正二年より雜誌「層雲」の編輯に携はり今日に及ぶ。嘗て山蘆火、泊光等の號あり。『不滅の愛』『慨みの花を開く』『縮の消えた繪馬』等の句集の他、俳句に關する編著多し。

鹽谷鵜平 明治十年五月生る。岐阜縣稻葉郡鏡島村に住む。個人雜誌「土」を發布して、既に百八十號を越ゆ。一滴紅同人なり。

喜谷六花(本名良哉) 明治十年七月十二日、淺草馬道に生る。三十年六月、現住の地三ノ輪梅林寺に董をつぐ。俳壇に入りしは、三十三年のころ、「ホトトギス」社主催の蕪村忌に臨みし機縁による。その後、碧梧桐を中心に碧童、乙字、また井泉水一碧樓等と句作を共にす。句集『寒烟』『梅林句屑』等の著あり。

小澤碧童 明治十四年十一月十四日東京日本橋本船町に生る。幼名淸太郎、後忠兵衛。十八歳の頃碧梧桐に師事。二十二歳の頃碧梧桐に隨伴して關西に遊び、「西行百句」の吟あり。二十七歳のころ雜誌「層雲」の運動に參加し後「海紅」「三昧」の同人たり。現在閑居して家傳目藥を製藥。かたはら書、篆刻の道にいそしむ。

山口花笠(本名林造) 明治十一年十一月二十日、富山縣西礪波郡福田村に生る。十六歳のころより和歌俳句を寺野守水に學び、二十九年日本派俳句に共鳴し、子規に就く。其後新傾向に趨りしも再轉今日に至る。日下鄕土俳史の研究に力をそゝぎつゝあり。

筏井竹の門(本名嘉一) 別に松杉窟、四石山人の號あり。舊姓向田、金澤に生る。後高岡なる筏井家

に入社、北一株式會社々員なり。大正十四年三月二十九日歿す。享年五十五。俳畫を能くす。明治三十年七月、寺野守水、同竹濤、山口花笠等の主唱せる日本派の俳句に加はり、越友會を創立し、後、碧梧桐の新傾向に共鳴してその門に終る。

菅原師竹([illegible]) 文久三年八月仙臺に生る。明治十三年上京。三十七年、安齋櫻磈子と共に初めて俳句を作り、以後句作に努め、「日本新聞」「日本及日本人」等にこれを載す。大正八年三月二十四日歿す、享年五十八。句は「春夏秋冬」「日本俳句抄」等あり。

川西和露([illegible]) 明治八年四月二十日、神戸に生る。神戸商業出身。鐵材商を營む。市會議員たり。神戸讀書會、神戸俳書文庫を設立す。また「反古草紙」「阿蘭陀[illegible]」「和露句集」(第一、第二)發刊。「和露文庫」「俳門珍書百種」を複刻す。

廣江八重櫻([illegible]) 明治十二年三月、出雲國能義郡赤江村に生る。農を業とす。

中塚一碧樓 明治二十年九月二十四日、岡山縣玉島町に生る。中學校は岡山で學び、後早稻田に遊ぶ。俳句は、十六七歳の頃よりはじめ、河東碧梧桐に師事す。現在、俳誌「海紅」の主幹。「吾等の句境」「海紅句集」五卷「はかぐら」「一碧樓第二句集」「朝」「多摩川」の著あり。

安齋櫻磈子 陸前國登米町に生る。明治三十七年、年十七歳にして菅原師竹と共に初めて新聞「日本」に投句す。以後、大正四年迄の句を集めて「[illegible]」を出し、其後十三年頃、海紅に據つて句作生活を[illegible]す。

瀧井孝作 明治二十七年四月四日、飛驒國高山に生る。學歴殆んどなし。大正四年より七年まで、「海紅」の編輯を助く。その後「時事新報」「改造」等に記者たりし事あり。現在作家生活をつゞく。「無限抱擁」「妹の問題」「良人の[illegible]」等の創作集あり。

角田竹冷([illegible]) 安政三年五月二日、駿河國富士郡加島村柚木に生る。明治五年上京、區會、市會、府會、衆議院の各議員に在職せし他、幾多の會社重役たり。大正八年三月二十日逝去。正六位に敍せらる。明治十三年俳句を報知新聞に掲げてより俳道に精進し、二十八年秋聲會を起し、「秋の聲」「卯杖」([illegible])等を創刊せしほか諸新聞の俳壇選者たり。又古俳書の蒐集に志し、竹冷文庫を蔵す。著書に「俳[illegible]記」「聽雨窓俳話」「[illegible]句集」「[illegible]」等あり。

巖谷小波([illegible]) 明治二十三年頃尾崎紅葉、川上眉山等と紫吟社を起し、後京都在住二ヶ年間、十一世花の本聽秋と交り連俳を研究す。歸京後三十年頃角田竹冷の秋聲會に加盟、旁ら自宅に木曜會を起し作句に精進し、後獨乙伯林滯在中同人會を起して同人を集む。日下木太刀會、南柯會に關係す。

川村黄雨([illegible]) 文久三年六月、江戸麻布市兵衞町に生る。父[illegible]荷花庵[illegible]と號すにつき俳句を習作し、また森山[illegible]に作品の批評添削を求め、連句を學びて其[illegible]に俳人と交はる。二十八年秋聲會起るや直ちに之に加はり、竹冷、紅葉、小波、[illegible]竹、四丁、無黄らと作句に耽る。

森無黄([illegible]) 元治元年三月江戸に生る。元老院、[illegible]局を經、東京經濟雜誌社に入り、田口卯吉を助けて「大日本人名辭書」「日本社會事彙」の編輯に當り、又「群書類從」「國史大系」の飜刻に參す。後東京朝日新聞社夜勤部編輯長たりしが退いて句作に耽る。二十八年頃角田竹冷と秋聲會を興し「木太刀」の前身「卯杖」を出す。後「初鴉」を發行し正風不易流行の俳句を鼓吹する事二十年に及ぶ。

岡野知十([illegible]) 明治二十八年「毎日新聞」に掲げし「俳諧風聞記」を以て、新俳人として出發す。秋聲會に接近し「秋の聲」より「卯杖」に交渉を持ち、後「半面」を起して獨自の立場に立ち、半[illegible]

面派と呼ばる。大正に入り俳壇との接觸を厭ひ「新曲」より現在の「郊外」に赴く。著書、「晋其角」「雨華抱一」「蕪村その他」など。

伊藤松宇(通稱半次郎) 安政六年十月十八日、長野縣丸子町に生る。明治十五年東京に遊學。二十三年に子規、猿男、桃雨等と「椎の友」を結社す。二十五年子規等と俳誌「俳諧」を發行。爾後「東京毎日」「文藝俱樂部」等の外、種々の俳誌の選者となる。「にひはり」(明治四十四年創刊後改題「筑波」)を創刊、現に其主幹たり。著書に「時雨記念」「中興五傑集」「附合作法全集」「あがたの落穗」「松宇家集」等あり。

鵜澤四丁 明治二年二月千葉縣安食町に生る。青山學院高等普通學部を卒へ、獨逸協會學校にて獨逸語專攻。二十七年俳團秋聲會々員となる。當時、「俳諧雜誌」「筑波」「初冠」「赤子」「一夜秋」等の顧問たり。「俳諧修辭學」「俳諧逸話全集」「洋畫鑑賞法」「四丁句集」「艶物語」の著がある。水彩畫を好くす。

武田鶯塘(通稱桃四郎) 明治七年十月十日、東京下谷に生る。攻玉舍、三田英學校、神田英學院等に學ぶ。二十四五年のころ尾崎紅葉の紫吟社に入りて句作し、後長く「文藝俱樂部」の選者たり。大正二年南柯吟社の創立に與り、現にその主幹たり。「俳諧辭典」「芭蕉行脚物語」「俳句の手ほどき」その他、多くの著あり。嘗て博文館に在つて「少年世界」「文藝俱樂部」「幼年世界」を編輯し、又「東京日々新聞」の前身、「毎日電報」社々會部長たりしことあり。

服部畊石 明治八年十一月十七日、千葉縣海上郡嚶鳴村琴田に生れ、現に東京に住す。雨視の家系何れも俳人なりしため、殊に父耕雨の影響にて、幼より自作す。父が「俳諧評海」を創刊するや之を資け、後牧野望東らと「高潮」を起し現に主幹たり。嘗て「日本新聞」俳壇を擔當せし事あり。篆刻家を以て名あり。日本美術協會、日本書道作振會の展覽會に於て毎回その部の審査員たり。

星野麥人(本名仙吉) 明治十年四月、東京に生る。大野洒竹「毎日新聞」に選句するに及びて投句を始め、後子規の「日本新聞」に投句す。後紅葉の紫吟社に入り、又若菜會、晩鐘會を起し「俳藪」を出す。「時事」「毎日電報」「東京日々」等の俳句の選者たりしことあり。明治四十二年より「木太刀」を引受けて今尚ほ繼續す。「俳諧年表」「百家俳句全集」「俳句大觀」等の著あり。

大野洒竹(本名豐太) 明治五年五月六日生。二十七年筑波會を起し、翌年秋聲會の日本派に對抗して同志を結ぶや、入つてその機關誌「秋の聲」に據る。古俳書を愛し、蒐集して「洒竹文庫」を作り今日に傳ふ。又その史的研究に精彩を放つものあり。「俳諧史」及「山崎宗鑑傳」「與謝蕪村」等は考證の正確を以て鳴る。三十年博文館より發刊の「俳諧文庫」中の多くはその校訂に係る。大正二年十月十二日鎌倉に歿す。

笹川臨風(本名種郎) 筑波會の自然消滅以後は、いづれの俳團にも屬せず、したがつて、俳莚に列すること稀に、句作も旅行以外に試みること少し。(「笹川臨風集」參照)

佐々醒雪(本名政一) 明治二十九年、帝大國文科を卒業後、「曾根崎心中評釋」を著して知られ、「文藝界」を編輯、後俗曲の研究を以て文學博士の學位を受く。東京高等師範教授として傍ら文科大學に俳諧史の講座を受持つて居た。大正六年十一月二十五日歿く。「三句索引俳句大觀」「和歌俳句評釋」「俳諧史」及び「俗曲評釋」「近世國文學史」等の著がある。歿後、友人によつて「醒雪遺稿」が出版さる。

沼波瓊音(本名武夫) 明治十年十月一日、名古屋玉屋町に生る。三十四年東大國文科卒業。在學中洒竹、臨風等の筑波會に入り俳諧研究に志す。爾後雜誌記者、大學講師、一高教授等の職に就

くの傍ら、俳諧研究に沒頭す。關係俳誌に「俳味」（明治四十三年創刊大正五年終刊）あり、「俳諧調論」「俳句講話」「俳論史」「芭蕉句選講話」「瓊音句集」「芭蕉の臨終」等文集多し。昭和二年七月十九日歿す。

宮島五丈原（本名二郎） 明治八年十二月八日、新潟縣三條町に生る。一高を經て東京帝大法律科に入り三十五年卒業。辯護士と爲り今に至る。二十六年頃新俳句を作る。二十八年一高在學中、玄波、無絃等と彌生吟社創立、後筑波會に加入、以て今に至る。作句は「帝國文學」、「にひはり」「文藝界」、「人民新聞」、「實業之世界」、「法律新聞」等に載せあり、又、『蕪村論』及び『ちぎれ雲』の著あり。

安藤和風 慶應二年正月秋田市に生れ、操觚界にあること三十年。現に、秋田魁新聞社長兼主筆たり。俳句は古人に私淑して師承なく流派の所屬なく、獨立獨歩たり。「俳諧研究」「俳諧家逸話」「俳諧奇書珍書」「五明句集」「戀愛俳句集」「閨秀俳句集」「旅一筋」等の編著あり。句集『仇花』近く上梓の豫定。

坪谷水哉 文久二年二月、新潟縣に生る。早稻田大學の前身東京專門學校を出で、創業より現在まで四十餘年間博文館に勤續し、また大橋圖書館にも創立以來關係す。旅行を好み、帝國の領土にして足踏まざるなく、海外は歐米各國より南洋諸島に及ぶ。俳句はその趣味の一端なり。

藤井紫影 明治元年七月十六日、淡路洲本に生る。二十七年東京帝大國文學科卒業。金澤四高、名古屋八高、京都大學等に教授たること三十餘年。大正三年退職す。著書多し。

志田素琴（本名義秀） 明治九年七月、富山縣上新川郡熊野村に生る。三十六年東京帝大國文科卒業。成蹊高等學校に奉職、傍ら帝國大學、國學院大學に俳諧史を講ず。四高在學中藤井紫影の北聲會に同人として句作に入る。「東亞の光」選者、「試作」同人を經て現に「懸葵」「草上」の選者たり。編著『日本類語大辭典』『花鳥蟲魚百譜評釋』『俳文學選』等。

勝峰晋風 明治二十年十二月十一日東京市牛込區矢來町に生る。四十三年東洋大學卒業後暫く「小樽新聞」に在り、歸京後、「報知」「萬朝」「時事」等前後十五年の記者生活を終り、震災後飜刻、著述に專心す。法政大學にて俳諧史及び蕉門の俳論を講義せしも現在休講。『芭蕉全集』の編纂に沒頭。『俳書大系』十七卷は量に於て最も大なる編著なり。俳句は十六歳の時より父錦風に學びしのみ、師につきしことなし。「にひはり」「黃橙」等を刊行せしことあり。

小泉迂外 家祖代々東京の產。少壯子規の「俳諧大要」により古句の妙を知り、古俳書を獨學研鑽、三十六年、「サラシキ」を創刊主宰せり。目下俳諧雜誌社の一員たり。『俳句及び連句の作方』の外、演藝、食味等の著書多し。

久保田万太郎 明治二十二年十一月七日、淺草田原町に生る。慶應大學部卒業。（詳細は「久保田万太郎集」に讓る）

芥川龍之介 生涯芭蕉を好愛す。好愛せるよりは甚だしく打込めるに似たり。俳友に小穴隆一あり。（「芥川龍之介集」參照）

久米三汀（本名正雄） 明治四十一年初めて句作す。四十三年一高入學と共に句熱頂點に達し、四十四年、朱鞘社を結びしも、その後俳壇に遠ざかる。句集『牧唄』あり。（「久米正雄集」參照）

室生犀星 少年時代より發句に熱心す。十四五歳の頃、川越風骨に添削を乞ひ、十七八歳の頃、藤井紫影、大谷繞石に添削を乞へり。最近にいたり芭蕉を愛吟す。（「現代日本詩集」參照）

明治大正短歌史概觀

齋藤茂吉

明治大正俳諧史概觀

高濱虛子

明治大正短歌史概觀

明治天皇

明治天皇は和歌を好ませたまひ、且つ歌聖にましました。その歌調の堂々たる、御心のままの直ぐなる、さながらを詠じたまひて、毫も巧むことあらせられず。これ御製の特色と拜察したてまつるのである。

ともしびをさしかふるまで軍人おこせしふみをよみ見つるかな

國のためいのちをすてしますらをの靈祭るべき時ちかづきぬ

國をおもふ臣のまことは言のはのうへにあふれてきこえけるかな

かちどきをあげてかへれる軍人まぢかく見るがうれしかりけり

むかしよりためしまれなる戰におほくの人をうしなひしかな

御製は、あるひは桂園流であるべきであるとおもふのに、此處に拜誦し奉る五首のごときは、さういふ流派的傾向が目立たず、御こころのままに歌ひあげられたまふのであるから、この御製のごときは、流派を絕し、時代を絕し、ただちに和歌の本質に貫徹したものだと拜誦し奉るのである。

それから、御製の新聞などにたまたま公になつたのは、日露戰役ごろからだといふことであるか、天皇は御製の世に發表されるのを好ませたまはなかつたさうである。これ、私の謂ふ「獨詠歌」の解釋上大切であるから、かしこきことであるが一寸附記するのである。

昭憲皇太后

昭憲皇太后は明治天皇の大業を濟したまふに配して、內助の功を全くしたまひ、天皇の和歌に執心したまふによつて、皇后また御生涯を作歌したまうた。

鳥羽の海の波風いかで騷ぐらむなみならぬ行幸とおもふに

ふしばの假の宮居におとづれて市が谷とほくゆく時雨かな

さびしさもしばし忘れてみるものはみまへに慣れし螢なりけり

大君のおものの爲のまけ井には清き水のみ湧きあふらなむ

燈火にちかくよりつつ見る書もめがねを賴む身となりにけり

なほ、御歌には「御苑にて人々梅の實を拾ひきほふを見てたはぶれに」新衣袖せばければ梅の實のひとつだにつつみかねつつ」といふのがある。「新衣」といふのは、御洋裝のことであるが、かくの如き新題の御歌は御歌集中のところどころで拜誦し奉ることが出來る。第三の螢の御歌には、「民のささげたる螢とて八王子の行在所より賜ひければ」といふ端書がついてゐる。

萬葉の歌人は、『み民われいけるしるしあり天地の榮ゆるときに遇へらくおもへば』と歌つた。上に聖天子をあふぎ、國新に興隆してやまざるときに、文運のこれに伴はずといふ道理がない。明治大正の歌壇が、建國以來の盛觀を呈したことは、決して偶然ではないのである。よつて、この小史略のはじめに當り、恐れ謹

みて御製、御歌のことを記し奉る。

參考。「明治天皇御集」(宮內省藏版 大正十一年一月一日)「昭憲皇太后御集」(宮內省藏版。大正十三年九月五日)

第一章 第一期

明治大正和歌の第一期といふのは、明治初年から、明治十年前後までを假りに私の名づけた時間的區劃である。

この第一期の歌風は、約めていへば、德川歌壇の續きであつて、明治と改元され、政治上御一新になつたからと云つて、和歌の內容が直ぐ改まるといふわけではない。幕末から明治の改元までに、人心の動搖があり、思想上の變化があつた。これは普く文化史家の究尋してゐるところであつて、私の再說を須たぬのであるが、幕末の歌人も、人によつては幾らかさういふ思想的動搖の影響を蒙つた形であり、例へば、攘夷・尊王の「正義」と開國・佐幕の「因循」とを對立せしめて見ると、國學者なり歌人なりは、尊王の正義に附いた。幕末の歌人、橘曙覽でも、萬葉調歌人の平賀元義でも、この尊王の正義を歌ひ上げてゐる。「ますらをが朝廷おもひの忠實ごころ眼を血に染めて燒刃見すます」(曙覽)、「えみしらを討平らげて勝鬨の聲あげそめむ春は來にけり」(元義)の如きを見ればその趣がよく分かる。この歌人の思想は、賀茂眞淵あたりから始まり、本居宣長が強調した日本主義、すなはち漢書も佛書も、「あともなき空言ぶみ」だといふ如き思想系統に屬してゐるから、その思想と、幕末の尊王・攘夷の思想とが結合したものである。

併し、歌人の作一般から見れば、さういふ思想的の和歌は極めて尠いので、大部分はさうでない和歌である。即ち、詞を換へれば、歌壇の全體からいへば、さういふ思想の「概念」だけでは歌壇が出來なかつたといふことに歸着するのである。

人心の思想がかまびすしく論ぜられてゐても、その儘それが和歌となつて相當の價値を得るといふことがむつかしかつたものと觀察してもいい。かの實行的思想家で、和歌の上にも相當力量を示した平野國臣の歌でも、「數ならぬ身にはあれどもねがはくは錦の旗のもとに死にてむ」といふごときものであり、なほ獄中の作でも、「蘆たづの翅ちぢめて巢にあれど雲井を戀ひぬ日はなかりけり」といふごとき程度の低いもののみである。これは、國臣は專門歌人でないからだといふかも知れないが、これは、いかに猛烈な實行的志士でも、單にその持つ思想乃至實行力だけでは、いい和歌は出來なかつたといふことになる。序に云ふ。國臣の歌は、「平野國臣歌集」(明治二十年 吉林柏陰發行)に據つた。

そんなら、明治第一期の歌壇はどういふものであつたかといふに、橘曙覽も歿し、平賀元義も歿し、大隈言道も歿して居り、また、さういふ特色のある歌人は一般歌壇からは葬られてゐたのであるから、當時の歌壇を支配したものは、第一は、香川景樹の流にある桂園派である。これは分かりよい古今集調に、氣の利いた言ひまはしをなすのであつて、當時の新歌風の一つと看做すべきもので、最も勢力があつた。

第二は、江戸派の流で、眞淵の拓いた萬葉風の歌風が榮えず、橘千蔭、村田春海等の萬葉・新古今の折衷といふやうな歌風と、本居宣長から出た一派で、これも千蔭らのものとは大差はない。加納諸平の如き稍特色のある歌人がゐても、さう優れたものではなく、約めていへば、此等の流にある歌人もさう優れたものはゐなかつた。第三は公卿の間に殘留してゐた堂上流で、公卿は大抵和歌は作つたが、專門歌人とは

看做されない。以上のこの三つの流が相交錯して歌壇を形成してゐたものと謂つていいとおもふ。

さうであるから、一般歌壇は、「鰒玉集」とか、「大江戸倭歌集」とか、その他の共同歌集に載つてゐるやうな人々が生殘つて居つて、明治第一期の歌壇を形成してゐたのである。「歌のさまざまに分れて、二條六條の姿をしたひ、冷泉飛鳥井のながれを汲み、眞淵宣長の學にならひ、千蔭春海らの教にもとづきて、こころごころになりぬるを、敷島の道のひろくおもひなして」（「大江戸倭歌集」序）云々とあるのは、徳川末期の歌壇の一部の眞相を云つたものである。

明治五年の新年敕題は、「風光日々新」といふのであつた。滿天下の氣運が斯る方嚮を取らうとしてゐるのであるが、第一期の和歌は、徳川末期そのままの續きと看做してよく、ただ、堂上歌風と民間歌風とが接近しはじめたことを以て特色たと謂つていい。これは天皇が和歌を好ませ給うたたまものである。

宮中御歌所

明治二年に、宮中の歌道御用は侍從候所で取扱はれることになり、三條西季知が御用のとき參劃すべきことを仰付けられた。明治四年に宮內省に歌道御用掛を設けられ、福羽美靜が仰付けられた。

明治二年の、「春風來海上」といふ敕題の詠進には季知の名は見えぬが、明治三年からその名が見えてゐる。明治四年の敕題、「貴賤迎春」の詠進には、宮内少博士、八田知紀の名が見える。明治五年の敕題、「風光日々新」に、知紀は、「朝な朝なさす日の光もあらためて綠ににほふふじの遠山」といふ歌を作つてゐる。この年知紀は歌道御用係になつた。

明治六年の、「新年祝道」といふ敕題には、

題者　正二位　三條西季知

あらたまる年ゆたかなり大御代の道はいよいよ開けそめつつ

點者　宮內省三等出仕　福羽美靜

こぞこととしあらたまりつつ進みつつ道ひらけ行くみよの樂しさ

點者　宮內省七等出仕　八田知紀

たまほこの道をたのしむ眞心も年と共にぞ改まりける

などの歌が見える。明治六年九月に八田知紀は歿した。明治七年から一月の御歌會始に國民一般の詠進が許可され、更に明治十二年からは詠進歌中優れたものを選拔して御前披講をするやうになつた。明治十一年十二月六日の布達に、『御歌會始詠進の歌、自今、屬籍尊卑を不論秀逸撰擇之分披講に可加』とあるのはそれである。

明治七年御歌會始題者三條西季知。明治八年題者同前、點者福羽美靜。明治九年題者同前、點者福羽美靜、近藤芳樹。この年高崎正風御歌掛となつた。侍從番長兼勤である。九年十一月に、歌道御用掛と皇學御用掛とを合せて、文學御用掛と稱へることとなつた。三條西季知、高崎正風、渡忠秋、力石重遠、松平忠敏などは文學御用係であつた。明治十年題者同前、點者福羽美靜。明治十一年題者同前、點者近藤芳樹。明治十二年題者同前、點者近藤芳樹。明治十三年題者同前、點者高崎正風。明治十三年一月二十九日近藤芳樹歿し、明治十四年八月二十四日三條西季知が歿した。明治十四年題者、點者高崎正風。明治十五年題者高崎正風、點者福羽美靜。明治十六年題者、點者高崎正風。で點者が一人のこともあり、二人のこともあつた。

明治十九年二月五日に、文學御用掛が廢せられ、侍從職に御歌掛を置かれ、それには長、

參候、寄人、勤務の職を置かれた。高崎正風御歌掛長を仰付けられた。明治十九年題者、點者高崎正風。明治二十年同前。

明治二十一年六月、侍從職中御歌掛が廢されて、宮內省中に御歌所を設け、長、參候、寄人を置かれ、高崎正風が御歌所長を仰付けられた。これが「御歌所」といふ名稱の始である。その時の參候は、西四辻公業、堀河康隆、富小路敬直、松浦詮、冷泉爲紀、交野時萬、千種有任、綾小路有良、長谷信成等、寄人には間島冬道、黑川眞賴等、侍從屬には伊東祐命、植松有經、小出粲、谷勤、內藤存守、阪正臣、鎌田正夫等であつた。

それから明治三十年に職制の通達があり、明治四十年にまた通達があつて現今に及んだ。大正元年に高崎正風が歿した後、御歌所長は、黑田清綱、久我建通の二人を經て、現在の入江爲守に及んでゐる。

昭和三年七月一日の御歌所は、長、入江爲守、主事、松平乘統。錄事、根本敦行、外山且正、佐藤貢、寄人、阪正臣、鳥野幸次、千葉胤明、武島又次郎、遠山英一、金子元臣、加藤義淸、參候、町尻量弘、冷泉爲系、大原重明、金子有道、香川景之、慈光寺仲敏、根本敦行、外山且正、細川利文、唐橋在正等である。この略史は便利のため明治初年から現在まで及ぼした。

參考。井原豐作「明治の御歌所」(「心の華」第三卷)
○花輪鼎藏「御歌所派の歌風及び系統」(「短歌雜誌」第一卷三號)(武島又次郎「宮內省御歌所略史」(寫本)
○井上通泰「明治天皇御集編解」に關する演說筆記等。
○「明治類題歌集」(晴光館)

御歌所歌人の流派

御歌所の歌風は明治大正和歌の第一期からはじまり、堂上風、桂園派、江戶派などの混合であるが、この歌風は、新派和歌が勃興するに及んで、「舊派」或は「宮內省派」或は「御歌所派」の一語で片付けてしまふ傾向になつたのである。この流派に明治初期から現代に至るまで、漸次的の變化と進步とがあつても、他の新派の變化に較べて甚だ目立たないものであつた。私が初期の御歌所(歌道御用係)から現在に至るまでを引くるめてしまつて、數語を費したのはその爲めである。

官制には、「御歌所ハ宮內大臣ノ管理ニ屬シ御製、御歌及歌御會ニ關スル事務ヲ掌ル」といふのであるが、これはただ事務のみでなく、全く歌道獎勵の御心に本づいてゐたのである。それであるから、「公宴續歌」を編纂せしめ、「萬葉集注疏」を編纂せしめ、「辭書」を編纂せしめ、「萬葉集古義」を板行せしめたまうたのである。また、御歌所に集まつた歌人のただ一派・一流に限らなかつたのもその御心に本づいてゐるものとおもふ。今左にその流派の大凡を記しおく。

三條西季知は冷泉派の堂上歌人であつた。八田知紀、高崎正風、渡忠秋、香川景敏、稅所敦子、黑田清綱、鎌田正夫等は桂園派であり、正風から出た千葉胤明もさうである。新しい學問をした井上通泰は直系ではないが桂園派と看做していい。福羽美靜は平田派であり、近藤芳樹、本居豐穎、小杉榲邨等は本居系統である。伊東祐命、小出粲、間島冬道、須川信行らは眞淵系であるがそのおもかげはない。阪正臣は本居系に屬し、大口鯛二は伊東祐命から出でてゐる。武島又次郎、金子元臣らは新時代に人となつたもので獨立派と看做すべく、御歌所にあつては新系統である。現在の長の入江爲守は二條派に屬する。

宮中歌人と民間歌人

御歌所の前身、歌道御用掛の制が明治二年に侍從候所に置かれ、次いで宮內省に設けられてからは、宮中に關係ある、卿歌人、側へ

ば、三條實美とか、岩倉具視とか、德大寺實則とか、三條西季知とか、さういふ人々、それから、諸國の大名中の勢力あり、特に尊王・倒幕の實行を輔けたものが和歌を作り、それに關係してゐた專門歌人が、宮中の和歌と關係するやうになつたのである。例へば、八田知紀は島津家の庇護を受けてゐたので、はやく宮内省に關係した。鈴木重胤は宇和島の伊達家、渡忠秋は三條西季知の庇護を受けてゐた如きである。

また、明治九年に宮内省に入つた本居系統の近藤芳樹の如きは毛利家の庇護を受け、高崎正風は八田知紀の門人であつて、長く宮内省に仕へたことは普く人の知るところである。

かくの如く、歌人の分布と政治上の勢力とが結合して、宮中歌人と民間歌人の區別が出來るやうになつた。そして、宮中歌人には勢力があり、名を成すにも便利であり、また相當力量ある者を選んだのであるから、宮中歌人に代表的のものを見出すことが出來た。

德川期に、禁制打破の叫がおこり、堂上歌人に對して民間歌人の運動がおこつたのであるが、明治の初期に一たび堂上民間合同して、更に宮中派と民間派とが對立するやうになつた。

この對立が著しくなつたとき、運動のおこるのは常に民間派からである。明治和歌の第二期のすゑごろから、海上胤平のごときもの出でて、宮内省歌人を以て論戰の對象とするに至つたのは、即ちそれであつて、また、新派和歌革新運動の初頭にあたつて、論戰の對象としたのもまた、この宮内省派の歌人であつた。それを顧れば、その當時の宮中歌人の榮譽・勢力を推測するに難くはないのである。

三條實美

三條實美は明治二十四年二月に歿したのであるから、もつと後期に記載するのが順當であるが、實美が堂上歌人としてはじめから作歌し、明治元年、「慶應四年の夏大監察となりて江戸につきし時。月と日のみ旗の風に武藏野のあを人ぐさもうちなびくらむ」といふ歌を作つてゐるくらゐであるから、此處で敍行記載しようとおもふ。

はけしくも吹く嵐かな角田川舟の往來も
安からぬまで（隅田川にて）

いましめて忘るまじきはつくし潟しつみ
し時の心なりけれ（折にふれて）

今宵みれば箱根の山に雪ふれりうべ冴え
けらし旅の夜床の（箱根にて）

朝毎に見しおもかげもなき人と成りぬる
今日のわかれ悲しも（[illegible]）

やちぐさに蟲の音すだく秋山を越え行く
旅は樂しかりけり

かういふたぐひのものであり、やはり桂園派（高崎正風等）の影響があるやうに見うける。そこで此處に抄記したものは、もつと後年の作に相違ないが、假りに此處におくのである。實美の歌風は、平氣で輕妙なところにいいのがある。

これは桂園派の影響であらう。明治三年正月一日三條西季知東久世通禧ぬしたち又廣澤眞臣などと濱殿につどひて何くれと物がたりしける時、といふ詞書があつて、「樂しきと共に樂しむつどひしてうきに別れし人をしぞ思ふ」「思ひきや身をも捨てたるうき時にかくて樂しむ今日あらむとは」の作のあるのは、はじめからその力量をおもはしめる作である。

岩倉具視

岩倉具視。具視は明治十六年に歿してゐるが、これも此處で一寸書いて置く。「嘉永七年正月試筆のついでに異船のことを思ひて」と題して、「えみしらにからきめ見せむ汐風の氷ふきとく春は來にけり」と歌つてゐる人であ

る。

てる日さへおほふ木陰のま清水を心ゆく
まで結びつるかな（緑深）

あしひきの山里いかに此ごろは都もみゆ
き降らぬ日ぞなき

いづくにか今宵は寐なむ足柄の山のかげ
道日はくれにけり

朴かしは茂れる山のすずしきにわきて流
るる水もありけり

焼太刀の鋭きつるぎは霜の上を踏渡り
てものがれけるかな

この終の一首には、『明治七年七月十四日の夜喰違にて難にあひける時によめる』といふ詞書がある。其親の方は、從來の堂上風のところがあつて、歌に流通の氣に乏しく、實美に劣るが、明治初期の堂上歌風の一つと觀察し得るので興味がある。

八田知紀

八田知紀は明治六年に歿し、香川景樹の晩年の門人で、熊谷直好あたりとも歌風の交渉がある。歌集を『しのぶぐさ』といふ。大正三年日本警察新聞社から『八田知紀歌集』が出版になつた。『芳野やま霞の奥は知らねども見ゆるかぎりは櫻なりけり』といふ歌は有名だが、實はこの歌は取れない。『別れかねやすらふ程に咲きにけりかがまがきの朝がほの花』も名高いが、桂園派の低いところを露はしてゐる。

白雪の中にながるるみ越路のにひがた川
は見るにさやけし

大比叡の峰にゆふゐる白雲の淋しき秋に
なりにけるかな

月きよみねざめて見れば播磨潟室のとま
りに舟は泊てにき

鳥がねにおき出で行けば山科の岩田の小
野に椎ちるなり

にほひなき青葉のうへを吹く風の身にし
む夏になりにけるかな

『空蟬のこの世のかぎり見るべきは』の歌も名高いが單調で理がある。『あかつきの枕の山の鶯はねものがたりをする心地して』の歌の下の句は、桂園流の特色が露骨に出てゐて、分かりよくて艶があるのが特色である。知紀はなほ、『てる月の影に醉ある心地して秋の夜すがら蟲の鳴くなる』などいふ模倣歌をも作つてゐる。さういふ風であるが、知紀は當時の歌壇ではやはり第一流の力量を有つてゐた。ここに拔いた五つなどは、萬葉調をさへ取りいれて、旨いところがある。

井上文雄

井上文雄。文雄は明治四年十一月に歿した。岸本由豆流に學び、また一柳千古に學んだ。文雄は田安の藩醫であつて、身分からいつても宮中には仕へられない點もあつたらうが、力量の點に行くと蔑るべからざるものがあつた。この人の宮中に入らなかつたのは、明治の初に病歿したのと、倒幕の藩主等の庇護のなかつたのと、また一種の氣風のあつた人で、『徳川の濁りそそぐと會津川潔き名をこそ世にながしけれ』などの歌を作つて罪を得たりしてゐる。家集の名を『調鶴集』といふ。

朝霧の絶間に見れば遠山はおもひしより
も色づきにけり

隅田川中洲をこゆる潮先きに霞ながれて
春雨の降る

秋またぬ薄の草の一本にうつくしよしと
蟬の鳴くなる

山河の岸の小草の薄もえ黄おしひたした
る春のみづかな

霜だにもおかぬ方ぞときゝたりし紀の遠
山も雪ふりにけり

中には、隨分滑稽もあり、ぞんざいな歌も多いが、折々輕妙な歌が交つてゐて棄てがたい。時の人が、當時以後の歌口だなどと云つたと傳記に書いてあるが、成程さういふところもある。『おのづから乾きておつる紅葉の音を聞きしる暮もありけり』などには、なかなか細かいところがある。文雄はなほ、長歌も詠み、安政戊午秋日有感作歌短歌、なかに、「今やかく、えみし國人、横濱に、江門の大門に、來入り居り、入り居るからに、あしき氣の、國内に起り、聞きしらぬ、くしき怪しき、病さへ、世にはじまりて、」などいふ純日本主義のものもあり、また、詠大砲歌短歌のなかには、「日の本の大和の國に敵守る器足らずと言さへぐ夷が國の思兼かしこき人にいかづちのことわりもちていかつちのいかく太かるくろがねのとぶ火のつつをたくみいで」云々といふ句などがある。

大田垣蓮月

大田垣蓮月尼。千種有功に和歌を學び、家集を「海人の刈藻」といふ。明治八年十二月に歿した。これは堂上歌人の流を汲んだものだからここに數言を費さう。蓮月の歌の、「宿かさぬ人のつらさを情にて朧月夜の花の下臥」といふ歌は有名だが、この歌を私は感心しない。ただかういふ、めづらしい、人心の機微をあらはしたものだなどと思はせるやうな歌が、當時有名になつたといふことは、當時の歌壇乃至一般の鑑賞者の氣持が分かるのであつて、當時の歌壇風潮を知る一つの目安となるのである。

　有明のかすみに匂ふあともよしきさらぎごろの夕月もよし

　岡崎の月見に來ませ都人かどの畑いも煮てまつらなむ

　はらはらと落つる木の葉にまじりきて栗のみひとり土に聲あり

　年を經しふりやの棚にくろめるは煤になれたる佛なりけり

　夢の世と思ひすつれど腹に手をおきてねし夜の心地こそすれ（世中騷しかりける頃）

なほ、「伏見よりあなたにて人あまたうたれたりと人の語るをききて。きくままに袖こそぬるれ道のべにさらす屍は誰が子なるらむ」などの實際の歌もある。

　この家集の序文を近藤芳樹が書いてゐるが、その中に、「歌よむことを好ける尼あり。名を蓮月となむいふ。昔人作れる器のさまをまねびたらぬ、よみたる歌のみやびかなるをめでて、いづこに隱れのがれても、たづね訪ふほどここにとあるなども、蓮月が女性であるからおもしろく、また、今は昔、おのれ都にてあひし頃は、墨染の衣あららかなる姿ながら、額髮のあたり打さけばりて、いかなれば斯かる樣にかへつらむとそぞろにけむそのかみの、いぶかしきまで麗しき顏なりしを、」云々といふ文も亦おもしろいので、餘計なことだが抄した。

第二章　第二期

　この時期は、明治十年前後から明治二十年前後に至る約十年間を謂ふのであつて、歌風は第一期の連續で、そこに價値上の著明な變化は認められない。

　ただこの期間で稍著しいのは、既に明治十年ごろから、「詠史」の歌が盛になり、競つてさういふ歌を詠じたことである。加藤千浪の如きは「詠史百首」、「續詠史百首」を世に出したほどであり、それに刺戟せられて、後日海上胤平がこの「詠史百首」を評し、『凡そ詠史の感情深きは人の能く知る處なり。隨つて調格亦漫なるべからず。後の詠史を學ぶもの此評論を見て調格を了得すれば、方に優々舒暢し、詠

出自ら感を含まむ、小徑に迷ひ荊棘を踏み、加藤千浪が終身勞して功なきが如きこと勿れ。」と云つた如きは、稍當時の風潮を察するに難くはない。

詠史がさかんになるにつれて、詠史の題の範圍が廣くなつた。例へば、税所敦子の家集を見ても、漢文帝とか顏子孫子などは餘りめづらしくないが、華盛頓、徐世賓などの題のあるのは、宮中歌人に於てすでにこの實行のあつたことを證するのである。

「新刻書目便覽」に據ると、明治六年までの歌書は、「類題清風集」とか、「類題新竹集」とかであるが、その前、「平野國臣歌集」(明治二年)などのやうな實行思想家の歌集あることは既に云つた。さういふ尊王家の詩歌集も出たが、これは專門の詩人歌人の作でないから、特に歌壇詩壇を動かすといふことはないが、詠史の盛になつたのは、さういふ思想と關係があるのである。

それから、開化新題といふものがはじめて流行した。これは西洋學が入つて來てからの新事物を歌に詠むことである。明治の初年から、この「開化」が人心に強く響き、「開化節用集」「開化事始」「開化唱」「開化問答」「開化往來」「開明消息往來」「開化商賣往來」「東京開化繁昌誌」などの題簽を見ても分かる。これらは、「西洋」又は「泰西」などの語よりももつと新鮮に響いたものかも知れぬ。

さういふ西洋學をば漢文で書いた、「西國立志篇」の如きもあり、明治十七年の「巽軒詩鈔」附錄の學藝論、「心理新說」序、「耶蘇辨惑」序、讀二韓氏原道一、寄二中村敬宇翁一書などの文もあり、明治十五年には、「新體詩鈔」の發行となり、井上巽軒それに序して、「明治の歌は明治の歌なるべし。古歌なるべからず」といひ、外山正一も、序のなかに、「新體と名こそ新に聞ゆれど、やはり古體の大佛の法螺」などといふ歌をかかげるやうになつた。

しかしさういふ西洋輸入風のものに對して、反動的に、日本本來の和歌の特色を強調する「國粹保存」の論も出で、さういふ二つの論が相交錯して進んで來てゐる。明治二十年以後の、歌人が新體詩に對した態度は、落合直文でも萩野由之でも寧ろ反動的であつたのは稍注意すべきであり、明治二十年の「大家論集」に男尊女卑の是非得失を加藤弘之が論じ、婦女權沿革論を穗積陳重が論ずれば、漢文不可廢論を中村正直が論じてゐるたぐひは、さういふ二潮流の交錯を示すものである。

さういふ變化はあつても、和歌壇の主潮流には大きな變化はなく、先づ第一期の連續と看做していいとおもふ。この期間に於ける歌風をば便利のため、「明治現存三十六歌撰」を以て代表せしめ、雜誌の方では、「大八洲學會雜誌」を以て代表せしめる。

なほ、「東京大家十四家集」(平井元滿編輯 明治十六年)と、「東京大家十四家集評論」(海上胤平 明治十七年)、「東京大家十四家集評論辨」(佐佐木弘綱 明治十八年)などの出現があり、佐佐木弘綱の「明治開化和歌集」(明治十三年)の發行がある。

「明治現存三十六歌撰」

「明治現存三十六歌撰」は、山田謙益編集、竹本石亭畫で、明治十年六月二十八日出板になつた。これを見ると當時現存の大家の歌一首づつ載つてゐるから、明治十年ごろ、即ち、第二期の初頭ごろの歌壇の風潮をうかがひ知る事が出來るから、煩しきごとくであるが、左に錄する。但し、歌合の形式の左とか右とかの文字を削除した。

郭公　　三條西季知卿

めづらしと云ひし初音の後もなほ飽かれむものか山ほととぎす

竹　加藤千浪

いたづらに千代へむよりは呉竹のよに拔けいでむ一ふしもがな

百合　黒田清綱朝臣

人しれぬ思ひの露やおもるらむ傾き立てる姫百合の花

夢見紅葉　間宮十子

ぬば玉のよはの枕に見てつるはかべにぬるでの紅葉なりけり

浦鶴　横山由清

うらなれて汐しみたりとおぼえぬは千代のものなる鶴の毛衣

暮秋鹿　伊能穎則

はらはらと時雨うちして秋くる外山の裾に男鹿鳴くなり

不盡山　飯田年平

駿河なる不盡の高根を慕ると明くとわが見る世にも過ひにけるかな

殘紅葉　尾高高雅

秋をさへとどめて見するもみぢ葉をもろきものとも思ひけるかな

花　猿渡容盛

おもふ事大かたたがふ世中に花ばかりこそ待つかひはあれ

月前旅行　伊東祐命

宿からむ里を眼のまへに見て月に急がぬ松のした道

秋月明　松門三艸子

月かげをあはれと云ひてとる筆のうのけのすゑも見ゆるよはかな

秋夜　力石重遠

夕ぐれは立ちいでて空もながめけり秋の夜はよりかなしきはなし

田家夕立　黒川眞頼

庭にほす麥のさむしろたたむまにうちこぼれきぬゆふだちの雨

水邊立秋　小中村清矩

すむといふ空にかよへる水のうへを今朝よりわたる秋のはつ風

岡鹿　丸岡莞爾

ひたの音におりたちかねてさ男鹿は田なかの岡の月になくなり

春月言志　鶴久子

かすむ夜の月にあはれは浮かべども春やむかしの思出もなし

山家初冬　三田葆光

やまざとの岩井の水を汲みあげてけぶりに冬のたつをこそしれ

茶　星野千之

山しろのうぢ山かつが摘むこのめにるものなしと煮てこそは知れ

筆　穉鮮玉

おそろしきけものに生ひしはてなれど筆はをとめの手にもなれけり

千鳥　鈴木重嶺

もしほ汲むあまのまでがたまてしばしおりたちかねて千鳥なくなり

閑見花　竹本石亭

雨もふり風もさそはぬこのもとに花見るときをなににたとへむ

加藤主計頭　大野定子

世にたけきやまとごころにことさへぐ唐なでしこもたをりきにけり

壇浦懷古　屋代柳漁

あら浪をかづきなれたるあまならば抱ける玉はしづめざらまし

朝雪　中島歌子

いつのまに積りし今朝の雪ならむ曉までは月も見えしを

雉　海上胤平

ほろほろとつばきこぼれて雨霞む巨勢の春野にきぎすなくなり

卯花繞家　橋本直香

いづくまで咲く卯の花の垣ねぞとたどれ
ばもとの門に來にけり

陳志　松平忠敏

ことしあらば草むすかばねことしあらば
みづくかばねとおもふばかりぞ

うたかた　播登世子

あやにくにうられしき事はうたかたの泡と
きえゆく世のならひかな

嵯峨にまゐりて　高崎正風

大ゐがは春もあらしのさむければ千鳥な
くなり花かげにして

心　小原燕子

かがみにもなるべきものを世の人のみが
きがたきは心なりけり

詠史　本居豐穎

よしのやま花のさかりと世はなりて志賀
の大津はよる舟もなし

弘文天皇　渡忠秋

世中にたちさかえたるからことの花は君
こそうゑはじめけれ

禁中　近藤芳樹

雲のうへにありとこそきけなべて世にあ
まねくかかる露のうてなは

野設　伊達千廣

みかり人ゐかさなびきて引はなつ矢田の
びろ野にあられふるなり

隣家梅　福羽美靜朝臣

あれたれど隣のわらや梅さけば住みかは
りても見まほしきかな

歲旦　千家尊福

むかしより月日を老になさじとや暮れて
は歲のあらたまるらむ

これには繪があり、『作者のさまをも春夜のおぼろげながらに寫したらましかばとて、寫したとある。又、跋に、『此歌合に漏れたる大人たち少からず、そは遠き國々の歌人たちと共に續歌仙をえらばむの心にて、なかばあつめ置たれば、つぎて櫻木にちりばめむと欲す。名高き大人たちの此卷に漏れたるを見む人あやしみ給ふな。明治十年五月、かねみつ再まをす』とあるが、續はいまだ見るに及ばない。

「開化新題歌集」

「開化新題歌集」といふのは、從來の和歌の題以外に、「開化」に伴うた新題を歌つた歌といふ意味であつて、

國旗、日本帝國、演說會、椅子、時計、袂時計、大時計、晴雨計、風雨針、香水、外婚、五層樓、牛乳、屠者、鐵女墻、國債、私債、剪髮鋪、驛遞、委任狀、代言人、萬國公法、漢醫、洋醫、各國條約、洋杖、祝砲、華族獨步、俳優乘馬、玉轉し、俳優被愛貴族、外賓連到、植物御苑、鹿鮭罐詰、射的、沖繩縣、上野公園、春秋二季祭、電話器、郡區役所、郡區長、靖國神社、夜演劇、外國俳優、洋算、賞盃、商業夜學校、裁縫學、自轉車、神葬、外客看劇、石鹼、物品配達、水上警察、條約改正、道路修繕、紡績器械、檢震器、舩燈、絨緞、化學、國事犯、洋紙製造、媒助法、驅蟲珠、衞生局、朝鮮開港、勸工場、南京米、勸解、劇藥嚴禁、無人島開拓、教育博物館、海外出店、徵兵使、耶蘇教會、產婆生徒、牧牛場、華族銀行、西洋染粉、洋紅、端書郵便、金祿公債、郵便、延遼館、鯨漁社、棒砂糖、外國勳章、川蒸滊船、水先案內、造船所、開拓移民、禁園縱覽、貴官護衞、避病院、虎烈羅、公使謁見、犬追物御覽、騎射御覽、步射再興、擊劍復古、公園臨幸、御園新橋、御巡幸、魚鳥市場、電信機、滊車、滊船、瓦斯燈、

新聞紙、新聞記者、讀賣新聞、繪入新聞、蝙蝠傘、午砲、小學校、小學讀本、女學校、女教師、洋學、洋行、洋書、洋學書生、夏氷、洋服、福田會、洋銀相場、交際、西洋菓子、西洋筋、複寫版、斬髪、説教、貯蓄器、聾啞聞音器、油繪、撮影、娼妓寫眞、人力車、密賣女、租税、藝妓税、國會、隧道、輕氣球、洋犬、士族歸農、裁判、詿違、違式、自主自由、男女同車、暑中賜暇、巡査、平民、教育論、廢關、節制、皇居新築、府會區會議員、士族合力、鑛山、懲役人、寒暖計、紙幣、外國航海、幼稚園、避雷針、僧侶妻帶、石炭、燈明臺、停車場、靴、女官著靴、府縣會議、街燈、西洋馬具毛氈、通計百七十七題、

この「開化新題歌集」は大久保忠保の編であつて、第一編は明治十一年十一月、第二編は明治十三年十一月、第三編は明治十七年一月に發行になつてゐる。そして、第一編の末に載せてある作者姓名を見ても、近藤芳樹、小出粲、小中村清矩、大熊辨玉、本居豐穎、三條西季知、中村秋香、加部嚴夫、中島歌子などが居り、第二編には高崎正風、三田葆光、税所敦子、鈴木重嶺、黑川眞賴等がゐる。

これらの新題の歌は今讀んでもなかなか興味がある。例へば、「外婚」といふ題で、

蟹もじの横走りたる夷どもはいち早き代のみさかならまし　三田葆光

大和に眞柱ししぬき西の海に夷まく世ともなりにけるかな　加部嚴夫

天の下したしみ廣くなりにけり外國びとに婚嫁ゐるして　石川眞言

今はただ唐も大和もうちまじり情のつゆに生ふるなでしこ　島田竹介

などその一例である。

この新題で歌を詠むといふことは、明治以前からあつたことで、例へば八田知紀の「しのぶぐさ」第一編に、「人々遠目鏡もてみればおのれもとて見る」と詞書のある歌、それから「しのぶぐさ」後編に、太陽暦、蒸氣船といふ題のある歌などが即ちそれである。

「昭憲皇太后御集」にも、この新題を詠ませたまうた御歌がなかなか多い。例へば、洋學、淺間艦、男女同權といふことを、紙にて調練するさまのいさましきを見て（以上明治十二年）。騎兵、訓盲院、水雷火、香水、油畫、寫眞、觀兵式の日に、新聞紙（以上明治二十二年まで）。煙草、軍人、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、樂隊、金鵄勳章、小學校、活人畫、將棊、華族、地方官、巡査、振天府、植物温室、電話、觀艦式、汽車、凱旋、撃劍（以上明治三十九年まで）。かういふ御歌は、明治三十九年迄であるから、既に新派和歌の勃興した後であるが、新派和歌の興るずつと以前からの御試であつたのである。税所敦子の歌集「御垣の下草」などを見ても、この新題の和歌が散見するのである。

この「開化」といふ語が明治の初年から、いかに人心に快く響いたかといふことが略推察するに難くはない。最も保守的であるべき歌人が、折に觸れて、この新題の歌を試みたといふことは、正に、明治三十年ごろを起點として嶄然として興つた新派和歌運動の前驅として看取してもいいものとおもふ。

そんなら、なぜ當時、和歌の新運動が起り得なかつたかといふに、これはただ「開化」といふ事柄に興味をおぼえて、それを自己のものとして意識しないやうな境迄には達してゐなかつた。例へば、「開化問答」で、「電信機とはエレキトルの氣力に依りて、音信を通ずる仕掛でござる。このエレキトルといふ氣は天地間の萬物に備つたる一ツの氣にて」などといふ、興味本位、啓蒙本位であり、例へば八田知紀の作、

太陽暦

天づたふ日の若宮の月なみを吹きおこしたるみよの風かな

蒸滊船

龍の馬に翅をそへて行くばかり足とき船もある世なりけり

の如きも、太陽暦、蒸滊船といふものの説明に過ぎないのであるから、題は新題であつても、その作歌の態度は從來の題詠の程度を超え得ず、從つて依然として古いのであり、新派としての運動を起すまでに至らなかつたのである。

短歌が、ほかの漢詩漢文、新體詩、俳句などの新派から後れたのは、單に作者がゐなかつた爲めとは速斷し得ない。これは形式・用語の關係があるのであるから、私は、寧ろ新體詩などよりも早期の、この新題和歌の試みといふものを可なり重要に觀察しようとおもふ。

「新題詠歌捷徑」

下田歌子の「新題詠歌捷徑」(明治三十四年、三省堂)は、ずつと後の發行であるけれども、これは、「開化新題歌集」の名殘とも見るべきもので、なかに簡單な作法やうのものがあり、それは今から見ればなかなか興味がある。

又其形狀效用等を述べて、げに斯うやうの物なるべしと、其れ知らぬ人さへ諾はれぬべきさまに詠むべし。例へば、新聞紙を詠むとて、「世の中の昨日の淵もあすか川今日みなかみにあらはれにけり」と言ひ、エップロンと言ふものを詠むとて、(エップロンとは細き革を、靴の裏に廻らし、これをズボンの裾につけたる、鈕やらの物にかくるにて、乘馬などする時裾のまくれあがらぬ爲に用ふるものなり)。「一筋のめぐれるかはの無かりせば裾野のはぎもあらはならまし」と云へる類ひなり。

新聞紙の方は、「けふ川上にあらはれにけり」と、『けふ皆紙にあらはれにけり』に云ひ掛けたものである。又エップロンの方は、「裾野の萩」と『脛』とに云ひ掛けて居る。卽ち、題は新しくても、詠みぶりは古いのであるから、畢竟發展せずにしまつたのである。

大八洲學會

「大八洲學會雜誌」は、明治十九年六月、本居豐穎、久米幹文、小杉榲邨によつて起された和歌の雜誌である。幹事、佐野久成、田所千秋、田村利用、西野古海、魚住長胤、の五人。

なほ贊成諸君として次の諸家の名をつられてゐる。千家尊福、福羽美靜、高崎正風、川田剛、田中頼庸、丸山作樂、木村正辭、小中村清矩、南摩綱紀、黑川眞頼、矢野玄道、栗田寛、物集高見、內藤恥叟、伊藤圭介、鈴木重嶺、大澤清臣、飯田武鄕、井上頼圀、渡邊重石丸、松田明義、鈴木眞年、松野勇雄、塙忠韶、菅政友、伊藤祐命、師岡正胤、大畑弘國、古川豐彭、佐佐木弘綱、鈴木弘恭、海上胤平、阿部眞貞、林甕臣、大關克、有賀長隣、藤岡好古、三輪田高房、柴田花守、宮地嚴夫、岡吉胤、七星正泰、小出粲。

この雜誌は長く繼續し、例へば明治三十七年十月二十日發行が、第二百二十號になつてゐるのであるから、新派和歌の革新運動が起つてからも、相當の勢力を持續してゐたものである。久米幹文の書いた、大八洲學會の微意といふ文中、「おのづから活きたる人の世なれば、盛衰といふもののなきことを得ず、されば、おのもおのも君をあふぎ、國をおもひていよいよ榮えむことをはからずば有べからず。たとへば魚は水に住めども水あることを知らぬが如く、平常に見なれきなれて、自國の美をさとらず、かへりて他國のものをのみめでくつがへるは、世の

人情の常なり。但しこれはむかしよりの弊習にて、漢學のわたりし時はみな支那をまねび、佛教のわたりし時はすべて印度をまねび、今また西洋學のわたれれば何事もみな西洋にならふ。これを時々の流行とやいはむ。善き事をならふは惡きにあらねども、同じくは自國のことを明らめのちに他國にうつり、わかおやをたふとぶあまりに、ひとのおやをうやまふやうにあらまほしきことならずや。果して然らむには同感におはする全國の有志諸君、互に相扶けて、この會いよいよ盛大にいたらむ。さては東洋文明國の光を四方にかがやかさむこと遠きにあらざるべし。あはれあはれ吾輩足をつまだててその期を待ちわたらむとす』云々。

これは西洋開化の思想に對しておこつた日本流思想で、謂はば反動運動とも看做すべきである。一方は、急進的の新題を詠ぜようとし、また斯ういふ保守運動もあつて、和歌壇も相交錯した狀態で進んだのである。

明治二十四年に、この會の賛成員の一人海上胤平が、「中正日報」「報知新聞」等で、この會員の主役をつとめる四五名の歌を評し、それをまた幹事の魚住長胤が、「大八洲學會雜誌」第六十六號で辨じ、二たび、胤平の「大八洲學會詠歌道正論の出版となつたりしてゐる。胤平のことは別に論ずる。

なほ、この會から、「大八洲歌集」上下二冊が明治二十二年十月に發行せられてゐる。これには物故した作者もゐるが、大體當時のあらゆる流派のものを比較的公平に採錄してゐるから、當時の作者を知るうへに便利である。

西洋僕從

中村秋香の「新體詩歌自在」はずつと後の出版であるが、その序文の一節に、「或はいふ。西洋の抒情詩の如き、專ら男女間戀愛の情をうたへり。我國の抒情詩豈ひとり之に違はむやと。嗟夫これ何等の言ぞや。西洋の名に眩惑して利害得失を問はず、一に之に僕從したりしは明治十年代の事なり」といふのがある。末行最も興ふかく、秋香は明治十年代の事情を知つてゐたのである。

西村正三郎の「歌學教育論」(明治二十一年)には西洋の詩論が引いてある。『詩人が其心に感じたる情なければ、詩人たるに由なしと雖、其情を言に發するにあらざれば亦歌謠たる能はざるなり』。また、「余曾て龜井戸の梅園に遊びて臥龍梅を見たるに、單册に、臥龍梅風を引いたかはなだらけ、といへる句を書して下けたる者あり。此の如く、不潔の言語を用ゐる時は、梅花を見て生じたる美情をも爲に傷害せらるるが故に、言語は實に歌學的の用を爲さずと云ふべし」云々。この文中、美情は、より洋語脈から來てゐて、少しくそれたものである。

大熊辨玉

僧辨玉は橘守部の系統に屬する歌人で、長歌が得意で、特に新題の長歌をさかんに作つてゐる。家集を「由良牟呂集」といふ。今左に「由良牟呂集拾遺」から數首の短歌を抄出したが、調べにどこか鋭いところがあつていい。明治十三年四月寂。年六十三。

高千穂の山ほとゝぎす神さびて八重棚雲をわけつつぞ啼く

月清み河原遊びの笛の音に鮎もふしどをいくらかへけむ

月見つつ野邊にいそぐ法の師も萩見がへりの群にまじれり

寝られねば月の夜すがらすがきて覺えなき手もつくしけるかな

さしぐしの曉ぐもの亂れよりまがみの原はしぐれそめけり

あさびらき火筒のけぶりたきあげし異國
船の跡しぐれつつ

近藤芳樹

近藤芳樹は本居大平の門に出て、村田春門にも學んだ。明治になつてから宮内省にも仕へた。明治十三年二月二十九日に歿した。年八十。今、「寄居百首」から數首抄出するが、歌風はさう優れてゐない。恐らく學問の方が歌よりもよかつたのかも知れぬ。

去年よりもはげしとわぶる山窓の嵐にゐ
める梅のあはれさ

よそにのみきぎしの聲のあはれさも燒野
の畑わけてこそ知れ

清水わくところも見ゆる山本のさとのし
ひ原夏たちにけり

わが宿ははしゐの床もおくふかし楓のわ
か葉軒をおほひて

大ゐ川さ霧流れてほのぼのとしらみ行く
瀬にかじか鳴くなり

第三章　第三期

この第三期は、明治二十年前後から、明治三十年前後に至る約十年間をいふ。明治二十年にならうとする頃から、いろいろの論議が行はれた。一方、文明開化論に伴ふ、その反動國粋論として、國學興隆の論となり、それも單一な興隆の論ではなく、改良せねばならぬ國學興隆の論であつた。從つて和歌改良論も出で、文章改良論も出で、歌論教育論も出た。その論は單行本として出たのもあり、新聞雜誌を利用したのもある。

新聞雜誌はさういふ論に興味を有つやうになつたから、駁論、再駁論を載せることになり、論戰が盛になつた。この議論の續出は、實行を豫想せしめるものであるから、ぼつぼつ實行者を見るに至つた。約めてこの期間のことを云へば、議論の時代と謂つてもいいのである。

さうしてゐるうちに日清戰役がおこり、皇軍連戰連勝して終末を告げた。和歌革新の運動はそれ以後に起つたのである。

當時歌壇の大家の作は見本として載せておいた。當時歌壇の主潮流は未だあいふものであつた。そして、何とかせねばならぬといふ氣運に向つて居りながら、それを奈何に實行すべきかを知らない期間なのであつた。その間に禮嚴とか、丸山作樂とか、愚庵とかいふ稍特殊な歌人もゐたから、それにも少しく言及する。それから此處に排列せしめる舊派歌人が數名ゐる。

さういふ順序で、資料をならべてみると、おのづから、この第三期の特色が分かるとおもふ。

この期間に出た和歌國文の書のうち、落合直文・小中村義象・萩野由之の「日本國文全書」と、佐佐木信綱の「日本歌學全書」とは特筆すべきものである。兩叢書とも明治二十三年から刊行しはじめた。

「和歌改良論」其他

萩野由之の「和歌改良論」は小中村義象の「國學改良論」と共に、「國學和歌改良論」といふ題僉で、明治二十年七月、吉川半七から出版になつた。小中村義象も、「只數千年來陳腐ノ設題ニ基キ、三十一文字ヲ並列スルヲ以テ足レリトナシ、今ハ跡方モナキ延喜時代ノ名所等ヲ其儘ニ詠ミナシ、歌よみは坐して天下の名所を知るナドト高慢自居リ、風流士ヲ以テ自ラ任ズト雖、其實柔惰蕩子タルニ過ギザルナリ」とその「國學改良論」で論じてゐる程である。

今次に萩野由之の文章の處々を抄記してその一般をうかがはう。

○また、國學者と稱する人々は、縣居・鈴屋二老の唾餘を嘗めて、歌調の新古を爭ふか、さなくば古代語の詁解に勞するのみなり。二老は實も高手なれど、本領は歌にあらずして歴史制度にあることを知らでやあるらむ。其門流と稱しながら、ほのぼのと明石の浦に彷徨ひ、鳥鴨の浦に浮かれて、自ら滿足するは心ある人の片腹いたきのみかは、二老も所謂高天原にて口惜くや思ふらむ。二老の時は我と競走するものは漢學のみなりき。今は高尚なる歐米の諸學科あり。これと進歩を競はむ事、難きが中の難き也

○萬葉集には萬葉時代の事物と詞とあり。ただ吾邦のみならず、支那の古歌にも、西洋の古詩にも、皆自其事物と詞とあるなり。故に詩經を讀みて、多く鳥獸草木の名を識るといひ、法馬の詩を讀めば、古代の歴史を知るといへる、是皆當時の事物と詞となるが爲なり。されば今の事物によりて感動せし情は今の詞にて述ぶべき道理なり。此道理を推し考へて、陋習を破り、新面目を開くことを勸むべし。さすれば、歌も眞の有用のものとなるなり。

○古人の詩は必實況に對し、實事有つて詩興より出る。故に其意皆實なり。後世の詩は題を設けて作る。故に其意多くは虚僞なり。是を無病呻吟といふ。呻吟はをめくなり。和歌も古の人皆實意にて讀めり。後世は題を設けて讀む。故に多くは虚僞の詩なり。

○歌は、題詠になりてより品下りしは勿論なり。されども初は題詠より入るも一の方便なり。但古今集の舊套を脱して、現に耳目に觸るる事物を重にすべし。

○物の名は、電信にもあれ、汽船にもあれ、字音にて呼べるものは、其儘に讀み入るべきことなり。洋語なるも亦然り。

かくの如きたぐひである。『今は高尚なる歐米の諸學科があるからそれと進歩を競爭せねばならぬ』といふあたり、歐化の反動として起つた國學の論にかういふことを云つてゐるのはなかなか興味がある。また、全體の調子が、古人の唾餘を嘗めずに、どしどし新しきに附けといふ結論となるので、論としては筆鋒も鋭く、論理も立つてゐるが、一つの運動とならなかつたのは、制作の實行が伴はなかつたためである。

なほこの期間に附記するのは、物集高世の『歌學新論』、末松謙澄の『國歌新論』などもあり、みづから實行は出來ないが、いまの儘ではいかぬといふ氣持のあつたことを知るに便利である。この二書を私はいまだ讀まずにゐる。

林甕臣も夙に『和歌改良論』を書いた如くである。私はその論を見ないが、海上胤平の文章中によつて知ることが出來る。

林氏早く和歌改良論を出せり。其文に歌はこむづかしきことをいふに及ばず云々と書て、改良歌の自詠數首をあげたり。其書は火災に燒失せて心にもとめねば、おほかた忘れたり。まづ其一ツ二ツをいはむ。『きらきらとやぶれ障子に月さして風はひらひら狐きやんきやん』『いねむりの夢ではないが時鳥ほんとうに聽くあれあの聲は』かく詠むべきものぞとて示されたり。數首皆此體なり。是氏が得意とする所なるべし。

また、『火桶いだき北窓とぢて籠りしはきのふなりけり鶯の聲』といふ甕臣の歌を評し、

結句の鶯は突然なり。藪から棒のやうにはあらずや。改良論によれば初句火桶いだきとあるは、詞みやびにて、いやしきを好む氏が口つきにも似けなしといふべし。胤平改良歌のよみざまは知らねど、初句を

『火鉢だき』、二の句を『北窓しめて』、三の句を『居たりしは』、四の句を『きのふであつたに』、結句を、『鶯がなく』としてはいかが。『火鉢だき北窓しめて居たりしはきのふであつたに鶯がなく』。改良の歌はかくよむべき趣意ならずや。鬼神も笑ふべし。

これで見ると、甕臣は口語歌のやうなものを作つて、「和歌改良論」の見本としたものの如くである。

佐佐木氏の著書

「明治開化和歌集」は佐佐木弘綱の編輯に係り、上下二冊で、近藤芳樹の序文をつけ、七百七十八人の作を載せてゐる。明治十三年の發行の如くである。「開化」の名を冠せたところに興味がある。

「千代田歌集」は佐佐木弘綱撰で、佐佐木信綱の補充したものである。第一編は明治二十三年一月、第二編は同年十二月に發行になつてゐる。博文館發行。

「明治歌集」。佐佐木信綱の撰三冊本で、明治二十七年博文館から發行になつた。これには物故した曙覽とか廣足とか知紀などの作も載つてゐるが、可なり若い作者のも收録してゐる。

上の如き選歌集は、「和歌呉竹集」とか、「鰒玉集」とか、「大江戸倭歌集」のたぐひであり、手引草の域を出てゐないが、後人が堪忍して讀めば、歴史的に幾つかの面白い事柄をひろふことが出來る。そして、新派和歌の興るまでの作者をもかういふ書物でひろふことが出來るので意味がある。信綱のかういふ選歌集は、新派のおこつてからの「やまとにしき」「玉川集」「玉琴」などの前驅をなすものである。

「現在の名家」

明治二十四年の「早稻田文學」第三號に、「現在の名家」と題して歌の見本が載せてある。これは當時の歌壇全般を見るのに便利であるから次に抄録する。序に、「明治の大御代となりて諸般の學藝起りたれば、和歌も朝野共に行はれ、其の名の聞ゆる人また多し。この人々はおほかた折衷の主義を取れるが如く、その說を聞くに、多くはただ自然にあり、所謂見るもの聞くものにつきて云ひいづべしなどいふ。然れども、なほ其の實際につきてこれを味へば、其の基く所もとより一樣ならず。其の證を見むとおもはば諸名家の歌えらみてまゐらせむ」といふのも興深い。

○　　　高崎正風

むら鴉ねぐら爭ふ聲たえて月こそのぼれ山松のうへに

打ちゑみて膝にはひよるかなしさは我子人の子變らざりけり

○　　　福羽美靜

うちつれてかげも走ると見ゆるかないそぐ雲間の冬の夜の月

世の人は皆はらからよ天地の神をば共に親とおもへば

○　　　海上胤平

松浦がた浪路の末のありあけにもろこしかけてかすむ月かな

しほげたつ灘のあら浪さぐくみて鯨ゆく見ゆ眞熊野のうみ

○　　　小出粲

軒に生ふるしのぶのうら葉朝ゆれて更けたる月に秋かぜぞふく

あしひきの山路はるかに鳴く鹿のこゑぞ聞ゆる夜は更けぬらし

○　　　鈴木重嶺

小松ひきすずな摘みにし野べに來て同じ名におふ蟲を聞くかな

分けゆかば宿れる月や亂れなむ踏ままく
をしき野路の露原

○　　黒川眞頼

櫻ちる春の夕の雨の音にもの思ひをれば
蛙なくなり

明けそむる池のおもだか葉がくれに影ほ
の見えて水雞なくなり

○　　本居豐穎

若葉うつ瀧の音きよし螢とぶ島山めぐり
月も待たばや

船窓にみゆる高ねや浪ならし昇れば下る
八重の海さか

○　　久米幹文

吉野川氷ながれて落ちたぎつしらゆふ花
に春風ぞ吹く

卯花の波もてゆへる我宿のまがきの島は
夕やみもなし

○　　松波資之

白ゆきに隱れたるより顯れて見ゆるは松
のみさをなりけり

しらぬまに妻子はいねて玉くしげ月とふ
たつになりにけるかな

○　　黒田清綱

なにはづを今朝立ちくれば住よしの遠里
をのに雲雀なくなり

高殿に登りて見れば久かたの月の都は
隣なりけり

右は世に大家と稱せらるゝ人を擧げたるなり。なほ世には聞えざる名家多けれど省く』とある。この見本は、兎に角選りすぐつた當時の十大家で、拔いた歌も皆相當に骨折つたもののみである。また、この序に、おほかた折衷の主義云々の語があるが、この評語も棄てゝおきたい。約めていへば當時の歌壇は、大同小異の此等の歌風で占領してゐたもので、曙覽のやうな、元義のやうなものは絶えてなかつたのである。

そして、改良論は云はれても、どう實行したならばいいか、その實行に取かかるものがゐなかつたのである。さういふ時代も、歷史的發展の徑路から看れば、やはりおもしろいのである。

和歌作法書

落合直文著「新撰歌典」は明治二十四年十一月博文館發行で、著者の署名は一人だが、實は増田于信、萩野由之、小中村義象三氏との共同爲事であつた。これは序文にも書いてゐる。本書は初學者向のものであるから、別して新傾向を鼓吹するやうな文句は見えてゐない。ただ、序文の一節に、『歌よみに數派あり。眞淵派といひ、景樹派といひ、なにの派といひ、くれの派といひ、各好むところを以て相爭ふがごとし。そは甚だいはれなき事といふべし。眞淵翁の歌といへども、よきもあらむ、あしきもあらむ。また景樹翁の歌といへども、たくみなるもあらむ、つたなきもあらむ』といふこと、また『われわれは特に長歌を振ひ起して、かの無味なる、かの蕪雜なる新體詩を退けむとす。』といふあたりは編者の意圖を察することが出來る。

佐佐木信綱著「歌のしをり」。明治二十五年四月博文館發行。本書には、新派和歌興隆に至る暗指を與へるやうな特色はないが、親切丁寧で、和歌に關するあらゆる事項を網羅してゐるので、初學者は本書によつて便利を得たること多大であつた。和歌の道を盛にした點では、本書の教育的價値を見のがしてはならぬ。

中村秋香「新體詩歌自在」。明治三十一年十一月博文館發行。これは既に明治三十年を超えた出版であるが、便利のため類書をここに記した。本書は、短歌の入門書と云はむよりは、新體詩の入門書である。そして序文に和歌の變遷をのべ、新體詩に及んで、一々その批評をしてゐるのは、耳を傾くるに足るものである。そ

の最後に、彼の長歌短歌の如きも、亦之に依り漸次其弊風を脱却して天性に復し、謂ゆるみるものきくものにつけて、心の誠をいひいだすものとなり、相提携して吾が國の徳性を涵養する唯一の機關となるべきなり。」とある。

。。大和田建樹著「歌まなび」。。。明治三十四年四月博文館發行。これも新派和歌運動の起つてからである。本書もなかなか親切な點があつていい。「字音と外國語」「直譯の言葉」のなかで、古來から直譯して、祇園（かみのその）、石竹（いしたけ）、如意輪（こころの如く輪）、寂光都（しづかなる光の都）、虚空藏（むなしき空にをさめ）、法輪寺（のりなるてら）、雲林院（雲の林の寺）などのあつたことを示し、鐵道（まがねぢ）、大西洋（西の大海）、紅海（くれなゐの海）、電信（稻妻のおとづれ）などは許していいが、葡萄酒（えびかづら酒）、麥酒（むぎざけ）、米國（こめぐに）、巴里（ともゑの里）などは用ゐて惡いといふあたりはおもしろい。

「柵草紙」

「柵草紙」は明治二十三年二月に發行になつたが、その和歌方面のことは鷗外自ら、「答無名氏論柵草紙書」で書いてゐる。「漢詩をば東郭、落合君閲せられ、和歌をば桂園派の耆宿たる松波遊山大人選び給ひき。これより後は松浦辰男大人も一臂の力を添へむとのたまへり。連歌、俳諧もをりをり取り候ひき。新體詩といふものをも、あながち斥くるにはあらねども、其様ととのへりとおもはるる者、多く獲がたきを奈何せむ。かく風格の未だ定らざるものに對しては、特に選拔を嚴にせざるときは、みだりになり、無作法になり申すべし。世間の雜誌中には、所謂、新體詩家の「アナルヒスト」跋扈するは云ふもさらなり。和歌といへども、手爾遠波、假名遣だにととのはず、漢詩と云へども、平仄韻法の違へるさへ候とか。柵草紙は、これ等の弊には今までも陥らず、今より後も陥らざるべく候」云々（明治二十六年六月）。

いま、卷を追うて大體和歌の方面を調べて行くに、「柵草紙」に歌を載せた人々は井上通泰、佐藤元萇、松波資之、丸山正彦、松岡國男、足立正枝、山田美妙、落合直文、千葉胤明、中川恭次郎、三浦千春、そのほか、前田利鬯、北小路俊親その他であり、田山錄彌（花袋）も紅葉會の一人として名が見えてゐる。

おのづから涙ぐまれぬ二度はあはれぬと
いふ別ならねど　松波資之

もみぢばの錦着裝ふ秋山の下炎處女の
にほひよろしも　丸山正彦

音たてて蓮のかれ葉を吹く風に鷺の簑毛
はさかだちにけり　井上通泰

風をいたみ磯うつ波に夢さめて千鳥の聲
もきく夜なりけり　落合直文

うごきなく見えこそ渡れめがね橋よろづ
よかけて誰が造りけむ。　同人

和歌の雜誌

。。雜誌「歌學」。第一號は明治二十五年三月十日に出で、井上通泰、井上哲次郎、落合直文、小中村義象、中村秋香、阪正臣、金子元臣等の文章を載せ、兼題の歌もあるが、讀物がなかなかある。特に、直文が、歌學者の偏備を論じたり、萩野由之が和歌及新體詩歌を論じて、ダンテ、ミルトンをいひ、「今日、歌人の弊孔は、二に止まらずといへども、約していはば、古習を墨守して、進むことを知らざるにもとづけり」などと云つて、何かしら革新の必要あることを暗指したり、井上哲次郎が漢詩和歌の將來を論じて切りに西洋人の名を出したりして居る。

この雜誌は、和歌は皆桂園派の域を脱し得ないが、議論には見るべきものが多い。特に、萩野

由之のものは、前出の「和歌改良論」よりも一歩進んだものと看做すべきである。いまは煩を避けて、その一つ一つを摘記することをやめるが、この雑誌は、議論に於て、既に一部新派の領域に入つたもので趣を呈して居る。

歌は、高崎、小出、海上、黒田、松波、小中村、阪田等のものが載り、高崎正風の、「うちあみて野にはひよるかなしさはわが子人の子かはらざりけり」は第六號に載つた。

この雑誌は大八洲會雑誌以後出たもので、新しいところを行かうとしたものである。

雑誌「明治の歌」は明治二十五年十一月二十五日第一號を出し、加部嚴夫が主幹兼編輯者で、多くの歌を載せてあるほかに、研究もの、考證等をも載せてゐる。

○　　　　加部嚴夫

をぎの葉に風こそさわげあすたたばうしろの山に栗ひろひてむ

はふつるのなきがごとく朝顔はさむくなるまでとき榮えたり

雑誌「歌」は明治三十七年七月に、大日本歌道奨勵會から出た歌の雑誌で、新派の歌があのやうに盛になつても廢刊せずに續いてゐる。歌風は全く、所謂御歌所流で、例へば、大正十五年六月二十五日發行の第二十四卷第六號には「水兵」といふ五月二十日御會詠進寫抄を掲載してゐる。ただ元とかはつてゐるのは、歌會の欄に、竹の下人（猪俣）の香川景樹に對する痛罵の言葉、『歌人たけたけしとは景樹が事なり』といふのを載せてゐるあたりは、時勢の變化と看做していい。

雑誌「わか竹」は明治四十一年五月に、大日本歌道奨勵會から出た歌の雑誌で、「歌」の大町左近の編輯であるが、これは井原豊作の編輯にある。

なほ、後日になつて、此等の會から、和歌入門の書がいろいろ出版されてゐるが、煩しきがゆゑにここには云はない。

雑誌「太陽」

雑誌「太陽」の發刊は、明治二十八年一月である。この雑誌は、あらゆる方面に渉つて、日清の役大勝後の國民の指導者を以て任じてゐたものであり、文苑欄には漢詩、新體詩、和歌を載せて居るが、和歌は宮内省派の舊派歌人の作が大部分を占め、それに佐佐木信綱とその數名の門人の作が載つて居るに過ぎない。その信綱の作にしても次の如きものである。

野に出にふりつむ雪もますらをのをたけ心は埋まざるらむ

故さとの梅さく國にかよふらむみ雪ふる野のますらをの夢

こま山の竹のみ雪殘りなくとけむはいつの春にかあるらむ

即ち、和歌革新の先覺者の一人であつた信綱の歌にしても、昔の如き程度に過ぎない。後年「太陽」が與謝野寛の歌を出すやうになつたが、それも「明星」の歌人の末期頃からである。要するに「太陽」は歌の専門の雑誌でなかつただけ、新派和歌の興隆に向つては貢獻する所が尠かつたと言つていい。

和歌に就きての説

明治二十五年二月の「早稲田文學」では、「和歌に就きての説くさぐさ」といふ文を掲げて居る。『新體の歌の興らむとする今日に當りて、和歌に關する諸家の考を掲ぐるは蓋し有益の事なるべし』といひ、

近ごろ落合直文、井上通泰、萩野由之の三氏を訪ひ三氏の持論をもほぼ聞き得たれば

その大略をここに錄すべし。聞くところによれば、落合・畠山の兩氏は共に萬葉の古風を宗とすれども又強にこれに泥むものにあらずとか、所謂折衷派に屬する人々なり。井上氏は景樹派の流を汲みて和漢洋三學を兼ねたりといふ名高し。

「新體の歌の興らむとする今日」といふ句もおもしろく、當時、新しい考をもつてゐると目されてゐる三人を選んだなどもおもしろく、當時人心の傾向をうかがふことが出來るのである。

「現今の和歌」といふ條で、「おしなべていへば其姿鄙しく調卑くしてただ所謂一時の興を詠むるに過ぎず、おほらかにして調高く吟詠の際そぞろに同感を催すが如きもの少し」(落合)。「當時の歌には二種の弊あり。第一に題を限る事、第二に意を限る事これなり」(井上)。これらは、當時の歌壇、すなはち舊派の歌に向つての意見であること無論である。

そのほか「長歌振興策」とか、「長歌と今樣との比較」とか、「新體詩」に就いて論じてゐるが、井上も、落合も新體詩については少しも同情してゐない。「井上氏は歌の自然に背くといひ、落合氏はまた排難攻擊して餘す所なし」と云つてゐるなどは、明治二十五年ごろの國學者らの新體詩に對する態度が分かる。なほ、萩野由之の新體詩論(「歌學」)をも參考すべきである。

新聞雜誌の歌論

明治二十七年五月頃は歌論の新聞雜誌に出るものが多かつた。その代表的なもの二三を抄記してその當時のおもかげを彷彿たらしめようとおもふ。

與謝野鐵幹「亡國の音」(二六新聞)。これは一名、現代の非丈夫的和歌を罵るといふので、「大丈夫の一呼一吸は直ちに宇宙を呑吐し來る。既にこの大度量ありて宇宙を歌ふ、宇宙即ち我也」といふ論であつて、高崎、小出、植松、黑川、福羽、本居、林、阪正臣等の歌を細評し、總評して、「規模を問へば狹小、精神を論ずれば纖弱、而して品質卑俗、而して格律亂猥、余は此類の歌を擧けて痛罵百日するも盡きざるなり。閨房の婦女、國を危うする者は大丈夫の元氣衰へて女性之に克つにあり。今や上下擧つて此類の女性的和歌を崇拜する其害毒果して如何」云々。

巖畔生「和歌論」(日本)。長篇であるが、論中には、從來の和歌の範圍が餘り狹隘だから、泰西の詩歌を自由に繙き得る今日では到底滿足することが出來ないといふこと、また、萬葉の雄偉崇高の變じて華美纖巧に流れ氣力を失ふに至つたのは、題詠、歌合にあつたこと、また、和歌の蕃盛時代は衰微時代であつたこと、八代集以外のものはただ先人の糟粕を嘗めたに過ぎないこと等である。

本居豐穎「歌談」(皇典講究所講演)。これは舊派の歌人であるから、穩健説であつて、論はそれに相違はないが、革進の氣運の向いてゐる時であるから、やはり鐵幹の「亡國の音」のやうなものの方が青年の心に響いたに相違ない。併し舊派の歌人も、それに對抗して論じてゐるのは、歌壇全體を緊張せしめるのでいい氣持である。

新聞彙報

明治二十七年、「二六新聞」が和歌を募集した時に、選者によつて三種に區別した。

第一種　海上胤平
第二種　落合直文、小中村義象
第三種　與謝野鐵幹、鮎貝槐園

明治二十八年一月の「早稲田文學」は、明治二十七年の文學界を論じ、日清戰爭のことにも言及してゐる。

最後に、昨年末にほの見えし最も祝すべき一大現象を記すべきあり。他なし眞正の國文學卽ち國民的文學勃興の兆候これなり。只其の兆のみ、而も尙大に賀すべきにあらずや。其の最大緣は何ぞ。之を言ふを要するか。征清軍の連戰連捷及び之によりて全世界に對する國民的大自信の煥發是れなり。夫れ大捷の後に大文學の興起するは古來列國の史の證するところ、蓋し大文學を成就せむ國民にして初めて能く大戰捷を成就し得べければなり。吾人は信ずらく、我が新國文學興隆の運は今日の大戰捷によりて催促せられたるや疑なしと雖も、其の主なる素は已に數年前に成されたりと。

「めざまし草」

「めざまし草」も森鷗外の編輯で明治二十九年の一月にその第一號が出た。和歌は主に佐佐木信綱のものが載り、「朝まだきうたふ雲雀の聲よりや野べも山べもうち霞むらむ」といふ如きものであつたが、號數の進むにつれて、信綱の歌も幾らかづつ變化した。信綱はそのころ、「生繁るいばらからたちかりそけて歌の直道をいつかひらかむ」などといふ歌を作つてその意氣を示して居る。

十月號には、鐵幹の「秋かぜに遠くは行かじふる鄕の母のおくつき荒れまく惜しもまたらちねの母をおくりてその山に物おもひをれば秋の風ふく」といふ二首がある。これは「天地玄黃」に收めたものである。

「めざまし草」にはなほ、井上通泰、北里闌、三浦千春などの歌が載り、俳句は虛子が選んで子規一派のものが載つてゐる。

歌界漫談

明治二十九年春の新聞記事抄記。

(一) 近年斯道の盛衰を尋ぬるに、維新前の歌界は迚も今日の盛に及ばず。昔は發會など二三十人が精々なりしに、今は六七十人の大會を見ることあり。

(二) 今一つ今日に至りて盛なるは女流に斯道の行はるることなり。社中の長きは中島歌子(萩の舍)、鶴久子(鶴園)を始め、川村重子、松乃門三艸子、服部いそ子などなり。

(三) 諸大人のうち、社を設け月並を催せるは、鈴木重嶺(翠園)、立花道守(椎ケ本吟社)、佐佐木信綱(竹柏園)、江刺恒久(菊の舍)などなり。

(四) 舊大名仲間にも和歌流行す。伯爵松浦詮(肥前松浦)、子爵諏訪忠元(信濃諏訪)など折々歌會を催す。なほ、蜂須賀茂韶(阿波)、前田利鬯(加賀)などあり。

(五) 月卿雲客の中、近衞老公、嵯峨實愛、久我建通。

(六) 御歌所の一派は頻りに今の俗語を用ゐる傾見ゆ。其說に云。今日の俗語は百年後の雅語なりと。然れども雅言俗語其當時よりして自ら別あり。實際昔の俗語にして古人の歌に用ゐ居らるるもの幾何あるべきかと反對派はいふ。

(七) 高崎正風子は新雅言を作り玉ひぬ。「むしけ車」是れなり。何ぞと聞けば蒸滊車を譯して斯くは三十一文字に用ゐらるるなりとぞ。

(八) 今の歌人中博識を以て推さるるは井上賴圀なるべきか。云々。

「早稻田文學」記事

明治二十九年七月の「早稻田文學」の彙報に、「和歌界。新體詩評の盛なるにつれて、和歌といふもの亦た所々に見ゆ。和歌の到底今日の新氣運に伴ふに非ざれば振興の望なきこと、從

來舊樣を守るものと、新語、新事物に新感想をやらむとするものと、共に利弊あること、形と想と調和せざるもの多き事等は早くより人の唱ふる所、事々しくいふまでもなけれど、近時佐佐木信綱氏の歌、やゝ此の難關を排し得むとすと說くもの、所謂専門歌人ならぬ文學者間に多きが如し、帝國文學は氏と鐵幹とを揚げて、「是間にありて、聲調の流麗なる點において、思想の奇拔なる點において、やや見るにたるべきは佐佐木信綱と與謝野鐵幹との諸什なり。信綱氏の歌は、清新といふまでもなけれど、歌ふところの題目は、從來の歌人に比してやや廣きを覺ゆ、聲調にいたりては、さすがに、長年の修練だけありて、流麗婉轉、つゆとどこほるところなし。」といひ、新小說の時報また「大人が新しきふりの歌にはうなづかざる人も少からざるやうなれど、抱負見るべく時世の變察すべしとて、氏と中村秋香氏とを和歌界新體の例に引けるなど、著き例なるべし。』云々。

これで見ると、佐佐木信綱、與謝野鐵幹、中村秋香などが新しい歌人と目されてゐたことが分かる。すでに和歌革新の序幕期に入つたので、與謝野鐵幹の第一歌集「東西南北」は、早稻田文學」のこの記事の出た月に既に出版になつた。

次に、この期間に於ける歌人の代表的なもの數人を選び、その歌風數首をかかげ、他の歌人は前に掲げた和歌の見本に讓らうとおもふ。

高崎正風

高崎正風は長く宮內省に奉職し、御歌所長としての功績は沒すべからざるものがある。明治四十五年二月二十七日歿。年七十七。今左に抄したものは、ある選集に據つた。これは後日、全歌集を讀むつもりである。歌調は、のびて丈の高いところがあるが、いかにしても出られない障壁があつたごとくである。

ひかりなきおぼろ月夜に見ゆるまで木のもと白く梅ちりにけり

呉竹のはやしがくれの離れ家にふして書みむ夏は來にけり

風吹けばただよひながら蓮葉のうき葉の露はこぼれざりけり

夜なれば谷の深さは知られねど螢のかげのかすかなるかな

冬の日に煙立ちにし山の井のみづこそ夏はつめたかりけれ

母の世にありて見しより數ふればわが代も久し秋の夜の月

光なき月こそのぼれ足引の山よりうへに霧やたつらむ

北山の貴舟のおくの初み雪都までこそさえわたりけれ

なるかみの音かと聞けば川波の石をころばす響なりけり

「今古歌話」に云ふ。小村壽太郎、講和委員として、新橋を立つとき、正風、名刺の裏に、『御涙をのみて宜しみことのりつらぬき通せいのち死ぬとも』。この歌はいい歌である。

小出粲

小出粲は明治十年以來、宮內省に奉職し、御歌所寄人。明治四十一年四月十五日歿。年七十六。家集は「くちなしの花」四編あるが、明治四十二年七月、「小出粲翁家集」三册出版になつた。歌風が輕妙で、新派和歌の興つた當時は、新派歌人間にも評判がよかつたが、今見ると、稍輕過ぎるところがあるやうにおもふ。

おほくらの入江とよみし水鳥の行方も見えず立つ霞かな

牛込のつつみのうへに白鷺のおりゐるばかり殘る雪かな

梅の花咲きそめしよりやま畑のわたくし達も人ぞ行きかふ

遊ぶべく野はなりたれど草むしろしくしく今日も春雨のふる

たつ人はみな立ちはててたゞやかた書間さびしき春のあめかな

蛙なく聲はさやかに聞ゆれど澤田の月夜くもりはてたる

面白く鳴くと思ひし蟲の音もひとりきく夜は淋しかりけり

秋さむくなりにけるかな朝日影ふむいたじきも心地よきまで

税所敦子

明治八年、皇后宮の内侍として仕へた。明治三十三年二月四日に歿した。これも第三期の歌人の代表のひとりとして此處にあげた。家集を「御垣の下草」といふ。

青柳のかげにこもりて山もとの里の一むらあらはれにけり

谷かげのみすずが下のさ蕨は思ひしよりもたけにけるかな

朝戸出のにはとこの花散りそめて風なつかしき夏は來にけり

夏のよの月あかければ山畑にいでて瓜とる賤もありけり

入がたの月よりうへに聞ゆなり高ねを傳ふさをしかの聲

もろ共に見ばやと思ふ人は皆苔のしたなり秋の夜の月

落穂さへ殘らずなりし冬の田に昨日も今日も雁のおりゐる

靜かなるわが山ざとはぬば玉の夢さへ稀に見ゆるなりけり

敦子は當時も評判がよかつたやうであるが、感じが細かくて、厭味がない。『いろくづを瓶にはなちてうなゐ子が水もてあそぶ夏は來にけり』といふ歌などはその特色が出てゐる。それから、詠史の歌、新題の歌がなかなか多い。これも時代のおもかげで、興あることであるとおもふ。

佐佐木弘綱

佐佐木弘綱は信綱の父で足代弘訓の門に出でた。家集を「竹柏園家集」といふ。「續日本歌學全書」に收めてある。福羽美靜の序の中に、「佐佐木君は官に仕ふるにあらずして世に譽を得たり。官にありて譽をうるは人あるひは易しといはむ。官にのぼらずして譽を高くするは難き事なるべし。」云々。「開化和歌集」「千代田歌集」「日本歌學全書」その他の著書がある。歿年は明治二十四年六月二十六日である。いま第三期の中に排列して論じた。

ここちよく雨はれにけり青柳のみどりの空に鳶のこゑして

百千鳥さへづりかはすあしひきのかたやま林花さきにけり

あまりにも秋の夕べのさびしきに麓の里におりてゆくかな

里の子が媒鳥にかけし山からの聲ぞさびしき杜かげにして

天となり地とわかれぬそのかみをいかに久しくしろしめしけむ

濁れどもやがてすみゆく大川の流をひとのこころともがな

よの中の思ひ離れし我だにもにくしと思ふ人はありけり

人の子のゑめるを見ればいとゞしくこぼるる泪せむ方もなし

福田行誡

福田行誡の「落葉集」（「續歌學全書」收）から少しく選出

する。行誠は明治二十一年四月二十五日に歿した。

今日も又みぞれふる寺寒ければゐろりの榾火かき暮しつつ

よこはまの濱風いかにさむからむこの綿子きて埋火によれ

み佛のみ名かぞへつつ出る息いる息またぬ世をすごさばや

いたづらに枕をてらす燈火も思へば人のあぶらなりけり

曉のかぜにほのめくともし火のけぬばかりなるわが命かな

あはれその蓬が島にもゆきてみむ死なぬ藥のありとこそきけ

極樂は比べちかくありながらなどゆめにだもみられざるらむ

行誠の歌は、平凡の歌は多いが、拔いたものには哀韻がこもつてゐて棄てがたいもののみである。良寛の歌などとはまた違つた味ひの歌である。

海上胤平

加納諸平の門に出で、賀茂眞淵を尊敬した海上胤平は、東京に出てから、盛に當時歌壇の主潮流にあつた諸歌人の作物に向つて挑戰してゐる。「東京大家十四家集評論」上下二冊（明治十七年十一月）、「長歌改良論辨駁」（明治二十二年五月）、「新自讃歌評論」（明治二十六年四月）、「國學會歌範評論」（明治二十六年四月）、「大八洲學會の歌範正誤」（明治二十六年四月）などがある。「十四家集評論」は明治十七年十一月の出版であり、大家とあるは大きなる家に住人をいへるにや、歌をたくみによめる人をさしていへるにや、歌集にかかる名をつけたる例きかねば心得がたし」といふ調子で、鋭利な論法を浴せるのが特徴であるが、此書をも引くるめて第三期に記述することにしたのである。

胤平の評論は、「語格もしらざるよみざまなりといふべし」といふ如く、語格の穿鑿と用語例の吟味とに終始してゐる如くであるが、その語格の評中には、實際作歌の經驗から來てゐて味ふべき點もある。景樹の歌を論じて、『右は卷頭の歌より七首とも、續けざまに論じたる如く、つたなくて歌にならざることを辨ふべきなり。餘はいとまなければ云はず、推して知るべし。天地のことわりに背き、言葉もたださず、句法を亂せる、是を景樹派といふなるべし』といふあたり、冷笑のうちに眞率の氣があるので、胤平は當時の歌人から惡まれた。また、眞淵派にのみ歸依する云々の評語の多いのは、みな暗に胤平を指していつてゐるのである。

これらの胤平の評論は、なほ續いて新聞にも出で、大口鯛二、豐正臣などを相手に論戰し、

海上胤平君足下、何君足下。歌人の喧嘩は見苦しき者也。それとも花に鳴く鳥、藻に棲む蛙、いづれか喧嘩をせざりけると申さるるならば、御尤の御事と申上ぐるより外無之候。草々、

などと冷かされてゐるが、胤平の歌論は、明治の新派和歌運動をおこす原動力の一つとなつたことは確かである。胤平は大正五年に歿したが、此處に排列した。

家集を「椎園家集」といふ。歌は眞淵を尊敬してゐても萬葉調の歌は殆どなく、舊派から一歩も踏出すことの出來なかつたのは惜しいことである。あれほどの意氣を示してなほ此處に止まつたのは、論戰の對象をも誤つたと謂つていい。

朝けゆく衣手さむし雪きえぬ平群の山の白樫がもと

ほろほろと梢こぼれて雨かすむ巨勢の春野に鶯なくなり

このごろはまたでもなきて時鳥ゆめをさまさぬ暁もなし

めづらしく初雪ふれり白金をしきつの浦は今日ぞ見るべき

御みづから軍ひきゐて天皇のいでます見れば綾にかしこし

この頃は軍がたりにあけくれて夜さへ晝さへ靜ごころなし

うとかりし老の耳にも此頃の軍がたりはききもらさず

かへり來し軍むかへてうれしさにおつる涙のせきあへぬかな

『人としてひとつの癖はあるものをわれには許せ敷島の道』は胤平の作だといふが、私にはいまだ明かでない。

山縣有朋

山縣有朋は軍人であり政治家であつて、專門歌人でないが、晩年まで歌を好み、「常磐會詠草中」には必ず選ばれてゐる。また、若い頃の作には死生の間をくぐつた時の作が殘つて居るので、歌としても特殊の位置を占めて居る。

くろがねの筒の火花を散らしつつ先あらそひて行くは誰が子ぞ（烏尾小彌太に）

向ふ仇あらば打てよとたまはりし砲のひびきも世にやならさむ（蘆公賜六連砲）

あたまもるとりでのかがり影ふけて夏も身にしむ越の山風（越後陣中）

うちいだす筒のけぶりのかきくもり丸はあられの心地のみして

會津やま西ふく風のかぜさきに仇も木の葉もたまりかねつつ（會津陣中）

作樂・愚庵・禪嚴

この期間に、即ち議論ばかりかまびすしく、そしてその作るものが毫も舊態を脱してゐない頃に、さういふものにかまはずに新味のある歌を作つた人々である。

丸山作樂は專門歌人でない、政治家でもあり學者でもあり文人でもあり教育家でもあつた。明治三十二年八月歿。年六十。家集を「磐之屋歌集」といふ。

橡澤をうち越えくればやまとたけるかみのみことの昔しぬばゆ

ひなぐもりうすひの坂を越えくれば朝霧たちぬ道まよふがに

相模のやよろぎの磯はうまし磯きよき渚の大磯小磯

かういふ萬葉調の歌を作つて居る。その歌風が愚庵に働きかけ、正岡子規の歌にも影響しただらうとおもふから、和歌革新運動には表立つて參加しなかつたけれども、その實行に於て既に先鞭をつけてゐる。明治三十三年正岡子規が評して、「其歌變化に乏し。然れども飽くまで萬葉の高きを學びて、今の世に得難き佳什を殘したるは、却つて其歌人ならざりしがためのみ」と云つてゐる。

愚庵、天田鐵眼といふ。明治三十七年一月、五十歳で歿した。「愚庵遺稿」（[illegible]）がある。愚庵は晩年和歌を作り、丸山作樂の影響を受けて、萬葉調の歌を作つた。また愚庵は正岡子規とも交流があつた。

ちちのみの父に似たりと人がいひし我が眉の毛も白くなりにき

かぞふれば我も老いたりははそはの母の年より四年老いたり

うつくしき沙羅の木の花朝咲きてその夕には散りにけるかも

かくの如き歌はその本質に於て既に新派和歌の要約を具へたものであるが、當時の新派歌人らは、かういふ古調をば新派とはおもはず、子規一派のものをさへ、直ちに「擬古」などといつ

てしまつたのである。

禮嚴、與謝野尙絅は與謝野鐵幹の父で、明治三十一年に歿した。家集に、「禮嚴法師歌集」(明治四十三年八月)がある。

山越しの風を時じみわが小田の夕霧ごもりかりがね啼くも

はだれたる雪かとばかり見てぞ行く月の影ちる竹の下路

水のいろ香もなき雲の身にしむは世に靜かなる人にこそよれ

三人のうち、禮嚴が最も才氣が見える。字句を細かく運ぶあたりは、鐵幹の歌風に通ふところがある。鐵幹が、からいふ父の歌風を學ばずに、「東西南北」の如きを處女歌集として世に出したのはをかしい程であるが、明治二十九年あたりは父の歌風を顧みる暇は無かつたものとおもふ。

參考。齋藤茂吉「明治和歌革新運動に至る迄の考察」(「中央公論」、大正十五年一月)

第四章　第四期

これは明治三十年ごろから明治三十五年ごろに至る約五年間を謂ふのである。この期間は新派和歌の一齊に起つた時で、第三期するゐの序幕狀態を經てこの期に入ると、百花が一時に咲き、群雄一時に起つたごとき壯觀を呈したのであつた。そして、數に於て到底舊派歌人には及ばないが、旣に歌壇の主潮流を形づくるべき勢ひを示したのである。

その流派の主なものは、(一)落合直文の淺香社、(二)佐佐木信綱の竹柏會、(三)正岡子規の根岸短歌會、(四)與謝野鐵幹の新詩社、(五)久保猪之吉等のいかづち會、(六)若菜會、更衣會、其他である。

この期間には、新派對舊派の評論があり、小出、高崎等の新派に對する意見なども發表され、武島羽衣對久保猪之吉などの論爭もあり、歌壇が一時も沈滯してゐないのをその特徵としてゐる。やや經て、新派の勢力が定まつて來たころ、新派同士間の議論が出るやうになつた。

その新派同士間の議論の主なるものは、「正岡子規・與謝野鐵幹不可並稱論」といふので、一時歌壇を賑はした。これは、子規の「落合直文の歌を評す」といふ文章となつてあらはれ、「鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり。鐵幹と子規とは並稱すべきものに非ず」といふ文句は、後日まで人の口に上つた。

それから、新詩社の鐵幹の勢ひの盛になるにつれ、それに伴ふ鐵幹の行爲に關する一つの嫉視から、「文壇照魔鏡」事件といふのもある。これは一笑に附すべきことであるが、新派和歌興隆期に於ける一つの插話としてこの章に少しく傳へた。

雜誌「明星」の第一號に、風刺先生の投で「新派歌人の花見」といふ漫畫が載つてゐる。畫家は、筆致から見て長原止水か一條成美かいづれかであらう。朝鮮帽を冠り太刀を差し酒樽を持ち虎に乘つてゐるのは新詩社の鐵幹である。鐵幹は大きい眼鏡をかけてゐる。頭に冠を著、裃を著、下半身は洋服短ズボンで、左手に寫眞機を持ち、下駄を穿いてゐるのは正岡子規の根岸短歌會である。大學の制服を著、左手にノウトを持ち右手に雷神の太鼓を持つてゐるのは雷會である。それから、シルクハットを冠り、眼鏡をかけ、黑の紋付、長袴で、足に女の駒下駄を穿き、右手に染ぬきの旗を持つてゐるのは佐佐木信綱の竹柏會である。後ろの方に、擊劍裝束で立つてゐるのは若菜會である。向らは低い一めんの谷間で、櫻花が爛漫と咲いてゐる。この畫は小畫であるが、當時の新派の流派をよくあらはしてゐるのでここに傳へた。

それから、舊派、新派に反對する青年舊派のこ

とをも少しくここで觸れるつもりである。

落合直文

落合直文は明治の國語學、國文學の方面に新しい道を開拓したことは既に云つた。直文はなほ、明治二十六年の九月に淺香社を起した（與謝野鐵幹に據る）。集るもの、鮎貝槐園、與謝野鐵幹、國分操子、大町桂月、鹽井雨江、伊藤正弘、堀内新泉、井上一、師岡須賀子、藤井靜子、風當咲子などであり、稍おくれて、久保猪之吉、服部躬治、金子薫園、尾上柴舟らも直文の教を受けた。これらの門下生の大部分は、新派和歌革新運動に參加して居り、「今日、新派和歌と云ふ者が一般に認められるやうになつたのは、全く先生の首導が基礎であります」（鐵幹）といふのは、その通りである。

併し、直文の新派和歌になつた徑路を當時發表された直文の歌に據つてたどるに、從來の歌風がなかなか脱し切れずに居る。即ち、槐園、鐵幹の方が却つて作歌上の先驅を附けて居るのであるから、直文は實際の作歌よりも指導者の役目をしたのかも知れぬ。「學弟與謝野鐵幹に與ふる文」などには、さういふ情味があつた。その文のすゑに、『おのれら淺香社を起してより、ここに三年。歌につきては、聊か研究せし所あり。君また社員の一人たり。おのれらにかはりて出で立ちてはいかに。君の家のこと、またかしこへ行きたらむ後のことどもは、よきにはからひてむ。あはれから山の月、もろこしが原の雪、必ずや君の如き歌人の渡來を待ち居らむ。いかに君』といふあたりが即ちそれである。

直文の歌は、概して、輕妙であり、優麗典雅なところがあつた。曙覽の歌などもさうであるが、何處か小味のところが、革新の初期には必要であつたのかも知れぬ。新派が起つてから、歿するまで作歌上大體變化したが、鐵幹の模倣はしなかつた。ただ鐵幹の歌の方が變化が著しいから、鐵幹が先驅者のやうな姿になつた。

一つもて君を祝はむ一つもて親を祝はむ二もとある松

緋縅の鎧を着けて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山ざくら花

原町にめしひ二人が杖とめて秋の夕をなに語るらむ

我が墓を訪ひ來む人は誰れ誰れと寢られぬままに數へつるかな

父君よ今朝は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

胸におく氷ぶくろの厚氷とく碎れやまひ癒えよとぞ思ふ

かへれとはのたまはねども母君のをりをり物を思す時あり

油絵に見たるが如きくれなゐの雲の中より夕日さすなり

我が歌を哀れと思ふ人ひとり見出でて後に死なむとぞ思ふ

こがらしよ汝が行方のしづけさのおもかげ夢みいざこの夜ねむ

直文の歌論も幾つかある。その一小部分は既に抄したが、今、その盡くを抄する暇がない。

佐佐木信綱

佐佐木信綱は弘綱の家學をうけ、歌學上の論文、述作が多く、特に第三期に於ける信綱のさういふ功績を輕視してはならぬ。

和歌の方も革新の氣持は早くからあつて、その時期は落合直文よりも後れぬくらゐであるが、その作風は漸次的であつたから、やうやく明治二十九年の雜誌「めざまし草」に歌を發表するやうになつてから、その色彩が濃くなつて來たのではなからうか。しかしその變化は急劇ではなかつた。例へば、「めざまし草」第三號（明治二十

三九二）のうた、『朝まだきうたふ雲雀の聲よりや野べも山べもうち霞むらむ』と、「心の華」第二卷第一號（明三十一年二月）のうた、「七日すぎてかどの松竹とるみれば春にわかるる心地こそすれ」といふのとは、さほどの變化はない。然るに、第二卷第三號に、『ゆきふかき北の海邊に一まきのバイプルもちていにしひとはも』といふやうな新しい歌もあるから、いまだ混合體だつたと看做していい。

信綱の歌調は直文のに比して、重厚で丈ののびてゐるところがあつた。舊派から入つて、いろいろなものを取入れ、ここまで開拓して來たのは、信綱獨自の歌風で、直文、鐵幹、竹の里人（子規）らのものとはつきりと對立せしめることが出來る。其は、歌集「思草」（明治三十六年十月）で鮮明にわかる。

天地のかくろへごとをわが胸にささやく如き水の音かな

變り行く昨日の我身今日のわれいづれまことの我にかあるらむ

雪室に酒をひやして室守が昔の緖をかたる夜半かな

小笹原露ほろほろとこぼれおちて二十五菩薩秋の雨ふる

天つ日もささぬひとやの壁ぎはに秋は秋なるこほろぎの聲

はかなくて別れし君がゑがきつるかの畫に似たる雲の色かな

幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

吾妹子の泣きていさめし酒なれどなど此酒のかくはやめがたき

木の芽ふく南おもての日あたりに今日もきてなく名も知らぬ鳥

そらぼめの聲も聞えずあざけりの聲もきこえず山かげの村

春の水ゆたに流れてゆくらゆくら春の帆つづく利根の大川

森鷗外は、この「思草」に序して、「普遍無碍の天才』と云つたが、これは序文上の會釋ではあつても、「思草」の歌の特色はさういふところにあつた。併しこの特色は、新詩社の歌が勢力を得たときに漸時失はれた。この期間に於ける信綱のものには、思想的抒情詩がなかなか多い。これも人の模倣ではなく、信綱獨自のものであつた。

雜誌「心の華」の第一號は、明治三十一年二月一日の發行である。この雜誌は、後には佐佐木信綱の主宰する竹柏會の機關雜誌となるのであるが、この雜誌の第一卷は、あらゆる流派の歌論なり歌なりを掲載して居る。即ち第一號には、高崎正風、阪正臣の歌論を載せ、第二號には、[illegible]正臣、武島羽衣、大和田建樹の論文を載せ、第四號には、久保猪之吉の「短歌の運命」といふ論文をのせてゐる如きである。第九號の雜報欄に、「苟くも國文學に志あらむ程のものは、ともにともに研究の上外國文學にあたらむことを期すべし。われは桂園派なり、われは縣居派なりとて相反目す、しかもいづれにしても日本文學の一部分に於ける小さき爭にすぎず。希くは眼を外國にはなて。さては內亂の起ることもあらざるべし。われはその策としていかなる流派をとはず、國文學者たらむもの志あらむものは共に共に合同して大に爲すあらむことを望む。從來ありふれたる何の會くれの吟社など微々たるもの、骨も肉もなきもの、精神もなきもの、いはば死會病社は中々にあらずもがな。大に合同し大に活け。革新は諸君の心一つにあり。さて明治國文學の光彩を萬世にはなて。これ實に諸君の責ならずや、務ならずや」といへる文章を見ても、この雜誌の編輯の方針を推測することが出來る。

この雜誌の第三卷第四卷第五卷あたりには、正岡子規(竹の里人)の門下の多くの作物が載つて居り、岡麓、香取秀眞、次いで森田義郎なども編輯員であつたことがある。

各流派の雜誌が出來て、獨立するやうになつてから、この雜誌は竹柏會の機關誌となつたのであるが、竹柏會の諸歌人が、種々他流の影響をうけたりなどして、一流統一の趣のないのはこの雜誌の最初からの傾向を示すものと看做すことが出來る。また、會員には多くの富豪紳士淑女などを集めた。「明星」の漫畫はこれに本づいてゐるのである。

信綱は竹柏會を主宰して、多くの優れた門人を養成した。當時のものに、「竹柏園集」といふのがある。「竹柏園集」第一編(明治三十四年二月)には新體詩、美文のほかに、大塚楠緒子、川田順、片山廣子、三浦守治、石榑千亦、吉田又七、印東昌綱、清水寅治、阿部良二、井關照子、橘糸重子、山崎とね子、佐佐木信綱らの歌が載つて居り、第二編(明治三十六年五月)には、右のほか、村岡典嗣、木下利玄、横山願、關屋祐之、上眞行、新井雨泉、大橋文之、松寺久華、峯百合子等がゐる。

第一編には、信綱の「あめつちのかくろへごとを」、第二編には「木がくれに鶯なきて春深きせきの古道あふ人もなし」が載つてゐる。

正岡子規(竹の里人)

正岡子規は俳句革新の傍、はやくから既に和歌を論じ(「獺祭書屋俳話」、「文界八つあたり」、「棒三昧」、「文界漫言」等)、和歌革新の急務なることを云つて居り、そのあたりから萬葉を尊ぶ口調を窺ふことが出來る。そして眞淵が萬葉を稱揚したのはいいが、理論と實際との並行しなかつたことを云つてゐる。

併し、子規が眞劍になつて和歌革新運動に手を著けたのは、明治三十一年三月十回にわたつて、「歌よみに與ふる書」といふ長い議論を發表し、同時に「百中十首」といふ百二十首の歌を「日本新聞」に載せたのを出發點と看做していい。それ以前、萬葉調に類する歌が幾つかあるが、「小日本」に出たものの如きは大體いまだ從來の歌と餘り變つて居らぬ。

その當時の子規の歌風は、俳句の方で悟入した客觀的材料を、俳調萬葉調の混合調であらはした極めて新鮮なものであつた。當時「心の華」の雜報で、『大に歌界の革新を唱ふる論、端なく俳諧者流によりていひ出され、なほ飽き足らずとして自ら其の創作に筆を染めて公にしたり』云々と云つてゐるのは即ちそれである。

併し正岡子規(竹の里人)の歌風は、年と共に變化して、益々萬葉調となり、單純素朴となつた。彼が常に稱へた萬葉の、『眞摯質樸一點の俗氣を帶びず』といふのに近づいた。而も一首作れば一首毎に新鮮の氣を湛へてゐたが、この素朴單純は一般向では無かつた如くである。そして明治三十五年九月に歿した。

これより先き、子規が和歌革正(岡麓の用語)に著手したころ、明治三十一年の一月から、香取秀眞、岡麓等によつて、根岸短歌會が創立された。この時、山本鹿州、大橋文之の二人もゐたが、この二人は後遠ざかつた。ついで、子規の門に集るもの稍多く、また、「日本新聞」で歌を募集したのでそれに應募するものも多かつた。併し、標準が高いのと萬葉調なので、決して盛大といふわけには行かなかつた。これは「竹の里人選歌」(明治三十七年五月)にそのおもかげをとどめてゐる。

竹の里人門下としては、香取秀眞、岡麓、伊藤左千夫、赤木格堂、蕨眞、大橋約居、鈴木虎雄、長塚節、柘植潮音、山田三子、西田巴子、安江秋水(不空)、森田義郎、桃澤茂春、木村芳雨などを數へることが出來る。

子規在世中は、此等の人々は、「日本新聞」、「心の華」、「大帝國」その他に據つて作を發表し、

同人の數が少なかつたけれども、根岸派の勢力としては、鐵幹、信綱らと雁行して來たのである。然るに子規歿後、歌壇はこの派のものを默殺するに至つたのは、この派のものは當時の歌壇一般には向かなかつたといふことになるのである。

榛の木に若芽を噛むころなれや雲山を出でて人畑を打つ

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

庭中の松の葉におく白露の今か落ちむと見れども落ちず

ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

菅の根のながき一日を飯もくはず知る人も來ず暮らしかねつも

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ疊のうへにとどかざりけり

世の中はつねなきものと我愛づる山吹の花ちりにけるかも

若松の芽だちの綠ながき日を夕かたまけて熱いでにけり

歌の會開かむと思ふ日も過ぎて散りがたになる山吹のはな

枕べに友なき時は鉢植の梅にむかひてひとり伏し居り

與謝野鐵幹 附 晶子

與謝野鐵幹は、落合直文の淺香社から出て、夙くから和歌革新の議論を唱へてゐた。その論客であつた點に於て、當時、人は、海上胤平、正岡子規、與謝野鐵幹の三人を稱した。既に述べた「亡國の音」に於て、「對面千里」に於て、「名殘」に於て、「わび筆」に於て、「大薙刀頭」に於て、鐵幹の意氣をうかがふことが出來る。

『ウムよい歌が詠めないといふのか。ナンダ君の歌も古いものだぜ。十年近くも掛て歌らしいものが出來なきや斷念して仕舞ふ分の事さ。なんど丸で政界に於ける老海舟を氣取りたる口吻をかしともをかし』といふのは、當時の雜誌記者が、鐵幹の「對面千里」の文を揶揄しての評である。

そのうち、第一歌集「東西南北」(明治二十九年七月)、ついで第二歌集「天地玄黄」(明治三十年一月)を出した。二つとも歌壇の劃期的出版として歡迎され、毀譽褒貶のこゑが高く、忽にして版を重ねた。

野に生ふる草にもものをいはせばや涙もあらむ歌もあるらむ(東西南北)

木のんで[illegible]に寄せたるわが骨をひろひて叩く甲の子もがな(天地玄黄)

今一首づつ卷頭の作を載せてその代表たらしめる。

韓にしていかでか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまた廢れなむ

いたづらに何をかいはむ事はただこの太刀にありただ此太刀に

尾上にはいたくも虎の吼ゆるかな夕は風にならむとすらむ

かういふ歌が多いので、時の人、虎劍流の和歌などと稱した。先に云つた「明星」の漫畫はここに本づいてゐる。

かくの如く鐵幹の歌が氣勢を揚げたので、新詩社を結び、明治三十三年四月一日に機關雜誌「明星」を發行した。價一部六錢で、當時の煙草ピンヘット一つを以てこの雜誌一冊が買へると云つた。

一、「明星」は東京新詩社の機關にして、先輩名家の藝術に關する評論、寄稿、創作和歌、新體詩、美文、小說、俳句、繪畫等、批評、隨筆等を揭げ、傍ら社友の作物と、文壇(特に和歌壇、新體詩壇に重きを置く)の消息とを載す。

上の二潮流を認むるに憚からず。一は固陋に失して變遷發達を知らず、一は放縱に過して着實妥當を缺く。二つながら非也。吾等は微力をかへり見ずこの二潮の連鎖となり、規則ある地盤の上に莊嚴なる建物を築かむと欲す。われ等は狹隘なる黨派心をいだくものにあらず。同志の意を贊するものあらば、これを師とおもひ友と信ぜむ。唯日本國歌の爲めに革新を計るに足りなむには何をか擇ばむ。期するところは唯一つのみ」といふのである。當時會の發會のときの記事に、

「日來天熱して地沸す。この日天の一方に黑雲おこり雷霆殷々たり。いかづち會は實にその間に生れけり。あはれ唯今の天候は吾國文學界の情態によく似たらずや。この會小なりといへどもなほ力つよし。天下の事は成らざるにあらず、爲さざる也。今や結合成れり。天下の事何ぞおそるるに足らむや。よろしく早晩相攜へて國文學界に對ひて霹靂一聲雨を喚び風をおこし活氣を與へてむ。起てわが友」云々。

○

大空の星のかずかず手に盛りて月の眞珠をいだきてしがな　久保ゐの吉

こゝろたゞ[illegible]いまだ老いせねば涙無しとや人の見るらむ

うぐひすの啼く音またねて梅の花かをるかきねを行くうなゐかな

○

[illegible]るつゝみに立ちてつくづくとやせたる山のかげを見るかな　尾上柴舟

花やかに夕日さしたるいそやまの紅葉のかけを眞帆のゆく見ゆ

ほのかにもしのびの[illegible]おとすなり朱雀大路のおぼろ夜の月

○

遠つ祖の帶ばしたりにふ太刀の刃の缺けしはいつの戰なりけむ　服部躬治

われ知らずとりたる筆も誰が名を書きての後は棄てがたくして

手をとりてともに笑ひしその日よりけふの涙はこもりたりけむ

○

いづくより見そなはすらむ紅葉もちりて暮れゆく秋のあはれを（父の百日忌）　[illegible]

○

何れの日か[illegible]はやまむけだしくは人のこの世をのがれいでむ時　[illegible]

「いかづち會のおこりし一朝一夕の因にはあらざるなり。又利を以て集りしにはあらざるなり」といつた如く、熱心な會合であつて、そのうち久保ゐの吉最も活躍した。然るに大學を卒業すると共に專門の醫學に心をこめるやうになり作歌に遠ざかつた。ゐの吉は作歌のほか評論に長じ、多くの歌論がある。「帝國文學記者足下」（明治三十六年）の如きは大學卒業間際のものであり、武島羽衣を罵倒した好文字である。服部躬治は、その後、萬葉集短歌評を書いたり、俗謠を論じたり、「戀愛詩評釋」（明治三十三年）を出したり、なほ多くの和歌に關する論文がある。歌集「迦具土」（明治三十四年）はその當時の代表作である。尾上柴舟はその後、西詩の翻譯に熱心したことがあつたが、歌集、[illegible]、「叙景詩」（明治三十五年）以後、作歌を繼續し、現代に及んで居り、新しい特有の歌風を創造するに至つた。

躬治の「迦具土」の序には、「木菜は杏たり、われ長へに老いじとぞ」といつてゐるが、第二歌集は出ずにしまつた。「迦具土」の歌を今見ると佶屈なものなどが目に附く。

つらかりし憂かりし其の手ばなれてわが世樂しき朝ぞなけれかな

たみづ」（明治三十八年五、内田老鶴圃）、「大和田建樹歌集」（明治四十五年二月博文館）がある。大和田建樹は明治四十三年十月一日歿、年五十四歳。「大日本人名辭書」に歿年を記せず、又歿月日を十二月一日となすは誤謬である。中村秋香は、明治四十三年一月二十八日歿、年七十である。

武島羽衣

武島羽衣（又次郎）は、大町桂月、鹽井雨江と合著で美文韻文の書を出し、當時の少年は競うてそれを愛讀した。羽衣は、新しい學問をした歌人であるが、新派の仲間入をなすことなく、常に新派歌人とは反對の位置に立つた。「帝國文學」に於ける評論、「少年文集」に於ける評論、「心の華」に於ける評論等は常に新派和歌の非難に傾いてゐた。

久保猪之吉の「帝國文學記者足下」、また、大町桂月の、「帝國文學記者を戒む」「再び帝國文學記者を戒む」などは、羽衣に向つたのであることは、「心の華」雜報にて「羽衣子とゐの吉子」といふ題があるので既に分明である。

「新撰歌法」（明治三十二年一月）、「國歌評釋」（明治三十二年八月より三十三年十一月）などの如き好著述があり、「霓裳歌話」（明治三十三年六月）の如き、當時にあつて最も新鮮な歌話であつたに拘はらず、新派歌人とその歩趨を等しくしなかつた。

うれしさは見るから袖にあまりけり何に
つつまむ梅のにほひを

やがて來むみじかき春の別れ路をまだき
に見せて雁のゆくらむ

夕月のくまともならで涼しくもななめに
なびく軒のかやり火

御しるしの菊の花こそ咲きにけれ野山に
千代のかをりたたへて

ふたら山谷さくなだり流れおつる瀧尻の
水の音のさやけさ

鹽井雨江も新古今ばりの歌を作り、新派の傾向には無關心であつた。「父母の夢路も遠くなりぬらむさ夜の中山いまぞ越えゆく」などを見て一般を推すことが出來る。大町桂月も直文を指導者としたこともあつたが、その當時、「帝國文學」に載つた十首あまりは、新派の如くであつて實は狂歌に類するものであつた。かくおもふと、一首の短歌も決して容易ではないのである。

子規鐵幹不可並稱説

明治三十三年八月一日、正岡子規は書をおくつて「明星」の歌を批評しようと云つた。その書面は次の如くである。

『（前略）若し小生が原稿を書く丈の勇氣は、復致候はゞ、曉の事を考ふるに、或は明星の味方として拙稿を投ずる事を止め、御互に文壇の敵同士として喧嘩する方面白からずやと存じ候。是迄は新派を一團として舊派に抵抗する必要も有之候へども、舊派聲をひそめて事實上大略降服したる今日は、新派同士の喧嘩こそ必要と存じ候。明星掲載の歌に就きては、小生共の友人の中には隨分議論も有之候事故、之を幸に陣頭に相見ゆる機と致し度、その方が歌學界の爲めにも宜しかるべきかと存じ候。尤も敵同士と相成候とも場合によりて拙稿御掲載相願候かも知れ不申候へども、兎に角兩派に別れ歌戰するも快事と存じ候。右御參考迄申上候。書中新派といふ文字を用ゐ候へども之は明星の號外にある新派の字義には無之候。八月一日。正岡常規。』

といふ文章である。この書簡のすぐ後、坂井久良岐、伊藤左千夫らが、雜誌「大帝國」、雜誌「心の華」等で、その書面のことを誇張して報道

し、久良岐の如きは滑稽まじりに、一根岸の短歌會から此間鐵幹に向つて開戰狀が發せられた。……是れは今日糞も味噌も同一視する俗界の明盲共に對してのみならず、歌壇に先輩顔する一種の人類に對して大に必要」とか、または、「子規子とてもとより後輩たる鐵幹などをイヂめる精神はないのであるが』などと云つたので、鐵幹大に怒り、「子規子に與ふ」といふ駁論を書いた。

藝術を樂むと虚名を樂むとは兩立すべきではない。然るに誰の歌がどうのかうのといふのは藝術を樂む人々の所作とは見られない。『君とは私交もある僕だ。君には十分文壇の禮讓を盡してゐる僕だ。その僕と名を列べて書かれるのも嫌やだといふことは、文華の德義を無視した常識はづれの無禮の暴言ではないか。『この開書を以て正面から君に一打撃を加へるのである。文壇の禮儀作法を知つて居る君であるなら、左千夫や坂井に書かせずに、君自身の名で子規は文壇の破廉恥漢でないと云ふことを辯明し玉へ。兜を脫いだの、後進の鐵幹などと云ふことは、和歌革新の歴史上、君が健全なる頭腦である以上は、斷じて僕に向つて云はれた義理ではあるまいと思ふといふ勢のいい開書であつた。

歌壇ではこれを客觀して面白がつたのであるが、議論にならずに龍頭蛇尾の觀を呈した。それは、子規が二たび鐵幹に書を送つて、『貴兄が小生に對する攻撃は、邪推と誤報を信ぜらるとの二事より起り候樣相見え候にて、つまり、左千夫の言にせよ、久良岐の言にせよ、子規の本意ではないといふことを明言したからであつた。

鐵幹は、「子規子に與ふ」を公にすると同時に、「心の華」に「國詩革新の歴史」(九號)を書いて、鐵幹が子規の後進でないといふ事實を公にした。この文章は後、「新派和歌大要」(明治三十五年六月)といふ書物のなかに收められてゐる。

然し論戰はそれだけで、鐵幹は、

『小生は爰に子規君に對する、明星第六號紙上の失言を謝し、且つ同時に公にせる、心の華紙上の子規君に對する評言をも取消し申候。猶この感情問題に就て、坂井君の男らしき御態度には、十二分の敬意を表し候』云々。(十月十二日)

かくの如くにして、子規鐵幹不可並稱說は終を告げたが、當時「心の華」單報子が云つた。『ボヤ程にもなくて、人騒が世に終りし逆行は知るを得べし』云々。明治三十四年になり、子規は「墨汁一滴」でこのことを書き、

『去年の夏頃ある雜誌に短歌の事を論じて、鐵幹子規と竝記し兩者同一趣味なるかの如くいへり。吾れ以爲へらく、兩者の短歌全く標準を異にす。鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり。鐵幹と子規とは竝稱すべき者にあらずと。乃ち書を鐵幹に贈つて互に歌壇の敵となり、吾れは明星所載の短歌を評せむ事を約す。蓋し兩者を混じて同一趣味の如く思へる者の爲に妄を辨ぜむとせり。爾後病牀寧日少く、自ら筆を執らざる事數月未だ前約を果さざるに、此の事世に誤り傳へられ、鐵幹子規不可並稱の說を以て、鐵幹罵倒に因ると爲すに至る。然れども此等の事件は他の事件と聯絡して一時歌界の問題となり、甲論乙駁喧擾を極めたるは、世人をして稍々歌界に注目せしめたる者あり』云々。

それから稍經て、子規は、「墨汁一滴」の三月二十八日から四月三日にわたつて、「明星」所載の落合直文の歌を評した。「廢刊せられたり」といひ傳へたる明星は廢刊せられしにあらで此度第十一號は恙なく世に出でたり。相變らず

勿體なき程の善き紙を用ゐたり。かねての約に從ひ短歌の批評を試みむと思ふに、甚多くしていづれより手を着けむかと惑はるるに先づ有名なる落合氏のより始めむといふ書出しで、當時の歌壇では、それまで全くなかつた程の精細な批評であつた。それに就き、「明星」側では全く沈默を守つた。落合直文は恰もその時子規の病氣見舞に林檎を贈るつもりでゐたところが、その朝の新聞から子規の批評が載つたので、「一頁目から正岡君が攻撃を始めて居る。其處で、正岡君が折角自分の歌を批評して呉れようと思つて居るのに、此林檎でも贈つて遣つたならば、正岡君が遠慮して或は自分を攻撃する筆鋒を鈍らすやうな事がありはしないか」(寛演説)といつて中止した。

この兩派不可並稱説は、別に論戰にならずしまつたが、子規の歿後に、鐵幹の方で、根岸派をば新派の中に入れることは同意しないといふことを屢々いひ出してゐる([illegible])。このことも人間心理から看て世の短歌史家に興味のないことはない。

「文壇照魔鏡」

「文壇照魔鏡、第一、與謝野鐵幹」といふ小冊子が、明治三十四年三月十日、横濱市の大日本廓清會から發行になつた。これは中傷的に與謝野鐵幹を非難する目的を以て執筆したものであつて、鐵幹の私行上のことにまで及んでゐる。「鐵幹は妻を賣れり、鐵幹は處女を狂せしめたり、鐵幹は[illegible]を[illegible]けり、鐵幹は少女を銃殺せむとせり、鐵幹は強姦放火の大罪を犯せり、鐵幹は明白に[illegible]なり、」などいふたぐひの「罪狀」といふもの十六ばかりを數へてゐるのであるが、かういふ事は私には興味はない。ただ、和歌に關した部分を少しく左に抄記しよう。

○鐵幹が今日世に知られたのは、抑も何人の庇蔭に依るのであらう。鐵幹元來[illegible]學者、縱しや前提の罪惡がないにしても、虎劍流といふ一派を成した名譽を擔し得る資格がないのだ。此の如き者が、其實力の如何は別問題として、兎に角、萬葉の[illegible]を[illegible]したり、古今集の道を[illegible]したりするやうになつたのは、全く落合直文子の力に依るのである。

○鐵幹が世に持て[illegible]さるるに至つたのは、虎[illegible]と[illegible]とを使用して、頻りに[illegible]名を得つた[illegible]である。[illegible]人の[illegible]不[illegible]なる[illegible]子に[illegible]き世に、婦女らしく學者らしく見せかけた所である。[illegible]の[illegible]、漢文の素養を吐出したやうに作つた所である。盲目なる世人は、それは彼れが[illegible]たる胸裡より湧出づる自然の[illegible]と[illegible]つた樣である。何事にも雷同する頑次郎の青年會、何事も法螺ケ峠の頂上で吹立てる頑兒の法螺貝を聞いて、よいよいと囃し立てて、「坊やはえらい」と煽立てて、彼れに虎劍流の本山を開かせたのだ。

○俳句の方では根岸派子規、和歌の方では虎劍流鐵幹である。其他にも隨分あるのだが、此等は先づ本山と云ふ資格である。眞面目に、獻身的に、斯道の爲に盡して居る子規の如きは、眞の詩人として予輩の敬重して居る處で、此人に就いては別に月旦する必要はないが、一九も俳句に就いての意見はあれど、虎劍流の元祖鐵幹に到りては、甚だ云はねばならぬ事がある。彼は今大いに名が賣れて來たのに乘じて、大いに勢力の扶植に努め、ますます手を擴げむと焦つて居るのである。しかし其運動は歌壇の爲に活動するのでなく、予輩も大

いに賛同を表する次第であるが、彼が運動の目的は、餓ゑたる虎（自稱による）の餌を得むが爲に、表面は巧みに馴羊の假面を被つて、貞淑な言を粧うて居るが、情火内に燃えて色相外に表はる、隠し了せぬ陰謀のほのめき出して來たのを見るに及んでは、予輩は之を輕視して置かるべきものでないと思ふのである。彼は文壇に於いて最も温和なる、否寧ろ活氣のない者と目されて居る歌人ではないか、それが假面を被つて猫撫聲になつて、滿天下の青年を欺瞞せむとする行動を爲すに至つては、予輩は公然彼に對して、汝は良心の賊なり、社會を腐蝕する兇漢也と宣告して置くのである。

○鐵幹は歌人（須らく在來の慣用語を用ふである。色で濁り酒に溺れて、永く末代の歴史に汚名を流した王朝時代のそれよりも、更に惰弱に、更に淫靡に、更に墮落した歌人である。否王朝時代にも封建時代にも、曾て見得べからざる陰險奸惡の歌人である。

かういふやうな調子である、留意して鐵幹を誹謗しようとしてゐて、正統流の元祖なりといつてゐるところがおもしろく、また、當時の與謝野鐵幹が、若き歌人として、如何に世人の注目をひき、その歌風が一つの勢を以て天下の青年の間にひろがりつつあつたかが分かる。さういふ背景を顧慮すれば、數十年後の今日、この種の文章を回顧することも亦一興である。また、鐵幹が、其處女歌集「東西南北」に序して、「小生は詩を以て世に立つ者にあらず候へども、短歌にもあれ新體詩にもあれ世の専門詩人の諸先生とは大に反對の意見を抱き居る者に御座候」といつたのに對して、「國民之友」で宮崎湖處子は、「斯の如きの語は、往々太だしき謙遜より出でたるものにあらずんば、太だしき傲慢より出づ。鐵幹はその孰れに居るものか」と評したのを引用することを忘却しなかつた如きは、世評の細かい點をも利用しようとした形迹がある。

この「照魔鏡」の序文は、「由來罵倒す可く誹毀斥く可しと雖、剛膽を提げて法刀を操つるは今世の急に非ず。佞臣朝に濫り奸邪野に漲るの時、背逆違なる高義を以て、此頽風を回すを得むや。其醜を潜くし其奸を攘ふの道、須らく法と罰とに俟たざる可からず。今の法語何の用をか爲す、儒の徳論將た何の用かあらむ、唯頼むべきは降魔の利刃あるのみ。嗚呼偉なる哉。魔神の跳梁を制すべきもの唯之あるのみ。』と言ひ、大日本横濱に於いて、高清會幹事、武島春嶺、三浦孤劍、田中狂庵と署してあるが、無論匿名であつて、筆者の誰であつたかは不明に終つた如くである。なほ書の卷末には轉載を許す』と書いてある。

次いでこの書の出現で、雜誌「新聲」との間に關係が紛糾して、新聲社名譽毀損事件といふものになつた。それは、「新聲」記者高須梅溪芳二郎が、「文壇照魔鏡を讀みて江湖の諸氏に愬ふ」といふ文章を「新聲」紙上に載せたのを、與謝野鐵幹が怒つて、高須芳二郎、中根駒十郎の兩人を相手取り、東京地方裁判所檢事局へ、誹毀の告訴を提起したのをいふのである。併し、この裁判の判決は、「被告芳二郎、駒十郎ハ共ニ無罪。押收品ハ各差出人ニ還付ス」といふので、その「理由」は次の如くである。

被告駒十郎ハ其當地ニ於テ發行スル新聲ト稱スル雜誌ノ編輯兼發行人ニシテ被告芳二郎ハ同社々員タル事ハ被告等ノ自供スル所ニシテ芳二郎ハ文壇照魔鏡ヲ讀ミテ江湖ノ諸氏ニ愬フト題スル文章ヲ作リ之ヲ同誌ニ寄セ駒十郎ハ之ヲ明治三十

四年四月十三日刊行ノ同雜誌第五編第四號ニ掲載シタル事實ハ之ヲ認メ得可クモ右文章ヲ以テ東京市麴町區上六番町四十五番地與謝野寛ヲ誹毀スルノ意思ニ出テタル者ト認ムルニ足ル證憑十分ナラス仍テ刑事訴訟法第二百二十四條二百三十六條ニヨリ無罪ヲ言渡ス可ク押收品ハ同法第二百二條ニヨリ差出人ニ還付ス可キ者トス、
コレ主文ノ如ク判決スル所以ナリ

この顚末の詳細は、雜誌「新聲」第五編第五號（明治三十四年五月十五日發行）に、田口掬汀によつて公にされて居り、文は、「與謝野寛對新聲社誹毀事件顚末」と題し、文のはじめに、『我黨、鼠輩鐵幹の如きを眼中に置きて、侃諤の言を爲すに非ず。文藝評論の有する權能は、我國法律の範圍内に於て、如何の程度まで及ぼし得可きかの、大問題を解決し、併せて我黨の主張と態度とを表明せむが爲なる也』とことわつてゐる。

「文壇照魔鏡」の出現は一私人に關することであるが、明治和歌革進運動の勃興期にあたつてかくの如き事件のあつたといふことも、世人をして新派歌人といふものに留目せしめる一動機となつただらう。これ、私の「文壇照魔鏡」事件を抄した所以である。

「文壇笑魔經」

これは、坂井辨（久良岐）の著で、明治三十五年五月十九日文[illegible]社發行である。序文に云ふ。

『文壇笑魔經と題しても、去る詩人の人身攻撃をヤラカス祕密出版などゝ云ふ、おつかなき者に非らず、只一ツ讀者を烟に卷いて、腹の皮を撚らせようと云ふ、大した陰謀より外には、トント種仕掛の無い手品、首尾よくまゐりましたならば一入のお慰み、何卒拍手喝采、あらむことを。ワンツウスリーシリピリー、シリピホンまじなツて置く者は例のへな翁』云々。

新詩人

サスガは新派疊と女房度々仕替へ

日本を去る歌アイス去つて見ろ

狒々津彦、藤の勲位の好色御魂、吾歌に入りて腹の皮よる

などいふものは、與謝野鐵幹一派の歌風を滑稽まじりに暗指してゐるのでおもしろい。

○余の歌を、明星カブレと同人が評したが、余も大にカブレンとしてやつて見たが、駄目の皮サ、寧ろ嬬村先生に近くなる位のもので、トテモ意味曖昧、隱喩中毒症、新句法慢性加答兒にはなれない。だが余も何でも變化してヤレと大奮發で見る氣になつたのだ。

（ここで鐵幹に對する人身攻撃で、直に其歌のなべてをまで非認しようとする人もあるが、ソレは大間違である、餘りにケツメドの狹い話で、余も成程其内容と感化の結果や、其句法の弄奇に過ぎ、隱喩中毒を起してゐるのを贊成しないのみか、不絶攻撃してゐるけれど、思想界や文藝界に於ける多少自由と云ふことは信じてゐる、缺點は缺點、長所は長所、時代思想の要求が産んだ明星一派の詩を客觀的に認容する度量を有したいでもない、只短詩の性格を明かにし適當なる範圍内に於いて變化を求めたいのである、假へば世の放蕩兒も一旦にして堅人になることもある、丸で最初から小心翼々としたお坊ッちゃん流の君子も惡くは無いが、世は複雜故サウ斗りは行かぬと思ふのである、まだ云ひたいが、理屈は日記には禁物だから、又の折としよう』云々。

なほ、久良岐は、當時の新派歌壇に關係し、雜誌「心の華」、「大帝國」等に歌論を發表し、「望岳街談」の如きは、當時の歌壇を知るのに甚だ

便利なる隨筆である。

久良岐はまた、新派狂歌を創め、へなづち派と謂ふ。

酒まゐる灯あかき街の梅の宵あははははにおほほ風ぬるく吹く（明　的）

へなづちのへなへなへなへなへなにへこたれ居るよ仕事を多み

ニイチエ何トルストイ何我にありて甚太が味噌の香をきくが如し

見よや足にローマンチズム蹶はららかしネヲクラジック起さであらめや

ひむがしの豆大の國の寸詩人蚤によく似て躍り跳ねるよ

日の本の詩人の頭このごろは紅毛が生ひてもうもうと啼く

君が取る角力や春のヒヨロケ獄勝ちてさがすか梅の初花

これらの狂歌は、「へなづち集」といふのに收められてゐる。後、「讀賣新聞」で、「へなぶり」といふ狂歌を創め、稍流行するに至つたのは、久良岐の眞似をしたのであつた。

和歌の雜誌・新聞

當時の和歌の雜誌は、少しく記したが、「心の華」、「筆の花」、「大八洲會雜誌」、「敷島」、「詞林」、「うた」などがあり、又地方には、「濱荻」、「國風」、「歌文學」、「やまと歌」などがあつた。

また、新聞の和歌欄を注意すると、「日日新聞」は宮内省派、「國民新聞」は佐佐木信綱社中、「毎日新聞」は鈴木重嶺社中、「日本新聞」は宮内省派正岡子規社中等の分野があつた。

雜誌で和歌を載せてゐるのは、「太陽」、「少年文集」、「新小說」、「めざまし草」、「文庫」、「新聲」、「中外時論」、「國學院雜誌」、「國光」、「女鑑」、「東洋哲學」、「女子の友」、「佛教」、「なでしこ」、「女學講義」、「海國少年」その他である。また「新小說」、「文藝倶樂部」、「新著月刊」、「時事新報」等は和歌の懸賞募集をした。

第五章　第五期

この第五期は、明治三十六年の始ごろから、雜誌「明星」の廢刊、即ち明治四十一年の十一月、それから雜誌「スバル」の初期、即ち明治四十二年に至る、約七年間ぐらゐの期間をいふのである。

第四期の、新派歌人蹶起割據時代を過ぎて、この期間に入ると、與謝野鐵幹の新詩社風の歌風、即ち明星調が著しく勢力を占め、終に天下の新派歌壇を風靡してしまつた。そして、この期間にあつて最も活動したものは與謝野晶子であり、晶子は明治三十七年頃以來、頓にその特色を發揮し、燈火をかざして進むの概があつた。

さうであるから、鐵幹はじめ新詩社内の歌人等はこの晶子調の影響を受け、從つてその模倣をするものがまた多くなつて、忽ちにして歌壇の主潮流を形成するやうになつた。そして今まで雁行の位置にあつた、佐佐木信綱の竹柏會、正岡子規の根岸短歌會、それから、いかづち會その他は傍流の姿となり、ついで、新詩社流の模倣をしない根岸派の歌は、全く歌壇から默殺されてしまひ、その他の、信綱でも薫園でも柴舟でも空穗でも知らず識らずのうちに與謝野晶子の影響を受けた。

なぜさうなつたかといふに、若くして歌を弄ぶものは、晶子の歌に向ふやうな社會狀態にあつた。即ち空想、情熱を讃美する社會狀態である。そして、晶子調の歌を云々しなければもはや歌人ではないやうに歌壇の潮流がなつたのであるから、明治、ゐの吉のやうに歌壇から遠ざかるか、子規歿後の根岸短歌會のや

文章を書いてゐる。いはく、一所で今日各地に、盛な新派和歌といふものを見まするに、それは甚だ私共の志とは違ふ。私共は個人々々の異る特色の詩が作りたいと祈つて居ります。然るに彼の人々の詩は信綱氏[illegible]氏の口眞似でなければ、故人子規君の口眞似である。最も慨かはしいのは鐵幹輩の口眞似をする人々の多い事であります。私の思ひまするには、鐵幹の如き未熟な詩人は日本に一人で宜しい。鐵幹などを瞠若たらしめる詩才の人が百人も二百人も出て來ねば日本の詩界は心細い。然るに鐵幹輩の餘瀝を啜つて得々たる人々の多いことは、私の誠に失望する所であります。昨冬も在る友が私に向つて、新派和歌の盛に行はれるのは君の志の大半を成したと謂ふものだ。君は愉快であらうと云はれた。私は何等の愉快な事もない。私は私の作よりも下手な私の眞似の鵺歌が、各地の新聞雜誌に滿ちて居るのを見まする毎に、必ず眉を顰めて紙を掩ひます。此如きは私が十年來の希望とは反對の結果です。地方では舊派の大家から攻撃を受けるといひますが、彼の様な歌は第一私が攻撃したい。舊派の歌の衰へたのも模倣からです。わが新詩社だけは誓つて新派和歌を亡しますまい」云々。以て、新詩社風の和歌の流行しかけた様を想像することが出來る。

「明星」明治三十七年

日露戰役第一年。鐵幹・晶子の「毒草」が五月に出で、晶子の集「小扇」も『われわかうて小き扇のつまかげにかくれて覗たる戀のあめつち』といふ序歌を以て發行になつた。また、落合直文の追悼號、齋藤緑雨追悼號が出た。上田敏の譯詩がいろいろ出た。平出露花の「所謂戰爭文學を排す」といふ文章も出た。それから、晶子の「君死にたまふことなかれ」といふ長詩が載つた。その中に、「すめらみことは戰ひに、おほみづからは出でまさね、かたみに人の血をながし、獸の道に死ねよとは」云々の句があつた。この長詩の思想を難じた大町桂月をば反駁しに新詩社の數人が桂月の宅までおしかけて行つたりした。

本年に入つてから、碎雨、萬里、蕭々、垂氷子、蒼梧等も活躍したが、晶子は後半期から、世に有名になつた歌を發表して居る。

○ 與謝野 鐵幹

天上の紫草を見ずやかがやかに一朵は切れりこがれぐるま

われ泣きぬ草をはなるる四五寸の月と君とをそがひにはして

雲見れば飛ぶ馬おもひ虹見れば金の槍して立たむと思ふ

興きたらず七寶みたす珠の宮詩なき七月燭を照さず

○ 與謝野 晶子

友染の袖十あまり圓うより千鳥きく夜を雪ふりいでぬ

鎌倉や銅にはあれど御佛は美男におはす夏木立かな

ほととぎす治承壽永のおん國母三十にして經よます寺

花に見ませ王の如くもただなかに男は女をつつむ美はしき戀

ほととぎす岩山みちの小笹二町深山といふにわらひ給ひぬ

この鎌倉大佛の歌は、八月の「明星」に載つたものであるが、のち、「鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな」と直した。この歌は晶子一代の傑作として人口に膾炙し、この歌を賞讃せずんば歌を談ずるに足らぬとまでいはれた。當時の皮肉派大町桂月すらいかにこの歌を讃美したか、それを一讀すれば當時

あたひなき速香と云へどひと時の婢は見えつ人のおん目に

晶子のも歌の姿が稍のびて來て、調子のとれてゐるのが多くなつたやうである。

「明星」明治四十年

この年は、同人數人で紀伊、伊勢に旅したのでその時の歌が目立つ、高村碎雨の航海中の歌が載つてゐて、それが有名になつた。大井蒼梧の「歌話」といふのが載つてゐるが、相馬御風、伊藤左千夫、正岡子規、小出粲、金子薫園、田中花浪、尾上柴舟、正富汪洋の作をならべ、『以上の如きは、形こそ三十一字であれ、平俗の語をつらねた以非歌に外ならぬのである。』といひ、寛の、「ふさやかに緋の帶おへる子と行きぬ祭みる日の下加茂の橋」といふのをひどく褒めてゐるので大要がわかる。

あしきもの追儺ふとするや我船を父母います地より吹く風　　高村碎雨
大海の闇きがなかに船ありて夜を見るを見こころ怖れぬ
海を見て太古の民のおどろきを我ふたたびす大空のもと
水無月の紀伊の奥より山のかぜ三熊野川の川原菅ふく

川原田の一段ごとにあかねさし霞のごとく春の雪する　　與謝野晶子
大國の野焼く法ごゑあけぼのの海のあなたに今聞く日いづ

海を見る樂しさ二なし若し云はば己が心をわれ觀るに似む　　與謝野寛
黒雲に入日にほへりその下に志摩の國べは白き浪よる

少女をばなぞ一人に限らむや百日のうちに百人を見む　　吉井勇

人をこひたちます忘れ無爲に落ち亂に赴き夕に到る　　平野萬里

水時計ほたりほたりと死の時を刻む音かな脈打つを聽く　　茅野蕭々

青の馬御すと來りぬ世に一の眞大膽子の大氣の童子　　北原白秋

「明星」末期

これは明治四十一年を大體をいふのである。この末期の與謝野寛の「歌話」で、「萬葉集」の講義をし、これは、「明星」廢刊後、「常磐木」に連續して出してゐる。これなども明治三十五六年ごろの傾向から見れば、一つの推移と見るべきものである。本年に入り、長詩も盛になり、短歌では、吉井勇、平野萬里、茅野蕭々等が活躍し、いままで長詩の方面に骨折つた、石川啄木も短歌に興味を有つやうになつた。しかし、短歌は、「花ひとつ落ちぬる時におもしろし萬山を撼る谷のとどろき」の如きものであつて、後年の社會主義的、自然主義的のものとはだいぶちがふ。

○

やせし馬小牛ことごと荷をになふ苦しき國に人となりにき　　與謝野晶子
雪の日は深靴を穿くさばかりの庵りも戀になしてふ
いにしへのおほらかなりし人もみな無き名はせちになげきてありき
さきに戀ひさきにおとろへ先きに死ぬ女の道にたがはじとこそ
二十四のわが見る古往今來はすこしたがへり戀人のため
うごきなき湯津磐むらとおもひしは蝶の殼のあさましき床

過古が比較的減り、大和言葉が入つて來、調べが延びて來たが、まだ興味本位で、「古往今來」などいふ言葉で一首を纏めてゐるところが

ある。技巧上の進歩はあつても、本質上には舊態を脱してゐない。

「明星」終刊號

「明星」は、明治四十一年十一月五日の滿百號を以て終刊とした。その原因は、「經營の困難は、ざること一、予が之に要する心勞を自己の修養に移さむとすること…。」といふにあつた。

君はよし書物のなかに干乾びて見いださ
れたる草花よりも　平野萬里

くらがりに眞白く立てる圓柱いかにめぐ
らば君をしも見む　平出修

瑠璃のチャルメラ聞けば失ひしをさなき
心拾へるごとし　石川啄木

逆しまに山より水の溢れこし驚きをして
われはいだかる　與謝野晶子

伽羅の香のみなぎるなかに跌坐する人も
なげきぬ秋風ふけば　吉井勇

冷きもののもとも冷かる白いなる都府の
扉に短銃を打つ　太田正雄

塵あがる大太鼓鳴る赤き暦日に滿つかか
るまぼろしに生く　與謝野寛

なほ寛は、「うれしくも萬葉に次ぐ新歌を師の御名により世に布けるかな」といふ歌を詠んでゐる。明治三十三年四月一日に初號を發行し、歌道のためにいろいろ骨折つたのであるから、これぐらゐの自負と自慢とがなければならぬのである。

併し、此等の歌を見れば、從來の主情的空想的特質を基調として、西洋の象徴詩の影響を看取することが出來る。「明星」の第一號の歌とこの終刊號の歌とを比べれば非常な進歩であり、「明星」は自ら育てあげた浪漫主義系統の短歌をして此處まで進め、多くの優れた青年歌人を養成し、その歌風をして天下を風靡せしめたのであつた。併し一方には既に本邦自然主義の勃興があり、田中王堂をして、「我國に於ける自然主義を論ず」といふ長論文を書かせたけれども、大勢はそれに應じなかつた。

なほ與謝野寛は、新詩社の養成した作家の主なるものに就いて次の人々を擧げてゐる。

碓南、萬里、勇、白秋、[illegible]、石橋、[illegible]、晴子、清嵐、啄木、萬[illegible]、[illegible]、晶子、[illegible]、美子、[illegible]子、花子、[illegible]山、[illegible]光、[illegible]忠、[illegible]一、不如等。（[illegible]）

これらの歌人のうち、「明星」の後繼の姿である「スバル」で活躍したものもあり、「スバル」を離れて他の方面で新しい境地を拓いたものもある。啄木の歌の如きも、この終刊號所載のものの如きはいまだ情緒主義の域を脱してはゐないのを見る。

太田水穗は[illegible]で明星詩派の位置を論じ、「新古今以來のロマンチック文學のうち、その特性を發揮して空想の跳躍に委した趣のあるのが明星派の詩歌であつた。明星詩派は眞にわが國最近に於ける情緒主義の昂騰的極致と云へよう。長所もそこにある。短所もそこにあると云つた。

「スバル」初期

「スバル」第一號の發行は、明治四十二年一月一日で、晶子の「佐保姫」の出たころである。初期「スバル」の歌風は、「明星」の延長と看做してもいいが、一面には、森鷗外の考の影響によつてもつと西洋象徴詩流になつた。それから[illegible]の調子を取入れて、線を太くするといふ傾向も見えた。これは觀潮樓歌會から根岸短歌會あたりの影響である。その前後に、與謝野寛は萬葉直盧の歌といふ萬葉調ばかりの歌を雜誌「太陽」に發表したりした。また、第二號の平野萬里の「我妹子」といふのはなかなか佳い作であるが、それにもその傾向が見える。

『音のよろしさ』「大路遠みかも」「おぼつかなくに」『今朝もいめに見つ』などの結句がさうである。

見るかぎり畫などにかきて置き給へ一いろならぬ心の人を　　與謝野晶子

かにかくにいとにこやかに親しみぬ薄なさけびと深なさけびと　　吉井　勇

我妹子よ君をおもへば涙あふるあはれ我妹子あはれ我妹子よ　　平野　萬里

そことなく蜜柑の皮のやくる如き香ひのこりてゆふべとなりぬ　　石川　啄木

かういふのが初期「スバル」の歌の一部である。それから「スバル」は、短歌號を出し、多くの力作と變化に富んだ作とを滿載してゐる。森鷗外の「我百首」といふのは、「スバル」の第一短歌號に載つたものである。

併し、「スバル」で活躍した、吉井勇、北原白秋、石川啄木等は「明星」の與謝野夫妻と離れて別々に活動しはじめ、平野萬里、與謝野寛等は作歌に氣乘がしなくなり、居殘つて「スバル」に歌を發表するものがゐても、それは餘り人心を引附けることが尠くなつた。それは「スバル」の歌風は、西洋風、藝術風で、生活、眞、現實といふやうなものとは直接でなかつたからである。そこで歌壇の中心は次の期のものに移行して行つた。

森　鷗外

森鷗外の一般文壇に向つて成し遂げた功績は普く人の知るところであるが、和歌乃至俳句の方面をも閑却してゐなかつたことは、既に、「しがらみ草紙」「めざまし草」の條に於て述べた。

作家としては、經歷上、桂園派に似た歌を咏んでゐたのであつたが、新派和歌の運動と共に自然新派のものにも親しむやうになり、日露戰役中に作つたものを集めた「歌日記」（明治四十年春陽堂）の中の歌は「みるかぎり芍藥赤き長白の麓路ゆかば暑くともよけむ」の如きもあり、また雜誌「明星」の「ゆめみるひと」といふ名で出したものなどには、晶子ばりのものさへあるが、もつと獨特の歌調をなすに至つたのは、いはゆる觀潮樓歌會以後であつて、雜誌「スバル」が發行になり、それに戲曲、小說、論文などの載るやうになつてからである。

鷗外が自ら、觀潮樓歌會に就いて記したのがある。大正四年九月阿蘭陀書房から出た詩集「沙羅の木」の序の中に次の句がある。

『「我百首と題する短詩は、長い月日の間に作つたものを集めたのでもなく、又自ら選んだのでもない。あれは雜誌昴の原稿として一氣に書いたのである。其頃雜誌アララギと明星とが參商の如くに相隔たつてゐるのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思つて、雙方を代表すべき作者を觀潮樓に請待した。此每月一度の會は大ぶ久しく續いた。我百首を書いたのは、其會の隆盛時代に當つてゐる。」』

また、大正六年九月の雜誌「斯論」に載つた、「なかじきり」といふ文中に、「抒情詩に於ては、和歌の形式が今の思想を容るるに足らざるを謂ひ、又詩が到底アルシヤイスムを脫し難く、國民文學として立つ所以にあらざるを謂つたので、款を新詩社とアララギ派とに通じて國風新興を夢みた」云々。

この歌會は明治四十年三月から始まり、明治四十二年夏まで續いた。會者は鷗外、上田敏、竹柏會の佐佐木信綱の他、新詩社系統からは與謝野寛、平出修、平野萬里、北原白秋、吉井勇、石川啄木、木下杢太郎等、アララギ系統からは伊藤左千夫、長塚節、平福百穗、古泉千樫、齋藤茂吉等であるが、以上の諸歌人が每月出席したのではない。

「我百首」は雜誌「スバル」の短歌號に載つたものであるが、その歌風は一樣でないが、寧ろ西洋の象徴流に傾いて居り、鷗外みづから、墺太利の詩人マリア・リルケの暗指があると云つてゐる。その三四を抄しよう。

城壁の門をはたとなげうちぬ（Olympos）なる神殿のまとゐに

我は唯だこの斷沒灌果に於てのみ自在を得ると兎にする

何一つよくは見ざりき生を踏むわが足あまり從なれば

なほ、鷗外は「スバル」の短歌號の選者でもあり、かういふ新しい思想的象徴派とも謂ふべき歌風が、「スバル」に集まつた青年に影響したのであるが、その時には、既に新詩社風の歌風から、牧水、夕暮、哀果等の新しい流に人心が向いてゐた時であつたから、この我百首調は流行せずにしまつたが、歷史的に特殊なものとして觀察すべきものである。

なほ、鷗外は大正十一年に、第二次の雜誌「明星」が復活した時に、その第三號（大正十二年三月）に「奈良五十首」を發表した。これは「我百首」あたりの象徴詩風の西洋詩味から離れて、「アララギ」の寫生趣味を加味した、一種の思想的抒情詩と看做すべきものである。

京はわが先づ車よりおり立ちて古本あさり日をくらす街

牧封の笋の皮切りほどく剪刀の音の寒きあかつき

三毒におぼるる民等法の手に國をゆだねし王を笑ふや

晴るる日はみ倉守るわれ傘さして巡りてぞ見る雨の寺寺

なほ、「富むと云ひ貧しといふも三毒の上に立てたるけぢめならずや」といふ如き、思想的のものもあり、さういふ、思想的抒情詩の方面に特殊の開拓をなしてゐる。そして、この最後の一首にあらはれてゐるやうな思想は、小說「大鹽平八郞」の緣起を云つた解說に據つても之をうかがふことが出來、晩年の「古き手帳より」は、つまり其處まで行く筈のものであつたとおもふ。

森鷗外はなほ、常磐會といふ歌會を起し相當の年月續いた　これは明治三十九年に、鷗外と賀古鶴所とが主唱者となり、小出粲、井上通泰、大口鯛二、佐佐木信綱を濱町の常磐に請待して起した會であり、後は山縣有朋の椿山莊で歌會を催すこととなつた。「常磐會詠草」は初篇は明治四十二年に桑精堂から發行になり、二篇は明治四十三年十月發行になつた。常磐會の選者ははじめ小出粲、井上通泰、大口鯛二、佐佐木信綱の四人であつたが、明治四十年に鎌田正夫が加はり五人となつた。明治四十一年四月小出粲歿後、常磐會第二十三回から須川信行が入つて選者を補充した。「常磐會詠草」の中の鷗外の作二三を錄すれば次の如くである。

柴舟のかかり火さきでこぐまでに月こそさゆれ鳰のみづうみ（同）

こもりゐて見る空黃なる都べの塵の中には入らじとぞおもふ（鷗居）

年久につかへなれては休む日に傷いせむとはおもはざりけり（鷗）

にほへりし額にあてつるやき金は心のちりも燒きつくしけむ（尼）

鷗外は、觀潮樓歌會で新派の主立つた歌人を集めたごとく、常磐會では舊派の主立つた歌人を集めてゐる。そして自らも桂園調らしい舊派の歌をも作つてゐるのであるが、何處か中味に新味があり、調に緊張したところのあることに留目せねばならぬ。

おもふに、森鷗外は歌人としての業績には貧

しい方だと謂つていい。ただ鷗外が散文の方面に常に新しい事を注入したごとくに、和歌の方面にあつても、いろいろの役割を演じたのであつた。

佐佐木信綱　竹柏會

竹柏會は、雜誌「心の華」に據り、多くの門下生を養育し、竹柏園集第一編（明治三十四年）、竹柏園集第二編（明治三十五年）に見るやうな優れた作家を得たのであるが、この派の人々の作風は漸進的であり、折衷的であるから、新詩社の歌風の興隆するに及んで、歌壇全般からいへば傍系の位置に立つやうになつた。雜誌「心の華」の發行部數が雜誌「明星」の發行部數よりも多いと云つても、それが歌壇の主潮流だとは謂へないからである。且つ佐佐木信綱の歌風もまた新詩社特に晶子の影響を受けた。

信綱の第二歌集「新月」は大正元年の發行で、中には、鷗外、スバル派の影響などもあるが、中には次の如きものがある。

夢殿の祕佛の前に合掌す有髮の尼の君を見たりし

海に向きて燕の如も並びたる髮うつくしき五六人かな

仁和寺や花散る雨にそぼ濡れぬ君十六の春なりしかな

禁制の切支丹の書よみしごとひそかにぞ讀む君の玉づさ

夕月夜君にわかれて一人ゆけば高き木も泣く渡津海も泣く

つまりかういふ歌風は、一つの自然的推移だとも解せられても、竹柏會で開拓した歌風ではないのである。そんなら、「思草」以後で竹柏會の開拓したものはどういふものかといふに、次の如きものではあるまいか。

我が心われを殺して喜びぬさもあさましき我が心かな

藤原の大宮どころ菜の花の霞めるをちの天の香具山

顏よきがまづ買はれて猫の子のひとつ殘りぬゆく春の家

いと切に思ひせまりて猶はれのありと知るこそ嬉しかりけれ

沈丁花ほのかにかをる宵やみの道を今夜もゆきかへりせし

なほ、「くれなゐの君が栲領巾婆羅門のかげにかくれぬ石だたみ道」「答ふらく君が心のあまりにもすぐなるが故に君を疎んず」の如きは、末期「明星」からスバル初期で開拓した歌風の影響である。

信綱の歌風は、折衷主義、博大主義、漸進主義である。さういふ歌風は、歌壇諸流派の調停者として、諸流派の整理者としての役目を成就すべきであるけれども、晶子の如き變化性の強い作者に向つては、また根岸派の如く頑固なものに向つては、むづかしかつたのであるから、畢竟、信綱の歌風は一つの折衷派に終つた如くである。

折衷主義は、誰をでも容れると同時に、誰の長所をも取り得るのだから、實は安易道なのである。その結果、先行者にはなり得ず、歌壇の主潮流を形成することも又難いのである。

竹柏會中のすぐれた歌人は、「竹柏園集」の連續として、石榑千亦、三浦守治、片山廣子、大塚楠緒子、川田順、新井雨泉、村岡典嗣、木下利玄、橘糸重子等を數へることが出來る。

ちなみに云。森鷗外は、「自分は一切の折衷主義に同情を有せない」（妄想）と云つたが、信綱の第一歌集「思草」に鷗外は序して、「かれ此巻一たび世に出でば作者と魂あへらむ人はけだしその普遍無礙の天才をしもたたへなむか。又嗜むところ同じからぬ人はかへりてその個人性

少き折衷家などとやおとしめいふらむ。稱へむ人は稱へよかし。貶しめむ人は貶しむとも好し云々と云つた。これはどう解釋すべきであらうか。

根岸短歌會

根岸短歌會は、正岡子規歿の翌年、明治三十六年六月に、はじめて機關雜誌「馬醉木」を出した。編輯同人は、伊藤左千夫、香取秀眞、結城素明、岡麓、平子鐸嶺、蕨眞、長塚節、安江不空、森田義郎等であつた。赤木格堂、鈴木莉房は名儀にはない。

そして、この派の從來の主張たる、寫實に立脚すること、萬葉調を基礎とすること、この二つを以て進んだ。第一號に左千夫の「萬葉論」が載り、節の「萬葉卷の十四」の研究が載つたのを始とし、左千夫新古今を論じ、義郎西行を論じ、秀眞山上憶良を論じ、一方には「今の所謂新派の歌を排す」といふ論文を出して、與謝野一派の新詩社の歌を排撃した。伊藤左千夫は、明治三十七年二月から、「萬葉集」の講義「萬葉集通解」(萬葉集新釋)を出しはじめた。なほ、赤木格堂の「德川時代の萬葉歌人」があり、香取秀眞の「大伴旅人」があり、その他隨時の歌論がある。また、正岡子規(竹の里人)を中心とした、時々の文章がある。

併し時を經るに從つて、雜誌の中心は、編輯所で最も熱心に爲事をしてゐた伊藤左千夫に移り、雜誌「心の華」に關係してゐた岡麓、香取秀眞、森田義郎等は自然疎遠になり、莉房は二六新聞に據り、格堂は地方に居りまた外遊したりなどして疎遠になり、左千夫と爲事を共にしたのは、秀眞と長塚節との二人となつた。その間に左千夫と義郎の論爭などもあつた。

そのかはり、左千夫を中心として若い歌人が出來た。柿の村人・山百合・赤彦、篠原志都兒、平福百穗、蕨橿堂、民部里靜、石原純、三井甲之、増田八風、村上しみむろ、胡桃澤勘内、望月光男、柳本城西、岡千里、依田秋圃、森山汀川、木村秀枝、古泉千樫、柳澤廣吉、足立清知、蕨桐軒、堀内卓造、中村憲吉、土屋文明、齋藤茂吉等である。

明治四十一年一月、「馬醉木」を廢刊して、新に雜誌「アカネ」を發行することとなり、反對するものもゐたが斷行した。左千夫の終刊の詞のうちに左の文がある。

子規子の事業を繼承して起れる、馬醉木の活動は、甚だ遲鈍を免れざりと雖も、又竊に自ら安ずるに足るものあり、發展の進向は一日も停止せず、萬葉の研究に於ても漸次に其歩を進め、批評の範圍擴張、の標準に於ても逐年且つ廣く且つ高まりつつありしを信ず。趣味と信仰との關係、趣味と人生との關係あり、歌と他の文藝との交渉等に就て漸く接觸の端緒を開けり。

文學美術上一切の問題が、人間の研究を根本とせる如く、歌に於ても勿論寧ろ人間其物に最も直接なるべきを論じ、作歌理想は子規子時代と頗る其中心を異にし、明確に其然るべき理由を自覺せり。故に其態度は自ら人生を視み自然を傍觀するに至れり。馬醉木誌上に新體詩現はれ、小說出づるに至れるは全く以上の徑路に伴へる産物なりとす。

○　　伊藤　左千夫

爐にちかく梅の鉢おけば釜の煮ゆる煙がかかるその梅が枝に

朝なさな露の寒きにわが園の秋草なべてさびにけるかも

春雨に雪とけ流れ山川のあふれみなぎる思ひす吾は

庭の木のさびれ合歡木の葉しひたぐる風
もものし荒れくるらむか
蓼科の山の奥がとおもひしをとは花の原
あまつ國原
九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄
合に雲たむろせり

○　　　　蕨　眞

みいくさの勝ちししるしと植ゑおきし
櫻の花に鶯なくも
木の苗をわく兒の如くはぐくみて植ゑた
る今日は物思もなし
秋の夜をわたる叢雲しろたへに月の光を
包みて行くも
吾ひとり木の種まけば掌にその躍るお
と土につく音

○　　　　長塚　節

山椒の芽をたづね入る竹村にしたごもり
咲く木苺の花
小夜ふけに咲きて散るとふ稗草のひそや
かにして秋さりぬらむ
馬追蟲の髭のそよろに來る秋はまなこを
閉ぢて想ひ見るべし
さびしらに母と二人し見る庭に雨に向伏
す山吹の花

ゆゆしくも見ゆる霧かも倒に相馬が嶽
ゆ揺りおろし來ぬ
葉鷄頭の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕は
いや大なり

いまは煩を避けてこの三人の作を以て大體全體を代表せしめた。この間に左千夫は「日本新聞」、雜誌「趣味」の選歌をもし、また、地方には、「鵜川」といふ雜誌があり、「甲矢」といふ雜誌があつた。「心の華」に關係した、香取秀眞、森田義郎らは時々歌をその方に發表し、約房は「日本新聞」に發表した。

この期間に於ける根岸短歌會の歌は、この雜誌に關係した人々のほかは、全く歌壇から默殺されてゐた。新詩社の鐵幹の如きは、新派のうちに數へないといふことを屢明言して居る。そこで、當時の新派和歌の雜誌の彙報、又は短歌辭典、和歌作法の類には絕えて根岸派の人の名、その作を論じてゐない。全くの默殺であるが、その間に、同人等は驚くべき潛勢力を養つたのであり、後日、根岸派の歌が天下を風靡するに至つたのはまさにこの期間の潛勢に本づくのである。

明治四十二年になつて、新詩社の人はかう云つた。『余は天下の短歌あまねく明星の餘光に呼吸する時、その存在を忘られながら、獨り異を立てて、牛のあゆみのろのろに歩み來りし根岸派諸氏の意氣に感ずるものなり』（スバル第一號）。これをば明治三十六年一月の、『故人子規子の歌風を繼承する擬古詩を加へて並稱することは我等の同ぜぬ所である』といふ鐵幹の言と比較すべきものである。

尾上柴舟

尾上柴舟は新詩社全盛時代にも作歌を廢せず、落付いた步を續けたやうであり、特別の據るべき雜誌を持たずに、ところどころの雜誌に歌を發表した。この期間に於ける柴舟の歌は、大體、「銀鈴」以後の、歌集「靜夜」（明治四十年五月）と、歌集「永日」（明治四十二年八月）とによつてうかがふことが出來るやうである。

暖かう岡の草吹く春風に祕むるものあり
胸はそむけし
夢殿の戸はくだかれぬ榮達の階段をふむ
人の足音に
鷗鷗汝が群には波に入りし斑白き子の
魂もまじるべし

かういふ歌は、新派和歌の經過中に、新詩社の歌風の影響があるものである。併し、柴舟

は、晶子等の新詩社以外に自分の道を歩んだ　それは、稍思想的傾向のもので、その思想も新詩社風の唯美的のものではない。

なつかしきおもひ湧く日は市に立ちもの乞ふ子等もしる人のごと

見つむればうつはてより何物かわが眼のまへに落つらむかごと

いかならむ旅路のはての山の端にかぎりの光浴びて分かるる

此等は、晶子・鐵幹の歌の調子の急促なものよりも古いとも謂はれようが、柴舟は舊派の歌を稽古した人であるから、調子ののびた歌を作り得るのである。この思想的傾向は、次の歌集「永日」になると、一段の圓熟した境地を示すに至つてゐる。

夕靄は蒼く木立をつつみたり思へば今日はやすかりしかな

石投げて遊びにし日も襟とりて立てるこの日も異心なし

みな悲し慣れにし庭の草草も邪宗とわれを罵りし子も

流行ものならべる町の玻璃の戸に寄せたるかげのうつろふが憂さ

ねつかれぬ夜の多きにふと知りし風のあはれも聞きそめにけり

これらは、新詩社以外に一途を歩んだものであつて、注意して讀めば、既に當時の自然主義的思想の影響も分かるし、次の第六期に入る先驅をなしたものとも看做されるのである。それから、柴舟門からは、若山牧水、前田夕暮、正富汪洋、有本芳水、三木露風等が出てゐるが、牧水の純情的歌風は、柴舟のこのへんから出發してゐることも分かる。それから、

電車來り自動車來るとばかりにわれは大路を横ぎりしかな

墨にしみ墨汁に染みて机かけさながら今日もかかりてあるかな

かういふ悲觀的、象徴的の作もあつて、それらを前田夕暮は學んだのだとも看ることが出來る。

服部躬治

服部躬治は、歌集「迦具土」を出した後、雑誌「文庫」に據つて歌の選をしてゐたが、歌風の進展がなく、漸く作歌に遠ざかるに至つた。久保ゐの吉は、大學卒業後、専門の醫學の方に沒頭して作歌から遠ざかつた。醫科大學が短艇競漕に勝つたとき、ゐの吉は、『をととしも昨年も今年も勝関のひびきのなかに散る櫻かな』といふ一首を作つた。ゐの吉の外遊中、久保より江は、「瑠璃草」(明治三十九年、寶文館)といふ歌集を編んだ。

今次に、明治三十五年九月の「明星」に載つた躬治の歌を抄記する。

虚偽なき家庭に生れしうまし身やうまし名静かわれは男子ぞ

父母の思ひ子われぞかくながら惱みなき世にありはてなばや

乳ほしやと思へば乳は辱にわれに足せる母がなさけか

父母の御手に抱かれてまことわれ世の幸福を何ぞと思ひし

名も智慧も欲しと思さじ父母の御心われによりにけらずや

鐵幹これを評して、『氏は何故か創作の上に逡巡の態があるやうだ』云々。私おもふに、躬治のは稍、萬葉調のやうなところもあるが、正岡子規の晩年のもの、即ち躬治のこの作のあつた、明治三十五年のものなどと比較すると大分違つた興味がある。躬治は、作歌を續けてゐたならば、『よりにけらずや』といふやうな、つまり根岸派の歌風に近づいたのではあるまいか。併し、彼としては早く決斷するほどの勇氣もなか

つたのである。

金子薫園

薫園は「片われ月」(明治三十四年一月)、「叙景詩」(明治三十五年一月)以後も、やはり雜誌「新聲」「新潮」に據つて選をし、自分の歌をも發表してゐた。この期間のものは、

「小詩國」(明治三十七年十一月)

瓶にさしてつくづく見れど紅梅は姫ともならでさびしきよ春

つめたきはわが天地と庭の隅に春をすねたる水仙の花

秋風の秋を讃ずる野はくれて今歡樂の月わきのぼる

「伶人」(明治三十九年四月)

春草の雨に小さき笛ぬらしわが詩吹く子もあれなと思ふ日

ひぐらしの啼きやむ暮は人戀しなき人こひし裏の小林

ほのぼのと山櫻戸のありあけに雉子なくこゑす尾より峰より

「わがおもひ」(明治四十年三月)

うつくしき夢もこもらむ星眸にわがこの思きえて入れかし

黄水仙さすや小瓶の乳色にくろ髪うつれ戀しき夜かな

白桃の花はむかしの戀人の世づかぬに似てこころにくしも

薫園は多作で、歌集もこの如くあるが、歌風は、『おもかげ橋に夕月のして』といふ直文調と、初期の明星調、新派調がどうしても除れてゐない。技巧の方は稍進んでゐるが、叙景歌に、甘い主觀の句を添へるのが特長で、つひに特獨の深みと新しみとをうかがふことが出來ない。それゆゑ、多くの歸依者を有して居りながら、歌壇の主潮流たることが出來なかつた。

薫園が養成した歌人には、岡稻里(橙里)、武山英子、土岐湖友(哀果・善麿)、吉植愛劒(庄亮)、田波御白、内藤晨露(鋠策)、佐瀬蘭舟、平井晩村などがゐる。また、薫園選の書物、たとへば、「凌霄花」などには、若山牧水、前田夕暮の名も見える。

舊派歌人

舊派歌人も依然として、歌をよみ歌を論じ、雜誌を發行し、多くの門人を抱擁し、その門人の數の如きは、到底新派の大家などの及ぶところではない。そしてその歌は多少づつの變化はあつても、さういふ範圍内に於て、出來不出來を論ずるより途はないのである。

第六章　第六期

この期間は、明治四十三年ごろから、大正三年ごろに至る約五ケ年を謂ふのである。この期間は、「明星」が廢刊になり、「スバル」の歌風に向つて反對運動の起つた時である。そして若山牧水、前田夕暮の歌風が天下を動かし、自然主義運動の風潮によつて、尾上柴舟、金子薫園らの歌風も變化し、北原白秋は獨自の官能歌を創め、土岐哀果が羅馬字を以て新鮮な歌を作り、その影響によつて石川啄木が新詩社風の歌風をはじめて脱却して獨自の境に進み、佐佐木信綱の竹柏會の歌風も一轉化し、新詩社を脱盟した吉井勇、奔放可憐の戀愛歌を創作し、「アララギ」幽かに人の口にのぼるに至つた。かういふ内容を包含する期間である。寛(鐵幹)の「相聞」、晶子の「春泥集」も出たが、これは前の期間の作物に屬するものであつた。

かくの如く、優秀なる歌人が短期間に活動したのは、前の期間からの潜勢の發動であるけれども、その壯觀を呈した點に於ては、明治

三十年ごろの新派和歌運動興隆期と稍その趣を等しうしてゐるとおもふ。

竹柏會

この期間に於ける竹柏會の歌風は雜誌「心の華」で窺ふことが出來る。「心の華」では、從前の如く多くの歌學上の論文、研究を載せ、同時に外國の小說戲曲の飜譯をも載せてゐる。「明星」の末期ごろ、卽ち明治四十年（「心の華」第十一卷）ごろからの歌風をたどつて來て見るに、信綱の歌風は餘り發展して居らぬ。石榑千亦のも亦同樣である。今は晶子調でもなく、さればと謂つて、柴舟、薫園などの如く自然主義の影響も急劇には受け得ず、一般に竹柏會の歌は古い感じがしてゐるのである。この期間に於て信綱らの歌を新派歌壇が餘り歡迎しなかつたのは、この古さに因るものとおもふ。

○　　　　佐々木信綱

大晦日都はづれの釣ぼりにつりする人のうしろかげかな

力あれ力の上にはえあれと初日てらせり新天地を

牡丹など咲くかのやうにほの赤うもやぞ匂へる初春の夜

○　　　　石榑千亦

とど松は高きみじかき一樣に黃の衣して雪をむかふる

青きもの一刷毛もなき山の上の高原鳴らす雪まじりの風

犯したる罪をおもひぬ雨しみて下著に透るあしき心地に

以上は試に、明治四十三年、四十四年の「心の華」から拔いた。歌としては餘り數は少いが大體をうかがふことが出來るとおもふ。これを以下記述する諸家のに比して如何に古く感ずるかを見ねばならぬ。

金子薫園

金子薫園の「覺めたる歌」は明治四十三年三月の發行であるが、從來の纖麗な歌風から蟬脫して、一種現實的な、新鮮な感覺的な歌風に入つた。

夜ふけて藁灰におくぬくもりの靜かに消ゆるほどをおもひぬ

やはらかにかなしき何のおとづれぬかのわか草の青のいたまし

くちなはの水を切りゆくすばやさをちらと見しより心破れぬ

青黑き木の葉を眺めわれただに淚す今日の事はてにけり

死せる犬またもわが眼に浮び來ぬかの川ばたの夕ぐれの色

この歌集について薫園みづから、「自然の眞の姿に目覺めたる第一聲なり」と云つてゐる。當時の自然主義の影響もあるが、やはり土岐哀果などが先鞭を付けた歌風に似てゐる。

尾上柴舟

尾上柴舟の歩んで來た道は第五期でも記述したが、「日記の端より」（明治四十五年一月）は此の第六期に於ける柴舟の歌風を示すものであり、當時にあつて、この新鮮な歌風は、若山牧水をして、「新派の歌は實は尾上柴舟から始まる」（創作）といはしめるに至つた。實際この柴舟の歌風は、牧水あたりを養育したことは明瞭である。

つけ捨てし野火の烟のあかあかと見えゆく頃ぞ山は悲しき

春の谷あかるき雨の中にして鶯啼けり山のしづけさ

山にして立てれば海は廣く見ゆ廣きがままに淋しかりけり

いと強き刺戟を脫れここに來てなほ鋭か

る或者を戀ふ

日の沈む立田のあなた高安のあたりに思ふ人もあれかし

柴舟は、『今日の新派、むしろ今日の歌は、美を希求せずして眞を發揮する。自然の美を鼓吹せずして、自己の告白を根柢とする。醜迄も現實に執着して、現實の美も醜も惡も殘らずこれを歌ふ。而も赤裸々に歌ふ。ここに一の手段も方法も講じない。』（創作。二ノ四號）などといつた。

これは當時の自然主義評論の眞似なのであつて、今日から見れば可笑しいが、當時は何となし新議論の如くに響いたこと、現時無產派歌人が切りにマルクス、レニンの語錄を云々する如きものであつた。

窪田空穗

窪田空穗ははじめ「明星」に歌を載せ、或は鐵幹選で「文庫」に歌を出してゐたりしたが、遂に獨自の道を步むやうになつた。歌集「まひる野」、「明暗」（合著）、「靑みゆく空」、「濁れる川」、「鳥聲集」、「泉のほとり」、「土を眺めて」、「朴の葉」、「靑水沫」、「鏡葉」などがある。これは既に第七期の末までの歌集であるが、第六期の歌風として、明治四十三年八月の雜誌「創作」第一卷六號中の歌を見るに

われ全く君が胸にし住みなむとこの若き友われに言ふかな

相逢へば必ずおのが身の上をおのが奧所をこの人は言ふ

今か見る夢のうちなるわれといふいまはしきもの灯の前に置く

夜の夢の深き底よりうかみ來つ消えやらむこころほと息をつく

面しがめ面しがめても靑梅の酸きをあはれ昔たてて嚙む

なかには、いまだ新詩社風の名殘も見えるが、調子が新詩社風よりも重く訥々としてゐるところがある。併し、此等の中にはおのづから第六期らしいものも見えるし、靑梅の歌などは新詩社風。スバル風とも謂へるが、またもう一步出でた歌風とも云へる。

空穗は長く「文章世界」に據り、その選歌をし、また「短歌作法」の如きもの數種を書いて少年を導いた。また、十月會を組織して歌人を養成した。歌集「黎明」（明治四十三年四月）には、水野葉舟、半田良平、高瀨俊郎、田中完治、植松壽樹、岡田道一、網野新二郎、石井[illegible]子、川崎左右、山下要、加藤豐、宗耕一郎、松村英一等の歌が選ばれて居る。

若山牧水

尾上柴舟門から出た牧水は、この期間から歌壇の第一層にゐて活躍した。歌集「海の聲」（明治四十一年七月）、「ひとり歌へる」（明治四十三年一月）、「別離」（明治四十三年四月）、「路上」（明治四十四年九月）、「死か藝術か」（大正元年九月）の如き好き歌集を出し、その抒情味豐かなる内容と哀韻ふかき歌調とを以て當時の靑年の心を風靡した。なほ、牧水は雜誌「創作」を編輯し、歌話、和歌作法を書いて初學者を教育し、新聞雜誌の歌の選者たることも既に久しい。

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみどもにうち追はれつつ

夕陽の赤くしたたる光線にうかび出でたり岬の街は

春白きここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀しかりけり

蒼ざめし額つめたく濡れわたり月夜の夏の街を我が行く

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるものは死ねよとぞ啼く

牧水の歌は、同じ象徴的でもそこに常に感傷があり哀韻があり、小味なところがあつた。これスバル派の象徴歌とちがふ點であり、青年のこころを牽付けた點でもある。牧水は、破調もやり口語歌なども試みた。やはり少しづつ風潮に動かされてゐるのである。わけとてはなくおだんだを踏んでよろこんでみた喜んだとて何にならうぞ（[illegible]）などの如きその一例である。

前田夕暮

前田夕暮も柴舟門から出で、牧水の歌風と並び、無技巧素朴のうちに、西洋近代前期的書に見る如き動きと新鮮さとがあつた。それであるから、同時代の青年でも、牧水に趣かぬものは夕暮に趣つた。この二人の歌風は相竝行して當時の青年に喜ばれ、歌壇に一期を劃したと謂つていい。また、夕暮は雜誌「詩歌」を編輯し、特有の編輯の才を發揮し、よき門下生を養成した。この期間に於ける歌集は「收穫」（明治四十三年三月）、「陰影」（大正元年九月）、「生くる日に」（大正三年九月）などである。今「收穫」より數首を抄記する

魂よいづくへ行くや見のこししうら若き日の夢に別れて

卵ひとつあまりて恐怖につつまれて光冷たき小皿のなかに

濠端の貨物おきばの材木に腰かけて空をみる男あり

風暗き都會の冬は來りけり歸りて牛乳のつめたきを飲む

心やすくなりけり遠く活字刷る機械の音にわかれかへりて

夕暮再版の折附記して、『私は、何がさて措いて自分の生活を根柢にして歌ひたいと思ふ。極めて通例な、一凡人の生活が、少しでも私の歌を透して窺はれたら、私はそれで滿足したいと思ふ。』又、初版の序に、『吾等は藝園の私生兒たることを厭はぬ。唯眞實でありたい』云々。これもその當時の口調であるから、この第六期の歌風を見るには必要な文句である。併し、おもふに夕暮の歌調は柴舟よりも新詩社歌風の影響がある。

北原白秋

北原白秋は、詩集「邪宗門」（明治四十二年三月）、「思ひ出」（明治四十四年六月）を出して詩壇に一期を劃した。明治四十一年新詩社を脱退後に獨自の新歌風を歌つた。白秋ははじめ、「文庫」の服部躬治よりいで、新詩社によりその歌風を享けたのであるが、このころから新風を歌つた。佛蘭西印象派以後に見るごとき色彩の感じと、小鳥の聲の如き純粋さを有つてゐた。その歌調も、晶子調でもなく、自然主義の影響を受けた夕暮一派の歌調とも全くちがふ、獨自の白秋調であつた。その第一歌集「桐の花」（大正二年一月）の序に、『短歌は一箇の小さい緑の古寶玉である。古い悲哀時代のセンチメントの精である。古いけれども棄てがたい。』單なる純情詩の時代は過ぎた。私らはシムプルな情緒そのものを素朴な古人のやうに詠歎することに最早や少からぬ不滿足を感ずる。赤子の如く凡てをフレッシュに感ずる心はまた品の高い文明人の澁いアートに醇化されねばならぬ。『鳴かぬ小鳥のさびしさ……それは私の歌を作るときの唯一無二の氣分である』云々。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ

ほそぼそと出窓の子供笛を吹く紫蘇の畑の春のゆふぐれ

昔見えぬ星のこころよなつかしく鳴りし

穂により人もねむりぬ

太葱の一莖ごとに蜻蛉ゐてなにか恐るる
あかき夕暮

アーク燈ともれるかげをあるかなし螢の
飛ぶはあはれなるかな

吉井 勇

吉井勇も新詩社から出た優れた歌人であるが、「酒ほがひ」(明治四十三年九月)以後、ずつと作歌を繼續し、「水莊記」、「祇園小品」、「昨日まで」、「戀人」、「片戀」等、みな獨自の境を歌つたものである。勇の歌風は、純情(戀愛の情緒)をば、きはめて單純な句法で仕立ててゆく手法で、その調べは常に直線的であるから、一讀して共鳴するものは共鳴してしまふ特質を持つてゐる。また、感情に迂路を取らぬ直截性を有つて居り、調べの直線的な特質と相俟つて、讀者の胸を響かせる一つの力を有つてゐる。

かの宵の露臺のことはゆめ人に云ひたま
ふなと云へる君かな

夏の帶砂のうへにながながと解きてかこ
ちぬ身さへ細ると

悲しげに海邊の墓のかたはらのなでしこ
を摘みかへりたまひぬ

少女みな情を知らずいまははや末法の世
となりにけるかな

圓山のベンチに凭りてあはれにも娼婦の
あそぶ春のゆふぐれ

土岐哀果

土岐哀果は金子薫園の門から出てゐるが、薫園の歌風を模倣せずに、いちはやく新しい歌を作つた。そして其等の歌を集め、ローマ字で書き、三行詩として從來の型を破つたのは、歌集「Nakiwarai」(明治四十三年四月)である。當時の哀果の歌風は、自然主義運動の影響を最も鮮明に受けたもので、日常生活の些事を歌つて、そこに近代風の感慨を巧みに織込むといふものであつた。なぜ哀果はかういふ先鞭を付けたかといふに、既成短歌に餘り長く手をつけず、從つて早く容易にそこから免れ得たのではあるまいか。それから三行に書くといふことも、ローマ字の關係上、西洋詩の樣式に倣つたものの如くである。それだから、幸田露伴の四行詩のやうなもの、中には三行詩もあつたが、哀果の歌の書方のやうに氣が利いてゐない。即ち西洋詩の樣式を應用してはゐなかつたのである。

哀果の歌風は忽ち石川啄木に影響し、啄木が「一握の砂」を出す時には、從來一行に書いて發表したものまで三行にして發表するに至つた。この三行歌の事は單に啄木のみでなく、雜誌「生活と藝術」に集つた作者、それから口語歌人、それから、石原純・片山廣子、石榑千亦の歌集あたりまで影響した。

啄木は哀果との交渉によつて、歌に新しく目ざむるところがあり、「一握の砂」の末期、それから「悲しき玩具」にあるやうないい歌を殘した。それから哀果も啄木との交流により、歌に變化を來した、「黄昏に」、「不平なく」、「街上不平」などの歌風は即ちそれである。

妻とふたりとある貸家を見に入りつうす
くらがりの春のあはれさ

うるさきに日記をつけずなりしころその
ころよりの二人のをんな

わがごとき世の常びとは悶せずめとりて
生みて老いて死ぬべし

遠くより來て買ふものを一つだに餘計に
入れずパン屋のむすめ

あたらしきしやつに著かへし肌ざはり
女といふもそれほどの事

以上もその當時の歌風を見ようと思つて、「創

作」の自選歌に就つた。ローマ字で書いた歌は、日本人には未だ早く讀めないから、比較的ゆつくり讀むので、「萬葉集」の振假名した萬葉假名を讀むのと同じである。さういふ效果を持つてゐることを附記して置く。

石川啄木

石川啄木は「明星」の末期に詩の方で非常に活躍した。それで短歌の方は餘り熱心でなかつたが、「明星」の終刊に近いころから稍短歌に熱心し、「スバル」の初期、それから雑誌「創作」などにその短歌をしばしば發表してゐる。然しその頃の歌は新詩社風の特質を脱却し得なかつたのであるが、土岐哀果の歌集「Nakiwarai」が出で、その評をしたとき、「歌といふものに就いての既成の概念を破壞する事、乃ち歌と日常の行住とを接近せしめるといふ方面に向つてゐる」といふことを云つた。即ち、今まで、論のうへでは誰でも云つたが、實行の點では、哀果の歌で初めてそれを見たのであつた。「歌のいろいろ」といふ感想文に於てもその啄木の氣持がよく分かるとおもふ。

土岐哀果の影響を受けて新しく目ざめた啄木は、一氣に好い歌を作り、「一握の砂」（明治四十三年十二月）の末期、それから「悲しき玩具」（明治四十五年六月）には、哀果よりも好い歌を作つてゐる。これは疾病肺癆上の關係もあり、それから新詩社で訓練した技巧上力量の問題もある。

呼吸すれば胸の中にて鳴る音あり凩よりもさびしきその音

眼閉づれど心にうかぶ何もなしさびしくもまた眼をあけるかな

目さまして直ぐの心よ年寄の家出の記事にも涙出でたり

笑ふにも笑はれざりき長いこと捜したナイフの手の中にありしに

人間のその最大のかなしみがこれかとふつと目をばつぶれる

やや遠きものに思ひしテロリストの悲しき心も近づく日のあり

ここでは、三行の歌を一行に書き、符號點などを除去してみた。原作は「石川啄木全集」によつて検出することが出來る。

水穗・御風・寛

明治四十三年七月の「創作」自選歌號には、伊藤左千夫、石川啄木、土岐哀果、茅野蕭々、茅野雅子、太田水穗、尾上柴舟、若山牧水、金子薫園、吉井勇、高村光太郎、相馬御風、正富汪洋、前田夕暮、佐佐木信綱、北原白秋、水野葉舟、與謝野晶子、窪田空穗を掲げてゐる。このほか、當時の歌集では、内藤晨露（鋠策）の「旅愁」（大正二年四月）、岡稻里の「早春」（大正二年[illegible]）、岡本かの子の「かろきねたみ」（大正元年十二月）などがある。

○　　相馬御風

高岡は日こそ照りぬれ秋の人いくたり過ぎぬ皆うなだれて

遠國へ別るる如きせつなさの涙を日々に分たまほしき

悲しみて見る日は白し春の海白きながらにたそがれにけり

○　　太田水穗

海としもみどりによどむ初夏の微風に向ひ胸はあへけり

あをむけば空みなぎる月光にこずゑは花のみな眼ざめ時

このねぬる朝の寢ざめの蚊帳ながら吹かれて空の青き雲見る

そのほかの諸歌人は殘念であるが簡潔にせねばならぬので、記述することをやめる。與謝野寛は「スバル」第三短歌號（明治四十三年十一月）に歌あるが、既に古い感じを與へる。

ををしくもわが頬の色を好からしむ超人の書と赤き太陽

大地に日の暮れゆけば空高くひかりを放つ富士のしら雪

父母をはなれて少女馴につく銀の楫とるみやび男につく

もう既に簡單な型が出來てゐるから、「超人の書」といへば新しかるべき筈だのに新しくならないのである。

雜誌「創作」

雜誌「創作」は明治四十三年三月一日に東雲堂から創刊された。これは主として新詩社系統の歌風、卽ち「スバル」の歌風に對抗して起つた氣味の雜誌であり、若山牧水が編輯主任の役をし、尾上柴舟、金子薫園、窪田空穂、前田夕暮、土岐哀果をはじめ、新詩社系統の北原白秋の作をも收めてゐる。

日の光すこしかげろひ流れたる水のたまりの午後のはかなさ　尾上　柴舟

柔らかにかなしき春のおとづれぬかの若草の青のいたまし　金子　薫園

冥府の界のくらき関もそぞろかに踏みにけるかな饑ゑにしこころ　窪田　空穂

ふくらなる羽毛襟巻のにほひを新しむ十一月の朝のあひびき　北原　白秋

Hihitoli no 'Tinuta no Hokori,
Waga Kutu ni siroki o mirela,
Namida oti-nure ! —　Toki-Aikwa

おごそかに障子の外に迫りたる冬の夜深しゐひざめにけり　前田　夕暮

衰へしわが神經にうちひびきゆふべしらじら雪ふりいでぬ　若山　牧水

なほ、この創刊號では、「所謂スバル派の歌を評す。創作社同人」といふのがある。これは數氏で評してゐるのであるが、つまり、牧水が晶子の歌を評して、「晶子といふ人間、唯一絶對の或一生命とは殆ど何等の關係が無い、極めて普遍的に遊離した、雲のやうな歌が多い」といふ一文に縮めることが出來る。

社會的には、いまだ當時歌界の主潮流を以て目されてゐたスバル派の歌が、妙に西洋象徴詩の模倣に過ぎぬやうな傾向を示し、局部的な感覺、局部的な言葉の技巧に興味を持つてゐるに過ぎないのに對し、「創作」に集つたものは、個性、人生を尊重しようとする氣勢たる何かがあつた。この「生氣」が、天下の短歌愛好者をしていつのまにか「スバル」の歌風を棄てしめるに至つたのである。

雜誌「詩歌」

前田夕暮が編輯主任で、雜誌「詩歌」の第一號は明治四十四年四月一日發行になつた。夕暮はその前から白日社を起してゐた。それは明治三十九年の秋で、その時には若山牧水、正富汪洋、三木露風、有本芳水、内藤晨露なども集つた。それから二三度めに「詩歌」を出すやうになつたのである。

この一號には、有名な歌人のほかに、白日社詠草のうちには、前田夕暮、近藤元、尾山秋人（篤二郎）、近藤嵐子、富田碎花の歌が載つてゐる。

泥水によわりし魚のなかば浮きしばし動かであるたよりなさ　前田　夕暮

夢に見し緑に似たる黒き鳥群とかはりて悲しかりし鳥　近藤　元

われをめぐる憂鬱なる力ある褪色よ小さなる魂はゆきどころなし　尾山　秋人

死にもせでわれいつしかに二十四の男盛りとなりし寂しさ　近藤　嵐子

身を屈して教權のまへにぬかづけるあさましき者に來る日なかれ　富田　碎花

かういふ歌である。詩論には、服部嘉香のも

の、森川葵村のものなどがある。「詩歌」は夕暮の編輯の才によつて、追々盛になつて行つたが、その有樣を追尋することを今は許さぬ。

雜誌「朱欒」

雜誌「朱欒」は北原白秋の編輯で明治四十四年十一月東雲堂から出た。上田敏、蒲原有明、永井荷風、木下杢太郎、谷崎潤一郎、與謝野晶子、高村光太郎、長田秀雄、吉井勇、和辻哲郎、小川未明、柴田流星、長田幹彦、太田水穗、北原白秋等が執筆してゐる。

○　　　　　　　　北原白秋

ほれぼれとうたふにしくはなかるらむおもへば憂しや涙ながるる
ものおもふわかき男の息づかひそなたも知るやさるびあの花
うららうらと二人さしより泣いてゐしその日を今になすよしもがな

第二卷九號には「哀傷篇」が出、第三卷一號に「哀傷篇拾遺」が出、二號に「三崎俗調」が出、四號に「落日哀歌」がある。『夕暮の餘光のもとをうち案じ空馬車馭してゆく馭者のあり』といふのはその一首である。ちなみに云ふ、二卷九號に齋藤茂吉の「藏王山」十七首、三卷一號に「冬來」十六首載つた。「アララギ」と他流の交流の狀を看ることが出來る。

そのほか歌の雜誌としては「スバル」が出てゐたこと從前どほりである。

「アカネ」・「アララギ」

明治四十一年に「馬醉木」を廢刊したが、これは新に大學を出た三井甲之に編輯を任せて、新名の雜誌をして繼承せしめようとしたのである。そこで、明治四十一年二月に雜誌「アカネ」を發刊した。これには岡麓も力を盡し、新進の三井甲之が編輯の任に當り、簑田八風、廣瀬青波、大須賀乙字等の文學士がこれを補佐して、一つの新鮮な傾向の雜誌を出したのである。甲之は切りに與謝野晶子、夏目漱石を排撃した。なほ、和歌入門で印象的作歌法を說き、「萬葉集」の人麿、沙彌滿誓、旅人、女歌人、卷十六、赤人、家持等を論じた。然るに、左千夫・甲之との間に人間感情の融合を缺き、つひに爭鬪となつた。當時甲之は、左千夫が鷗外の觀潮樓歌會に出席するのを、「權門に出入す」として非難した。ここに同志分裂して、一は雜誌「アララギ」の發刊となり、「アカネ」は明治四十二年七月を以て廢刊した。

○　　　　　　　　三井甲之

冬の夜の狹霧いざよふ山もとにともし火見ゆるは人住めるらし
百樹なす木高き山に照る月の光にかけり行くは何鳥
月讀の光てれればかや原に黃色ただよひ咲ける花かも
うつし身の目には見ずとも心にしとどむといはば吾はなごまむ
秋雨のすがしく晴れし夕暮に相見しゐまい忘れかねつも

なほ甲之は可憐な新體詩も作つたが、「帝國文學」あたりの批評は無理解であり、いまだ新詩社歌風尊敬のなごりが漂つてゐたので甲之のものには殆ど同情がなかつた。甲之はこの時分から、雜誌「日本及日本人」の選歌をし、現今に及んでゐる。漸々、思想的抒情詩の方面に發展し、「しきしまの道」を強調して、つひに「自作農地租免除案について祖國守護神靈に訴へまつる歌」といふのを歌つて、『政黨の面目といふこともあらむしかれども國憲の重んずべきに比ぶべくもあらず』といふ歌を作るに至つた。

雜誌「アララギ」は、明治四十一年十月、蕨眞(一郎)のところから發行になり、「アカネ」と對

立するに至つた。ちなみに云ふ。「アカネ」も、「アララギ」も皆左千夫の命名である。明治四十二年九月、發行所を東京に移し、信濃にあつた、柿の村人等の「比牟呂」が合同し、柿の村人は、「集注する力は全力でなければならぬ」と云つた。同人は、「馬醉木」よりの連續であり、淺野梨郷、湯本禿山、湯川寬雄、茅の花人、山宮允等追々加はつた。古泉千樫、齋藤茂吉等專ら左千夫を輔けて發行に盡力したが、休刊遲刊が時々あつた。「短歌研究」といふ欄があつて、他派の歌をも相論じた。明治四十三年ごろから漸く世間が「アララギ」を認めるやうになつた。森鷗外が明治四十一年に左千夫を請待した以後では、「文章世界」の前田晁が、一二行紹介した。此は短歌の方からの機緣ではなく、當時左千夫が雜誌「ホトトギス」に小說を書いてゐた關係によつて、「文章世界」に小說を依賴した爲めであつた。アララギ派の人々が世間に對した態度、それから世間がアララギ派に對した態度は、牧水の「別離」の歌を評した左千夫の言葉(明治四十三年六月)に對し、牧水が、「場末町の荒物屋の主人の小言」云々といひ、左千夫が、「アララギの評論に對する創作の批評」に就て」を書いたのを見れば分かる。

このごろから、「アララギ」に新運動の萌芽があらはれ、古泉千樫、柿の村人、堀内卓造、中村憲吉、齋藤茂吉等がその急先鋒となつた。そこで左千夫は、「要するに新趣味新傾向若くは現代的などいふことは、時の流行といふ意味以上に何等の意義は無いと存候」といひ、さういふ傾向の歌風を非難する同人もなかなか居り、蕨眞も、「アララギ歌欄で八百ヤードの競走などの青春の思ひもとくに失せて無い」といふに至つた。そのうち、堀内卓造死し、望月光男死し、大正二年七月三十日に伊藤左千夫が歿した。行年五十である。

○　伊藤左千夫

おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く

鷄頭のやや立ち亂れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり

秋草のしどろが端にものものしく生きを榮ゆるつはぶきの花

鷄頭の紅ふりて來し秋の末やわれ四十九の年行かむとす

今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅の光

この期間に於ける「アララギ」は既に他派との交際もあり、赤木の追悼會には左千夫、千樫、茂吉等が出席した。前田夕暮の「陰影」、若山牧水の「死か藝術か」、富田碎花の「悲しき愛」の批評をしたり思ふことを勝手に云つてゐる。つまり、主潮流に棹さしてゐる歌人の作物も毫も恐るるに足らぬといふ面構がよく見えるが、これも前からの連續と看ていい。

一方、阿部次郎、木下杢太郎、小宮豐隆、赤木桁平等の新しい人に執筆を依賴し、一方、萬葉の研究のほかに「金槐集」を論じ、西行を論じ、「古事記」を論じ、内にこもる修行と共に、能動的に外を征服しようとする氣勢を示してゐる。

第七章　第七期

第七期は、大正三年ごろから現在に至る約十五六年間と、なほ未來に連續を豫想せしめる長期間であつて、この期間に於ける主潮流をなすものは「アララギ」の歌風である。即ち現實主義的萬葉調のこの歌風は、さきの新詩社の夢幻的空想主義新古今蕪村混合調とに對立するものである。

第六期に於ける諸歌人は、かの夢幻的空想歌

を排撃し、中には石川啄木の如き、自然主義、社會主義の影響を受けたものもあつたが、いまだその生活主義、現實主義は皮層のところにあつたのではなからうか。それから、牧水、夕暮等のものも、いまだ西洋詩趣向の殘留せるものがあつたのではあるまいか。然るに「アララギ」の現實主義、寫生流、實相流の歌風は定かではないが、何か人間の實相に觸るるものがあり、加ふるに日本人が發明した手堅い萬葉調を以てしたのであるから、そこに心の親和をおぼえて、晶子流の新派の匂ひに飽いてゐたものもとりあへずこの歌風に赴いたのではあるまいか。そして、啄木らが歌をば悲しき玩具であるなどといふに、左千夫の如きは、餘裕なき活動一の論を公にしたごとき、さういふ一國心の態度に何かがあつたのではあるまいか。

なほこの歌風の流行は、萬葉學の流行をば隨伴せしめた。從來、木村正辭あたりの萬葉學者も萬葉調の歌を作り得ず、佐佐木信綱を中心とする萬葉學者も萬葉調の歌を作ることをためらつたのであるが、「アララギ」の萬葉調の歌が廣がると共に、心を安んじて萬葉調の歌を作つた。また、從來萬葉の「學」に携はらなかつた歌人等も、「萬葉集」を調べることとなり、かくの如くにして、「萬葉集」の需用者がいよいよ多く、萬葉の「學」を云々することが一つの流行となるに至つた。

併し、このアララギ歌風が天下を風靡した期間は相當に長く、現在まで續いてゐるのであるから、そこに内容上の起伏があり、小波瀾を觀察することも出來る。一つは萬葉の古調を非難し、自由律を唱道したことであるが此は非力に終つた。二つは「アララギ」の寫生は冷い客觀に過ぎるといつて、強烈なる主觀を唱へたものもゐたが、「アララギ」の歌風が主觀を沒却せざることと左千夫の歌風の如きもあるのであるから、これも實際上不徹底に終つた。それから、大正八九年の交、デモクラシー和歌の唱道があつた。これは現今の無産派短歌の前驅をなすものと思ふが、これも西洋からの輸入理論に本づいたものであるから、理論の暗中摸索で、一首を如何に作るべきかを知らない。それから、歌人等が「萬葉集」を讀んで見るに、實際の「萬葉集」と「アララギ」の歌調とは幾分違ふところがある。そこで、「アララギ」調は眞の萬葉調ではないといふ非難もあつた。これなども「アララギ」が常に一歩先に進んでゐた證據となるものである。それから、「アララギ」の歌風が有名になるに從つて、「アララギ」から離れてゐる根岸短歌會の流を汲んだ歌人等は、「アララギ」は子規の正系ではないといふことも云つた。

新派和歌を愛するものが敢然として「アララギ」の歌風に寄つて來ても、長い期間には、常にさういふ小波瀾が絶えないのである。それでありながら信綱、薫園、白秋、牧水、夕暮、善麿等も萬葉調の歌を作つた。これは、雜誌、歌集等によつて立證するなら極めて容易に立證することが出來る。

この期間に於て、かういふ歌風に赴かぬものは、舊派歌人、與謝野晶子、太田水穗等であつた。また、舊派の雜誌、「歌」とか、「わか竹」などに正岡子規の歌論が紹介されるやうになつた。これも一つの隨伴現象である。

この期間の主潮流は「アララギ」だと謂つても、「アララギ」以外に優秀な歌人が幾たりも居り、この期間に於ける歌壇は前期に比してもつと圓熟の境を成就してゐる。そしてその期間が長いだけ、前期に比して優れた歌人を多く出し、歌集も前期に比していい歌集が出て居る。ただ歌壇全體が、一種ホモゲーンの狀態に見え、現實的萬葉調の短歌で統一されてゐるやうに見

える。そこで歌人以外の、例へば萩原朔太郎の如き詩人側から、歌壇に向つて警告を與へたことなどもあつた。この警告は、歌壇は餘り一色に見える、もつと多色であつても好からうといふ意味であつた。

それから、この期間に、短歌は今は絶頂で、近來將來には無くなつてしまふだらうといふ否定說も行はれた。これは第六期のはじめに、尾上柴舟の「短歌滅亡私論」が彼此いはれたのと類似して居り、それだけ此の期間の短歌が隆盛だといふことをも暗指してゐるのである。

また一面には、「結社」「結黨」といふことを非難したものもゐたが、さういふものが言葉の側から結黨してゐたりして、結句その論は不徹底に終つたごとくである。

一見一樣に見えても、この期間ほど優れた歌人の揃つたことは尠い。これは明治三十年ごろの歌人も生存して作歌を續け、また當時いまだ少年であつたものが生長してあたかもこの期間に活動したためであつた。

然るに、昭和三年の舊派の歌の雜誌「歌」のなかに、『國體政情百般の施設はことごとく進步してゆく世に、歌のみは一日一日と退却の狀勢をたどるは抑も何に原因するのであらうか。』といふ文章があつた。これは一般歌壇が退步するのでなくて、舊派の歌が退却するといふことを示すものであつた。また、「今は御歌所の組織さへ著しく變り、御獎勵の御主意も全く滯りがちの心地せられて、さなきだに振はざる和歌の道をして、ますます其影の薄くなりゆくを思はしむるは、國家のためにも我文學上のためにも、痛嘆にたへざるものなり』といふ文章がある。これもまた舊派歌壇の衰へたことを示すものであつた。されば、この期間には舊派歌壇のことは論ぜない。

雜誌「アララギ」

「アララギ」は、その歌風のやうやく世人から注目せられる氣運に向つたのに乘じ、「アララギ叢書」出版の計畫あり、第一編、島木赤彥・中村憲吉共著「馬鈴薯の花」(大正二年七月)、第二編、齋藤茂吉「赤光」(大正二年十月)を出した。然るに、その年の七月三十日に伊藤左千夫が病歿した。左千夫の死を一期として、「アララギ」はまた步を始めたのであるから、その概要を左に記述する。

岡麓は寶田通文(明治三十九年三月、歿年八十)に學び、それから、眞秀會とか鶯蛙吟社とか種々の歌の集りと交渉があつたが、香取秀眞等と正岡子規を訪れて、根岸短歌會を創立した。通文の歌風は、『きよみがた夕日のそむる色みてぞこよひの月のあかきをぞ知る』『いはけなき子らも指さしあと呼ぶこよひの月のあかくもあるかな』の如くである。明治三十三年、竹の里人が麓の歌を評し、『麓氏の歌一變し再變す。古今調を捨てて俳句調を取りしは其一變にして今又萬葉の古調を取りしは其再變なり。其變ずるや急にして劇、人をして端倪する能はざらしむ。其三變するを待つて詳に評する所あらむ』云々。麓は左千夫歿後、「アララギ」に入り、編輯同人を導いて今日に及んでゐる。

左千夫歿後、島木赤彥上京して、「アララギ」の編輯を擔當し、友人がそれを補佐した。大正四年二月長塚節が歿した。島木赤彥、齋藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉、平福百穗、土屋文明、地方にゐた石原純、間もなく釋迢空も參加して、相携へて進んだが、大正六年茂吉長崎に去り、憲吉東京を去るに及んで、赤彥、千樫專ら編輯に當つてゐた。然るに大正十二年の關東大震災後、雜誌「日光」の出でるに際し、石原純、古泉千樫、釋迢空の三人が「アララギ」から離れた。茂吉大正十四年に歸朝し、島

木赤彦大正十五年三月に病歿した。森山汀川、加納曉、土田耕平、結城哀草果、藤澤古實、横山重、竹尾忠吉、高田浪吉等、女流には、今井邦子、原阿佐緒、杉浦翠子、築地藤子、三ケ島葭子、久保田不二子らは、この期間の「アララギ」の分野に育つた人々である。

この期間に於ける「アララギ」の歌風は三四の起伏があつたが、寫生といふこと、實相觀入といふこと、萬葉調といふことを押進めて行つたことに歸著する。各人銘々の歌風の差も、この主張によつて統一せらるべきである。

この期間に、「切火」(赤彦)、「林泉集」(憲吉)、「氷魚」(赤彦)、「あらたま」(茂吉)、「左千夫歌集」、「長塚節歌集」、「青杉」(耕平)、「霧日」(純)、「しがらみ」(憲吉)、「大虚集」(赤彦)、「ふゆくさ」(文明)、「庭苔」(麓)、「寒竹」(百穗)、「國原」(古實)等の歌集を出した。

いまや略筆せねばならぬので赤彦の歌五首を以てこの期間の歌を代表せしめる。

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月のかげ水にうつろふ

山さへも見えずなりつる海なかに心こほしく雁の行く見ゆ

ある日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず冴えかへりつつ (病床吟二首)

信濃路はいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ

「アララギ」は一般歌壇からは常に不滿足であるかの如く批評されて來たけれども、それでもなほ歌壇の主潮流の力量を示し來つたのである。

それから古泉千樫は昭和二年八月に歿した。千樫は少年にして歌を作り、小出粲、海上胤平から、移つて竹柏會の石榑千亦、佐佐木信綱に行き、それから伊藤左千夫に師事したのであつた。千樫歿後、大熊長次郎等相計つて「青垣」を發行した。

〇　古泉千樫

素足にて井戸の底ひの水踏めり清水つめたく湧きてくるかも

ひたごころ靜かになりていねて居りおろそかにせし命なりけり

妻はいま家に居ぬらし書深くひとり目ざめて寢汗をふくも

おもてにて遊ぶ子供の聲きけば夕かたまけて涼しかるらし

秋さびしもののともしさひと本の野稗の垂穗瓶にさしたり

千樫の著書に、歌集「川のほとり」、「屋上の土」、「屋上の土以後」(未刊)、評論集に、「隨縁抄」がある。

舊根岸短歌會系

根岸短歌會から出でて、「アララギ」に據らないものは、皆「アララギ」を目して竹の里人の正系でないとし、自らその正系を以て任じたものが多い。三井甲之はその後、雜誌「人生と表現」を出し、雜誌「日本及日本人」に據つた。川田麻須美、橋川正、花田比露思等がそこから出でた。香取秀眞、依田秋圃、淺野梨郷等は、雜誌「歌集日本」を出し、寒川鼠骨、蕨橿堂等は子規庵歌會をおこし、その作は雜誌「日本及日本人」に出てゐる。なほ、花田比露思、安江不空は雜誌「しほざゐ」、ついで「あけび」を發行して今日に及んでゐる。

諸歌人

この期間にも、信綱、晶子、柴舟、薫園、空穗等も從來の歩を續けたのであるが、これらの人々の事は既に前期に説いた。白秋、牧水、夕暮、

哀果、善麿」等のことも既に説いた。

この期間で活躍したものは、太田水穗、尾山篤二郎、松村英一、橋田東聲、吉植庄亮、川田順、木下利玄等がゐる。尾山篤二郎は元「詩歌」の同人であつたが、萬葉學に手を染め、萬葉調の歌を作るに至つた。歌集に、「さすらひ」、「明る妙」、「野を歩みて」「曼珠沙華」「草籠」、「處女歌集」、「白圭集」などがある。「短歌雜誌」、「自然」を編輯した。松村英一は、半田良平、植松壽樹等と共に空穗門に出でたが、この期間には歌風が變つた。歌集「やますげ」、「春かへる日に」等がある。「短歌雜誌」、「國民文學」を編輯してゐる。橋田東聲は「覇王樹」を編輯し、歌集に「地懷」がある。吉植庄亮は薫園門下であつて、「橄欖」を編輯し、歌集「寂光」、「くさはら」等がある。

そのほか、この期間にて注意すべき多くの歌人のことは今は省略せねばならぬ。この短歌史を讀まれる人々はその不備をば自由に補足してほしい。

○　尾山篤二郎

たうまめのむらさきの花垣の秀にいまだ
も咲きて秋すぎむとす

この森にいまだもみづる木はあれど霜に
濡れたる道こほりたり

年まねく時のうつりを見つめ來ぬ今年も
冬になりたるらしき

○　吉植庄亮

小波を見てゐるよりも忙しなき小禽のあ
たま皆みな啼きをり

ふるさとの出津のひろ野の葭穎の矛並め
萌ゆる春立ちにけり

眞日ひとつ空にさぶしも韃靼の海は見る
かぎり光を放たず

○　橋田東聲

朝しぐれにはかに寒し見放くれば遠き高
嶺は雪降りにけり（良寛遺跡）

おのづから心ときめきて下り立つや堂の
うしろ遠く佐渡が島見ゆ

ながれ行く月日はてなし遠く來て大きみ
いのちをろがみまつる

○　河野慎吾

ひひらぎの刺もつ枝もやはらかに今朝淡
雪のふりそめにけり

水ぐるまかたりことりと音のして夜もす
がら何を搗くにやあらむ

日ごろうとき隣の人も聲かくる雪のあし
たのおもしろきかな

○　松村英一

白粥の煮えをよろしとわが妻に病みてや
さしきものいひにけり（病妻）

草萌ゆる春の朝の土ふかく父をうづめて
かへり來にけり（父逝く）

いつ如何になりて果つらむわが身かと燒
けひろごれる町見つつ來し（震災）

○　川田順

しら砂のすがしき道のゆく手にし殯の宮
は深くこもれり（李王大葬）

いにしへにありける君は獸らを守部に立
たせ安眠したまふ（十二神像）

遠き世の新羅の王のおくつきを今日の夕
日のしづかに照せる

○　木下利玄

日がな日ねもすたぎつ溪河夕さればいよ
いよ高くとどろけるかも

竹山に古葉おちつくおと聞ゆ霜夜のふけ
に覺めつつをれば

近頃は四海波しづかなれば軍艦もこの浦
に來てどんたくをせり

川田順も木下利玄も竹柏會より出でてゐる。順は萬葉調の流行し、良寛などの流行して來たとき、新古今流を唱道したのであつたが、

後それを改めた。利玄は、竹柏調からアララギ調に移り、晩年獨自の素朴調を創めた。終りの軍艦の一首の如きが卽ちそれである。

太田水穂は、詩歌集「つゆ草」(明治三十五年)、詩歌集「山上湖上」(明治三十八年)、歌集「雲鳥」(大正十一年)、「冬菜」(昭和二年)を出版し、雑誌も、「比牟呂」、「創作」、ついで「潮音」を大正四年に發行し今日に及んでゐる。その長い歩みの間に、古歌集の講義、歌論「短歌立言」「和歌俳諧の諸問題」等を出版してゐる。

明治三十五年の「つゆ草」の歌は新派和歌の未だ初期に屬してゐるにもかかはらず、相當の力量を示し、「ほつ峯を西に見さけてみすずかる科野のみちに吾ひとり立つ」といふ調子で、寧ろ調べ高き萬葉調に近い。

水穂は大正九年ごろから、芭蕉、良寛等を研究し、悟入するところがあつて、歌風も自然に變化して來た。そのあたりから、「アララギ」の歌風(赤彦の歌風)に異を樹てることを常とし現在に及んでゐる。水穂の歌の變化は、最近の歌集「冬菜」の卷末記によつて知ることが出來る。最近の歌風三首を錄す。

新菜に風そそけだつ日の暮は穂屑うつ手の侘びらるるなり

西風ふけば木の葉のふりのはらはらとこぼれに[illegible]

かたまれる氷雲のへりの際細くあかねに燒けて震ふるなり

また歌集刈萱集(大正[illegible]年)がある。小田觀螢、四賀光子、峰村國一、芥川徳郎、山下秀之助、宮崎[illegible]、大井廣、野澤[illegible]、山崎[illegible]等は「潮音」で養はれた人々である。

諸流派と其雑誌

この期間に於ける短歌の雑誌は、歌集と共に甚だ多かつた。それを一々分析することは今は許さぬ。またその結社なり、その結社の主な歌人に就て論ずることが出來ぬから、表の如くにして次に略述する。

「心の花」。佐佐木信綱主幹。前期からの續きで、既に「心の華叢書」四十册を出し、前に記した人々の間にも出入があり、石榑千亦、齋藤瀏、柳原白蓮(燁子)、下村海南(宏)、山下陸奥、前田福太郎、川田順、木下利玄、石榑茂、前川佐美雄などが此期間に活動した。

「明星」。これは大正十一年に復活したもので寛、晶子はじめ舊新詩社同人、萬造寺齊、中原綾子、川上賢三、平野萬里、大井蒼梧、其他(第八[illegible])。

「スバル」。大正二年十二月一日が終刊。「吾等」といふ雑誌が萬造寺齊によつて大正三年一月から創刊せられた。

「アルス」。北原白秋。大正四年四月一日創刊。歌は巡禮詩社同人で、村野次郎、河野愼吾、臼井史郎、横地信[illegible]、宮川[illegible]次郎、北原放二、佐藤緑三郎等。

「短歌雑誌」。大正六年十月一日創刊、今日に及んでゐる。あらゆる流派を包容し、正しき評論をするといふ旨趣で起つた。はじめ西村陽吉、松村英一、尾山篤二郎編輯し、ついで松村英一編輯し、時に半田良平、尾山篤二郎補佐した。

「生活と藝術」。土岐哀果主筆、大正二年。啄木歿後、啄木流の歌風をひろめた。新しき歌、生活の歌といふものを唱道す。

「創作」。明治四十三年二月創刊。若山牧水、太田水穂。復活大正二年八月。大正三年一月休刊。大正六年復活。和田山蘭、菊池野客、高鹽背山、加藤東籬、越前翠村、若山喜志子、中村三郎、茅野[illegible]、中村柊花、平賀春郊、大悟法利雄等。

「潮音」。太田水穂。大正四年創刊。小田觀螢、四賀光子、佐野翠坡、岩淵要、大井廣、

芥川葭穗（徳郎）、峰村國一、山下秀之助、野澤柿葉、山崎等等。

「詩歌」。前田夕暮。明治四十四年創刊。尾山篤二郎、富田碎花、近藤元、熊谷武雄、金子不泣、米田雄郎、楠田敏郎、中島哀浪、廣田樂、醍醐信次等。一時廢刊。昭和三年六月復活。

「水甕」。尾上柴舟。大正三年創刊。上田英夫、石井直三郎、金澤種美、岩谷莫哀、細井魚袋、逸見義亮、岡野直七郎、井上雪下、松田常憲、兒山信一、日比修平、湯本喜治。先に雜誌「車前草」（明治四十四年より明治四十五年）があつた。

「國民文學」。窪田空穗。大正三年五月。松村英一、半田良平、植松壽樹、本居亮一、丸山芳良、高瀨俊郎、川崎杜外、菊地劍、小田切浪彦等。

「朝の光」。空穗門下の宇都野研、氏家信、生沼豐彦、安部路人等。「地上」。對島完治、丸山芳良等。震災後大正十三年に、「國民文學」、「朝の光」、「地上」、合して、「國歌」を發行したが、二たび分れて、「國民文學」と「白檮」とになつた。「白檮」が二たび分れ、「地上」と「勁草」とになつた。又、丸山芳良「新園」を出した。

「珊瑚礁」。大正六年三月創刊、大正八年六月廢刊。四海多實三、森園天涙、鎌田盧烽、今村沙人、橋田東聲、中山雅吉、臼井大翼、橘小華、貴田實。ついで、大正八年十月雜誌「行人」を發行した。

「覇王樹」。橋田東聲、臼井大翼、高梨直郎、渡邊湖畔。大正八年九月創刊。

「常春」。並木秋人によつて創刊され、昭和二年から、矢部道氣、松岡貞總、宮崎榮太郎によつて繼續されてゐる。

「奏皮」。河野愼吾、若林牧春、酒井廣治。大正八年創刊。

「香蘭」。村野次郎、杉浦翠子、酒井廣治、筏井嘉一、本間樂寛等。

「自然」。大正八年五月。尾山篤二郎、北原放二、上野甚作。大正十五年復活。日比野道男、森三樹雄、木村芳山、岸良雄、赤木邦輔等。

「橄欖」。吉植庄亮、佐野翠坡、山下秀之助、鈴木康文等。

「吾妹」。生田蝶介、松本仁、山本亮等。

「ごぎやう」。中河幹子。「草の實」。水町京子。「あしび」。相澤照子。

「青垣」。古泉千樫の門下、大熊長次郎、橋本德壽、相坂一郎、鈴木杏村、増田岱吉、水町京子等。

「日光」。此は大震災後、大正十三年一月「アララギ」、「國民文學」、「心の花」、「白檮」、「覇王樹」、「創作」、「自然」等の歌人をのぞいた歌人の大合同であつて、天下の優秀歌人を殆ど網羅した觀があつた。北原白秋、古泉千樫、土岐善麿、前田夕暮、石原純、釋迢空、川田順、木下利玄、村野次郎、吉植庄亮、森園天涙、四海多實三、矢代東村、淺野梨鄕、中島哀浪、今村沙人、穗積忠などであつたが、この大共同雜誌は昭和二年に廢刊になつた。

なほ短歌の雜誌は非常に多く一々分析することが困難である。近時、雜誌「眞人」は、中島與一郎編「全國歌壇情勢一覽表」を附錄としてゐる。精細な調査であつて大に有益をおぼえる。よつて私の記述を省いて、この一覽表を示し、なほ、古賀益城編の「現歌壇大觀」を示したくおもふ。

口語短歌

口語短歌は、ずつと前から折に觸れて試みたものもゐた。海上胤平でさへ、「火鉢だき北窓しめて居たりしは昨日であつたに霜がなく」を以て揶揄してゐるくらゐである。正岡子規の

如きもその一人である。それから稍くだつて若山牧水、前田夕暮、土岐善麿なども試みたが、歌は「口語歌でなければならぬ」といふ主張のもとに作歌して居るのではなかつた。

その口語歌を主張したものには、青山霞村が居り、西出朝風が居り、鳴海うらぶる（要吉）が居る。霞村の「池塘集」は明治三十九年の版である。ついで、西村陽吉、矢代東村、石原純等も口語歌を主張するやうになつた。

口語歌の雜誌は、「カラスキ」（青山霞村）、「今日の歌」（西出朝風）、「藝術と自由」（西村陽吉）、「新短歌風景」（松本昌夫）などがある。

胃をみたせどのテエブルで食ふ者も顔に殺氣のあらはれがない　青山　霞村

その頃は鴉の歸る秋空もあまりに長く明るかつたが　西出　朝風

どぶ泥に向つて叫ぶ――一體誰が社會惡に責任をもつのか　西村　陽吉

今となつて誰が君達のその立派な服装なんかにひけ目を感じる　矢代　東村

青山霞村は「池塘集」再版序（大正七年）に、「明治の新派がその道程を行盡した時、爲すべきことは前途の險難を踏破して、口語の新天地を開くのであつた。然るに彼等は徒らに後を顧みて、鵲鳴くも、あらずけり、など萬葉の腐語死調を學び遂に子規一派の萬葉模倣派をして名を成さしめたばかりか、今日では鮑魚の肆に居るを忘れ、相率ゐて擬古の文辭を弄して居る。（中略）若し英米の詩壇でチョーサー以前の言葉その語氣語調に依らなければ詩が作れないといふならば、それは全く狂氣の沙汰である。萬葉模倣の主張は迚も世界の公壇に持出せない議論である」云々。

霞村の議論にはフモールがあつて、「萬葉の二番煎じ三番煎じ」などいふあたりは威勢のいいものであるが、作物は舊くて新派和歌初期のおもかげを脱しきれずにゐた。然るに近時それが少しく好くなつたのは、陽吉、東村などの新派に刺戟せられたためであらうか。口語歌人はまた、近時、無産派歌人の一部と結び付く傾向を有してゐる。

大正十五年四月に、新短歌協會が結成し、口語歌人をそれに集めた。青山霞村、西出朝風、鳴海要吉、西村陽吉、石原純、安成二郎、大關五郎、伊藤音次郎、矢代東村、清水信、後藤史郎、岸良雄等であつた。

口語歌問題も古いものであるが、發達が遲々としてゐる。これは「アララギ」の現實寫生萬葉調のために撃退されたこと、霞村の序文のごとくであるが、も一つの原因は、現代人は現代語で歌を作れなどいふ、幼稚な標語以上に發展し得ないからであつた。併し口語歌の主張を二十五年以上も爲してゐるのであるから、も少し發達してもいい筈のものである。

無産派短歌

無産派短歌は、マルクス主義短歌の謂であつて、それだから、主義は、物質說、階級意識、プロレタリア現實觀を强調して、プロレタリア短歌の確立を叫んで居り、彼等の對立せしめむとする歌壇は、封建主義、宗匠主義、沒階級個人主義の歌壇にある。これらはプレハーノフなどを起點として興つたマルクス主義藝術論の舶來に本づくものである。

昭和三年十月、新興歌人聯盟が成り、「短歌革命」といふ雜誌を發行する運びになつたが、直ちに分裂して、伊澤信平、坪野哲久、淺野純一、渡邊順三、會田毅等の無産者歌人聯盟から雜誌「短歌戰線」が昭和三年十二月發行になり、昭和四年五月廢刊した。

一方、石榑茂、五島美代子、前川佐美雄らは

雜誌「尖端」を發行し、昭和四年三月創刊、昭和四年七月廢刊した。

昭和四年六月、右の二つから、「プロレタリア歌人聯盟」が結ばれ、雜誌「短歌前衞」が發行されることとなり、その創刊號は、昭和四年九月に出た。批判は田邊駿一、坪野哲久、河野健二等によつて、先づ「アララギ批判座談會」から出發してゐる。

第八章　第八期

第八期は現在から未來に渡る期間であつて、いはば、「明日の短歌」を意味するものである。そしてその主潮流たるべき短歌はどういふものであり得るか、いまだ渾沌としてゐる。

ただ、此處で私は、明治初年から現在に至るまでのことを少しく回顧しよう。明治初年から明治十年ごろまでは、徳川歌壇の連續であつたが、すでに何か興隆すべき萌芽を暗指してゐる。明治十年から明治二十年前後までは、西洋開化と反動との思想の交錯があつた。明治二十年から明治三十年迄は和歌改革の評論時代で既に新派和歌革進の實行序幕に入つた。この期から初めて「明治の和歌」と稱へることが出來る。明治三十年から明治三十五年頃までは新派歌人群雄並立の狀態を呈した。明治三十六年頃から明治四十二年頃までは新詩社歌風の華麗夢幻趣味の全盛時代で、晶子の歌風がこれを代表してゐる。明治四十二年頃から大正三年頃までは自然主義的世界觀相の時代で、五六人の新進歌人がその歌壇を形成した。大正三年ごろから以降、現實寫生主義的萬葉調が歌壇の主潮流を占め、「アララギ」の歌風がこれを代表し、「アララギ」以外の數多くの歌人を包容してゐる。そして、今後この歌風に代るべきものはいまだ分からない。

これは明治大正歌壇の歷史のみではない。和歌の風潮が纖巧に墮し、一樣沈滯して來るときに、一つの動搖が起つてそこに一期を劃する、これが革新運動の常である。本邦の歌壇は、さういふ幾つかの革新運動を經來つて今日に及んで居る。

今や現歌壇は既に纖巧一樣に墮ちむとしてゐる。すなはちここに一つの動搖を豫期せねばならぬ。そして現歌壇の主潮流に對つて戰鬪せむとするものは、口語歌か、無產短歌か、或は何か。いまだ渾沌としてゐて分からない。

人は或は云ふ。短歌は既に終末に近づけりと。けれども、歌壇が常に猶豫なき活動を意味し、無間斷の爭鬪を意味するものであるなら、かかる預言者めくことは、一つの安價な諦念に過ぎぬと謂ふべきである。

賀茂眞淵は、歌を論じ、「まごころ」を唱へて「しわざ」を排した。これはいかにもその通りである。香川景樹は、「しらべ」を説いて、「ことわり」を排した。これも此の通りに相違ない。

そのほか、明治になつてからの歌論を通覽するに、皆、「まこと」を説き、「ありのまま」を説き、實況、實事、實意、實感、自然を説き、自然の情感(高崎正風)を説き、自己の生活を説き、寫生、實相觀入を説き、リアリズムを説いてゐる。これらは盡くその通りに相違ない。

それにも拘はらず、實際の作歌は容易にさういふ工合には行つてゐない。この事實を切實に考慮することは、將來の歌壇を決定すべき一つの大切な要約だと謂つていい。

齋藤茂吉

明治大正俳諧史概觀

今度改造社が「現代日本文學全集」の一篇として和歌、俳句の集を出版するに當り、私に明治大正の俳諧史の概觀を書けとのことであつた。私が明治大正の俳壇の一人であるといふことの爲めに頗る書き惡いばかりか、私はさういふことを敍述するに頗る不適當な性質であるから、之を辭退したのであつたが、是非書けとのことであつたので止むを得ず承諾した。

子規の生きてをつた明治三十五年頃までのことは比較的に書き易いのである。それまでの明治俳諧史は全く子規が中心であつて、其他の人々は俳諧史に關係することが少なかつたと云つても宜い。

子規の行動は徴細の點に至るまでたいがい私の記憶に殘つてをる。又手近な書物を渉獵することによつて記憶の誤りを正すことも出來る。が、碧梧桐が「三千里」の旅に上つて以來のことは明らかでない節が多い。殊にその門葉の人々に至つては全く知るところがない。その他の人々にあつても、「ホトトギス」を離れ去つた人々の行動に至つては之れを知悉しない。

俳諧史の概觀といふことであつたが、只外部に現はれた、俳諧雜誌とかその編輯者の名前を列記したのに止まる。各々の主義主張を明らかにしようと思へば、勢ひ自分の主張を强調せなければならぬことになる。だからそれらにはなるべく觸れないやうにしたのである。

名前を列記するだけでも、「ホトトギス」一派にのみ詳しくならうとする傾きがある。私は努めてこれを避けたいと思つたが、しかし尙遂にその譏りを免かれ得ないであらう。

宗匠

明治二十年前後から新文藝興隆の氣運が動いて來て、坪内博士の「小說神髓」といふものが先づ公刊され、「妹と背鏡」、「書生氣質」などいふものが相前後して出で、眠つてをる文壇に警鐘を叩いた。それから次いで紅葉、露伴などが出て明治文學といふものの華が咲くやうになつたのであるが、凡そ氣運の動く時といふものは各般のことに其のひらめきが見えるものである。既に明治十五年に「新體詩鈔」なるものが外山正一、矢田部良吉、井上巽軒など、その頃の新知識に依つて刊行されて、詩壇の爲めに曉鐘を撞いた。

俳句といふものはまだ發句と稱して宗匠の手にあつた。その頃で有名であつた宗匠は、老鼠堂永機、雪中庵雀志などであつた。老鼠堂は其角の系統をひいてゐるものであつた。雪中庵は勿論嵐雪の系統をひいてゐるものであつた。これらの宗匠といふものは、禪坊主の系統のやうなものであつて、代々その弟子のうちの有力なものが跡を繼いで、その門葉を統べて今日に來たものである。すべて封建時代の餘風を受けてゐて、子弟の間の約束といふやうなものはなか〳〵嚴格のものであつたやうである。その宗匠の作句の技倆などは今日から見れば問題でないが、しかもその門葉に對しては絕對的權

力を持つてゐて、恩威並び行はれる(？)といふふうであつた。されば創作上の問題よりもその内部の社會組織の上に重きが置かれてゐたやうである。今日でも役者とか藝人とかいふものの上に行はれてゐるやうな組織が宗匠の上にも存在してゐたやうである。否現にまだ宗匠と云はれるものは全國に無數に存在してをる。それら宗匠の間にもやはり當年の遺風がいくらか存在してゐるやうである。

しかし宗匠なるものはその文學的功績から云へば全くゼロである。永機や雀志にしてからが何等見るべき作物は殘さなかつたといつてよい。これはしかしながら永機や雀志その人のみを責めるのは酷である。時代がいまだ目覺めなかつたといふ事を考へねばならぬ。たゞ傳統を受け繼いで先人の遺業を守つてをればそれで宜いとされた時代であつたのである。彼等は古人以外に自己を跳躍させようといふやうな考へは初めから毛頭無かつたのである。

正岡子規

正岡子規は大學豫備門から東京帝國大學に學んだ。その同級に尾崎紅葉、山田美妙などがゐた。新しい文藝の運動はおのづからそれら新人に俟つところがあつた。美妙、紅葉などは子規よりも一歩先んじて文壇にうつて出た。その行動には華々しいものがあつた。子規も當時小說を書かうと思つて『月の都』一篇を脱稿した。が、子規はこれを書いて見て自ら小說家でないと云ふことを自覺した。これより先子規は漢詩をつくり、和歌をつくり、又俳句を作つてゐた。なかでも俳句には熱心であつて、其頃大學の圖書館にあつた乏しき俳書を渉獵して古俳句を分類蒐集し始めた。これが近年『分類俳句全集』として出版されたもののはじまりである。常磐會寄宿舍といふのは舊藩主の經營してをる學生の寄宿舍であつたが、そこで子規は、共に同宿してゐた新海非風、五百木飄亭、その寄宿舍の監督であつた内藤鳴雪、並びに子規の從弟であつた藤野古白などと共に俳句を作つてゐた。これらの人々は何れも子規に促され導かれて俳句を作つてゐたものであつた。

これより先子規は郷里の松山に歸省した時分に、そこの宗匠である其戎といふ人に俳句を見て貰つたことがあつた。子規の作句は、後年子規が月並俳句として罵倒したところの月並宗匠の感化をうけることが多かつた。ところが非風以下の人々になると月並宗匠の感化をうけることが少なく、或は絶無であつたため、思ふまゝのことを十七字に述べてゐて何等拘束されることがなかつた。子規はこれらの人々を指導しながらも却てこれらの人々に感化さるるところが多かつた。郷里の中學校に學んでゐた河東碧梧桐、高濱虛子の二人は遥かに子規に教へを乞うた。蓋し二人の目的は小說にあつたが、二人は子規に勸められて亦俳句を作つた。

斯かる狀態のもとに子規の身邊に一變化が起つた、これがやがて俳壇に一大革命を呼び起す動機となつた。

「日本」入社

子規は大學を止めた。そして日本新聞社に入つた。日本新聞社長陸羯南は、子規の叔父加藤拓川の友人であるといふ緣故からであつた。子規は終始羯南の庇護を受け、羯南は又子規の才を愛重した。

この年の夏から子規は已に「日本」紙上に俳話、古俳人の品評並びに俳書の批評と云ふやうなものを掲載してをつた。之れが實に惰眠をむさぼつてをつた俳壇の警鐘となつたものであつた。

けれどもそれは所謂宗匠といふ側ではなかつた。宗匠といふ人々は、書生が何を云ふかと云つた調子で、何等その言に顧みようともしなかつた。その警鐘に目ざめかけて來たものは子規と同じく書生であつた。子規が「日本」紙上に俳句を掲げるに至つて、幾多無名の書生が句を寄せてその教へを乞ふに至つた。

小説に携はつてをる人々、例へば尾崎紅葉、幸田露伴の如き人々も又俳句を作つた。しかしこれらの人々は畢竟餘技として樂しみ半分に作るものに過ぎなかつた。只紅葉は晩年熱心に句作に努力したといふことである。子弟の禮がやかましく俳席の秩序など嚴格なものがあつたとかいふことである。

「俳諧」

推の友なる一團體は伊藤松宇を盟主として、片山桃雨、森猿男等の人々の團體であつた。子規が是等の人々と交遊をはじめたのは明治二十六年のはじめでもあつたらうか。二十六年の三月に「俳諧」と稱へる雑誌がこれらの團體の人々の手によつて創刊された。子規も大いに助力してをる。それは僅かに二號を刊行したばかりで廢刊になつてをる。宗鑑の『犬筑波集』や鬼貫の『ひとり言』並びに素外の「俳諧手引草」などが載せてあるほかは、子規の古俳句の分類並びにその友人の俳句が載せてある。

「小日本」

明治二十七年に、「日本」の分身である「小日本」といふ新聞が刊行せらるゝやうになつた。子規は選ばれてこの新聞の編輯に當ることになつた。子規は五百木飄亭と共に寝食を忘れてこの新聞に執掌する傍ら亦俳句を鼓吹することを忘れなかつた。「小日本」の校正として雇用された佐藤紅綠、石井露月二人も亦俳句を作るやうになつた。其他福田把栗、梅澤墨水等の投句家が輩出した。同年に碧梧桐、虚子も亦高等學校を中途退學して上京した。俳句の會合も漸く盛んならんとした。

秋聲會、筑波會、『俳諧文庫』

角田竹冷を盟主とする秋聲會なるものが組織された。尾崎紅葉等も其の一員であつたかと思ふ。大學に筑波會なる會合が又組織された。これは大野酒竹等大學に籍を置いてゐるものゝ會合であつた。

酒竹は後年醫學士となつた人であるが、しかも生前俳書を集めることに熱心であつて、俳書蒐集の先鞭をつけた人である。大學の角帽を被りながら淺草、湯島の古本屋をあさり廻つて古俳書を手に入れたものである。後年博文館が『俳諧文庫』を刊行し古俳書を飜刻するに當つてその藏書も用を爲す事が多かつた。その『俳諧文庫』の第一篇の附錄には内田魯庵の『芭蕉庵桃青傳』があり、其第二篇の附錄には酒竹の「俳諧略史」があつた。

俳壇の革新

二十七年二月に創刊された「小日本」はその年の七月に廢刊された。子規はまた「日本」に復歸して、同時に紅綠等も日本新聞社員となつた。これより先五百木飄亭は看護卒として日清戰爭に從軍した。

子規は二十八年の三月に又先輩友人の留めるのをも聞かず從軍記者として從軍した。五月歸國の船中に於て喀血し、しばらく神戸の病院、須磨の保養院、郷里の松山等に保養し十月東京に歸つた。

この子規の喀血といふことは、再び俳壇の重大な事實として記憶せねばならぬこととなつた。

子規の蒲柳の質を以て從軍を敢てした志は、如何なる理由にあつたのか忖度するに苦しむが、要するに子規は四方の志を抱いてをつた人と云つて宜からう。明治維新の後をうけて、青年の志が多く天下國家の上にあつた時代であるから、子規の志も亦想像するに難くない。「曰く、會計あたるのみ。」といふ孔子のやうに、子規は何事でも自分の前に横はつて來たことには全精神を傾けて忠實に勵精するのが常であつた。だから新聞記者になれば新聞の事に忠實に、又戰爭が起れば國民の一員として忠實にその職務につくといふやうな考へがあつたのであるが、しかも窮極するところは大いなる功名にあつた。が、一たびはげしい咯血をして餘命幾許もないことを悟つてからは、遂に專心俳壇の革新を促すことになつた。

『俳諧大要』『俳人蕪村』

その鄕里松山に在る頃から稿を起してその年一ぱいに脱稿した「俳諧大要」なる一篇は、その名の如く俳諧の何物であるかといふことを說くのが目的であるが、要するに自分の唱へる俳句の道は斯の如きものであるといふことを明らかにしたものである。子規の俳句に於ける大著の一と云つて差支ないものである。續いて又明治二十九年「俳人蕪村」の稿を終へた。それは子規が俳人蕪村を縱横に品隲してその眞價を明らかにしたものである。これより先宗匠たちが神さまの如く一指も觸るべからざるものとして尊敬してゐた芭蕉の句を評論したことはある。が、今蕪村を地下より起し來つて芭蕉に比較し、積極消極の美を論じ、客觀主觀の句風を明らかにしたあたりは、前人未發の議論として俳壇の注意を呼び起すに十分であつた。たしか同年であつたかと思ふ、岡野知十が「東京每日新聞」紙上に子規一派の俳句を評論したことがあるのは。子規一派を蕪村派と呼ぶやうになつたのもたしかこの知十がはじめであつたかと思ふ。兎に角「俳人蕪村」も亦「俳諧大要」と共に子規の主張を明らかにするところの大著と云つて差支ない。後年「ホトトギス」發行所から俳諧叢書を出版するに當つて先づこの「俳諧大要」と「俳人蕪村」を選んだ事は偶然ではない。

「ホトトギス」創刊

明治三十年の一月、伊豫松山、柳原極堂の手によつて雜誌「ホトトギス」が創刊された。これは子規が、二十八年の秋松山に歸つて、夏目漱石の假寓に同居して病を養つて居つたとき、極堂等數人が朝暮子規のもとに出入し俳句を學んだことがあつた。その一團體が松風會の名のもとに後年まで會合をつゞけてをつた。自ら地方新聞を有してをつた極堂はその活版職工を使つて雜誌を編むことに便宜があつた。それらの理由から遂に俳句雜誌ホトトギス」を創刊することになつたのである。子規、鳴雪、飄亭、碧梧桐、虛子などが東京より草稿を送つてこれを援助してをつた。翌年の八月二十號まで續刊したが遂に廢刊する運命に至つた。

『新俳句』

三十一年のはじめに『新俳句』が刊行された。これは子規が「日本」に選拔して載せた俳句を、北里病院の患者として入院して居つた、碧玲瓏、三川、東洋の三人が編輯して、子規の許しを受けて、更に子規の選拔を乞うて刊行したものである。

「ホトトギス」續刊

明治三十一年の十月に、虛子の手に依つて、

「ホトトギス」を東京に上せて續刊することになつた。これより以來子規派の俳句はこの「ホトトギス」を中心とするやうになり、世間の耳目を集めるやうになつた。子規病み、虚子病み、多難な月もあつたが、碧梧桐等之を助けて滯りなく續刊することが出來た。

俳書刊行

明治三十一年虚子著『俳句入門』が刊行された。これより先、明治二十九年より雜誌『日本人』紙上に俳話を連載した。それを纏めて一冊となしたものである。

明治三十二年に碧梧桐著『俳句評釋』が刊行された。『猿蓑』を評釋したものである。

同年松宇著『中興五傑集』が刊行された。蕪村、曉臺、蓼太、白雄、闌更五人の句を集めたものである。

又水落露石の手によつて『蕪村遺稿』が刊行された。『蕪村句集』に洩れた蕪村の句を蒐めたものである。

『蕪村句集講義』も亦刊行された。これは「ホトトギス」創刊以來、子規、鳴雪、碧梧桐、虚子等が輪講して「ホトトギス」に掲載したものを輯めたものである。

俳書の刊行漸く多くなる。

俳諧雜誌(一)

加賀の大聖寺から上田鳴球等によつて「むし籠」と稱へる俳句雜誌、靜岡から加藤雪腸等の手によつて「芙蓉」といふ雜誌、大阪から青々、月斗によつて「車百合」と云ふ雜誌、石井露月、島田五空によつて秋田縣能代から「俳星」といふ雜誌、京都から龜井小姑の手によつて「種瓢」といふ雜誌などが續出した。

又秋聲會から「卯杖」といふ雜誌が出た。

『春夏秋冬』

明治三十四年に子規の手によつて『春夏秋冬』春の部が發刊せられた。これは『新俳句』以後、「日本」紙上に載せられた子規の選句のうちから更に優秀なものを選んだ句集であつて、『新俳句』に亞ぐ子規系統の句集と云つてよい。夏の部以下は子規の手に依つて編輯せられるに及ばずして子規は沒した。後年碧梧桐、虚子が共選してその缺を補つた。

『獺祭書屋俳句帖抄』

明治三十五年『獺祭書屋俳句帖抄』上卷を出版した。これは子規の句稿『寒山落木』の中から子規自ら選拔して刊行したものである。が、下卷を出すに及ばずして子規は沒した。

子規沒す

明治三十五年九月十九日子規は遂に沒した。鳴雪、碧梧桐、虚子、鼠骨等幾多の俳句の友人、門弟子並びに伊藤左千夫、香取秀眞、岡麓、長塚節等幾多の歌の門人に守られて、その棺は田端大龍寺の塋域に葬られた。墓碑の表は只「子規居士之墓」と題するのみである。文字は陸羯南の筆である。

子規は「ホトトギス」を東京に移して以來、「古池の句の辯」、「蕪村と几董」、「俳諧無門關」、「俳句新派の傾向」、「俳句の初歩」、「幻住庵のこと」、「牡丹句錄」、「蕪村寺再建緣起」等を書いて俳壇を教へるところが多かつた。

子規の俳風は漸く天下に普く四方其風を望んで立つものが多かつた。宗匠輩ははじめより聲をひそめてその鋭鋒に當らうとするものは無かつた。又子規と俳風を異にする人々であつても、別に論陣を張つて之と爭はうとするものもなかつた。俳句界は殆んど子規に統一せられたと云つてもよかつた。

「日本」の俳壇

子規沒後「日本」の俳壇は碧梧桐が之を受繼いで新俳人の陶冶に努めた。

頭角を現はす人々

明治三十七年頃から岡本癖三醉、小澤碧童、中野三允、柴淺茅、松根東洋城、大須賀乙字、高田蝶衣、喜谷六花等は頭角を現はし來つた。

連句論

明治三十七年の九月に虛子は『連句論』を發表した。これは子規以來連句は非文學として排斥せられ來つたものを又一種の文學なりとする論であつた。鳴雪、碧梧桐がこれを反駁した。

俳體詩論

虛子は續いて「俳體詩論」といふものを發表した。夏目漱石はこれに同じしきりに俳體詩を創作した。

碧梧桐の日本遍歷

明治三十九年の八月から碧梧桐は大谷句佛の勸めに從つて日本國中俳句遍歷の旅に上つた。年を閱すること三年有半、その句風に自ら新傾向の名を冠した。一時この新傾向は俳壇を風靡し去つた。

『三千里』

『三千里』と稱へる書物が明治四十年に書肆から出た。これは碧梧桐の旅行記を一冊に纏めたものである。その旅行記ははじめ「日本及日本人」誌上に連載されたものである。

『新春夏秋冬』

明治三十一年以降「國民新聞」の俳壇は虛子が之を擔當してゐたが、主としてその「國民新聞」の俳句を材料として、明治四十一年東洋城の手に依つて『新春夏秋冬』が出來た。

『日本俳句鈔』

明治四十二年碧梧桐の手によつて『日本俳句鈔』第一集が刊行され大正二年その第二集が刊行された。後年の自由詩にならうとする傾きは既にこの時に萌してゐると云つて宜い。が、まだ十七字詩形、季題といふ二大約束を破壞するまでには至らなかつた。

新傾向

碧梧桐の新傾向句といふものは再三變化を遂げて、遂に十七字といふ形を破り、季題を無視するに至つた。之より先「試作」といふ雜誌を出してゐた中塚一碧樓は早く之を試みてゐた。

碧梧桐は嘗てその新傾向運動について人に語つたことがある。新傾向運動は破壞運動である。古きものを破壞して何物かを生み出さうといふのがその精神である。何物を生み出すかは未だ頭の中にないのである。只古いものを破壞すればそれで第一の目的を達したことになるのである。と。

碧梧桐はその自由詩をはじめは俳句と稱へてをつたがこの頃は詩と呼んでをる。

新傾向に反對す

虛子は一時專ら寫生文に沒頭し、小說をも述作したが、後著しく健康を害したる爲め小說の筆を絕ち、大正二三年頃から又專ら俳句のことに携はるやうになつた。さうして專ら碧梧桐の新傾向に反對した。これから俳壇は二つに分れて、碧梧桐の新傾向に贊同するものと、虛子の主張に追隨するものの二つとなつた。

「雜詠」

明治四十一年の十月から殆んど一年間のあひだ「雜詠」といふ欄を設けて「ホトトギス」誌上に虚子選の俳句を載せた。虚子が俳壇を退くと共に之れを廢して居たが大正元年八月から再びこの「雜詠」なるものを載せはじめた。村上鬼城、渡邊水巴、飯田蛇笏、原石鼎、前田普羅、西山泊雲、野村泊月、岩木躑躅、田中王城、原月舟、池内たけし、島村元等より近くは水原秋櫻子、阿波野青畝、山口誓子、高野素十、後藤夜半、川端茅舍、松本たかし等みなこの雜詠欄で名を成した人々である。

婦人の作家

婦人にして俳句を作るものは元祿時代にも相當にあつたが大正時代になつて著しく增加した。

『進むべき俳句の道』

大正七年十月虚子の『進むべき俳句の道』が刊行された。これはその名が稱する如く進むべき俳句の道を說いたもので「ホトトギス」多年の投句家水巴、鬼城、零餘子、月舟、普羅、石鼎、泊雲、蛇笏、躑躅等を評論したものである。

『故人春夏秋冬』『乙字俳論集』

大須賀乙字は『故人春夏秋冬』なる書物を現はした。乙字は評論を以て俳壇を警醒することを意とし、頻りに評論を發表した。之を輯集したものに『乙字俳論集』がある。

俳句雜誌(二)

松瀨青々は大阪に於て雜誌「倦鳥」を、青木月斗は同じく大阪に於て雜誌「同人」を出し、大谷句佛は京都に於て雜誌「懸葵」を出し、臼田亞浪は東京に於て「石楠花」を出し、松根東洋城は同じく東京に於て雜誌「澁柿」を出し、籾山梓月は雜誌「俳諧雜誌」により、星野麥人は雜誌「木太刀」を刊行して居る。

蛇笏は雜誌「雲母」を發行し、石鼎は雜誌「鹿火屋」を發行し、禪寺洞は雜誌「天の川」を發行し、泊月は雜誌「山茶花」を主宰し、王城は雜誌「鹿笛」を主宰し、普羅は雜誌「辛夷」を主宰し、清原枴童は目下上京してをるが一年前までは福岡に在つて雜誌「木犀」を主宰して居た。

長谷川零餘子は虚子を離れて雜誌「枯野」を出してゐたが昨年病の爲め夭折した。原田濱人は虚子と意見を異にして雜誌「すその」を主宰してをる。室積徂春ははじめ零餘子を助けて「枯野」に力を盡してゐたが後に去つて自ら雜誌「行く春」を出してをる。

內藤鳴雪其他

內藤鳴雪は遙かに子規の先輩であつて、前に云つた如く常磐會寄宿舍の監督として子規等を監督する地位にあつたのであるが、遂には子規の感化を稟けて俳句を作るやうになり、子規の先輩でありながら、俳句の道に於ては子規の友人でもあり子規の門下生でもあると云つたやうな立場にあつて、碧梧桐、虚子などと轡を並べて作句にいそしんだのである。が、後年は何人にも黨せず、總べての人の尊敬を受け、自ら俳諧幼稚園の保姆を以て任じた。その門下に渡邊水巴、松浦爲王等がある。水巴は雜誌「曲水」を出し、爲王は近頃雜誌「俳人」を出した。

夏目漱石は正岡子規の友人として又俳句を作つて居つた。

藤井紫影、田岡嶺雲も亦子規の友人として句作した。

相島虚吼、永田青嵐等も亦子規時代からの

俳人である。さうして今も尙句作を續けてゐる。

矢田插雲は子規の門下生の一人であつて雜誌「千鳥」を主宰してゐる。

篠原溫亭も亦明治三十年時代からの俳人であるが、島田青峰等と共に雜誌「土上」を創刊した。病の爲めに倒れた。そのあとは青峰が之に代つて主幹してゐる。

荻原井泉水は碧梧桐と同じく十七字季題といふ約束を全然破壞して一種の自由詩を唱道して雜誌「層雲」を出して居る。さうして何處までも俳句といふ名前に執着を持つてゐる。

中塚一碧樓は「試作」を出して居た時代に、早く自由詩を試みてゐたが、現に「海紅」を出してをる。

以上名を擧げたものの外、坂本四方太、數藤五城、渡邊香墨、吉野左衞門、梅澤墨水等の已に故人になつた人々、佐藤肋骨、村上霽月、大谷繞石、中村樂天、歌原蒼苔、赤木格堂、柴淺茅等の現存せる人々を數へることが出來る。尙其他に多くの人々があるであらう。

『日本俳書大系』

書肆春秋社は日本俳書大系刊行會を起し、勝峰晋風編輯のもとに大正十五年『日本俳書大系』全部十六册を刊行した。荻原井泉水之に解説を附した。

『子規全集』『分類俳句全集』

書肆アルスは大正十三年『子規全集』を刊行した。主として寒川鼠骨監輯のもとに柴田宵曲等之を編輯した。

同じく子規の遺著なる『分類俳句全集』も亦鼠骨監輯のもとにアルス社から出版された。但しこれは昭和三年のことであるから少し不穩當ではあるが序でに記して置く。

高濱虛子

昭和四年九月十五日印刷
昭和四年九月十八日發行

現代日本文學全集　第三十八篇

編纂者　山本三生

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷